未来へつなぐ まちづくりは人づくり

～甲斐の国から ともに～

日本女性会議 2021 in 甲府

報告書



2021（令和3）年

オンライン開催
10月22日(金)・23日(土)

アーカイブ（録画）配信
24日(日)～11月5日(金)

日本女性会議
2021 in 甲府

主　催

日本女性会議 2021 in 甲府実行委員会・甲府市

日本女性会議2021in甲府

Japan Women's Conference 2021 in KOFU

大会テーマ

未来へつなぐ まちづくりは人づくり
～甲斐の国から ともに～

男女共同参画社会の実現に向けた先人たちの弛まぬ努力により、
私たちは今このまちに暮らしています。
武田信玄公の時代から山梨に育まれてきた
「人は石垣、人は城」=「人こそが財産である」という考えのもと、
多様な価値観を尊重し、だれもが自己実現できるまちを目指し、
人の意識を変え、まちを変え、ともに(=Co)未来につないでいきたいと考えています。

目　的
「男女共同参画社会」の実現
「女性が活躍する社会」の実現

理　念
個の多様性を理解することで、
「男女共同参画の実現」に向けた意識をより前進させる大会とする

基本方針
❶女性の多様な価値観を尊重し、共感できる人を増やす大会
❷性の多様性を理解し、個性を認め合う大会
❸市民・市民団体と産・学・官の連携・協働が、より促進される大会
❹市民や学生が参加・参画する大会
❺山梨・甲府の魅力を発信する大会

日本女性会議
2021 in 甲府

ロゴマーク

多様な価値観を尊重し、誰もがキラキラと輝ける社会の実現を、「ジュエリーのまち甲府」らしく、宝石をモチーフに、すべて手書きの優しいタッチで表現しました。

多様性をそれぞれ違った色で表現し、テーマ「未来につなぐ　まちづくりは人づくり」の原点である「人は石垣、人は城」という教えを私たちに残した武田信玄公の象徴として、中央には武田菱を忍ばせています。

目　次

ごあいさつ

大会長挨拶 4
実行委員長挨拶 5
大会日程 6

全体会

基調報告（講師：林 伴子氏） 7
シンポジウム（メインシンポジスト：上野 千鶴子氏他） 12
特別講演（講師：橋本 聖子氏） 22

分科会

第1分科会 [性の多様性] 26
第2分科会 [ジェンダー・DV] 44
第3分科会 [子どもの教育・子どもの貧困] 60
第4分科会 [ワークライフバランス] 76
第5分科会 [女性活躍] 92
第6分科会 [女性活躍] 108
第7分科会 [食育・農業] 122
第8分科会 [環境] 138
第9分科会 [生涯活躍・健康] 158
第10分科会 [生涯活躍・健康] 172

まとめ

甲府大会開催までのあゆみ 191
大会参加者集計 192
参加者アンケート集計 194
後援・実行委員会等 202
協賛・寄付 204

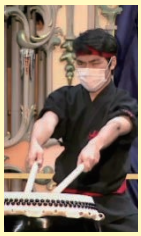
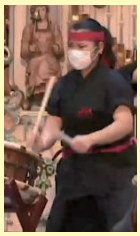
1日目

アトラクション

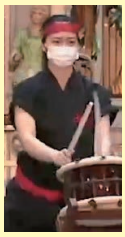
日本航空高等学校 太鼓隊による力強い和太鼓演奏にて幕を開けました。








開会式



進藤中 副大会長による「開会宣言」



風間ふたば 実行委員長 あいさつ





長崎幸太郎 山梨県知事 あいさつ



樋口雄一 甲府市長 あいさつ

2日目

アトラクション

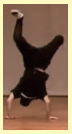
『チアアップやまなし☆シャイン☆』&『山梨学院大学』による
ダンスパフォーマンスが大会のフィナーレに華を添えてくれました。












閉会式



風間ふたば 実行委員長
あいさつ



次期開催地倉吉市
石田耕太郎市長 あいさつ



樋口雄一 甲府市長による
「閉会宣言」

バトンパス

甲府大会実行委員一人ひとりから倉吉大会実行委員の皆さまへ
伝えたい思いを描いたメッセージボードをお送りしました。





大会終了





※講演・分科会等の写真は、それぞれの報告ページに掲載しています。

主催者あいさつ



大会長

樋口　雄一
（ひぐち　ゆういち）

甲府市長

「日本女性会議2021 in甲府」は、新型コロナウイルス感染症の影響により、あいち刈谷大会に続き、インターネットによる開催となりましたが、全国から多くの方々にご参加いただき、盛会のうちに終了することができました。ご参加いただきました皆様にあらためてお礼申し上げます。

甲府市は、戦国武将である武田信玄公の父、信虎公が1519年に市北部のつつじが崎に館を構えて「甲斐府中」甲府を開き、2019年には「開府500年」、そして、2021年には「信玄公生誕500年」と歴史的な節目を迎えたタイミングに、「日本女性会議2021 in甲府」を開催することができました。

甲府大会を振り返りますと、初日は、内閣府男女共同参画局長の林伴子氏による基調報告に始まり、続くシンポジウムには、東京大学名誉教授で社会学者の上野千鶴子氏をはじめ歴代の日本女性会議実行委員長をお迎えし、38年目を迎えた日本女性会議を、これからも継続していくことの必要性や今後の在り方などを確認しました。

大会2日目は、10の分科会をそれぞれ2部構成で開催し、参加したい分科会を、ご自身の興味や関心の高さに応じて幅広いテーマの中から選択していただいたことから、いずれの分科会においても熱心な議論や意見交換などが行われました。

さらに、東京オリンピック・パラリンピック組織委員会会長で参議院議員の橋本聖子氏に、「オリンピック・パラリンピックの意義とは～そのレガシーの発展と継承～」をテーマにご講演いただくなど、ご参加いただいた皆様の記憶に残る、大変意義深い大会になったものと自負しております。

閉会式のメインとなったバトンパス・セレモニーでは、次期開催地となる鳥取県倉吉市の石田耕太郎市長からご挨拶を賜る中で、甲府大会実行委員の思いを描いたメッセージボードをバトンとして、しっかりと引き継がせていただきました。「日本女性会議2022 in 鳥取くらよし」が、多くの人々が倉吉市に集い、実りある大会となることを期待申し上げます。

甲府大会の開催は、県内外において、男女共同参画への機運を高める大きなきっかけになったと感じており、特に、多くの学生の方々にも参画いただいた分科会は、若い世代へ男女共同参画の理念を広められた一つの象徴となり、甲府大会の成果でもあります。

今後におきましては、甲府大会から得られた様々な成果を、令和4年度に策定する「第4次甲府市男女共同参画プラン」に活かし、本大会の開催目的である「男女共同参画社会の実現」と「女性が活躍する社会の実現」に向けた取り組みを推進してまいります。

結びに、「日本女性会議2021 in甲府」の開催にあたり、多大なるご協賛・ご支援を賜りました企業・団体・個人の方をはじめ、大会の企画運営にご尽力をいただきました皆様に感謝を申し上げるとともに、本大会を契機として、ご参加いただきました皆様のそれぞれの地域で、男女共同参画社会がますます発展いたしますことを祈念いたしまして、挨拶とさせていただきます。

主催者あいさつ



実行委員長

風間　ふたば

（かざま　ふたば）

山梨大学理事・副学長

「日本女性会議2021 in甲府」へ多くの皆様にご参加いただき、心より御礼申し上げます。

当初は対面を計画していた本大会ですが、コロナウイルス感染防止の観点から、最終的には昨年の「あいち刈谷」大会と同じくオンライン開催となりました。正直どれほどの方にご参加いただけるのかと心配も致しましたが、開催してみますと、日本全国それぞれの場所から、年齢も異なる1,500人を超える方々がご参加くださり、さらに大会プログラムのアーカイブ（録画）配信による再生数は1万回以上となりました。プログラムの多くをアーカイブ配信することにより、様々なテーマとそれに伴う課題や展望などを、大会当日だけでなく、時間をかけてよりじっくりと捉えていただけたのではないでしょうか。本大会は「あいち刈谷」大会とともに、withコロナの時代における女性会議の新しい開催方法を示すことができた、と思っています。

さて、大会を開催するまでの道のりを振り返りますと、甲府への誘致の段階から多くの方のご尽力がありました。また、甲府での開催が決定後は、実行委員会を組織し、本大会のテーマを「未来へつなぐまちづくりは人づくり～甲斐の国からともに～」とするとともに、大会の理念と5つの基本方針を決定し、それに沿って企画を進めてまいりました。

特に、10の分科会は、それぞれ2部構成で、合計20ものテーマで議論が行われました。多くの学生が分科会に協力し、活気ある議論の中で生み出された成果は貴重なものだと感じています。また、コーディネーターを務めさせていただいたシンポジウムでは、開催都市から返信いただいたアンケートを解析するとともに、近年開催した大会の実行委員長とのリアルな意見交換をとおして、女性会議の「これまで」を振り返り「これから」を見つめ直すことができました。大会の歴史に一石を投じることができたと思います。

多様な人々が等しく人権を認められる社会の実現は、長いこと望まれながら、世界的に見てもなかなか到達できていません。性に関する差別の根は深く、簡単に覆すことは困難だからです。しかし、まずは一人ひとりが自身の中に潜むアンコンシャスバイアスの存在に気づき、課題を考え、小さくてもいいので何がしかの行動を起こすことから課題解決への道が始まります。そして、意見交換や議論を行う場があってこそ、連携することができ、その時代に沿った社会づくりに繋げることができましょう。そこにこの日本女性会議の意味があります。参加者一人ひとりが多様な価値観を尊重し、お互いを認め、「男女共同参画の実現」に向けてより前進できるのだと、大会を開催して確信できました。次期開催地であります鳥取県倉吉市に、この熱い思いが引き継がれることを願うとともに、コロナウイルスによる脅威を乗り越えての大会として、新たな歴史を刻んでいただけることを願っています。

最後になりましたが、「日本女性会議2021 in甲府」の開催に携わっていただいた全ての方々に、改めて謝意と敬意を表したいと思います。ここ山梨の甲府において、未来につながる男女共同参画社会の実現に向けた新たな連携の力、人づくりの力、となるのであろう皆様の今後一層のご活躍をお祈りしたいと思います。

本大会が新たな活動の契機となりますことを祈念し、ご挨拶とさせていただきます。

大会日程

月　日	時　間	内　容
1日目 令和3年10月22日(金)	13：00～13：15	アトラクション
	13：15～13：30	開会式
	13：30～14：00	基調報告
	14：30～16：00	シンポジウム
2日目 令和3年10月23日(土)	10：00～11：30	分科会　(第1部)
	12：30～14：00	分科会　(第2部)
	14：30～14：50	アトラクション
	14：50～15：30	特別講演
	15：40～16：10	分科会報告
	16：20～16：40	閉会式

分科会一覧

分科会	分　野	テーマ
第1分科会	性の多様性	多様な性と家族、パートナーシップ ～コウノドリ作者と考える多様な生き方と制度～
第2分科会	ジェンダー・DV	ジェンダーとDVに敏感な視点で日常をみる ～ジェンダー平等は人権の問題。気づきが差別と暴力を終わらせる。～
第3分科会	子どもの教育 ・子どもの貧困	It Takes a Village. “村じゅう みんなで” ～よそのボコも　うちのボコ　おらが村をこせえるじゃん～
第4分科会	ワークライフ バランス	ダイバーシティ・インクルージョン 働き方改革と男性の在り方 ～新しい生活様式に、子育て介護に男女とも！役割を果たす今をつくろう～
第5分科会	女性活躍	女性が起業するワケ ～やりたいことをカタチに。その一歩を今～
第6分科会	女性活躍	これでいいのだ、私の人生。私がわたしの未来を創る。 ～就職、結婚、生きる意味。～
第7分科会	食育・農業	未来へつなげる「農業・食」の魅力 ～守り引き継ぐ山梨の宝～
第8分科会	環境	環境から考える地域の未来 ～外国人住民・大学生がみつけた発見～
第9分科会	生涯活躍・健康	生まれてから死ぬまで地域で暮らすために ～介護・福祉・医療・教育の連携でつくる未来～
第10分科会	生涯活躍・健康	“私らしく生きる”ためにあなたは？地域は？ ～私らしく生きる人生設計の可能性～

基調報告　10月22日（金）13:30～14:00

すべての女性が輝く令和の社会へ

講　師

林　伴子

内閣府
男女共同参画局長

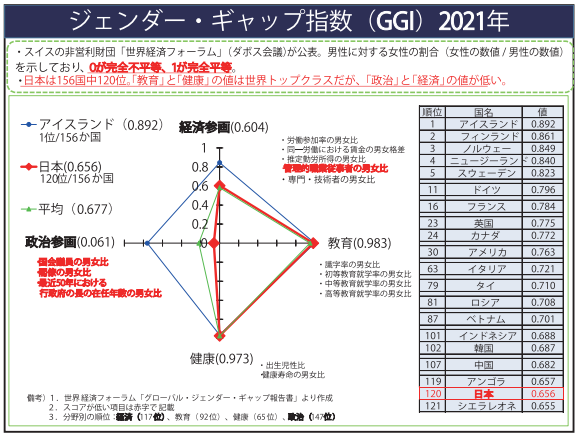


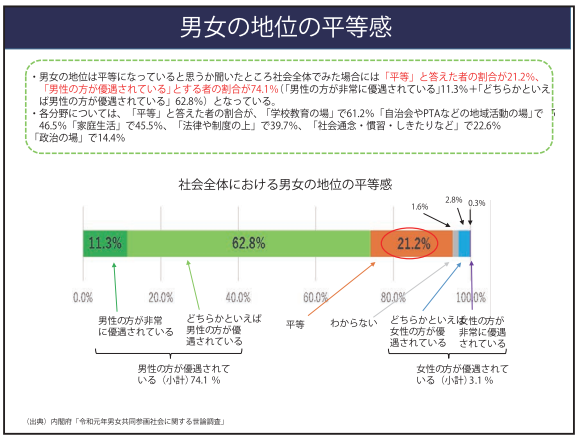


▼林：開催お慶び申しあげます。関係者の皆さまのご尽力にお礼申し上げます。私からは、男女共同参画の日本の現状と今後の取り組み、課題についてお話し申し上げます。

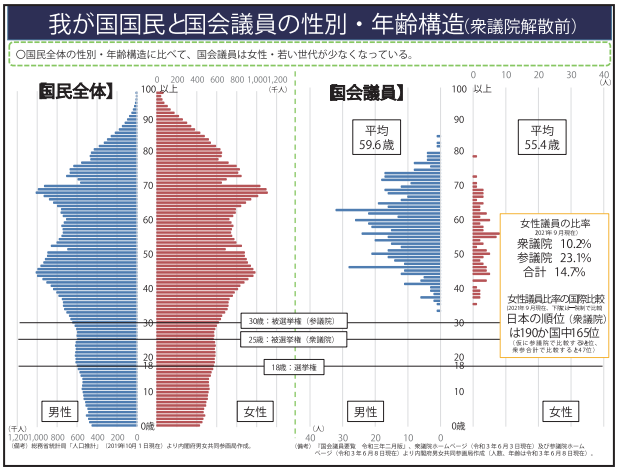
まず、日本の現状についてです。日本のジェンダー・ギャップ指数（GGI）は156カ国中120位。先進国最下位。中国、韓国、アセアン諸国よりも下になっており大変残念な状況にあります。特に経済参画、政治参画のスコアが大変低くなっております。また、順位が2006年からずるずると下がってきている状況です。各国がジェンダー平等に向けて歩みを進めている中で、周回遅れの日本が順位を上げていくためには、これまでとは次元の違う取り組みが必要と考えております。追いつく努力をしなければならないです。

また、世論調査では、男女の地位が平等と答えたのは21%しかおりません。男女平等の憲法ができてから70年以上になるのに、大変残念だと思います。男性が優遇されていると答えている人が74%もいる状況です。





政治分野では特に遅れています。右の図では、国民全体の人口ピラミッドが左側、右側に解散前の国会議員の年齢別のデータを並べておりますが、国会議員では女性と若い人が少ないことが分かります。実際、女性議員の割合は世界190カ国中165位という状況です。また、行政分野では、上級管理職に占める割合は、諸外国では3、4割くらいなのに日本は4%しかいません。上級管理職である局長・審議官級というのは、例えば国会で参考人として答弁したり、総理に直接説明をする立場の人ですが、それが4%しかいない状況です。課長級でも4.9%、課長補佐までは20%にきていますが、その先が進まないという残念な状況です。

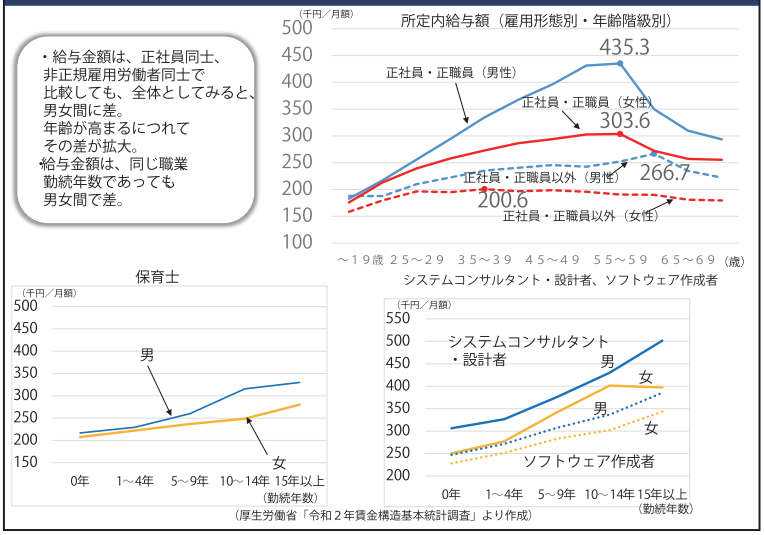


民間企業での女性の就業者でみると、第2次安倍政権で女性の活躍を位置づけた努力もあり、また景気の拡大に伴い全体で30

万人以上増えています。管理職の女性の割合も徐々に増えています。女性の役員数も４倍に増加しています。しかし、諸外国と比べると少ない状況にあります。また、給与額の価格差もございます。正社員・非正規でも男女間に差があります。職種ごとでも勤続年数が増えると男女の差が開いている状況です。

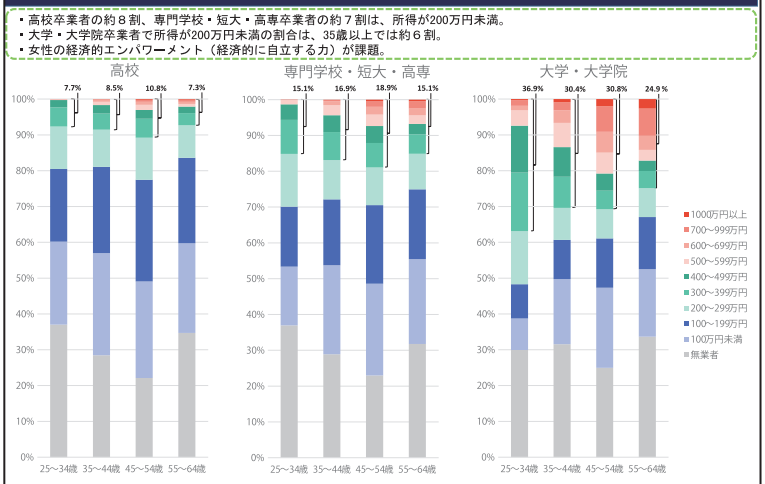
さて、日本の家族、女性の人生は昭和のころより、多様化しております。まず、共働き世帯は増加傾向が続いております。他方、サラリーマンの夫と専業主婦の世帯は500万世帯を切っている状況にございます。また、所得階級別にみると、夫が30代の家庭では、夫の所得が増えると専業主婦が増える傾向にあります。30代の夫で一番多い200～300万円台の家庭の妻は7割以上が働いています。夫の所得が800万を超えると専業主婦が増える傾向です。結婚している女性の所得は今どうなっているのか、学歴別のグラフです。大学・大学院卒のデータのうち、例えば、35～44歳を見ると、6割の女性が年収200万円未満の状況になります。他方、離婚、再婚が増えています。年間婚姻件数は、毎年60万件前後、離婚は20万件程、３組に１組は離婚をしている状況です。ちなみに、婚姻の４分の１は再婚であります。このように女性の人生は多様化しているといえます。ひとり親世帯も離婚によって増えています。母子世帯は、非正規就業者が半分以上。年間平均収入は200万円。これで子どもを育てるのは大変です。養育費は24%しか受け取れていないのが現実です。

給与額の男女間格差



（厚生労働省「令和２年賃金構造基本統計調査」より作成）

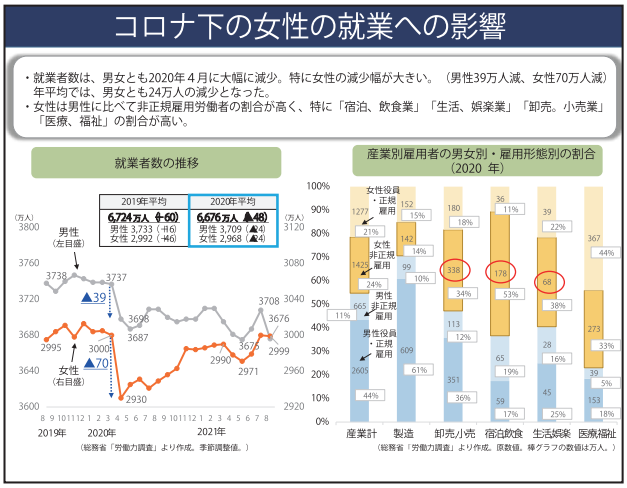
既婚女性の最終学歴と本人の所得の関係



（備考）１．総務省「就業構造基本調査（2017年）」より内閣府男女共同参画局作成。
２．無業者には1987年以前に前職を辞め現在も無業の者は含まれないため、実際には、2017年時点で50歳代以上の者は無業者がより多い可能性がある。

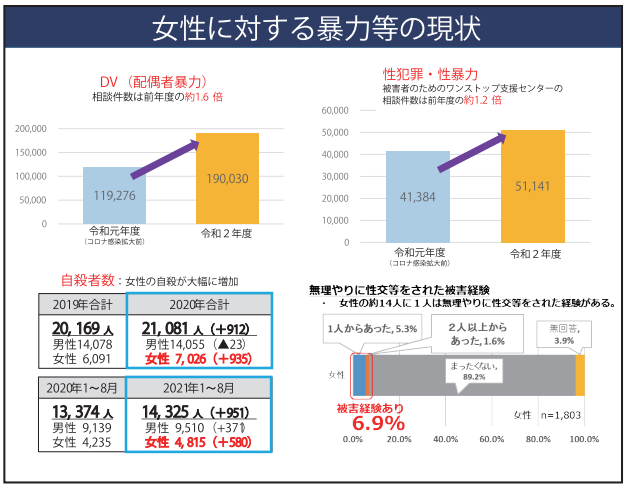
下のグラフは、男女就業者数になります。去年の4月の緊急事態宣言時、就業者には女性の減少が顕著に表れています。背景には2つあり、女性の非正規が多いこと、コロナ下で特に影響を受けた業種、宿泊、飲食、生活娯楽業などに女性の非正規が多いことが挙げられます。コロナ下でさまざまな問題が起きています。例えば、配偶者からの暴力の相談件数はコロナ前の約1.6倍になっております。また、性犯罪・性暴力の相談件数は約1.2倍となっています。そして、女性の自殺者数も増加しております。昨年は女性の自殺は7,000人を超え、コロナ前に比べると、1,000人近く増えており、とても痛ましいことです。その背景には、経済的困窮や配偶者からの暴力など、さまざまな要因があると考えています。

コロナ下の女性の就業への影響



（総務省「労働力調査」より作成。季節調整値。）
（総務省「労働力調査」より作成。原数値。棒グラフの数値は万人。）

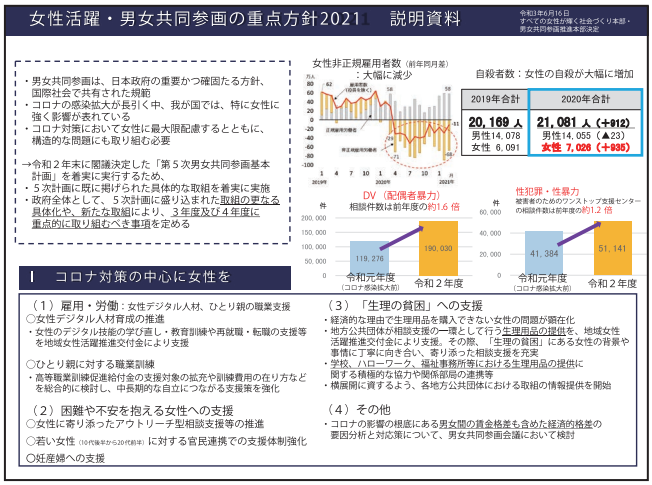
女性に対する暴力等の現状

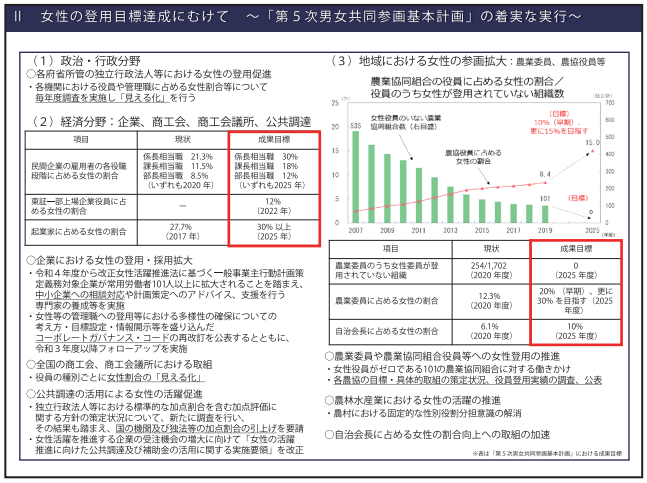


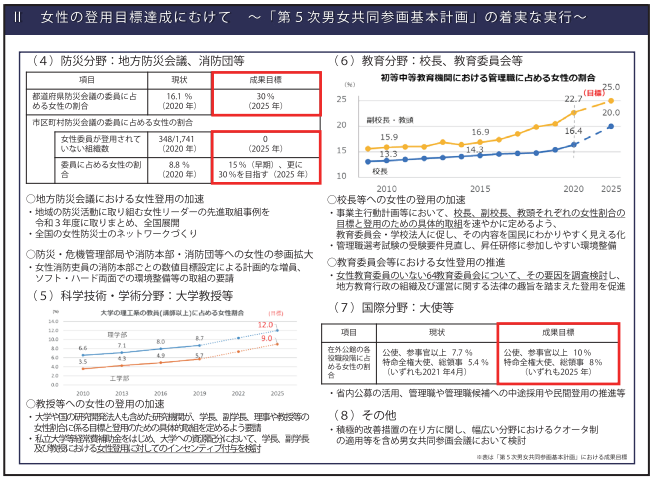
こうしたことを受け、女性活躍重点方針、いわゆる「女性版骨太の方針」を6月に決定しました。3つの柱があり、1つは「コロナ対策の中心に女性を」ということで、コロナの影響を受けている女性への支援に重点をおいております。例えば、生理の貧困の支援を盛り込んでいます。若い世代からの声を受け、生理用品の提供は、交付金で対応します。学校、ハローワークでも提供し、単に提供するだけでなく、その背景にある困窮、ネグレクトにつながるため、相談・支援につなげていきます。現在、全国の自治体の3分の1以上が生理の貧困に対応をしています。

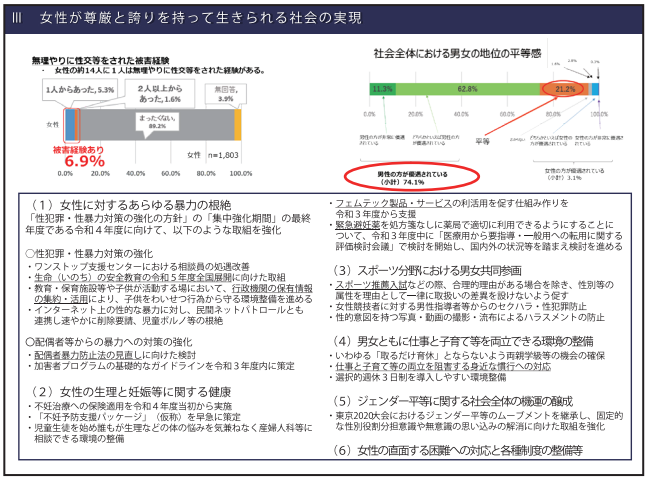
また2つ目の「女性の登用目標達成にむけて」では、昨年の年末に閣議決定した「第5次男女共同参画基本計画」の中にあるさまざまな成果目標を達成するため、今年度・来年度の計画に盛り込んでいます。経済・農業・防災・科学技術・教育分野など、目標に向けて進める措置を盛り込んでいます。

さらに、3つ目の「女性が尊厳と誇りを持って生きられる社会の実現」では、女性に対する暴力などの問題への対応が非常に大切と考えております。女性が尊厳と誇りを持って生きられる社会の実現ということで、性犯罪・性暴力対策の強化、DV対策の強化、生理・妊娠に対する施策も盛り込みました。今年度と来年度の予算要求にも盛り込んで実施していきます。

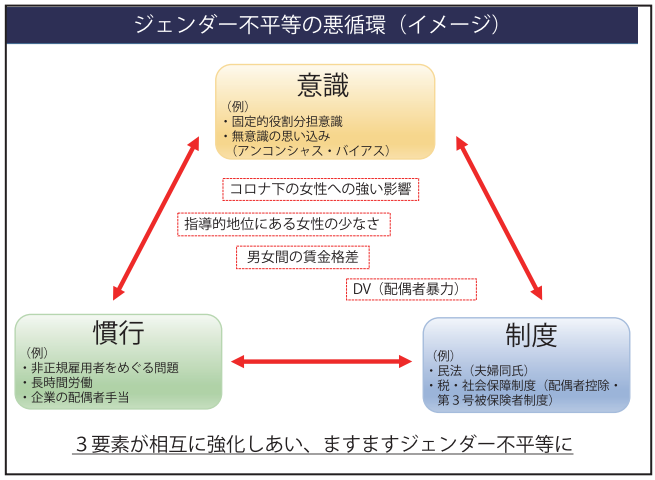








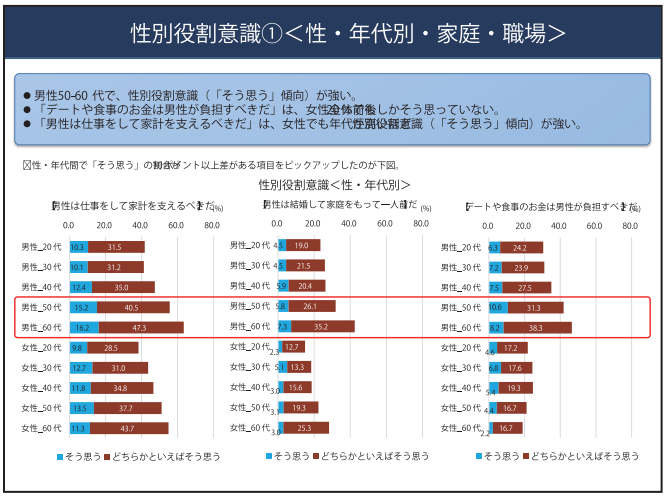
今回、コロナ下で日本の男女共同参画は残念ながら進んでいません。国際的にみても120位と大変残念な状況にあります。その背景には3つあると考えます。意識の問題、固定的な役割分担意識やアンコンシャスバイアスなどです。制度の問題、選択的夫婦別姓の話は最たるもの。そして、さまざまな慣行、さまざまな世界のしきたりもあります。労働市場で言えば、正規・非正規、長時間労働の問題もあります。この意識、制度、慣行はそれぞれ昭和の時代にできあがったもので、この3つが強化し合い、今もなお、令和の時代に入っても残っています。それがジェンダー不平等につながっているのではないかと考えます。したがって、一つひとつにアプローチすることが大事だと考えています。

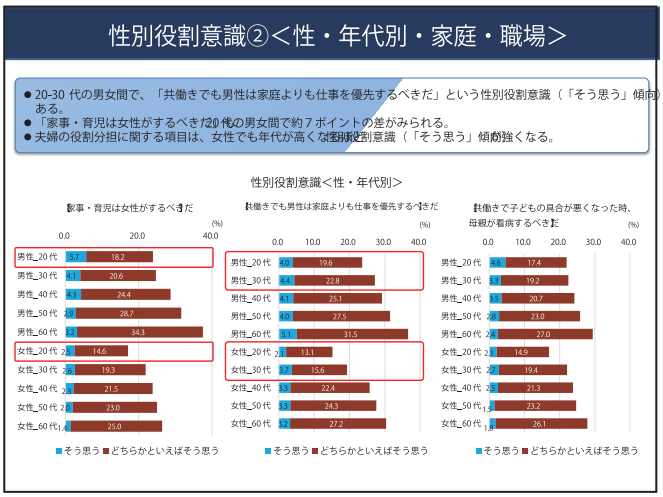


先日、アンコンシャスバイアス（性別による無意識の思い込み）について意識調査を行いました。

例えば、男性は仕事をして家計を支えるべきだなどの内容です。年代別、性別でみると、50～60代男性に性別役割意識が強いことが分かりました。例えば、「男性は家庭を持って一人前」と考える人は50～60代に多い。「男性がデートや食事のお金を出すべきだ」も男性が多い。また、「育児・家事は女性がすべきだ」と思っている人は、全般に男性の方が多いのですが、20代に着目しますと男女で差があります。このことは、結婚時のさまざまなトラブルになる可能性があります。また、「共働きでも男性は仕事を優先すべきだ」についても、男女で、若い層で違いがあります。







こういったことも、結婚や家庭形成に関わっているのではないか、あるいは少子化にもつながっているのではないかと考えます。

制度面につきましては、諸外国の女性にはあるが日本の女性には無いと言われているものの例がこちらになります。まず、選択的夫婦別姓について、夫婦同姓を法律で義務付けている国は日本だけ。また、性交同意年齢の問題もあります。諸外国では緊急避妊薬を薬局で扱っていますが、日本では医師の診察を受けたうえで処方されます。性交後早く服用する必要があるが、日本では医師の処方箋なしに買うことができないのが日本の女性の現状です。

緊急避妊薬に関連して、現在の女性は30年前と異なった環境にいます。1980年代は、22歳で夫となる男性に出会い、2年半お付き合いをして結婚しています。9割の女性が30歳までに結婚するのが通常でした。現在は25歳で出会い、30歳までに結婚する人は6割。出会いから結婚までの期間が長く、かつ遅くなり、性経験のある未婚女性も多い状況です。このようにさまざまな課題が山積しています。男女共同参画の問題を女性が一つひとつ解決することが大切です。男女共同参画会議（関係大臣・企業・大学・団体で構成）のもと、計画・実行・監視する専門調査会を設け、議論を重ねています。その際、関係する役所の

諸外国にはあるが、日本にはないと指摘されているもの（例）

日本	海外
選択的夫婦別姓（選択的夫婦別氏） ➢ 日本では、民法において、夫婦は婚姻の際にどちらか一方の姓を選ばなければならないこととされている（夫婦同氏制）。 ➢ 我が国では、約96%の女性が結婚に伴い氏を変更している。	➢ 夫婦同氏を法律で義務付けている国は、日本以外に見当たらない。
性的同意 ➢ 日本では、「同意がない」だけでは強制性交等罪は成立しない。 ➢ 強制性交等罪が成立するためには、「暴行・脅迫」若しくは「心神喪失」「抗拒不能」の要件が必要。	➢ 米国（州ごとに異なる）、英国、ドイツ、スウェーデンなどで、同意がないことのみを要件として性犯罪として成立する。 ➢ 「ノー」を示すか否かを基準とする国が多いが、スウェーデンでは、「イエス」がなければならない。
性交同意年齢 ➢ 日本では、刑法において、13歳以上となっており、下限年齢が低い。	➢ フランス15歳、英国・カナダ・韓国16歳、米国（州ごとに異なり、例えばニューヨーク州17歳、カリフォルニア州18歳）である。
緊急避妊薬を処方箋なしで購入 ➢ 性交後72時間以内に服用する必要。 ➢ 日本では、医師の診察を受けた上で処方される。（購入には、医師の処方箋が必要）	➢ 欧州、アジアなど世界86か国で処方箋なしで購入可能である。 米国、カナダ、フランスなど：OTC（薬局で自ら選んで購入できる） 英国、ドイツ、イタリアなど：BTC（BPC（薬剤師が直接管理保管し、販売時には薬剤師によるコンサルティングを要する）
経口中絶薬 ➢ 日本では、経口中絶薬として承認された医薬品はない。	➢ 経口中絶薬は、米国、英国、スウェーデン、オーストラリアなど60か国以上で認可されている。
子宮頸がんワクチン（HPVワクチン） ➢ 日本のワクチン接種率は１％前後。	➢ 英国やオーストラリアでは接種率は約80%。

幹部にも参加してもらっています。一昨日も緊急避妊薬について厚労働省や文部科学省の幹部と議論をしています。このように男女共同参画を少しずつ進めたいです。私からは以上です。

▼司会：ありがとうございました。私も女性の一人として何かできそうです。もう少し考えてみたいと思いました。質問をいいでしょうか。コメントをいろいろといただきました。スギサワ様からの質問です。「男女平等に対する調査結果の考察について、日本の現状に対して２割以上が、平等であると答えていることの方が問題ではないでしょうか。2割しかいないのは残念という言葉に違和感を感じました。」というご質問です。

▼林：この調査については、それぞれの場でどう思うか？と聞いています。職場や学校、家庭それぞれでどうですかと聞きました。例えば、学校では比較的に平等と答えた人が多かったですが、職場や政治の場では少ないです。それぞれの場で感じていることが圧縮されて２割になっていると思います。遅れている分野をしっかり前に進める必要があります。特に政治分野は遅れています。例えば、セクハラなどに対応するため、地方議会などでセクハラ研修するための研修教材を作るといった取り組みも進めています。それぞれの場面で直面するジェンダーの課題に対応したいと思います。

▼司会：たくさん仕事がありそうですね。まだ質問が続きます。ナカムラ様からの質問。「女性の社会活躍のため、子どものころからの教育も重要と思います。各教育段階での教育についてご助言をお願いします。」というご質問です。

▼林：教育現場での男女平等は非常に大事だと思います。特に、進路指導にあたる先生方の意識改革が必要です。例えば先生方が、女の子は文系だよね、女性で理系はちょっと、とおっしゃると、これは大きな影響があります。ご自身の持つアンコンシャスバイアスに気づいていただき、それを正していただくことが重要だと思っています。そのためには、文部科学省と一緒にさらなる検討を進めていきます。

▼司会：教育の出口が社会の入り口ですから、教育の出口の先生方には頑張っていただきたいですね。もう一つ。「男女共同参画意識の低い国会議員にはどう対峙すべきか、日々どう対応されているか。」についてご質問です。



▼林：日々、議員の先生方に説明したり議論したりしています。女性の国会議員で理解の深い人もいます。そういう方々にはデータを使って議論をして、少しでも前へ進めていただけるようお願いをしています。そうは言っても、先程のグラフを見ても分かるように、50代・60代の男性議員が多いのも事実です。この方々にも、日本としての男女共同参画を進めることは大切だと分かっていただく必要があります。そのために心がけていることが2つあります。一つは、具体的なデータを示す。今の女性の結婚はどのくらいでするか、緊急避妊薬が必要だなど、具体的なデータを示して議論をしています。もう一つは、国際社会で恥ずかしい。私はこれまで、経済政策分野で国際会議にたくさん出席してきました。諸外国の幹部は男女ともに出席しています。日本政府代表で女性は私だけ。国際機関でも首相でも外国では女性がたくさんいます。日本だけ景色が違うことをお伝えしてご理解をいただいています。

▼司会：これからも頑張ってください。まだお話しいただきたいこともありますが、お時間となるので、これで終わります。最後に一言お願いいたします。

▼林：男女共同参画は裾野を広げる大事な時期です。政治分野で女性が増えないのはいろいろ要因がありますが、各地域でリーダーになる女性がまだまだ少ない。地域でリーダーになられ、地方議員になられ、国政へと進めていくのが理想です。富士山と同じで、上をあげるためには、裾野が広くなければならないという意味で、各地域で男女共同参画に取り組んでいる皆さまと、ぜひ一緒にしっかりと歩みを進めてまいりたいと思います。どうぞ、引き続きよろしくお願いします。

シンポジウム　10月22日（金）14:30 ～ 16:00

日本女性会議38年目の総括と未来
~日本女性会議2021 in甲府からの提案~

メインシンポジスト
上野 千鶴子
社会学者・東京大学名誉教授

コーディネーター
風間 ふたば
2021年甲府大会実行委員長

シンポジスト
髙橋 雅子
2017年苫小牧大会実行委員長

シンポジスト
八重澤 美知子
2018年金沢大会実行委員長

シンポジスト
藤井 佐知子
2019年佐野大会実行委員長

シンポジスト
山根 真理
2020年刈谷大会実行委員長









▼風間：皆さん、こんにちは。シンポジウムにご参加いただきありがとうございます。コーディネーターを務めます本会議実行委員長の風間です。よろしくお願いいたします。

本シンポジウムでは、「日本女性会議38年目の総括と未来」をテーマとし、日本女性会議の今後のあり方、男女共同参画社会の実現を加速させるための日本女性会議の役割や取り組みについて、ディスカッションいたします。基調報告でもありましたように課題は山積みです。過去を振り返り、これからを見ていこうと思います。まず、シンポジストの皆さまをご紹介いたします。メインシンポジストは、社会学者で東京大学名誉教授の上野千鶴子様です。

▼上野：こんにちは。上野千鶴子です。私は、山梨県２分の１県民です。今日は会場まで出てきました。このテーマでたっぷり仕込みをしましたので、どうぞご期待ください。

▼風間：2017年苫小牧大会実行委員長の髙橋雅子様、一言お願いします。

▼髙橋：全国からお集りの皆さまこんにちは。私は2017年の実行委員長を務めました。今日は皆さまといろんな課題を共有したいと思いますので、よろしくお願いします。

▼風間：2018年金沢大会の実行委員長の八重澤美知子様、お願いします。

▼八重澤：こんにちは。今日は、2018年に金沢でやった時のような素晴らしい天気です。本日は画面を通じて、皆さまと考え、検討したいと思います。よろしくお願いします。

▼風間：2019年佐野大会の実行委員長の藤井佐知子様、お願いします。

▼藤井：こんにちは。藤井です。佐野大会は残念ながら実施できませんでしたが、このような形で皆さまとお会いでき大変嬉しく思います。今日はよろしくお願いします。

▼風間：2020年刈谷大会の実行委員長の山根真理様、お願いします。

▼山根：こんにちは。昨年度、刈谷大会はオンライン開催でした。ご参加ありがとうございました。今日はまた皆さまと考え合えることをとても嬉しく思います。よろしくお願いします。

▼風間：では、本日の流れを簡単にご説明させていただきます。まず、「日本女性会議過去開催都市アンケート結果」についてご報告いたします。このアンケートは、日本女性会議38年間の歴史を振り返るために、当時の実行委員長および関係者、開催都市事務局へ大会の成果や課題についての調査を行いました。アンケート結果の報告後、上野先生よりご講演をいただきたいと思います。そして、シンポジストの皆さんより日本女性会議の課題をお話しいただき、アンケートや課題から今後の日本女性会議のあり方などディスカッションいただく流れとなります。

では、まず初めに、日本女性会議過去開催都市アンケート分析結果について、報告を事務局からお願いします。

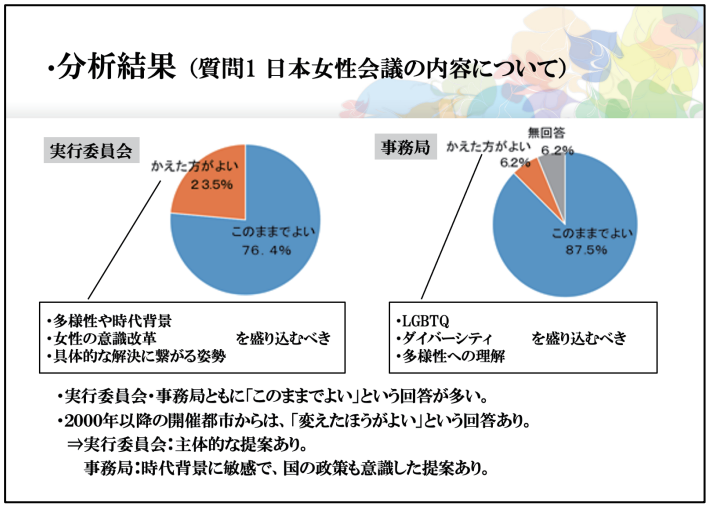
▼市川：事務局の市川です。本シンポジウムでは、これまでの日本女性会議の功績や意義などを振り返り、今後のあり方や役割についてディスカッションいただきます。そこで、これまでの振り返りを行うため、開催都市へアンケートを実施し、開催経緯や成果、課題の分析を行いました。

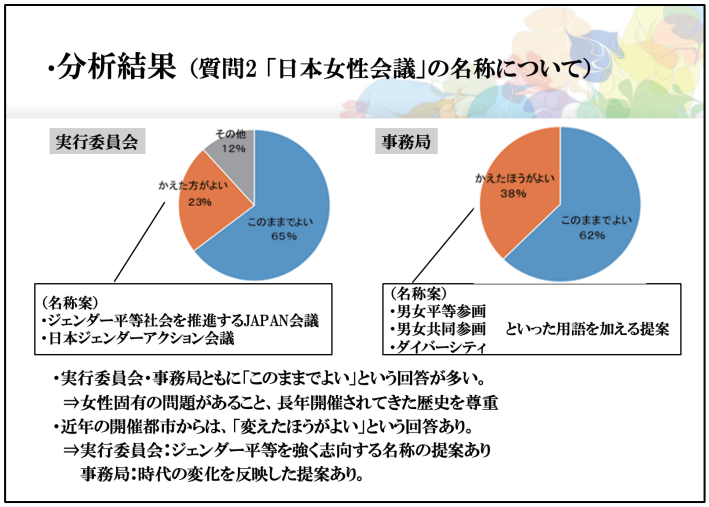
では、アンケートについて、分析結果をご報告させていただきます。資料をご覧ください。今回、これまでの振り返りのためのアンケート分析に加え、各都市のプログラムや報告書など大会関係資料を収集し、シンポジウム、分科会などのテーマについても分析を行いました。調査対象は、日本女性会議の開催経験のある36都市で、市役所担当部署および当時の実行委員長へアンケートを依頼しました。

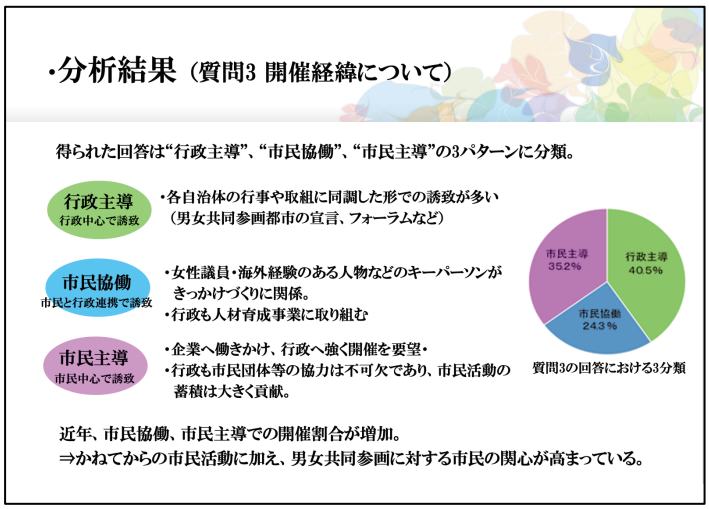
アンケートでは、開催経緯や成果・課題などについて、質問1～6の項目でお聞きしました。各都市から集まった回答の分析は、甲府市役所にて、2日間に分けて実施。作業は、本シンポジウムメインシンポジストの上野千鶴子氏、甲府大会実行委員長の風間ふたば氏、県内大学生、事務局にて行いました。

では、ここからは分析結果をご報告いたします。まず、質問2「日本女性会議の今後の内容と名称について」伺いました。左側が実行委員会、右側が事務局の回答です。内容については、実行委員会・事務局ともに「このままでよい」という回答が多いですが、2000年以降の開催都市からは、「女性の意識改革」や「多様性への理解」などを踏まえた内容にすべきという提案がありました。大会の名称についても、実行委員会・事務局ともに「このままでよい」という回答が多いですが、近年の開催都市からは、「ジェンダー平等社会を推進するJAPAN会議」や「男女共同参画」といった用語を加えてはどうかという提案が得られました。

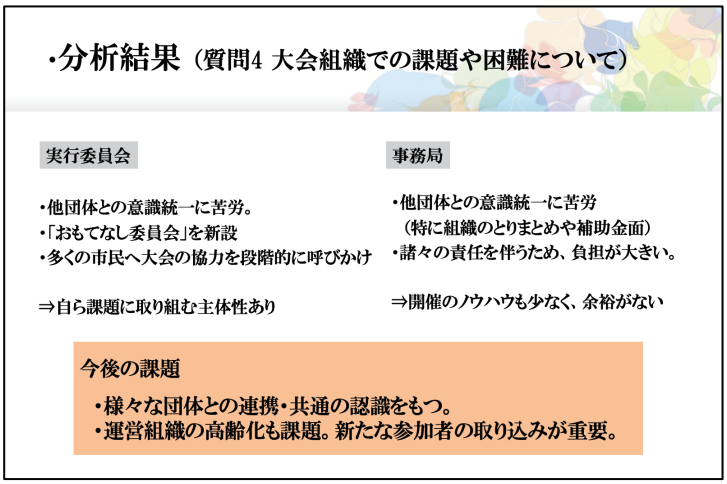
次に質問3「大会の開催経緯について」伺いました。大会誘致は、行政が中心となった「行政主導」、市民と行政が一体となった「市民協働」、市民中心の「市民主導」の3パターンに分類いたしました。行政中心での誘致が比較的多いですが、近年では、市民協働、市民主導の割合が増え、男女共同参画に対する市民の関心が高まっていることが分かりました。



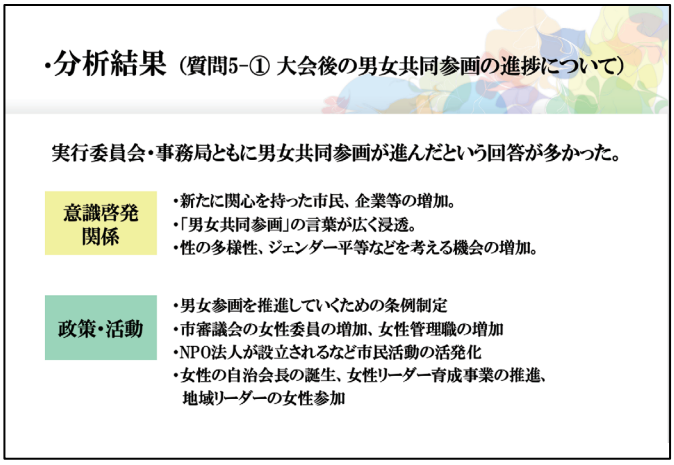


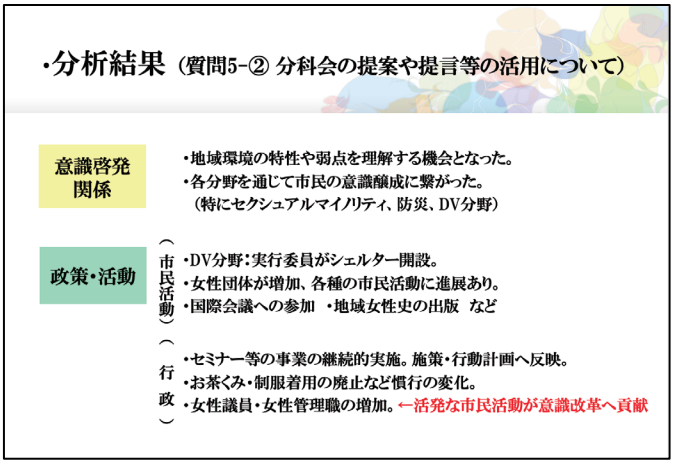


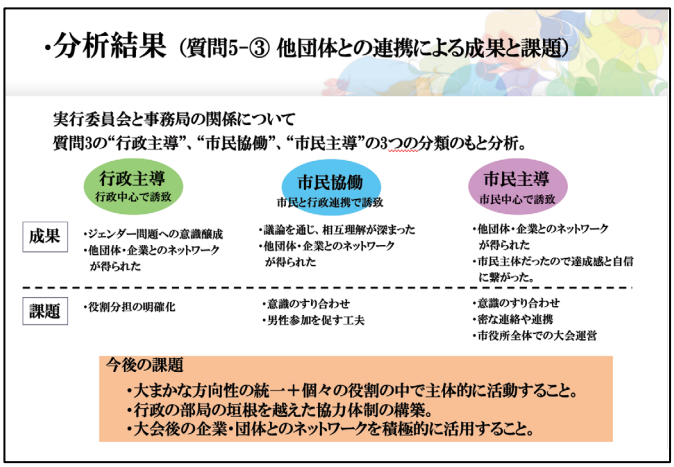
次に質問４「大会企画・運営時の組織での課題や困難について」お聞きしました。実行委員会・事務局とも、意識統一に苦労し、共通の認識を持つことが今後の課題。加えて、運営組織の高齢化も課題に上がり、新たな参加者の取り込みが、推進活動の継続や連携のうえでも重要になると考えられます。

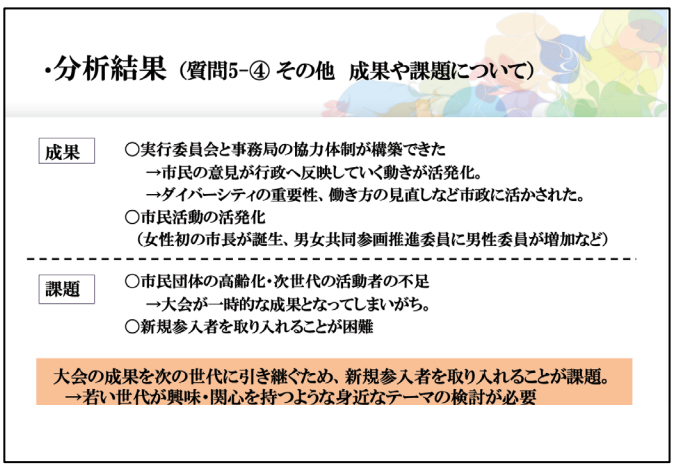


では、ここからは大会後についての、アンケート結果です。まず、質問５－①「男女共同参画の進捗について」ですが、大会を機に、男女共同参画が進んだという回答は多く、その内容は意識啓発と、政策・活動に分類できました。意識啓発では、新たに関心を持った市民・企業の増加、用語の浸透など。政策や活動では、条例制定、女性管理職・女性リーダーの増加などが上がりました。回答は、意識啓発関係が多く、具体的な取り組みにはまだ至っていないという意見もありました。質問5－②「分科会の提案や提言などの活用について」も同じく、意識啓発関係と政策・活動に分類でき、意識啓発関係では、地域環境の特性や弱点を理解する機会となった、意識醸成につながった、政策・活動面では、市民団体、行政それぞれの立場から、活動の進展、計画などへの反映に結びついたとのことでした。女性議員や女性管理職の増加など、活発な市民活動が行政の意識改革へ貢献した例もありました。大会を機に他団体・企業とのネットワークが得られたことは成果として上げられました。意識のすり合わせに苦労という回答もある中、大まかな方向性を統一し、それぞれの役割の中で主体的に活動いただくことが、運営側の達成感や大会内容の充実にもつながると思われます。また、市役所全体として協力体制を作ること、得られたネットワークを積極的に活用していくことも重要です。もう一つの課題として、大会組織の課題にもありましたが、市民団体の高齢化・次世代の活動者の不足が上がっています。大会の成果を次の世代に引き継ぎ、また、新規参加者を取り入れるため、若い世代が興味・関心を持つようなテーマを検討する必要があると思われます。

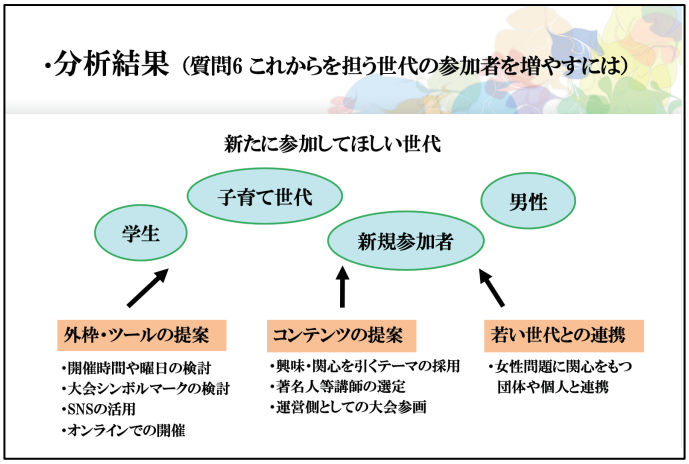




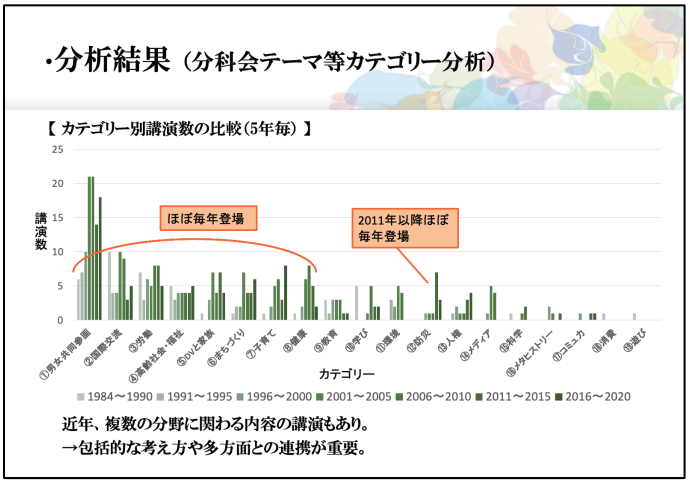




では、これからの参加者を増やす取り組みついて、分析しました。アンケートから、新たに参加してほしい世代として、学生・子育て世代・新規参加者・男性が上がり、これらの世代に参加してもらうには、大きく3つの提案が得られました。まず、外枠・ツールの提案。気軽に参加してもらえるよう、開催日時・開催形式の検討、SNSの活用が上げられました。次に、コンテンツの提案として、興味・関心を引くテーマや著名人など講師の選定、大会運営側に入ってもらうという案がありました。また、現在活動している若い世代や団体との連携も効果的だと考えられます。



最後に、分科会等のテーマ分析結果について、ご報告いたします。各分科会等のテーマの分野別出現頻度、およびその内容の変化を見てみました。記念講演、分科会等の全406回の講演について、19のカテゴリーに分類いたしました。グラフは第1回目から5年毎の講演数をまとめたもので、左から講演数が多い順に並んでいます。1番左の男女共同参画分野から8番の健康分野まではほぼ毎年登場しています。内容について国際交流分野では、グローバリゼーションから多文化共生へ、労働分野では、雇用労働から起業・新しい働き方がテーマになるなど、変化が見られました。また、近年では複数の分野に関わる内容の講演もあり、包括的な考え方が重視されていることが分かりました。



大会の誘致・開催形態は、行政主導・市民協働・市民主導の3つに分類でき、徐々に行政と市民団体一体となり、誘致に至った都市が増えていました。また、これまで日本女性会議は「男女共同参画」の用語の浸透、意識啓発に大きく貢献し、さまざまな団体とのネットワークを構築してきたことが分かりました。

今後は、得られたネットワークをより活用していくことや、次世代の活動者や新規参加者の獲得が課題です。若い世代の獲得にはオンラインの積極的な活用や興味・関心を持つようなテーマの検討が必要です。これまでたくさんの方々が力を尽くし、つくり上げてきたこの大会を引き継ぎ、さらに発展させるためにどんなことができるのか、今後の大会のあり方について、シンポジストの皆さまと一緒に考えていきたいと思います。では、先生方どうぞよろしくお願いいたします。

▼風間：ありがとうございました。10分ほどで内容説明をしてもらいました。アンケートは事務局（行政）側と実行委員会（市民）側の両方に実施し、結果を甲府市役所内にて2日間でまとめました。私は参加して楽しかったです。結果を受けて、上野先生にミニ講演をしていただきます。



▼上野：日本女性会議は官製イベントだと思っていましたので、距離を置いていました。ですが今回は「日本女性会議38年目の総括」という挑戦的なテーマ。データもとるというので話に乗りました。アンケート結果の分析は市役所で一緒に行いました。若い事務局メンバーが頑張ってくれました。38年の歴史の中、何が起きたか興味が尽きませんでした。裏話を聞くと知らなかったことがたくさん出てきました。1984年名古屋の第1回では、名古屋でやるなら名古屋女性会議でいいではないか、なぜ一地方自治体が日本と名乗るのかという抵抗勢力がいたのを押しきって開催されたとか。祝福された出発ではなかったことが分かりました。それが38年続いて、今日に至りました。

第1回開催時の84年とは、どういう時期だったでしょうか。国連女性差別撤廃条約の批准や男女雇用機会均等法が整備される直前で、フェミニズムの気運の高まった時期でした。85年から男女平等の推進は国策になりました。

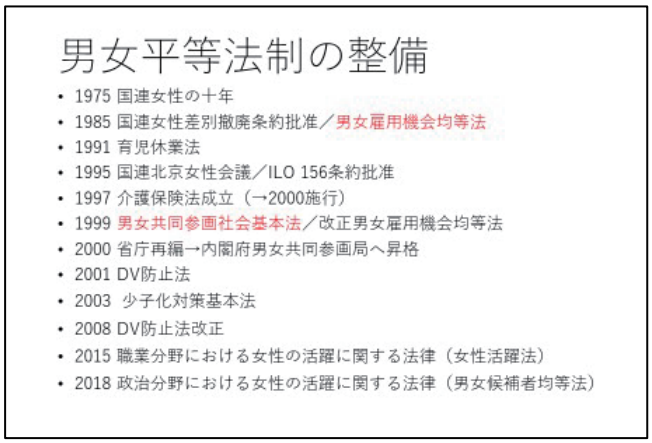
それ以前、1965年に、国立市の公民館職員の伊藤雅子さんが初めての託児つき講座を行いまいたが、当時は非常識だった託児付き講座は、今では常識になりました。75年国連女性年からの第1期は啓蒙と啓発の時期でした。公民館で女性問題を学習する講座が増えましたが、社会教育・生涯教育は教育委員会の管轄でした。

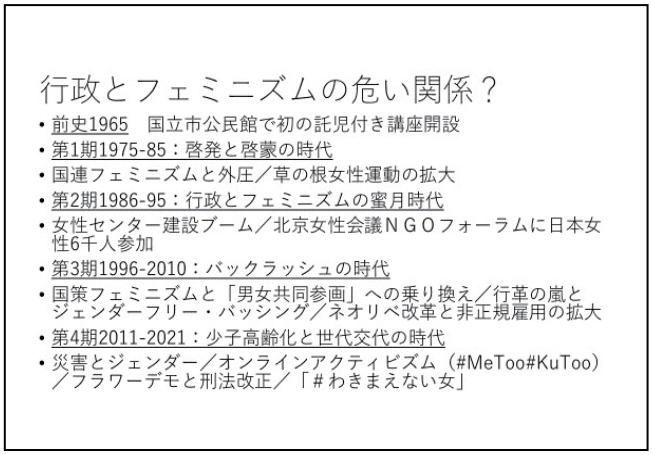
第2期には、行政とフェミニズムの蜜月時代がきます。バブル期で税収も上がっていき、女性センター建設ブームになりま

した。ピークは1995年の北京女性会議です。世界から４万人の女性が集まり、そのうち日本女性は約6,000人でした。隣国なので行きやすかったこともあり、そろいの浴衣で盆踊りを踊った自治体派遣の団体もあります。日本女性は、大きな自信をつけて帰ってきました。

この後、バックラッシュの時代が始まりました。バブルがはじけて税収減少、それに伴う行政改革の波に加えて、ジェンダーフリーバッシングもおきました。日本女性会議はこの嵐もくぐり抜けて来ました。その過程で、女性政策が男女共同参画という名称に置き換えられてきました。女性センターも男女共同参画センターと改称しましたが、政策目標を明示するなら男女平等推進センターとか女性差別撤廃センターとしたほうが分かりやすいだろうと思います。平等という言葉を政権与党のオジサマたちがお嫌いだったからだとか。

今は新しい波が来ています。2011年の東日本大震災の時から、災害復興にジェンダーの視点が必要だという認識が登場しました。そのころから急速にオンライン化が進み、アクティビズムのハードルが下がりました。#MeToo、#KuTooといった運動がおこり、若い人たちが積極的に発言するようになりました。そして、性暴力に反対するフラワーデモと刑法改正の動きも大きくなり、「＃わきまえない女」が増えてきました。今、私たちは新しい波に乗っています。





こうした背景の中で、この女性会議をどのように振り返ればよいでしょうか。日本女性会議の主体は官民協働のタテマエですが、おもしろいことに、行政の思惑と市民団体の思惑は重なっていません。行政側では、女性センター建設をハコモノ行政に利用した節もあるように、コンヴェンション・シティ構想による大規模会議の招致や、市政何周年事業に便乗したなどという動機もあります。市民団体の方では、ジェンダー課題を広めたい、地域に啓発したい、人材育成したいという動機があります。しかし会議を招致したのは自治体であり、責任を負ったのは公務員であり、予算を付けたのは自治体ですので、おんぶに抱っこの側面はあったでしょう。大会の実行委員長は、ほとんど行政が任命した女性有識者への当て職で、民主的に選ばれたとは言えません。組織運営には行政主導型、市民主導型、官民協働型の3つのタイプがあって、開催地によって多様性があります。

では、開催した効果はどうだったでしょうか。もしリアルに開催されれば、全国から3千人規模の参加者を集める大規模コンヴェンションでは、開催都市に大きな経済効果があります。残念ながらオンラインではそれは期待できません。開催後、自治体は変わったでしょうかという質問にほぼ変化なし。答えはほとんど、意識が変わったというもの。わずかではありますが、女性公務員の制服廃止、お茶くみ廃止ができた自治体もあります。管理職はやや増え、条例制定の効果があるという答えもありました。また、市民や企業にジェンダーや男女共同参画という言葉が理解されやすくなったという答えも。市民団体には開催後そのレガシーが残り、継続的事業につながったという回答もありました。参加者には継続性と蓄積性があり、前回の女性会議に参加して、こんなことが出来るのかという驚きと興奮を持ち帰り、わが市でもと考えた人たちのリレーがつながって、38年続いてきたのでしょう。比較することで、他の市でできた政策が自分の市ではできないのはなぜ、と大きな力になりました。また、これだけ大規模な事業を計画・立案・実行することで、人材が育ちました。そうした人材を審議会委員に送り込んだり、女性議員が登場したり、なかには女性首長も生まれました。市民団体相互の連携など、主催者には確実なエンパワメント効果がありました。

現在、日本女性会議は転機に立っていると言えます。それは担い手の高齢化です。若い人達は若い人達で課題を持っています。今日に至っても、女性の課題は解決されておりません。担い手の世代間の断絶をどう橋渡しするかがこれからの課題だろうと思います。また、この10年間で情報ツールが変わりました。ICT化をどう活用するか、これからの必須の課題です。ワンオペ育児や高齢化の問題など、変わらない課題もあります。生理の貧困の問題は若い方から出ています。やはり、若い方が直面している課題を組み込む必要があります。

では、38年経った日本女性会議は、これからどこへ向かうのでしょうか。名前を変えたいという回答もありました。どう変え

ようかというと、ダイバーシティとかSDGsとか流行しているものを付けようという提案がありますが、流行はやって来て過ぎ去ります。私は日本女性会議というわかりやすい名前で良いと思います。すでに十分男女平等になったからと、廃止・休止説も一部にありましたが、ジェンダー・ギャップ指数世界120位(GGI)の国、日本では、やるべきことはまだまだあると再確認いたしました。日本女性会議の歴史の中で生まれたネットワークと、そこで育ってきた人材のことを考えると、38年の蓄積の成果は決して侮れません。ブランド効果を含めて、この名称の利用価値はあると思います。

ただ、驚いたことに、毎回次はどこでやるかは、たまたまエントリーした都市がつないできただけだと分かりました。上位団体も全国組織が無い中で、途切れずに続いてきたのは綱渡りのような奇跡だと思えます。それをつないできたのは過去の参加者が、あの興奮と成果をわが市にも、と強い思いで自治体を動かしてきたからこそだと、今回の調査の結果から認識しました。

▼風間：アンケートの結果から深く読み取ってくださった上野先生のご講演だったと思います。次に、シンポジストの方にもアンケート結果をどう思われたか、何が課題なのか、日本女性会議はどうすればよいのか、お話しいただきたいと思います。2017年苫小牧大会の実行委員長の髙橋様からお願いします。



▼髙橋：過去を振り返りながら聞いていました。その中で、第17回三重県津市に参加した時は、新鮮で、世の中がこんなに変化していることを知りました。いつか苫小牧でやりたいという思いがどんどん強くなっていきました。

そこから苫小牧開催までの10年間では、苫小牧市として条例もできました。条例の中に、市民団体の責務、企業の責務、行政の責務がうたわれ、その連携をどのように結びつけ、浸透させるかが、私たち男女平等参画推進協議会（市民団体）の活動の始まりでした。25年には北海道初の都市宣言がなされ、女性センターの名称も「男女平等参画推進センター」という名称に変えることができました。苫小牧市の審議会の中で大変な議論をして通していきました。女性会議に至る10年間は、企業・行政と市民団体がどう連携すべきかに力を注いだ10年間でした。

実行委員会を組むにあたっては、基礎ができていたのでスムーズに組むことができました。寄付もたくさん集めることができ、最終的には行政にお金を返すこともできました。経済的にも恵まれたばかりでなく、分科会へもたくさんの方から応募があり、先生方もたくさん協力いただきましたので、入れたい内容を全て分科会に組み込み、日本女性会議を作り上げていきました。その中で、私たち市民団体が一番大切にしてきたことは、学習をするということでした。企画力・実践力・推進力・発信力の力を得て日本女性会議を迎えたことになります。

開催後も、実行委員長を受けた責務、行政・企業にも責務があります。やりっぱなしにすることなく、市長は市民会議を立ち上げました。市長が議長になり、子育て世代も含んだ市民会議を作りました。「行政は人が替わると停滞する時もある。解散せず、一緒にやってほしい」という市長の本音を聞き、ますます信頼関係を厚くしている現在です。今、市長も市民会議を軸に一生懸命、活動しています。

日本女性会議開催後の一番の変化は、行政が大変成長したことです。企業も変わり、SDGsに取り組んでいます。昨年から市民会議で開く予定の行事が、コロナの影響で延期されていますが、今年は12月を目標に、展示だけでもやろうと企画しています。市民団体・企業・行政の連携がうまくいっています。

私たち市民団体は、ヌエックの男女共同参画推進フォーラムで多くを学習し、成長させていただきました。ヌエックの中で自由に活動できて幸せだと思っています。主催者側とも相互に信頼し、毎年ワークショップを出し、知り合った人と一昨年は全国のネットワークを結成しました。結成した途端にコロナになり、思うようにいかないですが会員を増やす活動はしています。昨年12月には北海道のネットワークを立ち上げました。これからはネットワークの時代だと思いますので、地域でも、全道・全国でもネットワークを大切にしていきたいです。

▼風間：ありがとうございました。続いて、2018年金沢大会の実行委員長、八重澤委員長お願いします。



▼八重澤：2018年の金沢大会の開催後のご報告を兼ねてお話しさせていただきます。

まず、直接的に目に見える効果について申し上げます。特筆すべきは、第3分科会パネリストの方が金沢市議会の議長になり、副議長も女性になりました。また、パートナーシップ宣言制度を2021年7月に立ち上げましたが、9月末までに4件の申請がありました。男性の家事・育児の参画促進のための家事シェアプロジェクト事業は、家庭内の整備をして、女性が外に出やすくして活躍の場を促進する計画です。これが日本女性会議後の目に見える成果です。

日本女性会議と連動した大きな動きとして石川県を見てみますと、男女がトモに活躍するという意味の「トモ活」をキーワードにした事業を実施し、男女共同参画への意識啓発を行い、底上

げに努めております。この地域の特筆すべきものとして、公立学校の副校長・教頭・校長といった教育場面における女性管理職数が全国1位で、2030年までの国の目標をはるかに超える37%です。これは、子どもたち世代に対して大きな意味を持つと思っております。石川県議会でも副議長が女性になっております。もう一つ、SDGs関係で金沢プライドパレードというLGBTQの人たちのパレードが行われています。このパレードは北陸初のことで10月10日におよそ300人の方が参加されました。

問題は、日本女性会議の目に見えない効果と今後のあり方についてです。皆が寄り集まる場所を共有することの意味について検討してみました。

①開催地であることの効果が3つあると考えました。1つ目は、大会の当日は、列が会場を取り巻き、それだけで胸が熱くなり、数は力だと感動しました。しっかりやろうと思いました。2つ目は、125社が協賛団体となりましたが、企業は協力の意味を問い、私たちは日本女性会議について説明をし、共有することになりました。3つ目は、340名というたくさんのボランティアが参加してくれました。ずっと多くの人に支えられていると実感しました。動員もかかっていたとは思いますが、学生や留学生もいました。女性会議を知らない人にもアピールできたと思います。

②開催地の地域性を活かした効果もございました。この地域は、自治体が非常に一生懸命で、さらには国連大学が近くにあり多くの高等教育機関（人口10万人あたり全国1位）があります。そういった複数のリードする機関が影響しあって、大きな推進力となっています。これは、日本女性会議そのもののコンセプトである男女共同参画、ジェンダー平等を推進する力になっています。若い世代も取り込めているようです。

③公的な意見交換以外でのメッセージの授受とネットワークの形成が上げられます。苫小牧髙橋委員長が言われたとおりです。公的なところでは言えないことなどを、場を同じくして共有するということです。

日本女性会議の今後のあり方ですが、こうしたニーズを行動に結びつけるためには、手段と内容について考える必要があります。先に示したデータで年代・性別・出席回数を調べてみると、50～70代が7割、初めての参加は4割以上、5回以上参加の方も4分の1おられました。このように力をあわせて一緒に築き上げるものがある限り、日本女性会議は存続する意味があると考えます。

▼風間：ありがとうございました。続いて、2019年佐野大会の実行委員長、藤井委員長お願いします。



▼藤井：まず、アンケート分析の結果を見てどう思ったかですが、このような全国的なアンケートができ、これにより客観的データをもとに議論できることに感謝申し上げます。アンケート結果を見て、議論を起こす必要性が示されたと感じました。肯定的な回答が多数ですが、そうでないものもありました。名称変更希望も一定数ありました。成果も概ね有りという意見が多いですが、中には意識啓発に留まっているという意見もありました。次世代の取り込みについては、今後検討が必要になると思います。また、テーマの変遷については、社会状況や課題への主催者の高い意識と工夫が見て取れました。そして、本会議の意義や社会的地位は、時代とともに変わってきていることを感じました。当初は時代の先導的役割を果たしていましたが、今は時代からやや取り残されつつあると感じています。これは、女性問題の質やアプローチ方法が変わってきている中で、本会議は変わらなかったことに起因していると思いますので、時代とのマッチングを改めて問題化すべきと捉えています。

次に、何が課題かについてですが、一番は層の偏りです。それは主催者と参加者両方です。これは、元祖である地域婦人会の性格の名残ではないかと考えます。戦後、働く女性は政治参画や労働運動をしていましたが、家庭婦人は別のところで地域婦人会を作り、以降これが婦人団体、女性団体、市民団体へと育っていきました。本会議の担い手層は、この地域婦人会に系譜を持つと言えると思います。すなわち、時間的・金銭的余裕のある専業主婦とシニア層で形成されてきたわけです。その結果、本会議は金曜日の開催がずっと続き、現職者やビジネスパーソンは視野の外にあるという状況を固定化させました。今、現役世代は、個人レベルでさまざまなツールを介して、また、体験をとおして女性に関わる課題を捉えたり、関心を深めています。NPOに参加する女性たちも幅広い層で増え、テーマ追求型の活動が各地で展開されています。こうした女性問題への新しい向かい方に本会議はシフトチェンジすることなく、参加者は60代が中心で40代以下は少数派です。しかし、昨年の刈谷大会でオンライン開催したところ、若い層の参加が36%と急激に増えました。これは、転機と見るべきだと思います。

もう一つの課題は、社会的インパクトの弱さです。確かに成果はたくさんあり、主催者・参加者・自治体それぞれに成果があり、その後の各自・各団体のパワーアップにつながっていることは間違いありません。ただ、これらが開催地以外の地域に広がりを見せ、社会を変える力になっているのかを考えると、ややどうかな、と思っています。これは、事務局を持たない全国持ち回り、年1回の大会方式の限界と言えます。このやり方が、議論の積み上げによる社会的インパクトを生み出せない理由であり、構造的な問題ですので、このあり方を変えないと大きな変化には至らないと思います。単発で閉鎖的な成果を、継続性があり開かれた成果にどうつなげていくかが論点かと思います。

もう一点気になるのが、問題への向き合い方にばらつきがある点です。女性に対する課題は非常に多くて根深く、また女性活躍という言葉に埋もれているものもたくさんあります。それらの問題をどう引き受けるかは人によって温度差があると感じています。問題を抱える人たちへのアプローチが十分か、問題をどのように解決に導くのか、そのために私たちは何をするのかという意識に、もう一歩踏み込めたら良いと考えます。

では、日本女性会議をどうすればよいのか。本会議の限界は、体質と構造的問題に起因するところが大きいため、このスタイルを続ける限り大きな変更は起こりにくいだろうと思います。そこで、少しでも良い方向にということで2段階で考えてみました。まず、リフォーム（古いものを新しいものに変える）には、対象層の拡大です。当日の参加者の拡大だけでなく、どこに届けるかという観点での拡大。そして、社会を変えるための切り込みという点では、コンテンツの絞り込みもあるかもしれません。日常的な若い団体との交流や、成果の共有と普及、そして媒体の多様化は必須だと思います。大きな変革を目指すには、リノベーションが必要です。例えば、「女性問題を考える会議」への組換え。私は、女性問題はあり続けるし、ますます深刻化していると思っていますので、名称変更をするとしても、「女性」という言葉はなくさないほうが良いと思います。無駄を省き、議論の積み上げに注力する会議に変えていく。しかし、事務局体制を持っていないため、かなりハードルが高いです。以上、問題提起ということで述べさせていただきました。

▼風間：ありがとうございます。2020年刈谷大会の実行委員長、山根委員長お願いします。



▼山根：まず、アンケート結果から、日本女性会議は奇跡の継続と危うさということを感じました。刈谷は、愛知県では2回目の開催でした。第1回目の名古屋を意識し、資料も調べました。第1回からある種の危うさがあったと当時の記録から感じました。第1回は、幅広い団体が参加して成功しています。しかし、女性団体からの批判もあり、不参加を表明した団体もありました。主な批判内容として、行政主導でありすぎること、商業主義に流れること、市の体制と女性の運動が混同されていること、男性支配体制を変える視点が欠如しているのではないか、などの批判が当初からありました。しかし、第1回の効果は非常に大きかったと思いますし、名古屋市の担当部署は、「男女平等参画」という名称を使っており、全国でも平等を使っているところは少ないと思います。また、名古屋市の男女平等参画推進会議は、幅広い参加団体を網羅しながら男女平等を推進しており、それらの遺産は息づいていると感じています。

アンケートを見て、刈谷大会の位置づけを考えました。タイプで言えば行政主導タイプです。市制70周年とタイアップで行政が誘致しました。私は当て職の実行委員長です。勉強のために金沢大会に行き、苫小牧の髙橋実行委員長にお会いしました。市民運動から粘り強く日本女性会議を誘致し、草の根から日本女性会議を成功させた話を伺い、その話に肩を落として刈谷に戻りました。刈谷市は豊田市に並ぶ企業城下町です。男性が多いまちで何ができるかを考えた時、意味をずらさずにいこうと思いました。最初、「ジェンダー平等、次の50年へ」というテーマを私個人として提案しました。日本でウーマンリブが誕生して半世紀という意味です。これは残念ながら不採用でしたが、「かけがえのない“わたし”を生きる～ものづくりのまちから発信～」というテーマとなりました。このテーマを貫きたいと思いました。基調講演に上野千鶴子さんに来ていただいたことが、刈谷大会で頑張ったことの象徴だと思っています。若い世代とつなぐことは、強く意識しました。40歳未満の人と大学生に実行委員会にも入っていただきました。劇的な転換はコロナによるオンラインへの転換でした。オンライン開催の決断、それとともに経費が大きく変わりました。オンラインになったことにより、参加2,000円で、学生は無料にしました。当初は1,000人にも満たなかった参加者が、最終的に2,000人を超えました。県外からの参加者が6割、30代以下が2割を超えました。成果としては、会議プロセスの中で地域の女性のエンパワメントができました。会議の後、自発的な活動が始まり、インターネット上のネットワークが誕生し、現在もコミュニケーションが続いています。条例を制定し、行政施策に日本女性会議のコンセプトが定着しました。市内小中学校の混合名簿の実現もあります。市民から「相手にしてもらえなかったので、急展開に驚きました。」というレポートをいただいています。刈谷大会は、行政からスタートしたというのが強かっただけに、市民ネットワークと行政の関係をどう作るか、市民の自発的活動を行政が支える形をどう作っていくかが、これからの課題になります。

日本女性会議の課題を2つ上げます。1つ目は、ジェンダー平等を次世代に。若い人に伝わる言葉と仕掛けが必要だと思います。2つ目は、日本女性会議を日常化していく、イベントから日常へ定着することが必要だと思います。

これからの日本女性会議をどうするかということですが、ジェンダー平等が達成され、逆戻りしないしくみができれば、日本女性会議は終わってもいいと思います。しかし、ジェンダー・ギャップ指数120位(GGI)という状況を見ると、本会議は有効だと思います。今後のあり方として、型にとらわれない開催を応援したいと思います。リレー方式でつなぐと、前年はどうだったということが参照点になり、会費に義務感が生まれたりしますが、小さな自治体で、地域の女性の切実な課題からスタートして、想いのある方や団体を活かし、開催する自治体のサイズや地域性に合わせて、さまざまな形で開催するなど、今までの

型にとらわれず、自由に発想できるといいと思います。

▼風間：ありがとうございました。上野先生、皆さんの話を聞いてのご意見をお願いします。また、世代間をどうするかについてコメントも届いていますので、ご意見お願いします。



▼上野：熱意のあるご発言をいただきました。実行委員長経験者の提言は具体的です。前提にあるのは、課題はあるが手ごたえと成果があったという思いがあるからこそ、次につなげるために課題を乗り越えたいという気持ちがとても良く伝わってきました。

皆さんの発言を聞きながら思ったのですが、これからオンライン化が進むとしたらどうなるのか。コロナが終わったら元に戻るのか、人集めをして経済効果を狙うのか。そうじゃないとしたら、全国の女性のための活動を、なぜ一地方自治体が担う必要があるのか。反対に、オンラインを使うとコストが下がりますので、山根さんがおっしゃっていた型にとらわれない開催ができます。今までは一定規模のある自治体しか誘致できなかったが、これからは、その気のある人さえいれば、小規模自治体から地域密着型の地方発の全国発信ができるツールになるかもしれないと感じました。それだけでなく、これだけ規模の大きなイベントを行政と連携して行うのは、非常に大きな達成経験になります。開催のためのオペレーション、マネジメント、コストの問題を考えるのもいい経験です。行政と市民との交流の場ができ、一定の達成経験を共有していくことのレガシーは大きいと思います。

また、世代間ギャップをどう埋めるかが課題と皆さんおっしゃいました。当事者の問題は当事者が扱うからこそ、活きのいい情報が発信されますから、おばさんたちが生理の貧困を語るよりも若い世代に語ってもらいましょう。例えば、弱小団体はオンラインで全国に配信できるアカウントを持っていないので、1枠をあげて、アカウントを持たない団体にチャンスを提供し自主性に任せたら、まだまだ色々なものを取り込めるし、その中で異世代間・異文化間の衝突・摩擦や交流が起きて面白くなると思います。それには、種と仕掛けが重要です。装置をどう作り、人をどう巻き込むか。年長世代だからといって引け目を感じることはないと思います。実行委員長経験者は、ネットワーキングの経験者ですから、やってきたノウハウを伝えていくことができます。そして、新しいツールを使うことの可能性を感じました。風間さんはどう思われますか。

▼風間：私は山根さんや藤井さんと同じように、これまでの女性会議とは無縁でした。ただ、私は大学で仕事をしていますので、子育てしながら、毎日が戦争でその日暮らしのようなものでした。自分が悩んでいても相談相手がいなかった。とにかく前を向いて走ってきた経験があります。そんな中、特に今の若い方を考えると、シンポジウムを金曜日の午後に開催するなど働いている人の参加が難しい形は、対象者が限定されているように思います。それがアンケートからも伺えます。より多くの対象に広げる必要があると思います。ただ、私たちの世代が若い世代と一緒になって何かをすることは難しいかもしれません。例えば、朝日新聞が理系女性のことを取り上げ、研究室内でのパワハラやアカハラの実態が報道されていました。研究室という狭い社会にいる若い研究者に対して、私たち世代が直接何かをしてあげることはできないかもしれませんが、周囲に支えたいと思っている人がいることを伝えてあげることはできるのではないかと思います。

男女平等という話自体は根深く、簡単に世の中がひっくり返ることはないだろうと思いますが、こういう会議を常に開催し、小さくても、少人数でも、情報を出し合い意見交換して、議論してつながりを実感できることは大きい成果になると感じます。官と市民が一緒にやれる枠組みは女性会議の大きなメリットだと思いました。もう一つは、社会の変化に伴って女性会議も変わらざるを得ないと思います。しかし、急激に変えると戸惑いもあるだろうと思いますから、それぞれがやれるところで一生懸命やってみて、周囲が応援しながらサポートしていくと良いと思いました。

それでは最後に、シンポジストの皆さまに「これからどうしますか」ということをお伺いします。

▼髙橋：社会が変わり、日本女性会議も変わっていくだろうということの中で、どう変わろうが根本である男女平等・人権という根っこは変わらない日本女性会議であることを望みます。

▼八重澤：今年の日本女性会議のプログラムを拝見すると、2つの分科会「環境問題」と「私らしく生きる人生設計の可能性」に若い人が登場しています。この2つの課題は時間がかかるものです。私は長年教育現場にいたので、それらの課題を若い人たちと一緒にやっていきたいと思います。その際には、地域の自治体が若者向けにたくさんの仕掛けをしているので協働し、個人的には、高校生・大学生への直接の働きかけを行うことを考えています。

▼藤井：私はあと数年で退職になり、その後どうするか考えているところです。今やれることは一生懸命やりたいと思っていて、大学の中で男女共同参画を進めています。「つなサポ相談室」、これは総務省の事業で、「ハッシュタグ生理用品」で話題になった女性の貧困問題に端を発しています。これに協力して、大学内に生理用品を置くなど、そこを切り口にして女性問

題を考えてほしいと活動しています。

▼山根：私はジェンダー平等を日常化することに貢献したいと思います。現在、付属学校の校長をしていますが、中学生がフェミニズムの思想を理解してくれます。若い人に通じ、伝わるのです。ですから、あらゆるところで私のスタンスでジェンダーの大事なことを伝えていきたいです。

▼風間：上野先生お願いします。



▼上野：風間さん、よくぞ言ってくださいました。働く女性が7割を超えたこのご時世に「金曜日の午後にやるのか」と思いますが、事後配信するので、これもオンラインのおかげです。そういうツールをどんどん使っていけば良いし、藤井さんや風間さんのように、今まで関係なかった人を引きずり込んだら、やる気になってくださって、日本女性会議はすごいという手ごたえも持っていただきました。今日この話を聞いて、ちゃんとレガシーがあることが今度の調査でよく分かりました。一部の人にしか知られていない、もったいないレガシーですが、この講演を聞く人の中から、次は我が市でと名乗りを上げてくれると嬉しいと思います。招致する価値はあると思います。

そして、最後に一言申し上げます。今回集めた38年分の報告書などの資料を全部持っている人や自治体はありません。この資料をWAN（NPO法人ウィメンズアクションネットワーク）のミニコミ電子図書館にアーカイブ化させていただくことになりました。自治体は、こういった資料を何年か経つと廃棄してしまいますので、保存する必要があります。半世紀後に歴史研究する人がいれば、きっと役に立つでしょう。今回、それだけの価値のある資料を集め、分析をしたと思っています。

▼風間：ありがとうございます。アンケートを取る時に、このように褒めていただく結果になるとは思いませんでした。実行委員会として気楽にお声がけしてしまいましたが、多くの自治体や実行委員会関係者から丁寧な回答をいただき、誠にありがとうございました。この記録を残すことで、何かつまずいた時にお役に立てれば嬉しいなと思います。上野さんが書いたかお話しになったことですが、本音と建て前があるが、本音では男女平等が解決できていないと思っていても、建て前のほうでは、男女平等でなければいけないことを、いろいろなところで言いまくることが大事だと思っています。そういう意味でも、日本女性会議は存在し続けなければいけないと思います。

ご参加いただいた皆さま、上野先生、4名の先生方、ありがとうございました。

特別講演　10月23日（土）14:50 ～ 15:30

オリンピック・パラリンピックの意義とは
～そのレガシーの発展と継承～

講　師

橋本 聖子

東京オリンピック・パラリンピック
組織委員会会長
参議院議員





皆さま、こんにちは。橋本聖子です。「日本女性会議2021 in甲府」をご視聴いただきありがとうございます。私は、北海道出身で、高校卒業後から山梨県に移住しました。7回のオリンピックは山梨県人として出場を果たしました。山梨県には縁をいただいている1人です。今日はリモート開催になりましたが、最初にこの会議にお声をかけていただいた時には、会場に全国から大勢の参加者が来ていると思っていましたが、今日は関係者の方だけになってしまいました。今日はリモート参加ということで甲府からお話をさせていただきます。第2の故郷で参加させていただくこと、光栄に思っております。

テーマは、「オリンピック・パラリンピックの意義とは～そのレガシーの発展と継承～」です。オリンピック・パラリンピックを振り返り、何を思い、何を課題として、東京レガシーをつくり上げるか、今、まさに検証中です。大会を振り返り、皆さまにご報告をさせていただきます。

まず、東京大会の概要です。206の史上初の国と地域が参加し、また難民選手団も受け入れ、11,259人の選手が参加しました。競技数は5競技増え、399種目を実施しました。パラリンピックも163の国と地域が参加しました。このコロナ禍において、基礎疾患のある障がいを持たれた方が、国をまたいで大会に参加するのは厳しいのではないかと言われていましたが、日本の感染症の取り組みを見て、安全安心だとご理解いただき、選手数が史上初4,403人にお越しいただきました。コロナ禍において、この記録は素晴らしいものでした。特に、国の情勢が厳しいアフガニスタンの選手2名が参加してくださり、非常に意義があったと思っております。その中で、私自身、長年にわたり日本選手団の団長やJOCの強化本部長を務めておりましたので、東京大会で自国開催の地の利を活かし、メダル獲得数を増やしたいという思いでおりました。日本選手団の活躍は素晴らしいもので、選手の活躍に東京大会は助けられたと思っているところです。日本選手団は、オリンピックが583名、パラリンピックが254名で、金メダルは27個、メダル総数58個で過去最大を記録しました。若い世代の活躍が目立ち、10代のメダリストは8名誕生、女子種目では最多の14個のメダルを獲得してくださいました。そして、パラリンピックでは、金を13個含む51個のメダルを獲得し、幅広い世代の活躍が目立ちました。女子種目では、16個のメダルを獲得し、今大会は女性の活躍が際立っていました。こういった背景には、国際競技力の向上支援がありました。各世代や競技間の交流を通じ、オリンピック・パラリンピックの共同による合宿をすることによって相乗効果を生み出していくというやり方も、オリンピック委員会にしていただき、良い成果をもたらしたと思っております。

ナショナルトレーニングセンターですが、2008年からオリンピック選手中心に充実を図ってきました。パラリンピックの選手の施設はなかったですが、令和元年6月からのオリパラ一体的な支援の中で、パラリンピックに特化した施設も設置することができました。今回のパラリンピックの活躍も、拠点づくりをした結果、成果を上げてきたものと思います。

また、今回、一番の問題でありました1年延期となった理由はコロナです。新型コロナ感染症により史上初の延期となったこの大会ですが、私自身は、まずは安心と安全をどのように理解いただき、世界各国の選手を迎えた時にどう提供していくのかという、いわゆるバブル方式をどのようにつくり上げ、徹底してやり遂げるという強い信念のもとに計画を立てました。なかには、こういったことが充分にできるのかという不安も世界各国からありましたが、まずは徹底した水際対策として、定期的な検査をしました。入国前と入国時、入国してからは毎日スクリーニング検査も行いました。そして、徹底した行動管理、宿泊先、競技場内での用務先などを限定し、移動は専用車両のみとするなど、徹底したバブルと動線を確保するという対応をとりました。

そして、ルール違反に関する処分も厳しくしました。大会資格はく奪や大会資格の一時効力の停止、厳重注意のみならず、国外退出など厳しいルールを設定しましたが、日本の国民に安心してもらうためには、選手に競技ルールとコロナ対策のルールは一体のものであるという認識をもっていただき、厳格なルールのもと実施することができました。

また、ワクチン接種も進めました。国内選手や大会関係者、約4万人分ですが、国内ワクチンが選手のみに行き渡るのは、一般の方のワクチン接種が遅くなり不安を招く恐れもありましたので、IOCとファイザー社からの提供で、国民とは別枠で選手のワクチンの確保ができました。開発途上国の皆さんにもワクチンが行き渡るように、コバックスを活用していただくなどしました。パラの選手には基礎疾患がある方もございまして、医学的観点から、ワクチン接種によりアレルギーで体調を崩す人以外の選手関係者は、ワクチン接種をしていただくよう協力していただきまして、全体で9割近い人にワクチン接種をしてから日本に入国してもらうことができました。それだけではなく、出国から日本に来るまでの72時間に2回のPCR検査を受けていただき、陰性証明が出た方だけが入国できるようにしました。入国後は、全ての方にPCR検査をするなど徹底した管理をいたしました。アスリートは毎日検査し、その他スタッフは4日に1回検査し、ルールに従っての行動をお願いしました。海外から持ち込まれる変異株により日本医療ひっ迫の恐れがあると懸念されていましたが、結果的にクラスターなどの事例は一つもありませんでした。入院者が5名おりましたが、症状は軽く、すぐ退院され、日本の医療体制をひっ迫させることはありませんでした。全体を通じ、スクリーニング検査の陽性率は、100万回の検査で0.03%と、ほぼ感染させることなく終わらせることができました。医療体制も医師はスポーツドクターや整形外科を中心に、看護師は潜在看護師を中心に、地域医療に負担をかけない協力体制を組むことができました。こういったことも一つの東京モデルとして、しっかりと検証し、提言していかなければならないと思っております。

コロナ対策と同じく力を入れてきた対策は、暑さ対策です。難しい問題でありましたが、選手に負担をかけないように柔軟な対応をするようIOC・IPCから指示を受け、日本でなければできなかったと、対応力の評価をいただきました。例えば、テニスやマラソンの試合時間を変更する等での対応では、実は前日の夕方に決定しました。天気予報により翌日の気温が上がるだろうと予測した結果、スポーツドクターを中心とした医療班の意見により1時間早め、徹底した連絡体制をとり、問題なく無事選手を送り出すことができました。期間中には熱中症患者も出ましたが、事前の対応と早い処置で重症化には至らず、健康被害は見つかりませんでした。



警備・セキュリティの対策については、組織委員会として47都道府県の553社が加盟したJVをつくりまして、警備員と自衛隊の参加により自主警備体制を中心とした大会警備を実施し、セキュリティカメラは約8,000台を運用し、完全なバブルをつくり上げていく中で、関係者と選手の安全を守る体制を長い時間をかけて整えました。内閣官房・警察・消防・海保など治安機関等とセキュリティ連絡会議を設置し、円滑な連携強化を図ることができました。そして、私はオリパラ担当大臣の他に、サイバーセキュリティ対策担当もしておりましたが、ロンドンオリンピックでは約4億回の攻撃が組織委員会にありました。東京大会直前の平昌冬季大会時には、組織委員会へのサイバー攻撃は6億を超えました。こういった数を日ごろから察知し、しっかりした教育もしてきました。サイバーテロの克服のためには、日ごろからの訓練や人材育成が非常に重要であり、長年にわたって東京大会組織委員会は官民あげてサイバーテロ対策をしっかりとやってまいりました。その結果、今回はたくさんの攻撃はありましたが、電気・運輸関係を含め競技が中断するような事案は起こらず、安全・安心なサイバーテロ対策ができたと思っております。どのような対策をすればよいかは国家機密となっておりますが、

日々、訓練の中で成果をあげることができました。サイバーテロは、注目されるものに対して多くの攻撃がありますので、東京大会で得た知見を検証して、官民あげてサイバーテロ対策というものに寄与できるのではないかと感じております。

続いて、選手村についてお話しさせていただきます。今回の選手村は、本村となる中心部は東京都中央区晴海地区に約44ヘクタール、21棟を設置しました。セーリングは神奈川、サイクリングは静岡にそれぞれ村をつくり、分散をいたしました。各国が自分たちのホテルや独自の選手村をつくることで、強化している国もありますので、それぞれ分村となりますが、医療や警備、セキュリティ対策を行い、全てがバブル方式を採用し、選手の安心と安全をとることが今回非常に良くできたのではないかと思います。今までの選手村は拠点ではありますが、自由に出入りでき、観光も行けるのが本来の選手村でした。今回は完全にバブル方式をつくり上げることになりましたので、選手は競技場・合宿所・ホストタウン・選手村以外完全に外出禁止という隔離政策をとりました。ストレスになると思い、事前に選手の声を聞きながら、どのように選手村でリラックスし、安心と安全を提供できるか、日本ならではのおもてなしを研究してきました。総合診療所をはじめ、カジュアルダイニングでは47都道府県の食材を持ち込み、日本料理の最前線の料理人に、日本食を提供してもらいました。本格的な日本食を提供できたため、口コミで、満員御礼、売り切れになるくらい、日本食を楽しんでいただきました。日本ならではの取り組みは、選手が自国に帰ってから、日本の食材の素晴らしさをSNSで拡散していただくことにつながりました。日本の食文化の力になっていくと思っています。そんな中、選手たちに人気だったのはネイルサロンでした。勝負ネイルというのがあるんですね。国旗をいろどったもの。非常に人気がありました。日本のネイルサロンの技術も喜んでもらえました。

選手村の医療についてですが、オリンピックでは8,762件、パラリンピックでは5,400件以上の方が医療施設を利用していただきました。緊急事態もあるので、24時間医療施設を開きました。受診希望アスリートへの必要に応じた医療の提供や転院搬送も実施いたしました。選手村での歯科診療・外来、全ての対応ができたと思っています。海外選手団の役員の中に体調を崩し、心肺停止になった方が2人おりましたが、地域医療と連携し、問題なく帰国をしていただきました。また、今回選手村は完全バリアフリー、医療施設も全てバリアフリーで、パラリンピック選手にも有効に利用していただけました。世界最先端の医療技術を提供するということで、歯科診療、検診、全てが世界初でした。理学療法による治療やアイスバスを利用した交代浴なども取り組みました。東洋医学との融合も重要と考え、今までなかった鍼灸も対応しました。ドーピングコントロールもあり、薬を飲めない選手たちに、東洋と西洋の融合された医療をしっかり受けていただけたと思います。特に、棒高跳びの選手で、バーが顔面に落下し、前歯を骨折したことがありましたが、選手は、選手村のクリニックに23:30に到着し、全ての状況を把握し、レントゲン・抜歯・根幹治療等を行い、翌朝には全て整えて試合に臨むことができました。また、足のかかとを亀裂骨折した選手にも対応し、翌日の試合には出場を果たすことができました。そういった日本の医療・科学技術を結集し、世界の皆さまに提供できました。また、開発途上国の選手には、歯科が地域にない人が大勢いることがわかりました。もう一つは、選手は体のケアに重きを置く分、パラリンピックの選手の歯科診療が思うようにいっていないことを理解することができ、車いすで歯科に通うことが困難な現状でありますので、こういった選手村での検証を世界各国や国内においても克服すべきことであると思っています。



また、今回初めて、東大・北大・阪大などの有志の方に、選手村からの下水調査をしていただきました。選手村だけの下水調査により、どこでどういう菌やウイルスが発生しているのかがわかりました。コロナ感染症が発生していないのに、下水からはウイルスが検出されることもわかりました。今後、次世代の研究として発信していくべきだと思っています。これから新しい感染症の発生が懸念される場合、人ではなく地域を検査することを最初に実施すると未病対策につながっていくことが新しい結果としてわかりました。

今回は持続可能なオリンピックということで、トーチは一部水素で燃やしたり、選手のメダルも工夫を凝らし都市鉱山で作らせていただきました。海洋プラスチックを含めたゴミからできた表彰台もメダリストの母校に寄付することも進めています。カーボンマイナスの大会ということでCO_2を約28万トン削減することができましたので、次世代の大会にも活用していきたいと思っています。

女性活躍については、多様性と調和をコンセプトに、ジェンダー平等の実現に力を入れてきました。史上最もジェンダーバランスの優れた大会となりまして、女性選手の比率が49%でした。男女混合種目もリオ大会より9種目増えて18種目となりました。また、私が会長を務めることになった背景もあり、女性理事の比率も42%に上げることができ、小谷実可子スポーツディレクターをトップとするジェンダー平等推進チームを立ち上げ、「東京2020ダイバーシティ&インクルージョンアクション　誰もが生きやすい社会を目指して」ということを宣言し、こういった女性活躍というものを東京大会を通じて発信することができたことを、更に今後に活かしていきたいと思っています。



コロナ禍においての大会は非常に困難を極めたわけですが、そういう中で誰も取り残さない、一人ひとりの考え方を貴重な意見として取り入れ、誰もが住みやすいまちづくりをしていく。選手村一つひとつ、食事を取るにしても、医療も女性専用の診療所をつくらせていただくなどして、東京大会というのは、誰も取り残さない、多様性と調和にあふれた大会にすることができたのではないかと思っております。まだまだ検証中ではありますが、今後は、男女共同参画、女性活躍の観点に置き換えて、東京大会を一つの大きなレガシーとし、これからのより住みよいまちづくりというものに寄与できるように検証し、そして、東京大会をモデルケースとして推進に努めていきたいと思っておりますので、ぜひ、これからもご指導を賜りますようお願い申し上げます。

これからしっかりとまとめ、また皆さまにご報告できるよう頑張ってまいります。このような機会をいただき、心から感謝申し上げます。ありがとうございました。

分科会 1

性の多様性

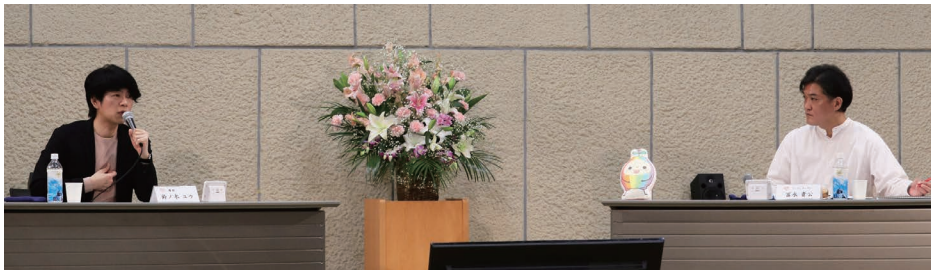
10月23日（土） 第1部 10:00～11:30
第2部 12:30～14:00

トークセッション

多様な性と家族、パートナーシップ
～コウノドリ作者と考える多様な生き方と制度～

講　師	コーディネーター	司　会
鈴ノ木 ユウ	冨永 貴公	飛嶋 一歩
漫画家	都留文科大学教養学部准教授	コプリズム代表





【第1部】



▼司会（レイン坊）：本日司会をします、山梨県のLGBT団体「コプリズム」代表の飛嶋一歩です。本日は私たちの団体のキャラクター「レイン坊」が代わりに登壇しております。皆さまよろしくお願いいたします。この分科会は皆さまにいただいたご質問をもとに、トーク形式で、ゲストの方のお仕事や家族、LGBTについてお話ししていきます。

さっそく、ゲストとコーディネーターのご紹介をします。ゲストは甲府市出身の漫画家、鈴ノ木ユウさんです。代表作に第40回講談社漫画賞も受賞した、産婦人科が舞台の漫画「コウノドリ」があります。この作品の25巻では、女性同士のカップルの出産が描かれています。コーディネーターは山梨県都留市にあります都留文科大学教養学部准教授の冨永貴公さんです。ジェンダーや社会教育が専門です。自己紹介をお願いします。



▼鈴ノ木：はじめまして。モーニングという雑誌で「コウノドリ」という漫画を連載していました鈴ノ木ユウです。今日はよろしくお願いします。

▼冨永：はじめまして。山梨県都留市にある都留文科大学で教えております冨永貴公と申します。専門は、ジェンダー・セクシュアリティに関わった、特に学校以外の場所における教育を専門にしています。今日は90分という限られた時間ですが、鈴ノ木さんに皆さんからお寄せいただいた質問をぶつけていきながら、有意義な時間にしたいと思います。早速ですが、改めて漫画家を目指された理由や背景につきまして、お伺いしたいと思います。



▼鈴ノ木：僕はもともと音楽をやっていましたが、事務所に入っていて、そこをクビみたいになって。知り合いの友人の漫画家から「働いていないのなら手伝いに来い」と言われたのが漫画を描いたきっかけです。それで1本漫画を描いて、「ちばてつや賞」という賞を取ったんですよ。

ですが、その時付き合っていた今の奥さんの妊娠が分かり、漫画家を目指すのはやめて、牛丼屋とラーメン屋でアルバイトをしていました。でも、息子がしゃべるようになって「お父さんの仕事はなんだ？」って聞くから、「お父さんの仕事はアルバイトだよ」と答えたら、息子が忘れないように「バイト、バイト」と繰り返し言って、「お父さんの、仕事は何な

の？」と聞かれると、息子が「父ちゃんはね、バイト」と言うので傷ついて、それでもう1回漫画を描かせてくれということになりました。

それからもう1回、ちばてつや賞に出して、もう一度賞を取りました。一度、音楽物を連載したんですが人気が無くて、次は何を描こうかと迷っていた時に、うちの奥さんが「産婦人科を描いてみたら」と言ってくれました。息子を取り上げてくれた先生が、ピアニストの産婦人科の先生だったので、そこからヒントを得て。読み切りで一度描いた「コウノドリ」が人気を得て、連載が決まったという流れです。

▼冨永：漫画描いてみないかと誘われた時、いきなり手伝ってくれと言われて、やれるものですか。

▼鈴ノ木：最初は、下書きに消しゴムをかけたり、ベタと言って髪の毛の黒い部分を墨で塗るという作業だけですけど、手伝いながら、独り言で「俺、漫画描けるな」と言ったら、「お前なめんなよ」と言われて。そのまま文房具屋さんに連れて行かれ、「じゃあ、1本書いてみろ」と言われて書いたのが賞を取りまして。「おっ、やるな」みたいな空気になったのですが、そこは運が良かったのでしょうね。

▼冨永：漫画の中でも息子さんは、おまけのコーナーで登場しています。その息子さんの出産をきっかけに漫画を描こうと思われたということですね。

▼鈴ノ木：そうですね。おそらく息子の出産がなかったら、産婦人科の先生を描こうとは思わなかったと思います。

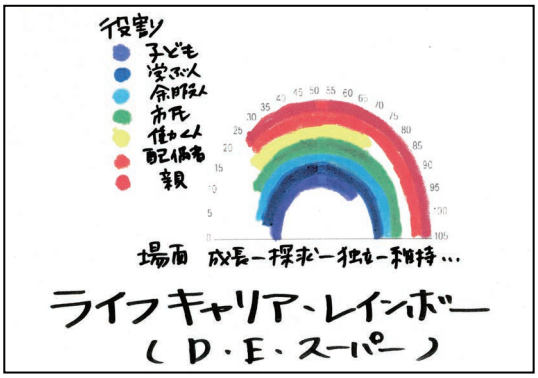
▼冨永：産婦人科をテーマにしてみたらどうか、というお話があった時に、理由は聞いたんですか。

▼鈴ノ木：妻とお酒を飲んでいる時、何を描こうかという話をしていて、編集の人は音楽物がいいと言っていたのですが、息子を取り上げてくれた大阪のりんくう総合医療センターの荻田先生がピアニストで、産婦人科の先生をやっていると聞いて、奥さんが「ピアノが弾けて、お産も取れる、ゴールドフィンガー。どうよ」って言ったんです。「面白いね」というところから、妻の幼馴染の産婦人科の先生に一度話を聞いて、その聞いた話に衝撃を受け、音楽物より産婦人科の先生を描きたいと思ったんです。

▼冨永：あとの話に関わってきますが、ずいぶん丁寧な取材をされていらっしゃいます。大阪まで通ってらっしゃったんですか。

▼鈴ノ木：そうですね、当時、妻の幼馴染の先生は横浜に住んでいて、横浜で産婦人科の先生をやっていました。最初は読み切りだったので、帝王切開の話と無脳症という、赤ちゃんがお腹の中で脳ができないという話を4本描いた時は、毎週、横浜まで通って、先生に話を聞き、作っていったという感じでした。

▼冨永：なるほど、その漫画家というお仕事についても、後ほど詳しく聞いていきたいと思いますが、「キャリアとは何か」という質問を参加者からいただいています。キャリアというと仕事を想定されることも多いのですが、アメリカの心理学者D.E.スーパーという人が、「ライフキャリアレインボー」として、人生の中での役割と場面に応じて整理をしてみたというのがこの図です。



子どもと学ぶ人、余暇を楽しむ人、市民、働く人、配偶者、親というふうに、おおよそ8つの役割が私たちの人生には登場してくると。一番最初は子どもから始まっていくわけですが、40代・50代になってくると、おおよそ全ての役割を重ねながら、私たちはこのライフキャリアを構成していくと説明しています。

鈴ノ木さんの話にもありましたが、特に黄色の働く人、働くことに関わっては、配偶者として、親として、そうした役割との関連の中で、私たちはさまざま、その時々に選択をしていくということになると思います。この分科会は性の多様性の分科会ですので、この点に限って見ると、一番下のところ、のちほど女性同士の妊娠出産の話もさせていただきたいと思っていますが、配偶者や親ということに関しては、制度的に十分な保障がされてない状況があると、この図の中からも考えられるのではないかと思います。多様な役割を担いながら、私たちの人生が構成されているということを、皆さんとここで共有をしたいと思います。

先ほど、息子さんやお連れ合いの話もありましたが、鈴ノ木一家はどんな家族かという質問です。お仕事が漫画家さんなので、取材も含めて、けっこう不定期で、日によって違うお仕事のされ方なんじゃないかと思います。例えば1日の生活時間がどんな感じで、お子さんとどんなふうに関わっていますか。

▼鈴ノ木：今は連載も終わって、家族で話す時間もあるのですが、基本的に連載中は、話を作るのに、お医者さんとの取材を含めて4日半から5日かかります。

最初の3日間くらいは、歩いたり、ぼうっとしたりして、打ち合わせ以外の時は、話をどうしようかと家の近所を散歩するので、ジャージ姿で髪もぼさぼさで、たまに息子が学校帰りに僕を見かけるのですが、ちょっと声をかけられなかったと言われます。それくらい切羽詰まった顔をしているのでしょうね。

それからネームという話の青写真の作業に入って、原稿に入るのですが、うちは基本的に朝の7時半からご飯を食べると

いうのが家族のルールで、3人で食べるのですが、朝の連ドラを見ながら食べて、息子は学校に行って、僕は仕事場に行きます。9時からアシスタントの人たちと一緒に夜の7時まで仕事をします。僕は7時半に夕食を食べるので、食べた後に10時半ころまで、子どもと遊んだり、話をします。子どもが小さい時は寝かしつけたりして、そのまま僕も12時とか1時ころまで寝たりします。そしてまた仕事場に戻りまして、朝7時半まで仕事です。スタッフは僕が描いた人物に背景とかを付けるので、スタッフが来たらすぐ作業ができるように自分の作業を進めて、そして朝ご飯を食べるみたいな流れになります。

▼冨永：となると、睡眠時間はどれくらいですか。

▼鈴ノ木：原稿に入ると2時間ツーセットとか、3時間1発とかですね。連載が7年半続いたので、その間は布団で寝たのは数えるくらいしかないですね。

▼冨永：漫画家さんというのはどのような生活なのか、どのような働き方なのか、あまり聞いたことがないような話ですが、2時間半の睡眠が7年半続くと、私なんかは体を壊すのではないかと想像します。産婦人科の漫画を描きながら体を壊されたことはなかったのですか。

▼鈴ノ木：2度ほど、手足口病と溶連菌にかかりまして。よっぽど体が弱っていて、子どもがかかる病気に2度ほどかかりました。それ以外は一度も原稿を落とさず続けてこられました。

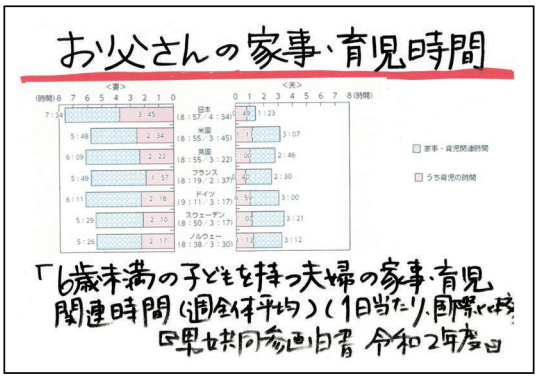
▼冨永：一読者としては、そういう身を削ったお仕事ぶりから生み出された漫画を私たちは楽しんだのだなと、改めて鈴ノ木さんに感謝したい気持ちになりました。先ほどお話があったように、息子さんは最初バイトだと思っていて、それから漫画家というお仕事に変わられて、2時間半ほどしか眠らずに働かれていらっしゃったわけですが、息子さんからこんな反応があったとか、そういったことはありますか。

▼鈴ノ木：息子は小さい時はわりと自慢じゃないけど、誇りに思っていたようですが、だんだん大きくなってくると、「コウノドリの息子」みたいに言われるのが嫌になってきたみたいです。基本的に忙しくて家族旅行に連れて行ってあげたことがないんですよ。それで息子が小学校5年生の時に作文を書きまして、その作文が、「僕のお父さんは漫画家で、忙しくて僕は家族旅行に行ったことがありません。僕の友達は行ってるのに、僕は行ったことがありません。でも一番お父さんに伝えたいことは『ゆっくり休んでほしい』です」という作文だったんです。それを読んで、一度、旅行に連れて行かなければいけないなと思いまして。じゃあ明日、名古屋に旅行に行くか、と言ってそのまま旅行に行ったことがありました。京都まではちょっと遠くて、「そうだ名古屋に行こう」みたいな感じで名古屋まで行ったことがあります。息子とはそんな感じで付き合っています。

▼冨永：ありがとうございます。オンラインで名古屋から参加されている方もいらっしゃると思いますので、一番最初の鈴ノ木一家の旅行先は名古屋だったと。名古屋の一番の思い出は何だったのでしょうか。

▼鈴ノ木：手羽先を皆で食べて、骨をキャンプファイヤーみたいに皆で立てていったという思い出です。お皿の上に。食べた骨が残るんですよ、それを崩さないように皆で並べていったという楽しい思い出がありますけど。

▼冨永：もう一つそのことに関わって、皆さんあちこちで聞かれていることと思いますが「日本のお父さんたちの家事・育児時間」というのが表で、6歳未満の子どもを持つ夫婦の家事・育児時間、週全体平均を図でお示しします。日本・米国・英国・フランス・ドイツ・スウェーデン・ノルウェーという7カ国の状況が表にあります。6歳未満の子どもを持つ家事・育児関連時間ということで、7カ国取り上げてみると、合計はそんなに変わらないです。おおよそ8～9時間。国の状況に応じて、生活環境や働き方によって8時間9時間で、夫婦が行っている全体の時間はそれほど変わらない。しかしながら、日本の状況を見てみると、夫と妻でずいぶん差があるということです。男性の家事育児への参加を考えてみた時に、鈴ノ木さんは2時間半の睡眠時間でお仕事をされていましたが、その間の家事は、どんな状況でしょうか。



▼鈴ノ木：僕の場合は、奥さんに頼っていたところが本当に多かったです。ただ僕の妻はミュージシャンをやっていまして、僕が音楽事務所にいた時の先輩です。今も音楽活動をしているので、彼女の音楽活動を優先にしようと僕が決めまして、彼女が音楽活動の時は僕が育児・家事を全部サポートするという形にしています。彼女には気持ちよくそっちの活動をさせてあげようと決めていて、毎日夕飯の時に、僕と奥さんと息子のスケジュールを自分で伝えるようにして、自分がこうしたいというものを優先しようというやり方をしています。どうしても僕の仕事が優先にはなりますが、2人の意見を大事にして、その時は漫画の仕事はやめて、家事と育児をやるという方法をとっています。

▼冨永：先ほど「ライフキャリアレインボー」をご紹介しましたが、お子さんの成長に伴いながら、ご家庭の状況は変化していくわけですし、夫婦それぞれの仕事の状況なんかも関わりながら、サポートしあいながら、ということですね。

▼鈴ノ木：そうですね。お互いのスケジュールを共有しているというのも大事かなと思います。

▼冨永：「コウノドリ」の中でも妊娠・出産の際、夫の理解が一つも得られないという場面がかなり登場しますし、最終的に産む、産まないという決断に関わっても、お父さんのほうは口出ししづらい状況が描かれていたと思います。そういう大きな決断をする時に、何が決定的な要因になるのかは、人それぞれだったかなと。

▼鈴ノ木：そうですね、それぞれ家庭の事情もありますし、そういうのはそれぞれかなと思います。

▼冨永：お父さんの長時間労働がネックになって、妊娠・出産にあまり協力できないからとか、逆に働いている女性が自分のキャリアを中断したくないからとか、今回は妊娠・出産については控えるという判断を行うなかで、子どもを産み育てるということが働くこととセットになっているというような状況が複数回ありました。その生活状況の中で子どもが産まれてくる、それを意識的に取り上げた、ということになるのでしょうか。

▼鈴ノ木：意識的に漫画にしようと思ったことはないですね。そこを意識して描こうと思ったわけではなくて、息子がいるということが、どれだけありがたいかということを感じてもらえたらいいと思ったのがスタートだったと思います。

僕、出産に立ち会ったんですが、それまでは、なんとなく妊娠してお腹が段々大きくなって、お腹も動くのですが、本当にいるのかなくらいで、出産の時に初めて息子を見た時に、本当にいたんだみたいな感じだけど、彼女が産気づいて、お産直前まで、こんなに苦しんでいる人間見たことないなと思って、ちょっと感動しました。一生奥さんを大事にしようじゃないですけど、彼女が幸せに暮らせるような協力がしたいなと思ったのは事実ですし、出産を描くなら、奥様ありがとうとか、そういう感謝の気持ちと息子がいることが当然じゃないんだということを読者に伝えられたらなと純粋に思っただけですね。だから連載をしようと思って始めたわけではないので、その短期連載の4回で、そう感じてもらえればいいなと思って最初はスタートさせたということです。

▼冨永：なるほど、ありがとうございます。愛読されてらっしゃる方もオンライン上で多く参加されていると思いますが、妊娠・出産というのは病気じゃないから産まれて当たり前というメッセージが繰り返され強調されるし、それが最後まで続いていくテーマ、メッセージかなと思いながら私は読ませていただきました。やはり出産の場に立ち会われたり、息子さんが日々成長していく過程と一緒にしながら、そのことを確認していった、ということになるのですか。

▼鈴ノ木：そうですね。自分が思っていたものと違ったんですよね、なんか戦場みたいな感じで、助産師さんと産婦人科の先生が一生懸命やって、生まれた息子が、なんか赤ちゃんって産まれて、ピカピカで「あっ、赤ちゃんだ」と思うけど、ぼく第一印象が「汚ったねぇな」だったんですよ。こういうのが出産なんだと思って。そこから綺麗にしてもらって初めて息子を抱いた時のことは今でも思い出しますし、必ず息子の誕生日には、その時の話を、もう13回、話をして、もう最近ではウザがられています。でもそれは毎年、息子には伝えようと決めていることなので、誕生日には息子が産まれた時の話はしています。

▼冨永：振り返っても、私が産まれた時の話を親にされたことはないなと思ったんです。必ず私たちは妊娠出産のプロセスを辿ってこの場にいるわけです。このプロセスを辿らなかったということはありえないわけで、それがいったいどういうものなのかということを多くの人たちが知らない。そういう意味でこの「コウノドリ」というのは、説教臭くなく、なるほど、こういう妊娠・出産のリアルな姿を理解できるので、大変多くの方に読まれてきたのかなと思います。

今、ご家族の話やお子さんとの関わりや、鈴ノ木さん自身がご家族に心配されながら、2時間半の睡眠で7年半の連載をされてきたということをお伺いしてきました。このことについて、3つくらいの質問をさせていただきたいと思います。

1つ目がまず「女性活躍や男性在宅ワークの推進というのは、どういうふうに考えていったらいいのか」というご質問です。質問されているご本人は、子育て期に男性でも女性でも誰かが子どものいる時間に在宅するほうが良いというふうに考えてらっしゃって、とりわけこの妊娠・出産・育児を行う働く女性たちも、一旦仕事を離れざるを得ないという状況があると。この方はまさに、在宅ワークとか、テレワークとか、そうしたものが進めば、女性の継続就労が可能になっていくんじゃないかと書いてくださっています。その裏側には、仕事と生活の場所が一緒になってしまって、振り返ると落ち着かない家になってしまったというふうにも書いてくださっています。あちらを立てればこちらが立たず、みたいな状況をどういうふうに考えたら良いですかというご質問ですが、いかがでしょうか。

▼鈴ノ木：どうなんですかね。女性は積み上げたキャリアを、出産で離れなければいけない。それで育児をしたりすると、長い間離れなければならない中で、在宅で仕事ができるというのは、僕は良いことだと思います。なんとなく仕事と育児が混合になるということを気にしているのは、おそらくお母さんであって、子どもは単純に近くにお母さんがいたり、お父さんがいたりというのは、良いように感じると思うんですよね。だから自分が申し訳ないと思う必要もないし、仕事がある時は仕事があるんだよと子どもに伝えれば、子どもはそれで感じると思いますし、プラスお父さんが育児休暇を取れるのであれば、僕はぜひ、会社が父親に向けてのサポートをしてほしいと思います。

育児はできる時間が決まっているじゃないですか、0歳の時は1回しかないし、1歳の時はもちろん一度しかない。その時間

を子どもとどう過ごすかというのは、1回しかできないので、ぜひ父親も一度育児休暇を0歳の時に味わえば、その後の子どもとの付き合い方が変わってくると思うんですよね。女性にも働くチャンスがもちろんあるべきだと思いますし、男性も育児に参加して、面白いなと思う機会があるようになれば良いかなと、仕事をしながら思っています。

▼冨永：ありがとうございます。実際、お子さんの育児というか、鈴ノ木さんの働き方の場合は、そんなに食・住がしっかり分離されているわけではないと思うのですが、身近なところで息子さんの成長を見てきて、良かったと思われたことはありますか。思い出みたいな。

▼鈴ノ木：思い出というか、かわいいなと思って寝顔を見て、保育園から小学校1年生になって、あっ、寝顔まだかわいいなと思って、それから上級生になって、寝顔まだかわいいなと思って、最近中学生になって見ても、まだかわいいなと思っています。

僕は本当に忙しかったので、息子にお願いするようなことしかありませんでした。例えば、どうしても原稿が間に合わない時は、息子に「悪いけど今日あそこの焼き鳥屋に1人で飯食いに行ってくれない」「ああいいよ」と言って、彼は1人で行きます。お店の人も何を食べるか知ってくれているので、彼はご飯を1人で食べて、スタッフ皆のお土産を買って仕事場に戻って来るみたいな。そういう生活だったので、それが良かったかは分からないですけど、彼の成長にとっては、僕は良かったと思っていますし、わりとそういうところは、まっすぐに育ってくれているので、ありがたいと思って、基本的に僕のほうが育てられている感じですね。

▼冨永：ありがとうございます。子育てをしてるというか、親も育っている、親も親になっているという。

▼鈴ノ木：そうですね。僕は子育てするのは初めてなので、合っているかどうかは分からないですし、そんな感じで、常に息子には教えてもらっていますね。

▼冨永：ありがとうございます。今のお話をお伺いしながら、私の父によく、「ずっと寝てればいいのに」と高校生くらいの時に言われたのを思い出しました。起きて口を開けばうるさいことしか言わないから、ずっと寝顔を見せとけと。

▼鈴ノ木：ちょっと髭とかも生えてきたんですけどね。その産毛をちょっと撫でて、いいねーとか、寝顔を見てますけどね。

▼冨永：面倒くさがられることはないのですか。

▼鈴ノ木：面倒くさがってますね、べたべたするので。

▼冨永：鈴ノ木家の日常が垣間見えたんじゃないかと思います。あともう2つ、このことについて、ご参加の方からです。「大人がよく女の子らしくしなさいと言いますが、正直不適切だと思います。ですが社会的にマナーなどは身に付けてほしいと思っています。これはどのように声がけしていけば良いと思いますか」という質問です。鈴ノ木さんのお子さんは息子さんなのですが、例えば男の子らしくしなさいというのはどういうことなのか、どのように声がけすればよろしいですかという質問です。

▼鈴ノ木：僕はあまりそういうことは言わないですけど、子どもの時はもちろん両親に言われました。「男のくせにいつまでもメソメソしてんじゃない」とか言うんですけど、僕からしてみれば子どもの時、例えばうちの両親が喧嘩をして、お父さんが新しい車を欲しいなと言った時に、ダメとか言われると、お父さんもけっこうメソメソしているんですよ。だから男もメソメソすると思っていたので、メソメソするなと言われると、子どもも意外としんどいですよね。だからもっと違うように育てられればなと思います。

これは僕の個人的な意見ですけど、僕は子どもと話をする時には基本的に子どもに良く喋らせるようにはしています。腹が立った時には子どものほうに喋らせ、何に腹を立てて、言うことを聞かないのか。特に男らしくとか女らしくとか言われると、子どもには分からないし、しんどいので、極力そういう言い方はしないでおこうと心がけています。自分が嫌だったので。

▼冨永：なるほど。男らしくしなさい、女らしくしなさいというのは、具体的にどういうふうにお考えですか。

▼鈴ノ木：そうですね、僕もすごく女々しいですし、メソメソしますし、泣いちゃいますし、女の人のほうがむしろ強いですしね。それは男らしいというのとはちょっと違うと思うし。

▼冨永：具体的に、例えばメソメソするなとか、元気にやれとか、わざわざここに女らしく、男らしくという言葉をのせる必要がないのかもしれませんね。

▼鈴ノ木：そうですね。そうしましょう。

▼冨永：はい、そうしましょう。このことに関わって最後の質問です。「職場や家族の関係の中で、とりわけ男性側からジェンダーというか、女らしくしなさいとか言われても、今さら驚かないけれど、同性同士の関係の中で少しぎすぎすしたものを感じてしまう。例えばママ友とかの関係の中で、とても居心地の悪い思いをすることがあると、最終的にそれでも自分は自分と割り切ればいいのでしょうか」というご質問です。

▼鈴ノ木：割り切ったほうが良いですね。それで合わない人だったらだんだん距離をおけば良いし、それができないのであれば、自分は自分だし、急には変えられなくても少しずつそういう方向に自分を変えていけば良いかなと思います。同性同士というのは、僕もそうですけど合わないと思ったら合わなかったりするので、それはもう自分らしくいってほしいですよね。無理は体に良くないと思います。

▼冨永：パパ友とかいらっしゃるのでしょうか。

▼鈴ノ木：2人ほどいますね。人見知りなので、お父さんの会とかに参加できない部分がありまして、照れくさいですし。皆言わないですけど、「コウノドリ」の作家さんというのがひしひしと伝わってくるし、僕ももともとバンドマンのダメおやじなので、そこらへんとかを勘違いされてしまうと、ちょっと行きづらくなって。仲のいいお父さんは、保育園の時に、保育園に迎えに行く前に公園で缶酎ハイを飲んでたお父さん。あっ、この人とは仲良くなれそうだと思って話しかけたら、仲良くなって。そんな感じなので僕自体は、皆さんと仲良くできない部分も多少あります。

▼冨永：なるほど。ご質問された方も、自分は自分というふうに割り切ればいいのでしょうかというご質問でしたが、鈴ノ木さん自身が、自分は自分で。

▼鈴ノ木：そうですね。そういう感じであると思います。

▼冨永：ありがとうございました。この方、職場や家族から性別に基づく押しつけみたいなものがあっても、もう驚かないという若干あきらめてしまっているという感じもあるのですが、例えば、一緒に住んでいればご家族の中で価値観の違いみたいなものもあるのではないかなと想像します。そんな時はどんな対応をされていますか。

▼鈴ノ木：それは、尊重はしますよ。ただ、間違っていると思う時は、なんでそう思うのかとは聞きます。例えば、今あまり言ってはいけないのかもしれないですけど、息子がおかまみたいな漫画を読んだ時に、そういう人のことを気持ち悪いと言ったことがあって、その時うちの奥さんがすごく怒ったんですよ。彼女にはそういうお友達もたくさんいるし、息子もそういう友達と実際仲良いですし。ただ、それとこれとは彼の中で一緒ではなかった。そういう時、うちの奥さんは息子に丁寧に説明していました。「いろんな人がいるし、何々君だって、彼は男だけど男の人が好きなんだよって。でもそれって変なことではないし、それを変だとお前が決めつけるならダメだって。いろんな人がいるんだと理解して、それでも納得いかないんだったら私に説明しなさい」みたいな感じで怒ったことがありました。それから彼は理解して、別に不思議だと思わなくなりました。

その時に、ちゃんと向き合わないとダメだという気はしました。だから、うちは基本的によく話をするというだけなんですが、それが良かったかなと思ってます。ただ、僕も奥さんも喧嘩をすることはありますし、そういう時は極力すぐ仲直りをして、またすぐ話せるようにしています。一度、喧嘩をした時に、うちの奥さんが無視するようになったんですよ。それで僕がお願いをしまして、朝の挨拶とか、おはようって言ったら、おはようって言ってくれと。挨拶すると、ごめんねって言いやすくなるじゃないですか。それはもう絶対的なルールにしてほしいと言い、決めまして、家族3人、「違うと思うよ」と話し合う関係ではあるかなと思います。

▼冨永：家族は言葉にしないでも分かり合えるみたいに言われたりしますが、実際はそうでもなくて、違う生き物ですものね。

▼鈴ノ木：言わなきゃ分かんないよ、ということですね。

▼冨永：そういう意味では、最低限、親しきなかにもなんとやら、ということですね。レイン坊から何か質問ありませんか。

▼レイン坊：質問というか、腑に落ちたなというのがあるのは、「コウノドリ」をずっと読んできて、一番最初に冨永先生が「説教っぽくない漫画だよね」という評価をしましたよね。なんでそういう漫画ができたのかなと考えると、説教というのは誰かが一方的に、これだめだよねっていうものであると。「コウノドリ」ってあくまで、主人公のサクラ先生も医療スタッフが寄り添って話を聞いて、理解したうえで、どうするのかを考えている。それってやはり鈴ノ木家で、お子さんの話をちゃんと聞いて、じゃあ旅行に行こうかというように、家族で話を聞いたり、お互いの仕事をどのように調整するかを話し合って、うちの家族はこうしようと決めている。そういう普段の姿勢から、この作品の独特の味わいというか、良さが出てきたんだなというのを、すごく今、腑に落ちて、感動に包まれています。

▼鈴ノ木：レイン坊くんありがとう。

▼冨永：一ファンからの意見みたいになりましたけど。うまいことまとめていただきました。私たちが何か表現したり、外に発信する時には、ロボットではないので、裏側にある経験というのが乗せられたり、その生活環境の中で、思われたことや考えられたことというのが反映されて行くのかなと、今のレイン坊の話からも思いました。

次に「コウノドリ」誕生の秘話ということで、実際、産婦人科医の方に聞き取りをしていることですから、それまで妊娠・出産なんてことを知らなかったということですよね。私もこの「コウノドリ」の漫画から初めて知ったことがたくさんありました。知らなかったことにすごく詳しくなられたのではないかと思うのです。その中で、どんなことを感じられたか、描いていくプロセスの中で、それまでそう思っていなかったけど、こんなことを考えたとか、こんなふうに思ったとか、ご自身の変化とかがあれば是非教えていただきたいです。

▼鈴ノ木：そうですね、シリーズを描くごとに、僕も本当に初めて知るようなことばかりで。「コウノドリ」の描きかたというのは、一つのシリーズが終わったら次のシリーズに行くっていう形で、その時に話を聞いて調べたりして、そのシリーズを描いていくという作業です。

最初は、逆子の帝王切開から始めたんです。うちの奥さんも最初逆子で、大回転術を受けるために入院するって言われ

て。でも回転させる直前で息子がおなかの中で戻って、その回転術はなくなったんですけど、どうして逆子で帝王切開になるのだろうというところも分かりませんでした。それならまずそこから1話目にしようということで読み切りの1話目にしました。無脳症は、産婦人科の先生に何もできない症例を出そうと言われて。例えば、18トリソミー（エドワーズ症候群）というのは、今は医療も進みましたし、7・8歳、それ以上生きる子もいます。ただ無脳症というのは大脳皮質形成不全症という病気で、それだけは産まれて数時間、もっても1日とか2日と言われ、そんなこともあるんだみたいなことですし、風疹の話も聞けば、自分も風疹の抗体検査をしなければだめだなと思って、風疹の注射を打った時の清々しさとかが自分の中にあって。それを漫画でどう伝えようかなというのを、一つひとつ分からないことを勉強していって、自分も体験したり、帝王切開を実際に見学させてもらったりしました。産婦人科の先生は妊婦さんが不安にならないように、明るく話しかけたりするのですが、やっていることはもう手術なので、筋膜を1枚ずつ切っていって、それを間近で見たら、すごいなと思って。ここでやっていることは僕だったら無理だなと思いました。だから一つひとつ感じたものをどう漫画に伝えられたら良いかなと思って描いています。そういう目で見たり、匂いで嗅いだものを伝えていけたというのは、本当に産婦人科のいろいろな先生に協力をいただいて、描かせてもらった漫画なのだと思います。NICUに行った時も、自分の知らない、自分の息子とは違う状況で産まれた、例えば早産で産まれてしまった両親の顔とか、赤ちゃんの姿というのは、本当に厳しいものでもありますし、子どもの成長に一喜一憂する両親もそこにはいます。それはこの漫画を描かなかったら見えることではなかったことを目にして、特にそれを物語にできたというのは、僕は本当に幸せ者だったなと感じて、32巻まで続けさせてもらったというのはあります。

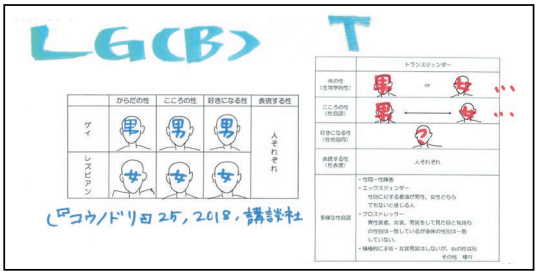
▼冨永：やはり鈴ノ木さんの視点からインタビューされて、先ほどの男らしさ女らしさに関わりますけど、産まない性としての男性の視点からなので、多分男性側も、より理解がしやすいというふうになっているのかなと。

▼鈴ノ木：男性誌でもあったので、もちろん男性の人に響いてほしいというのはあったと思います。

▼冨永：なるほど。ありがとうございます。まだまだ盛り上がりそうな感じですが、先に進ませていただきたいと思います。「コウノドリ」の25巻、トラック69で、彼女らの妊娠・出産をめぐって、同性愛がテーマに掲げられています。女性同士のカップルを含めてですが、その後にも多様な性というのをわりと意識的に取り上げています。取り上げたきっかけとか、取り上げてみてどうだったかということについて、お話しいただきたいと思っています。

▼鈴ノ木：取り上げたきっかけは、取材の中で、立ち合いもさせてほしいという時に、登場しているレズビアンのような2人というのは、けっこう来たりするという話を聞きまして。僕のゲイのお友達とかにも聞いたりして、子どもは欲しいと思うことはあるけれど、実際に育てることになった時に、子どもも成長するし、それをどう伝えたらいいのか分からないとか、ただ子どもが欲しいと思うことは、やっぱり多かれ少なかれあるということを聞いて、それだったらちょっと描いてみたいなと思ったんですよね。

▼冨永：なるほど、だから「同性のカップルが子どもを欲しいことは不思議なことではないからね」、というふうに鴻鳥先生が冒頭に言って、エピソードが始まっていくということですね。「コウノドリ」25巻の中で、レズビアン・ゲイについて、それぞれからだの性、こころの性、好きになる性が、ゲイの方が男でレズビアンの方が女、表現する性はまさに人それぞれ、というふうに「コウノドリ」の中で説明がされています。



もう一つ、トランスジェンダーについては、上からからだの性、こころの性、好きになる性、表現する性などなど、一度、私もこれいろんなところで説明する時に、一旦は便宜的に説明しようと思って並べてみるのだけれど、これでも説明しきれないというのが、しばしばなんですよね。

▼鈴ノ木：そうですよね。本当に幅広いし、僕が調べていた時は、Qというのがあまりなくて、トミー（冨永さん）に言われてみて、表現できないみたいな感じが、なんとなく僕の中でしっくりきました。LGBTQっていうと、それは本当に幅が広いので、説明は難しいと思いますよね。僕は別に漫画家ですけど、トミーみたいに大学の授業でどう説明しようかとなると、僕も説明できないと思います。

▼冨永：よく分からないものを理解しようとなると、分かりやすく説明されがちです。でもそれは完璧に説明できないもので、説明しようとしても説明しつくせないものがそれなりにあって、理解しようと思っても、理解なんてできないというものがある。それはセクシュアル・マイノリティとかLGBTとかだけではなくて、異性愛者同士も理解し合っているかというと、必ずしもそうではないと。

▼鈴ノ木：そうですよね。男女間でも理解し合っているのかと思う時ありますからね。

▼冨永：先ほどからこのトラック69の話をしていますが、取材の過程の中で、そういう話を聞かれたということでした。主な登場人物は、リョウちゃんとケイちゃんはパートナーで、キョウスケさんが精子提供するというふうな。詳しくは25巻をということにさせていただいて、こういう関係が登場するということです。先ほど鈴ノ木さんもおっしゃいましたが、リョウちゃんとケイ

ちゃんが、トラック69の中で、自分たちがレズビアンだという場面はないんですよね。しかしながら、客観的な状況から考えておそらくそうではないかと。これが実際の産婦人科の場面でもしばしば起こるということだと。

▼鈴ノ木：そういう話は聞きますね。

▼冨永：必ずしもそういう場面で性的指向が直接、明かされるわけでもないけど、おそらくそうなんじゃないかと。

▼鈴ノ木：そうですね、産婦人科の先生も想像でしかないことではあると思います。

▼冨永：この回の中では、そうした3者の関係を巡りながら、パートナーシップやLGBTについてあえて説明するとこんなことですとか、養子や里親の制度についてもご紹介がされています。実際このようなことがあるのかと、取材の中で思われたということですが、取り上げてみていかがでしたか。

▼鈴ノ木：難しかったというのもありますが、それはLGBTのシリーズに限らず、僕の漫画のスタンスとして「コウノドリ」という漫画は、皆に読んでくださいという漫画ではないと思っています。もちろんつらい経験をした人はいるわけで、そういう人に読ませる漫画でもないと思うし、ただ読んでもらった時に違うと思われると僕もつらいですし、つらい経験をした人全員に、そうだと思わせるのは無理ですが、極力そうだと思う人が多いような描き方をしたいという思いがあります。このLGBTのシリーズも直接、同性同士で赤ちゃんを出産したという方には会ってはいませんが、僕の想像の中で、僕の飲み屋の知り合いのゲイやレズビアンの方に話を聞いて、それを彼や彼女らが読んだ時に違うと思われないように、こんなことは無いとか思ってほしくないという思いで描きました。それを読んでもらった時に面白いと言ってもらったので良かった、とホッとしたというのが近いですね。

▼冨永：レイン坊がしゃべりたそうですが、いかがですか。

▼レイン坊：私(飛嶋)もこれを読んでみて、私も戸籍上は女性のパートナーがいる、この登場人物と同じような関係ですが、違うと思うことが一つもなくて。私たちは子どもが欲しいという段階ではありませんが、持ちたいと思った時にこうなるのかなという未来が描けて。すごく丁寧に取材されているし、すごくリスペクトされている。世の中には1人もレズビアンという名前の人も、ゲイという名前の人もいません。その人はその人の名前で生きている。個人のキャラクターと、でもそうはいってもレズビアンだったらこういうことあるだろうなという落としどころが上手くできていると思いました。一点気になったのが、家族の範囲をどうするかという話で、最終的にこの話では、精子提供者の方が、すこし距離を置いた形で終わるというエンディングになっていると思いますが、実際の家族では、提供者の方とも仲良くするというカップルもいますし、もちろんそうじゃないというカップルもいます。今回、距離を取るという話にした理由は、何かあったのですか。

▼鈴ノ木：僕の中で漫画は、読者が想像する先があると思っています。彼に一旦距離を置かれたとしても、この後、人として距離を詰めていくことはできますし、生まれた子どもが、自分の父親は誰だろうと思った時に、それを知ってやれる関係にこの3人が気づいてくれたらいいという願いもあります。キョウスケさんはピアニストで、ピアノしか教えられないけど、それができたらいいと彼の中で願望があって、その中で生まれてくる子どもと、女性同士のパートナーとの関係を、僕も読者と同じように先を想像して描いています。最初からそれがまとまっているということは、少し違うと思って、人間関係はマイナスから始まることもありますし、それがプラスに変わってくれたら良いという願いもあるので、あのようなラストにしました。

▼レイン坊：本当にそのような余韻を残したラストでした。選択家族と言って、血縁ではなくて、自分で自分の居心地のいい人間関係を作って、それを家族とするという考え方が広まっています。この3人が今後どうなってくのか、この3人がどういう家族を作っていくかとか、ある意味自由を持たせて描いたところがこの結末の理由だと納得しました。

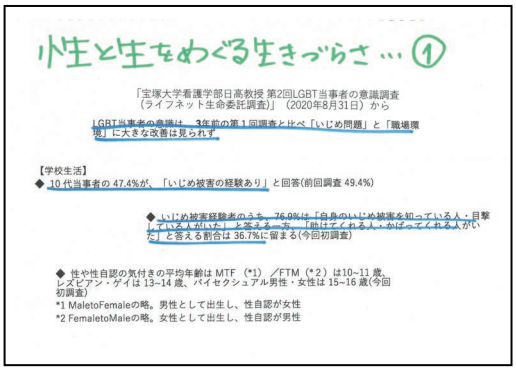
▼冨永：そういう意味では、このLGBTの回に関わらず、「コウノドリ」の全てのエピソードが、絶妙なタイミングの余韻を残して終っていますね。

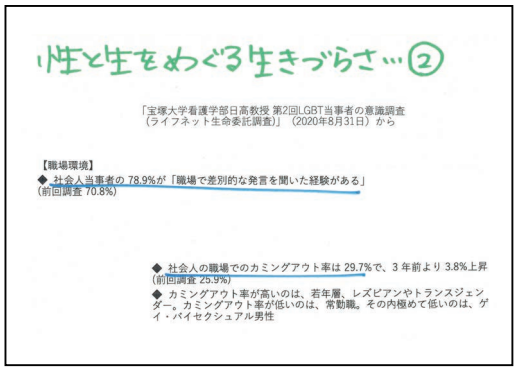
▼鈴ノ木：それは本当に心がけていたことで、できれば全ての話に余韻を残して、死産を迎えた妊婦さんも、何かしらその先に希望や光があったほうがいいし、そこには無いかもしれないけど、読者が読み終わった時にそれを感じられるくらいのラストを目指していたのは間違いありません。

▼冨永：そういう意味では、「同性愛」というのがトラック69に付けられているタイトルですが、この同性愛も含むセクシュアル・マイノリティの今後というのが、希望があるような余韻を残して、新しい関係の作り方みたいな話に展開していくように、読者としては思っていくわけです。パートナーシップ制度の紹介も、この回の中では行われていますが、例えば10年、20年前は、パートナーシップ制度など誰も想像しなかったわけで、そういった意味では日本の社会もずいぶん変わってきていると、希望も含めてですが私も思っているところです。

最後に、希望を確かなものにしていくには、まだまだいくつか課題があるともご紹介したいと思います。性と生をめぐる生きづらさとしていますが、これは宝塚大学の日高先生が行った調査です。LGBT当事者の意識は、3年前の第1回調査と比べても、いじめ問題も職場環境も大きな変化が見られていない状況があります。学校生活では、10代当事者の47.4%が、い

じめ被害の経験があると回答しています。したがってLGBT当事者の2人に1人は、いじめ被害の経験があるということです。また、いじめを受けているということを知っていたけれど、助けてくれる人、かばってくれる人がいたと答える割合は36.7%で、知っていても知らないふりをしているという人が、それ相当いるという状況があります。職場環境については、社会人当事者の78.9%が職場で差別的な発言を聞いた経験があると答えています。社会人の職場でのカミングアウト率は29.7%で、無理にカミングアウトする必要はないが、言いたくても言えない状況がまだまだあるということです。





「コウノドリ」で描かれるのは、妊娠・出産を軸にしながらそれらを取り巻く関係ということなので、学校や職場がクローズアップされることはないですが、こういうセクシュアル・マイノリティをめぐる状況について、鈴ノ木さんは、このデータを見て思われたこととかありますか。

▼鈴ノ木:個人的な意見になりますけど、例えば、パートナーシップ制度が、果たしてそれが今、良い制度なのかと問われると、分かりません。まずその制度を作る前に、土台をしっかりしないと作る意味が無い。職場での上司の理解であったり、男性への理解だったり、女性への理解だったりというのは、なんとなく僕の経験では、女性はわりと受け入れる人が多い感じがしますが、一般的な男性は自分に無関係だと思う。その考えをどうにかしないとパートナーシップ制度は意味が全くないと思っていて、学校でもそういった教育をしてから、最終的なものがパートナーシップ制度だと思います。まず理解をしてもらえるかです。

僕の中ではゲイの人でも嫌な人もいい人もいますし、それは障がいをもっていても、いなくてもいるじゃないですか。皆いい人ばかりじゃないし、悪い人ばかりではない。その中で、人としてどう付き合うのかというものが、しっかり教育だとか職場だとかであった時に、このまちで生まれて良かったな、育って良かったな、生活して良かったなと、そういう方々が思えるようになった時に、初めてパートナーシップ制度というのが意味をもってくると思っているので、わりと今の状況は順番が違うと個人的には思っています。だからそういうことをしっかり固めたうえで、制度を出すなら賛成だと思いますが、例えば欧米ではとか、杉並区ではとか、に影響されて出すパートナーシップ制度は意味が無いと個人的に思っています。

▼冨永:ありがとうございます。制度なので、それを確かな意味のあるものにしていくようなことも並行して行っていかないといけないということですよね。上から下に下りてきたような制度がいきなり現れたところで、これが本当に理解につながるようなものになっていくのかと。

▼鈴ノ木:以前トミーと話をした時に、本当はそんな制度はいらなかったという意見もあると聞き、すごく理解できたし、それは当然だと思います。ずっと密かに生活をしてきたのに、それを突然パートナーシップ制度みたいなことを言われるのは、少し違和感を覚えるのは当然です。そういった状況の中では、制度としてもしっかり、皆の理解もしっかりというように思います。

▼冨永:最後に一つだけ参加者の方からの質問です。LGBTQなど、性という考え方が多様化している中、「男女共同参画という言葉自体が、男女に性を限定しているようで時代に追いついていないように感じます。男女共同参画に代わる新しい名称についてご意見をお伺いできればと思います」というふうに、この方は男女共同参画という名称の変更が必要ではないかということですが、鈴ノ木さん思われることは。

▼鈴ノ木:「人間」でいいんじゃないですか。ざっくり。男だから女だからというふうな付き合い方というのは、段々少なくなってくると思いますし、男性も女性も能力のある人はたくさんいます。男とか女とか、これからどんどん少なくなってくると思います。ただ役割は、例えば出産やお産など、多かれ少なかれ出てくるので、それを男性・女性がどう理解してサポートして、今よりもっといい生活の方向に向いていってくれればいいと思っています。

▼冨永:そもそも、男女共同参画というのが日常語ではないですよね。日常的に「それは男女共同参画じゃないよね」とかは使いません。ご質問の方も書かれているように、英訳はジェンダーイクオリティなので、「ジェンダー平等」というのが直訳です。90年代後半に男女共同参画に関わる動きが始まった時に、なぜ男女平等とか、性差別禁止という言葉を使わないのか、という議論がありました。なんとなく分かっていて分からないような言葉になってしまっているようなところがあります。「コウ

ノドリ」を読んでいくと、私たちのライフは、冒頭でご紹介しました8つの役割を担いながら、複数で構成されていくわけですけど、まだまだ、男女で違うように経験されていると思います。そういう意味では、もう少しだけ男女共同参画というか男女平等という言葉は大事にしておかないと、問題がしっかり解決できるか不安になります。

漫画の中でも描かれていますが、妊娠・出産を多様な人たちが経験をしていて、その中で自分のキャリアや仕事とか、さまざまな生活環境や体のこととかに合わせながら、いろいろな葛藤を経験していきますよね。それも裏側にあるのは、男女間の違いで、それを解決するというのは、もちろん最終的には人というものに向かって行かなければいけないと思います。もう少し解決の道筋みたいなものを、しっかり議論したほうが良いのかなと思います。

▼鈴ノ木：そのきっかけとして、分けることに意味があるって、面白いですね。

▼冨永：だから、日本女性会議です。

▼レイン坊：お二方、素敵な時間をありがとうございました。これで第1部は終了します。

【第2部】

▼司会（レイン坊）：この分科会では、最初に第1部で話したことの振り返りを行います。その後で、皆さまからお寄せいただいた質問をもとに、トーク形式で、家族やパートナーシップ制度などについて話していきます。では、第2部からご覧の方もいらっしゃいますので、自己紹介をお願いします。

▼鈴ノ木：こんにちは。モーニングという雑誌で「コウノドリ」という周産期医療の漫画を連載していた鈴ノ木ユウです。第2部もスマイルで頑張ります。よろしくお願いします。



▼冨永：はじめまして。山梨県都留市にある都留文科大学で働いている冨永貴公と申します。ジェンダー・セクシュアリティに関わる学校以外の場所における教育や学習を研究テーマにしています。今日は90分という限られた時間ですが、参加者の皆さまの声を質問という形でいただいていますので、鈴ノ木さんにどんどんぶつけていきたいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

1つ目は、第1部とも重なる部分がありますが、女性同士のカップル、多様な性や多様な家族というのが、この「コウノドリ」の中では複数描かれていきます。その中でも女性同士のカップル、多様な性を描かれた理由と、感じられたことを鈴ノ木さんから、お話しいただけますでしょうか。

▼鈴ノ木：最初に話を描こうと思ったのは、午前中と重複しますが、産婦人科の先生に、妊娠した時に友達が毎回付き添いで来て、妊婦検診を受けて、そして立ち合いも一緒にさせてもらえませんかということが、多々あるという話を聞いて。先生はそこで「レズビアンのカップルですか」とは聞かないけれど、おそらくそうなんじゃないかというので、それを漫画に描けたらいいと思いました。それがLGBTを調べようと思ったきっかけにもなっていますし、上手に描けたらいいと思って描いたシリーズです。

▼冨永：ありがとうございます。描かれる前はセクシュアル・マイノリティとか、そういったテーマをよくご存じではなかったんですか。



▼鈴ノ木：友人は多かったですが、あまりそのように分けて付き合ってはいなかったです。たまたま友人の彼が、男性が好きとか、ゲイであるとかいっても、それはただの友人として付き合っていたので、彼が性的マイノリティーとか、マジョリティーではないとかといった付き合い方はしていませんでしたから。そういうふうに分けられているということも気づかなかったというのが正直なところです。もちろん彼らは彼らなりに、家族に言えないとか、不安や悩みを抱えていたけれど、そういうふうに区別されているんだと実感したのは、このシリーズを描こうと思ってからですね。

▼冨永：身の回りに当たり前に、セクシュアル・マイノリティ、レズビアン、ゲイ、多様な性的指向の方もいらっしゃって、漫画をとおしてご自身もさまざまなことに気づかれていったということでしょうか。

▼鈴ノ木：そうですね。実は僕が結婚した時の証人になってくれた1人もゲイの方ですし、それがどうこうということで付き合っていたわけでもないですし。本当にお世話になった方なので、結婚の証人の1人になってくれませんかという話をして、「もちろんよー」と言って書いてくれました。それが「コウノドリ」にも出ているヒトシさんという人のモデルです。「勝手に殺さないでよー」って言われたけど。

▼冨永：なるほど、モデルになられた方もいらっしゃるということで、ヒトシさんって誰だという方は「コウノドリ」25巻をぜひご覧ください。

25巻の内容については細かく話しませんが、紹介されているレズビアン、ゲイ、バイセクシュアル、トランスジェンダーも含めて、あくまで選択されるアイデンティティーです。取材をされた産婦人科のお医者さんも、おそらく「そうであろう」と思って対応されていたので、客観的に「あの人とあの人はレズビアンだ」というのは、こちらから強制的に押し付けるものでもない、ただ妊娠・出産ということに関わってみると、妊娠されている方ではない女性が立ち合いをしたいと希望するとか、そういう現場が生まれてきているということでしょうか。

▼鈴ノ木：そうですね。漫画の中では、どうせ分かることだと思うので、という言い方をして説明をしていますが、そのほうが読者の人に伝わりやすいし、話も書きやすいということでそうしました。でも、なかなか自分たちから先生に知らせるということは、普段はあまりないと思います。

▼冨永：なるほど、この後のパートナーシップ制度の話にもだいぶ関わってきますが、医療とか公的な機関において、2者間の関係とどういうふうに向き合っていくのかというか、例えば産婦人科の先生の中でも、結婚している夫さんじゃないとダメだという反応もあり得るんじゃないかと思うんです。

▼鈴ノ木：それは産婦人科の先生によると思います。パートナーシップ制度の良いところは、例えば手術が必要だった時に説明を受けられるとか、良い点もあるとは思います。逆に良い部分でない点、結婚とはちょっと違う形というのは、お葬式に出席させてもらえないとか、遺産の件とかもあると思います。10年、20年暮らしていた夫婦同然の方がそういう扱いを受けるということは疑問な点もありますし、そこをだんだん良いものに変えていってくれたらと思っています。

▼冨永：ありがとうございます。午前中も話題になりましたが、「コウノドリ」という漫画の特徴として、命に関わる事柄というのは説教臭くなりがちですが、全然説教臭さがない。あと絶妙な余韻を残しながら、新しい可能性とか希望に満ちた未来とかも予感させるような終わり方をしています。鈴ノ木さんのリアクションの中から漫画の特徴として、なるほど、そうかというふうに、午前中は共有をしました。この「コウノドリ」の中にも出てきますが、息子さんも「コウノドリ」を最近は読まれるようになったとか。

そのことについて3点の質問があります。多様な性にも関わりますが、1つ目、「保育士として働いている者です。性の多様性について、子どもたちに伝えることはありますか。またどのように伝えたらいいですか」というご参加の方からいただいた質問です。いかがでしょうか。

▼鈴ノ木：保育園の先生で、話を分かりやすく説明しなければいけないというのはあると思いますが、話をそらさず、性というものに対しての疑問、例えば自分がどうやって生まれてきたのでしょうか、みたいなことがあったとしたら、素直に話してあげたほうが良いと思います。ちゃんとした説明をどうできるかです。例えば、「生まれてくる道」というものが、うんちが出るところとおしっこが出るところの間にあって、その道が大事なものなんだと、子どもに分かり易い説明を大人がまっすぐにできれば、子どもはそれに疑問を持たないで、性というものを自然に理解できるようになるのかもしれないです。実際、難しいとは思いますが、ちゃんと向き合って話をするようにしたらいいと思います。

▼冨永：なるほど。息子さんは読まれてみて、お父さんが描かれた漫画について何かリアクションはありますか。

▼鈴ノ木：「けっこうおもろいやーん」って言います。「やるやーん」って。

▼冨永：そういう意味でも、とても難しいことを難しいまま描いている、賛否両論あることに下手に決着をつけるというよりは、こういう見方があって、ああゆう見方があってというような。それが素直に入ってくるポイントであるのかなと。

▼鈴ノ木：そうかもしれませんね。でもお医者さんの話なので、大抵のお医者さんは、こういうふうな選択をして、これを患者さんに説明をして、これでいきましょうって言いますけど、患者さんには患者さんの環境もあれば、生活もある。僕の場合は、押し付けがましくなく、お医者さんがどう患者さんに説明できるかなっていうのを目指して描きました。実際のお医者さんは、もちろんリスクのある人には説明しますが、リスクの無い人には丁寧に説明できる時間が無いんです。妊婦さんってリスクがあろうがなかろうが不安なんですよね。漫画なので、そのリスクが無い妊婦さんでも不安な部分は漫画で説明できればと思って。実際の産婦人科の先生も、本当は説明したいけど時間が無いという中で、「産婦人科の先生冷たいよねー」という話をよく聞きますけど、それはリスクが無いから説明する必要が無いわけで、ただ妊婦さんは皆不安で、その妊婦さんが不安な部分を解消できる漫画でもあったらいいなという部分はあったのかもしれませんね。

▼冨永：「コウノドリ」という漫画が、この言葉が適切か分かりませんが、教材的にもなっていて、多くの方々が愛読をされているのだと思います。今度は「自分がLGBTだと意識した子どもたちにどう対応したら良いですか」という質問ですが、いかがでしょうか。

▼鈴ノ木：きっとそういうのって、これから作っていかなければいけないことではあると思います。まず、当人には、おかしなことではないし、間違ったことではないとちゃんと知らせなければいけないし、周りの子にも伝えなければいけない。子どもに説明するというのはすごく必要なことです。それをどう説明するのかというのは僕の仕事ではないけど、教育の面でも、保育

園・小学校・中学校でしっかりやっていく必要があると正直思っています。

▼冨永：「性や性自認の気づき」の平均年齢というのが調査データにあります。男性として出生し性自認が女性である、あるいは女性として生まれて性自認が男性である人は10〜11歳、レズビアンやゲイは13〜14歳、バイセクシュアル男性・女性は15〜16歳。全体をみても、小学校の高学年ないし中高生の時に、そうした性や性自認に気づいているということです。とりわけセクシュアル・マイノリティだけではなく、異性愛者も含めてですが、自分が何者かというのを問い直す状況において、自分が他の人と違うとか、おかしいんじゃないかとか思う経験とかが、ちょうどその年齢に重なるということになります。可能な限り、それがおかしなことではないというメッセージを発信できればいいですよね。

▼鈴ノ木：そうだと思います。だから先ほど出た僕の結婚の証人になった方は、もう70歳くらいなんですけど、やはり10代の時から自分はおかしいんじゃないかとずーっと思っていて。女の子と付き合ったこともありますし、「子どもも実はいるんだ」という話も聞きました。だけどやっぱり「自分はちょっと変なんじゃないかな」と感じながら思春期というか多感な時期を過ごしてしまったというのは聞いていたので、大人が何かしら違うサポートができれば、もっと違ったのかもしれないと思いました。どんどんそうなってくれたらいいかなとは思いますし、なってるとは思うんですけどね。

▼冨永：そうですね。実際、なんだか悪者のように扱われがちですけど、保育の現場でもそうですし、学校の先生たちも意識的に取り組まれていることがずいぶん増えてきている状況でしょうか。

最後に「とりわけセクシュアル・マイノリティだと、他者に承認をされないという経験を重ねていくので、自傷行為や自殺率が高いというデータもあって、そうした支援についてどのように考えられますか」という質問をいただいています。今までのことと関わりますが、鈴ノ木さんのお考えをお話しいただけますか。

▼鈴ノ木：それが理由で自殺してしまうというのは、本当に人生がもったいないし、受け入れてくれない場所にいる必要がないと思います。できれば行政だったらそういう場所を作ってあげても良いと思います。そういう人が集まるような場所でもいいですし、理解してくれる場所でもいいけれど、自分の居場所をちゃんと作ってあげることが大事です。自殺してしまうのはもったいないし、なんか寂しいですよね。

▼冨永：そういう意味でも、「コプリズム」という当事者らが立上げた団体が、この山梨県にあるわけですが、そうした団体が第3の居場所というか、家庭にも学校にも居場所がないという状況にある子どもたち、大人に居場所を提供することができるのかなと考えますが、レイン坊いかがですか。

▼レイン坊：そうですね、私たちの団体の交流会は特に子ども向けというわけではありませんが、東京の例ですが、ユースに特化した、大人はスタッフ以外には誰も入れないということで、安全性を保っている集まりの場、にじーずという団体があります。また日本の各地で、「にじーずin○○地方」という形で、最近その輪が広がっているので、やっぱりユースにはそういう居場所があるといいなと思います。私はもう大人ですけど、大人であっても話題を常に考えるんですよね。好きな芸能人の話でも、私は戸籍上女性ですが女性が好きなので、女性アイドルとか女優の話をしてしまうんですね。でもあんまり言うと「えっ、女性が好きなの」というふうに言われたらどうしよう、そういうつまらない不安で、なかなか本当の好きな俳優の話ができなくて、仕方ないから「大泉洋さんが好きです」とか言います。彼もそれなりに好きなのですが。そういうふうにしてごまかして合わせてしまうみたいなところがやっぱりあるので、ユースにとって、そういう些細な会話を含めて何でも話していいんだよっていう場所があるのは、すごく救いになるんじゃないかと思います。

▼冨永：もう一つレイン坊、先ほど鈴ノ木さんにも質問しましたけど、自分がLGBTだと意識した子どもたちにどう対応したら良いかということで、基本的にはおかしなことじゃないんだよ、ということになるかと思いますが、実際に自分がLGBTだと意識した子どもたちに向き合っている人たちに向けて、何かありますか。

▼レイン坊：ここで問題になるのは、意識した子どもたちが誰に相談をするのかということです。カミングアウトされたらまず話を聞いて、「この人はこの属性です」と決めつけるのではなくて、まず何に困っているの、何が嫌なのということを聞き出して、そこで現実との落としどころを一緒に探していく作業をすることが大事だと思います。あと誰に言って良いのかということをちゃんと確認をする。親にも言ってない場合、親に言っているが先生には言ってない場合、いろんな場合があるので、そこを確認しながら一緒に考えて行くのが大事だと思います。ただ、LGBTだと意識した子どもは、ほとんど大人には言いません。そういう意味では、先ほど鈴ノ木さんが「周りの友達にも伝えていかないといけないよね」っておっしゃったように、本人が言うかは関係なく、こんな生き方があってね、こういう人もいるんだよ、男性同士でも家族になれるし、女性同士でも家族になれるし、生まれた時の性と違う生き方をする人生もあるし、もちろん恋愛しない人生もあるよっていうのを、真摯に伝えていくということが必要なのかなと思います。そうするとお友達にそういう人がいた時に、「なんだお前そうだったのか」くらいに終わる、というふうになるんじゃないのかな。最初の保育士さんの質問の話になると、私は絵本で小さいお子さんにLGBTについて説明するというような講演を何回かやって、好評をいただいています。そういう絵本を読み聞かせするのも良いし、保育

園に1つ2つ置いてみるというのも、まずは最初の一歩としていいんじゃないかと思います。

▼鈴ノ木：素晴らしいですね、レイン坊ちゃん、勉強になります。なんか僕、子どもだからとかいうのがすごく嫌なんですよ。だから息子には基本的に、とりあえず自分で考えて、やりたいことはやってくれと言う。僕は両親に基本的に周りのことを全部やってもらって、大人になって気づいたら何もできなくなっていて、それがすごく嫌だったんです。物静かな子で、1人じゃ何にもできないの、みたいに言われるのが本当は嫌だった。自分の子どもには、例えばおもちゃが欲しいと言ったらおもちゃ屋に連れてくだけなんですよ。会計はやるけど、どんなものが欲しいのか、どんなおもちゃが欲しいのか、自分の希望は店員に話してくれって。そうすると自分で考えるようになるんですよね。だから今、うちの子は自分の意見もちゃんと言いますし、皆がそうだと言っても、自分が違うと思えば違うと言えます。そういうことができれば、皆で「変だよなぁあいつ」って、固まることはないと思うんです。何が怖いって、集団になって、何か違うと思う人を皆で攻めたりするのは、すごい残酷。一人ひとり、オレはこれ違うと思うよって、1対1で言えるんだったら、人として話ができるけれども、複数対1人になると、どうしてもそこには公平さはなくなってくるので、そこに向かっての教育だったり、指導だったりというものができればいいかな。

▼冨永：鈴ノ木さんがおっしゃったように、自分で気づくとか、自分で考えるということを支えていく。これはダメで、あれはダメでということよりも、むしろ自分の身近な問題として考えて気づいていくというような方向性が深められていく必要がある、ということをお話しいただきしました。さっきレイン坊からもお話がありました、絵本とかを自分で手に取れば、何か考えるきっかけになるでしょうし、絵本よりは漫画が良いという方は「コウノドリ」25巻を、ぜひ全国の学校に置いてください。漫画のほうが堅苦しい文章を読むよりも入ってくるということですね。あるいは映像とかでも。

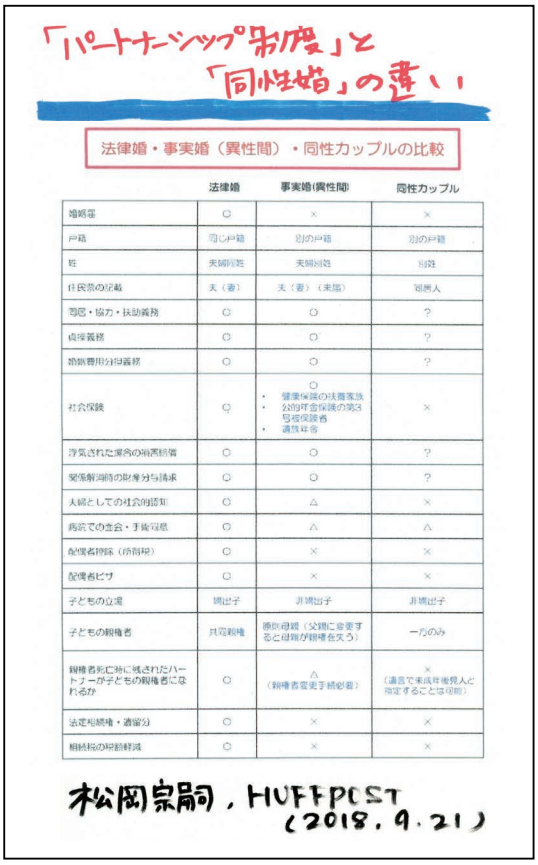
▼鈴ノ木：それはあると思いますね。絵本も含めて本当にそうだと思います。

▼冨永：続きまして、パートナーシップ制度はどういった意味や意義を持っているか、続けてお話をいただきたいと思います。例えば、生や性の多様性の実際ということで、山梨県内でももうすでにこのパートナーシップ制度の導入決定、あるいは検討しているところがあるということでよろしいでしょうか、レイン坊さん。



▼レイン坊：甲州市が導入するということを市長が表明しています。甲府市では、議会でパートナーシップを導入してくださいという請願が採択されています。あと個々の議員が、県議会・各市議会で質問をして、今後検討していきます、というような回答を得ているところもあるかと思います。

▼冨永：パートナーシップ制度について、現況をスケッチブックでお示ししておりますが、渋谷区とNPO虹色ダイバーシティがまとめているものです。10月11日時点で、130の自治体がこのパートナーシップ制度を導入しています。これで人口カバー率が41.1%とほぼ半分に近くなっています。さらに2,277組がパートナーシップ制度を利用しているという状況があります。鈴ノ木さんが「コウノドリ」の中でも描かれておりますが、パートナーシップ制度とは法律婚、いわゆる同性婚とは異なるものであることは、すでに皆さんご存じのとおりです。この法律婚、「パートナーシップ制度」と「同性婚」の違いについても、一覧でお示ししております。



▼冨永：パートナーシップ制度というものが独り歩きするような形は良くないと思うのは事実で、その制度を作りましょうといった時に、本当に当事者たちが良かったなと思うような形を作らないと。無い方が良かったというものだったら、意味がないと思うので。もちろん必要な部分はあると思うんですね。そういった制度があれば教育でも説明しやすくなると思います。特に、ちょっとずつ形を変えてでも成長していくようなパートナー

シップ制度を始めるっていうふうになれば、改善するものは改善して、独自の制度になっても良いと思います。そういう器用さを日本人は持っているので、その場所に合った制度のほうが良いかなと思います。東京は東京、地方は地方。地方というのは、それが住みづらくなってしまうということにも直結すると思います。だから、そういうことにどう対応するのかというところまで考えた制度でないと。人が住みづらくなってしまうなら作る必要はないと思うので、より良く住みやすくなったねっていうものを目指せるなら良いと思っています。

▼冨永：なるほど。例えばこのパートナーシップ制度に登録して宣誓したいけど、役所で働いているあの人、向こう三軒両隣だしな、とか。

▼鈴ノ木：そういう状況が、東京と違って起こりうるんで。

▼冨永：十分にあり得ますよね。若干柔軟な、その地域の実情に根差したような形のパートナーシップ制度のあり方があると思います。

▼鈴ノ木：そうですね。それが甲府の、甲州でもどこでも良いですけど、地域のパートナーシップ制度の模範になれば素晴らしいと思います。

▼冨永：レイン坊からもこのパートナーシップ制度について何かありますか。

▼レイン坊：まず導入することの一つの意義は、「地方にはいない」と思われてしまうことがいまだにあるので、それでも作ったということは、「いるかもしれない」という考えを、皆さんの中に呼び起こしてもらうことが大きな意義かなと思います。でも、お二方が話したように、役場の人が近所に住んでいて、その人にばれるのはどうかなと思います。私もやっぱり、そのあたりは不安だと考えているので、なるべくプライバシーを守ったりとか、もしくは導入と並行して、そのパートナーシップ制度が活かされる場、医療や役場など、いろんな場所があると思いますが、その職員たちにも、そういう市民がいるんだよということをちゃんと伝えていってほしいです。証明書を提示した時に、なにこれとか、いたんだとか、そういう反応が無く、スムーズに他の異性愛カップルと同じように扱ってもらえるような体制を同時並行で整えてもらえれば、私たちも安心して、導入して良かったという制度になるのかなと思いました。

▼鈴ノ木：必要ですよね。親にも知られてないのに、役所の人に知られたらかわいそうですもんね。

▼冨永：だから、情報をどれくらい守った形でということももちろんですね。

▼鈴ノ木：それは本当に必要だと思います。

▼冨永：全員がカミングアウトしないといけないという社会は、息苦しいわけですから。多くの異性愛者が「私は異性愛者だ」とあちこちで言って回ってないわけで、セクシュアル・マイノリティだからといって、自分がセクシュアル・マイノリティだと言って回らないといけないというのは、これはまた違う息苦しさが。

▼鈴ノ木：だから本当は、そんな制度が無くても生きやすいのが一番いいんですけれどね。

▼冨永：本当ですね。最終的にはなくなるという形も想定しながらかもしれませんが。パートナーシップ制度を巡っては、例えば先ほど病院の話もありましたが、病院によっては、公的な婚姻関係になくても面会が可能だったり、病院ごとに対応が違っていると思います。ただ、制度そのものが私たちの意識を変えていく教育的な側面がかなりあるだろうなと思うんですけど。

▼鈴ノ木：それは間違いなくあると思います。

▼冨永：パートナーシップ制度があることによって、病院の関係者もそうですし、行政の窓口の方々もそれまで想定しなかった事柄というのが、目の前にいる人の裏側にはあるということを、想像できるようになる。そういう社会的な教育の役割を制度が果たしていくということもあるかもしれないですね。

もう一つご質問があります。「多様な性や家庭を築くにあたり、現在の政府の姿勢についてどう思いますか」。

▼鈴ノ木：政府？そこまでだとちょっと…。政治家の中にもすごく理解のある人もいますし、僕の住んでいる中野でもゲイの方が議員になっていたりします。政治となるとそれだけが全てっていうわけでもないですから、これからの日本、そういう問題も含めて取り組む。僕はやっぱり子どもが好きなので、子どもがどう幸せに育つかということに対して、多様な形が増えてきたらありがたいと思います。例えば、極端な話ですけど、特別養子縁組も含めて、同性カップルでも、間違いなくそれを普通として受け入れるようになれば、子どもはより幸せになると思います。男女の夫婦でなければ、というのは頭でっかちなことであると思うんですよ。だからそういう形に政治も向かっていってくれれば、子どもがよりよく幸せに育つ環境が与えられるチャンスでもあるかと思います。また、そういう子が、虐待を受けることも無いとは限らないので、児童養護施設も含めてしっかり観察するような社会を目指す政治の流れが必要。僕の知っている同性カップルで、長くいる夫婦と変わらないような人たちというのは、本当に穏やかですし、ここで子どもが育っても、曲がるはずがないという確信をもって言えるような2人であったりするので、そこは政治も協力して、子育てを含めた、性的マイノリティの方も一緒に参加できる形があってもいいと思っています。

▼冨永：ありがとうございます。レイン坊も何かありますか。

▼レイン坊：甲府市で同性パートナーシップを市でもやってくださいというのを議会に出して、全会一致で賛成をして、進めて行くように行政に伝えますね、という形でまとまったんです。やっぱり何か声を一つでも届けて、コミュニケーションを政治家の皆さんとも取っていくことも必要なんじゃないかな。政治家の人も何かを良くしようと思ってなったと思うので、困っているならじゃあ力になるよって、動いてくれる方も絶対いらっしゃると思います。そういう政治家との対話もしていく必要があるんだろうなというのを私自身も痛感しています。

▼冨永：先ほど、「ライフキャリアレインボー」をご紹介しましたが、やっぱりどの役割においても、人間が人間らしく、尊厳を持ちながら発達していくということなんだと思うんです。私たちは働きながら自分を発達させて成長させていくわけですし、それは親になりながら、家族を作っていくということも、私たちの一つの成長や発達の大変大きな機会の保障なんだと思います。それをごく一部の人たち、あるいはごく一部の性的指向の人たちだけに保障するというのは、問い直される必要があるでしょうし、そういう不公平さというのがあっても良いのか、というふうな声をあげていく必要がまだまだあるだろうと思いながら、やはり選挙に行かないとしょうがない。

最後の質問です。「私は10年間、同性とお付き合いしていました。その中で彼女の子どもさんと一緒に生活をしていましたが、学校や地域の行事では子どものことを考え、恋人としてではなく、友人としてしか参加することしかできなかったのが辛かったです。今後の社会で同性カップルは恋人関係など隠すことなく生活を送るには、周囲の理解と何が必要でしょうか、やはり学校で教育の一環に入れていただくことが一番なのでしょうか」。先ほどのことと少し重なってくる部分がありますが、周囲が理解することと、他には何が必要か、教育か、という質問です。

▼鈴ノ木：間違いなく教育が必要です。本当にそれ辛いと思うんですよね。パートナーに子どもがいた時に、同性だから家族とも言えず、友達ってことで、周りを気にする状況が、とても寂しかったんだろうなって思います。それをどうしていこうというのは時間がかかると思うんですけど、教育は間違いなくその一つではあるかなと思いますね。あと、さっきも言ったように、住んでいる場所によって、方法って変わってくると思うんですよ。例えば地方なんかですと、近所とのつながりが強いし、パートナーですら黙っておこうと言われてしまうことも出てくる。それが東京では、地方より説明はしやすいとは思うので、教育と皆の理解をどう進めて行くのかは時間がかかることですけれども、大人をどう教育するかという、それも教育なんでしょうかね。だからすごく難しい質問だなぁ。

▼冨永：難しい質問です。地域の実情を踏まえたうえで、私たちはなんだか普遍的な価値とか、そうしたものを抱えがちですけど、やっぱりこの場で生きている訳なので。地域の状況とか、そこで求められていることというのも、調整を取りながら、実情を踏まえた教育や制度の設計を行っていく必要があるということでしょう。ご質問をいただいた方のご指摘ももちろんですが、何が必要なのか議論していくという場の設定も、細かい単位での地域ごとに必要になっていくのかなと思います。

第1部でもご紹介し、先ほど振り返りの時もご紹介しましたが、宝塚大学の日高先生の調査によると、当事者の25.1%が「アウティングされた経験がある」というふうに回答をしています。身近なところで自分の性的指向や性自認というのをカミングアウトした場合、それを第三者にばらされてしまう、という経験を当事者の4人に1人はしている。アウティングした側は、「だって自分に言ってくれたんだから他にも言っていいだろ」くらいの感じで対応しているかもしれません。しかし、性的指向や性自認がなぜこんなに問題かというと、私たち個々の人格や尊厳に、とても心の柔らかい部分で関わっている事柄で、あなたには話せるけども、社会一般に話したいわけではない。そういう意味では、公的な行政機関などでも先ほどMTF・FTMの説明は申し上げましたが、MTFの51.2%、FTMの38.8%が「体調不良でも医療機関に行くことを我慢した経験がある」というふうに答えています。やっぱり病院に行きたくても行けない状況というのは、心と体のバランス、あるいは健康に関わってくることなので、大変大きな問題だと思います。そうした行政機関や医療機関はもちろんですが、何らかの対応というのがパートナーシップ制度をきっかけとしながら、当該自治体での議論を深めていくということが可能かと思っています。

最後にこの調査データからですが、確かに「コウノドリ」の希望ある余韻と同じで、若干世の中の変化の可能性も感じられているところです。当事者の約7割が「5年前に比べて、性的指向や性自認の多様性が尊重される世の中になってきている」と感じているというデータがあります。過日行われたオリンピックなどを契機に「LGBTへの認識や制度の変化を期待」している声が約8割でした。最後に当事者の約6割が「同性婚（異性婚と同じ法律婚）」を望んでいる、特に若年層にその傾向がより顕著だというデータがあります。確実に世の中が変わっています。パートナーシップ制度を20年前に誰が想像したでしょう。確かに同性婚を求める声はあったけども、人口のほぼ40%をカバーするほどの広がりを見せるとは多くの人は想像しなかったと思います。そういう意味では最後のまとめに関わってきますが、今私たちは子どもたちにどんな社会を手渡していきたいのかというのが、この議論ではとても大事なことかと思います。教育は基本的に先行する世代が次の世代に何を伝えたいかということだと思いますので、このパートナーシップ制度あるいは性の多様性について、「子どもたちにどんな社会を手渡したいと思いますか」を、鈴ノ木さんへのまとめに関わる最初の質問にさせていただきます。

▼鈴ノ木：子どもが大人になるというのは、産まれる場所は選べないので、ほとんどの人が多感な時期にその場所で過ごさなければいけなかった時に「このまちで生きてて良かったな」というか、「あそこで大人になって良かったな」というふうな場所を目指すのが大事なことだと思います。そのあとの人生はそこで決まったりするので、良い意味で「本当にあそこで生まれ育って良かったな」という場所を目指すというのは大切なことだと思います。例えば、「今思えばLGBTや性的マイノリティに関してすごい進んでたな」と思うような場所だったら、同性婚を目指しているという若年層の人が増えてることが、だんだん自然になってくるというか、そんな場所を目指せれば、子どもも本当に良い子になると思います。いじめだとか、自殺だとか聞くのが一番しんどいです。だからそういうことが理由でいじめられるとか本当にくだらない話なので、大人がどんな場所を目指せるように子どもを育てるのかが、これからの課題になってきて、その子どもがまた次につなげてくれるという、ちょっと時間はかかりますが、そういうものを目指せればいいと願っています。変かな？

▼冨永：全然変じゃなかったです。なぜなら、例えば、結婚をしたいと思わない若者が増えているんじゃないかと思うんですね。ただセクシュアル・マイノリティでは、とりわけ若年層が結婚したいと思っている、あるいは同性婚を望んでいる状況があります。家族形成の機会がそもそも無い、自分は家族なんか作れないと思って自分探しをしていた10代の前半から、パートナーシップや同性婚の裁判なんかを経験してくると、社会の確実な変化を身近に感じて、生きてていいんだなと思える社会になってきているんだと思います。

このことに関わって、2つほど質問をいただいています。「最近になってLGBTQの話題をよく聞くようになりました。その中で私個人としては同様に好意的に考えておりますが、世間ではLGBTQに対してあまりよく思っていないように思う。そこで質問です。LGBTQに対して受け入れられないなというような状況を変えていくために、どんな活動をしたらいいですか」、多分なんらかの活動をされたい方だと思うのですが、鈴ノ木さんから、こんなことやってみたらどうですかみたいなことがあればどうぞお願いします。

▼鈴ノ木：たいてい理解できないのは男性のほうが多いと思います。僕の個人的な意見ですが、普通の友達と何ら変わらないです。そういう友達がいないから怖いとか、ゲイの人だというと、自分に直接関わって来るんじゃないかとか勘違いしていて、ゲイの人も好みはあるし、好きなタイプはあるし、女性と男性であまり変わらないし、だから人とどう付き合うのかという入り口の部分で勘違いしている人が多いので、人としてどう付き合うかというのが大事だと思います。例えば部長さんとか会社で高い位置にいる方が、人には言えず隠しているけど、優しいし、部下にも信頼があって、自分は本当はゲイだけど言えないんだという苦しさももちろんあって、ゲイだと分かった瞬間、人が変わったように受け入れられないとかはおかしな話です。どんどん自分で知っていくというのも、理解できない人たちには大事だと思います。ひょっとしたら身近にいるかもしれないし、最初から拒絶するような形はやめていただきたい。

▼冨永：レイン坊さんいかがですか、どんな活動をしたら良いかということですけど。

▼レイン坊：私たちも探りながら活動していますが、鈴ノ木さんが言ったように、知らないから怖いというのは、人間の基本的な感情の持ち方だと思うので、私たちは当事者から年に1回メッセージを集めて、どのように生きているのか想像してもらえるように、メッセージの展示会をやっています。当事者がカミングアウトするというのは、なかなか難しい部分がありますが、そういうメッセージの展示会だとか、あとはいろいろな人が個人でどのように生きてきたかということを、ウェブなどで発信しているので、そのようなところから触れてもらえれば良いなと思います。行政も個人もそうですが、男だからこうだとか、女だからこうだとか、行政が考える家族はこういう人たちだからこういうサービスをする、みたいな考えで固まっていたのを、もっと個人へ、個人をどのように支えていくのかというように、考えを変えていくタイミングだと鈴ノ木さんの話を聞きながら思いました。そのような意識をもって、その人が何を思って、何が好きで、何が嫌いで、何をすると楽しそうな顔をするのかという、本当にそこから知り合ってくということが、抽象的な話ですが、これから大事になっていくと思いました。大丈夫ですか。

▼鈴ノ木：完璧だったと思います。

▼冨永：もう一つだけ、お2人に今、どちらかというと子どもたちにどんな社会をということをテーマにしてお話を進めてきましたが、「60歳以上は、多様な性について理解不可能な人が多いように思われます。人生100年時代と言われ、60歳以上といっても、まだまだこれから30~40年以上お元気でご活躍いただく社会になっていくことを考えれば、そうした人たちと価値を共有していくためにはどのようにしたらよろしいでしょうか」というご質問ですがいかがでしょうか。

▼鈴ノ木：理解してもらう努力はした方が良いでしょうね。年配の方も理解していると思いますが、例えば、自分の息子とか孫とかということになってくると、別だったりしますし、そこをどう理解させるかは、すごい時間もかかるけど、どう素早く理解してもらうかは、例えば一緒になにか、お祭りでもなんでもいいと思いますが、一つの目標があってそれに向かって一緒に何かができれば近道だと思います。LGBTQだと分っている人たちとイベントを組むのは大事だと思いますが、そうすると身近なものに感じるし、特別ではなく普通の人と人付き合いになってくる。もちろんぶつかることもあるかもしれませんが、それすら

も良い結果になればいいかなと思います。だからお祭りでも、60歳以上の人たちとLGBTQの人たちで、なにか一つ形が作れれば一番いいかなと思っています。間違っていません。

▼冨永：宣言いただきました。間違ってませんということですが。先行する世代も、私たちにこういう社会にしたいとバトンを渡してくれてるはずなので、困らせようと思ってこの社会を渡したわけではないですね。それなりの価値観というか、その世代が感じたこともあったうえでのことだと思いますが、レイン坊いかがですか。

▼レイン坊：一緒に何かするというのは面白いと思います。他の自治体の例で、レインボーフェスタやレインボーパレードというお祭りをしたり、LGBTに対するポジティブなメッセージを発しながら街を歩くというようなイベントを行っています。その時、商工会議所だとか地元の商店街さんとかに挨拶をしたら、多様な性を表すレインボーの旗を振るようになったんだよ、なんて変化を体感したという話を聞きましたので、そういうふうに何かを作り上げるのは、確かに面白いアイデアだと思いました。

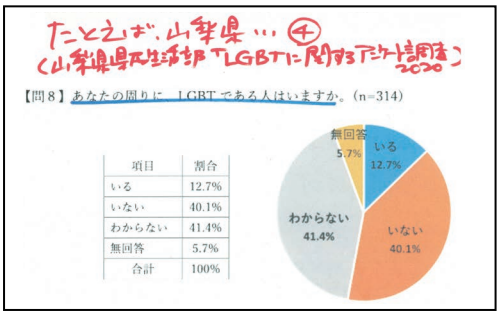
あと、一緒に生きているんだという事実から、もう一度進められたら良いと思うし、幸せの形は今いろいろな形があって、子どもを産めば幸せというわけでもなく、結婚すれば幸せということでもない。一人でも幸せな人もいるし、やっぱり家族を持ったから幸せになった人もいるし、それはいろいろなので、あなたの探してきた幸せは間違いではないけど、今はもっといろいろな幸せがあるんだよという対話もできたらいいなと思いました。

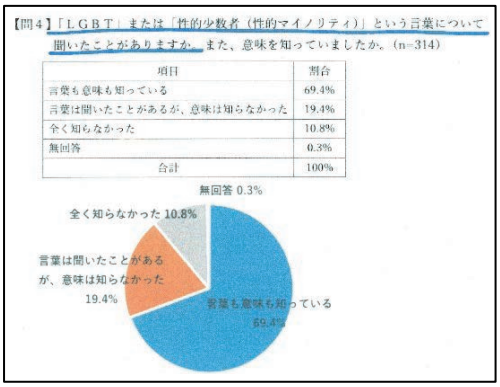
▼冨永：鈴ノ木さんもおっしゃいましたが、理解しなければと思うより一緒に楽しまなきゃということですね。

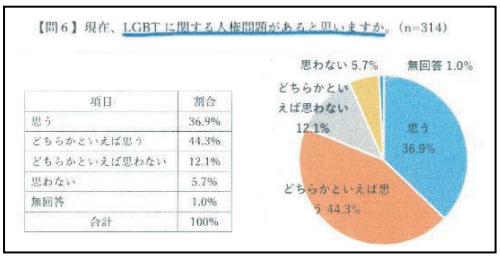
▼鈴ノ木：そうですね。生活の中の特別なイベントとして人にも話せますよね、楽しかったとか、こんな人がいて楽しかったよと。急には無理なので、そういうのが少しずつ、一歩ずつですよ。

▼冨永：そうですね。今日はオンラインで全国からご参加いただいていると思いますが、山梨県の現況について最後に共有してまとめにしていきたいと思います。2020年に山梨県の県民生活部が取ったアンケート調査の結果です。

「あなたの周りにLGBTである人はいますか」という質問に対して、「いる」と答えた人が12.7%、「いない」と答えた方が40.1%、「わからない」が41.4%、その他無回答というような状況になっています。私の身近にLGBTの人がいますという人が、おおよそ10人に1人という回答でした。これを踏まえたうえで、他の質問を併せてご紹介したいと思います。LGBTという言葉を知っていますか、あるいは意味を知っていますか、という質問で「いる」と答えた方が10人に1人。しかしながら「言葉も意味も知っている」という人が、69.4%、「言葉は聞いたことがあるが、意味は知らない」が19.4%ということです。したがって、いるかいないかに関わらず、7割の方が身近なことではないけれど言葉は知っているという状況です。「LGBTに関する人権問題があると思いますか」という質問に対して「思う」という人、「どちらかといえば思う」という人を合わせると8割近い方が、LGBTに関する問題があると考えています。具体的に次の質問では「どういう人権問題がありますか」ということで、「差別的な言動をされる」「職場や学校などでいやがらせやいじめを受ける」などの人権問題があると答えています。したがって、10人に1人しか身近なところにいると回答していないけれど、人権問題は確かに存在していると、山梨県の人たちは7〜8割の人が思っている。そういう意味だと確実に変わってきていると思います。LGBTという言葉で助けられたということもあると思いますし、パートナーシップ制度がそれを推し進めていく側面もあると思います。







このように確実に変わっていく状況の中で最後のテーマです。“誰もが自分らしく生きられる”に向けて、まずはレイン坊から、どんなことが必要か、こうなってほしい、第1部・第2部を受けて、考えたことや思ったことをお話しください。

▼レイン坊：午前中からずっと話しているのは、やっぱり知っていくことが大事、制度的に支えていくのも大事、という話だったと思います。話しても、「なんだ、そうなんだー」という反応が私も理想で、なんで制度がないといけないのかというと、制度がないと毎回説明しないといけなくなってしまうんです。この女の人は私の友人ではなくて、私のパートナーで生涯を誓った人でとか、などと言わないといけないことを、異性愛者は、「私の夫です」「妻です」の一言で、「じゃあ保険は入れますね」とか「じゃあICU入ってください」とか。そういったことが本当に一言で済んでしまうということ、そこも一つの生きづらさというものがありますので、そういったところも含めて制度を保ちつつ、ただ制度を作ったからOKではなくて、対話だとか、話をお互い

聞き合うという機会も確保して、2つの柱というか両輪というか、望ましい山梨の甲府のあり方を皆で探していくということがこれから求められるのではないかと思いました。今日はエキサイティングな話をありがとうございました。

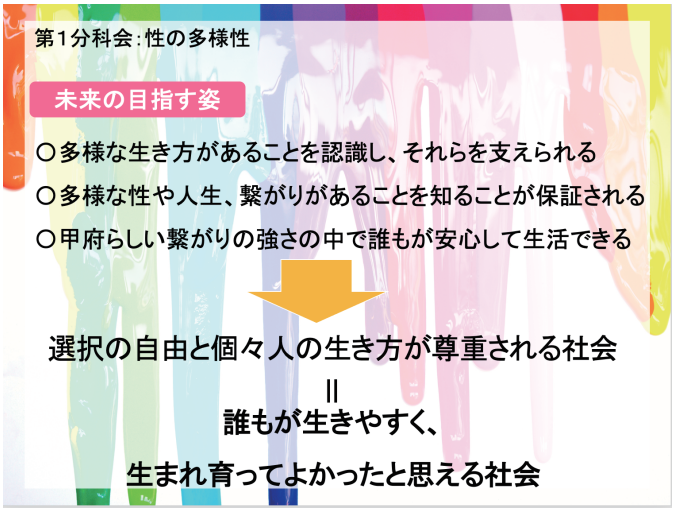
▼冨永：ありがとうございました。まとめみたいになりましたけど、鈴ノ木さんからもぜひ、“誰もが自分らしく生きられる”に向けてというのが、今日、午前中からのお話でしたが、私は「コウノドリ」という漫画の中で女性同士のカップルの妊娠出産はもちろんですが、私たちが生きて、生まれて、生き延びてというプロセスの中で、その背景にはものすごくさまざまなことがあって、そこでは働いていたり、地域の暮らしであったり、そうしたことが複雑な状況を呈しながら、今ここにあるということが漫画を通じて教えられたと思っているところです。その中で、もちろんセクシュアル・マイノリティに関わる問題もそうですが、第1部では男女共同参画の話もありました。性差別や男女不平等という話も、子を産む産まないの話に関わって存在している。性や性別、性指向や性自認に関わらず、誰もが自分らしく生きられる社会に向けて、制度の変化も必要だと思いますが、それに並行して、先行する世代とも対話を重ねることが大切ですね。パートナーシップ制度って、作ってもやめますって言ったら終わりなんです。やっぱりやめますにならないために足元をしっかり固めて行くような取り組みも並行して必要だということを改めて確認させていただきました。鈴ノ木さんいかがだったでしょうか、今日一日。

▼鈴ノ木：本当に楽しい時間をありがとうございました。人は一人では生きられないので、その制度もより良い進化をする必要もあります。僕の大好きなお医者さんで、神奈川こども病院の豊島先生、NICUの新生児科の先生がいますが、その先生は、例えば親が治療を受けさせないような、受けなくてもいいですというネグレクトと言われてもいいような状況でも、その親を一生懸命理解しようとしてくれる先生なんです。それを踏まえて、両親がどうしたら子どもを治療のほうへ向けられるのかということまで、病気を見る前に人を見てくれる先生というのが、僕が本当は「コウノドリ」で描きたかったことです。社会がそういう方向に向かっていってくれれば、子どももLGBTの方々も、生きやすい社会に、政治と一緒に、制度だとか成長していければ、もちらん子どもも自分で成長しなければいけないし、LGBTの方も自分たちが成長しなければいけないですし、各々が各々で成長することが、これから先、住みやすい世の中になっていくんじゃないかなと思っています。今日は本当にありがとうございました。

▼冨永：ありがとうございました。ではちょうど1分前になりましたので、司会のレイン坊にお返しします。

▼レイン坊：お二方、濃密な時間をありがとうございました。まだまだ話したいところではありますが、お時間が来てしまいましたので、これにて第2部は終了いたします。そしていつか甲府のまちでお会いしましょう。本日は長時間にわたり本当にありがとうございました。





分科会 2

ジェンダー・DV

10月23日（土） 第1部 10:00～11:30 第2部 12:30～14:00

パネルディスカッション

ジェンダーとDVに敏感な視点で日常をみる

～ジェンダー平等は人権の問題。気づきが差別と暴力を終わらせる。～

コーディネーター

山内 幸雄

憲法学者

パネリスト

小川 はるみ

甲府市男女共同参画
推進委員会元委員長

パネリスト

小池 英幸

北杜市男女共同参画
推進委員会元委員長

パネリスト

中村 京子

甲府市男女共同参画
推進委員会委員

パネリスト

三井 久美子

笛吹市男女共同参画
推進委員会前委員長

パネリスト

望月 理子

NPO法人エンパワメント
アフロッキー代表





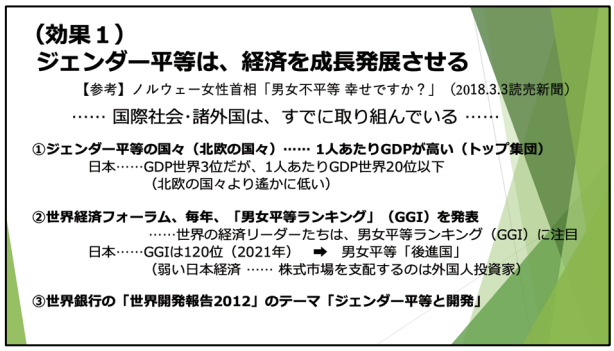
【第1部】



▼山内：最初に私のスピーチから始めさせていただきます。私はジェンダー平等の運動に関わって36年になります。憲法学者の立場からこの運動の世界に入りました。当時は「女性問題」と呼ばれていたころです。そのころは、例えば教員の世界では、夫が管理職になるためには妻が辞めなければならないという慣行があり、悔しい思いをしながら辞めていった女性教員が多くいました。ジェンダー平等の運動はその後、「女性政策」と呼ばれるようになり、そして今は「男女共同参画政策」です。私はその間の変化を目の当たりにしてきました。山梨のジェンダー平等の動きは、たくさんの女性たち、先人たちの努力で進められてきました。多くの人の努力、逆に言えば、多くの人の犠牲があって、ここまでやってきたのです。この歴史は決して、忘れてはなりません。今日、主張したいのは、ジェンダー平等による経済発展です。私たちはなぜ長年にわたり、ジェンダー平等を進めてきたのか。その答えの一つがここにあります。コロナ禍で経済的に低い地位に置かれてきた女性の被害をこれ以上増やさないためにも、このテーマは重要です。

ジェンダー平等、この現代的意義を2つお示しします。1つ目は「経済を成長、発展させる」効果。これは社会的側面の効果です。2つ目は「一人ひとりの能力を開発発揮させる」効果。これは個人的側面の効果です。

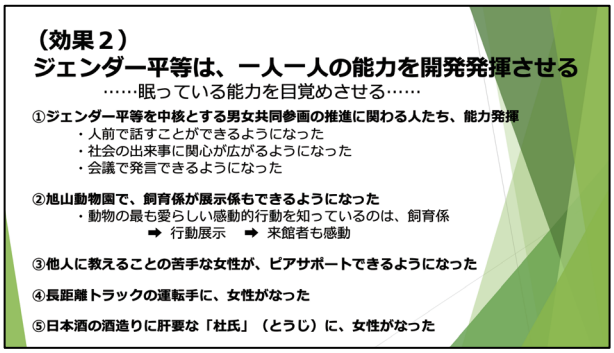
まず1つ目のジェンダー平等が経済を成長発展させる点について説明します。①ジェンダー平等の北欧の国々は、1人あたりのGDPが高く、トップ集団です。国の経済成長を発展させる指標としてGDPがありますが、現在では1人あたりのGDPが豊かさの指標になっています。日本はGDPでは世界3位ですが、1人あたりのGDPは世界20位以下。北欧の国々よりもはるかに低いのです。②世界経済フォーラムの「男女平等ランキング」(GGI)は現代において、もっとも男女平等を正確に映しているといわれます。世界経済フォーラムでこれが発表されるのは、世界のリーダーたちが、ジェンダー平等を経済発展の指標として見ているからで、この点がポイントです。日本は、GGIは120位で、まさに男女平等後進国です。日本の経済は非常に弱い。株式市場では高値を維持していますが、実際のところ、株式市場を支配しているのは外国の投資家です。③世界銀行では「世界開発報告2012」のテーマに「ジェンダー平等と開発」を取り上げました。④同じく世界銀行の局長の記者会見でも「東アジアの国には伝統的な女性の役割が根強く残っている。持続可能な経済発展、持続可能な社会を実現するためには、男女の機会均等が不可欠である」と述べています。また、いくつかの試算も出ています。⑤世界銀行の報告書2018年で、男女の賃金格差は160兆ドルの損失にあたると言っています。逆に言えば、男女賃金格差を無くせば、160兆ドルの益になるという試算です。⑥国連食糧農業機関(FAO)の「世界食糧農業白書」(2011年)では、農業分野で男女平等を完全に実現すると農業生産力が高まり、飢餓人口1億～1億5千万減らせると言っています。⑧EUの2009年の試算では、男女平等を完全に実現するとGDPで平均27%アップするとしています。さらにはいくつかの刊行物も出されています。⑨OECDジェンダー白書2「図表でみる男女格差～今なお蔓延る不平等に終止符を！」(2018年発行)、⑩国連UNWOMEN「Gender Equality and Inclusive Growth：Economic Policies to Achieve Sustainable Development」(2019年発行)があります。⑩はジェンダー平等と包括的発展をメインテーマにして経済政策との関連を述べています。このように国際社会はすでに、ジェンダー平等は経済の持続的発展を促進するという目で見ています。





2つ目のジェンダー平等の現代的効果は、一人ひとりの能力を開発・発揮させることです。本人も気づいていない、眠っている能力を目覚めさせます。

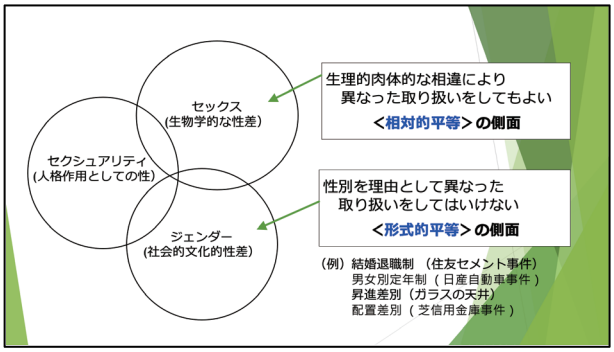
効果の例を挙げます。①ジェンダー平等を中核とする男女共同参画の推進に関わる人たち、つまり推進者たちからは以下の声が聞かれました。「人前で話すことができるようになった」「社会の出来事に関心が広がるようになった」「会議で発言できるようになった」と。別の例では、②旭山動物園で、飼育係が展示係もできるようになった。③他人に教えることが苦手な女性が、ピアサポートできるようになった。④長距離トラックの運転手に女性がなった。⑤日本酒の酒造りに必要な杜氏に女性がなった。など、さまざまな場面で一人ひとりの能力を開花させたりするのがジェンダー平等だということが分かります。



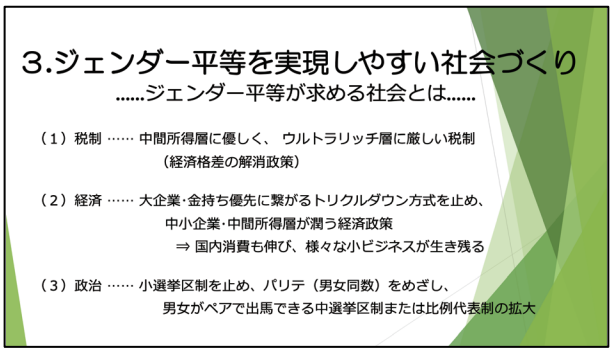
では、こういった効果はなぜ起こるのでしょうか。秘訣は平等論にあります。ジェンダー平等が目指す平等には2つのポイントがあります。1つ目のポイントは、平等を実現した向こうに「個人の尊重」があり、一人ひとりを大切にするための平等、それがジェンダー平等なのです。個人の尊重とは、一人ひとりの個性が認められ、能力が十分に活かされることです。ここで言う個性とは、広くその人の性格、身体、能力、思考様式、行動様式などの総体を意味しています。つまり、その人の存在そのものを表すものです。重要な点は、本人がまだ気づいていない眠っている能力をそこまで引っ張り出すことです。平等にすることが最終目標ではなく、平等にした向こうに、一人ひとりの能力を持った人たちがいることにまで、目を開いていかなければなりません。個人の尊重とつながる平等こそ、真の平等なのです。

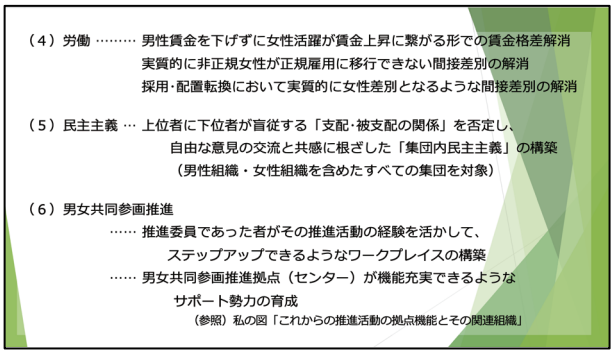
2つ目のポイントは、3つの平等理論を用いることです。平等観には形式的平等・相対的平等・実質的平等の3通りがあります。①形式的平等では、「同じ」に着目します。均等に扱う均等待遇というものです。②相対的平等では「相違」に着目します。違いに応じて取り扱いも異ならせるものです。③実質的平等では、「格差」に着目します。本来、同じなのに格差が生じて

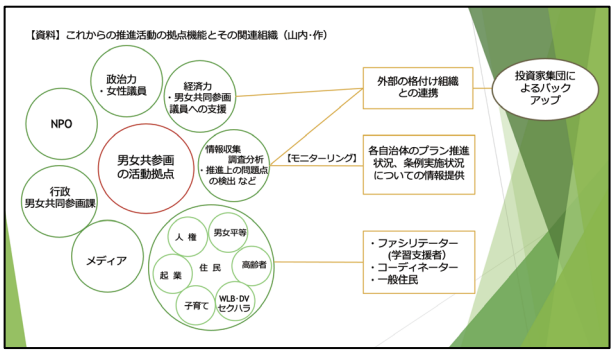
いるので、それを是正する格差是正措置をします。これは英語で「positive action」と言います。では、この3つの平等理論を人間の性の3つの側面でお話ししていきましょう。①セクシュアリティ（人格作用としての性）②セックス（生物学的な性差）③ジェンダー（社会的文化的性差）。ここでは②セックスと③ジェンダーについて考えていきます。セックスにはそもそも違いがあるという目線に立ち、相対的平等という考え方を適用します。生理的・肉体的な相違があるから、それに応じて異なった取り扱いをしていいという平等観です。ジェンダーは人為的な性差。本来、同じという目線に立つもので、形式的平等が適用されます。この側面では、性別を理由として異なった取り扱いをしてはいけません。本来、同じであるはずなのに差がついている時には、「どうしてもやむを得ない」時にだけ、その差は認められます。この3つの平等観は一般には、混同されて使われていますが、3つをしっかりと分けて用いることが大切です。



最後に、ジェンダー平等を実現しやすい社会について考えていきます。(1)税制については、中間所得層に優しく、ウルトラリッチ層に厳しい税制を求めていきます。つまり経済格差の解消政策です。(2)経済については、大企業・金持ち優先につながるトリクルダウン方式をやめ、中小企業・中間所得層が潤う経済政策を求めます。このことで国内消費も伸び、さまざまな小ビジネスが生き残ります。トリクルダウン方式はすでに破綻しています。(3)政治については、小選挙区制をやめ、パリテ（男女同数）を目指し、男女ペアで出馬できる中選挙区制または比例代表制の拡大を求めていきます。男女のペアが大事なポイントです。(4)労働については、男女賃金格差の平等を求めます。男性の賃金を下げずに、女性の賃金をその活躍に応じて上げていく形での格差解消を求めていきます。また、実質的に非正規雇用の女性が正規雇用に移行できないような間接差別の解消も求めていきます。女性の労働を使い捨て労働ではなく、資本の再生産過程に組み込む労働にしていくべきです。さらには、採用、配置転換においても、実質的な女性差別となるような間接差別の解消を求めていきます。(5)民主主義については、上位者に下位者が盲従するような「支配・被支配の関係」を否定し、自由な意見の交流と共感に根ざした「集団内民主主義」の構築を求めていきます。キーワードは、「自由な意見の交流と共感」です。男性ばかりの組織、女性ばかりの組織を含めた全ての集団を対象にした集団内民主主義の構築を求めます。(6)男女共同参画推進については、推進委員であった者がその推進活動の経験を活かして、ステップアップできるようなワークプレイスの構築を目指します。せっかく得た経験を活かせる場所が必要です。さらに、男女共同参画推進拠点（センター）が機能充実できるようなサポート勢力の育成を求めていきます。センターを取り囲むさまざまな勢力、人為的資源が育成されてこそ、センターの機能が充実するのです。これで私のスピーチを終わります。





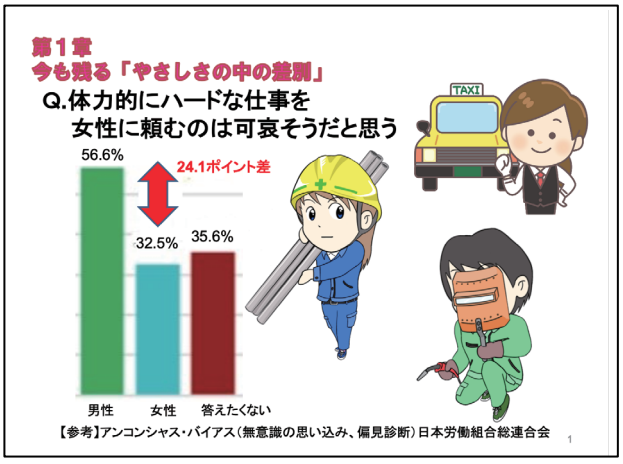


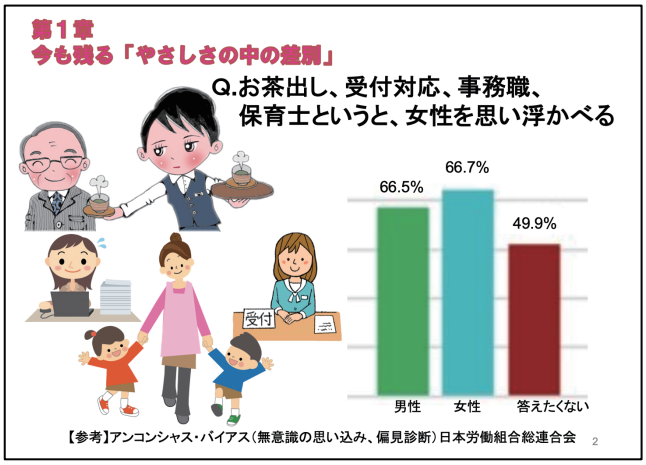
それではパネルディスカッションを始めます。

第1部は「主にジェンダーが生み出す差別の現実と課題」です。サブタイトルに「ジェンダー平等は人権の問題」とあるように、人権というのは人間が人間として生きていくうえで必要な権利ですから、ジェンダー平等は人間が人間として生きていくために必要なものなのです。ジェンダーによる歪みに気づくことが、差別と暴力を終わらせます。このパネルディスカッションでは、ジェンダーが生み出す差別の事例を取り上げ、それらと私たちはどう向き合っていくべきかを議論します。皆さんもご一緒にお考えください。

昨年12月4日、日本労働組合総連合会がとった「アンコンシャス・バイアス診断」というアンケートの結果をご紹介し、パネ

リストの皆さんにご意見を伺いながら、一緒に考えていきます。アンコンシャス・バイアスとは、直訳すると「無意識の歪み」です。特に意識しない事柄の中に、実は歪みがあるということです。私たちが「ジェンダー」と呼ぶものも、この中に含まれます。それでは、第1章に移ります。「第1章 今も残るやさしさの中の差別」。「やさしさの中の差別」、これは私の表現です。優しい気持ち、思いやりの気持ちの中にも、実は差別が背後にあるということです。例えば、たいして重くもない荷物を持っている女性に対し、「荷物をお持ちしましょうか」という声をかけてくる男性に「優しい」と思う女性は少なくないと思います。そこに問題があります。女は弱いと思っているのです。あるいは娘には苦労させたくないから、将来有望な経済力のある男性と結婚させたいと願う親の気持ちの中にも、実は差別があります。女は男に頼るもの、と思っているのです。ここでは、こういう差別を取り上げていきます。スライドを見てください。先ほどのアンケート結果では、質問「体力的にハードな仕事を女性に頼むのはかわいそうだと思う」に対し、「そう思う」と答えた男性は56.6%、女性は32.5%。このギャップはどういうことでしょうか。男性の優しさの中に歪みがあり、そこに差別があります。また「お茶出し、受付対応、事務職、保育士というと女性を思い浮かべる」という質問に対し、男性は66.5%、女性は66.7%が「そう思う」と答えている。その思い込みに男の仕事、女の仕事と分けてしまう性別役割分担の固定化がある。この結果を小川さん、どう思いますか。







▼小川：私の経験を3つ紹介したいと思います。まず、会社で営業担当になった時、名刺を作ってもらえることになりましたが、届いたのは、角が丸い、小さなかわいらしい名刺でした。当時、名刺は男性用、女性用の2種類があったと思われます。しかし、ビジネスの場ではふさわしくないと感じ、課長と同じような名刺に作り直してもらいました。2番目は、1980年代、カナダの代理店に応援で人を出すことになった時、私がカナダの市場担当をしていたので当然、私が行けるものと思っていましたが、後輩の男性社員が行くことになりました。会社としては、女性を海外に出した前例がなく、リスクをおかせないという理由だったようです。最後に、1986年に男女雇用機会均等法ができたころ、ようやく私に海外出張のチャンスが回って来ました。ところが、部長に呼ばれ「行くなら商社の人と2人で行ってほしい」と言われました。当時、私は係長で、商社と行くと自分の力が発揮できないと感じ、部長と交渉。1人で行けることになりました。当時の私は、現地を知らない海外担当者という後ろめたさがありましたが、2週間後、無事に帰って来られた結果、周りの人も認めてくれるようになり、私自身も仕事がしやすくなりました。

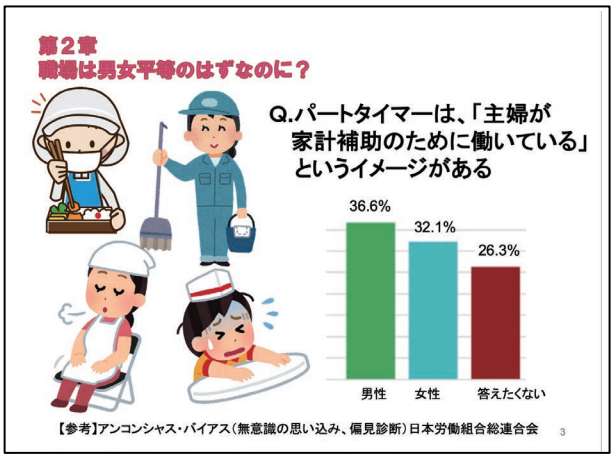
▼山内：海外出張は男性の場合は1人で行かせるけれど、女性の場合は「1人ではかわいそう、誰かをつけてやろう」という上司の「優しい気持ち」をはねのけてよく頑張りましたね。その頑張りがその人の能力を向上させていくんです。それでは次に三井さん、お願いします。



▼三井：学校のPTAでは、女性のほうが多く参加しますが、会長を選ぶ執行部の選挙をするとなると、慣例かもしれませんが、男性が会長になります。そういう場合「副会長は女性を据える」ときちんと書いておかないと、なかなか女性が執行部に入ってくれないと、学校の先生から指摘がありました。女性から、会長職は挨拶があるから嫌だということを多く聞きますが、最高学年の部会長なども避けられてしまいます。卒業式で謝辞を述べることが嫌だそうです。先生方とも相談して、謝辞はやらなくてもいいことになり、次学年もそれを踏襲することになりました。けれど、それは優しさでしょうか。

▼山内：優しさの中の差別に甘んじていると、その人の能力は伸びません。ちょっと頑張る努力はしていただきたいと思います。

第２章に移ります。テーマは「職場は男女平等のはずなのに？」です。職場においては男女雇用機会均等法が早い時期から制定されています。男女平等を目指してきたはずなのですが。アンケートの質問「非正規雇用で働く人は、自分で望んでその働き方を選択していると思う」に対し、「そう思う」は男性13.7%、女性13.9%とほぼ同じでした。非正規雇用を女性は望んでいるのか？というクエスチョンマークがつきます。正規雇用の男性はたくさん給料をもらえて、非正規雇用の人はそうではない。正規雇用で働きたいのに、不本意ながら非正規雇用で働いている人が、女性でも10%前後はいます。「非正規雇用なら女性」というイメージが出てくるのが問題。働く女性の半数以上が非正規雇用という現実、これはかなり厳しいものがあります。



では次の質問は「パートタイマーは『主婦が家計補助のために働いている』というイメージがある」です。これは、男性は一家の大黒柱になるが、女性はそうならないという意味で捉えた問いかけです。「そう思う」は男性が36.6%、女性が32.1%でした。女性のほうが数字が少ないのは「家計補助のために働いているのじゃないよ」という気持ちの表れかもしれません。小川さん、どう思われますか。

▼小川：私は1995年９月に第４回世界女性会議北京大会NGOフォーラムに参加しました。そこで「日本の職場における男女差別」をテーマにしたワークショップを持ちました。参加したのは日本で働くアメリカ人女性２人と、日本人で私ともう1人の計４人です。フォーラムには、日本からも約5,000人が来場したそうで、会場は熱気であふれ、刺激を受けました。私たちのワークショップには欧米、アジアなどから約40人が集まってくれました。冒頭、日本の平等ではない職場の様子をスピーチで紹介しました。女性は男性の補助業務が多く、昇進、昇格、教育もなく、能力開発の機会も無い。さらに、家庭や地域でも固定的な役割分担が普通であると発表しました。その後、各国の女性と意見交換したが、根幹の課題や女性の思いは非常に共通していることに感銘を受けました。この体験の後、男女平等についてもっと学びたいという強い動機づけになりました。

▼山内：職場において男女平等を求める気持ちは、他の国でも強いということですね。中村さん、いかがでしょうか。

▼中村：1992年から2014年までカリフォルニアで駐在家庭のお子さんたちを教える仕事をしていました。大学卒業直前に結婚が決まっていましたが、就職活動をしようとすると「結婚が決まっているのになぜ就職活動をするんだ」と大人たちから怒られました。当時、結婚する女性は就職活動をしないのが当たり前。結婚しているのに就職し、子どもができて辞めたら、会社の人に迷惑をかけると言われ、がっかりした経験があります。幸い、夫が研究留学を希望していたので、2人でアメリカに行こうということになりました。あちらでの生活の中で感じた日本との違いは、まず、履歴書に、人種・性別・年齢を書く欄はありません。それで合否を決めないためです。純粋に名前と経歴しか書きません。日本では求人募集で、男女や年齢が明記されていたので驚きました。一方、アメリカでは平等を制度として保障しなければいけないので、さまざまな職業においても、男女比率、人種比率の決まりがありました。例えば消防士は、応募者が多い白人男性には狭き門ですが、応募が少ないアジア人女性ならばすぐ採用されるという話を聞いたことがあります。その点は、適切なのかどうか分からないと感じました。



▼山内：人種差別・ジェンダー差別・マイノリティー差別をなくしていこうという取り組みの例ですね。

今度は第３章に移ります。「暗黙の了解で進む地域・家庭」というテーマです。「暗黙の了解」がポイント。声を出さずとも、あうんの呼吸で男女が役割分担しているということです。「ひょっとして、まだ残っている？男女格差」ということですが、スライドの絵では、男とはこうするもの、女とはこうするもの、と言いたげな頑固そうなおじさんが座っています。その隣のキッチンにはお母さんが食器を洗っていて、女の子がそれを手伝い、男の子はテレビゲームで遊んでいます。「女の子だからお手伝いしなければならない」「キッチンに立つのは女性」という印象を受けます。また、こういう例もあります。◎子育て・家事・介護は女性の役割だと思い込んでいる家族がいる。◎女性には愛育会や食生活改善推進員など



の役員しか回ってこない自治会がある。◎自治会の役員を男性中心に考える。皆さんの地域はどうでしょうか。小池さん、家庭内の役割分担について、地域でアンケートを取られたそうですね。ご紹介ください。



▼小池：北杜市の推進委員会では、一番身近な家事の役割について誰が何をしているのか、してないのか、という現状把握と家庭内の気づきを目的に、2017年の夏休み、市内の中学２年生を対象にして「家事シェア」の調査をしました。カーテンを開ける、お弁当箱を洗う、回覧板を回すなど細かな家事100項目をリストアップ。時間軸を朝・夕・不定期に分け、家庭内の分担をワークシートで色分けしてもらいました。さらに、結果を見て、今後、家庭内でどんなふうにしていけばいいのか計画を作る形をとりました。自分の家庭を見つめ、どの仕事が偏っているのか、自分は何をやったらいいのか、誰に負担がいっているのかを家庭内で話し合い、男女平等について考えたり、家族に思いやりを持ったりするいい機会になりました。



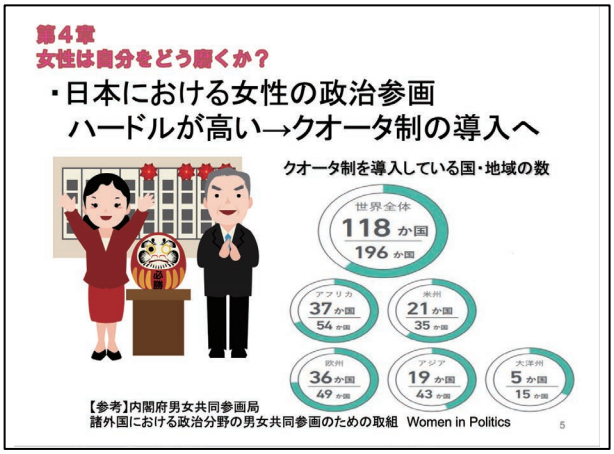
▼山内：三井さん、どうでしょうか。

▼三井：笛吹市の推進委員会の地域部会では紙芝居を使い、女性も地域活動に出て行こう、まずは一歩を始めようという啓発をPTAの学習会や区長会で行っています。区の下にある組という組織の代表・組長はだいたい男性ですが、女性も組長会議に出て、女性目線で発言する大切さなどを紹介しています。

▼山内：ここで、ジェンダーに関する最近の主な出来事をおさらいしておきましょう。男女格差は156カ国中120位（GGI）で、特に政治分野の遅れが目立っています。森喜朗氏が女性蔑視発言により、東京五輪パラリンピック大会組織委員会会長を辞任。コロナ禍で再確認された男女格差。選択的夫婦別姓制度については、最高裁の決定が６月に出ましたが、現行の法律は合憲だということ。ただ、憲法上は国会の議論によってこの制度が認められる余地があるという含みは残しているようですので、国会が選択的夫婦別姓制度を積極的に取り込んでいく動きになるように見つめていきたいと思います。

次、第４章「女性は自分をどう磨くか？」です。輝く女性を目指して、という意味が裏にあります。女性のこれからの主体的な生き方について話し合いたいと思います。「輝く女性」「主体的な生き方」というキーワードですが、小川さん、どう考えますか。

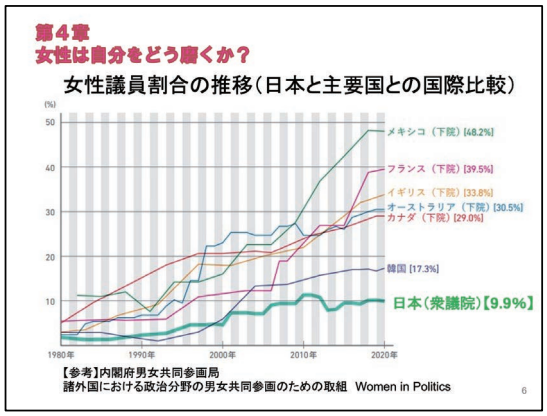
▼小川：私は入社以来、仕事上のジェンダー格差は痛感してきました。ほぼ日常的に自分に降りかかってきたのですが、そこで感じたのは、自分自身の反省です。社会や会社についてあまりに知らないことが多すぎて、勉強が足りないと痛感しました。壁に直面するたびに突破する方法を考えましたが、今のままでは限界があると感じました。その結果、相手のバイアスは必ずしも悪意があるものではなく、アンコンシャス・バイアスであることにも気づきました。男性中心の企業文化に男性自身も気づいておらず、女性でも気がついていない人が多いという現実に直面しました。仕事を進めるために根気よく相手を説得し、協力を仰ぐしかありませんでした。かなり忍耐とエネルギーが必要でしたが、仕事のために割り切りました。そのためには、仕事上必要な情報や知識、スキルを身につけ、組織のルールや指揮命令系統を理解するなど必要なことがたくさんありました。企業文化も無視できず、身近にメンターやロールモデルも必要でした。当時は女性でそういう方が身近にいませんでしたので、男性の管理職や先輩にアドバイスを受けました。OJTという言葉は仕事を通じて成長するという意味です。ある意味では、社会に遅れて参加した女性の私たちが、男性と同じように仕事をするためには、まずは自らの努力が必要ではないかと考えました。本人が頑張ることも必要ですが、それだけでは難しいと思います。常に客観的視点を持って、理解者や協力者といった人脈を持つことも大切だと思いました。

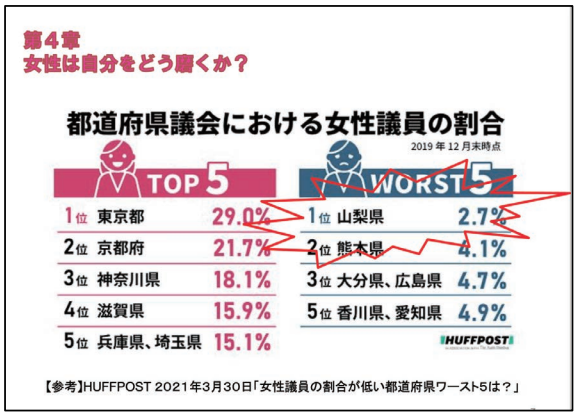


▼山内：次は政治の世界です。「日本における女性の政治参画はハードルが高い。クオータ制の導入へ」ということですが。クオータ制を導入しているのが世界196カ国中118カ国あり、主流になっています。私は特に男女同数のパリテを目指したいと考えています。日本の場合は段階的ではなく一気にパリテに行けるのではないかという気がしています。教育水準も高いので、男女ペアで出馬することがあってもいいと思います。さらに言えば、誰もが参加しやすいように「議会は夜開く」のがいいと思います。

次のスライドは、女性議員割合の推移の国際比較です。日本はグラフの下のほうにある。それほど女性が政治家として参画することが少ないということです。また、都道府県議会における女性議員の割合ですが、トップは東京都29%、京都府21.7%、神奈川県18.1%。ワースト1位は山梨県の2.7%で残念です。

逆に言えば、女性進出が遅れている職種では、まだまだ女性が進出できるということです。女性の可能性は無限大です。ただそのためには、勉強と努力が必要です。今までのスライドを見てきて、小池さん、三井さん、中村さんどう考えますか。





▼小池：ジェンダーギャップ指数で日本の男女格差が156カ国中120位というのは、特に政治の遅れということで、端的に言えば、女性の議員が少ないということ。単に議員の数を合わせるならクオータ制導入の検討が必要だと思うが、数とか順位ということではなくて、今まで女性の政治参画や女性目線の政治など女性の意見集約がなかなか進まなかったという気がします。女性の社会進出、政治参画は別段で大きな課題として話し合いを進めていく必要があると改めて思います。

▼三井：推進委員会の委員長やPTA活動などの経験から、「次は選挙？」なんて声もいただきますが、やってきたのはボランティアで、有償の議員さんとはかなり違いがあると思います。役員については、「人がいないから頼む」「やってみろし」ということでお受けしてきましたが、議員は腰が引けて、まだまだ立候補には至りません。

▼中村：女性は自分をどう磨くのか、というテーマですが、性別、年齢にかかわらず、「全ての人は」と考えています。自分らしく生き生きと暮らすためには、自分の長所をどんなふうに発揮し、周りの人にどう喜んでもらうのがいいのか、ということをよく考えて、それを実現していくのに必要なことを学ぶのは、女性だけでなく全ての人に言えることです。また、議員の数は山梨県がワースト1位ですが、私は甲府に移住して7年たちますが、引っ越して来た時に、山梨は女性の自営業や経営者が多いと感じました。そっちに女性人材が行くから、議員のほうに回らない可能性もあるのではないでしょうか。

▼山内：第5章は「私たちはジェンダー差別とどう向き合うか？！」です。今ビジネスの世界でも少しずつ変わってきていて、ジェンダーを含む言葉を使用しないという方向で取り組まれています。ここで○×問題です。事前に推進委員さんたちに賛否を聞いています。2021年ベルリン国際映画祭で、主演男優賞、主演女優賞が「主演俳優賞」に変わりました。この映画祭の取り組みについて、推進委員さんたちは賛成が50%で、半々でした。映画関係者の中からは、主演は男性が取ることが多いので、女性には不利だとの反対意見があったようです。次に、トランスジェンダーのウエイトリフティング選手が五輪に出場することについては、推進委員さんの90%が反対でした。私は賛成です。集中力を要するスポーツでは、心と体のバランスを取るのは非常に難しいので、出てもいいと思う。また、選択的夫婦別姓制度については、推進委員さんたちの賛成は77%でした。国際社会はこの方向で進んでいますから、日本は遅れているという実感はありますが、まだまだ、「よし」としない人がいることも現実だと思いました。ただ、選択ですから、選択するかしないかは当事者が考えればいいことだと思います。最後に、パネリストの方々からコメントをいただきたいと思います。

▼小川：私たちはジェンダー差別とどう向き合うかについてコメントしたいと思います。私の経験から差別の根っこのほとんどはアンコンシャス・バイアスです。一人で立ち向かうのは勇気がいりますので、その都度、指摘して改善していく地道な行動が必要だと思います。以前、自治会の懇親会で上座にビールが置いてあり、脇の席、下座にジュース、ウーロン茶が置いてありました。尋ねたところ、男性のところにビールを置くのが慣例だということ。女性にもビールを飲みたい人がいるので、交互に置き直しました。案の定、男性が上座に座るのですが、ビールを飲みたい人は自分で取りにいったり、交換したりしていました。私たちは無断で実力行使しましたが、その後はトラブルもなく、普通になったようです。「それは違います」「差別です」と声を上げていき、同じ思いの人の協力を得ることが大事だと思っています。自分たちがどう感じて



いるのかを相手に上手に伝えることが一番の基本です。問題を共有することで、解決策も見えてくると考えています。

▼三井：区別・差別・平等はすごく難しいと思っています。なんでも一緒というのは、場合によっては違和感も生じます。例えば、昭和生まれの私の出身中学には学年ごとに更衣室があって、体育の授業の時はそこで着替えました。しかし、平成生まれのわが娘の中学には更衣室が無く、男女が時間差で着替えているようです。娘からすれば当たり前で、着替えやすいように工夫しているようですが、大丈夫なのかなと心配になります。この場合、基本的な問題は、着替えを工夫することではないように思います。大人になってちゃんと感じてくれるようになればいいなと思っています。

▼中村：身の回りで起こっていることが差別だと気づいたら、まず差別されている側に一緒に立つことが大事です。その気持ちを踏みにじらないように、しっかり配慮しつつ、差別を受けている人ではない人が、「それは差別です」と声を上げることがすごく大事だと思います。「#MeToo」運動の大きなうねりも、「私が受けたわけではない。だけど…」と寄り添う人たちがたくさん増えたことが大きな違いを生んできました。おかしいことには「おかしい」と声を上げることを大人が心がければ、子どももできるようになると思いますし、子どもがやっている姿に大人も「騒がないほうがいいよ」ではなく、皆で支え合っていく空気になっていけばいいのではないかと考えています。

▼小池：「これは差別」「これは区別」と生活の中で指摘したり、声を上げたりすることは大切ですが、「こうすべき」と決めつけすぎるのも、お互いに支え合ったり、認め合ったりする中で、本末転倒になってしまうのではと思うこともあります。北杜市で2019年に高校生も含め、男女共同参画をテーマに100人ワールドカフェを開催しましたが、世代、職業関係なく、皆さんが仲良く意見を言い合える環境を作ることがまず大事だと思います。「男女共同参画」という言葉がこの世からなくなれば、真の男女共同参画社会が実現するのだと思っています。

▼山内：パネリストの皆さまのお話を受け、大切だと思うことは、ジェンダー差別に気づくこと、気づいたら、自分のできる範囲でいいので、それは「ジェンダー差別ですよ」と意思表示し、決してスルーしないということです。一人ひとりが意思表示をしていけば、社会はきっと変わるはずです。新しい日本のために、一人ひとりの主体的な努力が必要だと思います。努力はいつか報われます。ジェンダー平等社会に向けて頑張りましょう。ご参加ありがとうございました。

【第２部】

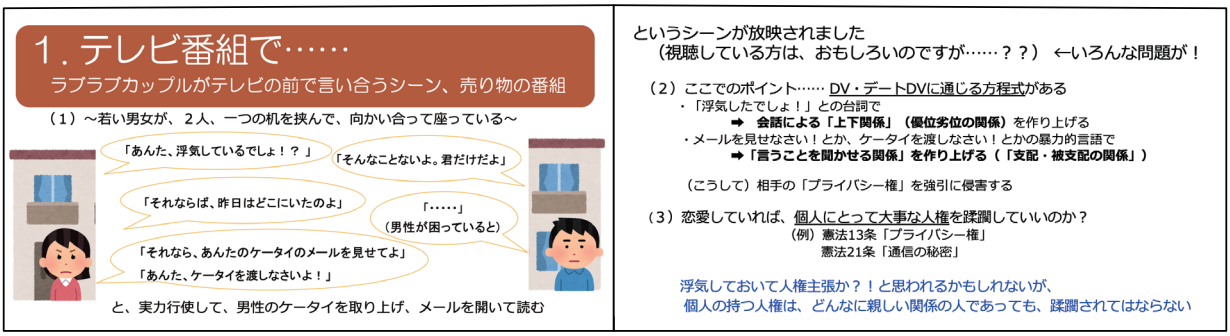


▼山内：まず私のほうから少しスピーチをし、その後、パネルディスカッションに移ります。この分科会のDVというテーマについて、どこに着目するかを男女共同参画の推進委員さんたちと話し合いました。その結果、DV・デートDVを防止するために、それが発生する直前の行為、つまり「イエロー信号」が点る行為に気づいてもらうこと、そしてどんな行為がイエロー信号に該当する行為かを例示することが、推進委員としてのなすべきことではないかということになりました。私のスピーチもその後のパネルディスカッションもこのイエロー信号が点る行為に着目しています。どうぞ皆さまもご一緒にお考えください。

それでは、スピーチを始めます。

テーマは、私たちはなぜ平等を目指すかという問題意識から、いわゆる男社会とDV・デートDVとの関係を読み解きます。そもそもDV・デートDVというのは「ジェンダーに基づく暴力」と言われています。そして、DV・デートDVは常に、人権と関わる問題であるとも言われています。

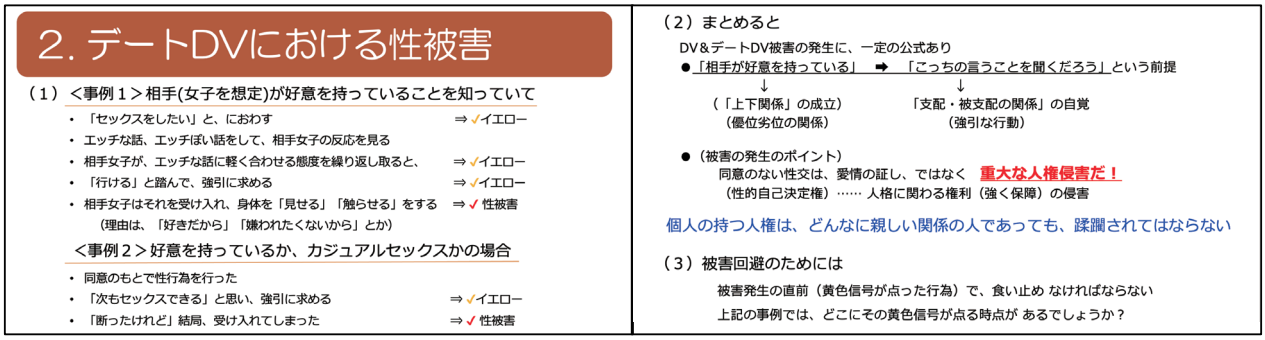
１．テレビ番組で・・・・・



以前、ラブラブカップルが言い争うのを売り物にする番組がありました。若い男女が２人、机を挟んで向かい合って座っています。女性「あんた、浮気してるでしょ?!」と切り込む。男性「そんなことないよ。君だけだよ」、女性「それなら、昨日どこにいたのよ」。男性が黙っていると、女性は「それなら、あんたの携帯のメールを見せてよ」と実力行使して、メールを読みました。視聴者は面白いのですが、ここにはいろんな問題があります。

ポイントは、DV・デートDVにつながる方程式があることです。まず「浮気したでしょ！」のセリフで、会話による「上下関係」（優位劣位の関係）を作り上げます。そのうえで「携帯を渡しなさい！」という暴力的言語で「言うことをきかせる関係」を作り上げます。これが支配・被支配の関係です。こうして、相手の「プライバシー権」を強引に侵害します。恋愛していれば、個人にとって大事な人権を蹂躙していいのでしょうか。そんなことはありません。憲法13条「プライバシー権」、21条「通信の秘密」は重大な人権です。浮気しておいて人権主張かと思われるかもしれませんが、個人の持つ人権は、どんなに親しい関係の人でも、蹂躙されてはなりません。

2．デートDVにおける性被害

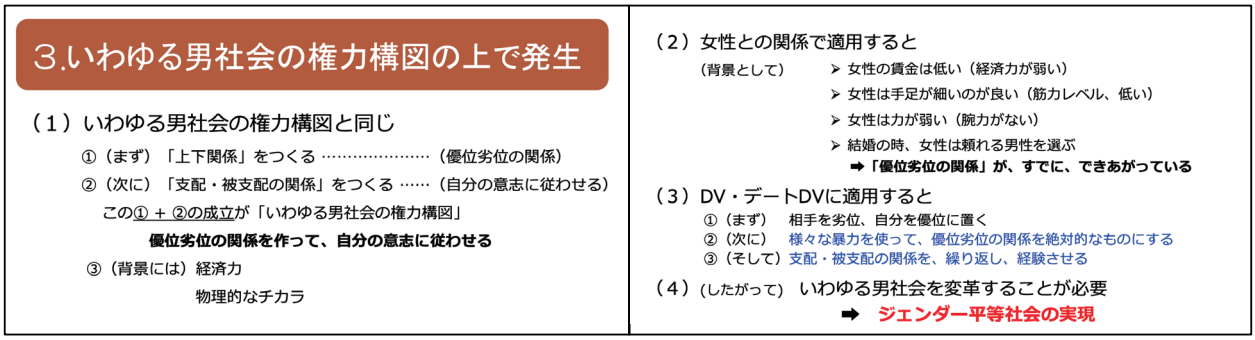


次に、デートDVにおける性的被害の例に移ります。

事例１．恋愛関係の相手側となる女子が好意を持っていることを知っていて、男性のほうが「セックスしたい」とにおわす。あるいはエッチな話をして、相手女子の反応を見る。女子がそれに軽く合わせる態度を繰り返しとっていると「これは行ける」と踏んで、強引に求める。女子側はそれを受け入れ、身体を見せたり、触らせたりします。理由は、好きだから、嫌われたくないから、などです。事例２．好意を持っているか、カジュアルセックスかの場合です。同意のもとで性行為を行い、次も「セックスできる」と思い込んで、強引に部屋に押し入り強引に求める。断ったけれど、受け入れてしまったという事例です。この２つの事例をまとめると、DV・デートDV被害の発生に一定の公式のようなものがあります。まず相手が好意を持っているという段階で上下関係が成り立ちます。いわゆる「惚れた弱み」でしょうか。これを前提にして「こっちの言う事を聞くだろう」という思い込みが生まれます。これは支配・被支配関係の自覚というもので、この自覚に基づいて、強引な行動をとることになります。ポイントは、この自覚をさせないことです。いわゆる同意の無いセックスは、愛情の証ではなく、重大な人権侵害があると思わなければなりません。この場合の人権は「性的自己決定権」で、強く保障されるべき人格に関わる権利です。個人の持つ人権は、どんなに親しい関係の人でも、蹂躙されてはなりません。このような被害を回避するためには、イエロー信号が点った時点で食い止めなければなりません。上記の事例ではどこで黄色信号が点ったのでしょうか。つまり、支配、被支配の自覚が成り立つ時はどこでしたか。事例1では、相手の女子が好きだという時点で優位劣位の関係があります。イエロー信号は、女子がエッチな話に軽く合わせる態度を繰り返しとっている時点です。もし嫌だったら、エッチな話が出て来た時点で「嫌だ」という意思表示をしなければなりません。

事例２では、1回は性的交渉を持っているので、次もできるだろうと強引に求めています。大事なのは、部屋に入れないこと。どうしても部屋に入ってきたら、セックスをきっぱりと拒否することです。そうしないと、イエロー信号から赤信号になってしまい、被害者になってしまいます。このように一連の行為の中で、イエロー信号を見つけること、あるいはイエロー信号に気が付くことがDV被害者になるかどうかの別れ道になります。

3．DVはいわゆる男社会の権力構図の上で発生

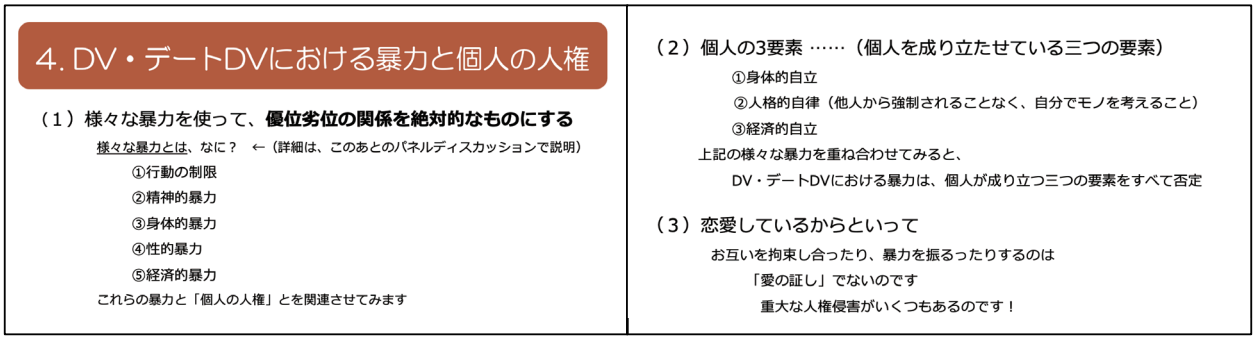


DVは、いわゆる男社会の権力構図の上で発生します。ここで言っているのは、今まで権力を握ってきたのが、男中心の社会だったという意味での「男社会」です。

その権力構図はまず、上下関係（優位劣位の関係）を作り、それを前提にして、支配・被支配の関係で自分の意志に従わ

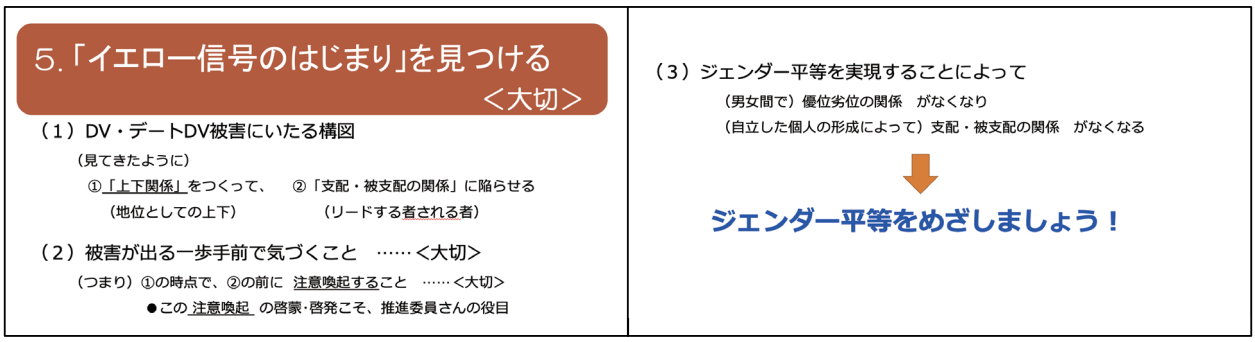
せます。その背景には、経済力、物理的な力、身分上の優位劣位などがあります。この権力の構図を女性との関係に適応してみると、まず背景として、女性の賃金は低く経済力が弱いことがあります。さらに女性は手足が細いのが良いとされ、物理的な力が弱い。また、女性は結婚の時、頼れる男性を選ぶので、この段階で優位劣位の関係が成り立っていることになります。これをDV・デートDVに適用すると、まず相手を劣位、自分を優位に置き、さまざまな暴力を使って優位劣位の関係を絶対的なものにします。そして支配・被支配の関係を繰り返し経験させていくことになります。従って、男社会を改革することがDV・デートDVの抑止につながるといえます。

4．DV・デートDVにおける暴力と個人の人権



DV・デートDVにおける暴力と個人の人権との関係を考えていきます。さまざまな暴力を使って優位劣位の関係を絶対的なものにする。ここで言うさまざまな暴力というのは①行動の制限、②精神的暴力、③身体的暴力、④性的暴力、⑤経済的暴力です。これらの暴力と人権との関係を考えてみます。個人を成り立たせる３要素には①身体的自立、②人格的自律（他人から強制されることなく、自分でものを考えること）、③経済的自立があります。この３つと暴力を重ね合わせると、精神的暴力・身体的暴力・経済的暴力、つまり、DV・デートDVは個人が成り立つ３要素を全て否定しています。恋愛しているからといって、お互いを拘束し合ったり、暴力を振るったりするのは「愛の証し」では決してありません。重大な人権侵害がいくつもあります。

5．「イエロー信号のはじまり」を見つける



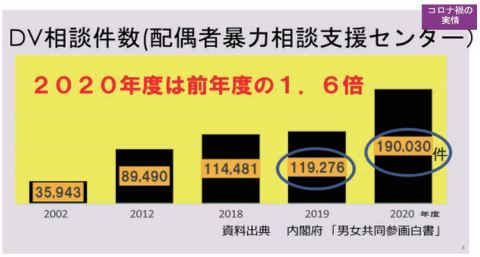
「イエロー信号のはじまり」を見つけることが大切です。DV・デートDVにいたる構図は、これまで見てきたように、まず①上下関係をつくって②支配・被支配の関係に陥らせる。この上下関係が明確になっている場合には、すぐに支配・被支配の関係に移ることがあり得ます。この２つの段階を前提にして、被害が出る一歩手前で気づくことという視点で見ると①の時点で、②に移る前に注意喚起することがとても大切です。この注意喚起の啓蒙・啓発こそ推進委員さんたちの役目です。上下関係が出来上がっていることは、いろんな場面で当然あり得ますが、支配・被支配に陥らせるという連続のところに注意しなければならないということです。

私たちの主張は、ジェンダー平等を実現することによって、男女間で優位劣位の関係がなくなり、自立した個人の形成によって支配・被支配の関係がなくなることです。従って、DV・デートDVをなくすために、ジェンダー平等を目指さなければなりません。ジェンダー平等はそもそもの上下関係の成立を防ぎます。人権意識を持つことで支配関係の成立を妨げるのです。

この後のパネルディスカッションでは、ジェンダーが暴力につながり、DVとなっていくプロセスを話します。人権をも含めた包括的性教育の必要性にまで言及します。それではパネルディスカッションに移ります。

パネルディスカッションのテーマは「主にジェンダーが生み出す暴力であるDV」です。「DVはいけない」と分かっているので、推進委員としてはそこから一歩進めて、DVが発生する直前の行動、いわゆる「イエロー信号」が点る行動を見つけ、警告することができるのではないかと考えています。ジェンダーが生み出す関係性とそこから発生するDV直前の行動について話し合います。第１章コロナ禍のDVの実情、第２章暴力のイメージ、第３章支配・被支配に気づくために～ジェンダーと暴力のつながり、第４章性教育の必要性、の流れで進めていきます。

第１章「コロナ禍のDVの実情」です。まずはコロナの影響を見てみましょう。コロナ禍でジェンダー不平等が拡大しました。今年４月、内閣府「コロナ下の女性への影響と課題に関する研究会報告書」によれば、経済的に弱い立場の者はさらに弱くなり、特に深刻だったのは女性でした。女性労働者の半数以上が非正規雇用であり、コロナ禍で真っ先に非正規雇用の人たちが解雇され、縮小されていったからです。この状況の中で、ジェンダー不平等が拡大しています。DVの相談件数も増えてきました。コロナ前の2019年（119,276件）からコロナ禍の2020年（190,030件）では1.6倍に増えています。この点について、望月さんいかがでしょうか。

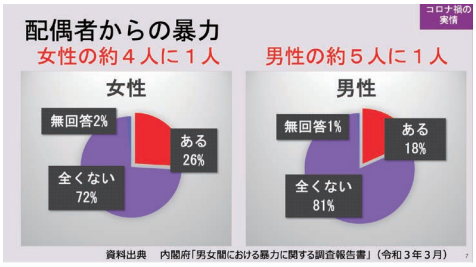


▼望月：この数字は相談をされた方の件数で、相談できなかった方もいるのではないかと思います。相談することが、かなりハードルの高いことを加味して数字を見ていただきたいです。

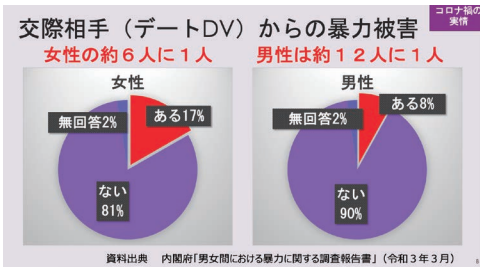
▼山内：DVは婚姻関係や事実婚等の相手への暴力、デートDVは交際相手への暴力です。望月さん、このへんのところを説明してください。

▼望月：DVという言葉はだいぶ一般的になってきました。一方、デートDVという言葉は、なかなか知られていない状況です。交際相手への暴力ということです。結婚、あるいは同棲していなくても、恋人同士の間で暴力は起こっています。高校生、大学生へのアンケートでは、交際しているカップルの３組に１組にデートDVが起きているという結果もありました。若い世代の人たちにとって、デートDVは身近なものであるといえます。20歳以上の男女5,000人を対象にした内閣府「男女間における暴力に関する調査報告書」（令和３年３月）をご紹介します。この暴力とは、身体的暴行・心理的攻撃・経済的圧迫・性的強要です。女性の26%（４人に１人）、男性の18%（５人に１人）が、配偶者からいずれかの暴力被害にあったと答えています。暴力を受けて別れた人は男女合わせて15%、別れたいと思ったが別れられなかった人が36.4%いました。別れない理由の７割は「子どものことを考えたから」。女性では「経済的な不安」が２番目の理由として約半数でした。また、「命の危険を感じた」が女性18.2%、男性５%という結果で、DVという暴力が生死に関わる問題であることを示しています。

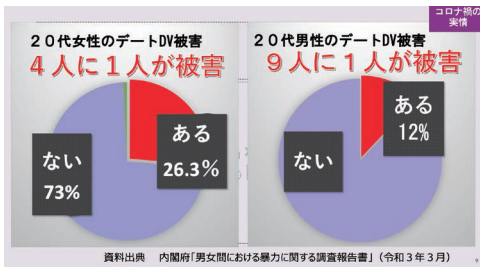


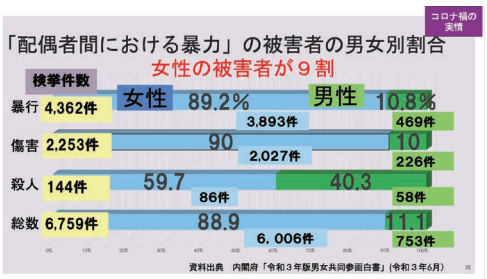


次に、交際相手からの暴力、デートDVです。女性の17%（６人に１人）、男性の８%（12人に１人）が交際相手からの暴力被害があったと答えています。配偶者からの暴力と比べて被害の割合が少し減っていますが、「命の危険を感じた」という割合は結婚している人よりも少し高くなっています。婚姻関係の有無に関係なく、命の危険を感じている人が２割いるという事実が分かります。また、「暴力行為がいつからか」という調査項目では、「10代」と答えた人が、どの暴力項目においても１～３%いて、教育の問題を考えさせられます。暴力の結果、男女ともに３割近くが「自分に自信がなくなった」と答えています。その次に多いのは「夜眠れなくなった」という答えです。暴力被害が自尊感情を低くし、心身に不調をきたすという、健康に関わる問題となっています。つまり、DV・デートDVはコロナ同様、公衆衛生の問題だといえます。



年代別の統計も出ていて、若い年代のほうが、被害が多くなっています。デートDVでは、20代女性の26.3%（４人に１人）、男性の12%（９人に１人）が被害にあっています。次に、DVの実情として、検挙数を見てみます。「配偶者間における暴力」の被害者の男女別割合は、暴行においては女性が89.2%、男性10.8%、傷害においては女性90%、男性10%となっています。検挙した件数の９割は女性が被害者だったことが分かります。暴力の問題や人権侵害の現状は、あまり話題になることは無いかもしれません。それは大人が自分自身の性をどのように考えているかの問題でもあります。家庭・学校において性の話題はタブーであり、なかなか学ぶ機会が無い現状の反映ではないでしょうか。





▼山内：小池さん、望月さんの説明を聞いてどう感じましたか。

▼小池：DVというと男性が加害者、女性が被害者というイメージがありましたが、男女双方に被害者がいることが分かりました。ただ、検挙数は女性が9割の中、殺人だけが男性の被害率が上がるのも気になりました。

▼山内：ここで、DV被害者への支援活動を行っている弁護士の石川恵さんに、DV被害の実態について話を伺いました。ビデオ出演です。ご覧ください。



▼石川：山梨県弁護士会所属の弁護士・石川と申します。よろしくお願い致します。今までのお話でDV被害に遭うことはそれほど難しいことではないとご理解いただけたと思います。弁護士のところにも、DVの被害に遭われた方の相談が多く寄せられています。しかし、法律相談に来られる方はごく一部。大多数のDV被害に遭われた方たちは、法律相談に至らず、現状のまま暮らしておられるか、もしくはDV被害に遭っている認識も無い場合があります。

私は犯罪被害者の支援を長年、行ってきましたが、DV被害者だけでなく、犯罪の被害に遭われた方々に共通して言えるのは、ご自身で判断することがとても苦手だということです。つまり、被害に遭われた方はなかなか、どこかに相談しようという決断もできないのです。特にDV被害者は、いったんどこかに相談しても、また加害者のもとに戻ってしまうことが多くあります。これは被害者の依存心が強いからではなく、加害者のもとにいれば安心できると加害者が被害者に思わせ、被害者の判断能力を奪い、そばにいなければ不安だと思うようにさせています。

第三者からすると、どうして暴力を振るわれるのに加害者のもとに戻るのだろうと思うかもしれませんが、被害者は加害者のもとに戻ることで安心するように心理的なコントロールを受けていることが多いのです。ですので、被害者の支援をされる方は、このような被害者の内心を十分ご理解いただき、再度の相談をするに当たり、ハードルを上げないという工夫が必要だと思います。私のところでも、「また、何かあったら相談してくださいね」と相談の手を全部離さないようにしています。実際、半年、1年たってからご相談に来る方もいます。被害者の支援は途切れなく続けていくことに意味があります。皆さまとご一緒に、少しでも被害者の方々のお力になれればと考えています。今日はありがとうございました。

▼山内：暴力を振るわれているのに、加害者のもとに戻る心理は、かなり厳しい心理だと思いますが、そうせざるを得ない状況に心理的にも追い込まれているのですね。そこにDVの怖さがあると思っています。

第2章「暴力のイメージ」では、DVで用いられる暴力にはさまざまな種類があり、それらが複合的に使われることで、自立した人格的存在である個人が壊れていくプロセスを見ていきます。DV暴力の種類には、行動の制限（社会的隔離）・精神的暴力・身体的暴力・性的暴力・経済的暴力があります。望月さん、これらの暴力について説明してください。



▼望月：最初に、行動の制限（社会的隔離）について話したいと思います。若い世代で最も多いのがこの行動の制限です。暴力と認識しにくいのも特徴です。例えば、即レスしないと怒る、電話に出ないとキレる、メールやアドレスをチェック・削除する、他の異性と話をしないなど「ルール」を決める、交友関係を制限する、服装などに口出しする、いつ・誰と・どこにいるか常に報告させる、自分の予定に合わせるよう強要する、外部との接触を制限する、などです。一方で、好きだから気になって何をしているか知りたい、嫉妬されるのも愛、相手の好みの人になりたい、束縛されて嬉しい、という若者の声も聞きます。しかし、行動を制限されると自分のしたいことができなくなったり、行きたいところに行けなくなったり、自由に選ぶ権利があることをとられてしまうようになります。石川弁護士のお話の中に「自分で判断することが苦手」とありましたが、愛だと思い込まされ、徐々に判断能力を奪われてしまうこともあるのです。

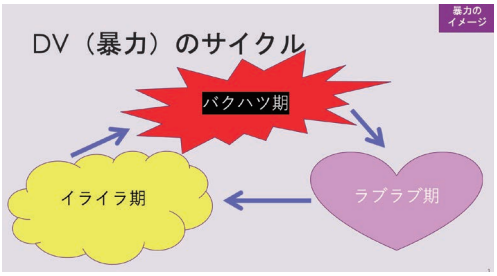
次は「精神的暴力」です。先ほどの内閣府の調査では、「心理的攻撃」と呼んでいました。人格を否定する、無視する、命令する、思い通りにならないと不機嫌になる、大切にしているものを捨てる、別れたら自殺すると言う、暴力の責任をなすりつける、家族に危害を加えると脅す、凶器を見せびらかす、子どものことで罪の意識を与える、暴力を何でもないことだと言う、など相手をコントロールするような暴言や態度です。会社の上司や友人には決してしないのに、配偶者や恋人に行うということは、暴力を振るう側が選んでやっている行為といえます。周りから見ると明らかに脅しの言葉、暴力だと感じますが、親密な関係にあると気づきにくいのです。「自分が悪いから、自分のために言ってくれている」と被害者が自分を責めるということが起きます。常に精神的に攻撃され続けると自尊感情が低くなり、閉ざされた関係の中で、他の人に助けを求めることが難しくなります。DV被害を受けた女性4割、男性6割が「どこにも相談していない」と答えています。理由は「相談するほどのことではなかった」が最も多く、次いで「自分にも悪いところがあると思った」でした。暴力を受けた人が責められるのはあってはならないことです。「暴力を受けたからといって、決してあなたは悪くない」という人権を守る言葉と出会うことによって、被害を受けた人は本来持っている力を取り戻し、発揮して、人権を守る方向に変わっていきます。

「身体的暴力」は叩く・殴る・蹴るなど明らかに暴力と分かる行為ですが、暴力というのは複合的に起きているので、精神的暴力などと重なると、暴力を暴力だと捉えることができなくなることもあります。例えば「約束を守らなかったから」と理由

づけされ、身体的暴力が起こると、「自分のせいだ」と思い込まされることもあります。

「性的暴力」は、同意の無い性的行為をする、「恋人や夫婦ならセックスに応じるべき」と言う、避妊に協力しない、中絶を繰り返させる、同意が無いのに性行為を撮影する、性行為の画像や写真をネットに拡散すると脅す、性的嗜好を押しつける、嫌がっているのにポルノを見せる、などです。WHOは2002年、性的暴力を次のように定義しました。「家庭や職場などの場所や被害者との関係にかかわらず、どんな状況下であっても、強要を伴って人に対して行われる性的行為の全て」。つまり、同意の無い性的行為は全て性暴力と言っています。この考えが日本の中で一般的にならないことが問題だと思います。ストーカー規制法やリベンジポルノ防止法、児童ポルノ禁止法なども成立しましたが、性暴力について学校で学ぶ機会が少ないという現状があります。日本では性教育を進めてこなかったという歴史があり、それがジェンダーの問題だったのです。男女特性論が無意識に浸透している社会では、性的行為においても、男性が女性をリードするのも当たり前になっていて、女性が主体的に選ぶことは女らしくないという価値観が、子ども時代から家庭・学校・メディアから刷り込まれていると思います。男女共同参画社会基本法はこの特性論を否定したというところが大きな特徴だと思いますが、それがまだなかなか浸透していないと思います。

「経済的暴力」はお金の力を使う暴力です。お金によって2人の関係が対等でなくなることは、高校生でも起きている問題です。



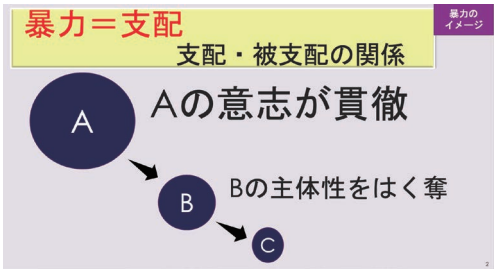
では、どうしてこれらの暴力に気づかないのか、ということですが、DVにはサイクルがあるからだと考えられています。暴力を振るう（バクハツ期）の後、加害者は一転して優しくなります（ラブラブ期）。「もう二度としない」と泣いて謝ったり、プレゼントを贈ったり、「俺にはお前しかいない」と言ったりする。暴力を振るわれた側は相手の顔色を窺ってビクビクし、一方、加害者は自分の思い通りにやっているか監視（イライラ期）をし、また思うようにいかないことがあるとバクハツします。これがぐるぐる回り、この周期がだんだんエスカレートして早くなっていくと、束縛、不機嫌などのさまざまな暴力が起きたとしても、優しい時もあるからこそ、当事者は暴力だと気づきにくいのです。しかし、周りが気づくことは、けっこうあります。大学生へのアンケートでは周りでデートDVを見聞きした人は半数いたというデータもあります。もし、周りで気づいた時は、その人の話を一生懸命聴くことが大事です。それが力になり、その人が持っている本来の力が発揮されます。エンパワメントされることで暴力に気づき、そこから別れを告げることを選ぶ力も湧いてきて、主体性が発揮できるようになるのです。

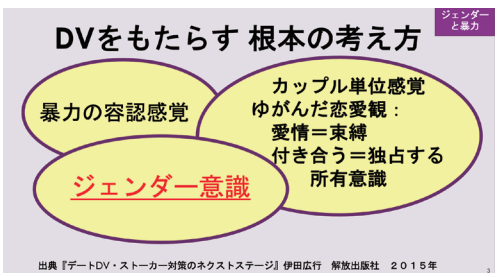
▼山内：三井さん、中村さん、この説明を聞いていかがでしょうか。

▼三井：私が小学生のころ、祖父が事業に失敗したことで父の人格が壊れていくような時期がありました。家にいる母のことが心配になり、登校中、家に戻った記憶があります。今は「面前DV」という言葉がありますが、DVは子どもたちの心にも大きなストレスを与えるのだと思います。

▼中村：今、三井さんが、大勢の皆さんの前で辛い経験をお話ししてくださいました。他の方のカミングアウトにつながりますし、カミングアウトすることで乗り越えられることもあると思います。

▼山内：ここで、まとめておきたいと思います。暴力＝支配、支配・被支配の関係ですが、Aは意志を貫徹するために、Bの主体性をはく奪することが特徴です。ですから、お互いの人権を大切にし、主体性を尊重することで対等な関係となり、DVを受けている側の主体性が壊れないようにすることが大切です。ジェンダー平等はこのような対等な関係を求めていこうとするものです。望月さん、このジェンダーとの関係はいかがでしょうか。





▼望月：DVをもたらす根本の考え方として、まず①「暴力の容認感覚」です。言葉、態度ということまで暴力に含めるなら、振るわれたり、振るったことが無い人はいないのではないでしょうか。いじめ、虐待、体罰、ハラスメントと言われると暴力と認識できます。以前は痴漢も性犯罪ではなく、被害者に落ち度があるような風潮で、加害者を容認している面がありました。私たちの中に暴力を容認する感覚が当たり前にあると言っても過言ではありません。次に②「カップル単位感覚」です。日本の社会が家制度を伝統としていて、家父長的な意識が、無意識の中にたくさん残っています。そこから束縛を愛情と考えたり、所有意識を持つ恋愛観が再生産されたりします。DVは、誰もが持つ意

識、無意識のジェンダー観に基づく社会構造から生まれるものだとされています。

▼山内：第３章「支配・被支配に気づくために～ジェンダーと暴力のつながり」についてです。小川さん、どうお考えですか。

▼小川：私たちはメディアで放送されるＤＶ事件を目にしますと心を痛めます。しかし、それと同時に、ＤＶは人権侵害で暴力は犯罪であると常に意識することが大事だと思います。自ずと自分が取るべき行動も分かります。さらになぜＤＶやデートＤＶが起こるのか、その構造や要因の根本的な考え方を学習しなくてはいけないと思います。若い人たちには、人権を含めた包括的な性教育を学校で年齢に応じて、他の教科と同じように学べる環境が1日でも早く整備できることを願っています。時間はかかるかもしれませんが、最優先でやるべきです。私たちは豊かな人間性を持って自立した若者を育てることがジェンダー平等につながると思います。また、欧米では当たり前になっている加害者更生プログラムも整備を急いでほしいと思います。



▼山内：次は、日常生活で生まれる暴力についてです。一般的に女性は結婚の時強い男性を求め、男性はかわいい女性を求めることがありそうですが、その段階でジェンダー問題があると思われます。望月さんはどうお考えですか。

▼望月：男の子はわんぱくでもいい、男ならやり返してこい、という言葉は子育ての中でよく使われています。「いやよいやよも好きのうち」という言葉は小学生でも知っていて、女の子が嫌と言っているのは、本当は好きなんだと解釈されています。また、ドラマなどをとおして、恋愛においても男性がリードしていくものという考えが内面化しています。スカートめくり、ズボン下ろし、かんちょう遊びも性暴力と認識している大人は少ないです。私たちは暴力を奨励する文化の中にどっぷり浸かり、子どもたちに教育しているのに、無自覚なことが、今、私たちの社会構造として暴力を生んでいるのだと思います。

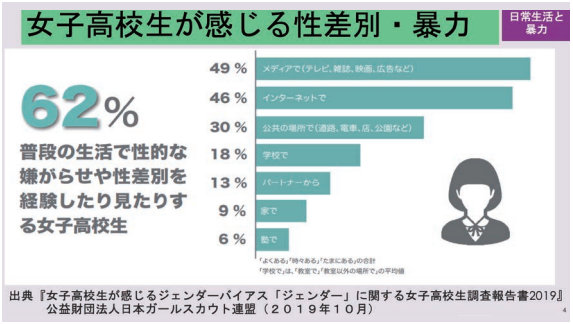
▼山内：小池さんいかがでしょうか。

▼小池：人権、ジェンダー平等を浸透させるのは大きな命題です。若い人たちが、お互いに分かり合い、愛し合うことが難しくならないように、認め合える思いも大事にしたいです。

▼山内：「いやよいやよも好きのうち」なんて言葉はなくして、「いやなものはいや」と言わなくてはいけないということですよね。

▼三井：私も息子には「やり返してこい」と言っていました。でも女の子も強く育ってほしいと思って育てています。

▼望月：女子高校生が感じる性差別・暴力についてのアンケートでは62％が「普段の生活で性的な嫌がらせや性差別を経験したり見たりした」と答えています。この数字について、どうでしょうか。高校生がこんなふうに嫌な思いをしていて、若い人たちにこんなふうに暴力を振るっている社会があるということを大人の責任として考えないといけないと思います。子どもたちは日常的に暴力を振るわれていることを言語化するのが難しいです。知らないうちに無意識に「男はそうしてもいい」「女はおとなしくしておいたほうがいい」という価値観を内面化してしまうことがあります。もう一つ、女子高生が感じるメディアの性差別・暴力についてですが、具体例を紹介します。番組のデートの場面でリードするのは男性で、女性はいつも受け身的な構成。女性が襲われることを題材にするドラマや映画が多い。女性が被害者の事件に対して、女性を非難する声、男性を擁護する声が上がる。何か事件があった時「被害女性にも落ち度がある」という報道がされることがある、などです。ここからは、若い世代がジェンダー意識に敏感であり、それを表現できるようになったことも読み取れます。ジェンダーギャップ120位の日本を変えていくのはこういう若者です。若者・子どもたちにジェンダー平等について考える人権教育を推進するということが、私たちの責任だと思います。



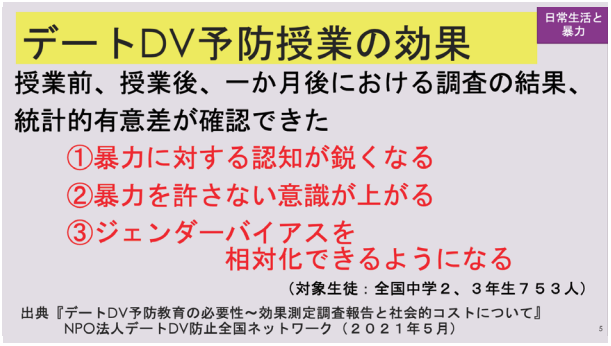
▼山内：ここで、これまでのディスカッションをまとめておきたいと思います。ＤＶというのは、上下関係、支配・被支配の関係という二重構造になっています。そこへジェンダーと暴力を加えると「４つの段階」に分かれます。①ジェンダーによって上下関係が生まれる、②上下関係によって暴力が正当化される、③暴力によって被害者側の主体性が崩れる、④支配・被支配の関係が完成する、です。イエロー信号が点る行為は②の段階です。推進委員さんたちなど周囲の人たちがＤＶを見る時に、ここの点を注意して啓発・啓蒙活動をしていただければいいと思います。

最後は第４章「性教育の必要性」です。予防教育の取り組みですが、20世紀に入ってから、欧米で行われています。ここでの性教育とは、人権問題を含めた包括的性教育を言います。そのことを表しているのが、ユネスコが刊行している「国際セク

シュアリティ教育ガイダンス」です。日本では、性教育を性交渉に限定して危険視する保守政治家たちの立場を反映し、世界標準からは大きく遅れをとっています。望月さん、どう思われますか。

▼望月：このガイダンスでは、就学前から高校卒業まで長い時間をかけて、包括的なセクシュアリティ教育のガイダンスが示されていますが、もう少し短い時間でも性教育の効果が出ています。

ＮＰＯ法人デートＤＶ防止全国ネットワークが、全国の中学２、３年生に行ったデートＤＶ予防授業の効果を測り、以下の結果になりました。授業前・授業後・１カ月後における調査の結果、統計的有意差が確認でき、①暴力に対する認知が鋭くなる、②暴力を許さない意識が上がる、③ジェンダーバイアスを相対化できるようになる、です。教育は暴力根絶、ジェンダー平等推進の大きな力になることを証明しています。ユネスコの「国際セクシュアリティ教育ガイダンス」はユニセフやＷＨＯなどと共同で2009年に出されました。８つの項目をらせん階段式に繰り返し、さらに深くなっていくカリキュラムです。８つの項目は①人間関係、②価値観・人権・文化・セクシュアリティ教育 、③ジェンダーの理解、④暴力と安全確保、⑤健康とウェルビーイング（幸福）のためのスキル、⑥人間のからだと発達、⑦セクシュアリティと性的行動、⑧性と生殖に関する健康、からなります。５歳から、らせん階段式に深めていきますが、ＤＶという人間関係の問題は一番にあります。科学的根拠に基づいて、知識・態度・スキルという３つの面からアプローチしています。こうした包括的なセクシュアリティ教育は国として取り入れるべきことです。



さらに詳しく説明すると、項目③は、「ジェンダー規範の社会構築性」「ジェンダーステレオタイプ・ジェンダーバイアス」「ジェンダーに基づく暴力」という３つのトピックに対し、５～18歳まで繰り返し、内容を深めていきます。５～８歳の間では「ジェンダーに基づく暴力とは何かを知り、直面した時、助けをどこに求めるかを知る」ことを学び、15～18歳では「親密なパートナーからの暴力の経験者へのサポートの存在を知り、人権侵害に反対を主張する責任も持つ」ことを学びます。

ジェンダーの理解　知識・態度・スキル　性教育の必要性

トピック	５～８歳	９～１２歳	１２～１５歳	１５～１８歳以上
ジェンダー規範の社会構築性	セックスとジェンダーの意味と違い・感じ方	ジェンダーアイデンティティの意味と尊重	恋愛関係におけるジェンダー役割への問題意識	自分と他者のジェンダーバイアスに対抗する重要性
ジェンダーステレオタイプ・ジェンダーバイアス	ジェンダーの違いに関係なく他者の人権の尊重が重要だという認識	ジェンダー不平等の力の差は社会に存在することの認識	自分の価値がジェンダーバイアスに影響されていることの省察	ジェンダー不平等は性的行動、虐待や健康サービスへのアクセスに影響し、リスクを高める
ジェンダーに基づく暴力	ジェンダーに基づく暴力とは何かを知り直面した時助けをどこに求めるかを知る	ジェンダーに基づく暴力は人権侵害であると認識ジェンダーに基づく差別や暴力に立ち向かう方法を試す	親密なパートナーからの暴力を含め、性暴力は性的欲望ではなく力と支配による犯罪だと再認識する	親密なパートナーからの暴力の経験者へのサポートの存在を知り人権侵害に反対を主張する責任をもつ

『国際セクシュアリティ教育ガイダンス科学的根拠に基づいたアプローチ』　明石書店　2020年　6

日本においても、こうした教育が進んでほしいと思います。先ほどの内閣府の調査では、無理やり性交等をされた被害体験は女性の14人に１人、その６割がどこにも相談していません。性暴力は知っている人からの被害が多いからです。同意の無い性行為は全て性暴力だという認識を小さい時からの教育により認識し、対等な人間関係づくりを学んでいくことが性教育だと、世界的基準では考えられています。

▼山内：中村さん、何か感じられることは。

▼中村：世界基準からいくと、日本は教育の場で、きちんと子どもを守るために、人権教育の一部として、そうしたことを学ぶ機会が保障されてないのは大きな問題だと思います。私たちのころに比べれば進みましたが、まだまだ取り組まなければならないことがたくさんある問題です。日本に帰って聞いた話で驚いたのが、中高生がよく理解していないまま行った性行為により望まない妊娠をしてしまったというケースの時に、女子生徒のほうが学校をやめることを強いられたという話です。望まない妊娠は、女性だけが抱えなければならないケースがあるというのは、女性の人権としてどうなのだろうと思います。

▼山内：望月さん、性教育の問題を最後にまとめてください。

▼望月：今、中村さんのご発言のとおり、産む・産まないを自分で選ぶ権利がある社会をつくっていかなければならないと思います。ジェンダーに敏感になることが人権尊重につながっていき、そのために、性教育が必要です。







アジアで初めてＤＶ防止法を制定したのは台湾。台湾では小中学生が１年間に８時間以上の予防教育を９年間受けるしくみが構築されています。各学校は実施状況を教育省に報告することが義務付けられていて、性教育が20年前から徹底されています。日本では性の話題自体がタブーですが、これを変える動きがわずかに

文科省において生まれました。今年４月、生命（いのち）の安全教育の手引きが公開され、民間教育団体、支援団体、福祉医療関係者がずっと前から長い間取り組んできたことを踏まえています。そこに、人権という視点を入れたり、このガイダンスに基づいたりして、国際基準のセクシュアリティ教育を全ての子どもたちが受けられるようにするのが大人の責任だと思います。

▼山内：それでは、今日のパネルディスカッションで感じたことを一言ずつお願いします。

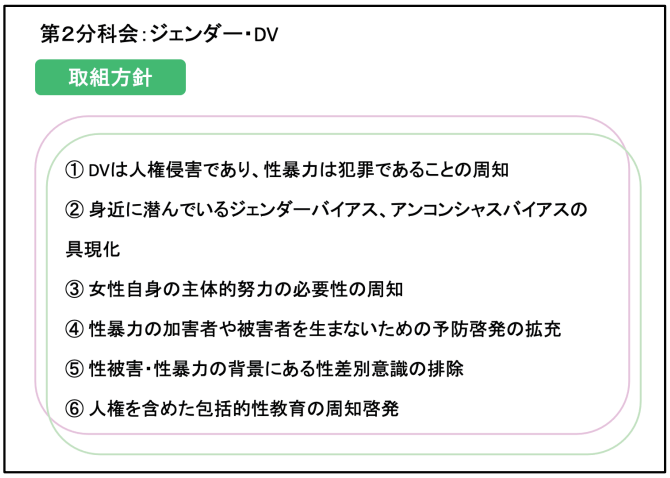
▼小川：先ほど、望月さんの「暴力を容認している社会全体が問題」というご指摘がありましたが、無自覚に暮らしていた私自身の反省でもあります。また、被害が出る一歩手前のイエロー信号で気づくことが重要だということが心に残りました。そして予防や防止に社会全体の理解が必要だと感じました。その一番としては、国際セクシャリティ教育ガイダンスのような、年齢に応じたカリキュラムを日本でも実現することが大事です。社会の関心をもっと呼び起こさなければなりませんので、啓発や学習を根気よく継続していくべきだと感じています。推進委員の役割の一つだと思っていますので、いろんな活動を推進していきたいです。目的は誰も被害者・加害者にならない、傍観者にもならないということだと思います。

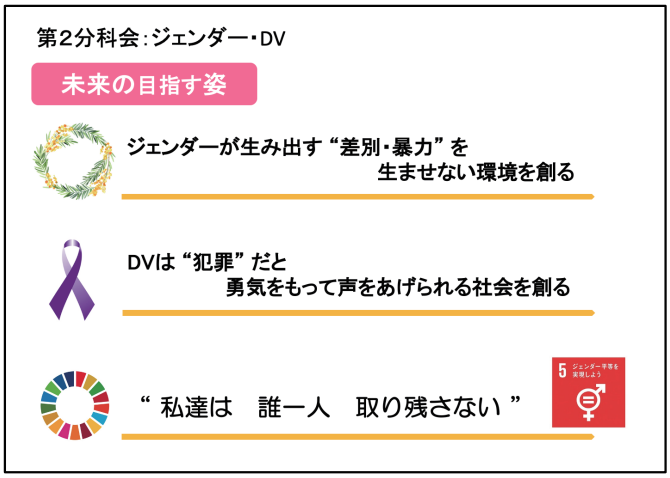
▼小池：ジェンダー平等社会が当たり前のものになることが目指すべき姿だと思います。上下関係や支配・被支配、DVから脱却したり、イエロー信号を見逃したりしないために、教育や社会の環境づくりが大切だと思います。DVのたくさんの事例が出てきて、怖いなと思うこともありましたが、恐怖心と隣り合わせではなく、大いに恋愛を満喫してほしいので、社会の中で皆が認め合う、分かり合う感覚を持ち合わせることも大切だと思っています。

▼中村：私自身、たくさん学ばせていただきました。ありがとうございました。

▼三井：子どもが４人いて、社会人もいますが、まだ教育の途中だと思いました。家庭が一番の資本なので家族仲良くやっていくのが一番だと思っています。

▼山内：さて、皆さん、私たちの議論はいかがでしたでしょうか。有意義でしたでしょうか。もしそうなら、嬉しい限りです。皆で日本をジェンダー平等の社会へつくり変えていきましょう。女性にとっても男性にとっても、皆が暮らしやすい社会にしていこうではありませんか。新しい日本、ジェンダー平等の日本を目指して頑張りましょう！そしてコロナの中、生き抜きましょう！最後までお聞きいただきありがとうございました。





分科会 3

子どもの教育・子どもの貧困

10月23日（土） 第1部 10:00～11:30 第2部 12:30～14:00

講演・パネルディスカッション

It Takes a Village.“村じゅう　みんなで”
～よそのボコも　うちのボコ　おらが村をこせえるじゃん～

講師・アドバイザー
荒牧 重人
山梨学院大学法学部教授

講師・アドバイザー
津富 宏
静岡県立大学国際関係学部教授

コーディネーター
芦澤 郁哉
NPO法人bond place理事

発表者
加藤 魁人
山梨県立大学２年生

発表者
久保田 優羽
山梨英和大学４年生

発表者
清水 そら
山梨大学３年生





【第1部】



▼芦澤：第3分科会「子どもの教育・子どもの貧困」を始めさせていただきます。私は司会進行を務めさせていただきます、第3分科会運営メンバーの芦澤郁哉と申します。本日は11時30分までの90分間の分科会になりますので、皆さまよろしくお願いいたします。今、オープニングで本日の進め方を確認させていただき、その後、第3分科会の趣旨の説明や、皆さんと一緒に今日考えたいことをお話しさせていただきます。その後、ご講演をお二人にいただきます。

まず、一人目は山梨学院大学の荒牧さん。「子どもの権利と子どもにやさしいまち・コミュニティづくり」というテーマでお話しいただきます。その後、静岡県立大学の津富さんから、「困りごとから始めよう」ということで、お二人にご講演をいただいた後に、参加者の皆さんからチャットでご質問をお受けするという予定です。分科会のお話を聞きながら、疑問に思ったことや、大事だなと思ったことなど、チャットのほうに書き込んでいただければと思います。次に、第３分科会の趣旨説明と本日皆さんと一緒に考えたいことということで、第３分科会の運営メンバーであります副リーダーの福田さんよりお話しさせていただきます。福田さんよろしいでしょうか。



▼福田：はじめまして、山梨YMCAの福田と申します。第3分科会で副リーダーをしています。この第３分科会は、「子どもの教育・子どもの貧困」をテーマに、子どもたちに関するさまざまな民間の団体の人たちと準備を進めて参りました。その中で、私たちが大事にしたいこととして、アフリカのことわざ「子どもをひとり育てるのに、村がひとつ必要だ」があります。この古い言葉に感銘を受け、そのコンセプトで私たちは子どもたちと育ち合うようなコミュニティづくりはどのようにしたらいいのだろう、そんなまちづくりができたらいいね、という話になりました。特別に子どもたちを支援の対象として取り扱うというよりも、魚屋さんとか、近所のおばさんとか、いろいろな関わりの中で一人の子どもを共同体で育て合う、子どもを育てることで村も育っていくような関わりを作れるまちづくり、そして、子どもたちの関わりを作り、そのため

の思いを皆さんと分かち合う、そのような場にして、一緒に自分たちの言葉を語り合うことを大事にしたワークショップ、分科会にしていきたいと思っています。

タイトルは「It Take a Village. “村じゅうみんなで”」という先ほどのことわざ、そして、「よそのボコもうちのボコ おらが村をこせえるじゃん」というのは山梨の話し言葉、甲州弁です。ボコというのは子どもという意味です。よその子どもも自分の子どもも同じ、皆で子どもたちを育てよう。そして村をつくっていく、コミュニティを育てることになる。皆さん自身が、自分の言葉で子どもの育ちや、まちづくりということを語り合える場にしたいと思っています。どうぞよろしくお願いします。

▼芦澤：ありがとうございます。本来なら全国から皆さんに集まっていただいて、子どもというものを中心に考えて、それぞれの立場の人が、どのように関われるのか、皆さんとお話しできることを本当に楽しみにしていたのですが、このようなオンラインという形になってしまったので、もしかしたら、皆さん同士で交流するとか、話をするのは少し限定的になるかもしれませんが、オンラインだから参加できたという方もいらっしゃると思いますので、このご縁を今後につなげたいと思います。それでは次に進めさせていただいて、ここからは山梨学院大学の荒牧さんからご講演をいただきます。



▼荒牧：改めましてこんにちは。荒牧重人と申します。日本女性会議でこのような報告ができることを光栄に思います。私の話は、理念的な話が中心になることをお詫びします。具体的な取り組みは、次の津富先生にお譲りします。私の話は大きく分けて2つ。1つ目は子どもにやさしいまち・コミュニティづくり。2つ目には、その際、基本に置かれるべき子どもの権利ということであります。現代の子どもたちに起きていることというよりも、その課題のために模索していることを主に話します。

この話の前提となりますが、1番目は、日本の子育ての伝統というのは、地域コミュニティで子どもを育てることです。その家の子どもということではなくて、地域コミュニティで子どもを見守り、関わり、育てるということが、長い間の伝統でした。前提の2番目は、子育て支援は、子ども支援につながらないと効果があるとは言えないということです。よく「子どもは未来の担い手」と言われますが、「今を生きる主体」でもあります。また「子どもは社会の宝」とも言われます。そのとおりですが、「子どもは社会の一員・構成員」です。それにふさわしい地位や役割があるのかということが問われています。もう一度言いますが、子育て支援は、子ども支援と両輪で取り組む必要があるということです。それから前提の3番目として、子育て支援が進んでいる国や地域は、子育て支援策そのものだけではなく、女性の地位や権利、子どもや若者の意見表明参加に取り組んでいるということです。前提の4番目として、私たちは地方自治や、国際的につながる子どもの権利、国際標準である国連の子どもの権利条約、さらに子どもの権利を実現するしくみや制度、内容や理念だけではなく、そのための制度やしくみの構築、それから連携・協働などを大切にしてきました。前提の5番目として、今話題になっている「こども庁」設置の議論でも、総合的な子どもの権利を保障する子ども基本法というのが必要で、自治体が総合的な子ども条例を作る意味でもあります。

話の柱の1つ目が、子ども問題というのは子どもの権利や視点、方法で考え取り組むことの必要性であります。このことは国際的には当たり前のことです。申し遅れましたが、ここで言う子どもの権利は、荒牧の学説とか、芦澤さんの見解ではなく、国連が全会一致で採択をした「子どもの権利条約」の趣旨や規定をもとにするということです。

ここでは、子どもの権利を強調する意味として、4つ述べたいと思います。

1つ目は、そもそも論で、子どもも独立した人格と尊厳を持つ権利の享有・行使の主体であることです。自己肯定感というのがこの権利の享有・行使の前提となるものです。

2つ目は、育てる・育てられる、教える・教えられるという関係を、一方的な関係にしないということです。

3つ目は、子どもの権利だけが保障されることは基本的にありません。これが子どもの権利の特徴でもありますが、子どもの権利と子どもを支援する側の権利の両方が保障される必要があるということです。

4つ目は、縦割り行政とよく言われます。世代割りというのも私が流行らせようとしていますが、あまり流行りませんでした。生まれる前後は医療や保険で、生まれてからは児童福祉、学齢期は教育行政で、それから外れたり学齢期以降は青少年対策というような、世代割りになっている行政の問題点を克服して、総合的・継続的・重層的に施策を考えていく上でも、子どもの権利は重要であります。

もう1つ、子どもの権利から子どもを捉えてみると、次の3つがよく言われます。子どもは一人の人間である、子どもは子どもである、子どもは社会の一員・構成員であるということです。子どもが一人の人間であることを基本として、トータルに子どもを捉えることが必要になっていると思います。子どもは単に対象ではなくて、自らの人生の主人公であり、問題解決の主体であります。単なる対象から、自ら選びながら成長していく主体として、支援していくことが重要です。国連の子どもの権利委員会も言っていますが、乳幼児もその権利の享有・行使の主体であります。先程、子どもの権利をめぐって主張されることとその問題点をお話ししましたが、子どもの権利というのは命の権利で、そして成長・発達に関わる権利があるということ。命とい

うものが大切であることは、けっこう強調されますが、その命の権利がある。その権利というのは、皆持っているものなので相互に尊重する。そしてこの議論は、感情論でもなく抽象論でもなく、具体的な場面ですることが大切であると実感しています。誤解を恐れずに言えば、子どもの権利を尊重・大切にしようとする人と、否定的な人の分かれ道は、究極的には子どもが持っている力を信頼しているかどうかということです。

柱の2つ目、子どもにやさしいまち・コミュニティづくりということに入ります。この基本的な考え方は、子どもがダメ、親・家庭がダメ、保育士・園がダメ、教職員・学校がダメ、地域がダメという「ダメダメ論」ではなく、「ダメダメ論」は私たち研究者が得意とすることですが、その視点や対応を越えて、子どもがともに育つまち・コミュニティ、子どもとともに育つまち・コミュニティづくりが必要です。この分科会のテーマでありますように、子どもの育ちを村じゅう皆で支えるということが重要になっていると思います。このことは昔に戻れということを主張しているのではありません。柱の1つ目で述べたように、子どもを独立した人格と尊厳を持つ権利の主体であることを前提にして、まち・コミュニティで子どもの育ちを支える、という新しい形態であるということです。

早めに言っておきますが、子どもにやさしいまちというのは、全ての人にやさしいまち・コミュニティであるということです。これは障がいがある人の生きやすい・住みやすいまちというものを考えてみれば、すぐに分かることだと思います。ユニセフが、子どものやさしいまちというのを主導しています。私たちはユニセフよりも先に取り組んでいたのですが、日本においてユニセフの評判が圧倒的に良いので、ユニセフを利用して、ユニセフも言っているというようにしています。「子どもにやさしいまち・コミュニティ」の定義は、子どもの権利条約を実現している、実現しようとするまち・コミュニティであります。

ここでは、「子どもにやさしいまち・コミュニティ」づくりの基本戦略を少し説明したいと思います。

1番目は、子どもにやさしい枠組みを整備するということです。このことは、「子ども条例」を制定・実施するということにつながります。先ほども言いましたが、国レベルでは子どもの権利を尊重する総合的な基本法が制定されていません。したがって、総合的な子ども計画も策定されていませんし、子どもの政策を調整する部署も無いといえます。山梨県では、甲府市が「子どもの未来応援条例」という総合的な子どもの権利を尊重する条例を作っています。県レベルでは、議員立法で今、「子ども条例」を作成しようとしています。

2番目は、意識啓発です。このことで重要なのは、子どもが本来持っている権利を子どもに伝えること、もちろん子どもだけでなく大人も知ることが重要ですが、子どもに伝えることが肝要であります。条約では42条に独立した条文で、子どもと大人双方に条約の趣旨や規定を周知させることを求めています。また日本では、学校カリキュラムに子どもの権利や条約を盛り込むことを、国連・子どもの権利委員会は日本国に勧告をしています。

3番目は、総合的・戦略的な計画を立てるということです。自治体では基本計画、マスタープラン、次世代の計画、子ども・子育て計画、教育計画、いじめ防止の方針など多数あります。しかし、子どもの権利ということがどれだけそれらの中に位置づけられているかを問うことが重要です。一部の自治体では子どもの権利を中心として、若者施策に通じるような、子ども・若者計画を立てている自治体もあります。

4番目は、子どものために十分な予算の確保ということです。子どもの育ちや子育てにはお金がかかります。それにふさわしい予算になっているかということ。そのためには、子ども関係の予算をより見える化していくことが必要です。

5番目は、庁内の調整会議とか、子ども施策を中心に担う部署が必要です。これは単なる名称変更ではなく、実質的にどこまで総合化できているかということが重要です。特にこの分科会で言えば、教育分野というのは取り込めていません。

6番目は、子どもにやさしいまち・コミュニティづくりの中心的な課題である、子ども参加ということです。この子ども参加も、制度を作っていくということと、決定に参加をする過程が重要であると思います。子どもの声に私たちはどこまで耳を傾けているかということ、もっと言うと、子どもをあてにしてともに作り上げているか、子どもを対象にしていないか、ということがあります。子どもの意思・意向を確かめるためには時間もかかりますし、信頼関係も重要であることを付け加えておきます。このポイントは、まず子どもの参加は権利であるという認識や位置づけが必要です。皆さんのように、物分かりが良い大人であれば、子どもの意見・思いを聞くということができますが、大人の視点でおとなの都合の良い時に聞けば良いということではなくて、子どもの権利であるということです。この権利であるということだけでは不十分で、子ども自身が伝えることができる制度やしくみが必要であるということです。皆さんの自治体では子ども自身が、例えば児童館とか児童センターに申し込むことができるか、子どもがその運営に参加するようにしているかどうかが問われます。また、今どきの子どもは時間がありませんので、参加の支援や時間の保障、場とか人の関わりなどが肝心です。また、子どもの意見表明・参加によって、どこまでエンパワーメントをしたかを確認することが大事です。従来では、一番参加した子どもが「やっぱりこのことができなかった」と言います。しかし、はたから見るとしっかりエンパワーメントしている。そのことを子どもに伝えるということが重要です。また、個別の状況・必要に応じた参加支援をすることも重要です。それから、さまざまなレベルでの、子どもの意見表明・参加

の取り組みを連携することが必要です。

時間も限られていますので、最後に、データ・エビデンスの収集ということの重要性を強調しておきたいと思います。現状でも、子どもたちの現実というものはしっかり把握している場面がありますが、それは行政部署とか関係施設などで留まっている可能性があります。市民との連携・協働を行うには、個人情報やプライバシーの保護に十分に考慮しながら共有することが重要です。また、子どものために独立した権利救済・擁護活動の必要性を、ユニセフは強調していました。このことは地方自治法では不十分なので、条例ということで自治体の法に規定する必要があります。

まとめとして、2つのことを申し上げたいと思います。1つ目は今注目されている、子どもの育ち・子どもの支援ということの取り組みの多くは、目の前の子どもの生きること自体に向き合うということです。「生きる」ということが、その子どもの安心とか、条約のキーワードでもあり、子どもの問題に取り組む時の観点でもあります。子どもの最善の利益を、一つひとつ考えて応えていくと、連携・協働が不可欠になります。2つ目として、子どもの権利を実現している活動・取り組みが多様に存在しています。これまでの取り組み・活動の成果を確認して、共有することが大切であることを述べて、私の話を終わります。ありがとうございました。

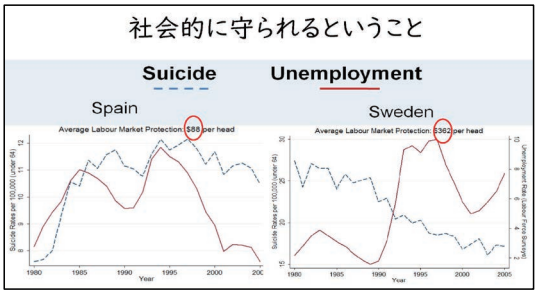
▼芦澤：ありがとうございました。30分という短い時間の中で大切なことを伝えていただきました。それではこのまま静岡県立大学の津富さんにご講演いただきます。



▼津富：静岡県立大学の津富です。よろしくお願いします。学生との活動や、地元静岡の皆さんと活動した話を織り交ぜながら、皆がつながって困ったことの解決ができるだけではなく、皆の関係性が変化するといいな、というお話をさせていただきます。私の自己紹介ですが、少年院で法務教官として19年働いてから、静岡県立大学に移ってきました。社会活動として市民の皆さんと行っている青少年就労支援ネットワーク静岡と、学生と一緒にやっている静岡学習支援ネットワークがあります。後者は、もとは中学生の学習支援をするサークルで、私がサークルの顧問をしていたのでそのまま代表理事になりました。

最近思っていることですが、困りごとから始めようという時にはいろいろな解決の方法があると思います。専門家を呼んで解決しようという方法もありますが、あるいは大きなしくみ、国などに関与してもらい解いてもらうなど、いろいろな解き方があると思います。もちろん、国には国の責任がありますし、それを投げ出したほうがいいと言っているわけではありませんが、相互扶助についてはすごい興味があって、ここ10年くらい自分自身が皆さんとやってきたと思っています。

少し大きな背景の話をしますと、グローバリゼーションとかグローバリズムなどと言ったりしますが、例えばリーマンショックはグローバルな現象ですが、そのあと日本でも景気が悪くなり、荒れた10年が始まり、EUヨーロッパ諸国も大変なことになりました。『THE BODY ECONOMIC』という本があり、それが翻訳されて『経済政策で人は死ぬか？』という本になっていますが、リーマンショックのあとの緊縮政策の結果、医療費を抑制した国々がヨーロッパにはたくさんあり、とりわけ国の財政が破綻に貧したギリシャとかスペインなどの南欧の国がそうだったのですが、実際に経済政策を変更することによって、さまざまな疾患により死亡率が上がったということを示している本です。だから経済政策で人は亡くなってしまうという話で、コロナ禍はまさにその典型で、日本でも保健所を緊縮政策で閉めてしまったことが問題となり、多くの方が指摘しています。



一つの例ですが、2つグラフがありますが、左はスペイン、右はスウェーデンです。スペインは非常に緊縮政策で打撃を受けた国です。スウェーデンはご存じのとおり、いまだに福祉国家を保っている国です。青い点線は自殺で、赤い線は失業です。スペインは青い線と赤い線が連動していることが分かりますが、人が仕事を失うと、社会保障が無いので自殺して亡くなる方が増えるということです。スウェーデンは無関係ですね。そもそも最低賃金が全く違います。赤丸ですが、左は88ドル、右は362ドルです。結局、人の命は何によって決まっているかというと、このようなマクロな経済政策、あるいは社会保障・福祉政策といった福祉に、人の命が関わってしまっていることを示したものです。これ自体が直ちに相互扶助の話ではありません。私が気にしているのは、各国によって状況は違いますが、このグローバリゼーションの中で私たちが生き延びていくためには何が必要かということです。国家施策も必要ですが、ひとまず生き延びるためには何ができるのかということです。先ほど申し上げた話で、ギリシャは、結局ドイツの銀行にお金を借りていたために、破綻させられてしまいました。近くの韓国ではIMFの改革が入ってやられてしまったわけですが、まったく同じことがリーマンショックでギリシャに起きたわけです。ギリシャでは国内総生産が劇的に減り、インフラで民営化されました。なお、日本でも私たちの静岡県では、浜松市の水道民営化が社会的な問題となっています。

しかし、ここで重要なのは、ギリシャでは生き延びるために、さまざまな相互扶助のしくみが立ち上がっていったということです。国家施策に大きな欠陥があったとしても、あるいはグローバルな経済に欠陥があったとしても、生き延びるためのさまざまなしくみを作り出していく、その力が私たちには備わっているということです。スコロスというのはアテネの団体ですが、彼らは、「私たちは自分たちが費やした力が失われることを決して嘆いたりしません、連帯社会そして協力を信じているからです」と言っています。今日は、大きな話から入っていますが、グローバリズムは、日本も含めて世界全体を覆っていますが、それに対して何らかの取り組みをしようとしている仲間は世界各地にいます。そこから私たちは学ぶことができます。

さて、今回も大学生に発表いただきますが、さまざまなことが私たちの身近でも起こっています。一つは「たべものカフェ」です。私がやりましょうと言ったのは事実ですが、実際運営しているのは学生ボランティアセンターという、昨年度から始まった団体です。ただし、この活動は大学から好意的に受け止められていません。持続可能性の問題や子どもの貧困の問題はもともとあったものが、このコロナ禍でさらに深刻な形で現れてきたものです、コロナが無くなったからもう大丈夫というものではないと思っています。そこで、今回明らかになってきた学生の困難を解こう、という学生団体も始まりました。この「学生助けたいんじゃー」は、現在8名で行っています。

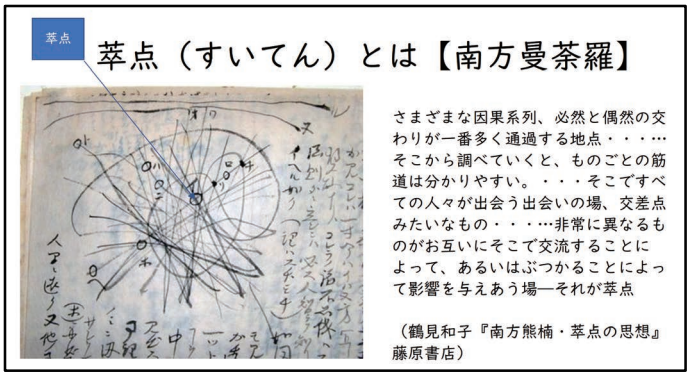
もう一つ別の取り組みで、これはもっと緩やかなものですが、何か困りごとがあったら発信して、助けてねというやりとりができる「たよりジョーズたよられジョーズ」というLINE（ライン）グループです。困りごとはさまざまですが、コロナ禍での孤立化という問題が大きいので、一緒にごはんを食べたいとか、一緒に散歩したいとか、いろいろあります。先輩や後輩、学部を超えて、いろいろな人が入っています。履修の仕方が分からないとかもあります。オンライン(Zoom)でミーティング・雑談会を行って、親睦を深めながら簡単に、頼れる・頼られる関係を作っています。私も一緒に行ったのですが、スペインで目にした時間銀行がもとになっています。時間銀行というのは日本にもアメリカにもありますが、スペインの時間銀行に学んだ4年生の学生たちが中心になって作りました。

このようなことをやりながら私自身が大切にしていることは、まず一つは運営チームを作ることです。核が無いとなかなかこういう活動は続かないと思います。それから意義を理解することです。「たよりジョーズたよられジョーズ」は、もともと時間銀行からきたものです。時間銀行とは何かというと、お金ではなく時間をやり取りするものです。やり取りする時、人のためにお互いの時間を使い合うというコンセプトが大事だということです。やっている人が楽しいか、自己組織化していけるか、徐々に広がっていけるかということです。そんなことを大切にしてさまざまな活動をしています。

今日は村をつくっていくというテーマですが、すでに村はなくなっているというのが私の認識です。私たち一人ひとりは社会的に孤立していますから、新たに自分たちが作り上げていく、自分たち自身が動かす自分たちのためのコミュニティを作っていくことになります。本日のテーマはそういう意味だと理解しています。

そこで、私の社会活動の一つである、青少年就労支援ネットワーク静岡の活動を困りごとから始めようという観点からご紹介いたします。私どもの理念には、相互扶助という言葉が含まれています。クロポトキンは、無政府主義者で有名ですが、『相互扶助論』という本を書いています。私は、犯罪学の研究者で、例えば薬物を使ってしまった薬物依存の方々のダルクとかいったセルフヘルプのグループに興味があります。ダルクのような集まりは、自助グループ、セルフヘルプと言ったりしますが、実際には「ミューチュアルヘルプ＝相互扶助・相互支援」で、自助ではなく共助のグループです。やっぱり人は一人では生きられない、助け合おうということです

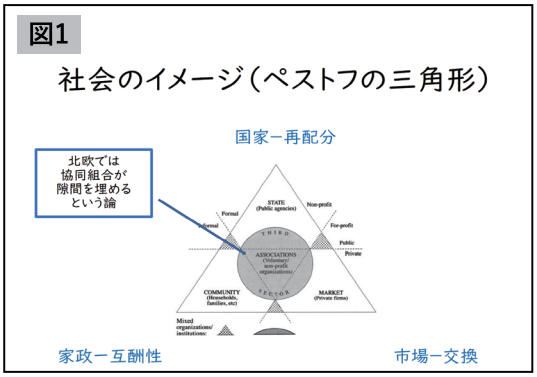
最近、私の考え方の支えになっている概念が、南方熊楠、明治の大学者ですが、彼の萃点(すいてん)という概念です。これは、彼が描いた南方(みなかた)マンダラという、宇宙を表現している図です。マンダラのど真ん中にイロハの「イ」があります。つまり、このど真ん中が萃点で、全ての人々が出会う出会いの場、交差点みたいなものだそうです。私は困りごとが「イ」の所だと思っています。困りごとを巡ってそこに人が寄ってきて、なんとかできるのではないかと思って、井戸端会議から始まるというイメージです。



私たちの団体は就労支援のボランティア団体で、ボランティアをやってもいいよという人がいるところに、困りごと、つまりは相談者の方が入ってこられる。困りごとを巡って、相談者の方が地域の方に紹介をしていく。萃点を形成していくわけです。困りごとを巡って皆で情報共有をします。関わる人を絞り込んで困りごとに関わるチームを作ります。例えば先ほどの「たよりジョーズたよられジョーズ」ですと、だれだれさんが「ピアノを弾きたい」という困りごとが投げ込まれると「教えてもいいよ」「一緒にピアノを弾けるようになりたいよ」という人が集まってチームができる。こんなふうに、構造は全く一緒です。当然

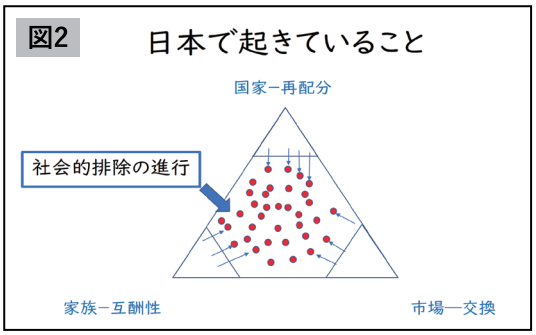
のことながら、ある困りごとを持っている人が他のことでは助けられる、その人がまた他のことでは困っている、というような連鎖ができてきますので、こうしたしくみを作れば地域や大学は覆い尽くされていくと思います。萃点というのはそういう意味で、人が集まってきて、ごちゃ混ぜになって、そこから動きが始まり、化学反応が起きる場だと思っています。

グローバルな話に戻しますが、これはペストフという研究者が考えた「ペストフの三角形」(図1)と言いますが、社会をイメージしたものです。大きな三角形があります。その中に小さい三角形があります。それぞれ、国家・市場・家政です。一つの社会を、国家・市場・家政という三つの小さい三角形が支えているという図です。



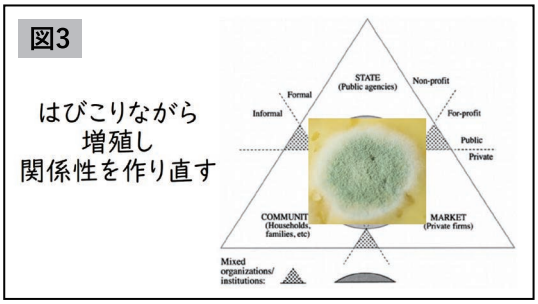
それぞれの国家・市場・家政は異なる経済原理を表現しています。国家が再配分、市場が交換、家政が互酬性です。経済といってもお金のやり取りを意味しているとは限りません。経済とは必要な財やサービスを手に入れるためのしくみです。人は再配分を受けたり、交換し合ったり、互酬性の原理で財やサービスを手に入れて生き延びていくわけです。どうしても国家や市場や家政によって上手くカバーできないエリアが真ん中にあります。黒丸で書かれていますが、ペストフは、そこはアソシエーション、北欧で言えば協同組合が覆ってくれるというイメージをもっていました。北欧の子ども政策もアソシエーションが担っていると思います。

しかし、日本はもともと福祉国家ではありませんので、経済が悪くなってくると総崩れになってきます。図2のように真ん中は、アソシエーションによって覆ってもらえるわけではありません。日本にもNPOはあるのですが、それでは覆いきれず、真ん中はむしろ孤立化した方々、無縁化した方々が放り込まれていく場になっています。そこをもう一度、困りごとから始めて、自分たちのこの空白を自分たちで問題を解き合える場面として作り直していけるのではないかというのが、今、私が実際にやりながら思っていることです。



このことを考えている時に出合った言葉があります。一つは親鸞の言葉「いし・かわら・つぶてのごとくなるわれら」です。親鸞は宗教者ですから、こういう我らなんだけども、ある教えを信じることによってつながりながら救われるということでしょう。キリスト教の神父さんの本田哲郎先生も釜ヶ崎にいらっしゃいますが、「貧しく小さくされている人たちをとおして神がはたらかれることを信じて、その人たちと連帯する」と言っています。本田先生は、単にお祈りをしている方ではなくて、労働運動と連帯して、釜ヶ崎の環境そのものを変えていく運動家・活動家です。こうした言葉には、そこに困りごとがあって、困りごとを抱えた人々がつながり合うことによって、社会が変わっていくというイメージが共有されていると思います。

最近思っていることは、私たちは一度社会から捨てられたと言うと大げさかもしれませんが、社会的な排除、要するに社会的弱者としで一旦、真ん中に捨てられたものが、もう一回、「リ・オーガナイズ」(再組織化)することで生命力が宿るということです。図3の写真はカビですが、非常に力強い生命力でつながり合って、むしろ国家や市場や家政を、塗り替えていくことができるのではないかと考えています。「リ・オーガナイズ」という言葉を使いましたが、日本語では再組織化です。「編み直し」とも表現をしています。編み直しによって、就労支援の現場では何ができるのかと言いますと、いくつかの事例を書かせていただきました。



25歳の男性で発達障害をお持ちで、家庭的にも恵まれない方ですが、いろんな方がこの方と関わっていくわけです。その結果として、だんだん元気が出てきて、勉強もして、次へチャレンジしています。次の方も大変な方なんですが、私たちが静岡で関わった方で、お家の納戸に入れられて育てられてしまった方です。この方にも本当にいろんな方が関わりながらやっと一人暮らしができているという状況です。

私たちが大事だと思っているのは一人ひとりのストーリーに現われる登場人物を増やすこと。要するに、その人が萃点になっていくということです。たった一人で孤立するのではなく、そこにさまざまな人がいる出会いの場として「こんにちは」「なにかできることないかね」と言う場です。身近な私たちが互いに切り離されるのではなくて、自分たちのコミュニティを自分たちで動かして、自分たちのためにやれることをやっていくことをやっている。このようなことが私たちの団体で活発に行われています。他にも袋井市や掛川市、磐田市などにも活発な団体があり、地域の組織化は始まっています。これを別の言い方で

は「社会的包摂」と言ったりするのだと思います。

自立相談支援センターというのは生活困窮者自立支援の事業です。現在は別の団体が受託していますが、私たちも2回ほど受託しました。受託している間は、ここに困りごとが入ってきました。困りごとが入ってくると、それを市民の手に渡すことができます。出会いながら支援を仕掛けていくわけです。ど真ん中にある困りごとが私たちを活性化していきます。

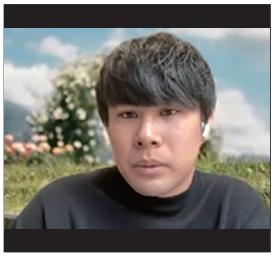
同時に、社会の組織化ということに興味をもって、コミュニティ・オーガナイジングの勉強をさせていただきました。沼津市では、コミュニティ・オーガナイジングについての一般市民向けの研修を、県立大のお金も使って行っています。大学でも同じ授業をしています。今日参加いただいている芦澤さんもかつてその授業を受けてくださいました。

コミュニティ・オーガナイジングは、特定な訴えごとがあって、それを実現する手法ですが、それだけでは十分ではなくて、社会経済的なしくみ全体をリ・オーガナイズする必要があると感じています。そこで、先行しているスペインや韓国の話を伺って、私たちの社会の未来像についても議論しています。

コロナ禍になり、沼津市の場合は、昨年3月に学校が休校となり、ひとり親の方が困ったので、ただちに配食サービスを行いました。これは現在も継続しています。まだできあがっていませんが、沼津市民シンクタンクというものを作ろうと、一旦解散し、また再度立ち上げていますが、やっぱり自分たちのまちを何とかしていくためには、市民が自分たちの力を結集できるまちづくりが必要だろうということで改めて動いています。

私自身が参照している動きは、ヨーロッパにおける動きが中心です。例えば、ネグリとハートです。ネグリはイタリアの運動家で、彼らが南欧の運動に刺激を受けながら提示しているのは、『帝国』に始まる一連の著作で、帝国とはグローバリゼーションで、それに対抗するのがマルチチュードです。マルチチュードは複数形ですが、私「たち」のことです。単一の存在ではなく、さまざまな問題意識やさまざまな集団が、ばらけずに連帯して社会を変えていく主体であることを表現しています。欧州では、ミュニシパリズム、つまり、自治体主導の反グローバリゼーションの動きがありますが、この主体もまた、市民運動の連合体であるマルチチュードです。また、『ケア宣言』という本の第３章「ケアリングコミュニティ」にはこんなことが書かれています。「相互扶助・公的な空間・共有された資源・ローカルな民主主義」、私たちがやっているのは、こういったものをベースに協働でケアする地域をつくっていくということです。本日は、子どもということがテーマになっていますが、子どもはケアを必要とする対象であり、ケアに満ちたコミュニティを作っていく仲間でもあると思います。ですから、さまざまな相互扶助への子どもの参加を、一緒にやっていくことが大事だと思います。

最後に、ピョートル・クロポトキン著、大杉栄訳の『相互扶助論』、最近読み終わった本についての話です。なぜか大杉栄は無政府主義者で有名ですが、私の家の近くにお墓があることを最近偶然知りました。『相互扶助論』を読んでいただくと分かりますが、革命を起こすとか、国家を倒すとか、暴力的なものでは全くありません。最初は虫や鳥、動物がいかに助け合うかという話から始まって、人間はいかに助け合う動物かという話になって、この本の一番の落ちは、ヨーロッパの中世にその答えがあるというもので、中世の都市国家は、いかに相互扶助に満ちていたかということが主張されています。グローバリゼーションの話をしましたが、私自身もグローバリゼーションの単位が大きくなりすぎたと思っています。この本『FEARLESS CITIES』というのは、都市を単位に地域をつくり直そうという主張をまとめたもので、この本とクロポトキンの『相互扶助論』の本は非常に呼応していると思っています。今日は、村という話ですが、村より少し大きい町とか市という単位で、この相互扶助のしくみをさまざまな協同組合とともに作れるのではないかと思っていますし、静岡でも行いたいと思っています。以上で終わらせていただきます。



▼芦澤：ありがとうございます。それでは荒牧さん、津富さんのご講演をいただいて、ここからは参加者からのご質問をお受けしたいと考えています。基本的にはチャットでお願いします。私自身も静岡の津富さんの現場に何度か伺っていますが、毎回思うのが、静岡の人たちは、皆がこのようなことを当たり前のように知っていて、当たり前のように実行しているところが、いつもすごいと思っています。沼津の皆さんが行っている読書会にも参加させていただきましたが、常に課題の最前線にいながら、その都度このようなことを学んでいかなくてはというところに混ぜていただき、ありがたく思っています。皆さんの質問の前に私が津富さんに質問をしますが、津富さんの周りの人たちが、当たり前のように共通言語を作っていくのですが、連帯とかチーム感を作るのに意識されていることは何かありますか。

▼津富：たくさんあるのかもしれませんが、学生とやるのと社会でやるのとでは若干違うと思います。社会では、良い方に出会うことがすごく大事です。最初の萃点になる人と出会うことがすごく大事だと思います。私はたまたま大学の中にいるため、学生は普段から見ているので、相性を見ながら人と人をつなげやすいですが、地域の方の場合は私がそこまで見えていないこともあって、良い方と出会えるかどうかで、すごい差が出てくるように思います。しかし芦澤さんが当たり前のようにと言われましたが、皆が皆、当たり前のようにやっているというよりは、できる範囲でやれることをやって、皆が楽しければいいね、という

以上のものではありません。「ボランティアなのに、よくそんなことするね」と思う人もいるかもしれませんが、行う側は「別にそれほどのことは考えていないし」という感じだと思います。もちろん、続けていくためには工夫は必要で、楽しくしていくこととか、何のためにやっているかを大切にするとかは意識します。それを忘れるとだんだんタスクになっていくと思います。どうやったらモチベーションを保てるのかはいつも考えています。あとは、こまめにお互いの関係に手を入れることではないでしょうか。うちも「たよりジョーズたよられジョーズ」のリーダーは4年生の女の子が行っていますが、後輩の面倒をものすごくこまめに取り組んでくれています。それを後輩たちが学んでくれると続いていくと思います。会社とかではないので、「はいやってね」、「お願いね」とかで動くものではないと思います。

▼芦澤：お給料とかではない部分で人に動いてもらうことは、いかにモチベーションをマネージメントしていけるかだったり、どうしても子どもたちに関わる部分に対して注力してしまいますが、本当はチーム内に関心が持てる人がいるということが、運営には重要だと思います。

▼津富：最近思っていることだが、子どもとのやり取りであろうが、友達同士であろうが全部コミュニケーションだと思っています。情報伝達ではなく、なんか一緒に喋っていると楽しいとか、絶えずコミュニケーションを保ち続けることが大事だと思います。飲み会でもバスケットボールでも構わず、絶えず触れ合っている感じです。

▼芦澤：学生たちが気軽にフットワーク軽くいろんなことを始めていく姿勢を、大人たちが見て学ぶ部分もありますし、最近、山梨で知り合った方ですが、何も売るものが無いけれど、キッチンカーを始めるという人もいました。そのくらい気軽な気持ちで始めてみるのもいいと思います。

酒井さんから、「ヤングケアラーという言葉についてどうお考えでしょうか？」というご質問がきていますが、荒牧さんいかがですか。

▼荒牧：これは難しい問題であることはそのとおりですし、酒井さんの見解に賛同する部分は確かにあります。山梨県が今、議員立法で作ろうとしている条例については、ヤングケアラーの対策を独自の章にして作ろうとしています。甲府市の男女共同参画の委員会でもこのことは問題になって、まず実態を調査するとともにその調査をもとに対策をすることになっているのが現状です。最初に言ったように、この酒井さんの最後に書いてあるヤングケアラーという負のレッテルを貼って、なくさなければならない方向性ということよりも、どのように支援するかということが重要です。津富先生が言われたように、行政施策とともに、市民のレベルでどのように相互扶助をするかということも重要だと感じています。

▼芦澤：次に高野さんからいただいたコメントです。「津富先生の伴走支援について、学生さん以外の一般地域住民の人が加われるようにするための周知方法やポイントを教えてください」という質問が来ています。いかがでしょうか。

▼津富：私自身がいくつかの活動に関わっていて、青少年就労支援ネットワーク静岡でお話ししたのは、地域の市民の方々中心の活動です。学生はほとんどいません。伴走支援の対象は基本的に、一般の20代から40代、場合によっては80代くらいですから、学生には厳しいところもあって基本的には地域の方が行っています。核になる人がいるというのは、最初は出会いの中で、いろんな方に関わっていただいて、その中でフレンドリーな人というか、一人でやらない、頼るのが上手とか、いろんな人を誘うのが上手とかいう人が必ずいらっしゃるので、自然にその人を中心に輪が広がっていきます。ただ、ある程度は意図的にしたいと思っているので、自分たちがどのように連帯したらいいのかということは、自分たちで意識するようになり、最近はこの連帯の仕方についての議論をすることが増えています。ただ連帯しようとか、ただ集まろうとかでは目的がはっきりせず、何のために集まっているのかという話になります。例えば、今、配食サービスをやるべきという状況であれば人は集まりますが、具体的なサービスだけをテコに集まっても続きません。スペインでは、例えば、家が無い人たちとか、フェミニストの人たちとか、LGBTQの人たちとか、あるいは医療費が払えないとか、いろんな運動体の人たちが集まって、スペインの市民運動を作っています。単に集まるだけではなく、共通の目的はなんなのということを私たちは議論しなければいけなくて、沼津なら沼津の単位で、沼津の行政に対して私たちが働きかける時に、共通のまちの未来図を考える必要があります。核になるのは最初の人なのですが、人ではなくコンセプトが核になるように進化中というところだと思います。

▼芦澤：次に安部さんからいただいているチャットですが、津富さんへ「学生の声を行政に届けることは行っていますか？」

▼津富：これは難しいのですが、やっと取り組めるようになってきたかなという感じです。大学内には既存のルートはありますが、これが機能せず、行政に伝えなければいけない事態になってきました。先ほど申し上げましたが、たべものカフェという活動をしていて、これについて大学の上の方が好意的でない感触があります。一方、携わっている学生は、これは大事なことなので、ないがしろにしてほしくない、持続可能なものにしてほしいと思っています。大学の中で言ってもしょうがないという感触です。県立大学は県が所管していますので、県会議員などのルートを使って、県に提言することが、さっきの「助けたいんじゃー」の目的の一つです。私がパイプになって、県議会議員さんと行っているプロジェクトがあるのですが、そこに学生さんにも入ってもらってやっています。あと、静岡学習支援の団体は、そもそも静岡市の受託事業として受託していて、行政と

やり取りしながら活動しています。ここは行政の期待にちゃんと応えようということを、私は学生に話しています。

▼芦澤：高野さんからです。「荒牧先生のお話の中で、子どもは未来的視点を重視されがち。今の子どもについてどのような大人との接点を作ると良いと思われますか？」という質問です。

▼荒牧：基本的には子どもの問題は、子どもに聞くというのが一番です。子どもの現在の状況を掴むには、一般的なアンケートやヒアリングとかがありますが、子ども関係のNPO・NGOの活用も良いと思います。最終的に津富先生の話につながりますが、「子どもにやさしいまち・コミュニティ」づくりというのは、日本では条例を作るということが一つの特徴だと話しましたが、この条例を作るためにも、子ども参加・市民参加が重要ですし、決定的には子どもの問題は、市民が鍵を握っていると思います。

▼芦澤：確かに、子どもの権利を盛り込んだ条例をまずは作る。それを事業とか地域に落とし込んでいく時に、担当している行政の部署で、縦割りになっていることもあるかもしれませんね。いかに市民の人たちがそこに関わっていけるか、絵に描いた餅にしないために、どのように関わっていけるかが大事だと思います。

▼荒牧：制定の過程でも市民が関わる、子どもが関わることが重要だと思います。

▼芦澤：そうですね、ありがとうございます。安部さんからの質問を最後にしたいと思います。「地域の人、特に元PTAを協力者にしたいのですが、なかなか集まりません。協力してくれるのは団塊世代。時間など余裕が無いのでしょうか？どのようにアプローチしたらよいでしょうか？アイデアはありますか？」というご質問です。

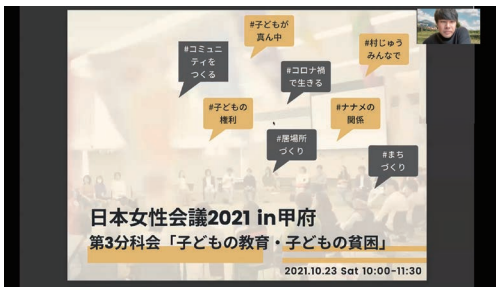
▼津富：状況がよく分かりません。安部さんにはご事情があるかもしれませんが、最初からだれだれを協力者にしたいなどと考えずに、協力してくれる人を探すということになると思います。うちの団体も20年ほどやっていて、地域とか時期によって偏りもありますが、何年もやっているうちにいろいろな人が関わってきてくれているなという印象です。そのスパンは10年以上かかることもありますので、あまり焦らないことが大事だと思います。特定のターゲットに関わってもらいたい時は、若干楽しそうだったり、その人たちにとって重要だったり、あるいは、それは大変だから何とかしなければと思ってもらえるようにきちんとお伝えすることは大事だと思います。その人たちが動く動機を用意するということです。協力の仕方をこちら側で定めてしまうと、それはできないということで、降りられてしまうことも多いと思うので、ひとまず「協力してもらえませんか」と何も定めずにお願いをして、では何ができるかということは後で考えればいいと思います。また協力していただける内容をいろいろと用意することも大事だと思います。

▼芦澤：荒牧さんはいかがでしょうか。

▼荒牧：津富先生のことに付け加えると、例えば組織をつくって、川崎市では地域教育会議という組織がありまして、地域の人と学校が協力し合って、地域の人が代表になっている組織です。このような組織をつくるということも、一つの手段だと思います。これは津富先生が言ったことを前提としての話です。

▼芦澤：ありがとうございました。今回の話の感想を身近な人に話してみて、議論するというところに活かしていただければと思います。

【第２部】



▼芦澤：それでは時間になりましたので、第３分科会の第２部を始めさせていただきます。私は司会進行を務めさせていただきます、第３分科会運営メンバーの芦澤郁哉と申します。本日は14時までの90分間の分科会になりますので、皆さま、よろしくお願いいたします。今回テーマにしたいキーワードを右上にいくつか並べています。このようなキーワードを扱いながら分科会を進めていきます。この後、第３分科会の趣旨説明と皆さんと一緒に考えたいことをお話しした後に、この第２部では実践発表を行います。若者たちは、なぜ一歩を踏み出したのかということで、地域で子どもたちに関わる活動を始めた若者たち３名に、それぞれお話をしていただきます。その後、実践発表をしていただいた若者たちと、山梨学院大学の荒牧さん、静岡県立大学の津富さんを交えてクロストークを行います。参加者からのご質問は、クロストークの時にいくつか拾い上げていきますので、チャットにコメントをいただければと思います。本当は対面でお話ししたかったのですが、オンラインの中でも頑張らせていただきますので、よろしくお願いします。



次に、第3分科会の趣旨説明と本日皆さんと一緒に考えたいことを含め、第３分科会の運営メンバーであります副リーダーの福田さんよりお話しをさせていただきます。

▼福田：第３分科会の副リーダーをしています、福田奈里子と申します。本日はよろしくお願いいたします。

この第3分科会は、「It takes a village.〜よそのボコもうちのボコ おらが村をこせえるじゃん〜」というタイトルです。「ぼこ」というのは甲州弁で子どもという意味ですが、よその子どもでも、うちの子どもとして一緒に育てていこうということです。「子どもひとりを育てるのに村がひとつ必要だ」というアフリカのことわざをもとに、私たち第3分科会のメンバーで、子どもの教育・子どもの貧困をテーマにして、この女性会議の一つの分科会を担うことになりました。その時に子どもを取り巻く社会、コミュニティ全体をつくりたいという、皆の思いを集めてこの分科会の企画をしています。午前中は、荒牧先生に子どもを取り巻く現在の社会状況や子どもの権利条約から課題を捉えて、それを地域にどのように落とし込むか、しくみづくりをどうするかということをお話しいただきました。また、津富先生には、子どもの困りごとは子どもに聞くことが一番大事であり、子どもたちを含めて活動することで地域社会が良くなっていくというお話や、子どもたちを含めた活動の中で、楽しみながらまちができていくという実践をお話しいただきました。どのようなアプローチであっても、一つの村ができていく話を聞いて、すごく私たち自身が元気づけられました。この第2部は、第1部の話を受けて、実際に活動している若者たちの声を聞きたいと思います。それでは、よろしくお願いします。

▼芦澤：それでは実践発表ということで、若者たちがなんでやろうと思ったのか、やり始めてどんなことを感じているのかということをお話しいただきたいと思います。それでは最初は山梨大学の清水そらさんから、実践発表をお願いたします。



▼清水：山梨大学3年の清水そらと申します。よろしくお願いします。学生団体アラベスクという団体を立ち上げて、子どもたちの学習支援や、居場所づくりを山梨県南アルプス市で行っています。ここでは、子どもたちと一緒に勉強をしたり、カードゲームなどで遊んだり、子どもたちが帰る時に食料を渡すなどの活動を行っています。ここからは、この活動を始めたきっかけをお話しします。今回のお話の中で、皆さんに伝えたいことが2つあります。

1つ目は、選択肢を増やしてあげることが大事だということです。2つ目は、いろいろな関わり方があって、多様な人がいるおかげで、自分たちの活動が成り立っていることです。まず1つ目の選択肢を増やすということですが、簡単に言いますと、一つの活動に参加していると、一つの活動が大きくなるだけではなく、いろいろなところに学習支援だったり、居場所づくりだったりとか、子どもたちが育つ場所があったらいいねというお話をさせていただきます。

まずは、この活動を始めた一番のきっかけになりますが、中学3年の時に受験もあったため、夏休みにはもっと勉強したいとか、誰かに勉強を教えてもらいたいと考えながら家で勉強をしていました。どうしても分からないところがあったので、聞きに行こうと思い立ち、韮崎市で毎週日曜日に開かれている学習支援の場に行きました。しかし、その場所は家から自転車で30分以上と遠く、重いリュックを背負いながらの自転車では、なかなか簡単に通うことができませんでした。その時、近くにこのような場所があったらいいと感じていました。私は今後も教育に関わっていきたいと思っていましたので、非常に厳しい中ではありましたが、その学習支援の場所へ何度も通い、勉強をして今の大学に入りました。大学に入学してからは、子どもに関われる活動に参加しようと思いましたが、1年生のころは、なかなか最初の一歩が踏み切れず、参加することなく過ごしていました。大学2年になって新型コロナウイルスが流行り、それでもっと困っている人が出てきたと聞いて、思っているだけでなくとにかくできることをやってみようと思い、子どもと一緒に公園で遊ぶイベントに初めて参加しました。自分に何か技術があるわけでもないのですが、このイベントに参加することによって「子どもと関わってくれる人がいる」ということに意味があるのではないかと感じました。自分にはもっとできることがあると気づき、その後、学習支援や子ども食堂、居場所づくりなどの活動に参加するようになりました。

このような活動を行っていたのですが、大学2年生の終わりに、自分の中で一つの課題を見つけました。自分の中学時代の経験とつながるのですが、そこには同じ子どもしか集まらず、その子たちしか助けられていないということです。もっと多くの子どもたちが私たちを必要としているかもしれない、もっと多くの子どもたちを助けられるのではないか、ということに気づきました。そして、他にも新しい選択肢を作ってあげることに意味があると思ったので、今の団体を立ち上げました。現在、参加している子どもの中には、その選択肢(場所)が少なく、参加したくてもそこには行けなかったという子どももいて、私たちが始めたことが役立っていることを感じ、非常に嬉しく思っています。

このような形で活動を始めましたが、これは自分一人ではなにもできません。これは運営メンバーや、さまざまな協力や関わり方をしてくれる人たちがいるおかげで、このような活動ができていると感じています。これが2つ目の多様な関わりの中で活動が成り立つということにつながっています。自分一人では、困っている子どもたちを把握することもできず、場所もつくれず、支援する食料も集められません。そんな時、山梨県の教育系のイベントに参加した時、フードバンク山梨の理事長と出会い、自分の活動内容をお話ししたところ、場所や食料、資金などの協力を得ることができました。また、一緒に活動をする学生は、教育学部以外にもいて、学習支援だけでなく、その人のできる関わりをお願いして、活動を行っています。一人だけではできないということで言いますと、最近の話ですが、あるフットサルリーグの運営団体の方から連絡があり、「スポーツと

の関わりを子どもたちに提供できないか」という話をいただきました。このように学習だけでなく、子どもたちと多様な関わりを作れているので、広がりを持った活動になっていると感じています。ここで活動の中で、非常に難しいと感じていることをいくつかお話しさせていただきます。

1つ目は、ボランティアの学生を集めることです。この活動は誰かにやらされるものでもないので、どうしたらもっといろいろな人が参加してくれて、関わってくれるかが、課題となっています。もう一つは継続性です。この場所がなくなってしまうと、子どもたちから場を奪うことになってしまうので、作ったからにはそれを続けていく必要があると強く感じています。その中で人を集めるということと関連して、これからは私たちより若い人が関わってくれるといいと思っていますので、より良い方法を考えているところです。

脈絡のない話でお聞き苦しかったと思いますが、今回の話で言いたかったことは2つで、一つは選択肢を作っていけたらいいということで、そこにいろいろな関わり方や、いろいろな場があるといいと思います。もう一つは、いろいろな関わり方のグラデーションがあるので、自分が直接関わらなくてもいろいろな方法があると思うので、ここに来ている人たちと一緒に、何かできたらいいと思いますし、絶対にできることがあると思いますので、これからいろいろなところで、一緒にできたらいいと思っています。以上です。

▼芦澤：ありがとうございます。次は山梨県立大学の加藤魁人さんにお話しいただきます。

▼加藤：私は実践発表者ではなく、実践失敗発表者だと思っていますので、よろしくお願いします。山梨県立大学２年の加藤魁人です。何かやってみたいと思って、学生団体に仲間がいないかと探していたら、ある友達が活発で、その子と一緒に何かやりたいと思い、さまざまな会に参加していました。そんな時に静岡県立大学の津富先生の集中講義に参加させてもらいました。そこにいる学生たちは温かく、自分たちがやっているという感じがすごくいいなと思いました。自分の県立大学にはそのような所が無く、寂しく感じたので、このような団体が一つあれば、変われるのではないかと思い、学生団体を立ち上げようと試みました。

結果として今のところは、自分がやりたいことには強い気持ちがありますが、周りの人にそれを説明する力がなくて、集まれなくなり、失敗に終わりました。今日は津富先生も聞いているので、自分が空中分解して失敗したことに関して、どうしたら成功したのかとか、津富先生だったらどのような言葉をかけてくれるのかとかを、ぜひお聞きしたいと思います。自分が立ち上げたかったのは、学生が自ら主体性を持ち、自分たちがやりたいことを「やりたい」と言える環境をつくり、大人たちの力も借りずに、一番最初の目標や課題設定も一から始めていく団体です。しかし、やはり大きなテーマや指針が無いからか上手くいかず、失敗してしまいました。何か意見をいただければ嬉しく思います。以上です。

▼芦澤：ありがとうございます。津富先生へのラブコールが届いたところですが、後ほどのクロストークでお願いしたいと思います。このような場所で、失敗した話をすることは勇気がいることで、私たちは是非ここで学ばせていただきたいと思います。本人の希望もありますので、この後のクロストークで多く時間を使いたいと思います。最後は山梨英和大学の久保田優羽さんお願いします。



▼久保田：私は山梨英和大学4年の久保田優羽と申します。よろしくお願いします。私たちには、言葉があります。思いを伝えることができます。誰かを励ますことができます。つながることができます。まちづくりの始まりは、言葉からではないでしょうか。私は、そんな思いがあって、今ここでお話をしています。

高校２年生のクリスマス近く、我が家に1つの大きな段ボールが届きました。箱を開けてみると、お米やレトルト食品、お菓子、カップラーメンなどが隙間の見えないくらい入っていました。私は母子家庭で、4歳年下の妹がいます。その時は高校生だったので、アルバイトはできず、世帯の収入は母の収入のみでした。母は、家に届いたフードバンク山梨からのチラシを見て、私たちの知らない間に申し込んでいたようです。箱が届いた時、母は「サンタさんっているんだね」と、嬉しそうに言いました。そして何度も「本当に助かる」と言っていました。私は、母がどれだけ食の支援を必要としていたか、その時実感しました。お金の話を母がすることはなく、どれだけ余裕のない生活だったのか、恥ずかしながら私は知りませんでした。私が通っていた高校では、フードドライブという学校や施設で食べ物を集めて、フードバンク山梨に寄付をするという活動をしていました。寄付された食べ物は、必要としている家庭や施設に届けられます。私は生徒会役員だったので、学校に集められた食べ物を賞味期限ごとに仕分ける作業もしていました。家にあの段ボールが届くまで、「こんな活動があるんだな」くらいでした。しかし、各家庭が持ってきてくれ、私たちが仕分け作業をした食べ物が、どれだけ誰かの支えになっているのか、その時実感しました。そして、「私も誰かにとってそんな存在になれる」と思いました。でも、どうしたらそうなれるのか、ずっとそんな疑問がありました。

フードドライブの活動の重要性を知り、食の貧困が身近にあることを気づいてもらうためには、私から発信していく方法も

ありました。しかし、私は、支援を受けたことを誰にも言えず、高校を卒業してしまいました。奨学金を借りて大学に進学し、フードドライブの活動を行っているサークルに所属しました。





この写真は実際に大学でフードドライブをやっている様子で、右の写真のように毎日集計をして、写真を撮ってメンバーで共有することをしていました。2年生の時に私が主体となってフードドライブを行うことになり、どうしたら一人でも多くの人が食の貧困問題に気づいてくれるか、たくさん考えました。そこで、行き着いたのが、私自身の経験を言葉にして人に発信することでした。高校生の時に言えなかったことを大学生になって言おうと思ったのには、きっかけがありました。

サークルをとおして出会った仲間は、それぞれが問題意識を持っていて、部会をとおしてそれを発信していました。一人が発した言葉から、それを聞いた一人ひとりの意識が広がっていくのを、私自身がサークルをとおして実感していました。「だから私も」と思うようになりました。まず友人に話し、サークルの部会で30人ほどに話をしました。話したことがきっかけとなって、私と同じように食の支援を受けていたことを話してくれた人や、「大学生になってからフードドライブの存在を知って、間接的にでもちゃんと誰かの支えになっていたことを知った」と言ってくれる人もいました。また、大学で1限後の20分ほどの時間で行われているチャペルアワーという時間で、先生や参加している学生に話しました。チャペルアワーでは、聖書を読み、賛美をし、祈りをささげ、メッセージを聞きます。私は、静かに自分と向き合うことができる時間だと感じています。バクバクした心臓を抱えながら、ステージに登壇して、息を吸いました。ここには私の思いを言える空気があって、寄り添って聞いてくれる視線がありました。自分の思いを表現できた時、心がすっと軽くなるのを感じました。

その時から、私たちは、何かしらのモヤモヤや、重たいものを抱えているのではないか。安心して自分を表現できた時、それらは少しだけ軽くなるのではないか。そんな場所をつくりたい。自分の問題意識や違和感、もやもや、助け、なんでもいい。ここなら大丈夫。そんな場所を。言葉にすると、言葉が返ってきます。そこから、新しいものが生まれることもあります。それが、My C.というグループでした。「安心して話せる場所をつくりたい」「一緒にさまざまな社会問題について考えたい」「多様性について、ジェンダーについて、平和について、関心がある」そんな人たちが、言葉を伝って集まり、「第1回山梨ユースリーダーシップフォーラム2021」という企画を開催しました。

私たちMy C.は、「言葉にすること、表現すること」「言いやすい、表現しやすい環境をつくること」を大事にしていました。「多様性を考えよう」をテーマとしたこのフォーラムでも、講演やワークショップの中で、一人ひとりが、自分の中から出てきた言葉を大事にし、相手のことを尊重しながら仲間と語り合うことをしました。今年の8月には、甲府YWCA主催の「ピースフェスタ2021」で山梨YMCAの子どもたち総勢70人くらいと、戦争について考えたり、「アドボカシーってなに？」というワークショップを行いました。ワークショップでも、一方的に「教える」という立場ではなく、一緒に考えたり、子どもたちが言葉にしやすい雰囲気づくりや、子どもたちの言葉をしっかり受け取る姿勢を心がけました。

「言葉にすることの意味」「受け取ってくれる人がいることの安心感」「助けを求められる環境があること」「自分らしく表現できること」そんなことを大事にしているMy C.だからこそ、できることがあると思っています。私は、何の専門家でもない、山梨県に住んでいる大学４年生です。フードバンク山梨から食の支援を受けたことをきっかけに、言葉にすることで言葉が返ってきて励まされたり、つながりができたりしました。そのつながりから、新たな問題意識や、視野を持つことができています。私たちは決して一人で生きているわけではなくて、誰かに支えられて生きていて、自分自身も誰かを支えることができる存在です。何かしたいけど何をしたらいいか分からない人は、何かしたいことを言葉にしてみたらいいかもしれません。今日はお話を聞いていただきましてありがとうございました。これで終わります。

▼芦澤：皆さんいかがでしたでしょうか。３名の実践発表を聞いていただいて、改めて自分自身に矢印を向けていただいて、ここからは荒牧さんと津富さんに加わっていただき、クロストークを行いたいと思います。参加者からのご質問などもクロストークの中で扱っていきたいと思います。まずは3人の話を聞いて、荒牧さんと津富さんが、どのように聞いて、どんな感想を持たれたのかお話しいただきたいと思います。まず荒牧さんから。

▼荒牧：感想ではありませんが、この甲府大会の基本方針の4番目に、「市民や学生が参加、参画する大会」に相応しい分科会の報告者だったと思います。３人の報告はそれぞれ意味があって、重要なことだと思います。私のほうから質問がありまして、清水さんが「アラベスク」と名づけたのはどうしてか、ということ。それから、加藤さんには失敗の原因は、現時点でどのように考えているか、ということ。久保田さんには、食の貧困に取り組んでいるということですが、もう少し、My C.の活動について聞きたいと思いました。

▼芦澤：今、荒牧さんからの質問は、また後で3人にお話しいただきたいと思います。先に津富さんから3人のお話からどのよ

うに思われたか、お話しいただきたいと思います。

▼津富：自分がどうしてこれをやっているかは、すぐには分かりません。いまだに僕自身も、なんでこれを行っているか、分からないことがたくさんあります。その問いは大切にしてほしいと思います。今も何かあったら答えてくだされればありがたいと思います。僕の今の仕事は静岡県立大学ですが、前は少年院の先生でした。なんで少年院の先生になったのか、と言われても分からなくて、その時の同僚の考え方もさまざまです。悪と対決したいとか、正義を実現したいという人がごく一部いますし、もともとご家庭に何かを抱えていて、そういう人たちに寄り添いたくて入って来られる方もいます。男子ばかりで、とてもダイナミックな所なので、そういう所でワサワサやりたいと思って、入っている方もいました。皆さんには、自分自身がなんでこれを頑張れているのかを、すごく考えてもらいたいというか、感じてもらいたいと思います。

僕自身も身近な学生を見ていて、さっき、たべものカフェの話と同時に学生ボランティアセンターの話をしましたが、例えば、リーダーの子は、取材とかに来られると全部断ってしまうような子なんです。写真に写るのも嫌だし、名前が出るのも嫌でした。最近も、名前が出るチラシを作ってくださいと頼んだら、嫌がられて困っています。でも活動はすごいです。その子自身はすばらしいリーダーで、周りの子にもすごい気を遣っていて。でもその子のモチベーションは何だろうって思います。だから、「自分はなんでやっているんだ」ということを解いてほしいということが一つです。

あとは、今、活動をうまくやれているわけですよね。やれている人は、うまくやれている理由の分析もしてくれていましたが、なにが欠けたら、うまくできなくなってしまうかを考えてほしいと思っています。僕自身もたまたまできていることがありますが、できなかったこともいっぱいあって、後でいっぱい反省します。そうやって考えていくと、1つ目の問いにつながっているところがあって、自分のモチベーションはどこか、なにを引いたらなくなってしまうかという話になります。それもいっぱい考えてもらうといいなと思います。加藤さんからの質問でしたが、加藤さんは、むしろ、清水さんや久保田さんに質問するほうが正しいと思います。学生同士で助け合うのは、すごく大事なことで、人と一緒に何かしようという時にうまくいかない時は、なにかが足りないことが多いです。その足りないことに気づくと成長ができるので、やっている人たちに相談するのもいいし、場合によっては、すでに動いているところに混ぜてもらって、さまざまなことを体感してもらうと、すごくいいと思います。



▼芦澤：ありがとうございます。それでは荒牧さんからいただいた質問もありますので、清水君からお願いします。

▼清水：ご質問ありがとうございます。「アラベスク」という団体の名前の由来ですが、アラベスクは日本語で「唐草模様」を意味しています。唐草模様は日本の伝統的な模様で、つながりとか繁栄とかの意味を持っています。僕たちも社会とつながったり、子どもや家庭も社会とつながって、このような活動が未来とつながったらいいと思い、この名前を付けました。唐草模様というのは、語感も良くないので、英語にして「アラベスク」にしました。

▼芦澤：団体名に、実現したい未来像の思いを託していくのもありますし、その団体がキーワードにしていること、例えば、子どもを中心に皆つながろうよ、みたいな言葉をキーワードにしている団体とかもあります。この言葉のもとに、考えが違う人たちも集まれるみたいなキーワードを持っていると、違った分野の人たちと手を組んでいけるのではないかと思います。次は加藤君に、今思う失敗の原因はなんだと思いますか。

▼加藤：まだ自分は知らないことが多いと思います。そこに参加してくれようとしていた、学生や仲間たちの考えとか、思いとか。他の今運営しているサークル・団体に比べ、自分はまだ場数が少なく、「これが必要だったんだ」という気づきがなかったと思います。「このようにしたい」と思う気持ちが強すぎたとこもあります。

▼荒牧：それが重要だと思います。そのように思えたことが重要な成果・効果だと思います。

▼芦澤：僕自身も学生時代、さまざまな活動に参加して、具体的に何かをやっている時よりも、仲間と一緒に食事している時や、準備や片付けの時に、雑談の中で学ぶことが多かったように思います。その人たちが意識していることとか、わざわざ言葉に出すまでもない行動とかに触れていくことが大事だったと思います。この3名は、今回初めて会ったと思いますが、それぞれの活動の相談などもできるようになったことは良かったと思います。次は久保田さん、食の支援から活動をなさっていますが、その活動内容をもう少し詳しく教えてください。



▼久保田：私は最初、自分が当事者であったことから、食の貧困問題に関心がありました。それを言葉にして言うようになったら、周りの人たちも、それぞれの問題意識を話してくれるようになり、そこからつながりができて、作ったのがMy C. というグループです。私も、自分が「食の貧困について関心がある」と言ったことで、違う人たちの問題意識を知って、自分の視野も広がるし、また新たに食の貧困と平和学習をつなげたら、新しいものができるのではないかとか、そういうものを皆で生み出せるようにもなりました。

My C. の主な活動ですが、一番は先ほど紹介した、ユースリーダーシップフォーラムという企画です。それは主に多様性を考えようというテーマでやっています。性の多様性についての講演では、ジェンダー、文化、コミュニケーションなどの違いが皆あるのは当たり前なので、そこから自分はどういう違和感を持っているとか、モヤモヤがあるとかを、表現しようというワークショップを行いました。そのフォーラムも、夏に子どもたちと行ったワークショップも、ワークショップには必ず決まりごとがあります。皆、価値観や考え方が違うというのはあることだから、誰かが言ったりしたことを批判したり、周りに悪口を言うことは絶対にしないで、「この企画の中のスペースは安全です」ということを、約束ごととして決めています。あとMy C. のメンバーは私と一緒で、居場所づくりや、言葉にすることの大切さを重要だと思っているので、My C. のメンバー自体も居場所になるように活動をしています。例えば、メンバーが関心あることを、皆で共有をして一緒にその問題について考えるとか、意見交換するとか。今は平和学習を月に1回行うなど、メンバー同士で言葉を紡ぎ出すということをMy C. の活動でやっています。だから、内側での活動も行っているし、外へ向けての活動も両方していて、だからこそMy C. というのが、私たちの居場所になったり、また外に発信したことで、新たなつながりができたりすることが、My C. の活動だと思っています。

▼芦澤：詳しく教えていただきありがとうございます。私自身、My C. の活動というか、久保田さん自身のマイストーリーを聞かせていただく中で、自分の思いや意見を発する時には、受け入れてくれる場所があることが重要だと感じています。最初は発信することに不安があったと思いますが、発信した時に周りがちゃんと反応してくれ、そこからつながることができたという成功体験できたからこそ、このような活動につながっていると思います。コメントをいただいていますので、少し扱っていきたいと思います。

「子どもにとってのシェルターが家庭であるのが一番良いことだと思っていますが、1カ所では負担が大きいし、崩れた時にリスクがある。地域のあちこちに緩やかな居場所があれば良いと常々思っていますが、どのような居場所が求められ、ここはどう動いたらよろしいでしょうか？」といったご質問です。普段、子どもたちと関わっている中で、居場所ってひとことで言っても、いろいろな捉え方があると思いますが、清水君はどのように思いますか。

▼清水：居場所がどんな所か、僕もいまだに考えていることですが、「居ていい場所」が一つだと思います。ここに来ている人が、ここに居ていいんだなと思えるような場所であれば、どんなあり方でもいいと思います。そして選択肢がたくさんあれば、子どもたちが居たい場所に行けるようになると、今は考えています。

▼芦澤：いろんな人が集まれる場所をつくると、望む過ごし方が違う場合があります。同じ場を共有するのに、相容れない場面があったことはありますか。

▼清水：一つの場しかないと、ここに合わないとなった場合は、居場所がなくなってしまうので、それぞれいろいろなあり方や場所があるのが一番だと思います。

▼芦澤：いろんな団体の活動を見ている加藤君は、居場所という言葉を聞くとどんなことを大事にしていますか。

▼加藤：そこに参加する人が、その人らしくいられる場所であってほしいなと思います。皆にとって。ただ居場所は、結局誰かが居づらい場所になってしまって、誰にとっても居やすい場所というのは、理想論とか夢のような話ということを踏まえて、居場所づくりを考えていかないと、一人よがりになってしまうと思いました。

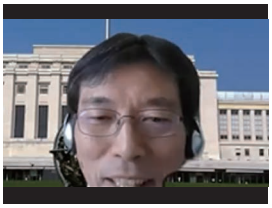
▼芦澤：確かに、皆の居場所というと、誰に届くのかということがあったりします。津富さんにお聞きしますが、皆の居場所は、どのあたりがポイントになるのでしょうか。



▼津富：今のお話の流れだと、難しい質問ですね。居場所にはさまざまな雰囲気があっていいと思います。いろいろあるほうが重要です。例えばショッピングセンターでも中のお店はいろいろあって、自分の好きな所へ行くわけです。居場所によっては、曜日によって居場所の内容を変えていたり、多様化をされているところもあるでしょう。居場所は自分自身が「これをやりたい」と思っている人がそれをやればいいし、不得意な雰囲気の居場所をつくる必要もない。だからあまり複雑に考えないで、気の合う人とやるということだと思います。その場所に誰でも来ていいよということだけではなくて、そこから外に向けて何か起きていくようなことがあれば楽しいと思います。単にそこに落ち着きにくるのではなくて、そこで喋っているうちに何かやろうという話が起きるように意図しておくのは大事だと思います。

もう一つ思っているのは、居場所では一人ひとりの安心・安全が保たれなくてはなりません。皆さんは家庭の事情や仕事が違うなど立場の違いはありますが、それを捨てることはできませんので、その中で居場所を成立させるには、そこに行くことで、脅かされないという約束ごとが必要だと思います。例えば、普段は仕事としてお金を取ってやっていることをその場所では無料にしなければならなくなると、その人にとっては納得がいかなくなるでしょう。ちゃんと線引きしないといけません。あと久保田さんが言われていた、今自分がどんな気持ちでそこにいるのか、周りがどんな気持ちでいるのか、を言葉にして出すということを大事にするといい場所になると思います。

▼芦澤：加藤君の失敗の要素が、実は隣の2人の実践からヒントになる部分が多くあるように思います。荒牧さんはいかがでしょうか。



▼荒牧：居場所と言ったら、安心・安全がキーワードになると思います。僕の知っている居場所では、一つの場所しか提供できないという物理的な要素があるので、片隅ではギターを弾いている、真ん中では学習をしている、またゲームや将棋などをしているなど、いろいろな人がさまざまなことをしていいのだとしています。そこが重要だと思います。

今でこそ、居場所というものがどういうものかある程度分かりますが、川崎市で2000年に条例を作った時、川崎の子どもの権利条例では、わざわざ子どもの居場所を規定しています。子どもにはありのままの自分でいること、休息して自分を取り戻すこと、自由に遊び活動すること、安心して人間関係をつくり合うことができる場所。これを居場所と言って、この考え方を普及すると同時に居場所をつくっていくということを、わざわざ条文にしないといけなかった。でもこのことは今でも生きていると思います。肝心なのは、居場所に集う人が、「この場所はこれでいいんだ」と思えるのが重要です。

▼芦澤：居場所をつくることは、一見いいことをやっていそうな雰囲気ですが、そこに集まっている人たちの居場所感は、少しずつ違っていて、居場所をつくる時に、メンバー内でコンセプトを深く話していくと、一人ひとりのあり方が分かって、このメンバーで作るものはこういうあり方ということができてくると思います。個人的には楽しくできるのは最初だけで、その後は、あり方について勇気を出して触れていくことが重要だと思っています。

酒井さんからコメントをいただいています。「大人のやっている活動にも学生さんが参加していただけるだけでとてもありがたいです。学生さんたちは、自分たちがまだまだ経験が浅くて一歩踏み出すのに躊躇する気持ちがあるかもしれませんが、大人は経験やお金があってもできないこともあります。子どもたちにとって大人は別の生き物に感じるのか、子どもたちとすぐに仲良くなれるのは、年齢が近い大学生や高校生だったりします。第1部で話題になった、相互扶助の話につながりますが、大人にしても学生にしても高齢者にしても子どもにしても、お互いにできることで活躍して、お互いに教え合う空間が作っていけたらいいコミュニティになっていけると思いますが、いかがでしょうか？」ということですが、清水君からいかがですか。

▼清水：大学2年生の時にさまざまな活動に参加して、その時は自分にはできないと思っていました。しかし今思うのは、大人の方々と僕たちができる活動は違うところがあって、そこにはそれぞれの関わり方があると思っていて、僕たちももっと成長していきたいので、そういう意味でも、もっと大人たちとも関わりを持っていきたいと思っています。しかし、大人たちは自分たちの取り分を意識しすぎていると感じているので、そこは正直言うとやりにくいと思っています。誰のための活動かということを、もう一度考えてもらって一緒に活動したいと思います。

▼久保田：私も、大人だからやりやすいこと、学生だからやりやすいことはあると思っていて、だからといってそれぞれ分かれるのではなく、お互いが得意とする分野を一緒にやっていけたらいいと思っています。この活動から、私も教えるだけでなく、子どもたちから学ぶことがいっぱいあり、一方通行ではなくお互いの学びがあります。これを居場所づくりや、地域活動などで大人とやっていけたらいいと思います。目指すところは一緒だと思いますので、良い社会にしたいとか、平和にしたいとか、多様な人たちが多様な考えを持って、一人ひとり視野が広がっていけば、良い活動ができるのではないかと思います。

▼加藤：結局、大人たちに決定権があると思っていて、その中で自分がすること、やってみたいことというよりも、大人がどう納得してくれるかということに思いが強くなってしまいます。大人が主体で補助として学生というふうに、どうしても優先順位が大人になるので、そこは難しく感じています。

▼芦澤：津富さんはそう思いますか。県立大学の先生という立場で、学生たちが主体的に活動をする中で、どんな形で関わりをもっていますか。

▼津富：ここに学生が２名ほどいますので、あとでインタビューをしてみたいと思います。僕が加藤君の意見について思うのは、確かにそのような場合もありますが、学生が最初に大人の意図を悪いほうに飲み込んでしまう場合もあると思っています。僕が思う原理・原則は、どっちが先にスタートさせていても、その場自体は何のためにあるのかということを考えるということです。その目的が先にあると思うので、本来の目的に向かっているかということを意識してそれを背負うことでさまざまな意見も言えるようになると思います。そうしないと、何のためにやっているか分からなくなってしまいます。私もなるべく介入しないように心がけていますが、上手くいっていないところにアドバイスなどをしていると、どうしても私の考えが強くなってしまうことがあり、そこは私の悩みです。それでは、ここに学生リーダーの経験者が2人いるので私に代わってお話をしていただきます。大人と一緒にやるということはどう思いますか。

▼学生(清水)：こんにちは静岡県立大学国際関係学部４年の清水と申します。私が、学生団体やボランティアを先生と一緒にやっている時に、先生に支配されると感じたことはありません。先生はいつも厳しく意見をくださって、団体を良くしていくために反映されるのは、すごく難しいと思いながら、皆と話し合って、自分たちなりに消化して良い方向に進めていくように

やってきました。先生はいつも良きアドバイザーです。なぜそのように思えたかというと、先生と学生が輪になって、核となる部分を共有して話し合った時に、一緒に同じ立場で物事を考えてくれていたからです。結果、上とか下とかなく、先生の意向に沿って動かなければと感じずに、やっていけたのかなと思っています。

▼学生(大谷): こんにちは、同じく静岡県大学４年の大谷と申します。私は大人の人に自分たちの意見を伝えることは、すごく勇気がいることだったと感じています。経験がある方たちだからこそ言ってくださることもありますが、それに対して自分たちがどうしたらいいかということが分からなかったりするので、その時は周りの学生と話し合って、一人ではなく、皆で意見を言ってきました。それと先ほど清水さんが言っていた、同じ立場でというところに共感していて、先生は私たちのことを信頼してくれているからこそ、アドバイスをくださっていると感じています。私たちのことを応援してくださっているし、でも一番の目標は社会を変えるというところが伝わってきたので、大人の人と一緒にやることにも抵抗もなく行うことができました。

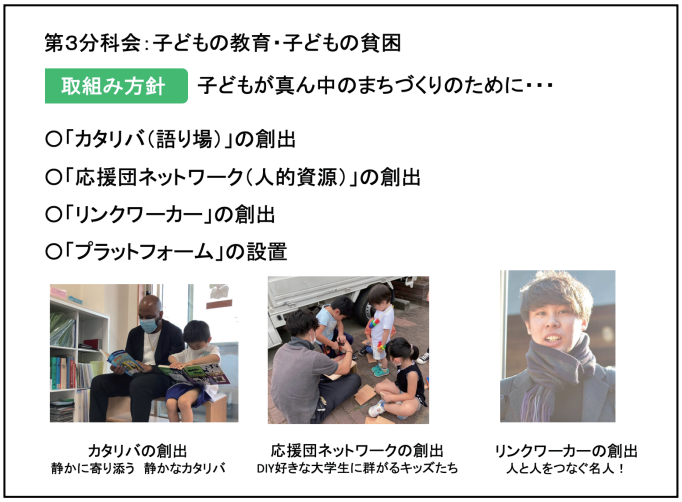
▼芦澤: ありがとうございます。突然お話をいただいて。とても参考になりました。最後に実践発表をいただいた３名に一言ずついただいて終わりにしたいと思います。

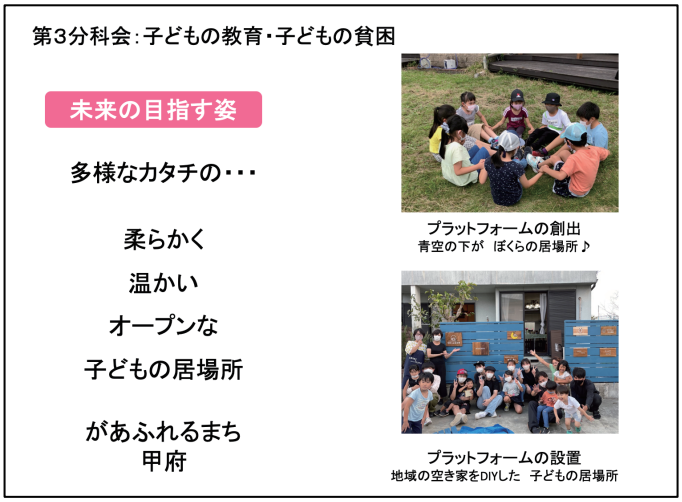
▼清水: 今日は貴重な時間をいただきありがとうございました。今回一番思ったことは、目的を共有すること、またそれを問い続けるということです。それを今後も糧にして、活動を続けられればと思います。チャットでコメントいただいた方もありがとうございます。今回コメントをいただいた人たちとも、これから一緒にやれることがあると思うので、ご連絡させていただきたいと思います。

▼加藤: 自分としては失敗発表だったので、実際今朝までこの場所に来ることを迷っていました。しかし、ここに来たことが大きな一歩だと今は思っています。ここの2人にも出会い、これからいろいろ聞きたいと思えたし、これから自分の中で考えていきたいと思います。本日は良い機会を与えていただきありがとうございます。

▼久保田: 本日は午前中も貴重なお話をいただきありがとうございました。私も友達同士や部会で自分のことを話すことが始まりでしたが、私自身の経験を話したことにより、このような女性会議で、もっと多くの人に広くお話しすることができました。私は、人それぞれがいろんなことで当事者であると思っていて、皆がそれぞれ抱えているものを、少しずつでも安心して言葉にできる場所づくりを、これからもしていきたいと思っています。ご意見、ご質問をいただいた方も、本日はありがとうございました。

▼芦澤: 本日の話を聞いて私たちが言いたいのは、「若者たちのストーリーを聞いて、あなたには何が残っていますか？」ということです。今日の話を聞いて、皆さんが自分たちのフィールド、お仲間に、ご自身がなぜ子どものことに関心があるのか、なぜ放っておけないのか、ご自身のストーリーを語るところからつながっていただければと思います。





分科会 4

ワークライフバランス 10月23日(土) 第1部 10:00〜11:30 第2部 12:30〜14:00

パネルディスカッション

ダイバーシティ・インクルージョン　働き方改革と男性の在り方

〜新しい生活様式に、子育て介護に男女とも！役割を果たす今をつくろう〜

講師・コーディネーター
伊藤 公雄
京都産業大学現代社会学部教授

講師・コーディネーター
石井クンツ 昌子
お茶の水女子大学理事・副学長

司会・ファシリテーター
黒田 浩司
山梨英和大学人間文化学部教授





【第1部】



▼黒田：司会を務めさせていただきます、山梨英和大学の黒田浩司と申します。臨床心理学が専門で、ワークライフバランスや女性学は専門ではないのですが、今回、こういう役割をさせていただくこととなり、とても楽しみにしています。第1部でご講演していただく伊藤公雄先生は、今日のテーマである男性学の第一人者です。それでは伊藤先生、よろしくお願い致します。



▼伊藤：「男性にとってのワークライフ（ファミリー）バランスについて考える」をテーマにお話ししたいと思います。ワークライフバランスとは、政府は「働くすべての方々が、『仕事』と育児や介護、趣味や学習、休養、地域活動といった『仕事以外の生活』との調和をとり、その両方を充実させる働き方・生き方」としています。なぜワークライフバランスが問題かと言えば、日本社会はワークライフバランスが取れていない人が多く、特に男性はワークだけで、ライフもファミリーも欠如している人が多いです。逆にライフ（家庭活動）中心で社会活動から離れている人も、特に女性で、まだまだ多くいます。また、女性の場合はワークとライフの二重の負担がきているケースも多いです。これは女性だけでなく、男性の問題でもあると思います。

男性のワークライフ・アンバランス状況の背景にあるのは、男性の長時間労働の拡大です。1970年代以降に顕著になり、週60時間以上働く男性の数は323万人（1975年）から661万人（1990年）に増加しました。日本の法定労働時間は週40時間ですから、毎週20時間以上、余分に働いている。ただ、これは男性の年収を上げていることにもつながっています。残業手当がつきますので。この辺も日本社会のアンバランスの問題と関係しています。家庭重視の傾向となると、内閣府の若い世代への調査では、圧倒的に「仕事より家庭を」という人たちが男女ともに多いです。男性も仕事よりも家庭やプライベートを優先したいという人が多数派になっています。

なかには、男性主夫を選択しようという声も出ています。主夫・主婦問題からワークライフバランスのことを考えてみたいと思います。今年の7月、10代〜30代の男性向けのアンケートでは、専業主夫に「相手や経済事情が許すならなりたい」が約半数、「絶対なりたい」が約10%、4割くらいが「なりたくない」と答えています。このように男性の専業主夫希望者がいるということは、男性の働き方が大きな問題を含んでいることでもあると思います。

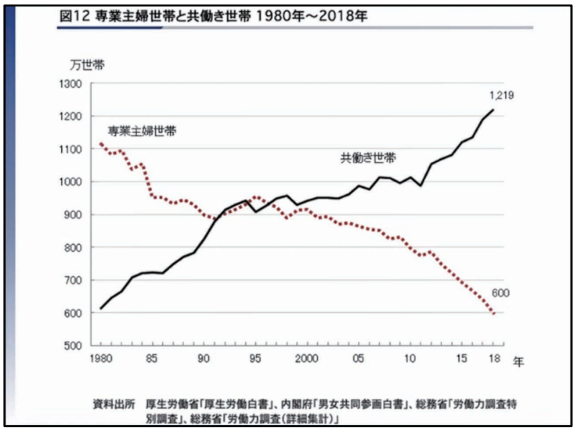
日本では2015年、(専業・兼業)主夫が、失業や病気の人も含まれていますが11万人くらいいると言われています。一方、女性の専業主婦は720万人と圧倒的に多くなっています。半分くらいの若い男性が主夫がいいと言っていますが、本当にその生活はハッピーなのでしょうか。1970～80年代、専業主夫の体験記がたくさん出ています。ジョン・レノンのハウスハズバンド宣言、マイク・マグレディの『主夫と生活』、村瀬春樹の『怪傑ハウスハズバンド』。どれも書かれているのは同じ流れで、最初は仕事から解放されてハッピーになります。子どもとの関係が深まり、自然とも触れ合えます。ただ、2・3カ月主夫をしていると「籠の鳥の憂鬱」が出てきて、自分はいったい何者なのだろうと思うように。理由ははっきりしていて、社会と切り離されて家庭だけにいる不安定な状況が男性主夫を襲うことになります。社会の中で自己実現できないつらさが見えてくるわけです。

調査年	配偶者のいる男性	専業主夫	兼業主夫	主夫合計	割合
2015年（平成27年）	16,394,732	55,630	51,346	106,976	0.65%
2010年（平成22年）	17,613,943	56,867	47,054	103,921	0.59%
2005年（平成17年）	19,601,415	45,042	52,572	97,614	0.50%
2000年（平成12年）	21,253,075	23,896	37,029	60,925	0.29%

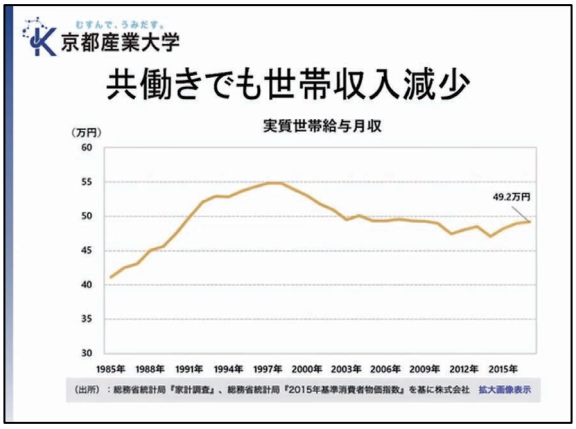
出典（総務省統計局「平成12年国勢調査結果」「平成17年国勢調査結果」「平成22年国勢調査結果」「平成27年国勢調査結果」）
・参照データ：就業状態等基本集計（全国）
・集計人数：配偶者（結婚している）のいる日本人のうち15歳～59歳の男
・集計項目
専業主夫：家事（自分の家で主に炊事や育児などの家事をしていた場合）
兼業主夫：家事のほか仕事（主に家事などをしていて、そのかたわら、例えばパートタイムでの勤め、自家営業の手伝い、賃仕事など、少しでも収入を伴う仕事をした場合）

1960年代、米国でフェミニズム運動が起こった時のきっかけになった本で、著者のベティ・フリーランは、夫が裕福なサラリーマンの白人中産階級の主婦たちが感じた不安定な状況を「名前のない問題」と呼んでいます。つまり、社会の中で自己実現ができていないというつらさ、自分はこのままで良いのかという「名前のない問題」として、不安定な状況や精神的なトラブルにつながっていったわけです。男性主夫も、社会から切り離された中で「名前のない問題」が出てくるということです。性別に関わりなくというより、「男は外で」の規範があるだけ男性にはより重い、家庭生活だけでなく、地域生活とともに「社会」での自分の場が必要です。社会とは、仕事だけでなくNPOの活動や地域活動なども含まれ、家庭・仕事・社会といういろんな顔を持ったほうが、男女ともバランスの良い生き方ができるのではないか。これがワークライフバランスを考える時の基礎になる視点です。

日本で専業主婦率が高かったのは団塊の世代(1947年～49年生まれ、800万人くらい)です。1970年前後、若い世代が地方から大都市へ移動していきます。サラリーマンが増え、都会に出ていき働き始め、結婚して子どもが生まれます。実は、地方の子育てはおじいちゃん・おばあちゃんが担っていて、日本は他国と比べ、女性が働く傾向が強い社会でした。おじいちゃん・おばあちゃんが子どもの世話をしたり、上の兄弟や地域も子どもの面倒を見ていて、地方には子育てをする力がありました。しかし、大都市に移動してきて、保育園もまだなかった70年代、夫婦で子育てをしようとすると、どちらかが仕事を辞めなければなりません。男女の賃金格差が大きかったので、安いほうの女性が辞める形になり、結局、仕事を辞める女性が団塊の世代で増加していくことになり、専業主婦率が高くなりました。

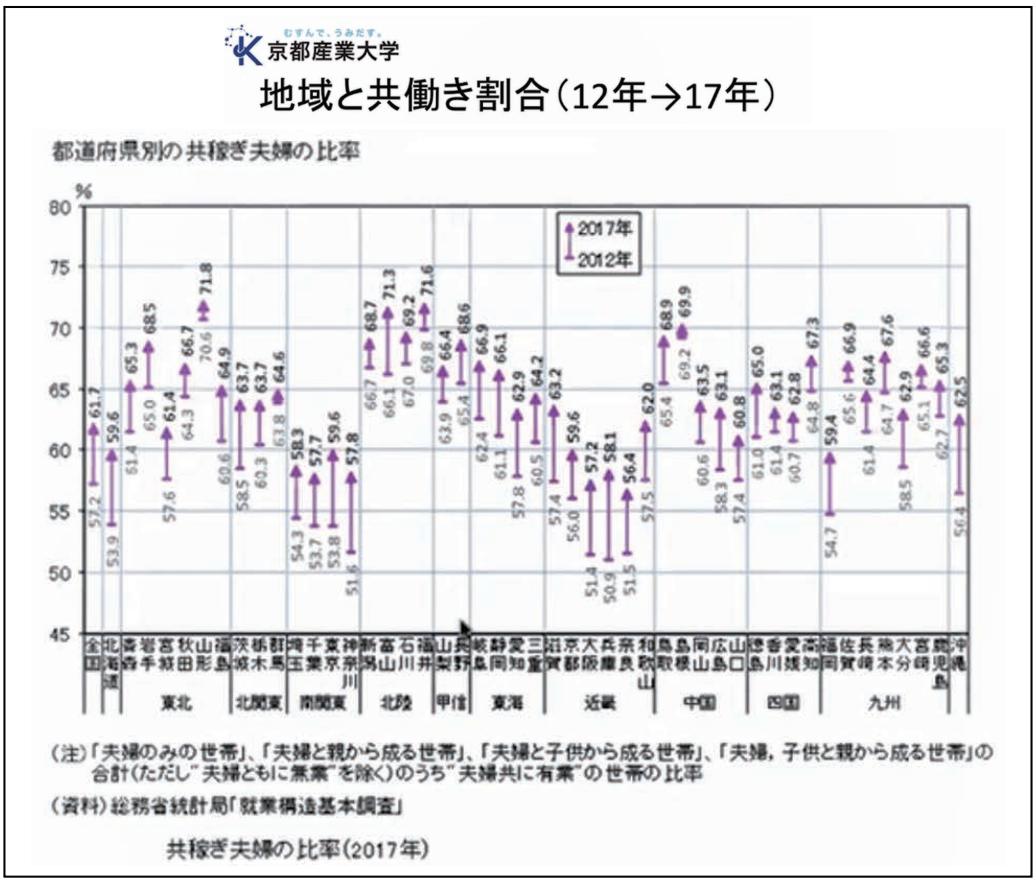


さらに70年代中期以降は、子育て後にパートで働くしくみを形成していきます。ただ90年代半ばになると、多数派だった専業主婦家庭から共働き家庭への転換が始まり、今や共働きが多数派になっています。背景には男性の年収の減少があると考えています。日本の男性サラリーマンの年収は1970年に85万円くらいで、1990年に440万円となり、一番高かったのは、1997年で570万円です。30年で7、8倍年収が上がり、女性が働かなくても豊かな生活が保障されていたわけです。



しかし、1997年以降、男性サラリーマンの年収が下がり始めています。専業主婦を可能にする男性の年収は、30歳時点で700万円、退職金2,000万円、30歳の貯金額300万円、年収上昇率1%と言われていますが、今の30歳時点ではほとんどいない状況です。この20年間で男性の実質賃金は右肩下がりになっています。OECD加盟国で唯一、日本だけが下がっています。急激に上がっているのは韓国。2年前、韓国の勤労者の年収が日本の勤労者の平均を上回りました。だからこそ、日本では共働き世帯が増えていくわけで、男女で働かないとやっていけない状態が今の日本社会なのです。しかし、女性の労働参

加は増えていても世帯収入は上昇していません。全体で賃金が下がっているということです。特に大学に進学させようと思ったら、お父さんの収入だけでは生活が回りません。山梨県も共働きの割合は63.9%（2012年）から66.4%（2017年）に増えています。



一方で、男女の年収格差を見ると、女性は男性の半分くらいしかないと言われています。男性には超勤手当や役職手当がつくということもあり、月給では、正社員の場合、女性は男性の７割くらいと言われますが、年収で見ると明らかに男性の半分くらいしかありません。この賃金格差も日本社会の大きな問題で、男女の賃金格差がなくなれば、夫婦で働きながら、それなりに豊かな生活ができるはずなのですが、本気で考えなければならない問題です。

これもショッキングな数字ですが、女性の生涯賃金はフルで働くと２億５千万くらいあるそうです。でも今までの女性の働き方のパターンで見ると、退職して非正規で働いた人は、正社員で働き続けた人に比べ１億9,669万円くらい生涯賃金の格差があります。70・80年代の女性は、２億円近くの生涯賃金を捨てる働き方をしていた人が多かったといえます。背景にはいろんな理由がありますが、103万円以上年収があると、夫の扶養控除や税控除が取れないので100万円以下の労働になってしまうこと、あるいは、第3号被保険者制度という年金の制度で、夫がサラリーマンで自分が130万円未満の年収なら、年金の負担をしなくても、将来、年金の基礎部分６～７万円がもらえることもあります。100万円以下のパートでいるほうが、いろんな面で得だという社会政策の枠組みが、賃金格差を維持させている側面もあります。

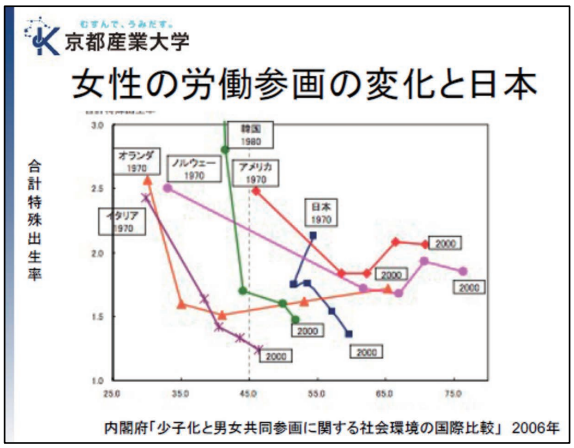
今、求められているのは男女ともに「働く主夫・主婦」社会です。労働だけでなく社会参画・家庭参画・地域参画しながらライフの部分を大切にする社会に転換しなければいけません。そのためには、男女の賃金格差が大きくては困りますので、労働条件を平等にし、男女とも働きながら家庭生活や自分づくりや自分の成長が可能な働き方のしくみを作ることが重要な課題として投げかけられています。

ワークライフバランスが始まった背景には、1970年代ヨーロッパの問題の影響が大きかったと思います。70年代のヨーロッパでは、少子化が日本より早い段階できており、今、日本が直面しているような少子化による労働力不足が起こりました。その中で、外国人労働者の受け入れと女性参画が問われ始めます。背景には、国際不況による男性の収入が減り始めたことと女性権利拡大の動きがありました。この流れの中で、ヨーロッパでは、日本や米国よりも早く、男女ともに働く状況が生まれました。ただ、それ以前は、ヨーロッパでも専業主婦が多くいました。近代産業社会では男女の役割分業が行われていたからです。工業社会になると、男性は工場やオフィスで働いて賃金を稼ぐ公的労働をし、女性は家事・育児・介護などのケア労働をするしくみが成り立ちました。家で行う労働は労働であるにもかかわらず、お金がもらえません。そうなると「誰の稼ぎで食べているんだ」と男性は威張るようになります。ヨーロッパでは、男性が主で女性が従うという法律上の家父長制がこれを

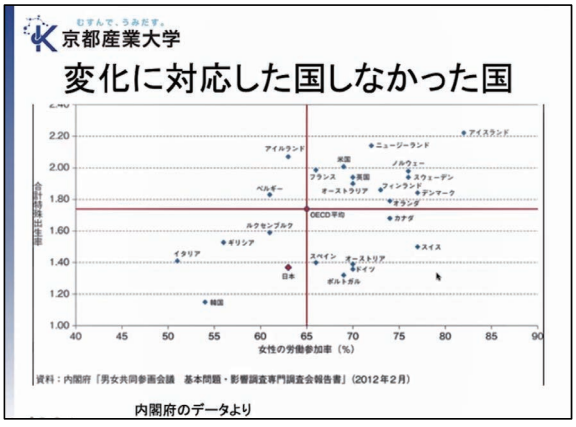
支えていました。イギリスやアメリカなどでは、20世紀半ばまで女性は専業主婦でした。スウェーデンでは1960年代後半から急激に女性の労働が伸びてきます。しかし、日本は1970年くらいまで他国と比べて女性が働く社会でした。これは、農業や自営業者が多かったためです。他国では、70年代くらいから少子化による労働者不足や女性解放運動の影響で、女性が社会に出ていく流れが作られていきました。

家族の制度も、日本とヨーロッパはかなり違い、実はヨーロッパに比べ日本は戦後、早い段階で法律上の男女平等は達成されていたとも言えます。しかし、ナポレオン法典を軸にしたヨーロッパ家族法では、家長である男性による家族の保護と管理と女性の男性への従属が制度化されていました。「結婚した女性は夫の許可なく就労してはならない」という法律が、フランスは1965年、スイスは1985年まで残っていました。そういったヨーロッパだったからこそ、急激な男女平等の動きが起こり、1960年代から女性の労働参加が広まり、男女とも働くことになるわけですから、人間らしい生活をするためにはワークライフバランスが必要になります。それに加え、働く男女を支えるための家族政策、特に子どものいる家庭を支えるサポートが急激にヨーロッパの多くの国で進んでいきます。それに対応し、男性が家事・育児参加をするようになっていくというのが70年代以降です。

しかし、日本は違う選択をしました。70年代に男性の長時間労働と、女性は家事・育児を担い、子育てが終わった後、年収100万円未満の非正規労働に就くというしくみが選ばれました。70～80年代は日本が一番豊かな時代で、日本経済を支えたのはこのしくみだったとも言えます。男性は家のことはほったらかしで「24時間戦えますか」のような働き方をし、女性は不満を持ちながら家事・育児をし、育児を終えたら100万円以下で働くという経営者にとっては便利な安い労働力となりました。ある面、経済の成長とすれば効率の良い形をとったのかもしれません。実際に日本経済は、大きな安定成長の時期を迎えました。



世界で女性の社会参画が急激に拡大した30年間（1970～2000年）、欧米各国は日本よりはるかに女性が働く社会になりました。日本は30年間で5％くらいしか伸びておらず、雇用機会均等法の効果もなかったように思われます。日本だけでなく、イタリア・スペイン・ギリシャなどの南欧社会と韓国・日本のような東アジア社会が、こうした変化に対応しませんでした。逆に北欧などの社会では、女性が働く割合が急激に増えていきました。



これは少子化と関係していて、女性が働いていない社会のほうが、働いている社会に比べ、少子化傾向が強くなっています。女性が働けば子どもが生まれるということではありません。女性が働くと負担が大きくなるので、子どもが生まれなくなるということが1970年までのデータで確認されています。なぜ生まれているかというと、男女で子育てしながら働き続けられるしくみを作っているからです。それに出遅れた国々は少子化傾向も強く、働く女性の割合も低い状態になっています。大胆に言えば、ワークライフバランスに失敗した社会と成功した社会に分けられるのかもしれません。

日本の場合、1989年の合計特殊出生率1.57ショックがありました。合計特殊出生率が2.07～2.08ないと人口は維持できないと言われていますが、ヨーロッパが70年代に経験したような急激な少子化に入っていきますし、高齢化はヨーロッパ以上に深刻に深まっていきました。少子化が進むと現役世代の労働力が減少し、お金を稼ぐ人・使う人・税金や社会保障費を支える人の減少が起こり、全体的に経済が縮小していきます。さらに日本は高齢化が進んでいますから、福祉の財政負担が増えて、現役世代の負担が拡大していきます。これは90年代に分かっていたことです。90年代に入りバブルが崩壊すると、自然環境の破壊、地域生活の均一化、女性の社会参加・参画の抑制が数字のうえでも見えてきます。同時に男性は人間性が破壊され家族生活が送れない現状、子ども問題の深刻化も見えてきました。しかし、70～80年代の男性の長時間労働、女性の家事・育児、子育て後のパートというしくみがあまりにも経済的にうまくいきすぎたため、その成功体験のモデルをほとんど現在まで続けているのが日本の状況ではないかと思います。

なすべきことは90年代には分かっていました。少子高齢社会が見えてきた時に、対応すべきことは以下の3点です。①女性の社会参画の拡大と、男女平等の労働条件・ワークライフバランスの拡充。これは70年代にヨーロッパが取った選択ですが、日本もこの選択をするべきでしたが、しませんでした。日本はいまだに「女性活躍」と言いながら、非正規の女性が増える

女性活躍なので、男女の格差は縮まっていない状況です。②高齢者の社会参画を支えるしくみづくり。今、65歳以上で働く人が増えていますが、本当は90年代に、働きたい高齢者が安心して働き続けられる労働・賃金のしくみを準備しておくべきでした。③外国人労働力受け入れに向けた人権についての法整備と、多文化共生に向けた教育・制度の準備。この3つのことに、本来は30年前に取り組むべきでしたが、充分に体制が取れないまま、女性の非正規雇用が増え、高齢者が不安定なまま働き続け、準備しないまま外国人労働力を受け入れるという流れになっているのが日本の現状です。

でも私は「今からでも遅くない！」と信じたいと思います。女性の社会参画、男女の対等な労働条件の確立、男女のワークライフバランスと男性の家事・育児参加をしていかないと、日本はもうもたないだろうと思います。そのためには、この問題について男性たちも対応していかなければならないというのが、これからの課題だと思います。21世紀以降、国連やEUを中心に男性の問題への取り組みが始まり、「ジェンダー平等に向かっての男性・少年の役割」が注目されています。EUでは男性を対象にしたジェンダー平等の政策が次々と打ち出されています。その中で私たちが注目しているのは、「Caring Masculinity（ケアする男性性）」です。ヨーロッパでは介護は社会が担う形となっていますので、ケアとは育児のことです。まだまだ女性が育児の中心になっているので「男性の育児参画」がこの言葉の意味合いです。ただ、私はこのケアという言葉の意味を広げて取ってもいいと思っています。ケアとは、自分や他者の身体や生命・生活への配慮を基礎にした社会関係の構築のことです。フェミニズム運動をはじめとした女性学の流れの中で、ケアの視点の重要性が今とても強調されています。多くは女性たちがケアを担ってきましたが、ケアが無いと社会は存続できません。ところが男性主導の社会はケアの問題の重要性を見落としていました。21世紀の社会はケアを軸にした「デモクラシー＝ケア」を軸にした社会構築が必要です。特に、男性にとって必要な視点だと思います。コロナでケアの問題が注目されましたが、うまく対応した国は、多くは女性リーダーの国でした。ドイツのメルケルさん、台湾の蔡総統などです。男性のリーダーには、生命・身体・生活に対する配慮の力が弱いということです。だからこそ、これからの社会ではケアというものを男性が身につけていかなければなりません。ケアの視点から男性を変える、男性が変わるということは、まさにこれからのワークライフバランスのポイントになると思います。

これまでの男女の関係は支配と依存、威張りながら甘える構図でした。他方で女性に依存し、特にケアの部分では女性に完全に依存しています。威張りながら甘える男女の関係を対等に作り変えていかなければなりません。その時にケアする力がとても重要になります。男性が、他者の存在、人格や思いに配慮しながら共感する力を身につけていくことは、男女の関係を対等にしていくためにも必要ですし、実際に育児や介護をする際にも必要です。一方で、ケアを受け入れる力も男性にはありません。ケアされるのが当たり前だと思っているので、ケアを受けていることを自覚して感謝する気持ちが欠けています。男性の介護が難しいと言われるのも、支配と依存の関係があるからで、「ケアする力」を身につけると同時に「ケアを受け入れる力」にもつなげていかなければいけません。自分たちが配慮されていることを認識し、自分の身の回りのことは自分ですること、そして自分だけでできないことは他者からの援助を受容し、感謝する力をつけることが必要です。

これからのジェンダー平等が目指すのは、男性主導の社会のしくみを転換し、男女という二分法に基づく差別や排除のしくみを変えていくことです。いわゆるSOGI（性的指向や性自認の多様性）も認めながら、社会を平等にしていく。その時に、SOGIやLGBTの問題のベースにあるのは、人間を男女という2種類に分けてしまって対応するところに、一つの原因があるわけですから、男性主導の社会から転換するとともに、男女という固定的な二分法に基づく差別や排除をやめることが、これから必要になってくると思います。多様性に開かれた社会にしていく。ワークライフバランス、男女ともに平等に社会参加・家庭参加し自分づくりができる生活の時間が持てる社会への転換が必要になってくると思います。

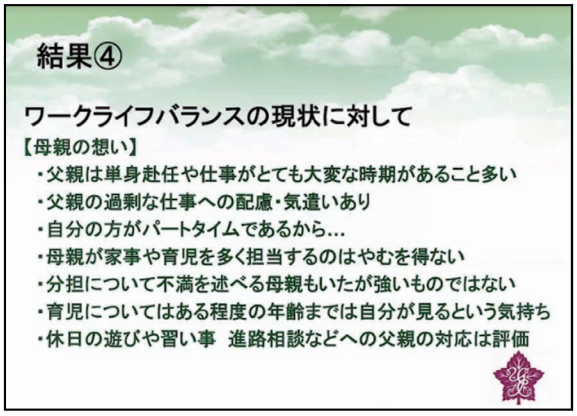
▼黒田：続いて、学生の発表に移らせていただきます。

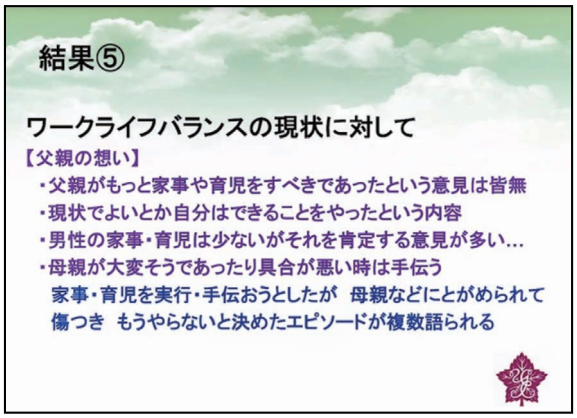
▼山梨英和大学・黒田ゼミ学生：私たちは、今回の取り組みとしては、黒田ゼミの学生を中心に両親のワークライフバランスについてインタビューし、どのようなワークライフバランスであったか、その結果を踏まえ自身はワークライフバランスについてどう考えるか、を調査しました。インタビューの期間は2021年８月～10月。対象者は山梨英和大学学生16人（女性15名、男性1名）。回答者の概要は、父子家庭１名、他は両親とも健在。両親の年齢は40代後半から50代後半です。母親の就業状況は、フルタイムが2名、他はパートタイム等でした。インタビュー内容は、両親のワークライフバランスについてで、① 家事・子育て・介護などの分担（過去を含む）、② ①について両親それぞれどのように思っているか、③ 両親のワークライフバランスをインタビューした印象、学生自身が将来のワークライフバランスをどのように考えるか、です。



インタビューの結果、①については、家事のメインは母親であるという家庭がほとんどでした。父親が家事に参加している家庭では、ゴミ出しや風呂掃除を担っていたり、母親が大変な時や疲れたりしている時は、代わりに料理をするなどの意見がありました。祖父母の介護に関しては、まだそう

いう時期ではないという家庭が多数でした。ワークライフバランスの現状は、今の状況と学生が子どものころでは異なり、小さいころは母親と一緒に世話をしたり遊んだりしてくれた父親もいました。一方、最近のほうが手伝うという父親もいました。成長した子どもに家事を手伝ってもらうようにしているという母親もいました。ワークライフバランスに関する夫婦の話し合いについては、両親できちんと話し合ったという家庭は少なく、結婚や出産をきっかけに、家のことは主に母親が行うことが定式化している様子でした。さらに家事を祖父母がサポートしている場合も多く見られました。





②については、ワークライフバランスの現状に対しての母親の想いは、父親は単身赴任や仕事がとても大変な時期があることが多く、父親が過剰な仕事を担っていることへの配慮や気遣いがあるとのことです。自分の分担が多いことについて不満を言う母親もいましたが、それは強いものではありませんでした。また、育児については、ある程度の年齢までは育児は母親がみるという気持ちがあり、休日の遊びや習い事、進路相談などに父親が対応してくれることを母親は評価しています。ワークライフバランスの現状に対する父親の想いは、自分ができることはやったと思っているため、もっと家事や育児をすべきであったという意見は皆無でした。男性の家事・育児は少ないが、それを肯定する父親の意見は多く出ました。母親が大変そうであったり具合が悪かったりした場合は、父親は手伝うこともあるようです。一方、父親が家事・育児を実行・手伝おうとしたが、その際に母親などにとがめられて傷つき、もうやらないと決めたというエピソードが複数出ました。

③については、インタビューを実施した学生の感想です。家事の分担を決めるべきではない。実家の両親に手伝ってもらう、職場に考慮してもらうなど周りに協力してもらう。(両親のインタビューの中には)家事・育児に比べて介護についての考えは少ないため、今のうちから考慮する必要がある。母は家庭、父は仕事という固定概念が無意識的にあるのではないか。男性・女性のお互いの意見が合致していなければ、理想的な家事・育児・介護はできない。コミュニケーションを頻繁に取る必要がある。これらの感想から、理想的な家事・育児・介護を行うためにはコミュニケーションを頻繁に取ることが必要だということがわかりました。

全体のまとめとして、ワークライフバランスを実現させるためには、男性・女性という性別のくくりで考えるべきではないという意見が出ました。また、出産・仕事・子育てなど、その時の状況に応じて話し合い、お互いが納得のいく方法を模索する必要があることが考えられます。さらに、生活をともにする家族だけで対応することが困難な場合は、夫婦の互いの両親や職場の協力を得ることもひとつの手段だと思います。これらのことを円滑にするためには、結婚前から話し合える環境を整えておくことが、結婚後のワークライフバランスに関わってくると考えました。このインタビューをとおして、自分の家族の現状や両親の考えていることを知り、自分の将来について考える良い機会になりましたので、これから自分の将来のワークライフバランスにつなげていきたいと思います。

▼黒田:続きましてもう一つの杉村ゼミの発表に移りたいと思います。

▼山梨英和大学・杉村ゼミ学生:こんにちは、杉村ゼミです。本報告は6名の報告者による原稿読み上げ方式で行います。はじめに①「不在の父親」としての宮崎駿の反省的回想と息子吾朗からの批判の内容、および両者の作品における固定的性役割観を概観し、そのうえで②宮崎父子の主要作品における父親表象を3つの分析枠に基づいて吟味し、最後に③駿、吾朗が提示する代替的な家族のあり方について検討します。



① 1992年のエッセイで宮崎駿は、期待された父親としての役割をほとんど果たさず、子育ては妻まかせであった自身の姿を振り返っている。アニメ監督である長男吾朗は2006年、父の仕事と私生活の両立の困難、東映アニメーターであった母のキャリア断念、父親不在だった家庭状況に触れて、次のように述べている。「宮崎駿は父としては0点」「子どもの世話はもちろ

ん、家事も一切やりませんでした」。こう語る吾朗の姿勢は、父駿に対して明確に批判的・対立的である。しかし、留意したいのは、妻の働きぶりを「男親のように……」と形容する父駿と、母を「父親代わり」と呼ぶ息子吾朗――両者の対立が、「父親と母親はそれぞれに果たすべき役割がある」という伝統的性役割観に基づいていることである。このことを踏まえて、まず、宮崎父子の監督作品に通底する固定的性役割観を概観したい。スーザン・ネイピアらが指摘するように、宮崎駿作品では、伝統的性役割観にとらわれない自立的な女性キャラクターが多く描かれており、このことが世界的評価にもつながっている。例えば、『天空の城ラピュタ』(1986)では、海賊集団のリーダーを中年女性のドーラが務め、『もののけ姫』(1997)では、女性指導者エボシのもとで、通例では男性が行うとされる「たたら」を踏む仕事を女性たちが担っている。しかし、宮崎作品の女性たちが、もっぱら「新しい」ジェンダー観を体現しているわけではない。例えば、「それでも男かい？」「おまえたちも嫁にするならああいう娘にしな」というドーラの言葉は、意外なまでに保守的な彼女の性役割観を示している。宮崎駿作品においては、しばしばジェンダーロールの大胆な越境・転倒状況が描かれているが、同時に、保守的・固定的な性役割観が肯定的に提示される場面もけっして稀ではない。実際、ジブリ作品では多くの少女が、食事の支度や掃除などの家事役割を引き受けている。『パンダコパンダ』(1972)のミミ子や『となりのトトロ』(1988)のサツキは、不在の母親に代わり、進んで母親の役割を担っている。吾朗作品でも同様の状況が確認できる。例えば、吾朗が監督、駿が企画・脚本を担当した『コクリコ坂から』(2011)では、キャラクターデザイン担当の近藤勝也が示唆するように、物語の要となる二つの建築物――高校の部活棟カルチェラタンとコクリコ荘――は、公的・私的領域のジェンダー分離の象徴として機能している。そこで男性生徒は闊達に議論を交わし合い、女性生徒は率先して掃除・炊事などのケア役割を担っている。

② 駿・吾朗の作品に通底するこのような固定的性役割観を踏まえたうえで、次に、宮崎駿作品における「父性(と父親的秩序)」の主題的重要性を強調するキム・ジュニアンの指摘を念頭に、両者の父親表象を検討する。表は、宮崎駿・吾朗の主要作品における父親表象を「ケア役割を担う父」「だらしのない父」「代替的な父」という3つの分析枠に基づいて整理したものである。「だらしのない父」は、宮崎駿が1980年代前半に構想した「果たすべき役割を果たせない父」のキャラクター類型に与えた名称に由来する。以下では、この3つの父親表象の類型について吟味する。

主要作品における父親／男性役割表象：3つの分析枠

発表年	作品名	ケア役割を担う父／男性	「だらしのない」父／男性*	代替的な父
1972	パンダコパンダ	(パパンダ)	パパンダ	パパンダ
1984	風の谷のナウシカ		ジル(ナウシカの父)	ユパ
1986	天空の城ラピュタ			モグラおやじ(ドーラ一家)
1988	となりのトトロ	草壁タツオ(サツキとめいの父)		
1989	魔女の宅急便	フクオ(パン屋)、黒猫ジジ		
1992	紅の豚	マンマユート団(幼児の世話)	ボルコ(ジーナに対して)	
1995	耳をすませば(脚本・制作)			西司朗(地球屋主人)
1997	もののけ姫			
2001	千と千尋の神隠し		荻野明夫(千尋の父)	
2004	ハウルの動く城	マルクル(ソフィーの手伝い)	ハウル(ソフィーに対して)	
2006	ゲド戦記(吾朗第1作)		アレンの父	ハイタカ
2008	崖の上のポニョ		フジモト(ポニョの父)	宗介
2011	コクリコ坂から(吾朗第2作)			風間俊・明雄
2013	風立ちぬ			

・「だらしのない父親」：宮崎駿、『ロルフ』映画化構想時の着想（宮崎, 1996）
→「果たすべき役割を果たせない父」として『ナウシカ』の父ジルに引き継がれる。
出典：宮崎駿『風の谷のナウシカ 宮崎駿水彩画集』東京、徳間書店、1996年、148頁。
※宮崎駿1941年1月5日生まれ、宮崎吾朗1967年1月21日生まれ。
『パンダコパンダ』放映開始時、宮崎駿：31歳　宮崎吾朗：5歳

キム・ジュニアンは、『となりのトトロ』のサツキとメイの父で、入院中の妻に代わって家事・育児を担う草壁タツオの姿をとおして、宮崎駿が「新しい父親」の可能性を試みたと指摘している。ここでは、キムの議論への補足として、『魔女の宅急便』(1989)で描かれるふたりの「新しい父親」について触れておきたい。ひとりは、パン屋夫妻の夫フクオである。エンドロールのワンカットで、本編で妊娠していた妻オソノの子どもが誕生しており、父フクオが授乳している姿が描かれる。はるかかなたにさっそうと目をやるオソノと、やさしく赤子の顔を覗きこむフクオの視線の対称性は、旧来の性役割観にとらわれない夫婦像を示唆している。また、キキの相棒である黒猫ジジも、エンドロールにおいて父親となり、子猫を見守る姿が示されている。このように80年代後半の駿作品では、脇役や動物を含め、ケア役割を積極的に担う新たな父親像が提示されている。一方、宮崎が「だらしのない父」と呼んだ「果たすべき務めを果たせない父」の原型は、72年の『パンダコパンダ』にまで遡る。宮崎は後年、同作の父親パンダであるパパンダがトトロの原型であることを示唆している。また、パパンダが両親不在の主人公ミミ子の家に現れ、不器用なみぶりでミミ子の「父親代わり」になっていることは、制作当時、駿自身が、家にいれば寝てばかりの「不在の父」であったことに照らせば興味深い。このような「代替的な父」のあり方は、駿・吾朗の父親表象を理解するうえで一つの鍵となる。駿・吾朗作品に登場する不在の父の身代わりとなる「代替的な父」とその被庇護者との間には、しばしば知識授与やケア役割をめぐる互恵的な関係が形成される。『パンダコパンダ』では、ミミ子はパパンダに「わたしのお父さんになって。そのかわり、わたしはパンちゃん〔コパンダ〕のママになってあげる」と言っている。ミミ子はケア役割を担い、パパンダは不器用な仕草で父親的庇護の姿勢を示している。『風の谷のナウシカ』(1984)では、ナウシカの代替的な父としてユパが登場する。ナウシカは腐海の知識を教え、ユパは父の死に際して激高するナウシカをなだめ、精神的に不安定な彼女を守り、導き手として支える。吾朗の『ゲド戦記』(2006)の大賢人ハイタカは、家庭をかえりみない国王であるアレンの父に代わって、父親的役割を引き受けている。彼は、無知なアレンに世界情勢を教え、庇護する。一方、アレンは、物語後半で危機に瀕したハイタカを救出している。吾朗の『コクリコ坂から』で、死んだ父のために海に向かい旗を上げ続ける主人公・海(メル)は、高校の先輩の風間俊に対し「お父さんが自分の代わりに風間さんを送ってくれた」と述べている。海は彼のためにサークル棟の掃除を行い、俊は彼女の心の支えとなっている。

③ 宮崎駿・吾朗作品に見られる代替的・互恵的な家族のあり方には、家庭内役割の非固定性を軸とした、近代的家族観からの逸脱を見出すことができる。例えば、『崖の上のポニョ』(2008)において、母親リサは夫の帽子をかぶる息子宗介を単に庇護の対象だけでなく、ときに夫の代替者として接しており、宮崎駿もリサに触れて「亭主がいないと、息子宗介を亭主代わりにしてしまうところもあります」と述べている。『ゲド戦記』や『コクリコ坂』では、血縁上の父親の排除と代替的な父親の導入をとおして、非血縁家族や疑似家族的な集団生活の多様なあり方が肯定的に描写されている。これらを宮崎吾朗が探る近代家族のオルタナティブとして把握することもできるだろう。宮崎駿・吾朗作品においては、しばしば「代替的な父」を媒介として、主要人物間に互恵的な親密圏が発生し、近代的標準家族の役割固定制を動揺させている。大野祥子によれば、男性が「男は仕事を優先して当然」というジェンダー規範から脱却するには、家族観の転換が鍵になると言う。また、家族を「役割代替え可能」な関係、「状況や相手のニーズに合わせて、日々、新たな関係を相互に生成し続けるために、主体的に関わっていく関係」として新たに捉えなおすことが、「ケア役割の最終責任は女性が負うもの」というジェンダー規範の乗りこえにつながると論じている。大野の指摘をそのまま宮崎父子が描くオルタナティブな家族に重ね合わせることはできないが、その背後に、大野が述べるような「家族観の転換」への願望と、その実現の困難を逆説的に見出すことは可能かもしれない。宮崎父子が提示する代替的家族表象の多くは依然、因習的で固定的な性役割観に根ざしている。吾朗作品においてはとりわけそれが顕著である。吾朗は2011年のインタビューで、「仕事に埋没して非人間的になる」ことへの長年の忌避感と、現実にはかつての父と同じく「仕事に埋没して」しまっている自身の姿の矛盾について率直に語っている。「不在の父」宮崎駿が創造したパパンダを愛した息子吾朗が発するこれらの言葉のうちに、「男は仕事を優先して当然」という男性ジェンダー規範の根深さと、ときに頑なに変容を拒みながら縮小していく日本の社会構造のアイロニカルな反映を見いだすことは、どの程度まで可能なのか――。今後の包括的な宮崎駿・吾朗論の構築に向けて、この問いを提起することで、本報告の結びとしたい。

▼黒田：ありがとうございました。ディスカッションに入っていきたいと思います。石井先生、お願い致します。



▼石井：まず、伊藤先生のご講演の中で提示された、かなり興味深いデータは、日本女性の労働参画と少子化の関係についてです。やはり先生がおっしゃるように、男女が共同で子育てに参画できる制度とか意識が弱いというのは、イタリアもそうですが、日本も経験していることだと感じています。伊藤先生が一貫して強調なさっているのは、男性たちが変わらなければならないということで、同感です。私は家庭内労働の研究をやっていますが、男性が育児・家事をすることによって、いろいろな効果があります。それが当たり前になっていく社会の構築は、伊藤先生は今からでも遅くないと主張なさっていますが、本当にそのとおりで、「今からでもやっていきましょう」というのが私の考えでもあります。男性の家事についていつも気になっているのが、男性が家事や育児をすると「育メン」ともてはやされる傾向にありますが、女性は「育ウーマン」と言われなくて、女性が家事・育児をするのは当たり前という風潮が、まだまだ日本では強くあると思います。男性の育児・家事が特別扱いされるのは、女性にとっては「何なの」と思うことが多々あると思います。私も父親の育児参加について研究していますが、将来的には育メンという言葉が当たり前の社会になることを期待していますし、このような動きは歓迎すべきものです。また、女性のリーダーが居る国では、コロナがそんなに流行らなくて済んだという話で、男性のケアへの配慮が弱いということも実感しました。さらに、固定的な二分法に基づく差別や排除のしくみを変えることは非常に重要で、性別を超えた多様性に考慮したものを作ることが重要だと感じました。

学生さんたちの発表についてですが、2グループとも興味深い内容でした。ワークライフバランスに関して、祖父母からの支援が多いというのが気になったところで、都会ではあまり祖父母のヘルプはありませんが、地方では祖母との関係が非常に重要だということが分かりました。また「もっと家事や育児をすれば良かった」という男性が皆無だったことには、ある意味ショックを受けております。山梨県だけでなく、全国区でこのような考えを持つ男性は多いので、貴県でもそうなのかと感じました。

宮崎駿作品の分析はとても面白いと思います。「崖の上のポニョ」で気になったのが、宗介が母親のリサを下の名前で呼んでいることです。宮崎駿さんは仕事人間で生活を送ってこられたということですが、この宗介の現象は、子どもでも一個人として自立すべきだという宮崎さんの思いが含まれていたのかと思いました。

▼伊藤：学生さんの発表で、お父さんが家事をやろうとしたら、お母さんに止められちゃってという話は、男性が変わろうとする時の難しさですね。お父さんにやってもらったら、かえって仕事が増えちゃうから女性たちは「やめてくれ」と言いがちですけれど、その辺でどうやって変わってもらうかがポイントだと思いました。また、宮崎駿さんは不思議な人ですよね、70年代のケアする男性像を積極的に描いた人が、いつの間にか変わっていってしまったり、宮崎作品をジェンダーの観点でもう少しきちんと分析するのは、すごく面白いことなんだと思いました。



▼**黒田：**学生さんの皆さん、感想はいかがですか。

▼**学生：**伊藤先生に質問ですが、現代の日本の大学生に対し、男性学の視点から、男性中心主義をめぐる問題とその改善について説明する際に苦労する点はありますか。また、その際、学生のジェンダー格差を感じることはありますか。

▼**伊藤：**もちろんジェンダー格差はあります。男子学生、女子学生の反応は違ってきますから。ただ、若い男性の意識はかなり変わり始めていると思っています。男女ともに仕事よりも自分の家庭を大切にしたい人が圧倒的多数になっています。問題なのは、若い世代の意識は変わっているのに、社会のしくみが変わってない状況です。若い世代はそれをどうするんですか、という質問を投げかけたいですね。草食系という言葉が出てきたけれど、若い男性はすごく優しくなっているし、他者に対する共感能力も高くなっていると感じます。まだ古いジェンダー意識を背負っている部分もありますが、かなり変わり始めている部分をもっとプッシュして、変わっていってほしいと思います。そのためには、社会のしくみが変わらないと。古いおじさんたちに古い考えを持っていることを変えてもらうような働きかけをしないと、楽にはならないと思っています。



▼**学生：**経済格差の拡大に関わって質問させていただきます。現在、多くの非正規労働者にとって、ワークライフバランスは現実的ではないと思います。ワークライフバランスについて考えられるのはエリート層に限られているという見方もあると思います。日本における階級的分断とワークライフバランス問題について、男性学の視点からお考えをお聞かせください。

▼**伊藤：**本当は、非正規の問題はワークライフバランスと深い関わりがあります。例えばオランダモデルというのがあります。ここでは、女性たちの多くが自分たちのワークライフバランスのために、短時間の勤務をしています。なぜ積極的にそうしているかというと、均等待遇のしくみが確立しているからです。つまり、同じ時間働いた人には同じ待遇の賃金が払われるし、社会保障も短時間でも保障されるしくみができています。ところが日本の場合は、それができていません。非正規の人は、社会保障は無いし、同じ時間働いても、給料は正規の人と比べ各段に差がある状況です。しかも非正規は圧倒的に女性になってしまっている。階級分断とジェンダー分断の原因になっているのは、男女の働き方の区分と均等待遇が十分にできていないことの問題が大きいと思います。それに加え、この間の社会政策・経済政策が、お金を持っている人にお金が貯まる形で、お金を持ってない人の生活は切り捨てられています。これは、構造的な問題で、階級的分断かもしれませんが、社会のしくみを変えないとどうにもならない問題です。ただ、正規・非正規の問題をワークライフバランスと絡めて考えるならば、均等待遇というルール（ILO125号条約）が必要です。これは大変重要ですが日本政府は批准していません。批准すれば、均等待遇が求められますので、そこから変えていくことが、男性の働き方も含めて非正規とワークライフバランスのしくみを変えていく一歩になりうると思います。

▼**学生：**私たちは親を見て、自分のワークライフバランスのイメージができてくる面もあり、親のワークライフバランスが重要に感じます。どうすれば若い世代で改善していけますか。

▼**伊藤：**皆さんは、先ほどのプレゼンの中ですでに答えを出しているじゃないですか。コミュニケーションがすごく大切で、皆さんが両親にワークライフバランスについて語りかけて、ちょっと考えてもらうことをすることが、両親のワークライフバランスにつながっていくのではないでしょうか。今回、インタビューされて、若い世代の家族観は自分たち親世代と違うと気がつかれたと思います。そこをコミュニケーションしていくことが必要だと思います。将来、結婚した男性が家事をしている状況を自分の親が見て、「変だ」という状況は嫌だと思いますので、自分たちはこう思っているということを親世代に語りかけることが重要です。

▼**石井：**先ほどの社会格差のことですが、私は父親についての研究をしていまして、父親の育児休業についての研究対象となるのは、ほとんどが大企業で働く父親でしたが、労働者階級の父親たちのデータを収集したことがありました。その結果、ワークライフバランスに関しては、その言葉自体はあまり意識していないけれど、父親が育児・家事をやらざるをえない状況にある人が非常に多かったように思いました。父親研究に関しても、いろいろな階層・人種・ジェンダーといった研究が不足していますので、今後、若い人たちにはぜひそのような研究もしていただきたいと思いました。

▼**黒田：**伊藤先生、石井先生、学生の皆さん、ありがとうございました。

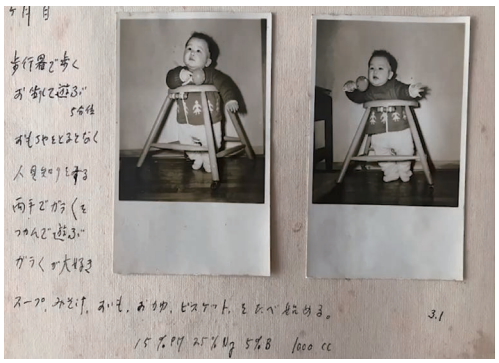
【第2部】



▼黒田：第2部では、石井クンツ昌子先生に「家庭内役割分業から考える男女平等参画～男性の育児・家事に注目して」というテーマで50分間講演をいただいた後、山梨英和大学学生のプレゼンテーション、全体のディスカッションを行います。では、石井クンツ昌子先生、お願い致します。

▼石井：今日は、①コロナ禍と男女平等参画、②日本の家庭内役割分業の現状、③男性の育児・家事、④今後の課題と提案、という流れでお話し致します。

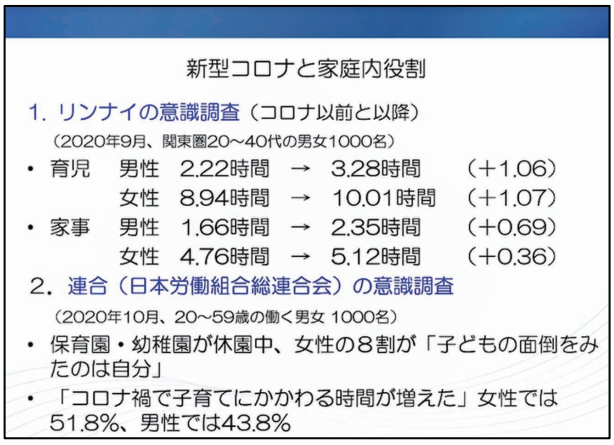




これは私が生後5カ月の時の写真です。かなり年季が入っていますが、うちにはこういうアルバムがたくさんあって、写真の横には「歩行器で歩く」とか、食べた物とかの手書きの記録があります。これは全て私の父が作ってくれたもので、母による手書きのものはありません。このように実は私の家では、主に父親が家事や育児をしていました。私が学校に持っていくお弁当は日の丸弁当系だったのですが、小学校低学年の時、周りの女子のお弁当はカラフルな盛り合わせで、おいしそうなことに気づきました。父親に家事をしてもらうのが当たり前に育っていたので、この時初めて、ジェンダー差に興味を持ちました。そしてワシントン州立大に留学し、初めて家族社会学とジェンダー研究に出会い、のめり込んでいきました。以上簡単な自己紹介です。

それでは、①コロナ禍と男女平等参画についてお話しいたします。コロナ禍では、母親が危機感を感じているという新聞や雑誌記事の見出しが多くありました。「ママやめたい！外出自粛で広がる悲鳴」「休校で悲鳴はママだけ？」などです。私が色々な記事を読んで感じているのは、コロナ禍で日本における根強い男女役割の固定観が露呈してしまったということです。

昨年度、コロナ禍で行われた調査を見てみたいと思います。家庭内役割については、リンナイの意識調査では、コロナ前と後を比べて、育児時間が男性は2.22時間から3.28と1.06時間増加。しかし、女性も同様に増えています。家事についても、男女ともに増えています。他に、連合の意識調査（2020年10月、20～59歳の働く男女1,000人に実施）で興味深いのは、女性の8割が「保育園・幼稚園が休園中、子どもの面倒をみたのは自分」と答えていることです。さらに「コロナ禍で子育てに関わる時間が増えた」と答えたのは女性51.8%、男性43.8%でした。特に女性の家事・育児がコロナ禍で増えていることが分かります。



コロナ禍で露呈した日本の男女不平等と男女の意識差については、江崎グリコの意識調査によれば、7割以上の父親・母親が「新型コロナウィルスは子育てに影響があった」と答え、そのうちの約6割が「家族で一緒に過ごせる時間が増えた」が、同時に約7割の母親がコロナ禍の子育てにおいて孤独感や心細さを感じ、孤立した「孤育て」が加速していることが分かりました。さらに子育てをするうえで「父親・母親ともに夫婦で協力して子育てにあたること」が重要と考えているのが、母親8割、父親6割弱で、男女差がありました。新型コロナにより、男女の「家時間」が増えたことで、特に家庭内役割における男女不平等がより鮮明になったと考えられます。

家事・育児は全てが見えているわけではありません。「名もなき家事」というものがあります。従来の「名もなき家事」に加えて、コロナ禍では「新名もなき家事」というものが出てきたのではないかとも言われています。ベッドや布団を整える、クリーニングを出す、学校の必要書類を記入するなどは「名もなき家事」と言われ、主に母親が担っていますが、コロナ禍においては、手洗い・うがいの呼びかけ、マスクの確認、換気などの「新名もなき家事」が加わりました。「新名もなき家事」を担っているのもやはり女性で、ここにも夫婦間のギャップが見えます。

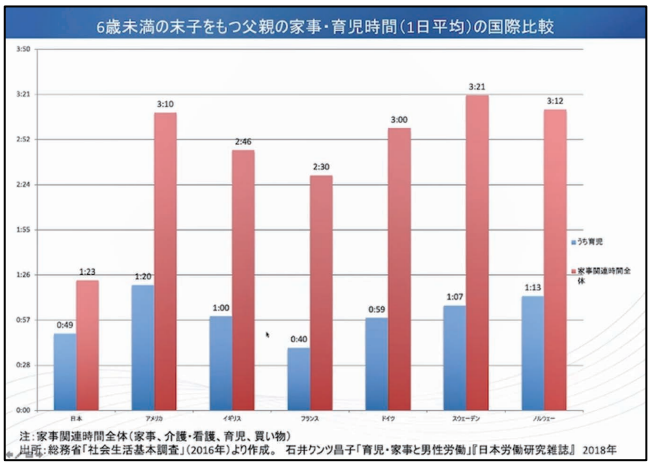
そこで、まずは、育児と家事の違いを説明したいと思います。共通点としては、どちらも何らかの行動が伴うこと、性別役割分業がはっきりしていて、どちらとも女性が行う場合が多いことです。相違点も多くあり、日課（ルーティン）であるかどうか、報酬があるかどうかという2つの視点で話しますと、ルーティンは、料理・洗濯・掃除など育児よりも家事のほうが時間や間隔が決まっていることが多いという側面です。これに対し、育児は突然病気になるなどルーティンではない予期せぬ行動

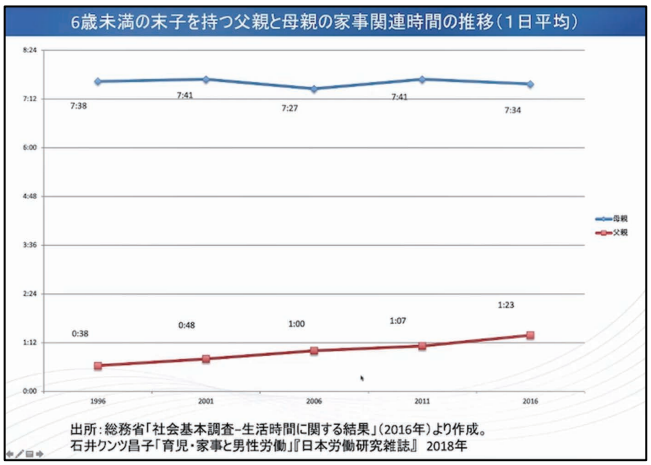
を伴います。一方、報酬は、やって当たり前の家事に比べ、育児のほうが多いと考えます。子どもが片付けが上手にできたり、挨拶ができたりすると「優秀ね」と褒められるなど親にとっては精神的な報酬が大きいと思います。それと比較して、家事のほうは、やって当たり前で、報酬という意味では家事のほうが育児より低いと考えられます。

②日本の家庭内役割分業の現状についてです。日本で父親の育児参加キャンペーンが開始されたのは1990年後半です。「育児をしない男を、父とは呼ばない」というキャッチフレーズの政府が初めて出したポスターは、当時、センセーショナルでした。2003年には「私は、育児なしの父でした」というポスターも出ましたが、私には2つとも、ネガティブトーンに感じられました。

男性の育児がポジティブに捉えられるようになったのは2000年代後半からです。育メンブームが到来し、育メン現象世代の父親は、「育児を楽しめる恰好いい男」とされました。2010年には政府が育メンプロジェクトを立ち上げ、育児介護休業法の改正が行われました。政府は、父親の育児参加が少子化打開の一助になると考えていますが、父親の育休取得が進む北欧の国では、少子化が理由で父親の育児が推奨されてきたわけではありません。例えばノルウェーの場合、男女平等が大きなテーマで、父親の育児参加はその一環となっていますが、日本の場合は、常に少子化打開が見え隠れしているように思います。2006年にはファザーリング・ジャパンという団体が立ち上がり、父親支援の活動を行っています。「ケアメン」「カジメン」「パパ友」「オムリエ」「イクジイ」「イクボス」などの言葉も生まれました。ただ日本では、男性の育児文化は定着しつつありますが、父親の育児休業取得率が低いなど、行動が伴っていない場合が非常に多いです。こうした中、父親の育休の義務化という動きもあり、一部企業ではすでに育休取得の義務化が始まっており、政府の超党派議員連盟では話し合いを行っています。

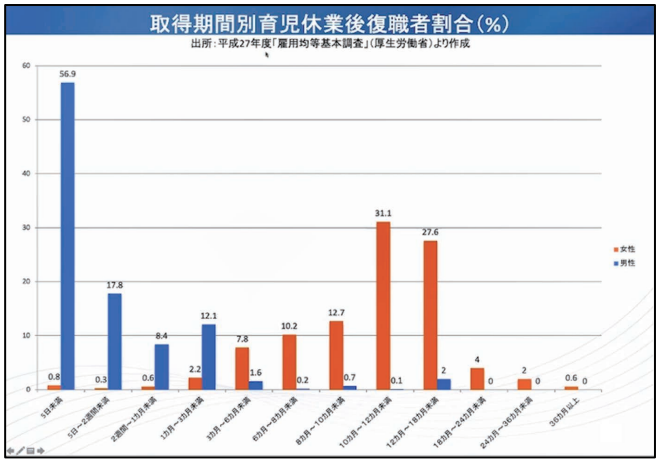
ここで、データをいくつかお示しします。6歳未満の末子を持つ父親の家事・育児時間（1日平均）の国際比較では、ぱっと見た限り、家事関連時間が一番低いのは日本です。ただ育児時間に関してはフランスが一番低く、次に日本です。6歳未満の末子を持つ父親と母親の家事関連時間の推移（1日平均）でも、男女格差が見られ、2016年では母親7.3時間に対し、父親は1.23時間とかなりのギャップがあります。





育児休業取得率の推移ですが、女性の育休取得率は2007年ごろから8割を越えています。一方の男性は、日本で初めて男性が育児休業を取れるようになったのが1992年ですが、取得率は低迷していましたが、2017年に5.14%、2020年には12.65%に増えました。男性の育児取得は近年になり急激に増えていますが、2020年は女性の81.6%が取得しているのでやはり大きなジェンダーギャップが見て取れます。さらに取得期間にも男女差があります。男性は5日未満が圧倒的に多く、56.9%。女性は10～12カ月未満、12カ月～18カ月未満が一番多くなっています。



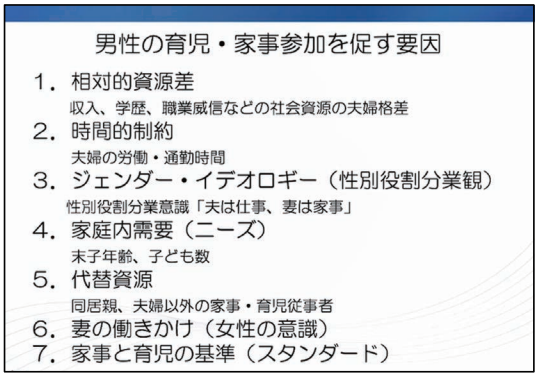


これらのデータから分かる日本の現状をまとめてみます。
①父親の育児の容認派は増えているが、まだ父親の育児が文句なしに受け入れられているという状況にはない。
②父親の育児行動は少しずつ増えているが、母親と比較するとまだかなり少ない。
③父親の育児参加の「希望」と「現実」にギャップがある。約３割程度の父親が育児をしてみたいと思っていて、希望と現実の間で揺れ動いている。

ではなぜ、男性の育休取得率はまだ低いのでしょうか。いくつか理由が考えられます。
①低い育児休業給付金。最初の６カ月は67%ですが、次の６カ月は50%。男女の賃金格差があるため、給料が多いほうがカットされると家庭への経済的影響が大きい。
②男性社員の育児休業に対する根強い抵抗感。職場、家族、友人から理解が得られないことなどが理由。
③男性社員が育児休業を取ったり、育児のための短時間勤務やフレックス勤務をすることを妨げる行為がある。パタハラ（パタニティ・ハラスメント＝父親に対するハラスメント）があり、上司など世代による子育て観のギャップが影響していると思います。

男性の育休取得の義務化や男性の産休に期待を込めるという意味で、2022年４月から、改正育児・介護休業法が始まります。大まかな内容を紹介します。
①企業に対し、妊娠や出産を申し出た従業員（男女問わず）に制度の周知や取得の意向確認を義務付ける。
②大企業（従業員1,000人以上）には、男性の育児休業取得率を毎年公表するよう義務付ける。
③男性が柔軟に育休を取得できるよう、産後８週間を対象とした「出生時育休」を新設する。（男性の産休）
④男女問わず、１歳までに育児休業を２回に分割して取得できるようになる。要件を満たせば、１歳以降もさらに分割が可能になる。「出生時育休」と併用すれば、男性は１歳までに計４回の育休取得が可能になります。
「義務付ける」という言葉が出てきている点で、2010年の育休法からさらに一歩進んだ印象を受けています。

それでは、男性の育児・家事参加を促す要因として、これまで研究されてきたことを説明します。



①相対的資源差。収入・学歴・職業威信などの社会資源の夫婦格差のことで、これらが高く、たくさんの資源を持っている男性ほど育児・家事に参加していないという仮説です。
②時間的制約。夫婦のうち、家で過ごす時間・子どもと過ごす時間が多いほうが、より育児・家事をやっているという仮説で、女性のほうが、家にいる時間が長く、それに伴い家事をしている時間が長くなるという仮説です。
③ジェンダー・イデオロギー（性別役割分業観）。性別役割分業観が伝統的であればあるほど、夫は育児・家事をあまりやっていないという仮説です。
④家庭内需要（ニーズ）。末子年齢が低い、子ども数が多い場合は育児・家事のニーズが増えてくるため、夫の育児・家事の時間が増えるという仮説です。
⑤代替資源。同居親など夫婦以外の育児・家事従事者がいる場合、男性の育児・家事参加は少なくなるという仮説です。
⑥妻の働きかけ。妻が夫に育児・家事を「やってほしい」と働きかけるなど女性の意識が重要という仮説です。
⑦家事と育児の基準（スタンダード）。基準が高いほうが余計育児や家事をしているという仮説です。私はスタンダードがあまり高くないので、うちではスタンダードが高いパートナーがやることになっています。
以上7つが、家事と育児の規定要因です。

興味深いのは、育児と家事で規定要因が少しずつ違うということです。例えば、男性の場合、育児では、子どもの年齢が高いことや妻の就労を肯定的に捉えていると育児につながっています。つまり、子どもと夫の意識が男性の育児参画に関連していると思われる結果が多くあります。一方、家事については、妻の収入が多い、学歴が高い、妻自身が就労を肯定的に捉えているなど、妻に関する要因が夫の家事を促しているという研究結果が出ています。

父親の育児・家事がもたらすものについての研究ですが、私の研究は二人親家庭（父親のいる家庭）の場合です。その研究で分かっていることは、まず、父親の育児は子どもの社交性や情緒的発達を促します。妻への影響は、育児不安やストレスを軽減し、養育態度をポジティブにしたり、就労機会を促したりします。夫婦関係については、夫婦間のコミュニケーションを促すということがあります。つまり、自身や子どもの行動予定など毎日の要件などのコミュニケーションが多くなります。父親自身への影響として最も大きいのは、子どもと接することで、自分が成長したと感じたり、柔軟性が高まることです。職場への影響としては、対人関係において、より柔軟になり生産性が高まったことなどです。

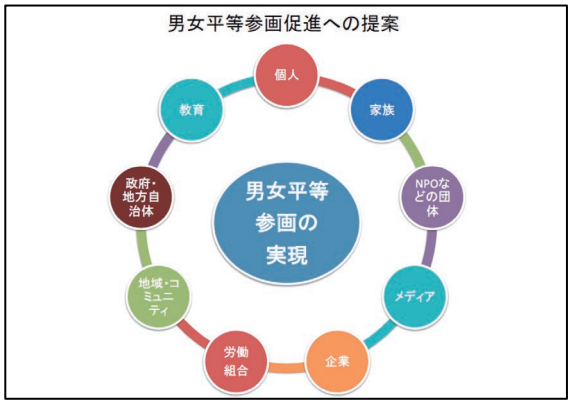
男性の育児と女性の就業の関係についての研究結果を見ますと、夫の労働時間が長いと、既婚女性の労働力率が低下し、継続就業を断念させる。夫が早く帰宅することは家事参加を促し、妻の正規就業を促進する。夫の性別平等意識が高

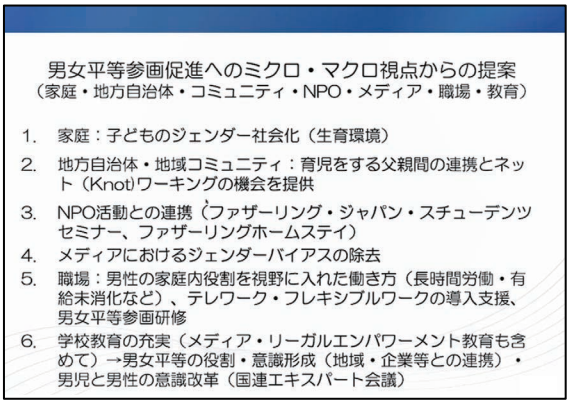
いと、妻の正規就業選択を促す。夫の育児・家事の協力度が高いと、妻の就業確率に正に有意な影響を与えている。これらの結果から、夫の育児参加は、妻の就業にプラスの影響を与えていることが分かります。

続いて、子育ての父親自身への影響についてです。全てがポジティブではなく、育児不安、育児ストレス（パタニティーブルー）もよく聞かれます。一方で、育児の喜びを知ったという声も多いです。自身に成長感を感じ、「思いやりが深まる」「物事に対する考え方が柔軟になった」「人間関係が広がった」「仕事に対する意欲が湧いた」などの感想もありました。また、職場への影響でも、段取りの重要性、時間のマネジメント、生産性の向上など多くの男性が仕事のやり方に変化があったと答えています。面白いと思ったのは、「育休も自分のキャリアの一環」と捉えるポジティブな父親もいることです。

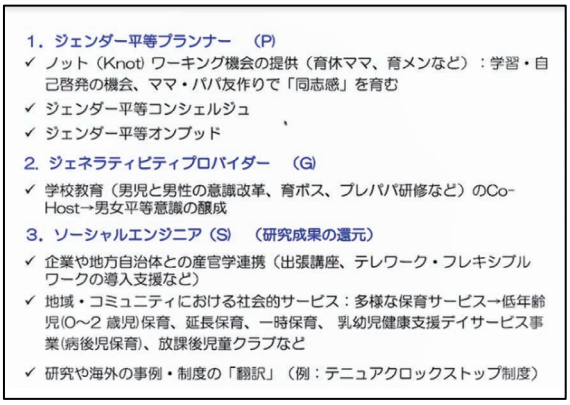
父親の育児・家事参加がもたらす影響については、まず、子どもへの影響は、人間としての多様性を学ぶ機会を与えているのではないかということがあります。父・母という異なる考えを持つ2人に触れることは、多様性のある考え方をするきっかけになるのではないかということです。また、妻にとっては、夫とのコミュニケーションにより孤立感から脱却でき、母性神話からも解放されるということがあるのではないか。男性にとっては、育児というコントロール不可能な経験をすること、親アイデンティティを確認することが挙げられると思います。職場においては、つながりや時間の重要性を再確認できるということが大きいと思います。育休を取得した父親の中には、育休期間、会社から忘れられているような感覚になり、悩んでいる人も多かったですが、同僚からの短いメールで救われたという人もいました。

そこで、男女平等参画推進への提案です。日本において男女平等参画が進まないのは、さまざまな立場の方、機関やグループが連携していないからだと思っています。個人、家族、NPOなどの団体、メディア、企業、労働組合、地域・コミュニティ、政府・地方自治体、教育が全て連携して、男女平等参画という一つの目標のもとに進んでいかないと難しいことだと思います。ノルウェーでは、1993年からパパクオータという父親が取らなければならない育児休業ができました。その経緯は、女性団体・教育機関・労働組合など、さまざまな人たちと団体が一緒になって実現し、今では男性の育児休業率は9割を超えています。こういった連携が、日本ではまだまだ弱いと思います。





男女平等参画促進へのミクロ・マクロ視点からの提案は、①家庭での子どものジェンダー社会化、②地方自治体、地域コミュニティによる育児をする父親間の連携と絆を深めるネットワーキング機会の提供、③NPO活動との連携、④メディアにおけるジェンダーバイアスの除去、⑤職場における男性の家庭内役割を視野に入れた働き方、⑥学校教育の充実、ですが、教育については男性ばかりでなく男児の意識を改革するという意味で、重要だと思います。

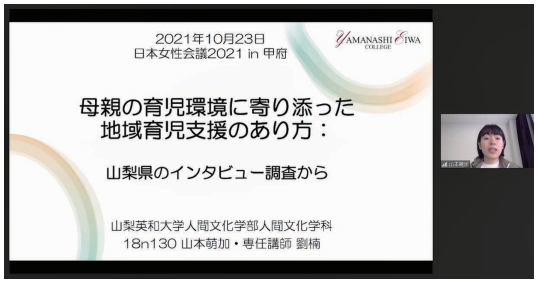


男女平等達成のために、政府・企業・地域・教育などに求められる役割については、「PGS」を提案させていただきます。Pはジェンダー平等プランナー、Gはジェネラティビティプロバイダー、Sはソーシャルエンジニアのことです。「ジェンダー平等プランナー」は、絆を深めるノット（Knot）ワーキングの機会や、学習・自己啓発の機会を提供し、ママ・パパ友づくりで同志感を育みます。この他、育休を取る時に相談に乗るジェンダー平等コンシェルジュや、ジェンダー平等に関して問題があった場合、対応するジェンダー平等オンブッドがあってもいいと思います。「ジェネラティビティプロバイダー」は、次世代を育てるという意味で、男児への学校教育が重要。さらにイクボス、プレパパ研修も必要です。「ソーシャルエンジニア」は、研究成果の還元ということで、我々が行った研究結果を自治体や企業に提供し、取り組みを一緒に作っていく、研究機関と産官を連携させるようなソーシャルエンジニアが必要です。

男女共同参画社会は、英語に訳すと「Gender Equality」で、男女平等を当然の前提としたうえで、さらに、男女が各人の個性に基づいて能力を十分に発揮できる機会を保障することが重要な基本理念となっています。しかし、「男女が各人の個性に基づいて」は良いのですが、「男は男らしく女は女らしく」も個性だということが入ってしまうと、本当の意味での男女平等ではないと思ってしまいます。今後は育メンも育ウーマンもいない、父親と母親が共同で育児・家事ができることが特別扱いされない社会の実現が急務です。そして、先ほど伊藤先生がおっしゃっていたことの繰り返しになりますが、これまでのバイナリー（男女二元論）としてのジェンダーの考え方から、ダイバーシティを含んだジェンダーの概念へと変わることが必要なのではないかと思います。ご清聴ありがとうございました。

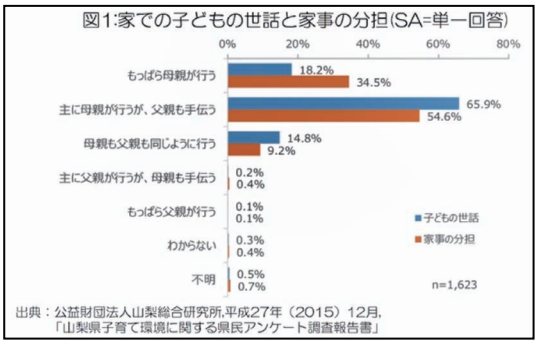
▼黒田：ここで学生の発表をお願いします。

▼山梨英和大学・劉楠ゼミ学生：テーマは「母親の育児環境に寄り添った地域育児支援のあり方～山梨県のインタビュー調査から」です。



まず、日本の子育て環境についてです。笹川さんの論文によると、都市郊外に住む子どもと夫婦からなる核家族が増え、家族単位は小規模なものとなっていった結果、若い夫婦が見知らぬ土地で、頼る人もなく子育てをせざるを得ない状況におかれることも多くなりました。その影響として、母親への子育ての負担は大きくなり、母親の孤立感を深めることとなっていきました。

次に、山梨県の子育て支援の現状についてです。山梨県の総合計画を見てみると、主に7つが挙げられていましたが、今回は5つ目の「子育て世帯への支援強化～子育て相談総合窓口による相談業務の実施」をテーマに、山梨県と甲府市の取り組みを紹介します。まず、山梨県では「子育て相談総合窓口（かるがも）」を設置していて、月曜日から金曜日は午前9時から午後4時半まで（土日祝は午後3時半まで）、保育士や保健師などが子育てに関する悩みに対応しています。甲府市では「子ども相談センター（おひさま）」を設置し、平日に保育士や保健師が子育てに関する悩みに対応しています。



続いて、母親の家事・育児の現状についてです。公益財団法人山梨総合研究所「山梨県子育て環境に関する県民アンケート調査報告書」によると、明らかになったこととして、男性も家事・育児を行っていましたが、実際は、母親がメインで家事・育児を行っていたことが明らかになりました。

以上のことから、調査の目的を3つ挙げます。

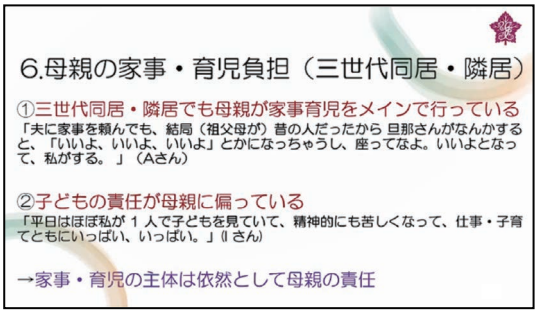
1.母親の育児状況を明らかとする（三世代同居・隣居に注目）。

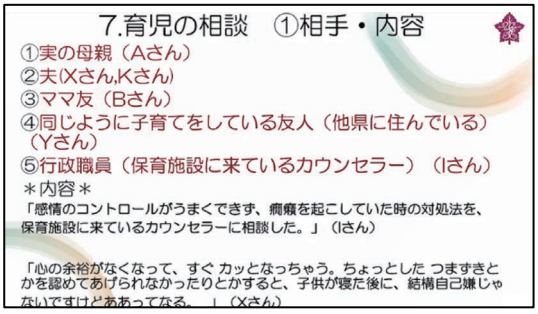
2.育児に関し、母親の相談相手、内容、頻度を明らかにする。

3.行政の育児相談体制の現状課題を明らかにする。

以上、3点をインタビュー結果から明らかにしたいと思います。インタビュー者は6人で、家族形態は、Aさんは本人の両親と同居中、Bさんは夫の両親と隣居、Iさんは夫の両親と隣居、Kさんは唯一の夫婦のペアとなります。

インタビュー調査から明らかになったこととして、1.の母親の育児状況については、三世代同居・隣居でも、母親が家事・育児をメインに行っている。Aさんは「夫に家事を頼んでも結局、祖父母が昔の人だから、『いいよ、座ってなよ』と夫に言い、私がする」。子どもの責任が母親に偏っている。Iさんは「平日はほぼ私が1人で子どもを見ていて、精神的にも苦しくなり、仕事・子育てともに、いっぱいいっぱい」。この結果から、家事・育児の主体は、依然として母親の責任という規範が根強いことが明らかとなりました。





2.の育児の相談について、最初に「相手・内容」に注目すると、「相手」は①実家の母親②夫③ママ友④同じように子育てをしている（他県の）友人⑤行政職員。「内容」に関して、Iさんは「子どもが、感情のコントロールがうまくできず、子どもが癇癪を起していた時の対処法を保育施設に来ているカウンセラーに相談した」。Xさんは「心の余裕がなく、すぐかっとなってしまう。ちょっとしたつまずきを認めてあげられなかったりすると、子どもが寝た後に自己嫌悪になる」。

つぎに、相談の頻度について説明します。物理的支援は、子どもが保育園で熱を出した時に代わりに祖父母などに迎えに行ってもらうなどの支援

を指します。また、情緒的支援では、母親が相談相手に対し共感を求めている傾向が見られました。これらから明らかになったことは、身近な人、実のお母さんやママ友に相談をしている人が多くいるということでした。行政職員に相談しにくい理由を、ママ友が相談相手のBさんは「行政職員に相談するのはハードルが高い」と話していました。



行政のハードルを下げ、専門性や良さを引き出した育児の相談体制構築にはどのような方法があるかを考察しました。案として、子育て支援の専門職が直接、母親の地域に出向き、専門職側から母親に声をかけることです。コロナ禍での具体案としては、SNSの活用や、マルシェなどをオンラインで開催するなどです。専門職側から母親に声をかけることのメリットとして、母親は、行政職員に声をかけやすくなり、行政職員は、母親が育児相談をしやすい体制を取ることができ、多くの母親とつながることができる。一方、デメリットとしては、人材の確保、予算の割り当て、専門性の確保をどうするか、です。

最後に、本研究の限界と課題について説明します。本研究は、山梨県に在住する、末子が未就学児の子どもを持つ母親30～40代までの6人を対象としたインタビュー調査だったため、人数が限られていました。課題として、山梨県で大規模なアンケート調査を実施する必要があると感じました。

▼黒田：ディスカッションに入りたいと思います。伊藤先生、コメントをお願いします。

▼伊藤：私は下の子が32歳なので、1992年に育児休業ができる前でなかなか大変でした。私は「働く主夫」と自称していまして、家事・育児しながら、仕事もしています。家事はルーティンで回るところはありますが、子育ては見えない仕事がたくさんあるので大変でした。特に心理的な負担がいろいろありました。この辺のところは多くの男性がまだピンときていないかもしれません。当時、私は子どもを男性抱っこベルトに入れてうろうろしていたのですが、すごく変な目で見られました。今は男性が乳母車を引いたり、抱っこベルトをしていても不思議ではありませんので、30年で変わり始めていると思います。石井先生がおっしゃったように、男性が育児をすることで、子ども・お母さん・お父さん・仕事の4つ全てにプラスになり、四方一両得になります。今までは四方一両損だったので、それは私たちがきちんと認識したほうがいいと思います。学生さんの発表では、女性たちが育児に悩んでいる姿がクリアに描き出されたと思います。一方で、午前中は、山梨では、けっこう男性が家事・育児をしているというデータがありましたね。このデータについて、学生同士で話をすり合わせてみてください。

▼黒田：ここで、全体のディスカッションをしてみたいと思います。ご質問はありますか。

▼学生：石井先生にお聞きしますが、男性の育児休暇は5日未満が一番多いですが、育児休暇を終えてから継続的に育児に参加するためには、どんなことが必要ですか。

▼石井：男性の場合、5日未満の「なんちゃって育休」でできることは限られていますし、短いと感じています。もっと積極的に育休を取っていただきたいと思うのですが、それ以降も育児を続けるためには、職場の理解が重要で、職場の環境が変わっていくべきです。本人が一生懸命やりたいと思っていても、周りの理解がないとできないので、職場の理解を促す方法が必要です。また、お父さん自身も、子どもと長く接することで子どもになついてもらえるという嬉しさを持続していってもらいたいです。これも、個人でやるのは難しいので、パパ友を作ったり、ネット上のパパ友コミュニティーに加わって、相談できる人ができればいいですね。ちなみに、立ち合い出産したお父さんたちは、育児に関わりやすいと言われていますので、出産の段階から子どもに関わってほしいです。



▼学生：子育てを積極的にしたい女性もいると思いますが、それに男性が積極的に加わることはとても良いことだと思いますが、どう思われますか。

▼石井：2010年の改正育児休業法では、専業主婦の夫でも取得できるようになりました。専業主婦のお母さんたちに対して行った調査では、「夫に家事育児に参加してほしいか」と聞くと、共働き世帯のお母さんたちと同じような割合で「参加してほしい」と答え、自分が育児に費やせる時間が多くても、夫と一緒に育児をしたいと考えている人が多くいました。子どもにとっても多様性を学ぶためには、父親と母親がいるほうがいいので、パートナーと一緒の育児は重要だと考えています。

▼学生：石井先生の「父親の育児容認派は増えているが、父親の育児が文句なしに受け入れられている状況にない」という研究結果について、具体的な事例がありましたら教えてください。

▼石井：「妻の働きかけ」が非常に重要で、夫がおいしくない食事を作ってくれたり、皿を洗ってくれたけど泡が残ってやり直

しになるなど、そういうことがあっても完全に夫を否定するのは良くないので、ある程度目をつぶって受け入れる努力が必要です。1980年代後半から1990年代前半は、父親が育児すると、夫の両親が「全部お嫁さんに任せたほうが良い」という人が多かったですが、今はそのような考えは少なくなってきていて、父親の育児に対して容認する人が増えてきています。妻の「ちょっとくらい目をつむりましょう」という容認も重要だと思います。

▼黒田：容認を促進する働きかけというのはあるのでしょうか。

▼石井：女性のスタンダードが好んで高いとは思っていません。女らしさの一環として、「家事・育児をちゃんとする」というのがまだまだ残っていて、手を抜きたいけれど女だからやらなければならないというジェンダー社会規範がまだまだあって、そこらへんから教育や家庭内でなおしていかないと、なかなか変わらないと思います。

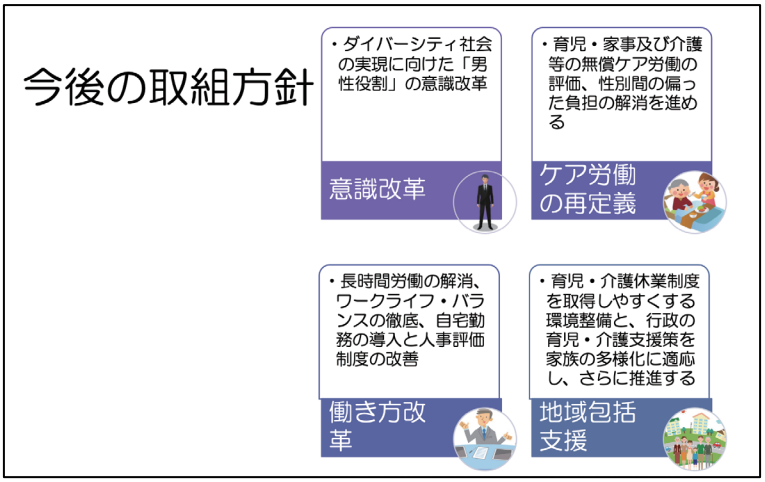
▼学生：男性が取れる育休の他に、育児参加を促す取り組みには、どんなものがあればいいですか。

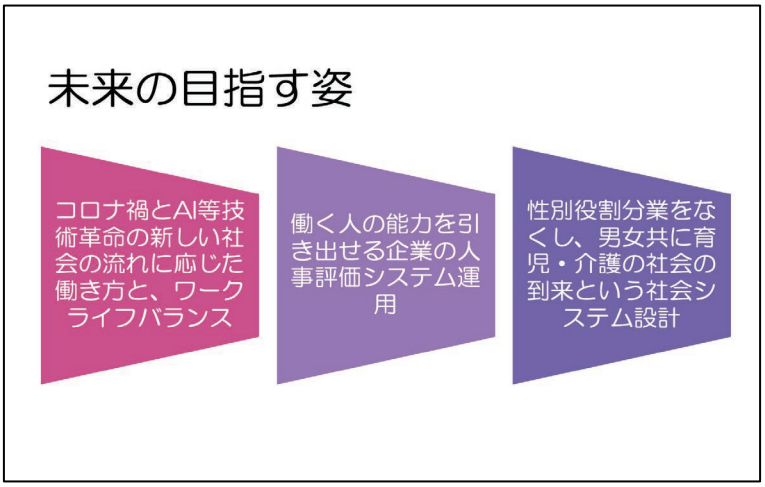
▼石井：育休は大きな位置を示していますが、育休に関連して女性の活躍促進や、伊藤先生のお話にあったワークライフバランスに関連するものなど、全部ひっくるめてやっていかないとだめですね。周りの男女平等に関連するものを全て連携して何かを作ることが重要だと思います。福井県では、育休の父親を増やすために育休コンシェルジュをおき、促していますが、育休についての情報を常に提供する支援制度なども必要です。

▼伊藤：抱っこベルトしていた時にタクシーに乗ったら「奥さんは病気ですか」と言われたので「仕事に行ってます」と言いました。男性が家事をすると妻に拒否されるのは、男性が慣れていないからなので、女性たちが教えてあげればいいのかなと思います。制度面では、育児休業制度は日本の制度は少し固くて、職場に行ったらいけないとなっています。男性が一番怖いのは、職場から切れてしまうことなので、職場に顔を出したり、オンラインでつながるなど、フレキシビリティーを高めてほしいと思います。女性もですが、育児休業中に職場とつながるしくみがあると良いと思います。私は男女ともに20日間の有給休暇の育児休暇を提案しています。現行の育児休暇は雇用保険から出ているので、有給休暇ではありません。育児・介護休業法については、新しくフレキシブルなスタイルがあると男性も取りやすくなると思っています。

▼石井：これからの若い人たちに期待しています。

▼黒田：有意義な分科会とすることができました。伊藤先生、石井先生、ありがとうございました。





ワークショップ

女性が起業するワケ

〜やりたいことをカタチに。その一歩を今〜

コーディネーター
加藤 香
NPO法人bond place理事

ファシリテーター
小笠原 祐司
山梨学院大学学習・教育開発センター 特任講師

テーブルファシリテーター
山梨学院大学学生





【第1部】



▼加藤：全体のコーディネーターを務めさせていただきます加藤香と申します。

1971年生まれで、今49歳です。甲府市出身ですが、今は南アルプス市に住んでいます。若いころから商工会の事務局を経て、今は若者や子育て中の母親を対象に起業支援などをさせていただいています。NPO法人の理事を務めています。

女性会議とか、女の人がたくさん集まっているとドキドキしてしまいます。女の人たちの集まりとか怖くて、幼稚園などでもお母さん同士が集まっていると、なかなかそこのグループに入れないようなタイプでした。ですが、ちょうど東日本大震災をきっかけに、女性がNPOを立ち上げたり、起業したり、身近に困っている人がいて見て見ぬふりができなくてやり始めたという人たちに出会うことができました。損得勘定とかを抜きにして、とても傷ついている人に対して一生懸命、事業やボランティアで活動している姿をいっぱい見てきました。ボランティアは悪いことではないのですが、「無償で」とか「当たり前に」とか役割を押し付けられるという姿もすごく見てきて、悔しいなという思いもたくさんしてきました。女性の起業支援に携わらせていただく中で、女性は起業の相談というより人生相談なのだなと今は感じております。皆さん一人ひとりの人生の中の登場人物の一人として、いつもありたいなと思って今は事業をやっています。普段は「かおりさん」と下の名前で呼ばれています。フェイスブックにもこの写真でアカウントを作っていますので、この講座の後でもフェイスブックでつながっていただけたら嬉しいです。

今日の分科会の目的は、「働く」と「暮らし」をどちらも犠牲にしないで、ライフもワークもミックスして、自分らしくあることを大切にした起業等の理解をしていただくことです。今日の流れで「Can-Pass（キャン-パス）」と書いてありますが、甲府市では３年前から女性の活躍というところで、起業やNPO活動、ボランティア活動を始める女性たちを応援するという事業をやってきました。その事業の名前がCan-Passとなります。ここの理解、説明をするのがまず始め。そして実際に２年間のセミナーに参加してくださった方にインタビューをしていきます。最後に、私たちがCan-Passという事業の中で大切にしてきたことをプチ体験ということで、赤と黄色の小さなレゴ®ブロックを送らせていただきました。それを使って皆さんにも、「自分自身も

気が付いてなかった」ということを再発見するワークを体験していただきたいと思います。普段、子どもや介護、地域のことなどに追われがちな女性の皆さんに、改めて今日は「自分らしさって何だろう」って体験していただくワークを入れております。これから、皆さんに、お名前・どこから参加しているか・今日の期待について、自己紹介していただきたいと思います。全員だと大変なので3人1組のグループに分けていきたいと思います。

～グループワーク開始（1グループ抜粋）～

▼参加者：去年、Can-Passに参加していました。今は甲府市の自宅からつながっています。目の前で子どもが遊んでいるので騒がしくなるかもしれませんが、今日は皆さまとZOOMでより深く関わり、楽しめたらいいなと思います。

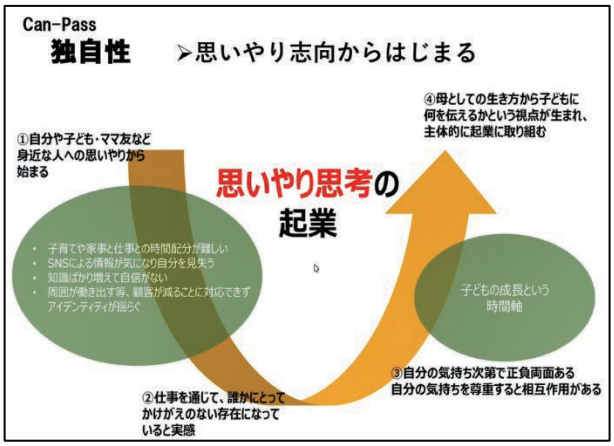
▼参加者：男子学生で、一人暮らしの部屋から参加しています。今日は、女性が集まるところに男子として参加します。いい経験になればと思っていて、会話を楽しみたいです。

▼参加者：甲府市から参加しています。いろんな人の経験や価値観を聞くのが好きで、今日は皆さんのやりたいことや考えを聞かせていただきたいです。

▼参加者：愛知県から参加しています。ずっと男女共同参画を進めていたので、日本女性会議には毎年、参加しています。今日は皆さんと会話できることを楽しみに参加させていただきます。

～グループワーク終了～

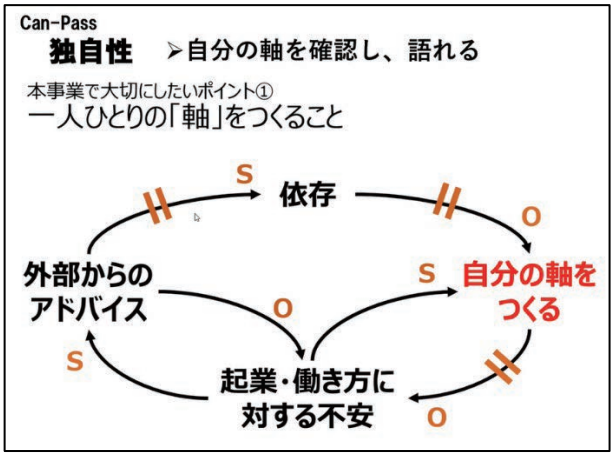
▼加藤：これから甲府市の事業Can-Passについて説明をしていきます。甲府市で3年間やってきたCan-Passは、商工課ではなく、人権男女参画課の事業という点が特徴です。いくつかポイントだけ紹介させていただきます。



まず1つ目は、「思いやり志向から始まる」ということです。思いやり志向とは、女性が活動を始めたり、事業を始めたりする理由は、身近で自分と同じような境遇にある人の苦しさに対する思いやりから始まるのが特徴です。

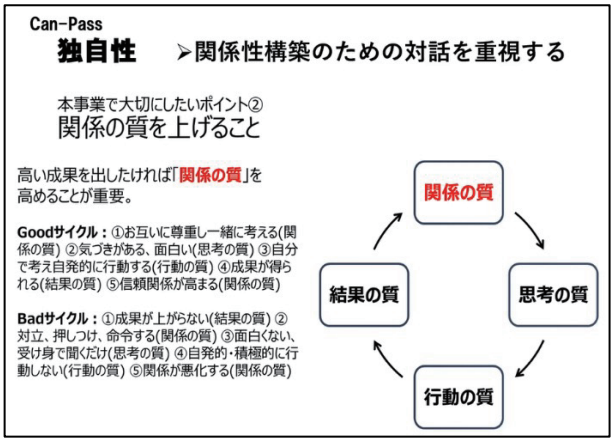
例えば、コンビニでお弁当を買って一人で食べる高齢者の方を見て寂しくなったのでお弁当屋さんを始めた方のように。ただ、事業を始めたらすぐに右肩上がりに事業が進んでいくわけではなく、スタートの時点で一度下ります。子育てと仕事の時間配分にとても戸惑うからです。起業の中で、そこが女性の特徴で、子どもが熱を出してしまった時、仕事をドタキャンしないとならない場面が出てくると、自分は社会人として無理なのかなとなってしまいます。しかし、熱を出している子どもを残して出かけられるかというと、そういうことではない。道徳心をやられてしまう。したがって、男性起業家とは異なる視点や課題、時間軸に影響されることに理解が入っていない起業支援が、いわゆる手順、事業計画書を書いたり、資金を調達したりといった手順をなぞるだけになってしまうと、参加する女性側もそれを支援したい支援機関側も、なかなかうまくいかないところがあります。

ただ、女性は下りっぱなしではなく、子どもの成長や自分の商品、サービスが誰かにとってかけがえのないものだと実感する中で、だんだん自分の気持ちが整理されていきます。母としての生き方から子どもに何を伝えていったらいいか、自分が働くことをとおして、子どもに何を伝えていったらいいのかを言葉にできるようになって、主体的に起業に取り組んでいくというところがあります。商工課ではなく人権男女参画課が行う女性の起業等支援というところです。



次に、自分の軸を確認し、語るということが大切だと私たちは学びました。事業がうまく続いている人の中に、その人らしさがあると思います。他の誰かのまねとか、資格を取ったからとかではなく、何をやっているかではなく、「なぜそれをやっているのか」を語れる状態が大切で、うまくいっている人にはそういうところがあるなと思います。初めに、起業や働き方、活動に不安が起きた時に、まだ自分の軸ができていない状態で専門家の対処療法的なアドバイスを受けてしまうと、副作用としてそこに依存が起きていました。困ったら何かに頼るという依存が起きてくるうちに、結局、辞めてし

まう。自分で決められないという副作用が起きていました。なので、私たちの起業セミナーの中では、まず一番初めに、「なぜ私はそれをやるのか」という自分に向き合うという作業をずっと愚直に繰り返してきました。最初から、とにかく自分に向き合って、他者に語る(喋らされる)、ということをやっています。



次の特徴は、関係性構築のための対話を重視することです。女性が何かを起こしたいけど相談する相手がいないということが、アンケートの中にたくさん出てきました。なかなか起業の相談はしにくいので、関係性を構築していくということに力を入れています。そのため、事業名は誰かの「できる」を応援する「Can(キャン)」、それを「Pass(パス)」するということで「Can-Pass」という名前にしました。価値観が同じ人たちとチームになり、お互いにパスし合って一緒にやっていくことを大切にしています。これも甲府市の事業の特徴になっています。そして、支援機関を巻き込んだ体制を作っていきました。参加者と市役所をはじめとした支援機関などで、セミナーの中では女性と同じグループに入っていただきます。支援機関がセミナーに会いに来ることは、なかなかないと思いますが、女性と同じテーブルで同じワークを体験していただきます。女性が事業計画書を書くのではなく、女性は自分のやりたいことをお話しして、それを聞き取った支援機関の方が整理して、事業計画書を作成します。女性が話したことを専門家さんの視点で見ると、どういうビジネスのしくみになるのかを壁打ちしています。この活動をとおし、支援機関さんも女性の価値観に触れ、ファンになっていくのが目に見えます。相談機関はたくさん甲府にもありますが、顔も知らない人のところに会いに行くのは難しいなと思っていて、セミナー自体に金融機関さんや行政の方たち、男女参画センターといった支援機関の方たちがやって来て交流するといった形を作ってきました。

成果といえば、先ほど説明してきました独自性の中にあった自分の軸を作るとか関係性の質を高くするといったことに対する、このCan-Passの伝えていきたかったこと、続けていきたかったことが、参加者へのアンケートの中でも反映されているなと思っています。

ただ、3年間の事業をやっていますが、どうしても行政の事業は単年度になりますので、来年絶対あるかと言われれば分からないし、担当者も異動になってしまうかもしれないという課題もあるかと思います。セミナーは5・6回、2～3カ月になるので、セミナーがない時、モチベーションが下がってしまいます。皆で盛り上がっていた時は良かったけど、終わった途端に普段の日常に追われて続かなかったということもあるので、Can -Passノートというものを作りました。「チラシみたいなものを作っても捨てられちゃうのでは」ということで、絶対捨てられないように、母子手帳をイメージして書き込み式になっています。始めのほうに自分のことを整理して、途中で自分の事業・商品・サービスを必要とするお客さんのことを書いて、お金のことを書いて、未来のことを書くというようなノートです。セミナーが無い時でも、改めて自分はなぜ活動をやろうと思ったのか事業をやろうと思ったのか、立ち戻れるためのCan-Passノートです。ぜひ皆さんも自分のことを書き込んだり、今日は支援機関の方もいらっしゃるので、相談に来られた方がいらっしゃいましたら見ていただきたいと思います。実際に甲府市には、起業や活動を支援するという機関はたくさんありますが、まだまだ縦割り感があります。たらい回され感をなくして、担当者が異動になっても、同じように事業、プログラムができるような、ハブになるような拠点をこれから作っていくために、どうしたらいいか、改めて皆がやりたいことを、ちゃんと口にすることが大切だと思います。口にしないとチャンスが広がらず、環境は変わりません。自分らしさとか自分がやりたいことを口にして、それを一緒にやりたいという仲間が広がっていくということを、これからもこの事業でやっていきたいと思います。



私のほうから、このCan-Passという事業の説明をさせていただきましたが、言葉だけでない実状を、これから2年間Can-Passの事業に参加してくださったCan-Pass生の佐藤かおりさんにインタビューをしていきたいと思います。簡単に説明すると、佐藤かおりさんは南アルプス市で大きな古民家を使って、Can-Passで出会ったお料理を作る人やエステをする人たちや看護師さんとか、介護保険以外のサービスをしたいという方たちと一緒に、今年の4月に事業を始めました。「パブリックハウス　モモ」という、最近話題な、「皆のお家」みたいな場所を作っています。畑で農作業できるし、お弁当もあるし、駄

菓子屋さんもあるし、縁側で日向ぼっこもできるし、健康相談もできるし、といった場を作っている方です。

ここからは、小笠原さんと私で、佐藤かおりさんに、いろいろ質問をしながら進めます。甲府市で開催しているCan-Passという事業に参加する前と後で、どのように変わったかということを質問していきたいと思います。

まず1つ目に佐藤さん。ターゲットにするお客さんが変わったじゃないですか「デイサービスをやりたい」って1年目に参加したのですが、今はお母さんや子ども向けの食の提供をやっている状況を説明してください。



▼佐藤：佐藤かおりと申します。私がCan-Passに参加した時は、介護の仕事をしていました。理不尽な現場を多く見てきたもので「もっと人に寄り添った介護ができないか」とデイサービスを自分で作ろうと思ったんです。その時は自分がこれまでやってきたことが、デイサービスしか知らなかったので、「私のやる事業は、間違いなくデイサービスです」と言い切って入りました。

▼加藤：デイサービスでしか働いてこなかったから、デイサービスでしか働けないと思っていたのね？

▼佐藤：そうです。介護という場所を通じて、不登校の子どもがいるお母さんに働いてもらったり、不登校の子どもが来ればいいとか、介護保険の使えない人は、働き手となりながら利用してもらったりすればいいと考えていました。母子支援という言葉も知らなかったので。

▼加藤：なんで変わったの？

▼佐藤：とにかくCan-Passで、「何でそれを自分がやるのか」「自分の価値は何なのか」をひたすら聞かれたからですね。私は、起業支援は起業の仕方を教えてもらえると思ったら、Can-Passはただひたすら自分探しというか。

▼小笠原：佐藤さんからしたら、今おっしゃったみたいに起業の仕方を聞きに来ているのに、「なぜ」って聞かれた時、正直どんな感情でした？

▼佐藤：「どういうこと？」って思いました。戸惑いもあって、「キャッシュフロー」とか横文字が多くて「は？」みたいな。私、ポストイット（付箋）も知らなかったんですよ。38〜39歳でCan-Passに行ったけど、自分の生きてきた人生で、全く関わりのない言葉がたくさん出てきて。スマホで検索しても何用語で調べたらいいかも分からない。ただただ横文字の辞書が欲しいと本当に思っていました。

▼加藤：だって、お母さんを応援したいと言うのに、「何をやるんですか？」と聞いたら『デイサービス』と言うので。

▼佐藤：そうです。「子どももお母さんも高齢者も障がい者も、分けるのではなく全部をひっくるめたデイサービスがいいんです」と一生懸命「なぜ」に対抗していました。自分の持っている言葉だけで。

▼加藤：「なぜ」の嵐を受けているうちに、自分の命を懸けてやること、使命はここだなと見つけたってことですね。

▼佐藤：そうですね。「どうせ私なんかできない」と思っていたから、自分のやったことのある経験でできることを考えたらデイサービスという、ただそれだけでした。

▼加藤：パートナーも変わったよね。最初やろうとしていた人たちと今の人たちは全然違うじゃないですか。

▼佐藤：最初は私がこういうのをやりたいんですとなった時に、それはいいと思うよ、手伝うよ、協力するよ、と言う人が集まってくれてなんとなくチームはできました。思いだけで事業ができると最初は思っていたんです。でも、事業計画に何を書いたらいいかも分からない時に、私がトップで皆が協力するかたちだったので、自分が何もかもやらなければいけない。分からないこと、できないことを「協力してくれる」といっても、切り開いていけないところがしんどかった。

▼加藤：一緒にやりたいって人はいたんだけど、「じゃあ、お給料いくら貰えるんですか？」とか、気がついたら「あなたが代表なんだからしっかりして」みたいになっていて、振り回されてぶれていたよね。「お金、どっからもって来てくれるんですか？」みたいな。かおちゃん、母子家庭で生活もいっぱいいっぱいで、勤められないから起業しようって言っているのに「いくら給料貰えるんですか？」って感じになっていましたよね。

▼佐藤：キャッシュフローがっていった時にも、デイサービスって建物だし、中の物品も何でもいいわけではなかったりして、それをお金に計算してもらったら初期投資で1,250万円位かかりますってなった時に「わー」となって。でも、何とかなるのかなって銀行に借りに行ってみました。死ぬほど怖かったけれど、誰かがやるしかないから、とりあえず行くか、みたいな。

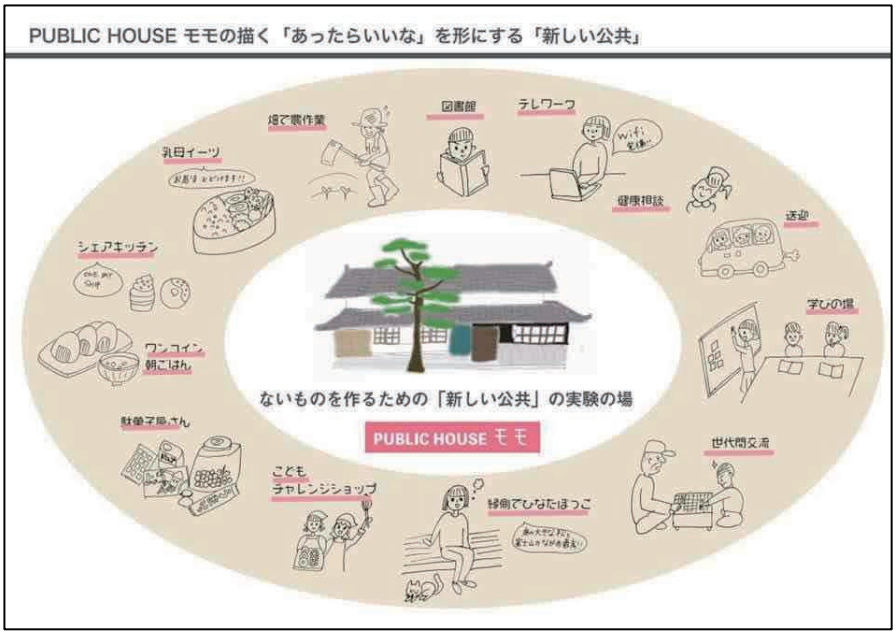


▼小笠原：今の話を聞いていて、起業の仕方とか起業しようということだけを考えたら、そこで行こうと思わなかったと思うんですよ。さっきおっしゃったみたいに、「命さいてでもやりたいな」と思ったから、行こうかなって気持ちになったのかなと思って。順番が逆だったら行ってなかったなと思いました。

▼加藤：今年4月に事業がスタートできたわけじゃないですか。今どんな感じですか。

▼佐藤：Can-Pass1年目はデイサービスだったけれど、自分自身が母子家庭だった

り、うつ病を経験していたりしんどいことも多かったので、頑張っているお母さんたちを支援したいと思いました。子どもの悩みは、子育て支援課だったり、学校だったり、スクールカウンセラーだったり、いっぱいある。でも、「お母さんはお母さんで頑張ってね」と言われ、私の話は誰も聞いてくれなかったから、私はお母さんたちの話を聞く人になりたいなということに辿りつきました。２年目は、「ご飯」という手段を使ってお母さんを応援するってなって、全部私が決めて何かをやるというよりは、Can-Passで出逢った人たちと「私はこれだったらできるよ」って感じで、一緒に作っていく感じに変わっていきました。そこで価値観の共有というか、これだけは負けられないよね、譲れないよね、ということを、すり合わせるというやり方になりました。



▼加藤：皆でやる。フラット。かおちゃんトップダウンの会社を作るんじゃなくて、皆でフラットに、負担も喜びも分かち合うということが分かって、かおちゃん自身が「できないから助けて」と言えるようになったのは大きいかなと思います。

▼佐藤：「できない」って言ったら「それも知らないくせに起業しようとしてるの？」と責められるんじゃないかって怖さがあったけど、２年目からは言っても馬鹿にされない「そうなんだ」と言ってくれる人が近くにいてくれるようになったので「知らない」って言える信頼関係で気が楽になって。でも、知らないからいいってことではないということにも気づき始めたので、自分でも努力しています。

▼加藤：最後の質問で、私はかおちゃんが２年間Can-Passに参加する中で、応援してくれる人が増えたと思うんですよね。人見知り、人嫌い、でも起業すると一人では何もできないということにぶち当たってくる。だからこそ、早い段階で関係性を作っていくということを、起業支援の中に入れているというのが特徴で、その辺どう思います？応援してくれる人増えたなとか。

▼佐藤：そうですね。「パブリックハウス　モモ」が今年３月31日にプレオープンで、初めましての人ばかりでしたが、１カ月くらいでフェイスブックのお友だちが80人位増えたんです。人見知りと言ってたら、何もできないなという覚悟があって。市役所や行政の人とのつながりも今年はできて、「頑張って」と言ってくれる。友だちではない人たちが話をしてくれるようになったと思います。

▼加藤：市役所、かおちゃん嫌いだったじゃん。水道止められるし、保険証取り上げるし。でも、今、市役所の人たちが毎日お弁当を買ってくれたり、セミナーが終わった後も相談する関係になったって。

▼佐藤：そうです。Can-Passが終わってからも、モモに人権男女参画課の方が来てくださったり、お弁当頼んでくれたり。終わってからも「お世話になりました」で終わりじゃない関係性がありがたいなと思っています。

▼小笠原：今までの話を聞くと、Can-Passに参加する前は、行政の方々を「行政の人」って見てたのが、終わった後は、一個人の人として見るようになったのかなって思ったんですけど、その感覚あります？

▼佐藤：人権男女参画課の人たちは個人的に名前で呼んでいます。職員の個人の名前を市役所で覚えるって初めてだったから、親近感があるのかなと思います。

▼小笠原：「役割」の影響がめちゃくちゃでかいなと思っています。僕、大学の先生もやっていますけど、大学の先生となった瞬間に一個人としてじゃなくて役割として人を見がちになっちゃう。きっと佐藤さんの中で、参加していく中で役割じゃなくて一個人として見るようになったり、見られた経験っていうのが、良い循環になったんだなと思いました。

▼佐藤：Can-Passが終わってからも、フラッと立ち寄って「今こんなことで悩んでるんですよ」とか、今の事業をもう少し大きくしたいという時に「どうしましょう」ってまた相談できる場所が甲府市にもできたらいいなって思います。

▼加藤：甲府市のCan-Passに参加した皆がね、なぜか南アルプス市に起業してるっていうね。

▼佐藤：甲府市でも頑張って場所は探したんですけど、なかなか広さと駐車場とって考えると難しくて。

▼加藤：かおちゃんが支えてもらったり応援してもらったみたいに、今度はかおちゃんが誰かの壁打ちができるような、そんな場所にモモがなっていくことに期待をしています。佐藤かおりもフェイスブックにいますので、まだつながってない方は探し

てもらえると嬉しいです。

小笠原さん、この辺で第3部。皆さんもずっと聞きっぱなしなので、かおちゃんも体験したCan-Passの中のプチ体験を入れていきたいと思います。



▼小笠原：はい。bond placeというNPO法人の代表をしております小笠原と申します。Can-Passに関してbond placeが少し関わらせてもらったこともありまして、今回おおまかな説明などをさせていただいていましたが、この後、レゴ®ブロックを使ったワークを実際に皆さんに体験してもらいたいと思います。

レゴ®を使う背景を説明しますと、レゴ®シリアスプレイ®という手法がありまして、レゴ®を使って、手で考えて出てきた作品に意味を与えて思考を整理するという手法です。頭で考えてきたものを表現するのではなく、手をいじりながら自分の考えを整理したりするというやり方です。例えば、何かする際、いきなり面と向かって、例えば行政の方と1対1で話したりすると緊張感が高くなったりとか、何を話していいか分からなくなっちゃうこともけっこうあるんじゃないかと思います。だから物を媒介として話すことによって、コミュニケーションのハードルを下げていったりします。あと、皆さんご経験あるかもしれませんが、グループで一人の人がずっと喋ってしまって、他の人の話が聞きたかったのにできない、やりきれないなって経験あるんじゃないかなって思います。なるべく皆さん同じようにフラットに参加して、「同じように話ができるんだ、この場所は」って感覚を作っていきたい時に、最初にレゴ®を使ったりすることをよくします。基本的には、すごいシンプルです。僕が皆さんに問いを出します。その問いの答えをレゴ®で形作っていきます。作った物を、皆で見せて話をするっていうただそれだけです。僕が出す問いが「なにそれ」っていうのがたまにあったりします。その時も悩まずに手を信じてひたすら作ってみてください。お子さんがいる方は、お子さんが手をいじりながら何かを学んでいる様子を見たことがあるかもしれません。僕らの手って、実は僕らが考えている以上に賢かったり、この手をとおして学ぶことってかなりあったりするので、手と頭がめちゃくちゃつながっているとも言われています。なので、自分の考えを表現しづらい時に、手を使ったり、物を使ったりしながら、自分自身を説明しやすくできるんだよって感覚を作るうえで、よくやったりしています。通常だと、もっと大量のレゴ®を使ったりするのですが、今回はお試し的な形で、ぜひ皆さんとできたらなと思っています。最初は、右手に黄色のレゴ®1ピース、左手に赤色のレゴ®1ピースを握ってもらってよろしいでしょうか。そうしましたら、「友情」と聞いて皆さん、どちらの色がしっくりきますか。選んで画面に映してください。黄色の方もいれば赤の方もいらっしゃったり、けっこうバラバラですね。ありがとうございます。黄色にした方、どうしてですか。

▼参加者：友だちっていうのは、楽しいイメージを感じたので、赤色よりも楽しさを感じるような色を選びました。

▼小笠原：なるほど。ありがとうございます。次は赤の方、なぜでしょうか。

▼参加者：赤はなんとなく情熱の色なので、絆が強いかなと思って。



▼小笠原：ありがとうございます。皆さんいろんなイメージがあると思うんですね。それを色だけでも表現しやすかったりしながら、しかもどちらを選んでも、間違えてないと思うんですよ。そういった形でまずは、「今、自分の考えてることって間違えてないよな」とか、「自分はどうしたいんだろう、何が大事なのだろう」っていうのを、いきなり説明しろではなく、物を媒介としながら話をしやすかったり、そんな考えもあるよな、って受け入れやすくすることをよくやったりしています。

もう1ついきます。右手に黄色、左手に赤のレゴ®を取ってください。今度は「起業」です。起業と聞いた時に、どちらの色のほうがしっくりくるかっていうのを、皆さん目を瞑って握っていただきながら、選んでください。ありがとうございます。では、ブレイクアウトに分けますので、なぜそっちの色にしたかを話していただけたらと思います。どっちが良いか悪いかはありませんので、まず純粋になぜそれにしたかを話してもらえたらと思います。

～グループワーク開始（1グループ抜粋）～

▼参加者：私、赤にしました。頑張っているイメージの色と一人じゃなくて色んな人の力を借りてやっていかなきゃいけないってところで選びました。さっき参加者さんが友情の時におっしゃっていたんですけど、絆のイメージの色で赤にしました。

▼参加者：僕も赤です。起業のイメージって、資金とか仲間をいっぱい集めてというところで難しそう、プラス人との関わりが強そうだなと思ったので赤にしてみました。

▼参加者：私は黄色にしました。なんとなくイメージで、赤はやっぱり情熱とか突発的とか攻撃、そんなイメージがあって。黄色はわりと私の中では中和とか長期的ってイメージがあったんです。始めは起業については赤と思っていたんですけど、さっきの佐藤かおりさんの話とかも聞くと、長期的に温厚に色んな人を巻き込んでやるべきなんだなと思ったので黄色にしました。

▼参加者：私は黄色のほうが、色を混ぜやすいなと思って。起業していく時には色んな人の協力がいるなって思ったので黄色

にしました。あとキラキラ輝いているイメージ。起業した時に未来を描いて輝いているといいなと、太陽のようなというイメージで黄色にしました。

▼参加者：輝いているイメージっていいですね。混ぜやすいは初めて聞きました。お上手です。

▼参加者：黄色ってほうで考えても、これからの時代いいかなと思いました。

～グループワーク終了～

▼小笠原：ありがとうございました。もしかしたら「同じ色でも意味合い違ったな」って方もいらっしゃったかもしれません。どれも間違いはないって思っていて、そうやってちょっとでも自分のことを話していいんだとか、聞いてもらえるんだって感覚と、「そういう捉え方もあるんだな」ってところから、自分のことだけじゃなく、他者の理解ができる環境づくりをしてみました。すごくシンプルなワークですけど、もう少し、より多様性だったり、違いがあるんだなってのを体感してもらうために、ここから1分間ですが、手元にあるレゴ®を使い自分が思うようにアヒルちゃんを作ってみてください。

【参加者は、レゴ®ブロックでアヒル作成】

▼小笠原：終了です。お手元の作ったレゴ®を画面に映していただいてもよろしいでしょうか。他の皆さんのレゴ®を見ていただくと分かると思いますが、同じ物ってほぼ無いと思います。似たような物はあるかもしれませんけど、全く同じっていうのはたぶん無いんじゃないかな。面白いのが、皆さんに同じ形、同じ色、同じ数の物をお送りしています。それなのに、全然違う形ができるっていうのがポイントです。よく多様性が大事とか、違いがあるんだよねって言葉で言っても、なんとなく分かるけれどってなると思うのですが、同じ物を渡しても全員、形が違う物が出てくると、一人ひとりが違うんだなとか、違いがあって面白いんだなってところの感覚になるのではないでしょうか。アヒルちゃんを作ってもらったんですが、実はこれアヒルちゃんじゃないんです。アヒルちゃんじゃなくて実は皆さん自身を表していると言われています。これを使って皆さん自身のことを説明していただきたいんです。これはどんなことでもいい。普段のお仕事のことでもいいし、普段の生活のことかもしれない。もしかしたら、自分の内面のことを表しているかもしれない。さっきお話ししたように手を信じていれば大丈夫です。手と頭の細胞ってめちゃくちゃつながっているって言われているので、作ったけど、言葉を話し始めたら言葉が後からついてくるって感覚があるかなと思います。そういったものをとおしながら、自分ってどういう人なんだろうっていうのを矢印を向けて話していくってことをとおして、自分の内面・自分の軸を話すきっかけを作っていきたいと思っています。この分科会に参加している僕のゼミ生、これを使って自分自身を表してもらっていいですか。自分の性格のことでも、自分の仕事のことでも、自分のやってることでも構わないので。ポイントは自分の指でレゴ®を指しながら、ここなんだよねって説明してください。

▼参加者：顔を斜めにここだけくっつけてみたところが、他者と違う感じで自分を表現していきたいという気持ちが表れているかもしれません。羽根のところもずれているんです。羽根っぽさを出す感じで。自分をつなげるとどうなるかなと思ったんですけど、名前が翔って、羊に羽で翔ぶっていう字にもなるから、自分に近いのかなとか。将来はいろんな夢があって、それに向かって今いろんな勉強をしたりとか、学校とか、こういう場でもグループワークとかいろんな人と話し合う機会が増えているので、飛ぶ段階というか羽根を広げてるっていう感じで、自分っぽさが出てるんじゃないかなと思いました。

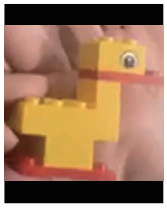


▼小笠原：なるほど。ありがとうございます。翔君、最初はそんなこと思ってなかったけど、レゴ®を見ながら話し始めると、後からついてくる感覚分かりました？

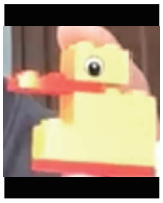
▼参加者：なんとなく、出てくるかは不安ではあったけど、話しながら自分の中の考えとか出していくと、けっこういける感じはしました。

▼小笠原：という形で、レゴ®をとおしながら、話をしてもらえたらと思います。思ったことの答えは、レゴ®が教えてくれますので、思ったことを話してみてください。

～グループワーク開始（1グループ抜粋）～



▼参加者：さっきの翔さんの説明が若者っぽくて素敵だなと思いました。私、すごくオーソドックスかなと思うんですけど、皆さんと比べ、ここが違うのかなと思ったのは、首を長くしたところと立ってるところです。私は今、起業の準備段階で、いろいろ動きながら、情報をすごく求めているんですね。私の起業に必要な情報を広く、どなたからでもいいから欲しいという気持ちが、この首の長いところに表れたと思いました。また、足がドッシリしているところが、早く基盤を作りたいって気持ちですね。



▼参加者：私はたぶん普通かな。「お座りアヒル」って勝手に名付けたんですけど。本当は翔さんみたいに個性的なやつを作ってやる、誰にも真似できないオリジナルを作ってやるって組み立てたら、わりとオーソドックスだったっていう。変人になりたい常識人みたいな。それをすごい自分で思うんですよ。変と思われたいけど、結局、枠の中でしかできない人。時間がギリギリになってからやるのも自分を表してるなと思いました。



▼参加者：最近、一番下の息子が就職し、主人と2人の生活になって何か始めたいなと思っています。尻尾が長いんですけど、上に行きたい気持ちがあって、最後、付け足しました。一番下に赤色があるんですけれど、これは情熱がある人とかいろんな人が協力してくれたらいいなっていう思いがあって付けたのかな。口を赤くしたのも、口でいっぱい喋って、いろんな人とコミュニケーション取っていったら、いろんなことが夢になるかなと思って。口が大事よって強調して赤くなりました。

～グループワーク終了～

▼小笠原：レゴ®社はミーティングの時、必ずレゴ®を用意しているみたいで、手をいじりながらのほうが考えが整理されるということもあるそうなんです。なんか考えて、煮詰まったなという時にいじる物として使っていただいてもいいかなと思いました。自分の軸や自分のことを話すって、いきなりだと難しいんですけど、「自分のことを話していいんだな、聞いていいんだな」ってところをこういったレゴ®をとおしながら、自分のことについて考えるという機会を作ってみました。ご体験いただき、ありがとうございました。最後にチェックアウトを行って終了となります。

▼鮫島：皆さま、長い時間ありがとうございました。今日は数ある分科会の中から、この第５分科会のワークショップにご参加いただきありがとうございます。皆さんのお手元にCan-Passノートが届いていたと思います。女性活躍・起業ってキーワードで分科会を選ばれた時に、このノートを開かれて「え？起業の話あんまり書いてない」ってびっくりされた方もいたかと思います。Can-Passという事業においては、まさに自分を知ること、自分の軸を見つめること、いろんな人とお話しをすることの中から、いろんなアイディアの種が発見されていく、ということを２年間で学んできました。今日の機会に本当に感謝いたします。今日はありがとうございました。またお会いしましょう。

【第２部】



▼加藤香：第５分科会のコーディネーターをさせていただきます、加藤香と申します。

今日の第５分科会の目的になります。甲府市では３年前から、女性の起業、ボランティア活動などを応援する「Can-Pass（キャン-パス）」という事業名で起業支援を行っています。ワークとライフのバランスをとるのではなく、ワークもライフもミックスでということで、どっちも犠牲にしない、どっちも諦めないという自分らしくあることを大切にした起業をやっていくことが目的です。１部はCan-Passの説明をさせていただき、２部は実際にCan-Passに参加いただいた女性にインタビューをしていきます。３部はレゴ®ブロックを使ってCan-Passの中でやってきた自分らしさを発見するためのプチ体験をします。皆さんにも、今日の分科会で期待することを含め、自己紹介をしていただこうと思います。

～グループワーク開始（１グループ抜粋）～

▼参加者①：学生なので一人暮らしの部屋から参加しています。いろんなお話や考え方を聞ければいいと思います。

▼参加者②：甲府市の自宅から参加している主婦です。私は今まさに起業のために準備をしている段階なので、起業に興味がある皆さんの考えをお聞きしたいです。世代も地域も違う方の考えを聞けることを楽しみにしています。

▼参加者③：宮城県から参加しています。私は男女共同に関する仕事をしていまして、女性の起業支援を今度していきたいと思っている中で、甲府市のCan-Passの話を耳にし、興味があったので参加してみました。

▼参加者①：参加者③さんがやっていることは、NPOを作られるんですか。

▼参加者③：ではなくて、私、実は公務員なんです。男女共同を施策として進めていく中で、今現在、子育てなどで仕事を離れた人の再就職支援をしています。ただ、プチ起業だったり、家で雇用によらない働き方をする人って女性に意外にいるんじゃないかな。例えば、塾を経営するのもピアノの先生するのも一つの起業ですよね。そういった人たちを支援できるような取り組みはニーズがあるんじゃないかと思い、トライしてみようと思っています。正直、そっちの世界とかよく分からないので、覗いてみたいというか生の声とか聞けたらいいなと思いました。参加者②さんは？

▼参加者②：私は今、うなずきながら聞いてしまったんですけど、私も独身時代バリバリ働いて、結婚しても働いて、子どもを産んでも働きたかったんですけど、住んでいる練馬区の待機児童問題がすごくて、保育園に子どもを入れられなかったんで

す。結果的に復職ができずに退職しました。職安に行った時にレジ打ちしかなくて、過去、自分がバリバリやっていたのに、それしかやることが無いのかなと思った時に、じゃあ自分でやろう。みたいな流れでここに至るという感じです。

▼参加者①：私のきっかけは、甲府駅にこの会のポスターがあって。学校の先生の小笠原先生にスタッフとして参加してみないかと誘われ、参加してみました。今学んでいるのもビジネスとか経営なので、そこにつながるかなと思っています。将来、私も務めるよりは起業したいという気持ちもあります。

▼参加者③：起業っていっても、いろんな幅があると思うんですけど、窓口になっているのは立派な企業。小さな企業でも気軽に相談できるような、そこでやっていただけるような方とタッグを組んでプチでも立派な起業だし、ハードルが高いことをしないのが女性だったりするのかなと思った時に、手助けができたらいいなというのが思っていることです。

～グループワーク終了～

▼加藤：まず1部になります。甲府市がこの3年間取り組んできた女性の起業、ボランティア活動、NPO活動の支援事業をどんなふうにやってきたのか、独自性というところを説明していきます。まず、Can-Passという事業は、思いやり志向から始まるということをお伝えしたいです。思いやり志向って何なのかってところですけど、自分と同じような境遇にある身近の人への困りごとに対して、何かしたい、見て見ぬふりができなくて何かを始めたいという人たちが女性の起業の中には多いということです。起業自体は難しいことではなくて、いつの間にかやっていたとか。幼稚園のお母さんたちのサークル活動の中でやっていたら、いつの間にかそれを仕事にしていたとか、そんなことが多いんだなということが特徴になります。ただ、起業したからといって事業が急に右肩上がりになっていくかといえば、全然そういうことではなくて、まずちょっと下るんですね。やっぱり女性に多い特徴としては、スタートの時にすごく課題があるということです。まず、時間配分ですよね。子育て、介護、家事と仕事の時間の配分が難しいというところがあります。大きなプロジェクトや、企業さんと仕事をすることになったけど、子どもさんが急に熱が出た時、社会人としては行かないと「なんだ」「仕事なめてんのか」と言われがちです。しかし、熱が出てうなされてる子どもを置いていくと、母としての道徳心みたいなものも、すごくやられちゃいます。起業してすぐにたくさんの仕事をやる人もいるんですけど、あんまり幸せそうじゃなかったなって思っています。そこの時間配分がとても大事だけど、相談する相手があまりいないですね。結局、「私は母なんだから」と辞めてしまう人が多かったです。男性起業家とは異なる応援が、スタートアップのころには必要だということ。この特徴を無視して、もともとある起業支援の手順をなぞるだけでは、女性の起業を応援しているとは言えないということです。起業支援というと、市役所だと商工課とか産業課とかそういったところが担うと思います。しかし甲府市では、人権男女参画課がこの事業を3年間やってきていて、「思いやり志向」がすごく特徴になっています。

2つ目は、自分の軸を確認して語るということを大切にしています。事業がうまくいってる人の特徴で、その人らしさがあるんですね。誰かの真似をするとか、何か資格を取るとか、そういうことではなくて。カフェを経営している人だったら、なぜ私がカフェをやっているのか。カフェをとおして自分はどう幸せになりたいのか。誰を幸せにしたいのか。WHY.MEです。なぜそれをやっているのかということに、スタートの時にしっかりと向き合って、自分だけで考えるんじゃなくて、誰かに壁打ちのようになっていただいて、ずっとそこに向き合っていくということです。起業はどうしても不安は多いです。どうしたらいいか分からないということも多いんですけど、そこの時点で専門家さんのアドバイスをあまり入れてしまうと、全部が悪いわけじゃないんですけれど、対処療法的なアドバイスなので、そこに出会ってしまうと副作用として自分で決められなくなってくる。困ったことがあると誰かに相談する、誰かの意見に左右される、ということを繰り返しているうちに、結局、自分で決められない状態になっていくんですね。なので、起業って自分で決め続けること。始めることも終わることも、自分で決めるということなので、早い段階のスタートアップでは自分の軸をしっかりと作り、そして、それを語るということを大切にしています。

また、関係性を構築するための対話を重視してきました。なので、一方的にこちらから起業のスキルとかそういったことをお伝えすることはないです。対話の中で関係性を作っています。起業をすると、やり始めは自分一人のほうが早いし、決められるし、進んでいくんですけど、やり始めたら一人では何もできないことにぶつかっていきます。営業とか事務とか。なので、関係性を構築する。Can-Passという事業のロゴがCanとPassなんですね。「Can（キャン）」はできるのCan。「Pass（パス）」は人にパスするのPassです。誰かがやりたいという気持ちと、「それ私ができるから、持っているから、お手伝いするよ」っていうパスですね。誰かがやりたいと言ったら自分の持っているものをパスする、お互いに交換するということが大事です。大きなプロジェクトを一人で担うと自信がなくて躊躇してしまうんだけど、皆で補いながら、でも同じ価値観を共有している人たち、哲学を共有している人たちと一緒にやるっていうことで、継続的な大きなプロジェクトも受けられるということです。これをロゴにも込めて誰かが誰かを応援するという形にしています。

独自性の中には、支援機関を巻き込むというところがあります。甲府市の事業の中では、支援機関さんが女性のセミナー

に会いに来る。会いに来て、一緒に入るということをやっています。甲府市役所の方をはじめ、支援機関の方と一緒にワークをやります。女性が「自分のやりたいことがあるんだよ。喋れるんだよ。でも、そのしくみができない」って言うんですね。だったら女性に事業計画書とか書かせる、書き方を教える、じゃなくて、女性がお話ししているのを専門家さんが聞きとって、整理して、事業計画に書いて「あなたのビジネスこういうことですか？」とお返しします。そういうことをしているうちに、支援機関さんも、女性のビジネス市場がどこにあって、こういうことを大切にしているということを理解できるようになってきて、相互作用があるなと思います。誰の顔も知らない銀行には行けないですからね。こうやって自分たちのセミナーのほうに支援機関さんのほうから来てくれるっていうのは大切だなと思っています。





最後になりますが、セミナーですね。市の事業だと、何回とか何カ月間だけとか、セミナーをやって仲間と会っているうちはモチベーションが高かったけど、一人になってしまうと、なかなか日常のことに追われてしまって、続かない。モチベーションが下がるという方もいらっしゃいます。なので、今年度、よくあるパンフレットのように捨てられちゃうものじゃなくて、女性の鞄にも入りやすい大きさで、と作ったのがCan-Passノートというもので、書き込み式にしてあるんです。母子手帳をイメージしていただくといいかなと思うんですけど、自分自身がどういう人間で、過去にこんなことを経験していて、これからどんなことをやりたいと思っているのか、みたいなことを書き込んでいく式の起業支援パンフレットです。全国探しても無かったので、ぜひ皆さんも書き込んでいただいて、起業したいけど分からない人がいたら渡してほしいなと思います。甲府市の中にも、すでに支援機関さんはたくさんあります。銀行さんだったり、参画センターもあったり、NPOコールセンターもあったりするんですけど、まだまだ縦割りなんですよね。女性の課題は比較的スタートにありますが、そこに対応する機関が無い。自分の軸を作るとか、仲間を作るとかがあんまりないので、これから「やりたい」ってことをしっかり口にして、始めたその人たちのスタートのころを手厚く支援できるようなハブになる拠点ができたらいいなと思っています。事業の紹介のほうは以上になります。

この後、実際にセミナーCan-Passの1期生も2期生もどちらも参加した珍しい方がいらっしゃるので、今日はインタビューをしていきたいと思います。ここからは小笠原さんにも入っていただき、2部に入ります。では、このCan-Pass事業に参加した佐藤かおりさん。

▼佐藤：はい、よろしくお願いします。

▼加藤：佐藤かおりさんは今、南アルプス市というところで大きな古民家を借りて、蓋もできないようなお弁当を作ったりですね、大きな古民家になるので、ここでお母さんたちが集まってヨガをやったりとかエステをやったりとか。それこそ甲府のこの事業に参加した人たちが、自分一人で建物を取得したりするのは難しいんだけれど、皆でやったらできるじゃない、シェアをしたらって形で一緒に始めた「パブリックハウス　モモ」という事業をやっています。活動の内容はすごく多岐に渡っていて、今、「皆のお家」とかよく言いますけど、それこそ農作業やったり、お弁当屋さんがあったり、健康相談ができたり。こういった場所を作っている佐藤さんです。





佐藤さんに早速インタビューを始めていきたいと思います。特に佐藤さんにお伺いしたいのが、このCan-Passって事業。私たちいろいろ組み立ててきたんですけど、参加する前と参加した後で、どんな変化があったかをお話ししてください。3つ質問があります。Can-Passに参加して、そもそも佐藤さんは「デイサービスをやりたい」って参加して、事業計画を書いて、1年間一生懸命頑張ってきたんだけれども、結局2年目になって、お母さんや子どもたちの支援がしたいってなって、そもそものお客さんが変わっちゃったじゃないですか。だから2年、留年したってところもあるんだけど、その辺どんなふうに変化してったのか教えてもらっていいですか。

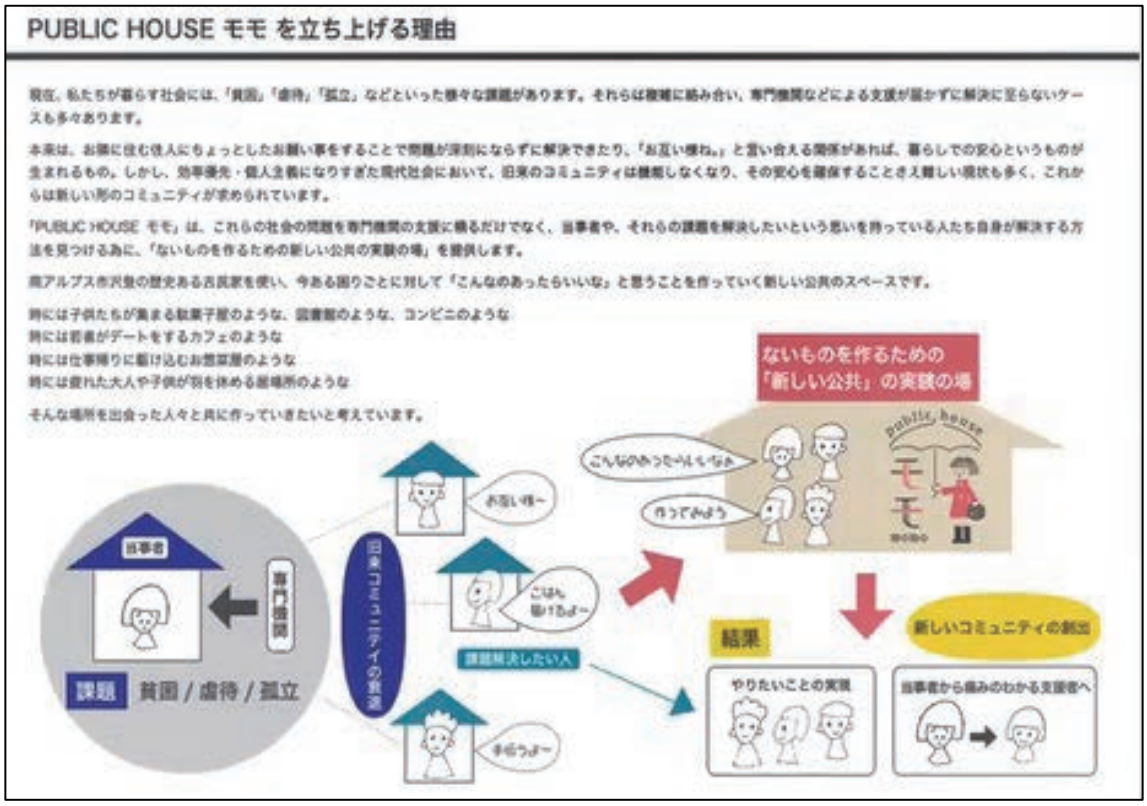
▼佐藤：はい、佐藤かおりと言います。よろしくお願いします。私はずっと高齢者とか障害福祉のほうに携わっていたんですが、なかなか現場が理不尽なことが多くて。もっとその人らしい暮らしや過ごし方ができるように、何とかできないのかなと

思ったので、自分で地域密着型の高齢者のデイサービスをやりたいってなりました。起業支援というので、起業の仕方を教えてくれると思うじゃないですか。なのに「なんでそれやりたいんですか？」とか、「なんでそれがあなただったらできるんですか？」とか「なんで？どうして？」って。自分のできること100個書いてみるとか、分からないことがいっぱいあって、でも「なんで？なんで？」って中から、ある日突然ですね、関わってくれてる人たちに「デイサービスやめます」って言って。なんで？を繰り返していった結果、「違うことがやりたいです」ってことに辿り着きました。



▼小笠原：どのタイミングでデイサービスじゃないなって気づいたんですか。

▼佐藤：周りからは、「本当にそれデイサービスなの？」って、けっこう言われてたんですけど。でも、デイサービスしかやり方を知らず、他のジャンルでは、あんまり働いたこともないし。だからデイサービスで働く人が、しんどさを抱えたお母さんとか、不登校とか引きこもりの子どもを連れてくるとか、まだまだ元気な人は、半分利用者で半分働くってことができるような、共生型のごちゃまぜのところだったんですけど。「それってデイサービスじゃなくても、できるんじゃないの」って言ってもらっても、「私はデイサービスなんです」って半年くらい言い続けた結果、デイサービスじゃなくてもいいのかもしれないなって。いろんな人に話をすればするほど、違うかもってことに、ちょっとずつ気づけていけた感じです。



▼小笠原：よく言うのが、富士山に登るにあたっていろんな登り方があるけど、1個しか知らないと、そこしか富士山の頂上に行けない。佐藤さんの中で富士山の頂上つまり、誰しもがその場で自分らしく暮らしていけるような空間を作っていきたいっていった時に、やり方がデイサービスって道しか知らなかったってことだよね。

▼佐藤：そうです。だから本当にCan -Passに行くようになってから、自分がやりたいことを言葉で話すってことがすごくいっぱいあって。話をすると、それだったらできるよとか、これだったらできるよ、みたいな。話をすることで「この間こういう人に出会ったよ」みたいな、言うと新しい情報も来るって感じになりましたね。話をするってことが、すごく大事。「やりたい」ってことを言葉に出して誰かに伝えるってことが大事なんだなって、すごく思いました。

▼加藤：ありがとうございます。で、お客さんも変わったと。デイサービスの高齢者からお母さんたちだったと。次にパートナーも変わっていったと思うんですね。参加1年目は仲間と一緒に参加してくれて、その人たちとデイサービスやるって言ってたんだけど、今、全然違う人たちと仕事をしている。その辺を教えてもらっていいですか。

▼佐藤：はい。まず1年目は、同じ福祉を目指してる、やりたいって人とも巡り合ったりして、一緒にやろうとか協力するよって人もけっこういて、チームができたけど基本的には、私がやりたいことに手伝うよって感じだったんですね。だから、いろんな責任とか決める時の決定権も私。仲間って一緒にいるんだけど、なんだろう・・ってそういうのがありましたね。

▼加藤：皆でやろう、いいね、って言うんだけど「かおちゃん、お給料いくらくれるの？」とか言い始めたり。ファイナンシャルプランナーさんが仲間に増えて「良かった、お金のことできなかったから」って言ったら、建物取得するのに1,200万円くらい必要だって言って、かおちゃんに借りてこいって言うんですよ。母子世帯で非課税ですけど。でも、行ったじゃないですか。

▼佐藤：行きましたね。なんかもう、やるしかないと。とりあえず1,250万だって言うので。ファイナンシャルプランナーさんが書いてるんだから、根拠がある金額でしょ。それ持って信用保証協会に行って言いました。どんな話だったか覚えてないですけど、とにかく行って「すいませんでした」みたいな。

▼加藤：非課税世帯ですけど。でも今は仲間と、結局大きな古民家借りて事業始まったじゃないですか、半年前に。その辺はどうですか。

▼佐藤：そうですね。私一人で決定して決めていくってやり方ではありません。困ったことがあれば、皆と共有もできるし、そもそも、やりたいことを目指す世界・社会というものが同じ価値観だったり、哲学が同じっていうところを1年くらいすり合わせをずっとしたので。目的とか目標は一緒、ただ皆やり方とかアプローチは違うよねってところが共有できているので、そんなに大きく崩れない。そこのやり方が横並びでいくのか、トップダウンでくるのかっていうのが大きく変わったと思います。

▼小笠原：なんか面白いですね。最初は助けてくれるって言ってくれる人はウエルカム、ウエルカムだったのが、それじゃあうまくいかないんだなってことに気づいたことが大きな変化だったんですね。

▼佐藤：そうですね。だから、価値観というか、どんなものを目指してくのか、子どもの権利とかお母さんの権利とか。「そもそもなんでやりたいんだっけ、私たち」っていう。こんな人生を生きてきた私だからこれが提供できるとか、これができる。そういう根本というか、やり方が分かったっていうか、考え方が分かったっていうか。

▼小笠原：さっき佐藤さんが最初に、この事業で起業の仕方を教えてほしいと来たのに、なんで「なぜ」をこいつら聞いてきたんだよ、ってなったけど、自分が問い直したり、自分がチームを作っていくうえで、やっぱり「なぜ」って大事なんだなって腹落ちしたんですね。

▼佐藤：そうそう。だからそれが2年目でやっと分かるみたいな。でも今ちょっと3年目があったら、また来年あったら行こうかなって思うぐらい、やりたいことが止まらないというか。

▼加藤：「カフェをやりたい」って来て、そうするとどうしてもカフェのやり方を教えちゃうんですよ。建物取得する、許可取るかとか。なんだけど、そもそもカフェでどういうふうに働きたいかとか、来てくれる人にどうなってもらいたいかとか。そこがないと、結局カフェ、店舗工事700万とか法人設立30万とかって話になって。私はかおちゃんが1,250万円借りに行くのを「違うだろーーー」って遠目に見てました。それから3つ目ですね。かおちゃん人見知りなんだよね。すごくね。シングルで子どもを育てながら一生懸命働いてきた中で、なかなかつながりって持てなかったと思うんだけど、Can-Pass行く前と今で全然つながり増えたじゃん。どんなふうな感じですか。

▼佐藤：増えましたね。ずっと福祉の仕事ばっかりやってると、福祉の人と出会う機会って多いけど、そうじゃないジャンルの人たちってなかなか出会わないじゃないですか。それこそ保育園のママ友と子どもの話はするけど、仕事の話って愚痴ぐらいしかしなかったりとか。でもCan-Passに行くと、クッキー作りたいんですとか、お母さんのサポートしたいんですって言っても、やり方が皆違ったりして、いろんな人の人生も聞けたし、Can-Passで一緒だった人もモモには居るし、ずっとは居なくても連絡しようって人もいたりするし、今までの生活では知り得なかった人。モモに来た人とかも、初めましての人ばっかりで、張り切って300枚名刺貰ったんですけど、4月中で100近くいったんじゃないかな。フェイスブック上の友だちは80人位増えて、モモにも「イイネ」って押してくれる人。一番大きかったのが行政や支援機関の人たちからも応援してもらってるってこと。普通にお友だちって人もいるし、それだけじゃない社会的信用のある人たちからも応援してもらえてるっていう嬉しさはありますね。

▼加藤：かおちゃん市役所嫌いだったじゃん。保険証止められる、水道止められるっていう経験もあって、市役所大嫌いだったじゃん。今、毎週のように市役所の人、お弁当注文してくれて届けたりとか、高齢者・おばあちゃんがいる家にご飯頼んでくれたりとか。変わりました？その辺。

▼佐藤：変わりましたね。心のある役人さんもいるよね。少なくとも、人権男女参画課の人たちは役所の人ってスタンスじゃなくて、個人の名前でお名前呼ぶじゃないですか。そこが親近感というか、大きいかなって思いました。気楽に声をかけていい存在というか、「ちょっと来たから寄ってみました」ってフラッと行ける。

▼加藤：その日のお弁当余りそうになると、電話したりするじゃん。

▼佐藤：そうですね。急遽買ってもらえませんか。助けると思って買ってくださいって。

▼加藤：たまに市役所に持ってくお弁当の数、間違ったりしても「今起業の練習をしてるところですよ」みたいなこと言うじゃん。「お釣りなんか計算できませんよ」みたいな。

▼小笠原：起業っていうとイメージがカッコいいとか、すごいバリバリやってるとかじゃなくて、Can-Passとおしながら、ありのままの自分、できない自分とかもいるんだって。隠してなくてもいいんだってことに、いい感じで吹っ切れた感があるのかなって。

▼佐藤：そうかも。なんか、失敗しちゃいけないとか、うまくやらなきゃいけないとか、「できない」って言っちゃいけないってのがすごい強かったんですよ。「やりたいって言ったからには、自分で最後まで責任を持ってやります」って感じだったんですけど。できないことはできないし、苦手なことは苦手。だからといって、全くやらなくてもいいってことではなくて、しくみを知る必要があるとか、原価率の計算はいまいち分かってないけど、知らないわけにはいかないなと思って。ちょっとずつ勉強したりとか、起業する前に全部勉強して分かるようになるっていうよりは、今もまだ、日々勉強中で成長中。必要なことは、その都度、取り入れていくっていう感じですかね。

▼小笠原：それってCan-Passのどの辺り、どういう体験をとおして、失敗しちゃいけないってところから、やりながら学んでいいんだって思ったんですか。

▼佐藤：やっぱり1年目はデイサービスだったんだけど、本当にお母さんに寄り添うことがやりたいって思ったんですよね。でも、それって、私なんかが言っちゃいけないと思ってた。でもそれを「本当は母子支援やりたいんです」って言えた時に、自分には力がないけれど「やりたい」っていうのを言った。でも、「できない」ってことも言えた。言えた時に、この人が「力を出すよ」とか「こういう人とつなぐよ」っていうふうに変わってきたので、自分ができないっていうことを認めるっていうしんどさはあったけど、でも言ってみたら「そうなんだ」くらいな感じでした。だから今周りにいる人も「私、これが苦手なんだよね」って話ができて「そうなんだ」って言い合える人が周りにはいます。すごく多い。

▼小笠原：「なぜ？」ってところに立ち戻る重要性を体感したり語っていったからこそ「やっぱりやりたいんだったら、できないこともあるけど、それは認めよう」とか「なぜこれをやりたいんだって時に、私一人じゃなくてもいいんだ」とか。そういう気づきがあったんですね。

▼佐藤：そうですね。「なんで？」って何百個も聞かれたりしたけど、でもそれを聞いてくれたから、自分自身を見つめ直すというか。自分の過去この経験があったから、今これをやりたいと思ってる。根拠があって今につながるっていうのかな。それが、すごく大事な時間だったんだなって思います。

▼加藤：それを繰り返しているうちに、お金は持ってないけど、貸してくれる人も増えたよね。

▼佐藤：そうですね。モモを立ち上げるってなった時にも、皆でちょっとずつ持ち寄ろうってなって、借りれないわけですよ。母子世帯ですしね、非課税世帯だし。こういうことがやりたいって、寄付をしてもらえないか。出資してもらえないかお願いに行った時に「いいよ」って快く言ってくださったりもして、自分の力と信頼で150万借りることができたりして、頑張ってきて良かったなって思います。自分自身で全部できなくてもなんとかなるって体感は今あります。

▼加藤：ありがとうございます。裏話を皆さんにも聞いてもらいたいので、フェイスブックでぜひつながってください。さて、ここからですね、佐藤かおりが「なぜ。なぜ。」と言い続けられたという、自分らしさを探すためのプチワークを小笠原さんに進めていってもらいたいと思います。



▼小笠原：はい。ここから私が担当させていただきます。NPO法人bond placeの代表をしています小笠原と申します。甲府市のCan-Passって事業ですとか、子ども貧困対策でしたり、いろいろな地域づくり、まちづくりや、社会的な居場所づくりに法人として関わっています。Can-Passの時以外にも、自分のことについて語るってこととかを、大学の先生もやってるので授業とかでも「あなた自身はどうしたいの？」って語ることをやっています。それが周りを巻き込んだり、いろんな人たちとつながっていくきっかけだなって思っていて。Can-Passにおいては、自分の軸を作ろうとか自分について語ろうってことをやってはいるんですが、何もないまま、いきなり自分のことを話せってなっても、なかなかしんどかったりすると思うんですね。何話していいか分からなかったり、話していくうちに「あれ？これ何話してるんだっけ？」ってなっちゃったり。一番最初によくやるのが、今回皆さんにお渡ししているレゴ®ブロックを使ってやることです。今日、皆さんに少し体験していただきながら「こんな形で語るんだな」とか実際に体験してもらえたらいいなと思います。

レゴ®シリアスプレイ®っていうメソッドがあります。これは、レゴ®を使って手で考えて出てきた作品に意味を与えて思考を整理するメソッドです。頭で考えていることをレゴ®で形にしようではなく、1回作った後に、それに意味を与えて思考を整理するってやり方になります。最初から何か物がないまま話すよりも、物を媒介として話すことによって、話のコミュニケーションのハードルを下げていったりとか、媒介として自分のことを整理するきっかけっていうのをとおしながら「この場だと、自分のこと話していいな」とか「ちょっと聞いてもらえるんだな」っていう感覚を講座の中では作ったりしています。自分の軸を探す

上で、自分のことを語ってく時に「この人たちに話していいのかな？」「いいな」っていう感覚が作れないと、なかなか語れないと思います。語っていきながら、初めて他者と会話をしながら、自分にとって大事なものって何なのか、自分にとって、こういうことが必要なんだなってことに気づきながら、自分のことを見つけていくことができると思っています。ここのハードル下げる上でレゴ®を使っていきます。基本的にはシンプルです。僕が皆さんに問いを出します。その問いの答えをレゴ®で表現をしていきます。レゴ®で表現と言った瞬間に皆さん一瞬「え？いいものを作らないといけないのかな」とか緊張感が高くなった方もいらっしゃるかもしれません。ポイントは、悩むより、まず手を信じて作っちゃう。これをぜひ大事にしていってください。人によっては、腕組んで悩んだり、肘付いて「どうしたらいいんだろうな」って悩む場合もあるかもしれませんが、ポイントはひたすら手を動かす。レゴ®をくっつけたり、離したりしながら作品を作っていただきたいなって思っています。お子さんがいらっしゃる方とかは、お子さんが手をいじりながら、物を作ったりしながら何かを学んだり考えてる瞬間を見てる方もいらっしゃるかもしれません。僕らの手の細胞の80％は、頭の細胞とつながっているとも言われていますので、手で考える。手を信じて、作ってみるっていう感覚は誰しもが何かしら感じた経験があるんじゃないかと思うので、今日はぜひ、手を信じていただいて作ってください。とは言え、最初に作るのはなかなか大変なので、少しシンプルなワークからやっていきたいと思います。皆さん、右手に黄色のレゴ®を1ピース取ってください。左手に赤のレゴ®を1ピース取ってみてください。右手に黄色。左手に赤。形はどれでも構いません。今から僕がある問いを出します。その問いの答えにしっくりくるほうのレゴ®を選んでください。「友情」。友情と聞いた時にどっちの色がイメージに合うか。画面に見せてください。けっこうバラバラですね。参加者さん何色ですか。レゴ®何色選ばれましたか。

▼参加者：黄色を選びました。なぜというか、赤だと愛情かなって感じで、黄色かなって思いました。

▼小笠原：なるほど。黄色のほうが友情と。愛情というよりも、何ですかね。どんな感じなんですかね。

▼参加者：向日葵の黄色の、楽しいってイメージ。

▼小笠原：ありがとうございます。おそらく、今、黄色を選んだ人も、同じ表現もいれば、ちょっと違う表現もあるかと思います。今度は赤のほうで。なぜそれにしたか教えてもらってもいいですか。

▼参加者：私の周りの友人たちは、なかなかキャラが濃い、アクの強い友人が多いので、燃えたぎる赤かなって思って赤にしました。

▼小笠原：なるほど。友情って聞いた瞬間に言葉だけを見ると、こんな感じかなってあるかもしれませんが、この色だけでも、その人が感じている表現や捉え方っていうのが少し見えてきたんじゃないかなと思います。さらに今、参加者さんがおっしゃった友情もなんの間違いもないと思うんですよ。ここで自分自身が感じていることを喋っていいんだとか、こういう捉え方もあるんだなっていうような、自分のことを言ってもいいんだ、聞いてくれるんだって感覚を作ったり、自分自身について、ちょっと矢印を向けるっていうのを練習がてらやったりしています。もう1回やりたいと思うので、右手に黄色、左手に赤を取ってみてください。次はですね、「起業」ですね。起業っていう言葉を聞いた時にどっちの色が、皆さんの中でイメージにあっているかっていうのを選んでみてください。画面に映していただいて。起業のイメージは赤もいれば、黄色もいれば。そしたら、ブレイクアウトでさっきのグループに分けていきます。その際に起業のイメージ、私はこうなんだっていうのを語ってみてください。その際にレゴ®を画面のほうに見せながら話をしてもらえたらなと思います。ここでのポイントは、自分のことを話していいんだっていう感覚だったり、こういう捉え方もあるんだなっていうようなものをとおしながら、自分を改めて見つめる機会にしてもらいたいのと、話していいんだ、聞いていいんだって感覚をまずは作ってもらえたらと思います。

～グループワーク開始（１グループ抜粋）～

▼参加者：赤にしました。今、準備をしたり動いてる中で、自分の仕事に対して一人でやってるので、子どもの幼稚園の行事で忙しいとか、自分のプライベートがどうだとかいう時、単純に疲れたっていう時にストップしようと思うと簡単にストップできてしまいます。でもそこに必死で動かし続けて血を通わせていかないと終わるんだっていう感じのイメージ。鼓舞する感じですかね。

▼参加者：私が赤を選んだのは、起業したいって言ってる人は自分がやりたいこととかハッキリしている。そこに情熱の赤を感じて、選んだところです。私からすると、そういう思いを持っているだけでもすごいなって思って、メラメラ見えます。

▼参加者：私は黄色を選んだんですけど、すごく迷って。情熱の赤なのか、ちょっとフランクな黄色なのか。さっき佐藤かおりさんのお話もあったんですが、いろんな人に助けを求めるっていうのが自分の中で印象的だったので、それは一人の情熱っていうよりは、黄色のほうが皆が集まってる感じがしたので黄色を選びました。

▼参加者：私も迷いました。黄色はお金のイメージ。結局、お金が回ってこないと終わるなと感じてるので。

～グループワーク終了～

▼小笠原：同じ色でも表現が違う場合もあったり、起業ってだけでも、いろいろイメージが違うんじゃないかと思います。でも話を聞きながら、他の人のイメージが、「違うよ」って思うことはおそらくないと思うんですね。「そういう感じ方もあるな」とか。こういった感覚から、「話しても大丈夫だな、違いがあってもいいんだな」とか。起業っていうと他者比較をしながら他の人のあれがいいなってこともあると思います。それも大事かもしれませんが、それをとおして、あなたはどうしたいっていうところを考えていく最初のきっかけとしても、「少しずつ自分の考えを喋ってもいいんだ、聞いてもいいんだ」っていうのを、こういった緩いところからやったりしていきます。ただこればっかりだと、さらに自分の内面だったりとか掘り下げるのは難しいところもあるので、さらに掘り下げるうえで、次のワークをやりたいと思います。今度は、レゴ®ブロックを全部使って、アヒルちゃんを作ってみてください。アヒルちゃんも答えは無いです。皆さんが思うアヒルちゃんであれば構いません。1分間でお願いします。

【参加者は、レゴ®ブロックでアヒル作成】

はい、作れましたか。画面に映してください。他の方のも見ていただいて、たぶん似たようなのはあるかもしれませんが、全く同じっていうのは無いんじゃないかと思います。皆さんに同じ形、同じ色、同じ数のレゴ®を事前にお渡ししています。よく、レゴ®を使うとクリエイティブな物を作らないといけないとか、いい物を作らないといけないとか最初に思ったかもしれませんが、同じ色、同じ形、同じ数の物を渡したとしても、こうやって違いが絶対出るんですよ。よく、多様性が大事とか違いがあっていいよねって言葉で言っても、体感が伴わない限り、僕らって納得しないのかなって思ってます。なので、こういった形で一緒に作っていきながら、皆で見ながら、こんな違いがあるんだなって体感しながら、自分にとって大事な物って何なのかなとか、あと、他の人の違いなんかも軽く受け入れていけたらなと思います。アヒルちゃんポイントがありまして、実はアヒルちゃんじゃないんです。アヒルちゃんは、実は「皆さん自身を表している」と言われておりまして、このアヒルちゃんを使って自分を表現していただきたいです。これは自分の性格かもしれないし、自分の普段の趣味とか仕事かもしれないです。いきなり言われても「どうやるねん」て話だと思うんです。なので、これを使って練習がてら、こんな感じで話していいんだよっていうのを参加者さんお願いします。



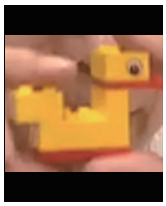
▼参加者：私は足を付けたかったんですけど、パーツが足りなくて、とりあえず水面に浮かんでるアヒルちゃんをイメージしました。私、大学に通ってるんですけど、いろんな人に声をかけるのが得意なんですね。初対面とかでも、あっちの人に声をかけてみたり、こっちの人に行ったり、プカプカあっちこっち行ったりしてる感じを表すことができたんじゃないかなと思います。

▼小笠原：ありがとうございます。作った物を最初から今のことを考えてたのもあるかもしれないけど、話ししながらこんな感じかなって、言葉が後からついてくる感覚ってなんとなく分かります？

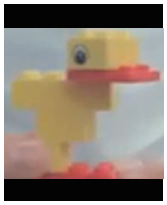
▼参加者：最初に言った言葉に無理やり流れに任せて、ポンポンポンと言葉が出てくる感じですか？

▼小笠原：そうそう。まさにその感じ。ありがとうございます。今みたいな感じで、皆さんも、レゴ®をとおしながら、無理やりでもいいので喋り始めてみてください。言葉が後からついてくる感覚があります。これも、手で皆さん無意識のうちに作っていて、たぶん、「この作り方気持ち悪いな」とか、「こっちのほうがしっくりくるな」って感覚で作っていると思います。これは、皆さん自身の考えとか思いとかってところに紐づいているところもあったりしますので、なにを喋ったらいいかは、全部レゴ®が喋ってくれるし、教えてくれるので、これを使って、「私、こういう性格かな」とか、「これポイントかな」っていうのを、無理やりでいいので喋り始めてください。そしたら、後からついてくる感覚がありますので、それをとおしながら、「自分のこと話していいな」とか、頭で考えていない自分、深層心理的なところとか、こういうところもあるかもしれないなってところを、レゴ®から自分を見つめてみることをとおして、自分のことを語るってことをやっていきたいと思います。

～グループワーク開始（1グループ抜粋）～



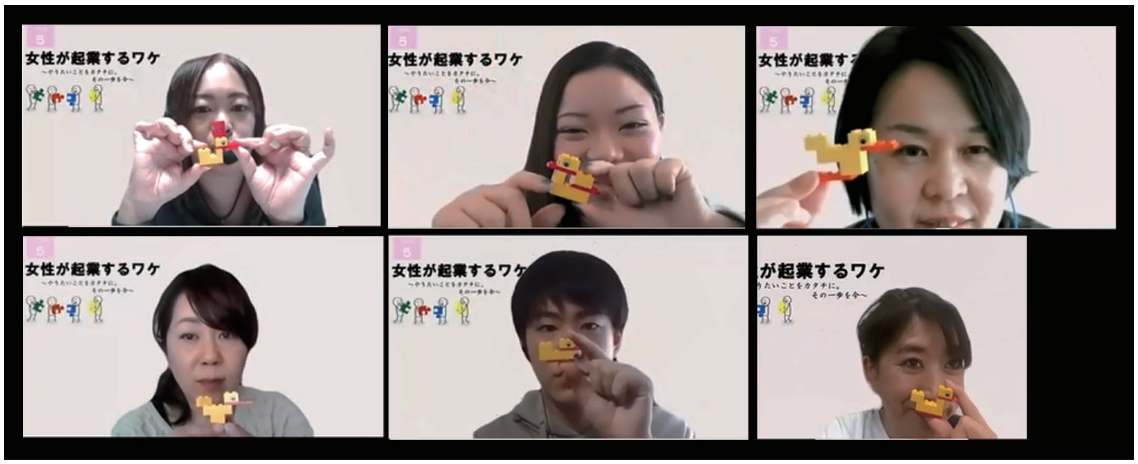
▼参加者：変わったのを作ってみようと思ったんですけど、さっき小笠原さんがおっしゃっていたように、変わったものを作ろうと思っても、何か気持ち悪いなと思って、結局はこれに落ち着いたんですけど。どうしても首を長くしたいんです。私もいろんな人と喋ったりとか、「こうなんだけど誰か知らない？」とかつながっていって、人から得られる情報とか恩恵とか欲しいタイプの人で。「私今こういうことをやってるんだけど何かない？」っていうのを喋りたいし聞きたいっていうのが、首が長いのに出てるのかなって自分的に思いました。あと、迷って、赤いレゴ®をお尻に付けたんですけど、バランスよく安定していたいっていう気持ちが出たんだと思います。



▼参加者：私はアヒルというよりひよこに近くなっちゃって、作ってるうちに首が動かしたくて。私はきょろきょろして、何か落ちてないかなって、話題とか問題とか。常にきょろきょろしている感じが、もしかしたらあるのかなっていうのがあったし、頭を動かないようにした時に物足りなかったんですよね。最初は頭を固定していたけれど、結局は斜めに付けました。

～グループワーク終了～

▼小笠原：ありがとうございました。実際にCan-Pass以外でも僕らは「あなたはどうしたいの？」というあなた軸と、「私」のところから語る、ということを大事にしています。その際に、こういった物を使ったりしながら、「自分のこと話していいな、聞いていいな」っていうことをやったり、「他との違いがあってもいいんだな」ってことを、こういったワークをとおしてやっています。今回はトライアル的な感じで皆さんに体験していただきました。「皆違って皆いい」という言葉がありますが、その背景には何があるのだろうね、というところまでちゃんと踏み込めるかが大事だと思います。



▼鮫島：皆さま、今日は長い時間、第５分科会のワークショップにご参加いただきありがとうございました。ここは甲府市なんですけど、全国からオンラインだからこそ出会えることができたこと、幸せに思います。ワークショップの名前に「女性が起業するワケ」ってあったのに、今日はアヒルのレゴ®をやったけど、起業の話は出てこないし、戸惑われた方もいると思うんですけど、こうやって自分のキャラクターとか自分らしさって何だろうって初めて分かった時に、他の人の自分らしさ私の自分らしさがくっついていって社会ができるし、足りないところを事業だったり活動で起こすことで、それぞれが補い合うというところが、甲府市のCan-Passの素敵なところなんだろうなって思っています。来年は、鳥取市で開催になります。来年の橋渡しとして甲府市でも女性活躍推進のために、この第５分科会をきっかけに、女性の活躍が広がっていけばいいかなと思っています。今日はご一緒できて楽しかったです。ありがとうございました。





分科会 6

女性活躍

10月23日（土） 第1部 10:00〜11:30
第2部 12:30〜14:00

ワールドカフェ

これでいいのだ、私の人生。私がわたしの未来を創る。
〜就職、結婚、生きる意味。〜

コーディネーター

渡辺 郁

㈱アンサーノックス代表取締役

ファシリテーター

木下 紫乃

㈱ヒキダシ代表取締役社長



【第1部】



▼渡辺：皆さま、こんにちは。私はこの分科会のコーディネーターを務める渡辺郁と申します。よろしくお願い致します。

1年半前、「日本女性会議」と、この会議の名前を聞いた時、「なぜ、この令和の時代に女性会議なのだろう」と衝撃を受けたことを覚えています。今日、この会場には男性参加者の方も何名かいらっしゃいますが、皆さんに会議への参加を呼びかけたところ、多くの男性、女性から「会議の名前が怖い」という声をいただきました。この女性会議はネットで検索しても、事務局等は分かりません。事務局が無いからです。開催都市から開催都市に、バトンをつないで、38年間続いてきた会議だそうです。

私たち第6分科会は20〜50代の約10人のメンバーでスタートしました。学生、社会人、年齢、性別、バラバラの混成チームです。日本女性会議とは何か、分科会をコーディネートするとはどういうことか、という疑問を何度も問いかけながら、手探りで進めてきました。私たちが出した結論は「人々が当たり前に幸せでいることを話す会議にしよう」というものでした。この分科会では、就職や結婚、そもそも人が生きる意味など、男女問わず、我々にふりかかるモヤモヤをワールドカフェ風の対話を通じて、皆さんと一緒に考えていこうと思います。我々、運営メンバーは、SNSを通じて展開していた動画の中で、ソジテツカードというツールを使いながら、問いをピックアップ致しました。このカードはとても興味深いカードで、普通は何のためにあるか、物事は男性がリードしたほうがいいのか、愛とは永遠か、など根源的な問いかけが書いてあります。改めて突き付けられたこれらの質問に向き合うことで、自分にとっての「これでいいんだ」に気づくきっかけになればと思い展開してきました。

本日は皆さまとともに、この問いと向き合い、対話する豊かな時間を共有することで、自分の人生を肯定できる「これでいいんだ」の種を植える日にしたいと考えています。その種には、皆さんが水をやり、日を当てて、育ててください。全ての人の種を肯定し「これでいいんだの花」を咲かせることができれば、この分科会は役割を果たせると思います。今日をきっかけに皆さまが、それぞれの種を植え、社会という大地を耕し、多くの花を咲かせることを願い、コーディネーターの挨拶と致します。

第1部では、木下紫乃先生にご講演いただきます。紫乃さんといえば、今や昼スナックの名物ママとしてメディアに引っ張りだこですが、昨年、出版した「45歳からの『やりたくないこと』をやめる勇気」の重版も決まり、世の中の多くの人の悩みを解決し続けています。私にとっての紫乃さんは、ポジティブかつ面白く背中を押してくれる存在。それぞれの人の良いところを引き出し、一歩を踏み出す時にそっと背中を押してくれます。話をしていると、悩んでいることが嘘のように気持ちが晴れ、次の一歩を気持ちよく踏み出すことができます。今日は紫乃さんの話をとおし、自分の人生を肯定するきっかけにしていただければと思います。

▼木下：皆さまこんにちは。木下です。まず、「先生」でも「講師」でもないです。私53歳なのですが、生きてきた中で思っていることをお話ししたいと思いますので、気楽に聞いてください。

～以下、講演内容の要旨～

●はじめに　～木下紫乃ってこんな人間です～



・就職、結婚、離婚、転職…etc、私の人生、いろんなことがあるけれど…
・株式会社ひきだしの設立　～キャリアコーチングや企業研修の取り組み～
・昼にやるスナックだから、通称・昼スナ。「スナックひきだし」の紫乃ママとしての自分
・45歳で大学生に！22歳の同級生に言われて気が付いたこと
・若い世代に伝えたい「年齢やジェンダーに関係なく、人はいつからでも始めることができる」
・お節介？それでも私は、何かをやりたいと思っている人の背中を押したい　～昼スナでお待ちしています～

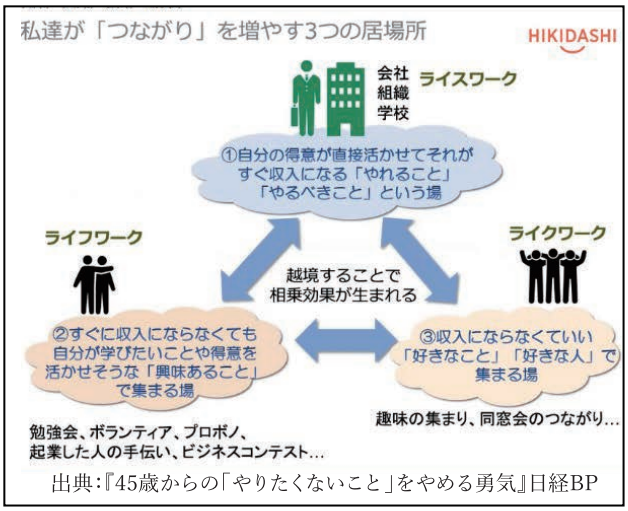
【本日の講演】越境から生まれる『自分ダイバーシティ』のススメ

●「ソーシャルキャピタル（社会関係資本）」の大切さ

・人生100年時代、寿命も働く時間も延びる中、お金や健康も大切であるが、もっとも大切なのは「人と人とのつながり」
・家族の強いつながりも必要だが、これから大事になるのは、「あの人なら頼りになる」「困った時にあの人なら話ができる」といった、もう少し「ゆるいつながり」
・日本人にソーシャルキャピタルが少ない理由

●私たちが「つながり」を増やす3つの居場所

・まずは、自分のいつものゾーンを少し超えて、3つの『居場所』を持とう！
・3つの居場所「ライスワーク」「ライフワーク」「ライクワーク」とは？
・3つの居場所をどんどん越境しよう！
～越境を自分の学びにするコツ～



出典：『45歳からの「やりたくないこと」をやめる勇気』日経BP

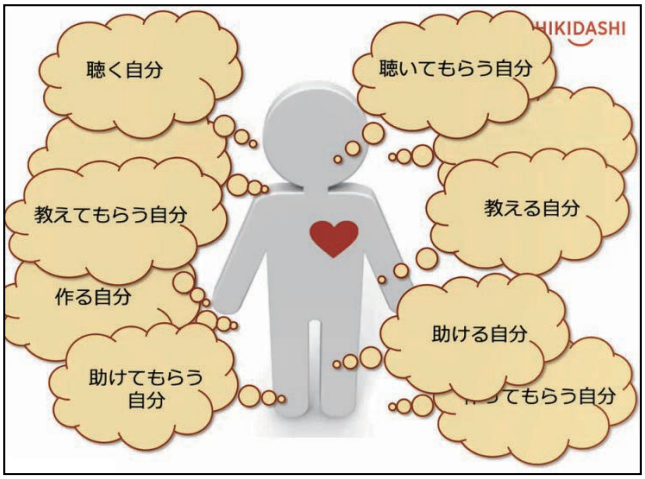
●多様な私の発見「自分ダイバーシティ」

・自分自身にある4つの窓
「解放の窓」「秘密の窓」「未知の窓」「盲点の窓」
・自分が持っている「いろいろな自分の面」に気づくには？
・自分の中に必ずある「自分ダイバーシティ」をどんどん発見していこう！
・自分の価値を発見するのに、時には違ってもいい、違ったらやめる、「次行ってみよう！」の精神



●終わりに

・私のモットー「縁でつながり、恩を送り、運を変えるスパイラルを作る」
・「越境」で人生と仕事に彩りを！
・「居場所」を増やし、自分の多様性と可能性を広げよう！





～以上～



▼村松：ここからは、第６分科会メンバーの村松が進めさせていただきます。今日は皆さんと一緒にワールドカフェを行いたいと思います。ワールドカフェとは、カフェのようなリラックスした雰囲気の中、少人数のテーブルに分かれ、自由に考えを話しながら、発想を豊かにしていく発散型の対話形式です。対話をすることが目的なので、結論を導き出さなくても大丈夫です。各ラウンドの問いには、正解・不正解はありませんので、自由に思ったことを話してください。今回はオンラインですが、お茶などを飲んでいただきながら、リラックスして進めていければと思います。今日は３回のラウンドを行い、全部で３つの問いについて対話を行いたいと思います。1つ目の問いは「あなたにとって、キャリアアップとは何ですか。目標や夢、やりたいことがないとダメですか。」です。
それでは12分間のラウンドを開始したいと思います。

～ワールドカフェ　第１ラウンド開始（１グループ抜粋）～

▼参加者：キャリアって目指すものじゃなくて、歩んできて、振り返って「これがキャリアなんだ」と思います。
▼参加者：「あなたのキャリアって何ですか」と聞かれると答えにくいけど、こういうことをやってきたと伝えることで、人に勇気を与えられたら良いと思います。
▼参加者：目標や夢、やりたいことがないとダメではないけど、あれば自分のエネルギーになると思います。
▼参加者：夢や目標は必要。こういうことがしたいという夢は大事。その積み重ねがキャリアでは。
▼書記：目標や夢の積み重ねがキャリアですか。



▼参加者：やりたいと思ったことを形にしたことですかね、何気にやったことが、それが巷でいうキャリアアップでしょうか。ちなみに、履歴書にキャリアって書くところはあるんでしょうか。
▼参加者：職務経歴書ですかね、単純に起きた事実を書かれているだけで、それで推し量られてもとは思います。夢や目標はそこには書かれない。夢や目標を叶える、その重ねてきた時間がキャリアというのには共感します。
▼参加者：キャリアを目指すとかじゃないもの。ビジネスの界隈では、目標を立てなさい、そこに向かって

具体的な目標を立てなさいがキャリアアップで、それに苦しめられた人もいるのでは。
▼参加者：捉え方の違いですよね。
▼参加者：前半の「越境」の考えを入れると、キャリアアップの捉え方を変えれば、悪い表現でないのではないかと思いました。ビジネスにおいてのキャリアアップという固定観念で見てしまうと堅苦しい言葉だけど、キャリアがイコール目標や夢だと思うと、それを重ねていくことは悪いことでないから、その固定観念事態を取り払うと盛り上がる。一方向だけで見ていないか。型にはめているし、はめられている、そのことすら気づけずにいたが、今日のお話を聞いて、新しい発見、皆さんと話したことで、今日、今まさに気がつけた。
▼参加者：キャリアって、轍とか車輪って意味ですよね。そう思うと、一つじゃない、三輪車だと３本ある。

～ワールドカフェ　第１ラウンド終了～



▼堀松：私、もう一人のファシリテーターの堀松と申します。よろしくお願い致します。第１ラウンドはいかがでしたか。続いて第２ラウンドです。問いは、「夢があろうとなかろうと、動き出す、踏み出すためには何が必要か。」です。今回も12分間です。前回とは違うグループで対話していただきます。

～ワールドカフェ　第2ラウンド開始（１グループ抜粋）～

▼書記：ラウンド１のお話の共有ですが、皆さん、夢や目標は、元々のところからどんどんステップアップしていくものだという部分が印象的でした。夢や目標は今はなくても、徐々に見つけていければいいというお話もありました。それでは、ラウンド２の問いについて自由に対話をしてください。
▼参加者：私は勇気とか準備が必要だと思います。
▼参加者：勇気は必要ですね。だけど動き出す方向が分かってないと、動き出しようがないのかなとも思います。目標や夢は自然に徐々に見つかるものだとして、それでも動き出さなきゃならない時期ってあるんでしょうか、生活するための仕事とかですかね。
▼参加者：好きなこと、やりたいこと、得意なこと、キャリアが積めることは必ずしも一致しないですよね。あと、自分のモードですごくチャレンジしたい時と踏み出せない時期がありますので、夢がない時も、向こうから飛び込んできたり、きっかけがあったことをとりあえずやってみるということも、何かを見つけるきっかけになるのではないでしょうか。
▼参加者：そういうのがバシッとはまることもありますよね。やってみないと分からない。
▼参加者：人によっては「夢って何？」という人もいる。最初は夢だと分かってなくても、動き出した時に「これって好きだ、もっと高めたい」となることはあります。夢はありませんという人、けっこう多いですが、動き出さないと仕方ないですよね、そういう方は。
▼参加者：こだわりを持たない心も必要だと思います。夢があってバシッと準備もできて、何かやろうと段取れる時は良いけれど、必ずしもそうではない。そうじゃない時は、「何もやらないよりは」という感じで、お試しというのも、何かに結びつくきっかけにはなります。
▼参加者：大きい夢がなくても、好きと思ったことをやりながら考えてみる。一歩を踏み出す勇気とは、ものすごいパワーが必要かというとそうでもなくて、一歩のほうが大きいし、意味があるよという勇気かと思います。



▼参加者：皆さんの意見は一緒で、必要なのは、何でもやってみる勇気、チャレンジ精神ということですかね。
▼参加者：準備が必要というのは、お金のことではなくて、気持ち的な目に見えないことも入っているので、時間の使い方を変える、視点を変えるとかも含めた準備です。
▼参加者：自分を解放する力も必要だと思います。特に若い方は「目標を持って頑張らないといけない」という呪縛にしばられないことが大事です。しばられて得られるチャンスが減っちゃうと本末転倒なのかなと。

～ワールドカフェ　第2ラウンド終了～

▼堀松：第3ラウンドは、第1ラウンドと同じグループで対話をしていただきます。3つ目の問いは「周りの人が動き出す、踏み出すために、あなたができることは何ですか。」です。

～ワールドカフェ　第3ラウンド開始（1グループ抜粋）～

▼書記：ラウンド2で皆さんが共通していたのが、とりあえず何でもやってみる、チャレンジ精神が大事ということでした。自分の好きなこと、やりたいこと、キャリアアップに必要なことは必ずしも一致しない、ならやってみるしかない。夢がなくても、踏み出せば分かることがあるのではないか、ということですね。さっきまでの対話を踏まえながら、最後の問いについて話してもらえればと思います。

▼参加者：前の回で「何でもやってみろ」みたいな話をして、そうだなという気がしました。周りの人にも、そういうアドバイスをすることかなと思います。前の回で印象的だったのは、好きでもないことをやっているために、違うチャンスがあるのに、その可能性を狭めてしまうのは良くないということ。だめだと思ったら次にいって、バチッとはまることが目標だったり、夢や生きがい、仕事になるということだったので、そういうことを「なんでもやってみればいいんじゃない」ってアドバイスすることだと思いました。別のグループにいた方、どうですか。

▼参加者：さっきのところで印象に残ったのは、「キャラ拡大」です。つい、自分のキャラって人からどう見られているかを気にして、躊躇してしまうことが、けっこうあります。そうするとやりたいことができないこともあります。一つの自分にこだわらないで、キャラ拡大でやることがいいと思ったので、友達が挑戦しようとしていることには「いいね、新しいあなたの一面が発見できていいじゃん」と共感し、応援して、失敗しても成功しても、新しい面を見れることを一緒に楽しみたいと思いました。

▼参加者：「キャラ拡大」って勇気がいることだから、「いいね、いいね」って言ってもらえると、「こんなんでいいんだ」と思えて、やっていこうという気持ちになります。そして「助けて」も言える人になりたいし、「助けて」と言われた時に助けられる自分になりたいです。けっこう、難しいですが。「キャラ拡大」していくうえで、助けてあげれられることのほうが楽で、助けてって言う、拡大していくほうが大変です、鎧を脱ぎながらやらないと。

▼参加者：順調にキャラが拡大できるかも分からないですよね。自分を見せた時に周りが「なんだよ」ということもあるかもしれない。行ったり来たりの繰り返しでしょうか。前回の第2グループの「何でもやってみる」っていうのは共通してますよね。でも、3つの問いを検討する中で感じたのは、とにかく、恐れず、なんでもやってみる、自分のこともそうだし、行動もそうだし。だから、一歩踏み出そうとしている相手にも同じことを言ってあげるのが必要だと。違うメンバーと話していても、同じようになるのが面白いですね。講師の話に引っ張られているところもあるのかな。

▼参加者：共感も大事ですし、相談されたら、一緒に整理してあげる。やろうと思っていることがうまくいくという結論やポジティブな気持ちに持っていってあげたいです。

▼参加者：もしかしたら、やりたいことを止めてほしい場合もあるかもしれないから、難しいですね。共感や肯定をしながら、「本当に大丈夫？」と聞く優しさもあるのかな。あんばいが難しい。

▼参加者：しっかり聞いて、受け止めて、整理してあげて、「さあ、やってみよう！」っていう感じですね。

▼参加者：「リスクもあるだろうけど」って言いながら、背中を押す感じですよね。

▼参加者：「次、いってみよう！じゃなくて、さあ、いってみよう！」ですかね。相談された時には否定せず、よっぽどのことじゃない限り、背中を押してあげるというか。

▼参加者：チャレンジする時って、自分の中ではすごいことをするんだって考えてるから、そこを理解してほしいですよね。そして、その時に「リスクもあるよ」と言われたら、受け入れられるような人になりたいです。

▼参加者：「リスクもあるけど、やるなら一緒にやるよ」という感じですかね。あまり否定は良くないですよね。



～ワールドカフェ　第3ラウンド終了～

▼堀松：ここで、各テーブルの書記から、皆さまの対話を報告させていただきます。準備の間、ソジテツカードについてご紹介します。我々のフェイスブック、インスタグラムで投稿していた動画はソジテツカードを使って作っていました。ソジテツカードは、人生、性別、性にまつわる自分の「これでいいんだ」を見つけるためのエンパワーリングな哲学対話カードセットです。「これでいいのだ、私の人生」という我々のテーマとつながるところがあると思っています。たくさんの問いを動画にしてフェイスブックに上げさせていただきました。例えば、「世の中の常識と自分が違うと感じた時、どうやって生きていくか」など答えのない哲学的な問いです。



▼書記：1つ目の問いで印象的だったのが、「エネルギーを感じる」で、まさにエネルギーを感じるワールドカフェだったと思います。キャリアアップというと仕事上の役職や能力が上がること、という意見だけでなく、心が動くこと、つながりが増えることという話も出ました。2つ目の問いでは、度胸、勇気、情熱という言葉が出ました。さらに、自分を見つめることが大事で、どんな自分も受け入れる、「こうあるべき」を捨てる、といった意見が出ました。3つ目の問いでは、「資金援助」という面白い意見もありましたが、「どんな結果でも寄り添っていく」「何もしてあげないことも必要」などが出されました。



▼書記：1つ目の問いでは、人生にはアップダウンがあるので、下がることが楽だと感じることもあるという話が出ました。2つ目の問いでは、「健康的な心」「勇気」「自信」「好奇心」といった言葉がたくさん出ました。3つ目の問いは、資金提供や手伝うことよりも、好奇心を持って前向きに話を聞いてあげて、などの意見がありました。



▼書記：1つ目は、夢や目標を積み重ねてきたものが、あとで振り返った時に、結果としてキャリアになっているのでは、という意見が出ました。2つ目は、「キャラ拡大」という言葉が出てきました。自分の中にある思い込みや恥ずかしさを取っ払い、拡大していった時に、踏み出す原動力になるという話でした。3つ目は、紫乃さんの「越境」という言葉が、皆さんの心に響いていたようでした。近くに一歩を踏み出したい人がいたら、とにかく話を聞いて、ひたすら応援し、いちいち感動して盛り上げると、自分のダイバーシティが広がって、周りもどんどんオープンになっていくという話をしました。



▼英語グループ：私たちはキャリアや踏み出し、動き出し、他の人を動かすことについて話し合いました。多くの人が、積極的に動き続けるだけより、立ち止まることも重要だと話していたのが、興味深かったです。時々自分の前に立ちはだかって、立ち止まってスペースを作ることは、身体と精神の健康のため、とても重要だと私は思いました。多くの人が、精神の健康と身体の健康のバランスを取ることが、キャリア発展への行動のベースになると語っていました。他の人を動かすことについては、多くの人が、良いリーダーになるには、謙虚に教え、知識を共有し、自慢せずに他の人をモチベート(鼓舞)する、と言っていました。またグループの中に先生がいて、謙虚に教えると生徒がついてこない、モチベートできないと生徒が勉強しないという議論が、日本の教育システムの議論に発展したのが面白かったです。日本の教育のシステムについて、日本の教育システムはおそらく厳し過ぎるという意見がありました。テストの順位付けによって、ミスすることに注意を払い過ぎるようになり、それが英語を使うことができるのに英語を使わない理由だと。いろいろな議論がとても興味深かったです。

▼村松：立場の違う皆さんで、一つのことを話し合っていくということが、意味のある活動だと思います。午後もよろしくお願い致します。

【第２部】

▼前田：第６分科会午後の部にご参加いただきありがとうございます。ワールドカフェまでの進行は前田が務めます。よろしくお願いします。

▼渡辺：皆さま、こんにちは。私はこの分科会のコーディネーターを務める渡辺郁と申します。よろしくお願い致します。



　第２部は、まず、お話をしていただく受講生たち、ステップアッププログラムのご紹介をします。ステップアッププログラムとは、山梨大学で５年前から行っているリカレントプログラムで、一度、家庭に入った女性が再び社会に出るタイミングで背中を押すようなプログラムです。今日は、受講生たちの心の変化を動画にしてみましたので、そちらをご覧いただきたいと思います。

～以下、動画の要旨～

問：ステップアッププログラム受講のきっかけや、その時のあなたの状況を教えてください。
- ・仕事を辞めて12年。これからどうやって就活をしていいか、モヤモヤを抱えていました。
- ・現状を変えていきたいなーっていうのがきっかけです。
- ・立ち止まって、自分を見つめ直す良いきっかけでした。
- ・山梨に対しての思いが少し変わってきた時だったので、チャンスだと思いました。
- ・毎日子どもの世話と産後の寝不足で疲弊してボロボロの状態でした。
- ・なんかビビッというか、これしかないと思いました。
- ・自分のキャリアや経験を見直したいなと思いました。
- ・14年半のブランクを埋められるのかとても不安だったが、私のために開催されるプログラムだなと思いました。

問：期待していた事はなんですか。
- ・新たな気づきが得られるかなと期待していました。
- ・仲間と巡り合っていい刺激をもらえたらいいな、自分を変えられたらいいなと思いました。
- ・山梨の人と一緒に働いて、山梨のいいとこだったりとか課題を知るすごく良い機会だなと思いました。
- ・どういうふうに仕事をすれば、子どもたちも犠牲にならずに育てることができるのか、いろんな人の話を聞きたいって思いました。
- ・前向きになれることがないかなと思っていたので、背中を押してくれるようなことを期待していました。

問：期待した理由はなんですか。
- ・自分の気持ちを分かってもらえないモヤモヤがあったので、もうちょっと前向きになれたらいいなと思いました。
- ・これから頑張って生きていく原動力を見つけるためにいいんじゃないかなと感じました。
- ・女性が働き出してから家庭との両立という課題。そこを今変えて行かなきゃいけないんじゃないのかなっていうふうに思って、そういうふうに期待を持っていました。

問：どんな気づきがありましたか。
- ・前向きに何かを吸収しようっていう人たちばかりで、とても楽しく良い刺激を受けることができました。
- ・目標を持っている方が集まってきていたので、そこにパワーがすごくあった。
  自分のやりたいこととか自分がどうしたいかを言っていいんだっていうことを、すごく思えました。
- ・皆さんのその前向きな姿勢とか学ぶ意欲とかすごいと思い、なんか学生に戻った気分で大学に通っていること自体もすごく楽しかったです。

問：インターンシップで印象に残っていることはなんですか。
- ・インストラクターが「サービスから感動を生む」ような内容のことをおっしゃっていたんですが、私もそういうことをいずれ目指せるようになりたいなと思いました。
- ・インターンシップをとおして、営業について実際に仕事をしている方から生で教えていただくことができたのは、ありがたかったことです。
- ・企業の方も一緒にやりたいことを見つけましょうと言ってくれ、企業の方と出会えたというのがすごく良かったです。

問：自分の中で変化はありましたか。
- ・モヤモヤがちょっと晴れてきた。ヒントを与えてもらって自分自身の答えを出せました。
- ・自分と対峙する時間がすごく多かった。どんな人に自分がなりたいのかなとか深く考える機会がありました。
- ・母親になったらもう仕事をセーブして家庭を大切にすればいい、自分でもそう思っていたんですけど。
  なんとか両立してやるという強い意志を持つようになりました。
- ・モヤモヤした気持ちだったが、そういう気持ちがあってもいいんだっていう背中を押すような講義が多かったです。

自分の中でこれでいいんだっていう気持ちと自分のやりたいようにやっていくことができそうだなーっていう前向きな気持ちになれました。

問:体験をとおして変わった事はなんですか。

・自分の中の課題が浮かび上がってきた。自分には何が今足りないか、家族と上手くやっていくにはどうやって時間を上手く有効利用できるかっていうのが学べたのが良かったです。
・いろいろな人と知り合ったり、インターンシップ先での刺激を受けたりして、自己肯定感が高まってきた変化はあったと思います。
・違った職種も体験させていただくことによって、自分で精いっぱいすることが一番自分が輝けるんだな、ということを改めて知ることができました。
・自分の今の状況をすごく不服に感じていたんですけども、受講を終えてからは、次の世代のために何かしたいっていう気持ちがすごく大きく湧いてきました。
・かおり先生が仰っていた、「失敗は経験が増えるだけだから」っていう言葉がすごく支えになっているというかいろいろなこと、日々の仕事でもそうですし、チャレンジするようになっています。
・できない、やれないっていう自分を否定しなくなった。キャリアアップだけではなくて、キャリアダウンもあえて自分のプライベートのためには飲み込むことが必要で、自分らしい人生を歩んでいければいいのかなっていうふうに思えました。

問:家族の反応はどうでしたか。

・私がカリカリ勉強している姿を見て、「そういう時は、俺が早く帰れるようにするから」って言ってくれたり、夫婦ともに良い効果をいただいています。
・子どものほうがすごく好意的に受け入れてくれたし、「いいよいいよ」っていう感じで子どもも私と一緒に成長できたなと思いました。
・子どももけっこう変わったと思います。朝出かけちゃう、夕方にならないと帰ってこない(状況下で)、彼らも少し自立の視点を、今までになく感じてくれてます。

問:得たもの、気づいた事はありますか。

・自分の気持ちも前向きになれましたし、何より人脈が広がった。
思った以上にそんなにコミュニケーションで苦労するってこともなくて、今楽しくやっています。
・自分は夢を叶えてきたんだっていう自覚が、さらに深まったんですね。
幸せだったんだなっていうことを再確認できたのがとても良かった点です。
・今ここにいる自分のことが肯定できるようになったというのが今回すごく良かったんじゃないかなと思っています。
今は地域のこととかにもっと関わっていきたいなと思います。
・「あれもやりたいこれもやりたい」っていうのが本音なので、プログラムを受けて、そう思うことが悪いことではないし、そういうこともできるよっていうような背中を押してくれるプログラムだったと思います。
・自分の世界に引き戻していただいたような、スタートに立てたのがとても良かったと思います。

問:以前の自分にメッセージを送るとしたら、何と伝えたいですか。

・勇気を出してチャレンジして良かったね。
・毎日大変で投げ出したくなっちゃうだろうけど、家とは違う別のことを少しの間でもいいからやってみるといいよ。
そしたらきっと今とは違う何かが見えてくるから、少しだけ外に出てみようって伝えたいです。
・心配ないよ、って伝えたいですね。

～以上～

▼前田：続きまして、第６分科会のメンバーであり山梨大学リカレント教育プログラムの卒業生でもある村松美希よりお話しさせていただきます。



▼村松：皆さま、こんにちは。村松美希です。私もステップアッププログラムに参加していました。私にとっていろいろなきっかけになって、自分の状況が大きく変わった楽しい時間でした。仕事も変わり、出会う人も変わりました。でもその後は大変なことが待っていて。このプログラムに参加して分かったのは、どんなことをしていても、どんな状況でも、困難はなくならないということです。一つ課題を乗り越えても、また新しい壁にぶち当たって。何回も不安になったり、泣きそうになりました。「あの時はあんなに楽しかったのにな」と思うこともあったんですけど、やっぱり魔法はないんだということを知りました。何かをしたから、その後、全てうまくいくわけでもありません。新しいところで違うことに悩んだり、苦しんだりして、一つひとつ向き合い、考えていくことが必要だと思いました。諦めかもしれませんが、そういう状況にいても「それでいいんだ」と思え、逆に自分に希望が持てました。それぞれ抱えているものは違いますが、困難を受け入れて歩んでいきたい。やりたいことを「やりたい」と言って、周りの目や自分の目を気にしないで、素直な気持ちでいきたいと思いました。ステップアッププログラムを受けて今は良かったと言えますが、それを受けている時は毎回、不安で泣きそうで、自分がそこに参加していていいのかと思ったことも多かったです。皆さんもいろんな困難にぶつかることがあると思いますが、それに負けないで、闘わなくていいから、受け入れて、前に進めるようにしてください。この分科会がそのきっかけになれば嬉しいと思っています。ありがとうございました。



▼堀松：皆さまこんにちは。ファシリテーターの堀松と申します。ここからの進行を務めさせていただきますので、よろしくお願い致します。これからはワールドカフェにおいて、グループに分かれ、ご自身のお話をしていただければと思います。ワールドカフェとは、カフェのようなリラックスした雰囲気の中、少人数に分かれたテーブルで自由に考えを述べながら、発想を豊かにしていく発散型の対話形式です。本日は全部で３回のラウンドを行い、３つの問いについて対話をしていただきたいと思います。さっそく1つ目の問いは「どんなもの、どんな時に、壁、困難、行き詰まりを感じますか。その時、あなたはどのような行動を取ったのでしょうか。」です。12分間のラウンドを開始したいと思います。いってらっしゃい。

～ワールドカフェ　第１ラウンド開始（１グループ抜粋）～

▼書記：自己紹介をお願いします。

▼参加者：山梨県甲斐市に住んでいます。先ほどの動画に私も出演していて、コーディネーターの渡辺郁さんが運営するステップアッププログラムで新しい気づきを見つけ、生き生きと日々を送っています。よろしくお願い致します。

▼参加者：私は甲府市内に住んでいます。木下紫乃先生のお話を聞きたくて参加しました。午後も新しく楽しい出会いがあるんじゃないかと思い、わくわくしながらやってまいりました。

▼参加者：北杜市に住んでいまして、いろいろな意見の交流を楽しみに参加しました。

▼渡辺：分科会コーディネーターの渡辺郁です。ちょっとお邪魔させていただいていいですか。

▼書記：それでは問いに対し、皆さん、自由に対話してください。

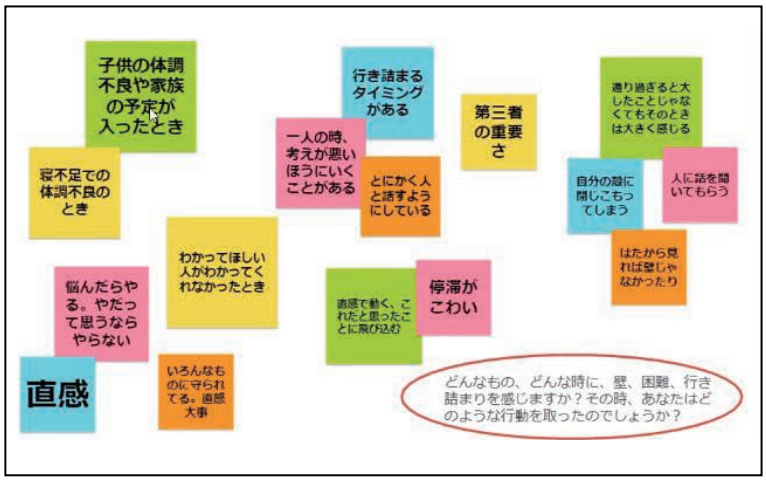
▼参加者：仕事でもプライベートでも、いろいろ予定を立てて、何かアクションを起こそうとする重要な日に限って、子育てあるあるですが、子どもの体調が悪くなるとか、家族の都合が入ってしまうことがあります。その時、行き詰まり感を感じますね。両親を頼ったり、夫と予定を調整したりします。あと、寝不足で思ったようにパフォーマンスが上がらない時も行き詰まりを感じます。私、ロングスリーパーなので、寝ないと体調が悪くなってしまうのですが、寝る時間が取れないで、あれもこれもやらなければ、という時にいっぱいいっぱいになってしまいます。

▼参加者：僕は行き詰るタイミングがあって、特に一人で作業をしている時ですね。考えなくてもいいことを考えてしまい、悪いサイクルに陥ってしまいます。そういう時は、とにかく人と話すことにしていて、気持ちが和らぐ実感があります。

▼渡辺：第三者の存在って大切ですよね。私も分かってほしかった人に分かってもらえなかった時、行き詰まり、困難、壁を感じます。

▼参加者：私は人生のほぼ毎日、壁と困難の中で生きています。それがある意味、普通なことで、その時には大きなことでも、通り過ぎれば小さなことなんですけど。特に人間関係がうまくいかない時、誤解されてるとか、こっちの勝手な思い込みとかでうまくいかないこともありますが、自分の殻に閉じこもってしまう悪いクセがあります。どうにもならない時は頼りにして

いる友達に話を聞いてもらい、抜け出す糸口を探してもらいます。一人では解決できないですね。最終的に行動するのは自分ですが、一人だと思い込みも大きいですよね。傍から見ていると、そんなの全然、壁じゃないよってことも度々あって、「あ、そうなんだ」と気づかされます。



▼参加者：でも、皆さん、悩んだ末に行動できていますか。

▼渡辺：私は悩んだら「やる」と決めているので、やっちゃうんですけど。嫌だって思うことはやりません。でも「怖い」って思うことはやる。「嫌だ」と「怖い」の境界線は直感です。でも、嫌を分解すると、もしかしてやったことがないから怖いとか、恥かくのが怖いとか。だとしたら「GO！」です。でも生理的に無理とか、自分の価値観と合わない時、「嫌だ」はやらない。

▼参加者：それって大事。そういう勘が働く人って、生命力があります、人間がもともと持っているものだと思うので。最近だいぶ、いろんなものに守られているから、直感を鍛えたほうがいいと思いました。

▼参加者：僕もわりと直感に従うようにしています。ある意味、危険かもしれませんが、「これだ」と思うことに飛び込んで、自分の捉え方ですけど、大変なこともあったし、得るものもありました。でも、そうやって自分の視野を広げていったという実感はあります。停滞するのが怖いので、行き詰ったら「とにかくやる」というスタンスでいたいと思っています。

▼参加者：私も見習ってチャレンジしていきたいと思います。

～ワールドカフェ　第1ラウンド終了～

▼村松：2つ目の問いは、第６分科会のメンバーでワールドカフェをして時間をかけて考えました。「壁、困難、行き詰まりに直面した時、あれば良いもの・助けになるもの～人、考え方、何らかの変化～はなんですか。」です。

～ワールドカフェ　第2ラウンド開始（１グループ抜粋）～

▼書記：皆さんこんにちは。よろしくお願い致します。第1ラウンドのお話の共有ですが、自分の大事な用事の時に限って、お子さんの体調不良や家族の予定が入った時、分かってほしい人に分かってもらえなかった時に行き詰まるという意見でした。行き詰まるタイミングもそれぞれで、一人の時など考えが悪い方に行ってしまう、第三者に話を聞いてもらうことの必要性などが出ました。では、2つ目の問いについて、お願いします。

▼参加者：私、困った時はいつも主人に相談しています。一日あったことも全部。なんの解決にもならないし、答えもないんですけど、とりあえず言っています。

▼参加者：愛知県から参加しています。まず自己肯定感を持ち、前向きに物事を捉えることが大事で、失敗したとしても、それは次の成功の足掛かりという考え方をすることで、違ってくると思います。周りの人に助けてもらうことも大事です。

▼参加者：私は大学生で、自立しなくてはと思っているんですけど、一緒に住んでる家族が話を聞いて受け止めてくれ、自分とは違う視点を与えてくれます。学生だったら、それが先生や友人でもいいと思います。周りの人の存在が大きいと思います。

▼参加者：私、夫以外にも娘にもよく話しちゃいます。娘も話してくれるし、やっぱり家族は大事ですよね。世代が違うから、娘には散々、バカにされますが、言うだけでも笑い飛ばせてすっきりするので。壁にぶつかって、できなかったらできなかったでもいい。乗り越える必要もないというか。逆らわずに流れに沿ってしまいます。

▼渡辺：分科会コーディネーターの渡辺郁です。そういう時も大事ですね。私は皆さんとはちょっと違って、声をかけてくれる、共感してくれるのは家族じゃなくてもいいかなって思っています。通りすがりの人、コンビニの店員さんでも、二言三言、話したりすると、すごく気分が良くなったりします。自分の深い悩みは解決しないですが、なんか応援されてるなって雰囲気が大事なのかなと感じる時があります。

▼参加者：それ、あります。小学生に「こんにちは」って挨拶されただけでも気分が良くなる感じがありますもんね。

▼渡辺：挨拶って大事ですよね。言葉をかけるってことが感謝とか愛だなって。知らない人に声をかけるのは勇気がいること

だけど、もしかしたら、誰かの背中を押すことにつながっているのかもしれませんね。

▼参加者：私は地域のスクールガードをやっているんですが、落ち込んで、行くのが億劫な時も、子どもたちが手を振ってくれると気持ちが上がります。子どもは元気にしてくれる力があります。自分の子どもには辛辣なことを言われることもありますが、後で考えると正しくて、教えてもらうことも多いですね。指摘してくれるのがありがたいです。

▼参加者：言われたことを、素直に受け入れるって難しいですよね。言う方もうまくなると、言われる方も受け入れられるものなのかもしれません。



～ワールドカフェ　第2ラウンド終了～

▼村松：今回、英語で参加のグループもありまして、コロンビアやブラジルからのご参加の方もいらっしゃって、ワールドワイドに楽しく参加していただいております。最後の問いは、「これでいいのだ！とあなたが思えるために、その時、どんな行動を取れたら、あるいはどんな姿勢でいられたら良いと思いますか。」です。いってらっしゃい。

～ワールドカフェ　第3ラウンド開始（１グループ抜粋）～

▼書記：よろしくお願いします。第2ラウンドのお話の共有ですが、第三者の存在、夫や家族など、第三者に話すことが大切だよね、家族に限らず、コンビニの店員さんでも、小学生でも、挨拶されるだけでも元気が出る、活力になるよねといったお話が出ました。

▼渡辺：分科会コーディネーターの渡辺郁です。ちょっとお邪魔させていただいています、皆さんいかがですか。

▼参加者：私、基本的にあまり「後悔しない生き方」をしたくないので、自分の心に正直に生きています。ひたすら自分の心に正直だから、はたから見ても「なんで」って行動もありますね。そして、やりたいようにやっています。

▼渡辺：私も「こうじゃないといけない」とか世間的なバイアス、足かせがね、「50にもなってミニスカートはいて」とか。それを気にしないメンタルがあるとすごく自由だなと思います。同じように、他の人の背中も押せる存在になりたいなと思います。第１、第２ラウンドを経て、改めて第三者の存在ってすごく大切だと感じました。私も誰かの第三者でありたいなと思います。

▼参加者：「これでいいのだ」と思えるために、選択肢が目の前に来た時に、人生の最後で後悔が少ないと思えるほうを選びます。「やっておけば良かった」という後悔はしたくないです。やったことの反省と後悔より、やらなかった後悔のほうが引きずると思うので。やって失敗したら、それは後に続く人のデータになるので、記録は取りつつ、チャレンジしたいと思っています。

▼参加者：まだ、これでいいのだと振り切っていないのが正直なところです。成功している人はずっと成功しているんだろうなとひがんでしまいますが、成功した人の失敗談を読んで、失敗があったからこそ成功している、だから私も失敗していいんだ、と思えるような発展途上にいる状態です。これでいいんだ！と思えるように、試行錯誤しています。

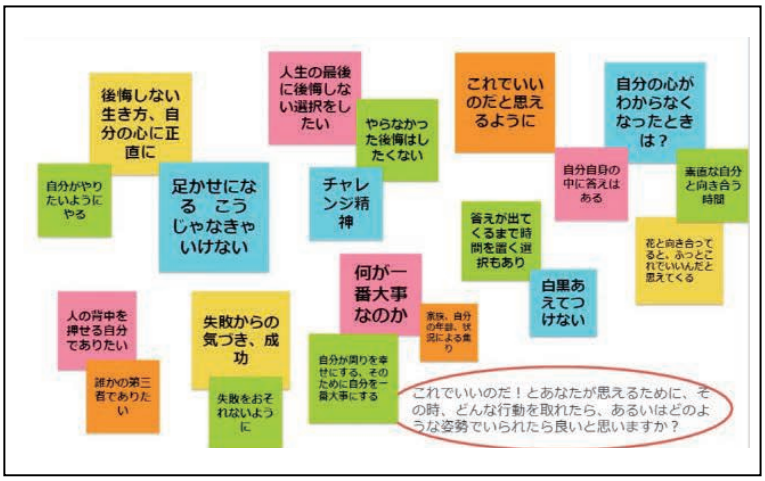
▼渡辺：失敗はないですよ。それもご経験です。

▼参加者：「自分の心に正直に」と言いますが、自分の心が分からなくなった時は、どうすればいいでしょうか。

▼参加者：やはり答えは、自分自身の中にあると思います。その時、何かをしながらのほうが、ふと天から声が降りてくる気がします。私はガーデニングが好きなので、健気に咲いているお花と向かい合っていると、すごく悩んでいることがなんでもなくなって、「これでいいんだ」と思えてきます。起業して40年経ちますが、ほとんどは花いじりの中で、自分で答えを見つけてきたように思います。ご自分の趣味や好きなことの中に身を置いて、素直な自分と向き合う時間を持つといいと思います。

▼参加者：ありがとうございます。私は料理が好きなので、いろいろ煮詰まった時は、鍋を煮詰めるようにしています。

▼渡辺：私はそこまで悩むのだったら、自分の中にある答えが出てくるまで少し時間を置くというのも選択肢だと思います。頭から離れないなら、思い出さない努力をする。時間を置くと、物事が変わって見えることもあります。何でも白黒つけたがりますが、あえてつけずに待つことも必要かと思います。



▼参加者：私は今、これでいいのだ！と思えないのは、自分の中でファーストプライオリティーというか、何が一番大事か見つけきれてないからだと思います。結婚する前は自分を一番優先できましたが、今は家族の転勤でこっちに来て、子どももいて、来年で50歳なので、子どもの成長を待っていたら、遅いのではないかという焦りもあります。自分も大事、家族も大事で、すごく悩んでいて、全部が中途半端な状況です。これでいいのだ！と思えるためには、何が一番大事かを、自分の中で見極めなきゃいけない、でも悩んでいる間にどんどん歳も取っていくし。皆さんは自分の中の1位をどうやって見つけていったんですか。

▼参加者：私は、自分が一番大事です。夫よりも子どもよりも。自分が幸せで、長生きして、健康でパワフルで、周りを幸せにするという気持ちがあるので。何かあったら、私が夫と子どもを助けるんだという気持ちです。

▼参加者：かっこいいです。すごく素敵な言葉をいただきました。

～ワールドカフェ　第3ラウンド終了～

▼村松：皆さま、おかえりなさい。3回のワールドカフェ、お疲れ様でした。
これからそれぞれのグループの書記の方に発表をしていただきます。

▼書記：1つ目の問いは、内省できる時間、場所、受け止める余裕、余裕があると物事を客観的に見られるという話が出ました。それらは与えられるものではなく、自分で作るものという部分が印象的でした。初めての場所、時間、関係性があると助けになるという話の他、安心できる人や初めての人に会う、なども出ました。2つ目の問いに出た話は、時にはプライドを捨てて助けを求める、完全な対処方法がない、それはそれで経験、仕方ないと考えて救われることがある、などです。3つ目の問いでは、肯定する、頭の中で考えないでとにかく行動する、自分で自分を応援するなどの話が出ました。



▼書記：1つ目の問いでは、出産、妊娠、コロナ禍で生活が変わったことについて話をしてくださいました。2つ目の問いでは、ネットが助けになることや、気にかけてくれる人が大事だということ、時間はあればいいけれど、作るのが難しいので、優先順位を考えることでうまく活用できる話などが出ました。最後の問いで出たのは、本などいろんな情報源を得ることが大事ということ。また、第6分科会のこれでいいのだのステッカーが好評で嬉しかったのですが、こういう言葉が身近に置いてあると心の支えになるんだという話です。印象的だったのが、「今は特にありません」という方もいて、答えを出さないでいい、というワールドカフェの特徴が出たのかなと思いました。



▼書記：1つ目の問いについては、行き詰ったのは、受験や就職などやりたいことができなかった時、やりたいことに踏み出せなかった時で、その時に取った行動としては、目上の方や詳しい人の話を聞く、などでした。2つ目の問いで出た話は、同じ立場や考えの人と出会うこと。でもママ友だと近すぎるから、もう少し距離がある人がいいのではという意見もありました。聞く人が見つけられない場合は検索して調べてみるという話もありました。3つ目の問いで共通していたのが、とにかく自発的にやろうとする心が大事ということでした。

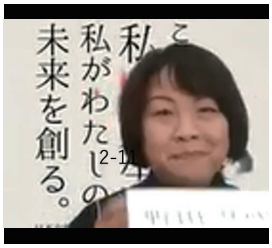


▼書記：いろんな言葉や考え方が出てきて、それが混ざり合っていく面白さを感じました。1つ目の問いで出た言葉は、大事な用事の時に限って家族のトラブルがある、行き詰るタイミングは一人の時、などです。2つ目は、第三者の重要性が出ていて、家族や、話を聞いてくれる身近かな人に助けられている、ということでした。3つ目は、共通しているのが、後悔しない生き方、自分の心に素直に、という言葉でした。一方で、自分の中で何が一番大事か分からないという人もいました。



▼書記：1つ目の問いでは、それぞれの体験を話してくださいまして、コロナ禍でお仕事が半分になってしまったり、留学の予定がなくなってしまったという方もいて、皆さん、困難にぶつかっていたんだなと感じました。2つ目の問いで助けになるものとしては、共感してくれる身近な人、仕事に

対して的確なアドバイスをしてくれる人という話が出ました。身近な解決方法としては、ウォーキングや映画に行くなど、場所、景色を変えてみるということでした。3つ目の問いは、年金をやめて良かった、やめなくて良かった、などの具体的な話から始まりました。最終的にはそれぞれ自分が肯定できて一番いい時に旅立っていきたいという話がありました。また、最後の問いはとても哲学的で、考えれば考えるほど広がり、深まっていくというご意見もいただきました。



▼書記：はじめの問いについては、時間が無いという方が、けっこういました。仕事など自分が所属するグループで行き詰まりを感じた時は、グループ外の人に相談するという人もいました。2つ目に出た言葉は、視点を変える、発想を展開する、などでした。最後の問いには、自分の捉え方を変えていく、自分の選択を大事にする、手を抜かない、といった意見が出ていました。



▼英語グループ書記：このグループには、アメリカ、コロンビア、ブラジル、東京、広島、山梨など多くの場所から参加がありました。自分で解決しようとすること、人に解決を求めることに分けて話し合いがなされました。最初のセッションでは特に、男女間のジェンダーギャップに対するものがありました。いくつかの解決策の中に、どうしてお金持ちと結婚しないのかというのがありますが、私たちは、それは本当の解決策ではないと感じています。次のファイル、これは2個目の解決策から取り上げました。もう十分だと思った時にどうするか。さまざまなタイプのアイデアがありました。食べる、猫や犬と遊ぶ、ただリラックスする、踊る、このような楽しいことをする解決策のカテゴリーを議論した一方、諦めるということも話しました。ギブアップするということは、本当にネガティブに見えますが、その物事をもう十分だと思いながら繰り返すのは、後退する姿勢になるというのが、英語グループからの大切な点になります。



▼堀松：今回、皆さんが参加してくださったことで、ご自身と向き合う時間になったり、これまで考えることがなかった問いについて考える機会になっていたらいいなと思います。ワールドカフェはここまでで終了となります。ありがとうございました。

▼野田：第６分科会運営メンバーの野田です。最後に、第６分科会のメンバーをご紹介します。



最初に前田晋吾さん、いつもの呼び方は「前田先生」です。現代社会に舞い降りた天使のように、時にいたずらっぽく、私たちにいろんな質問を投げかけてくれるのですが、その話を聞きながら、私たちはいつも心が浄化されます。前田先生がいるだけで空間が爽やかになる、そんな魅力的な人です。

続いて渡辺亜紀さん。スイスからの帰国子女で、芦川で地球と自然と人をこよなく愛する人。都会育ちでいながら、自然に溶け込む移住者の星です。農家民宿、カフェを営んでいます。それでいて、人材開発の最先端にいる名ファシリテーターです。

次に、高崎真理さん。真理さんは臨床心理士で、人の心を誰よりも優しくみてくれる人です。心が疲れた時には会いに行っていただきたいです。真理さんの好奇心と向上心は真っすぐ伸びていて、人や物事と真正面に向き合う人だなと思って、良い刺激をたくさんいただきました。

続いて、宮井健男くん。イケメンというワードが出てきますが、中身も相当イケています。気づきを気遣いに変えられる優しい人で、チャレンジ精神が旺盛な人。どんな期待も裏切らない努力の人です。

続いて堀松夕夏ちゃん。今日は才女ぶりを発揮していました。寡黙で集中力がある人ですが、私は一緒にいるとすごく居心地がいいです。ただいま、リスペクト中です。

次に、シンシンことジェ・シャンシン。明るくて楽しくて、その場に星が降ってくるようなかわいらしい女性です。誰にでも隔たりをもたない人懐こさが最大の魅力だと思います。いつも厚い日本の書物を持っていて、すごく勉強家です。

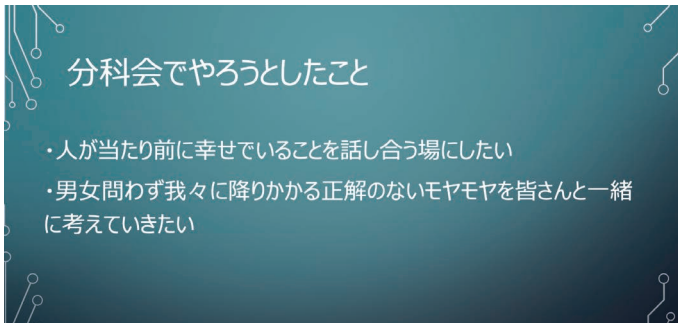
続いて村上沙恵子ちゃん。初めて会った時に、おばあちゃまのお着物と袴に、フリルのついたブラウスをアレンジして登場したんです。里中満智子さんの「はいからさんが通る」を思い出して、新鮮で衝撃的でした。東京出身で引き出しが多くて深い人。日常生活は英語を使っていると聞いております。

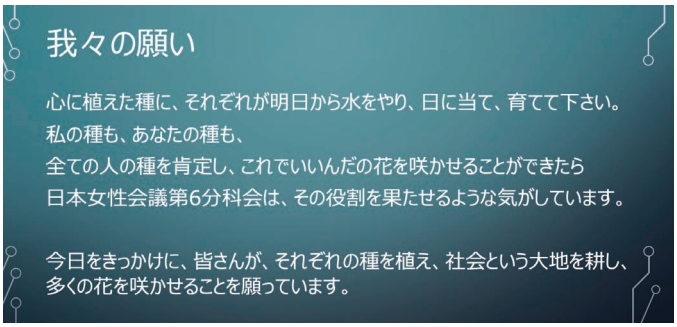
岩堀大海くん、今回も陰ながらたくさんの準備をしてくださいました。何でもきっちり、さらりとこなすエースです。神奈川県生まれで、郁さんとのご縁で山梨に就職しました。何でも率先する行動力と気遣いがピカ一な好青年です。

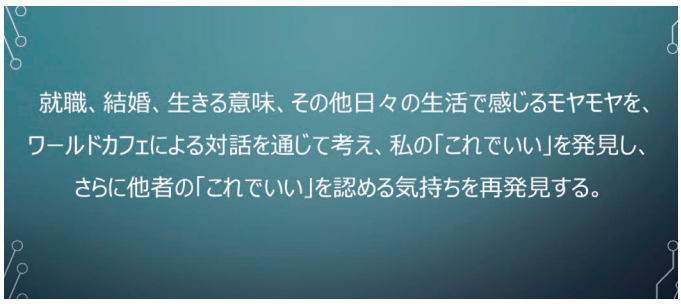
村松美希ちゃん、今日の活躍素晴らしかったです。美希ちゃんのスピーチを聞きながら、涙が出てきました。可能性しかない、成長が目覚ましい、頑張り屋さんです。

続いて野田芹菜。娘なんです。幼いころから、ピンチの時に力を発揮する、ピンチじゃないと力を発揮しないのは親心としてもったいないと思っていますが、いざという時にすごく頼りになる子です。

最後にコーディネーターの渡辺郁さん。とにかく、人と人、人と場所、モノ、コトあらゆるものを磁石のようにくっつけてしまうというマッチング力がものすごい人だと思っています。人が気づかない能力と縁を引き出してくれる人だと感じています。世界平和が夢なんですよね。ゼロから1を生み出す天才だなと思っています。郁さんの泉にはいつも愛が溢れていますので、疲れた時には株式会社アンサーノックスに来て、愛をすくって、これからも楽しく過ごしていきましょう。皆さま、お付き合いありがとうございました。









分科会 7

食育・農業

10月23日（土） 第1部 10:00〜11:30
第2部 12:30〜14:00

パネルディスカッション

未来へつなげる「農業・食」の魅力
〜守り引き継ぐ山梨の宝〜

コーディネーター	パネリスト	パネリスト	パネリスト
田中 進	**織田 久美子**	**菅沼 祐介**	**村上 由実**
㈱サラダボウル 代表取締役	㈱ヴァインヤード甲斐国物語 代表取締役	菅沼農園代表	甲府市×野菜ソムリエプロジェクト こうふるふぁーむ代表





【第1部】



▼田中：皆さん、こんにちは。第7分科会、分野は食育・農業です。テーマが「未来へつなげる『農業・食』の魅力」、副題が「守り引き継ぐ山梨の宝」で、始めさせていただきたいと思います。コーディネーターを務めさせていただくサラダボウルの田中と申します。パネリストの織田さん、菅沼さん、村上さん、それぞれの自己紹介を少ししていただいて、いろいろとディスカッションしていきたいと思います。ではまず、私のほうから自己紹介させていただきます。

サラダボウルは2004年の4月1日、農業の新しいカタチをつくりたいということで、それまで10年勤めていた金融機関を退職して、新たに始めた会社です。全国から若い人たちが集まってくれて、彼や彼女たちが成長するとともに、農場も広がっていきました。地域に点在する遊休農地の約80人の地主さんから120カ所くらい借りて、展開をするようになっていきました。広がっていく中で非常に大きな課題も出てきて、その時に取り組んできたのがいわゆる他の産業でも普通にやられている経営マネジメントでした。生産工程管理・品質管理・原価管理・人材育成などいろいろな取り組みをしてきました。そして、少しずつカタチが変わり、集約をした大規模な農場を全国に展開しています。最近では、「スマート農業」という言われ方もしていますが、非常に生産性が高く、働く環境も整えられてきています。

普通に週休2日で働き、朝8時出社、夕方5時には仕事が終わります。遅くても6時くらいに皆帰るような環境になってきました。



これは収穫をしている写真で、私たちの経営スタイルを表している特徴的な1枚なのでいつも皆さんに見ていただいています。重いものを持ち上げない、しゃがまない、かがまない。今、最高齢の方で、82歳の方まで仕事ができる環境になっています。60歳以上の方で47.4%を占めております。高齢の方まで現場で活躍できるような農場をつくっていて、地域の方々が働きに来てくれています。北は岩手県の大船渡市から、南は福岡のみやま市まで農業を展開しています。







図1が、山梨にある農場の写真です。図2が兵庫県の加西市にある農場の写真になります。図3が岩手県の農場ですね。オランダで体系化されてきたモデルですね。グリーンハウスの取り組みを日本に合わせたカタチで展開しています。非常に清潔な環境の中で、品質の高い物を生産性高く、という思いのもとで取り組みをしています。いわゆるスマート農業という分野になります。5分おきに約40項目の環境データを収集しています。例えば、温度・湿度・日射強度・積算日射量などです。さまざまなデータを見ながら、精密に栽培環境を管理することを行っています。山梨の栽培責任者が、全国のグループ農場を統括しています。全国の農場の環境データを観察・考察し、遠隔から指導することで、より良い栽培ができるような環境をつくっています。地域に価値ある産業をつくりたいという思いのもと始まっています。農業の新しいカタチの一つをつくろうと挑戦をしています。今日は「未来につなげる『農業・食』の魅力」というテーマに沿って、一緒に議論をさせていただきたいと思います。次に、皆さんの自己紹介をよろしくお願いいたします。



▼織田：改めましてこんにちは。株式会社ヴァインヤードの織田と申します。山梨の果樹を中心にインターネットで紹介する会社を運営しています。私は移住組で、2000年、結婚を機に神奈川県から山梨に移り住みました。四方を山々に囲まれて一面ブドウ畑しかないようなところです。最寄りのスーパーまでは車で10km以上走るような田舎町でした。私が初めに住んだのは、勝沼という種なし巨峰発祥の地ですけれども、ワインが日本で初めて造られたことでも有名なブドウの名産地です。私の夫は農家ではありませんでしたが、村の同じ組の人たちはほぼブドウ農家さんでした。こちらの山梨に移住した時は、ちょうどモモが盛りを迎えるころで、近所の畑を訪れて木で完熟したモモを皮ごと丸かじりした時のおいしさは今でも強烈に覚えています。恵まれた環境で育った質の良いフルーツのおいしさを多くの人たちに知ってもらいたいという思いと、同じ村の2代目・3代目の若い農家さんたちから「農協以外に新しい販路を開拓したい」という相談を受けたことがきっかけで、15年前の2006年に山梨の果物を直送するインターネットサイトをオープンすることになりました。これが出荷場の様子です。地域に密着し、作る人と食べる人がともに笑顔になれるような山梨の食文化を伝えていく活動を続けています。今日は、果樹農家さんとの取り組みについてや、そこで感じた魅力、課題点などをお話しさせていただければと思います。どうぞよろしくお願いします。



▼田中：織田さん、ありがとうございます。外から来ると、そこにずっと住んでいる人とは違うものが見えてきますよね。

▼織田：そうですね。すごく私にとっては宝の山というか。素晴らしい地域だと感じています。

▼田中：ありがとうございます。後ほど、ゆっくりおうかがいしたいと思います。菅沼さん、自己紹介お願いします。



▼菅沼：今回、学生の方も閲覧しているということで、学生の方寄りの発表にしていきたいと思います。私は東京生まれ東京育ちで、移住組です。2015年、大学卒業とともに山梨県に引っ越して農家になりました。現在、移住7年目、農家6年目になります。きっかけは2014年2月14日に降った大雪です。学生ボランティアとして参加して、主に畑の雪かきを行いました。東北の大震災を経験した学生ボランティアと一緒に活動していて、甲府に初めて来ました。自分がどうして農業を選んだかと言いますと、もともと大学が農業系でしたが、就活ですね。自分の本当にしたいことが受けている会社でできるか、それは何年後なのかなど悩んでいました。農業というのは、自分が経営者なので、自分のやりたいことをシンプルに自分の経営に反映できます。また、体を動かして仕事がでる。太陽とともに仕事ができるという、そのシンプルさ。こういったところにすごくボランティアをしながら惹かれ、こういった思いが自分の中に蓄積した結果、農家という選択になりました。現在は菅沼農園の代表として、自分の農園を持っています。スモモ・トウモロコシ・ナスをメインで稼ぎの柱にしながらも、お米ですとかサラダ用の葉物ですとか、ジャガイモ、梅など約15品種、合計20品種ほど作っています。そういった農業の傍ら、もともとボランティアの時に思い知らされた若手の少なさですとか、若い人の地域の割合の少なさということに少しアプローチしたいな、という思いで移住したこともありましたので、農業体験・移住就農相談・学生課外活動支援など事業の拡大もやっています。

一例ですが、こういった形でチラシを甲府市などと一緒に、インターンや農業体験の受け入れを事業の主としてやってきました。こちらAgroadという団体、私の母校・東京農業大学の後輩たちがやっている活動です。学科公認でやっている活動で、こういった形で私の農園に来てもらっています。自分たちが勉強の中で学んでいることは、実際、現場ではこういうことが起きているってことを学んでもらい、社会に出た時、そういった知識を活かして、一流産業にもっとコミットしてもらう活動になっています。現在も、コロナ対策を万全にしながら、地道に続いている活動です。



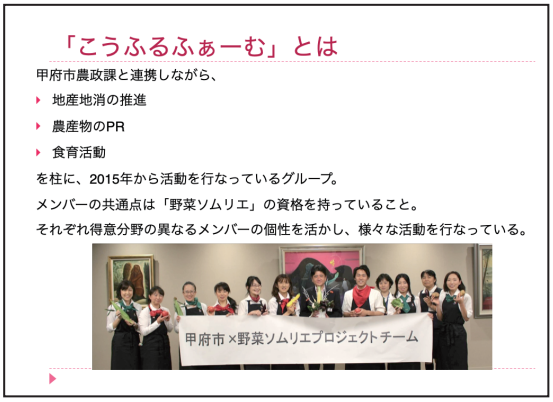
就農支援として、実際に移住して農業をやりたいって方の受け入れもしております。私は農業を始めて6年目ですが、1年に1組ずつくらい受け入れをしていまして、5組中5組、100%が当地域に移住し、農業を続けてくれています。今回、このような形で発表させていただくにあたり、なにか明るい話ができたらと思っているのでよろしくお願いします。

▼田中：菅沼さん、ありがとうございます。2014年の大雪害、思い出しましたね。典型的な農業のリスクなんですけど、よくそこで「よし、農業やろう」って思いましたね。その菅沼さんのメンタリティに今日は迫れたらいいなって思います。5組中5組就農ってすごいですね。続いて、村上さんお願いします。



▼村上：野菜ソムリエプロの村上由実と申します。本業は甲府市内に勤務する会社員で、普段は皆さんと違って農業や食育とは全く関係ない仕事を担当しております。今回、「甲府市×野菜ソムリエプロジェクトこうふるふぁーむ」という団体の代表をしているご縁で、登壇させていただくことになりました。私は山梨市出身で、高校まで山梨市内の学校で学び、山梨大学を卒業しました。就職後、数カ月都内に住んだものの山梨県内に配属され、その後もずっと山梨にいます。なので、織田さんや菅沼さんとは違って、人生のほとんどの時間を山梨県内で過ごす、生粋の山梨っ子です。もともと食べることが好きだったのもあって、結婚後、軽い気持ちで野菜ソムリエの資格を取得しました。それをきっかけに甲府市を中心とした山梨の農産物の魅力に触れる機会が増えまして、それを多くの人に伝えたいと考えるようになりました。

その後、もう一つ上となる野菜ソムリエプロやフードツーリズムマイスターなどを取得し、全国に向けて山梨県のPR活動を行っています。また、同時に自治体や民間企業と連携しながら、さまざまな活動も展開しております。そして、その中の一つが、今回こちらに登壇させていただくきっかけとなった「甲府市×野菜プロジェクトこうふるふぁーむ」になります。こうふるふぁーむは、甲府市農政課と連携しながら2015年から活動を行っているグループです。地産・地消の推進、農産物のPR、食育活動を3つの柱としまして、山梨県産の野菜や果物を使ったスムージーの販売や収穫直後の野菜や果物を使った料理教室、産地見学や収穫などの農業体験、野菜や果物の食べ比べ、珍しい野菜や特産化を目指す野菜の食べ方提案・レシピ作成、伝統野菜や郷土料理の認知度向上のサポートなどを行っています。メンバーの共通点は、野菜ソムリエまたは野菜ソムリエプロの資格を持っていること。それぞれ職業はさまざまで、農家さんや栄養士、私のようにただ食べることが好きって人もいます。それぞれの得意分野の異なる個性を活かしながら、いろいろな活動を行っています。私たちの活動はほとんどが直接触れ合う対面式のものばかりなので、コロナ禍の煽りを受けて、残念ながらここ最近の活動としては農産物を使ったレシピ紹介くらいです。レシピは、甲府市内の直売所で配布していただいたり、ホームページで公開していただいたりしています。本日はどうぞよろしくお願いします。



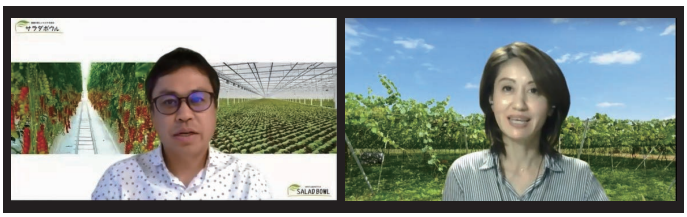
▼田中：村上さん、ありがとうございます。農業や地域とは違う視点からの話も伺えたらと思います。ここからは、皆さんに農業の魅力と課題について、織田さんいかがでしょうか。

▼織田：そうですね。魅力、特に山梨の農業はビジネス発展の宝庫だと思っています。私のような移住者、よそ者の視点で見ると、地元の人が普段から目にして当たり前と思っているところに、実はおもしろいお宝があると思っています。ブドウで例え

ると、皆さんが知っているシャインマスカットや巨峰、ピオーネ以外にも、実はたくさんの品種があって、日本では100種類くらいの品種のブドウが作られていると言われています。黒いシャインマスカットや赤いシャインマスカットもありますし、一粒がゴルフボールくらい大きいブドウとか、ハートの形をしたブドウとか、香水のようにいい香りがするブドウもあります。大量生産されている物しか一般流通には乗りにくいんですけれども、品種改良で生まれた珍しい品種とか古来からあるような伝統的な品種は、消費者からウケて、大変喜ばれています。もう一つの魅力は、東京の隣という立地です。特急電車に乗れば、1時間半位のアクセスの良さで、菅沼さんのような新規就農した先輩たちのサポートもすごく手厚いですよね。なので、二拠点居住をしながら農業を始めやすい環境も魅力だと思っています。

▼田中：ありがとうございます。外から来た人だからこその目線もあるでしょうし、きっと「こんなブドウがあるんだ」って、いろいろな発見があったんでしょうね。

▼織田：そうですね。スーパーでは、デラウエアか巨峰しか見たことがなかったので、本当に近所の人たちが持って来てくれる、いろんな色のブドウがすごくおいしくて感動しました。「これは全国の人たちに伝えなければ」って使命感に燃えました。



▼田中：反面、世の中に出てないって、出てないだけの理由があって、それを広めていくってすごく難しくありませんでした？

▼織田：そうですね。やっぱり、大量生産できないと一般的な市場に並んだり、流通はしにくいので難しいところはあります。でも、うちとお付き合いがあるのはほとんど小規模の農家さんたちで、その分、密に連絡が取れるので、ダイレクトにお客さんにメールやSNSをとおして紹介することで、希少価値の高いものを広げていけるような可能性を感じています。

▼田中：実際に消費者の方と直接、接点を持っているからこそ感じられる手ごたえですよね。逆に、織田さんから見て、農家の方々の課題ってどんな点だと思いますか。

▼織田：一番の課題は、生産者自身で価格設定がしにくいところですね。価格決定権が限りなく少ない。思うような評価が返ってこないということです。作る人と食べる人の距離が遠いと感じています。また、食卓に上がるまでの日数もかかります。一生懸命作っても、作る人の思いが食べる人まで届きにくく、食べている人の評価も返ってこない。生産の現場にいる方たちは、モチベーションをどこに持っていけばいいか分からないってことをよく耳にするので、そういった距離をどう縮めていくかも課題だと思っています。

▼田中：菅沼さんは、農家目線から、農業の魅力と課題をどう考えていますか。



▼菅沼：地元が東京で、長男坊で移住してきたものですから、実家との縁で、実家で何かあった場合は、すぐに帰れるというアクセスの良さが、農業をする場所に山梨県を選んだ一つの理由です。あとは、大量消費地の東京が近いというのも魅力です。コロナ前はマルシェと言いまして農業者が集まり市場を開く形が東京によくありましたので、すぐに行って朝採れの物を販売できましたし、強みだなと思っています。あと、甲府市は盆地地形なので、水源が非常に豊富で、きれいな良い水をたくさん使えるのも、作物や農家にとって非常にありがたいです。改めて言えば、農業の魅力は、自分の思いをすぐに反映できることと、自分が作った作物で人を幸せにできることだと思います。

▼田中：めちゃめちゃカッコいいじゃないですか。「農業ってシンプルですよね」っていう表現があったと思いますが、分かりやすいですよね。社会に忖度することもなければ、顔色を伺うこともなく。お客さんも忖度なく評価しますもんね。まずかったら買わないし、価値以上の値段では買わない。すごく分かりやすいと思うんですね。そういう意味で、自分を本当に表現しやすい仕事だというのは、すごく共感できました。逆に菅沼さん、農業の課題って何だと思います？

▼菅沼：良くも悪くも自己責任であるということですね。あと、会社的にやっている人間じゃないので、ヒューマントラブルのリスクが高いです。

▼田中：それは…（笑）あまり聞けそうもない、深掘りできそうもない部分ですね。これ、地域の難しさですか。それとも…

▼菅沼：自分のってこともありますね。例えば、注文をいただいた時にダブルチェックとかなかなかできないので、忙しい時に間違って誤発送しちゃったりとか。箱詰めする時にA品だったはずなのに、ちょっとB品が混ざっちゃったりとか。

▼田中：近くで就農した5人を見て、感じる課題ってどんなのになります？そういう人たちをとおして見たほうが、客観的に農業の課題って見えるんじゃないかと思って。

▼**菅沼**：自分はあまり感じませんでしたが、入る地域の方々との円満さっていうのが、すごく大きいんだなっていうのは周りを見てて思います。自分自身も、昔は苦手だったコミュニケーション能力が否が応でも身に付いた感じです。やっぱり仲違いしちゃうと、いい畑の情報も入らなくなりますし、そういう情報がはねのけられちゃうってもったいないなって。

▼**田中**：田舎ならではですかね、この問題は。「昨日、何時くらいに寝たよね。電気消えたね。」とか「昨日、朝早く出てったけど、どこ行ったの？」みたいな。どこで見ているんですかね。まあ、そのくらいのことをうまくやり過ごさないと、楽しい田舎生活はできないですかね。

▼**菅沼**：自分の中で、ふんぎりつけながらやっております。

▼**田中**：村上さんは、お二方とは少し違う視点での活動になると思うんですけど、農業とか食の魅力について教えてもらえますか。



▼**村上**：私は、まず消費者として感じる農業の魅力っていうのは、特に山梨は日常生活のすぐ近くに畑があるので、新鮮な物を新鮮なうちに、口にできることが大きな魅力だと思います。私はずっと山梨にいて、それが当たり前なので、山梨は、何も無いところって気持ちだったんですけど、山梨に移住してくる人や、県外の友人に聞くと「そんなのすごいね。野菜・果物はもらえる物ってすごいね」みたいな。それで初めて、それが幸せなのだということに気づくことができました。

▼**田中**：山梨あるあるでしょうね。モモのシーズン終盤になると、家の前に誰が置いていったか分からないモモが、食べきれないですもんね。

▼**村上**：そういったものがあってこそのA級品で、いただいた物とは全然味が違うのも分かっているんですが、いただく物が普通と思っているので、それがどれだけ贅沢なことなのか今すごい身に染みています。

▼**田中**：野菜ソムリエさんの間でも、農家の話ってすると思いますが、皆さんの立場から見た農家の課題とか、もしくはそこから少し紐づいた食の課題、地域の課題って、どんなことを感じますか。

▼**村上**：私たちの活動は農家さんと直結していて、活動をするうえで旬な物を扱いたいなと思うのですが、農家さん、そういう時期は農繁期でとてもお忙しいんですよ。産地に行ってみたいと思っても一番お忙しい時だって分かっているので、そういった調整の難しさを感じています。

▼**田中**：このセッションでは、皆さんから農業の魅力とか、地域の魅力、課題に触れていただきました。たぶん「農業」っていうと、広く捉えすぎる感じって皆さんにもありますか。「農業」っていう切り口で会話をされることにいつも違和感を感じるんですね。例えば、高原でレタスを作る農家と、僕らみたいにハウスでトマトを作るって全然違うんですよね。花を作る農家なんてもっと違います。北海道で酪農する人なんて、業界が違うくらい違うし、それこそ、果樹の人とは職業が全く違うと思っているんですよね。1日のリズムも違えば、1年間のリズムも全然違うし。成り立っている形が全然違うので、そこに紐付いて地域の課題も全く違うし、解決の手法も全然違う。その分、魅力もあれば課題もあるんじゃないかなって思っています。これから、農業・食の魅力をどう伝え、次の世代に引き継いでくかということも、私たち一人ひとりの課題であるし、地域の課題だと思います。特に最近、「スマート農業」ってことも言われてきて、本当にできることが変わったと思うんですよね。菅沼さんは、スマート農業をどういうふうに感じていますか。

▼**菅沼**：学生とか素人の方への作業の伝えにくさなどをAI・ITの部分でカバーできればいいと期待しています。

▼**田中**：今までできなかったことが、すごいできますよね。先ほど、村上さんがコロナ禍で対面型の取り組みができないと言っていましたが、私たちも視察とかバイヤーさんの受け入れができなくなりました。でも、普段からICT的なことはいろいろやっていたので、バーチャルファームツアーをやり始めたら、今まで以上に簡単に遠くの人と、そういう場の共有ができるようになったんですよね。特に今、リクルートの部分、新卒採用対応なんかでは、200名くらいエントリーしてくれるんですけど、最初にウェブ面接をして、それこそバーチャルファームツアーで農場の映像を見てもらっています。今、週休2日でやっていますが、将来的にはさらに3週間の長期休暇が取れる農業現場にしようって、2〜3年のうちにやりたいなって思っています。スマート農業って言われるように、農業にもAIやロボティクスが同時に入ってきて、大きく変わってきたなと思います。魅力でもあり、必ずその裏側には課題もあると思いますが、いろいろなカタチが農業にはあって、菅沼さんも言われたように、人の数だけ農業の魅力を発信できるし、自分のスタイルで挑戦できるっていう良さがありますよね。

次の話題、農業の課題に移りたいと思います。担い手不足、高齢化、遊休の耕作放棄地。いろいろな問題があります。農家の所得をどう向上させるか、なんてこともあると思います。皆さんがそれぞれの分野でどういうふうに、これから取り組みをしていこうと考えているかを教えてください。

▼**織田**：うちの取り組みというよりは、感じることですが、今後の農業の現場でもダイバーシティ化がカギになってくると思い

ます。体力的な面では、AIの力を借りるという改善は必要ですし、仕事環境とか、例えばトイレなどデリケートな問題で改善が必要なことがいろいろあります。ただ、多様な人たちが働くほうが、消費者のニーズに合わせた物作りができますし、6次化の取り組みでもアイデアが豊富に集まりやすいと思っています。

▼田中：ダイバーシティですよね。最近やっと私たちも、きちんと男子トイレ・女子トイレを別々にして普通になってきましたけど、基本的に農家って、簡易トイレ一つが畑にあるだけですもんね。

▼織田：そうですね。お手伝いに来た方も、皆一緒のトイレを使うとか、それが嫌で近くの公園のトイレを借りに行ったりとか。畑も点在してますので、このことは、けっこう大きな問題かなと思います。

▼田中：トイレの設置問題は農家の課題ですね。村上さんは「それぐらいすればいいのに」って思うんでしょうね。

▼村上：私もちょっとお手伝いに行ったりすると、コンビニエンスストアのトイレを使わせていただいたりしますね。

▼田中：特にSDGsなんかも、農業界に本当に求められるようになりました。ソーシャルグッドという視点から、生産者一人ひとりが見られているなって感じます。ダイバーシティを実現していくことも求められているんでしょうね。ありがとうございます。菅沼さん、何か感じられている課題、ございますか。

▼菅沼：やっぱり移住当初から感じている若手の不足、就農者の不足、若手の努力が一番かなと思っています。

▼田中：どこに問題がありますか。若手の努力っていうのが気になりますが、一旦置いといて、構造的な部分で、やっぱり若い人たちがいないですよね。この事実の原因と現状をもうちょっと深く掘ってみたいと思います。

▼菅沼：自分が今一番感じているのは、農業生産法人といった所をワンクッションにする方にしても、ふんぎりがついてないのは、社会の見通しの悪さが少し原因なのかなと思っています。自分自身を守っていく方法を自分自身で切り開くというより、社会情勢を見ながら、社会の流れに従っているといつの間にやら50歳、60歳になっている。それで「昔は農業やりたかったけど」っていう方が、会社を辞めてからのんびりとやってるパターンが多いのかなと。全然悪い流れじゃないんですけども、若手が少ないっていうのは、少しそういうところが原因なのかなって思ったりもします。

▼田中：織田さんと村上さんにお聞きしますが、どうしたら農家、農村地域に農業を生業とした若者が増えますかね。

▼織田：さっきの続きで、多様性だと思います。女の子がいる所には男の子が集まるし。それ本当に重要だと思っていて、農業女子ってすごく注目されていて、ファッションも素敵だし、キラキラしたような感じで紹介されることもあって、どんどん増やしていきたい。そういった女性の働きやすさを進めていくことで、若い子たちがどんどん増えて活気が出てくるんじゃないかなと思っています。

▼田中：私の個人的な意見ですけど、6次化って、女性の、特に農家のお母さんの解放から始まったと思っています。婦人会で味噌を作って、売ってみたらすごく喜ばれて、初めて旦那に何も言われない財布ができて。それがちょっと楽しくて、みたいなところが原点だと思っているんですよね。昔の農家のお母さんたちって自由が無かったじゃないですか。財布も無ければ、朝から一緒に作業して一緒に軽トラに乗って帰って来てるのに、家に帰った瞬間「飯まだか」って言うお父さんがいてっていう。そういう中で、女性の在り方っていうのが変わっていくと、特に農家の女性の在り方が変わっていくと、もっと産業として変わるんでしょうね。

▼織田：食べる人の感覚に近いのは女性だと思っていて、健康志向だったり、農作物を食べて綺麗になりたいという思いとか、そういったところの感覚も6次化に向いているんじゃないかと思っています。アイデアがどんどん湧いてくるのも女性の生産者なので。

▼田中：そうですね。6次化なんかは女性がやらないとうまくいかないですよね。村上さん、農家や農業地域に若手がいるような状態をつくるには、どうしたらいいでしょうか。

▼村上：農業の課題の一つとして、収入の不安定さがあると思います。全てを投げうって農家になるというのは、とても素晴らしいことですが、やっぱり会社員はある程度収入が安定しているので、農家の不安定さに後ろ向きになる方もいらっしゃると思います。コロナ禍もあって現在、二拠点生活を送る方も増えているので、本業である程度収入を確保したうえで、副業として農業を行うスタイルというのが確立されていくと、若手も増えていくのかなという気はします。山梨は東京に近いですから、山梨で働きながら農家をやって、何かある時は都内に行ってという活動には、山梨は最適だと思います。全ては自分の責任でできるという利点はあるんですが、農業の課題としては、その分、収入は不安定になるので、踏み切るにはハードルが高い。他の会社に転職するのとは訳が違うところが課題だと思います。

▼田中：農業の所得向上について、皆さんから見て「こんなふうに、うまくしてる人いるよね」とか、もしくは「こんなふうにしたらいいんじゃない」ってサジェスションのようなものをお聞かせいただいてもいいですか。

▼織田：作っている人と食べる人の距離が遠く、それぞれの理解が遠いということを改善していくことだと思っています。うちの取り組みとしては、ここ数年で気候変動による収穫時期のズレや、価格の急激な変動、天候、規格外品の増加などが問題になっていますが、そういったところを、お互いの理解を深めることで、おいしくないのに無理に収穫したり、高い時に収穫し

たりせずに、もともとの契約どおりの価格で安定させて、お客さんにはちゃんとした旬を伝え、おいしさ重視で届けるということをしています。

▼田中：消費者の方と直接やり取りって、すごく喜ばれるし有効ですよね。逆に、もう少し規模が大きくなった場合、どう工夫したらできると思いますか。今までの一般的な流通だと、どちらかっていうと等級とかに農家は目がいくじゃないですか。等級イコール単価の高い低いが出てくるので、高い等級を狙って、味とは別のところにいっちゃいますよね。

▼織田：そうですね。なので、今までのような農協が決めた基準で作るといったところから変えていきたいと思っています。お客さんのニーズは、等級のとおりに欲しいではなく、「おいしい物が食べたい」なので。食べる方も、なぜそういう等級があるのかや、実際、等級からズレた物がどういう味がするのか、どういう価格になるのかを、お互い理解することが大事かなと思います。

▼田中：そうすると、おいしさの価値どおりの価格が付いて、農家の所得向上にもつながってきますよね。織田さんが運営するネット販売というのは新しいカタチとして出現してきましたが、流通をつくるうえで一番これまで難しかったこと、課題で乗り越えるのが一番大変だったことってどんなことですか。農家の人も同じ課題を抱えていて、それを解決できない人もいっぱいいると思いますが、そういう方々のヒントになればと思いまして。

▼織田：私たちは、ただ実った物を買って売るってところだけではなく、生育の段階から生産者と一緒に取り組みをしています。食べる方の希望を伝えて、生育の段階から企画を一緒に作っていきます。そういったことで、無駄の無い、価格変動の無い物を届けられたらと思っていて、大変だったところは、始めはそれができなかったことです。自分たちが畑に入って生産者と取り組みができなかった時には、できあがった「規格物」を買って届けなければいけなかったので、食べる方との距離をすごく感じて難しいところでした。

▼田中：最初、畑に入るのが難しかったのは、何か要因がありますか。

▼織田：やっぱり、よそ者だったっていうことと、15年前はまだネット販売というところに生産者さんが怪しさを感じていて、騙されるんじゃないかとか、理解してもらえるまで、数年かかりました。

▼田中：理解をしてもらうのに時間がかかったところが、けっこう肝な気がします。分かっていても、農家の人は変われない、変えられないみたいなところがありますよね。織田さんの立場から、農家の人たちにメッセージとして、「こういうふうにしたら、変われるんじゃない？チャンスにチャレンジできるんじゃない？」ってことがあれば教えてください。

▼織田：この企画が売れるよとか、こうしたほうがいいよってことではなくて、やっぱりお客さんの声をダイレクトに届けることが一番、生産者さんに響いています。うちでは、お客さんにアンケートを取ったり、食べた方の口コミがあったりするので、どんどん蓄積されていって、すごくいい声、悪い声もたくさん寄せられるんですね。そういったものを、包み隠さず生産者さんにお見せしています。それが1年の成績表のようになっていまして、やる気というかモチベーションにつながっているかなと思います。

▼田中：変われる生産者の特徴とか共通点て何かありますか。

▼織田：良い物を届ける方は毎年、リピーターになってどんどんお友だちに送ったり親戚に送ったりっていうのが広がっていきます。インターネットでも密にコミュニケーションを取るってところが重要かなと思います。

▼田中：そういうのに、きちんとコミットしてくれる、一緒になってやってくれる生産者が長く続くんですかね。取り組みとしては。

▼織田：お客さんに「おいしい」って思ってもらいたいって気持ちが強い方と一緒に取り組んでいると、私たちもすごく張り合いがあって、どんどん改善して良くなっていけるので楽しいなと思います。

▼田中：ありがとうございます。菅沼さんの農家の所得向上ってどうですか。

▼菅沼：自分の地域では、果樹と野菜の混合農業が主ですが、自分はそこに一つの答えを見出しています。リスクヘッジとして、いろんな作物の知識を蓄えておくってことは農家の所得向上にすごく足がかりになるなと思っています。トウモロコシ・スモモ・ナスの3品目を主軸にしながら別の作物もいろいろ扱っている中で、自分の強みは特にナスとスモモです。自分の長所は伸ばしつつも、別の作物でいろいろな方にPRもできますし、自分の持っている販路に関しても、いろんな魅力配信ができる。そこに対していろんな可能性が生まれて、販路もたくさん持っていると、またそれもリスクヘッジになる。1カ所だけに卸していると、そこが少し転覆した時に、自分の経営もまとめて転覆しちゃうっていうこともある中で、そういった多様性みたいなところが自分の中でどんどん生み出せていけると所得向上につながっていくのかなって思っています。

▼田中：ありがとうございます。よく農家とか、地域で出る話題としては「作るのはできるんだけど売ることができない」というのがよくありますよね。菅沼さんは今6年目。1年目から時系列に、取引先がどういうふうに変化してきたか教えてもらっても大丈夫ですか。

▼菅沼：1年目は、研修先の農家さんのノウハウを全て自分にトレースしようと思って活動してましたので、100%ほぼ農協さんに系統出荷って形で、どれだけ自分ができるのかっていうことをやりました。2年・3年目あたりから地元の直売所や、仲間

が自分で野菜を取り扱うような仕事を始めました。当初まだあんまり浸透してなかったECサイトの直販も少しやってみたのですが、ECサイトは自分に向いてなかったので、3年・4年目は八百屋さんや飲食店さんの取り引きを少しずつ伸ばしていきました。5年・6年目は、地元のスーパーさんにも少しずつ卸しながらして、今はJAさんの系統出荷、地元の直売所、都内の八百屋さん、最後地元のスーパーという形で広がってきています。

▼田中：年々広がってくる中で、リスクヘッジにもなりバランスも良くなり、所得向上って視点から大きな変化がありましたか。

▼菅沼：やはり系統出荷だと自分で価格を決められないという弱点があります。自分の生産技術はどんどん伸びていって、品質が良くなっても、地域、別の産地で物がたくさん取れてしまうと安くなってしまう。自分のいい物も安く買いたたかれてしまうっていうのも目の当たりにしてきた中で、自分で販路を持っていると、自分の思った中で価格が決められます。まずかったら「この価格じゃなくて、この価格にしてくれ」って言われますが、良かったら、その分だけ一つあたりの所得が上がってくっていうのはすごく大きな、自分の中で少しずつ積み上がってきているものだなと思っています。



▼田中：私はちょっと逆の意見も持っていて、サラダボウルグループって、兵庫なんかは農協さんにも出資をいただいて一緒にやっているんですね。自分でできる人は自分で売ったほうが、例えば市場に出すよりはいいかもしれないけれど、多くの人は、「ちゃんと農協に出して市場に出したほうが自分で売るよりいい値段になるんじゃないの？」って思っているほうなんですよね。地域を支えているとか、維持という意味で、農協とか系統出荷って、ちゃんと意味があって、歴史の中で作られてきているんだなって思っているんですよね。個人的には、菅沼さんとか僕みたいな変わり者で、人の言うことを聞けない人に残された最後の仕事が農業だから、自分たちでやりたいように売ってみたり、自分勝手に何かをするのが許されてる人たちが自由にできる仕事でもあるのかなと。だから、系統がいいとか、自分たちが売るのがいいとかではなく、こういう選択肢がたくさん出てきたのもそれこそ農業に多様性が生れてきたと思うんですよね。自分の意思で決められるようになってきた、自分の意思でチャレンジができる舞台になってきたというのは、農業のダイナミックさにつながってるなってすごく思います。

▼菅沼：系統出荷が、実はまだ収益の6割・7割くらいを占めています。作ったものを作っただけ扱ってくれるという、すごい大きな強みが。特にナスなんて1日何百キロ出しているんだっていうくらい。それを自分でさばくってなると、とてもじゃないけど厳しいので、そこはすごく新しく農業を始める人にとっても強みになるなと思っています。

▼田中：山梨の甲府や西八代のナスを売る力はすごいと思いますよ。自分で売るより絶対高く売ってくれますよね。やっぱりそれだけ地域のブランドになっていて、長い時間かかって作ってきてくれてるじゃないですか。技術なんかも、例えば菅沼さんがお世話になった師匠も、その前の人たちから受け継がれていますもんね。

▼菅沼：その人たちが何万、何十万という箱数を出してきた中で培われてきた信頼だと思います。

▼田中：村上さんから見て、この農業者の所得向上とか、もしくは農業者だけじゃなくてもいいですが、地域の食に携わる人って、所得向上っていうのが皆共通の課題じゃないですか。どんなふうに見えますか。

▼村上：農家さんに作っていただいた物に対して正当な値段が付いていないというところが少しあるかなと思います。天候等で数量が少なくなった時に、野菜の価格が上がるというニュースをテレビで目にするんですが、それはもう当然のことで、もちろん買う側にすれば安いほうが助かるんですけど、作っていただいた農産物に対する評価ができていないというところは大きな問題だと思っています。なんでその値段が付いているのかとか、どういったストーリーがあってこの農産物が作られているのかとか。私たちの活動の中に農業体験というものもあって、ただ種を蒔いて収穫するだけではなく、どんな作業があって、どんな苦労があって、最後にこういう物ができたんだっていうストーリー的なところを私たちがお伝えすることで正当な価格が付き、農家さんの収入向上につながれば良いと思っています。

▼田中：ありがとうございます。個人的には日本の農産物って、めちゃめちゃ高いと思ってるんですよね。世界と比べて。例えば、トマトでいうとヨーロッパの価格の3倍とか5倍するんですよ。それに比べて、総じて食そのものが安いと思っているんですよ。ランチでも1食1,500円、2,000円するのってヨーロッパでもアメリカでもけっこう当たり前じゃないですか。それに比べて、例えば500円でラーメン食べられたらよくないと思うんですよね。でも、パスタは1,500円とかじゃないですか。いろいろな食が、日本って安いなって思うんですよね。いろんな企業が努力した結果だとは理解していますけれども。やっぱり食の価値が少し低いのかなというのは個人的に感じていてですね、そこにもっともっと向上するような価値観が生まれたらいいなぁなんて思いながら。その食の価格の相対的な低さに比べたら、農産物はまだ高いほうにあって、ありがたいななんて思いながら私は農業に携わっています。もっともっと食の価値を上げていきたいですよね。

▼**村上**：はい。人生において食べることは生きることだと思うので、絶対なくなることではないのに、皆さん他にお金を使うのかな。食にもうちょっと使うような時代になればいいかなと思いますね。

▼**田中**：ありがとうございます。このパートのまとめとして、農業にはいろいろな側面があるということですね。農業経営的な話であるとか、社会の中での価値も出ましたね。産業政策と地域政策みたいな言葉を使われることもあるんですが、例えば農業経営をどうしていくんだ、地域の産業としての農業をどうしていくんだ、という側面もあれば、片方で、今、織田さん、村上さんの背景にあるように、地域の景観をどう守る、とかそういうことも非常に重要ですよね。近年、災害が本当に増えてきて、今まででは考えられないような雨の降り方や、考えられない時期に雪が降ったり、台風が来たり。地域を守っていく一つの役割を担っているのも農業だと思います。いろんな側面がある中で、農業をどういうふうに地域にとって価値ある産業にしてくのかっていうのは、共通の課題としてこれからも考えていきたいなと思います。

最後に、今後の活動の目標として、10年後とか20年後、皆さんがどんな姿を見ているのかを、ぜひ教えてください。

▼**織田**：うちで一番優先する課題は、食品ロスの軽減です。徐々に有効活用できてきていますが、いずれゼロを目指して力を入れていきたい分野です。もう一つは食育についてですね。私は２人の息子を育てながら、この仕事をしているので、地元の農業への理解とか愛着とか誇りが生まれるような食育活動を目指してやっています。先ほど田中さんが言ったようにSDGsということも言われているので、作る責任、使う責任で、私たちが責任をもって生産者さんと協力しながら取り組んでいきたいと思っています。

▼**田中**：ありがとうございます。食育については、次のところでも話をさせていただくんですけども、子どもたちに一番、何を伝えたいですか。特に自分の子どもたち。

▼**織田**：食べることの大切さということですかね。それが、今住んでいる地域、見回せば畑が広がっているという豊かな地域に育っていることを誇りに感じてほしいなと思っています。

▼**田中**：難しいですよね、誇りに感じてもらうって。どういうふうにしたら、結果として誇りに感じるのか。「誇りに感じなさい」って言っても感じるものじゃないので。

▼**織田**：そうなんですよ。それすごく難しい。私は、私が毎日、生産者さんと話をして、畑に通ってというのを息子たちは見ているはずなのに、お兄ちゃんのほうは実はフルーツが食べられない、食卓に出しても食べないんです。食って、一番生きる中で重要なことなのに、伝えていくことが難しいなと思っていて。下の息子のクラスでは、農業に関わってる人が一人もいないっていうのが出てきているので。身近に畑はあるけれど、なかなか触れ合う機会が無いというところを食育という形で広げていければなと思っています。

▼**田中**：きっと、大人になって自分でお金を出してフルーツを買う時に分かりますね。彼女ができて「おいしい、おいしい」って食べているのを見て「おいしいんだ」って初めて分かりますね（笑）。菅沼さん、お願いします。

▼**菅沼**：今後の活動の目標としては、やっぱり就農サポートをどういった形で進めていこうか、常々考えています。一番目に就農した方からどんどん年齢が下がってきてるんですね。自分の年齢に近づいてきているんですけども。一番最初の方が40代。今、私が30歳なんで、もう32～33歳まで下がってきています。学生の新卒と女性の方が地域に入らないっていうのは、学生や今まで移住した人を巻き込んで少し話し合いをして、この地域のためにも農業のためにも、どういったらそういうところが解決できるか考えていこうかと思っています。

▼**田中**：やっぱり、菅沼さんの10年後、20年後も聞きますかね。教えてください。

▼**菅沼**：自分自身はですね、これはあまり地域の方にも話してない秘密の話でもあるんですけど、もう少し自分の活動をする地域を増やしたいと思っています。山梨県も非常に魅力的な県ですが、もう少し離れて、季節や作物をずらせば、他のところでも農業できるなと思っていまして。自分の農業の地域の可能性を広げようかと思っています。

もう一つ、今スモモをやっている方がかなり周りで減ってきていまして、逆にこれチャンスだなって思っていて、「自分はスモモ農家だ」って言えるような10年・20年後になっていたらなと思います。

▼**田中**：農業の課題とか地域の課題の一つに、行政の区割りが強すぎるっていうのもあると思うんですよ。これってどうしても、補助金を含めたいろいろな政策の背景はあると思うんですが、その地域の中で何かを完結しようとしすぎる側面が、どうしても出てきてしまいます。今これだけグローバルになる中で、地域を飛び越えて連携することで、そこの地域が抱えている課題が解決できることがいっぱいあると思います。農業の課題が農業界だけでは解決できない、地域の課題が、その地域だけでは解決できないなって思っているので、もっとオープンになるといいですよね。いつの日か、菅沼さんのいる地域の人たちが「他のところにも行くのか」って言うんじゃなくて、頑張って活躍して、「帰って来てここも良くしてくれ」って言えるような地域になるとかっこいいですね。

▼**菅沼**：そうですね。そういうふうな地域性になっていってほしいし、自分自身もそういった人間になれたらいいなと思っています。

▼**田中**：かっこいいですね。ぜひ頑張ってください。村上さんは10年後、20年後いかがでしょう。

▼**村上**：10年後ってところで。食育についてはいろいろなイベントをやってきました。対面のイベントとなると、限られた地域の子どもたちだけになります。そうではなくて、オンラインなどを視野に入れながら、山梨だけではなく都内はもちろん全国の方々に、山梨県の農産物の魅力を伝えていけるような何かができればいいかなと思っています。農産物がどういった形で育っているのか知らないお子さんもたくさんいると思うので、そういった子どもたちにもたくさん伝えていければいいかな。あと菅沼さんがスモモとおっしゃっていたんですが、個人的に農産物の発信をしていると、スモモのこと、全く知らない全国の方、とても多いです。「スモモって何？スモモって酸っぱいだけでしょ」って方がすごく多くて。個人的にスモモがとても好きなのと、他の県にあまりないスモモの良さを私が伝えるくらいの気持ちで活動しています。スモモについては、私もぜひ、全国に発信していきたいです。

▼**田中**：ありがとうございます。これまでの活動と10年後の村上さんの活動って、どんなところが違っていますかね？どんなふうに変わっているでしょうね？きっと根っこの「こんなこと伝えたい」とか、「こんなことしたい」っていうのは変わらないじゃないですか。もしかしたら、もっと大きくなっているかもしれないですよね。見える活動としたら、何が変わっているって思いますか。

▼**村上**：難しいですが、近所だけでなく、全国からその体験のために人を呼び寄せたりとか、そういったことがもっとできるといいかなと思っていますね。私は生粋の山梨っ子なので、視野はかなり狭いと思います。ただ、県外の友人に話を聞くと、山梨がどれだけ恵まれているのかがすごく分かるので、それを「山梨はこれが普通なんだよ。皆さん知らないの？」ってどんどん伝えていけるようになればいいかなって思っています。

▼**田中**：追加で皆さんにお伺いしたいんですけど、女性の役割とか、女性が活躍できる場を増やすにはどうしたらいいか。織田さんから教えてもらってもいいですか。

▼**織田**：私がこちらに移住してきた20年前に比べると、昔とは比較できないほど、ずっとずっと女性が働きやすい環境になってきていて、すごく環境が良くなってきていると思うんです。女性が声を上げやすいような。特にうちの会社は女性ばかりの会社なので、とっても明るいというか、あまり大変さを感じていません。現場で働きにくさとか体力ハンデとかってところは問題があるんですけれども、発信しやすさとか、ものづくりにおいては、すごくやりやすい環境が、特に県内の農業は整っているかなと思っています。なので、これからは多様性ですね。女性の枠もそうですが、いろんな方たち、年齢とかハンディキャップとかの多様性についても広がっていけるような農業にできたらいいなって思っています。すでにハンディキャップのある方が農作業しやすいような畑作りをしている方も仲間にいますし、うちでは加工品などは、福祉施設さんにお願いして作ってもらったりっていうところで、連携はすごく進めています。

▼**田中**：ありがとうございます。私たちの農業なんかは施設園芸なので、ハウスの中はやりやすいんですよね。今、支援学校とか、いろいろな施設の人たちが、毎日決まった時間に来てやってもらったりして。いろんな方々が職場にいると、皆の配慮とか気遣いのレベルも上がったり、より人間らしい職場になるんだなと思います。村上さんはどうですか。

▼**村上**：正直私、女性が農業に対して働きにくいってことをあんまり感じていなかったんです。トイレの面とか、そういったところはありますが、作業的にも女性のほうがいろんなことが丁寧にできるんじゃないかなと考えているので。祖父母がモモ農園にお手伝いに行っていたんですが、祖父よりは祖母のほうが働いていたし。

▼**田中**：どの農家でもそうですよね。ちょっとそこが過度な働き方になると、「絶対農家には嫁にいくな」ってなるじゃないですか。

▼**村上**：そうです。それはすごく言われていました。

▼**田中**：農村地域に住んで、モモやブドウを食べきれないくらい貰うのはいいけど、農家にはいくなって、この環境どう変えるかってことですよね。

▼**村上**：忙しい時期が終わると、祖母はモモの梱包を手伝ったり、今では6次化って言われていますが、その当時から祖母はやっていて、販売はしていませんでしたが、そういうことをやっていたので。

▼**田中**：菅沼さんにもう一回、特に新規就農を受け入れていったり、いろいろな視点で今農業をしていると思うんですけど、農業を、もしくは地域を、こんなふうに変えてったらいいんじゃないかっていうのがあれば、教えてもらえますか。

▼**菅沼**：今の時世に合わせた話なんですけども、コロナ禍ってことで、フルリモートで仕事する方も増えてきて、リモートで仕事をする傍ら、農業もやってみたいって相談が増えてきたんですね。そういうのって、昔ながらの方の考えからすれば、「そんな甘ったれた考えだと農業できんぞ」って思うかもしれないですが、今の時代に合わせていくといいますか、そういう選択肢も大いにありかなと思っています。兼業する中で、農業も自分のできる範囲で極めていくっていう、この流れに地域も少しずつ溶け込んでいって、若者拒絶症みたいなものを少しずつ減らしていくことが今後の農村の一つのあり方ではないかと思っています。

▼**田中**：ありがとうございます。皆さんと特に農業っていうテーマで話をさせていただきました。農業が多面的な形持っていますし、担っていかなきゃならない部分があるんですね。そのためには、継続をしなきゃいけないし、ましてや地域の

お荷物になることなく地域を引っ張ってけるような、産業としても地域政策の側面でも重要なんじゃないかなと思います。スマート農業みたいな、例えばAIロボティクスみたいのがどんどん入ってきて、これからもっと可能性が広がるでしょうし、一人ひとりができることが増えるんだと思います。男だから、女だからって境目ももっとなくなるんでしょうね。女性の活躍できる場、発想であるとか、いろいろ生活の中から社会的なニーズに応えるようなことを、より推進してくのも女性なんだと思うんですよね。もっともっと農業が多様性をもって地域を牽引できる、そんな産業になれたらいいですね。皆さんそれぞれ違う立場ですけども、引き続き一緒に頑張っていきましょう。第1部についてはこれで終わりにしたいと思います。皆さん、ありがとうございました。

【第2部】



▼田中：これから第2部を始めます。サラダボウルという農業生産法人を経営しています、田中です。第7分科会の分野は食育・農業です。大きなテーマが「未来へつなげる『農業・食』の魅力」、副題は「守り引き継ぐ山梨の宝」と題されています。第1部では農業を取り上げ、この第2部では食育を主なテーマにしていきたいと思いますので、よろしくお願い致します。

▼織田：皆さん、こんにちは。株式会社ヴァインヤードの織田と申します。山梨の果樹を中心にインターネットで紹介する会社を運営しています。今日は果樹農家さんとの取り組みについてや、そこで感じた魅力や課題点などをお話しさせていただければと思います。よろしくお願いします。



▼田中：ありがとうございます。この写真すごくきれいですね。

▼織田：緑がいっぱいで、子育てするにはすごくいい環境です。

▼田中：神奈川から来た時はご不便も感じましたか。

▼織田：まず村に入るのが大変でした。変な噂を流されたり。でも、今は関係性が近いところが良いと思っています。

▼田中：そうやって地域に溶け込んでいくことに、最初は織田さんの中で反発もあったと思いますが、どういうふうに処理するか、受け入れていくかが大事ですね。



▼織田：そうですね。私はそういうことも面白がっていたので、日々、起きるいろんな事件も地域柄として楽しみながら溶け込んでいけたかと思います。

▼田中：ありがとうございます。では次、菅沼さんお願いします。

▼菅沼：菅沼です。東京農業大学を2015年に卒業して、すぐに山梨県甲府市に移住。研修を経て、移住農家として独立しました。現在、移住7年目、農家6年目になります。いろいろチャレンジしている視点でお話しできればと思います。

▼田中：農業は自分に合うかなって飛び込んで来られた。しかも新卒って珍しいですよね。6年やってみてどうでしょう。ちなみに、内定もらってたのはどんな会社だったんですか。



▼菅沼：自分の天職だと思っています。今はまだ。内定をもらったのは卸業者と外食業者ですが、2・3年で辞めていたかもしれません。結局、畑に吸い寄せられていたかなって。

▼田中：一番つらかったこととか、乗り越えたなってことは、ありますか。

▼菅沼：社会人を経験してなかったので、大人との付き合い方を知らず、自分を大人と見られてしまうことのギャップを埋めるのが大変でした。農家さんたちに怒られながら一つひとつ覚えました。

▼田中：ありがとうございます。次に村上さん、自己紹介をお願いします。

▼村上：野菜ソムリエプロの村上です。

▼田中：この写真、甲府市にこんなにたくさん野菜ソムリエがいるんですね。皆さん、職業はさまざまですか。



▼村上：多くは、農家さんや料理教室の先生など食に関係している人ですね。

▼田中：村上さんの活動のモチベーションは何ですか。

▼村上：最初は、本当に食べることが好きなのと、実は主人が飲食店をやっているので、いずれ役に立つかもというのがありました。あと、うちには子どもがいないので、母から学んだことをどこかに伝えていきたいという思いもありました。偶然ですが、資格を取って活動をする中で、自然に子どもたちに食育を伝える場面ができる流れになりました。

▼田中：第7分科会の大きなテーマが「未来へつなげる『農業・食』の魅力」ということですが、伝えるのはすごく難しいですよね。なんでこんなに難しいんですかね。



▼**村上**：育った環境もあると思いますが、母は忙しかったのに、とにかく食事に関して「食べることは生きること」と大切にしてくれました。大変でも、食のことを伝えていきたいという気持ちは強いです。

▼**田中**：第1部で織田さんも、「せっかくおいしい果物を出しても子どもたちがちっとも…」と言っていましたが、伝える難しさを感じているのではないですか。

▼**織田**：核家族になってきて、おじいちゃん・おばあちゃんは果物を作っているけれど、お父さん・お母さんは作っていない。仕事もきつい。そういうことで、畑が途切れてしまうこともあるかと思います。

▼**田中**：織田さんは、あまり知られてない農産物や良い物を直接伝える仕事をしていますよね。その立場から、村上さんの活動はどう思われますか。

▼**織田**：素晴らしいと思います。古来からある物を後世に伝えていくことは大切です。作りやすく、大量生産できるものばかりが流通してしまいますが、山梨ならではの品種をつないでいかなければならないので、今後も続けていきたいと思います。

▼**田中**：2人とも、伝えることにご苦労されてきた経験もあると思います。一番苦労したのはどんなことですか。どういうふうに乗り越えましたか。それは農家の人や食に携わる人のヒントにもなると思うので。

▼**織田**：こちらに移住してきて知らないことだらけだったので、どの果物も皆に広めていきたいと思いました。でも、自分が感激して「これ、食べてもらいたい」と思っても、手に届かなければなかなか伝わりません。運営する店舗は「甲斐国物語」という名前ですが、「甲斐の国＝山梨」なんですけど、作り手さんのストーリーを一緒に載せて、写真たっぷりで、生産者さんの顔をたくさん載せて伝えています。

▼**村上**：一番苦労するのは、お子さん向けに多いのですが、自分は大好きでも、それが伝わらないことです。ストーリーもお子さんには伝わりにくく、味そのものや香りになります。ただ食べるだけではなく、皆で食べるとか、皆で共有することで伝わることもあるのかなと思います。自分が当たり前だと思っていることが、当たり前でなかったりするので難しいですね。

▼**田中**：農家あるあるですが、「うちのトマトは一番うまい」と言っていても、他のトマトを食べたことが無い。これ、どうやったら解決できますか。

▼**村上**：同じ物でも、おいしいと感じるかどうかはそれぞれ違うじゃないですか。最近、農産物は「甘ければ偉い」みたいな流れがあって。特にトマトはそういう傾向がかなり強いと思うのですが、甘ければ良いわけでもなくて、酸味とのバランスも大事で、そういったところをうまく伝えることですね。自分のところが一番おいしいというのは、おごりもあるかもしれないので、他のものも食べる必要はあると思います。

▼**田中**：菅沼さんが感じる農業の課題は。

▼**菅沼**：良くも悪くも全て自己責任ですね。自分が頑張っただけいろいろ返ってきますが、さぼった分は収益にも関係します。勉強・不勉強も作物に返ってきます。販売努力も、すれば拡大しますが、やり方が分からないと言っているうちに、置いて行かれてしまうのがシビアだと思います。あと力仕事が多いのも課題だと思っています。

▼**田中**：織田さんだったら、菅沼さんの農産物をどう売り出しますか。そこに地域や農家の課題解決のヒントがあるように思います。

▼**織田**：やっぱり若さ。移住して来てチャレンジするというチャレンジ精神が絶対、味に乗ってくると思っているので、そこがまず魅力だから、そこを打ち出します。50年やっているベテランさんが一番おいしいということはありません。年数や経験だけじゃなく、興味・探求心がある方や、新規参入して1・2年目の方がすごくおいしいものを作ることもあります。同じ地域で作っていても、個性が出るのも農業の魅力だと思っています。

▼**田中**：自分の考え方や生き方がそのまま農産物に出ることってあると思います。織田さん、菅沼さんのキャッチコピーを考えてもらってもいいですか。その間に村上さん、野菜ソムリエプロとして、菅沼さんをどう周りに伝えますか。

▼**村上**：画面上から人柄の良さが伝わるので、それを全面に出して伝えていきたいですね。

▼**田中**：菅沼さんは自分をどんなふうに売り出しているんですか。

▼**菅沼**　：自分のキャッチコピーは「有形の幸せから無形の幸せを拡散する」です。いい生産物が採れた時、自分がすごく幸せなことが有形の幸せだとしたら、それを出荷して消費者の食卓においしさ、喜びとして幸せが配れるというのが、作物を作るうえでのモチベーションになっているので、そういうことができればと思ってやっています。

▼**織田**：素晴らしいキャッチコピーですが、少し固いですかね。私が考えるとしたら「幸せな食卓届けます」とかですね。

▼**田中**：菅沼さんの背景に、地域をつくるとか、幸せをつくるって透けて見えているんですかね。

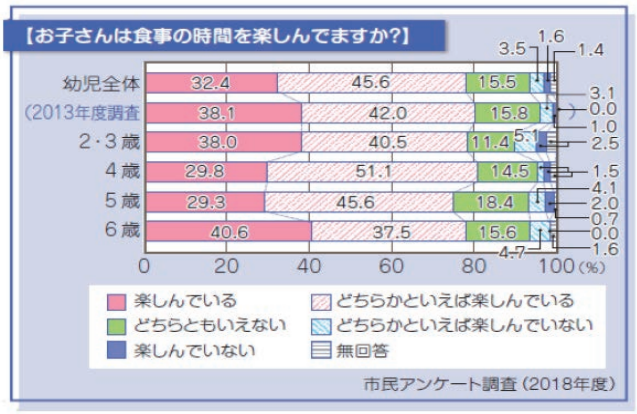
▼**織田**：作物を受け取って食べてる方の幸せを想像しながら作っていると感じます。

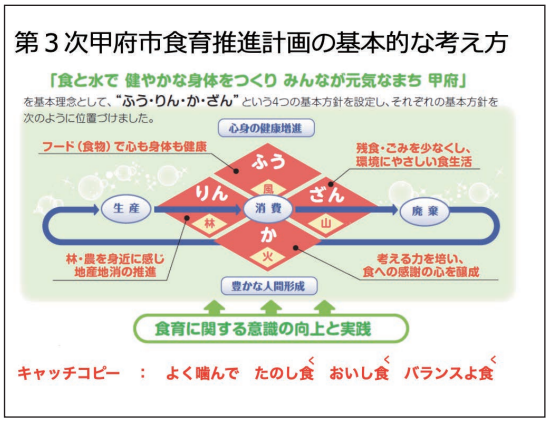
▼**田中**：今の会話で、売ることは苦手という農家の課題が見えた気もします。そういう意味でも、いろんな人と連携して、自分たちが持っている課題を解決していくと、より幸せな形に近づくのかもしれないですね。作ること、届けること、役割の違いがあると思うので。第1部で織田さんからはダイバーシティの話が出ましたが、女性とかハンディキャップを持った方だけ

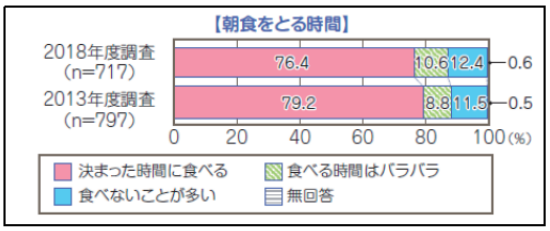
でなく、生産者と織田さんのように伝える方、村上さんのように広める方、そこを行政がしっかり支えるとかですね。そういった多様性の中で、新しい農業のカタチがつくられてきているかもしれませんね。専門性を高めなければいけないということと、フレキシブルにいろんなことをマルチタスクでできなければならないなと感じました。ここからは、食育というところで、多様性とか、若手がどう魅力を感じて地域に入って来るのかも関わってくると思います。食育という活動をとおして会話を続けていきたいと思います。ここで、甲府市の食育推進計画に基づいた概要の映像を見てみましょう。

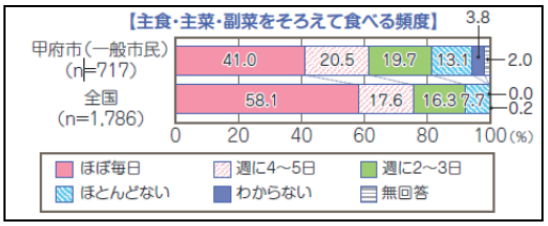
【甲府市福祉保健部食育担当による映像説明】

甲府市の食育推進計画は心身の健康増進と豊かな人間形成の側面から、食料の生産から消費、廃棄に至るまでの取り組みを武田信玄公の軍旗に描かれている「風林火山」になぞらえて整理し、個人や家庭・地域・教育機関・生産者・企業・事業所などの関係機関および行政が、それぞれの役割に応じて取り組みを充実させていくとともに、互いに連携・協働し、取り組みを進めてまいりました。第３次計画策定にあたり実施した市民アンケートにおいて、保護者の方にお子さんは食事の時間を楽しんでいるかを聞いたところ、「楽しんでいる」「どちらかといえば楽しんでいる」と答えた方が５年前に比べ減少。また、18歳以上の市民に聞いた朝食についての問いでは、「食べないことが多い」と回答した方が、５年前に比べ増加。特に20～40歳代で朝食欠食率が高い傾向にあるなど、食からの健康課題がいくつか明確になりました。











そこで、これらをもとに明確になった課題に対し、４つの重点的な取り組みを新たに位置づけました。子どもの健やかな心と体を育むために、何をどのくらい食べるかとともに、いつ、誰と食べるかが重要であり、食に関する多くの体験を積み重ねることで心地よい食卓を作り出すことができます。食は毎日行う営みですので、家庭をはじめとして、さまざまな関係機関が発育・発達段階に応じ、豊かな食体験を積み重ねていけるように個々の取り組みを充実させ、連携していくことが食事を楽しむ環境につながると考えています。また、自分の体験に対する正しい認識を子どものころから培うことは、本人の健康づくりはもとより、次世代を育むためにも重要です。そして朝食の栄養バランスは、糖尿病などの生活習慣病やフレイル、免疫力と関係がある筋肉を減少させないためにも重要であるため、あらゆる機会を通じて朝食の役割を伝える取り組みを行っています。これからも生涯を通じた食育の推進に取り組んでまいります。主なイベントとしては、令和元年には「第14回食育推進全国大会inやまなし」を開催したほか、毎年６月、「甲府食育フェスタ」を開催しています。　　～以上～

▼田中：食べることは本当に楽しく幸せになることですが、どこからか難しい側面も出てきてしまっています。皆さんが「食育って何ですか？なぜ大事なんですか？」と聞かれたら、どんな回答になりますか。

▼織田：生きていくうえで一番大事なことなのに、だんだんおろそかになっていますね。私たちの世代は食育なんてそんなに

聞かなかったと思うのですが。意識して食を伝えていかないと、伝わらなくなってきたということでしょうか。

▼村上：昔は大家族で、おじいちゃん・おばあちゃんから自然と身についてきたことが、核家族が増えてきたこともあって、そういう機会が少なくなっていると感じます。

▼**菅沼**：生きることに対して、食べることのウエイトは大きいと思います。それが楽しかったり豊かでなかったら、すごくつまらない人生です。そういうところを伝承していかなければならなくなってしまったのかなと思います。

▼**田中**：個人的に農業を始めて思ったのが、飯がうまいなぁってことでした。ここからは、皆さんに食育の取り組みをご紹介いただきます。



▼**織田**：これは地元のモモ農家さんと取り組んだ食育の写真で、近くの小学校から、子どもたちが並んでモモ畑に入ってくるところです。若い生産者さんがグループを組んで食育部を立ち上げました。山梨市加納岩小学校3年生に向けて作ったプログラムで、袋掛けとか収穫をする活動を行っています。3日間実施し、まず座学でモモの生育や地域のことを話した後、畑でまだ赤ちゃんの小さなモモに袋掛けをして、その1カ月後に収穫をします。





草刈り機や昇降機に乗って生産者がやって来て、子どもたちが盛り上がりました。私の息子も3年生の時に参加しました。自分が袋掛けをして、ぱんぱんに大きくなったモモを畑でかじるという体験です。収穫経験をして、農業の魅力を知る良い経験になりました。



こちらは保育園の食育の様子です。地元の保育園にロス予備軍の規格外のブドウを給食として提供しています。同じ畑で取れるのに、形が悪いと売れなくなってしまうブドウをどうすればおいしく食べられるのかなってことを一緒に考えました。子どもたちが一生懸命考えて、「冷凍してちょっとずつ食べる」「お母さんと一緒にケーキにする」などと答えてくれました。この保育園は日ごろからサスティナブルについての活動をしているので、SDGsのスライドを見せても子どもたちの反応が良かったです。また、東京の銀座「WEST」さんにご協力していただき、動画でシェフがはねだしのブドウを使っておいしいパフェやケーキを作るところを見せてもらいました。今後、シェフを招いて、園児たちと一緒に作る機会を設けられればいいと思います。







6次化のことですが、うちは加工もしていて、ブドウだったらピューレやドライにしてスイーツにアップサイクルし、商品にしています。写真（左）はブドウ大福で、生のブドウを大福で包んで急速冷凍し販売しています。写真（中央）はアイスクリーム。シャインマスカットをピューレにしたものと、黒ブドウをラム酒に漬けてラムレーズンアイスをギフトにしたものです。写真（右）は、15年前から加工をお願いしている福祉施設さんで作ってもらったレーズンを使って、地元のパン屋さんと作ったシュトーレンで、好評です。

▼**田中**：お腹がすいてきました。食べたいです。得た利益から社会貢献活動をしようというCSRと、活動そのものが社会に貢献して価値をつくり出しているCSVというものがありますが、まさに6次化という事業活動そのものが社会に意義のあることだと思いました。リアルな形で地域に根差しながら、アップサイクルして、より良いものに作り変えていくことがすごくいいですね。そんな仕事をされていて羨ましいと思いました。菅沼さん、織田さんの活動を見て感想はいかがですか。

▼**菅沼**：はねだしというと少しネガティブなイメージありがますが、加工品はすごくおしゃれになっていて、ポジティブな思いで購入できるのがいいと思いました。

▼**田中**：6次化ってややもすると、農家が作り損ねたものを何とかお金にしてやろうという側面もあって、それだと良くないと思うんですよ。でも織田さんは、もともとの価値にきちんと上乗せしていっている。

▼**村上**：私たちの活動とも似ていると思いますが、はねだしの価値を理解して可能性を見出してくれているシェフが素晴らしいと思いました。お店だとどうしても、形がそろったもののほうが加工しやすいので。思いを伝えようとしているシェフがすばらしいです。

▼**田中**：農家や生産物を加工・販売する人はもっと自信を持って「儲かっていますよ」と言っていいと思う。価値をつくり出しているのですから。織田さん、一つの価値の測り方として価格・利益があると思いますが、そこらへんはどう考えていらっしゃいますか。

▼**織田**：私は来たばかりの時、価格設定や価値が実際のものよりも低く見られていると感じたので、先ほどのはねだしもそうですが、生産物をアップサイクルしてより良いものに作り変えることで、価値を上げ、生産者さんの収入を上げ、私たちの売上も上がるということを進めていきたいです。地元のものにキラキラとした要素を添えていくことを大切にしています。

▼**田中**：併せてきちんと食育も伝えていることで、商品のコンセプトや裏側にある文化みたいなものになっているんですかね。

▼**織田**：そうですね、山梨独特の食文化も素晴らしいと思います。例えば、モモは柔らかいものがおいしいと思っていましたが、山梨では獲れたての固いモモを皮ごと食べるのがおいしいと言われていることなど、若い人たちにも伝えていきたいです。

▼**田中**：モモの食べ方は山梨県人の自慢ですよね。この分科会の一つのテーマでもある地域への愛着が食とすごくつながっているんだなと感じました。次に菅沼さん、活動を紹介してください。



▼**菅沼**：私は就農者を増やすために受け入れをしている側面を重視していましたが、最近、学生や社会人にも食育ってすごく必要だと思い始めました。畑に来てもらって、農家の生活や、そこからどうやって作物ができるかを新鮮に感じ、感動してくれている様子を見ると、自分の活動が食育にもつながっていると感じます。学生たちのミーティングでは、「生で食べたトウモロコシにびっくりした」といった話も出て、自分にとっては当たり前でも、とても新鮮に感じてくれていることを知りました。古民家に宿泊してもらい、自分たちで収穫したものをその日に食べるので、皆さん「おいしい」ってすごく食べてくれます。この感動は食育に通じるものがあると思い、最近、すごく重視し始めていて、必ず自分の畑で採れたものを食べてもらうようにしています。料理の中で、野菜は鮮度が違うと味が違うという話をたくさんしたり。社会人の人からは、普段忙しかったり、野菜が高かったりして、全然食べてないという話をよく聞きます。農業の現場は、食との距離が近くなるんだと感じます。

▼**田中**：やっぱり体験があると、どこかに記憶のフックがあって、いつでも呼び出されるんでしょうね。

▼**菅沼**：山梨は都内からも近いので、「また野菜食べに来ました」って来てくれる人もいます。







写真（左）は、学生が自主的に作った加工品です。きっかけはスモモを食べて感動したこと。完熟のおいしさを伝えたいと、学生たちが自分の畑のはねだしを使い、商品開発をして、都内のマルシェや大学の学祭で販売しています。自分たちの食育が、他の人の食育にもつながるのかなと思います。

写真（右）は、私が最初に受け入れた就農希望者です。今、就農５年目で、私と同じ地域で活き活きと農作業をしています。この方も私が作ったナスやスモモのおいしさに笑顔になってくれて、そういうものを作りたいと移住してくれたので、食育は地域に還元される活動でもあると思っています。

▼**村上**：農家さんでしかできない活動ですね。

▼**織田**：移住者ならではの、よそから入ってくる人の視点で案内できるのが大きいと思います。

▼**田中**：農家を代々引き継いでいる人には影を感じることもありますが、菅沼さんには、そういうのはあんまり感じないですね。こうした取り組みを前向きにいろんな人たちに伝えていくことは大きな価値を生み出していると思います。では、村上さんの発表をお願いします。









▼**村上**：私たちは地産地消の推進、農産物のPR、食育活動を柱に、さまざまな活動を行っています。活動例としては、まず「子ども向け産地訪問＋α」です。活動にはいつも「＋α」を意識していて、この場合は産地を訪問するだけでなく、採れたてのおいしさをそのまま味わってもらうことが＋αだと考えています。栽培現場に触れることで、作り手の思いや苦労を聞くことができたり、売り場では見られない農産物の姿に出会えたりすることもあります。トウモロコシの種まき、採ったブドウでのパフェ作りの他、小松菜の花を見るなど、子どもたちが興味を示してくれます。自分たちが住むまちにある農産物の素晴らしさに触れ、地域に興味を持ち、新鮮なものを口にできるのは当たり前ではないということを知ってほしいという思いがあります。

また、「親子向けの料理教室＋α」では、ただ作って食べるだけでなく、食べ比べやクイズを盛り込み、食材や料理に興味を持ってもらうことを心がけています。地域の農産物の新しい魅力を見つけ、もっと好きになってほしい、作ることに興味を持ち、食べることを楽しんでほしいと思っています。

「大人向けの料理教室＋α」では、甲府ブランド「甲府之証（こうふのあかし）」に認定された農産物をメインにした料理教室を開催し、毎回、生産者にお越しいただき、その農産物に対する思いを伺ってから調理をしています。意外と地域の農産物を知らない人が多いので、普段の食卓に取り入れてほしいという思いもあります。

「ドリンク販売＋α」では、甲府市内で行われるイベントにて、旬の野菜や果物を使ったスムージーやスープの販売を実施

し、レシピを公開し、不足しがちな野菜や果物を日常に取り入れてもらう工夫をしています。普段、野菜を食べない子どもたちも、ドリンクにしたり、屋外という環境で飲んでくれることも多いです。地域の農産物を知り、積極的に食べてもらうことと、野菜や果物の旬を知ってもらうことが目的です。

「レシピ紹介＋α」では、珍しい農産物のレシピ紹介や使い慣れた食材の新しい食べ方などを提案しています。「食べること＝生きること」であり、それはどんな状況でもなくなりません。なので、なるべく手のかかるものは避け、気軽に食卓に取り入れていただけるようなレシピ作成を心がけています。食材の新しい魅力に気づいていただき、「作る」ことを負担にしないで楽しんでほしいと思います。

活動を続ける中で、課題も明らかになりました。産地と連携した活動が多く、生産者様の協力が必要ですが、農繁期と重なってしまうため、調整が困難という実情があります。また、コロナ禍でどのように進められるか模索中ですが、今後の展望としては、一度で完結せず、継続して行えるイベントにしたいです。剪定など農産物に密着する体験もできればと思います。また、こうふるふぁーむの活動を甲府市内から山梨県内にも広め、さらにはオンラインを使い全国にも拡大していきたいです。

▼田中：ありがとうございます。ソムリエさんらしい取り組みですね。食材が料理に変わり、価値が変わるのを見ると、食の厚みを感じます。

▼織田：こうふるふぁーむさんの取り組みは、全国に発信すると山梨全体のPRになると感じました。私も参加したいと思いましたし、コロナ禍で活動が制限されているなら、レシピのデータベースは素晴らしいので、そこを切り口にしていけばいいのかなと思います。うちにも教えていただいて、お客さんに広めていきたいです。

▼菅沼：食育っていう漢字を見ると難しそうですが、村上さんたちの活動はポップで楽しく、戸を叩いたらいつでも入れてくれるみたいな。子どもたちもすごい笑顔ですね。ハードルを下げると、食育ってこんなに楽しい活動になることが分かりました。

▼田中：最後、おいしいものが食べられるっていうだけで、これ以上ないゴールですよね。

▼村上：子どもたちは、親御さんも見たことがない笑顔をするそうで、お母さんたちが喜んでいるのを見てさらに達成感を感じます。

▼田中：普段は、早く食べなさい、残さないで、高いんだよ、とか、子どもなりにプレッシャーを掛けられているんでしょうね。食育ってすごく難しくて、答えもないんだけれど、皆すごく重要で価値があることだと思っているのではないでしょうか。一人ひとりの中にそれぞれの答えがあって、合わさった時に化学反応をするのかなと思います。

最後に、皆さんから食育に対する思いなどを発信していただき、第2部を終了させていただきたいと思います。

▼織田：食育は、楽しく学べる、ありがたくいただけることを皆で一緒に考えながら、豊かな食卓で幸せになることだと思いますし、そういったところを子どもたちに伝えていきたいと思います。

▼菅沼：子どものころは、自分が普段食べていたこと、食べていた時間が、新しいことを知ることでより楽しくなります。それは社会人になってからも同じで、食がおろそかになる中、畑に来ることで、食べることが楽しくなって帰っていく。人生の豊かさがプラスされていくのが食育なのかと思いました。

▼村上：食育は、恵まれた環境の尊さに気づくところで、皆さんの生活が豊かになるものかなと思います。

▼田中：ありがとうございます。やっぱり「豊かさ」とか「幸せ」が共通のワードだった気がしますね。第7分科会では食育と農業がテーマでしたが、産地が保全され、農業が魅力ある産業としてさらに発展していくというのが、将来の一つのカタチですし、農業を背景とした文化や景観が地域の資源として継承されていく。そこに食育の活動もリンクしてくるのでしょうね。そのうえで、地域の食を大切にして、それが地域の愛着へと変わっていく。今日の第1部、第2部をとおして、そんなことが感じられたかと思います。皆さま、長時間にわたりありがとうございました。またお会いできる日を楽しみにしております。

第7分科会：食育・農業

取組み方針

○農業経営の効率化（スマート農業の導入）



○ダイバーシティの取組み
○農産物の価値向上と収益性の向上
○規格外品の活用（食品ロスの軽減）・6次産業化
○食育の推進







第7分科会：食育・農業

未来の目指す姿



○産地が保全され、農業が魅力ある産業として、さらに発展
○農業を背景とした文化や景観等の地域資源の継承
○地域の食を大切にし、地域への愛着の醸成





パネルディスカッション

環境から考える地域の未来

～外国人住民・大学生が見つけた発見～

コーディネーター
安藤 勝洋
山梨県立大学
国際政策学部教授

第1部パネリスト
デイビット・エリス
山梨中央銀行業務アドバイザー

第1部パネリスト
デイビット・プルーカ
山梨県立大学
国際政策学部准教授

第2部パネリスト
田邉 晴香・中野 佐耶・西川 文野
山梨大学学生

第2部パネリスト
加賀美 里奈・風間 千弘・戸谷 梨乃
山梨県立大学学生





【第1部】



▼**安藤**：皆さま、こんにちは。この分科会は第8分科会の第1部ということになりまして、主に環境について考えていくセッションになります。主に外国人住民という、外国から来られて、山梨県に住んでいるお二方とお話をしていきます。この分科会では、今、持続可能性ということが言われていますが、地域の環境と共生しながら暮らしていく、そのためにどんなことが必要なのかということを考えていくセッションになります。第1部で主に、山梨県の自然を活かした観光やビジネスなどの視点について、外国人お2人のパネリストとともにお話を進めていきます。まず最初に、この分科会に参加をするお2人を紹介します。まず1人目がデイビット・エリスさんになります。デイビット・エリスさんは、もともとカナダがご出身です。中東のほうで大学の講師をされていて、20年ほど前、日本に移住されて、日本で、山梨県でさまざまな観光のプロモーションなどをされています。

▼**エリス**：よろしくお願いします。

▼**安藤**：今、外国人観光客は、新型コロナウィルスの関係で、少し減少している状況ではあるんですけど、もともと外国人向けに山梨県の魅力を、例えばブログとか、動画とか写真とか、そういういろいろなものを通じて発信していただいております。今日はそういう視点から、山梨県を中心にした観光の魅力とか、今起こっていることなどをお話ししていただく予定です。次にもう1人がデイビット・プルーカさんになります。デイビット・プルーカさんは、現在、山梨県立大学で教員をされていまして、同時に甲府市の帯那という所でビールを造っています。

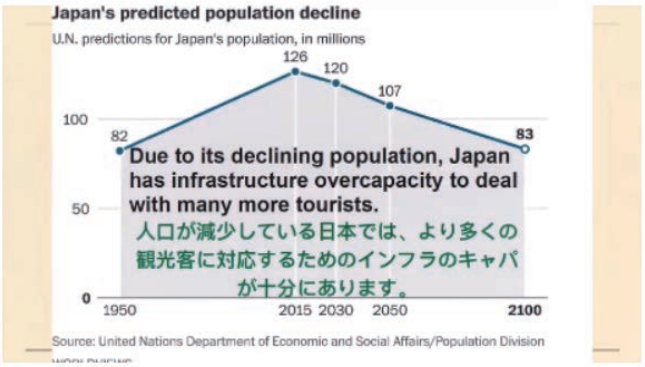
▼**プルーカ**：大学は山梨県立大学准教授で、私のゼミナールはグリーンビジネスです。私は帯那に住み、農業とクラフトビールを教育的なプログラムで大学のために頑張っています。

▼安藤：よろしくお願いいたします。そして私は、このセッションの分科会のコーディネーターを務めさせていただきます、山梨県立大学国際政策学部の安藤勝洋と申します。山梨県出身で、実はずっと海外で仕事をしていて、５年位前に山梨県に戻ってきたんですけど、海外から戻ってきてみると、山梨県ってやっぱりきれいで緑の魅力がたくさんあります。でも人口減少とか、空き家とかたくさんの課題があって、何かこう課題を解決しながら、いろんな観光とかを通じて良いことができればなということを考えています。今日のこの第８分科会では、デイビット・エリスさんとデイビット・プルーカ先生と私のほうの視点も少し含みながら、セッションを進めていければと思っています。今日は、最初にデイビッド・エリスさんに「農村の大きな可能性」というテーマでプレゼンテーションをしていただきます。その後でデイビット・プルーカさんに、先ほどご紹介がありました、甲府で行われているビールのプロジェクトをお話しいただく予定です。最後に3人で少しディスカッションをして、今後の山梨県であったり、こういう地域へのメッセージというものを考えていきたいなと思っております。



▼エリス：私の発表は、山梨の発展に関する内容ですが、他の全ての県でも同じ可能性があると考えます。ガンジーは、「あなたがこの世で見たいと願う変化に、あなた自身がなりなさい」と言いました。山梨のサポートのためには待っていてはいけないということです。日本では、東京・大阪・京都は有名ですが、その他の地域の情報が十分にありません。私は、日本の農村に大きな可能性があると思います。しかし、その前に必要なことがあります。①若い世代だけが、変えることができる。若い世代が農村地域に残るようにしないとならない。②日本の人口は減少している。日本の世界に誇れるインフラを活用したほうが良い。③外国人観光客が何を望んでいるのかを理解することが必要。④外国人が好むような魅力を見つける。⑤外国人が長期滞在できるようにする。

日本には第３の革命が必要です。日本は、19世紀後半に工業化・近代化に成功しました。戦後は、崩壊した国から産業大国へと変貌を遂げました。しかし今、日本は出生率の低下と経済の衰退に直面しています。若い世代に権限を委譲し、経済を活性化することが必要です。若い世代だけが、変えることができます。第３の革命とは、「ものづくり」と「おもてなし」をベースにした持続可能なサービス業を推進することです。日本は世界に誇るインフラを活用して、持続可能な観光を支援すべきです。東京と名古屋を結ぶリニア鉄道が甲府を経由して開通すれば、東京から日本の奥深い田舎まで、数時間ではなく数分で移動できるようになります。新しい高速道路が静岡県からつながりました。混雑している観光地から山梨に観光客を呼びこむことができます。人口が減少している日本では、より多くの観光客に対応するためのインフラのキャパが十分にあります。2030年までに600万人が減少すると予測されています。日本の成熟したインフラは、他国の観光地で見られるようなダメージから環境を守ることができます。モナリザをご存じかと思います。この写真（※講演の時は、モナリザの前に多くの人々が集まる写真を掲示しました。）は、パンデミックの２カ月前に撮影されたものですが、問題を確認することができます。観光公害です。持続不可能ということが分かります。同じことが世界中で起きていました。ベニス、タイでも。日本は、持続可能な観光を推進することができます。外国人観光客は、他の場所に興味があります。問題は、情報が無いか、希少であることです。交通や言語のサポートも同様です。外国人観光客は、山梨県早川町赤沢宿のような、美しい自然・場所・景観を好み、日本の建物が好きです。しかし、目に見えない障害を取り除くことが必要です。



私のアイデアは、スローツーリズムです。交通が利用できなくとも簡単に実行できるツアー、自分バージョンの日本の体験ができるので、ウォーキングツアーが理想です。私は、日本のワインを知ることができるウォーキングツアーをデザインしました。私のウェブサイトに掲載し、人々にお見せしました。山梨の多様なものが魅力的です。例えば、建築、デザインです。縄文時代からの古い歴史。歴史あるワイナリー。地域の食文化、郷土料理。博物館がスタート地点で、ワイナリーまで歩きますが、もっと情報が必要です。山梨までどう移動するか。どうやって東京に戻るか。スーツケースをどこに置くことができるか、などです。私がウェブサイトに全ての情報を載せると、面白いことが起きました。多くの国際雑誌が、ジャーナリストを送り、山梨について記事を書いてくれたのです。ショーン・オクローク氏は、月間800万人読者がいる『フォーチュン』に記事を書いてくれました。他にも、アンドリュー・ショーン・グリアー氏が兄弟と写真家とともに来て、日本食、ほうとうを食べ、月間480万人の読者がいる『トラベル+レジャー』に記事を書いてくれたので、世界中に広がりました。次は、メリー・ホーランド氏が、月間1,000

万人の読者がいる『フード&ワイン』や『モノクロ』に記事を書きました。『モノクロ』の購読者は、CEO・医者・起業家が多く、金融機関・政府関係者・デザイン・ホスピタリティなどの産業など高所得者で、70%は男性で、MBAを持っています。パンデミックにより観光は停止しました。パンデミックの当初、山梨のワイナリーは、「SOTO SAKE」などのアメリカの輸入業者と協働しました。他に「Vine-connections」という輸入業者、「BBC-SPIRITA」というヨーロッパの業者もあります。これらの輸入業者は、日本のワインに大変関心がありました。私のウェブサイトを見てコンタクトするということは、情報が他に無いということです。日本の内陸部は、交通も良くなく、言語のサポートもありません。これらが提供されると、大きな可能性があります。

もう一つ、議論したいことがあります。山梨県は、日本で空き家が一番多い地域です。これは特異な課題と言えます。先進25カ国の中で、日本のみ住宅価格が下落しています。これはチャンスでしょうか。多くの外国人は、日本の地方の家の価格が安いことから、家を購入したり、賃貸したりしたいと考えています。アメリカのCNNトラベルは、「日本では外国人が土地や不動産を購入するのに制限は無く、市民権や永住ビザも必要ありません」と書いています。私は、山梨で家を借りたり、購入することが簡単になることを願っています。他県よりも優位になることが一番重要です。住宅の賃貸・購入を求める外国人と、地域社会や地域住民をつなげ、利益を作り出せるシステムが大事です。





日本の農村は、大きな可能性があります。若者が地方に残って未来を築くようにサポートしないとなりません。世界に誇れる日本のインフラを活用してほしいです。もっと多くのインバウンド観光客を地方で受け入れるべきです。外国人が好むような魅力を見つけることが必要です。外国人が長期滞在したくなるような場所を目指すべきです。日本の農村は、情報が無いこと、交通が不便であること、多言語化されていないなど、目に見えない障壁を取り除くことが必要です。ありがとうございました。

▼安藤：情報であったり、交通であったり、言葉といった障壁を取り除いていく必要があるということを言ってくださいました。デイビット・エリスさんがいろいろ情報発信をしていくと、山梨県という観光資源というのが、特に外国の非常に高所得者というか、そういう人たちが読むような雑誌に注目をされて、たくさんの興味が引き付けられているというお話をしていただきました。また後半のほうでは、山梨県が特に多いとされている、空き家、こういう所も外国人の高所得者の方が中長期もしくは長く住む不動産価値としての魅力がとてもあるんじゃないかというお話をしていただきました。山梨県を含むこういう農村地域が、課題だけではなくて観光的な資源の可能性であったり、今までにまだ来ていない顧客といいますか、海外の高所得者の方々にも非常に魅力があるということですね。また、地域コミュニティーとの関係の重要性とかその辺りも指摘がありました。非常に示唆に富むプレゼンテーションであったと思います。次にデイビット・プルーカさんのプレゼンテーションです。

【プルーカさん紹介動画】



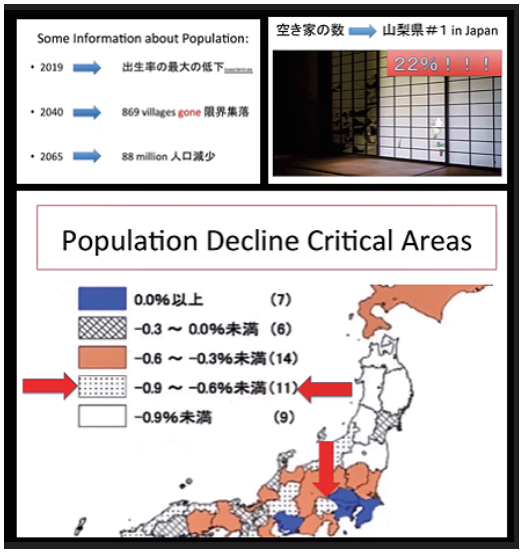
ビールがどう造られるか考えたことがありますか。その裏にある物語を想像したことがありますか。これはある男の物語です。名前を、デイビット・プルーカ氏。「なぜホップなのか？」「なぜビールなのか？」。プルーカ：良い質問です。ビールはずっと好きだからです。親戚とドイツに住んでたころの話です。13・14歳ごろ、叔父がこう言いました。「もし、カウンターの奥が見えるようになれば君もビールが飲める歳になる」と。それとドイツには子ども向けのアルコール度数の低いビールもあります。ドイツでは子どももビールと一緒に育ちます。事実、ビールはヘルシーな飲み物でもあります。私の苗字、プルーカもチェコの名前です。古くからのチェコ共和国のボヘミアは、ホップや大麦、小麦などが名産でとてもいいビールの産地です。シエラネバダのペールエールを飲んだ時を思い出します。私が大学生のころです。とても美味しかった。それが、気づけばアメリカの市場に広まっていました。それから年月が経ち、今は日本にいて、日本でもクラフトビール人口が増え、市場に浸透してきました。なぜならクラフトビールは自由度が高く、入れる素材次第で面白い結果が見られます。他の材料を混ぜたり、身の回りにある材料を使ったりして、全く新しいビールの概念を生み出すことだってできます。今現在、農家として土地を所有し、山梨県に住んでいるのであれば、周囲の環境をうまく使おうと思いまし

た。良い日照・良い水資源・肥えた土があるのなら、ホップを調達し、ビール造りに挑戦してみようと。今ではよく育っています。それから3年が経ち、21種類のホップを育てています。毎年、ホップについて勉強し、栽培し、あらゆることに挑戦してきました。そして、ついにホップを栽培することに成功しました。なので、次はビール造りです。「オビナホップス」。　～以上～



▼プルーカ：私は、甲府市に14年前、東京から引っ越してきました。チャレンジが好き、ずっと前から田舎が好きということで、山梨に引っ越し、土地を買って、自分の家を建てました。私はその間に東京の大学で教えていたので、私の学生・留学生と農業とか自然とかキャンプとか、プロジェクトを作りました。プロジェクトが大きくなって1年半前に山梨県立大学の准教授になりまして、県立大の学生たちのために、帯那の私のプロジェクトをいろいろやって教えました。

まず、私が2年前に作ったオビナプロジェクトですが、問題として、田舎は人口が減る、私の地域でもそうですが、若い人がいない。皆だんだん歳を取って、力も無くなって、自分で農業ができない。畑とか田んぼもだんだん使わないから、エリスさんも言ったように空き家の問題も出てきます。若い人たちがどこにいるかというと、まちがやっぱり一番多い。この問題は帯那だけじゃなくて、日本のどこでも田舎は同じように人口が減って、だんだんゴーストタウンになる。7分の1が日本では空き家です。山梨は22%の建物が誰も住んでいない。日本でナンバーワンですよ。誰も住まない所には文化とかなくなる。若い人たちが大きいまちに住んでると、自分の祖父母の地元とか、歴史や伝統や習慣とか、分からないのでもったいない。私はこれを守りたかった。特に山梨は若い人たちの人口が一番下がっている。人口減少を克服し、地域経済を活性化させるために政府がずっと前から取り組んでいるけれど、大変なことです。



若い人たちが田舎に戻るにはどうしたら良いか、私に何ができるかと考えた時、「クラフトビール？？」とひらめきました。今、日本でクラフトビールは、けっこう経済的にブームでありまして、若い人たちがクラフトビールを好き。いろいろな種類、味、アルコールの強弱があって、クリエイティブなビールができる。クラフトバーとかで皆飲んでいます。クラフトビールの歴史は、アメリカでは約40～50年前に始まりました。クラフトビールは、日本で今、経済的に12年から去年までには0.0から1.6%に育った。今年の夏にほとんど500くらいのマイクロブルワリーという小さい手作りのビール醸造ができています。26年には、経済的なエキスパートが、クラフトビールは3%～5%まで育ち、経済的なポジションができるんじゃないかと言っていて、これからもクラフトビールは人気になります。

私のコミュニティーである帯那はもう14年も住んでいて、自分の家を建てて、農業の免許も取ったので、私はいろいろな米とか野菜とか何でも育てています。3年前、どうやってグリーンビジネスのゼミナールの学生たちに教えようか、モデルとかサステナビリティーのアイディアとか場所とかを考えてたんですが、やっぱり帯那の肥沃土と水、気候がいいと思いました。あと、人たちはすごいフレンドリーでサポートをすごくしてくれるし、山梨で一番大きいまち・甲府まで家から車で15分で行ける。甲府は経度35.6度で、アメリカンホップを育てるベストゾーンの35度から55度までに入っていました。2018年・2019年は、ホップ作りの経験が無いので、最初から大変でしたが、ボランティアの人たちとホップを作るフレームなど、どうやって使うか考えて。友達たちが助けてくれて。自分のお金を使って機械とか海外から買って。全部自分のお金を使い、うまくできるかどうか様子を見ながら。3年前は、私の奥さんにも助けられながら、ホップを毎日見ました。ホップがだんだん育ったので、パッケージすることに。ホップは、近くの昇仙峡の蕎麦屋さんに持って行って天ぷらで食べてみたりしました。ビールにするには乾燥が必要なので、パッケージは、パッキンパックとか窒素ガスを入れて、だんだんフレッシュなホップができました。手作りというか、手で収穫したんで、けっこう時間かかるんですけど、学生たちと一緒だとけっこう良い感じで。初めての時点で、ホップがたくさんできました。私は嬉しかった。

次のステップはビール工場だということで、家族に相談して、隣の空き家がちょうどビール醸造所に良い建物だったので、ここに工場を造りたいと。ちょっと時間かかったんですけど、お金も銀行でローンを組んだり。空き家のリフォームは、スケルトンフレームまで自分で取って、2020年からスタートしてけっこう大変でした。あと、いろいろな問題がありました。浄化槽の問題とか。自分の機械をたくさん持ってたんで、自分で石垣と石積みを造って、自分で全部造りました。

次のステップは銀行ローン、次はブルワリーのためのお金がとても高い。学生たちは、フィールドワークの準備をしたのに、

コロナウィルスで去年フィールドワークはできなかった。だから、オンラインの授業をつくったけれど、皆そんなに嬉しくなかった。私も直接会わないで、どうやってオンラインで教えようかと。瓶の中に種を入れて、学生たちの名前を付け、pHをチェックして、モニタリングでやったんですけれど、私が一人でやったので寂しかった。急に去年一人でマンパワーが足りなかったのに、ベト病の問題があって私は100%落ち込みました。お金をいっぱい使ったり、2年前から去年までは、もう何もできなかった。でも赤ちゃんが生まれたんです、私の赤ちゃんを見て、近所の人たちからこの地域では何十年って子どもが生まれてないと言われて、私は幸せです。

2021年にスタートしてから、今年は勉強、勉強を重ねて、諦めることなく頑張っている。フィールドワークの許可もだんだん出たので、皆マスクをして、私のゼミナールの学生たちは私をすごく助けてくれて、私は教えて楽しかった。

Fieldwork Program for YPU students 2021



次のステップは、お金が全然足りないので、クラウドファンディングでやりました。学生たちは農業よりPRとかクラウドファンディングで頑張ってて、すごい助けてくれた。メディアも取材に来て、UTY・YBS・テレビ東京とか。だんだん遠い所、他の県からもテレビを見て興味を持った人がやって来て、どうやってホップを育てるとか聞いてきたので教えました。で、皆が自分のところに帰って、ホップを頑張って育てている。

次のステップは、ブルワリーのプランニング。3年前、奥さんと一緒に神奈川県のブルワリーでちょっと勉強しました。今、4つの畑を借りて使っていて、21種のホップを育てています。空き家を買って、自分で今年1カ月ぐらいリフォームして、2つのゲストハウスにしました。ブルワリーの建物は自分でリフォームして、テイスティングルームとか飲食店を2階に造った。将来的にはビールを造りながら、ツーリストとか興味がある人が見に来ることができるようにしたい。今までに、けっこうお金もかかりました。空き家とか土地を買ったり、機械とかたくさんトラックとか、ウェアハウスとかそういう感じで、けっこうお金がかかりました。空き家はこういう感じ。古い日本の和風の家があるし、私は畳が一番ベスト。72年前の建物ですけど、こういうスタイルで、大きいものではなかったから、私は簡単にリフォームできた。人が来る時は、帯那で泊まることができる。今年のホップもベト病のため、JAで薬の話などをして勉強しました。

Vacant House to be Guest House for students and visitors



これは北杜ホップスの人たち。私はコラボが好きなので、いろんな農業のホップの人たち、日本のエキスパートと話して、オビナホップスの生育のために頑張って、今年はうまくできました。

Hop Harvest 2021:21キログラムの乾燥ホップ= 5000リットルのビール



あとこれは、私が造った特別なデザインのブルワリー。7,000リットルのビールができる。これから勉強はずっとしますので、この設備が終わったら今年は12月にブルワリーをオープンしたいです。望むことは、学生たちなど若い人がインターンシップかツーリズムという時、私のプロジェクトのある帯那に来てほしい。学生たちはやっぱり日本の田舎がとても好き、コミュニティーの雰囲気とか皆のパワーとか頑張ってる気持ちとか。もし私が成功したら、ビールでだんだん人気になって、学生たちとか、若い人たちが帯那で家族を育ててるとか、そこでバイトとか仕事もできるかとか。頑張っていれば、さらにスタッフの人たちがまた帯那に来て、家族になって育っていくと考えます。ありがとうございました。

Obina Brewery October 2021



▼安藤：デイビッド・プルーカさん、どうもありがとうございました。私も、去年プルーカさんのお家とビール醸造所を訪問させていただきました。家はプルーカ先生が自分で建てて、美しい家がだんだんできて、ビールの醸造所もできて。とてもエネルギッシュでたくさん苦労をされたと思うんですけど、徐々に形になってきて、すごいなというふうに思いました。私の印象に残っているのが、ビールのホップの畑の所に、近所のおばあちゃん用の小さい道を作ってましたよね。あれがすごく素敵だったと思うんですけど、ちょっと説明していただいてもいいですか。

▼プルーカ：周りのおじいちゃん・おばあちゃんたちが、農業を私と奥さんに昔から教えてくれていました。裏のクボタさんというおばあちゃんが優しくて、よく家に来て、私の奥さんにいろいろ教えてくれました。私がホップの種を埋めるのを教えたら、ホップを育てるのも助けてくれたんです。グランドマザーの気持ちで私の家族のために家で料理を振る舞ってくれました。アットホームな気持ちがしました。スムーズにクボタさんの家に行けるよう、ちょっと道を作って、上に門作って。それは「けい

もん」って言うの。「けいもん」の「もん」は漢字の「門」で、「けい」はカタカナで、意味はクボタさんの門。彼女に「これケイ門で、クボタさんのための門、いつでも家にウェルカムですよ」って言ったら彼女、ちょっと泣いちゃった。とっても嬉しかった。帯那は皆フレンドリーで大好き。たぶんエリスさんのところでも、同じ気持ちで皆優しくて、よく話すとか、手伝うとか。それは興味があるの。農業とかやる外国人に優しい。私はとても嬉しいです。

▼安藤：非常にエネルギッシュなビール造りのお話をしていただきました。私のほうからいくつか2人に質問をしますが、まず最初に、何でお2人はこの日本という国に住まわれて、山梨に住んでいらっしゃるのか教えていただけますか。

▼エリス：私は約20年間、ドバイとドーハ、カタールに住んでいました。すごい大きいまちで、渋滞が多い。皆の生活も早い。私はすごいストレスを感じました。本当は静かな場所に住みたかった。私、本当に緑がね、大好き。山を見るのが私の薬です。本当に気持ちいい。だから本当に、他の人は山梨が静か過ぎだと言うけれど、私には静かでとてもいいです。田舎楽しい。きれいな山が360度見えて、素晴らしいし、住みやすい。だから山梨県がとてもいい場所だと思う。

▼プルーカ：実は14年前に、当時は東京の西のほうに住んでいました。30年前に日本に来て、サンフランシスコの出身で、若い時、道具とか車とか日本のメイドインジャパンが人気あった。そうした影響があって、私も日本にすごい興味があった。資源は無いけど、経済的にすごい頑張ってる国だから興味があって、日本に来たかった。日本の文部省の公立高校の仕事ができたので、日本に来ました。エリスさんと同じ気持ちで、田舎に住みたかった。すごくストレスが無いし、人が少ないし、自然もたくさんあるので。その後、大学の先生になりましたので、23年前、都留文科大学の仕事で毎週1・2回来た時に、山梨が好きになっちゃったから、住めればいいなと思いました。14年前、チャンスがあって、土地を買って家を建てて。1年半前から、県立大の仕事ができたんで、タイミングが良かったと思います。パンデミックとかも。とにかく私は1年半前から、ここに住んで好き、大好き。

▼安藤：プルーカさんも同じく、何かストレスがあって、山梨に来たらいい場所で、近くでお仕事もあってということですね。またお2人にお伺いしたいのですが、山梨県に住むというところで、そのコミュニティー、その関係とかに入る時に難しさはありましたか。もしくは、家を借りたりするとかそういうところの大変さはどうでしたか。

▼プルーカ：最初から帯那の人たちはとてもフレンドリーで、外国人がなぜ来たと、私にちょっと興味がありました。空き家は最初、古い建物をリフォームするつもりでしたけど、もう古すぎてボロボロでリフォームできなかったから、近くにリサイクルした物をたくさん使って自分の家を建てました。10年かかったんですけど、とても大変。書類とかお金もかかるし。外国人が空き家を探す時に、とにかくコミュニティーにまず入って、ネットワークするべき。私、今組合メンバーで、皆がサポートしてくれて空き家を探しました。私はホップとかビジネスとかビールのためのスタッフ用に空き家が無い時困ってて。皆助けてくれて、2つの一軒家が空き家だったので買いました。とてもリーズナブルな値段で。最初からコミュニティーにネットワークしたら、もっとスムーズになる。初めてで誰も知らないって、いろんなチャレンジがあります。

▼安藤：先ほど、クボタさんというおばあちゃんの話をしていただいたんですけど、周りの人との関係というのは、最初から入りやすかったんですか。

▼プルーカ：家を買った時に、直接行ってあちこちに、「つまらないものですけど」とプレゼントを持って行きました。皆、びっくりした。山梨の人たちはとてもフレンドリーで、コミュニケーションはすごく簡単。甲州弁で「ずら」ってとにかく使っている。クボタさんとか周りの皆ももう知り合い。今、エミちゃん、赤ちゃんとか家族誰でも家に行って、すぐ入って、一緒に食べるとか家で飲むとか、もうとてもスムーズで。

▼安藤：きっと甲州弁を喋るプルーカさんがいたら、皆すごく楽しいと思います。エリスさんはいかがでしょうか。コミュニティーとの関係。

▼エリス：私のコミュニティーの話はちょっと違います。本当は私、山梨の観光をサポートしたいです。だから私のコミュニティーは山梨県。例えばワイナリーをサポートしたいんです。私は自分のワイナリーツアーを作ったでしょ。私のブログに入れた。他の、例えば観光会社の山梨ワインツアーは、写真3つぐらいとワインテイスティングできます、1人3万円が書いてある、人はほとんど来ない。私のブログは、ワイナリーの地図や料金など説明も全部オープンで無料。だからいろいろな外国人が「デイビット、これは仕事？」と聞くから「違う、趣味」。だから雑誌のジャーナリストは、山梨県のいろいろなことを書きたい。もし私が、「だいたい1時間1万円だから1日6万円ください」と言ったら、ほとんど人は来ない。ゼロ。私は本当に心からサポートしたいです。だからワイナリーから「デイビット、これは仕事？」と聞かれて「いや、趣味」と答えます、とても楽しいから。もう私、ワイナリーをたくさん外国人に紹介したので、たくさんの外国人が来ました。だんだんワイナリーが「デイビット、お給料どこからもらう？」って言ってきたけど、「関係ない楽しい」って言っていました。でもアメリカ・イギリス・オーストラリアなどの雑誌にけっこうストーリーが出た。ワイナリーさんに雑誌を見せたらすごいびっくりした。自分のウェブサイトに載ってるのは全部無料なので、ワイナリー、すごいびっくりした。だから、私はたくさん仕事をもらった。最初は趣味だったのに、今い

ろいろ仕事が入る。だから私の考えでは、例えば、若い人が帯那とか山梨県に仕事が無いと言うけど、3年ぐらいは頑張ってみて、1・2年ぐらいお金はちょっと少ないけど、そのうち、うまくできる。心から山梨の人、すぐリレーションシップできる。何でもできる。いい友達ができる。誰でもできると思います。

▼安藤：すごい経験と言いますか、最初は本当にお金ではなくて、ワイナリーであるとか観光をサポートしたいって気持ちでやっていたら、どんどん関係ができて、それがだんだんお金にもつながったということで。最初はそういう本当にサポートしたいという目的であるとか、そこでワイナリーの人たちと仲良くなるということがとても大事、というふうに理解をしました。そういうエリスさんの姿勢が、山梨県の人にどんどん広がって、ネットワークがどんどん広がっていけばいいなと思います。エリスさんのプレゼンテーションでは、外国人で、年収が高い人たちが、日本、特に田舎とか空き家に興味を持っているというお話をされて、インバウンドなどで、山梨県にとっても、非常にチャンスにもなるのかなと思うのですが、一方で、先ほどもプレゼンであったような地域とどういう関係が作れるのかというふうな疑問がありまして。エリスさんが思うに、こういう外国人の、特に今までまだ来ていないようなハイエンドと言うか高所得の人たちがどういうふうに山梨県と関係を持っていくのかなと。こちらについて教えていただければと思います。

▼エリス：私のブログ、ウェブサイトはいろいろな人が見ています。ハイエンドもバックパッカーも。バックパーカーは、お金がかかるから、観光サポートはいらない、ガイドもいらない。1,000円も大切だから、タクシーも使わないと思う。でも時間はいっぱいあります。一方、ハイエンド、お金持ちの人は時間が無いけど、サービスやいろいろなサポートが欲しいので、そのための値段は関係ない。だから1日10万円でも問題ありません。その分、サポートが全面的に必要です。駅からエスコート、タクシーの用意、ワインの歴史とワインの説明の話とか、土の説明、泊まるホテルから食事も全て手配して、ガイドさんも朝から夜まで一緒です。山梨県にはほとんどハイエンドホテルがありません。だから良い旅館とか、いいプライベートホテルが一番良い。例えば日本人のプライスコンシャス、例えば20歳〜25歳の人、たぶんお金少ない。だからこのプランは自分の考えでできました。良いサービス、良いレストラン。例えば1,000円じゃない、お昼1万円、でも素晴らしいエクスペリエンスというのが、とてもいいです。そう、ハイエンドとても面白いです。

▼安藤：では、ハイエンドの人には、どうぞ来てください。という情報だけではなくて、しっかりとエリスさんのような人が付いてご案内をしたりとか、ハイエンドに響くような高いサービスと適切な情報を出しながら、地域のことを知ってもらう、こういうことが必要ということなんでしょうかね。そうしましたら、あと２つほど。今日お２人に、山梨県で取り組まれてることや、今後必要なことをお話ししていただきました。今回のテーマが「山梨の環境」ということですが、いろんなコミュニティーがあるとか、自然とかいろんな環境がありまして、その中でお２人とも社会課題である、空き家とかそういうものを使ったビジネスとか、そういう話をしていただきました。これからこの分科会のメンバーをはじめ、他に関わる人に対して、今後、山梨県でどういうものに取り組んでいくべきか、というふうなメッセージをいただきたいと思います。

▼プルーカ：山梨はポテンシャルたくさんあります。やっぱり東京が近いんで。横浜とか大きなまちの近くにあるので、場所はとても良い。「あずさ」とか「かいじ」を使えば、新宿から甲府まで90分位です。近いので、ツーリズムのためには、人がまちの中で疲れる時、ちょっとのんびり、静かな所に行きたいと思ったら、山梨はちょうどいいチョイスだと思います。山梨は空き家が多いんですけど、ポテンシャルもいっぱいあるので。例えばB&BというBed & Breakfast は、リフォームすれば、外国人とか日本人とか誰でもお客さんが来る時に泊まれる。空き家を使ったほうがいいと思います。もうたくさん建物は建ってるから。あと人材があります。歳を取っていても、プロジェクトのため、ビールの醸造のため、ホップとか、周りの人たちは、草取りとかも分かるし、木を切るとか、あと育てるの。農業とか。醸造ができたら、ビールを飲む時は、運転はできないので、近所の人たちで代行サービスができる人もいる。皆、歳取っても関係ないし、助け合い、料理もできるし畑も作る。ビールのためにはホップとかモルツとか、私は麦が欲しいとか、ゴボウとかあと果物とか。私は麦が欲しいとか、ゴボウとかあと果物とか。私は近所の人たちはもう育ってるので、ちょっとコミュニティーのビジネスを作って、オビナブルーイングは果物を買って、近所の人たちでソーシング、リソースで使えば一番いいと思うから。ほとんど自然資産。肥沃土でいい土もある。あと水もいい。昇仙峡の荒川ダムから水が来るから。先週、検査したらpHは7.0で、ビールのためにちょうどいいソフトな水。いい場所でおいしいビールを造ることができるし、材料はほとんどオビナホップス・帯那麦・帯那の米も使うことができる。やっぱり山梨県はポテンシャルがいっぱいある。人材と自然資産にフォーカスしたほうがいい。

▼エリス：プルーカさんのお考え、帯那のマイクロブルーワリー本当にとてもいい。例えばマイクロブルーワリーやりますの説明やPRはちょっと意味が無い。だからボトムアップサポートが一番いいと思う。トップダウンはウェブサイト。でもボトムアップは、例えばプルーカさんの友達、いっぱい友達。あ、この人B&Bするなと。日本人でも英語できなくても、外国人、すっごい楽しい。だからプルーカさんの家だけじゃない。たくさんの人を例えば帯那約100人いる。大体10人、20人ぐらいB&Bできる。だから外国人がすごい楽しい。この村すごいオープンじゃない？他にもっとボトムアップは、トランスポーテー

ション・いいバイク・エレクトリックバイク。駅から帯那まで楽しいじゃない？いいバイクツアー。帯那からあちこちすごい楽しい。もちろんクラフトビールは、バイクに乗った後で。一つの村、一つの場所で、もうちょっとプロジェクトやりたいというのが私の考え。この村の外国人ここ泊まっていい、ここも泊まっていい、ここも泊まっていい。この家外国人買っていいですよ。そして、税金とかいろいろメインプレスとか、村からサポートできる。山梨県全員はちょっと難しいけれど、例えば一つの町、帯那なら、いろいろできるし、たくさん外国人が来る。皆楽しい。コミュニティーが楽しい。次の場所でもできそう。ボトムアップから本当にどこでもできると思う。でもトップダウンで、例えばこのまちきれいですよ、来てくださいは、ほとんど意味ない。ボトムアップ。ほんといろいろ仕事があります。サポートは一番いい。泊まる場所をいっぱい。B&B・エアビー（Airbnb：airbed&breakfastの略）をいっぱい 。何かレストランもあります。英語のメニューあります。このまちのメニュー全部、英語であります。あのマスター英語できない。でも番号は分かります。44番食べたい。はい分かりました。これ、すごい。ボトムアップサポートがすごい大切です。



▼安藤：非常に面白く聞かせていただきました。プルーカさんがおっしゃるような、自然だけじゃなくて人ですよね。いろんな技術とかスキルとかそういうものを持っている人が、多分地域にはたくさんいらっしゃって、農業とか、そういう人が本当に資源を支えてくれたり、あとはプルーカ先生と協力をしていて、何か新しくその資源をまた作っていくことができるのかなと思いますし。エリスさんがおっしゃったのも非常に面白くて、ただ単純にプロモーションすればいいわけじゃないんですと。本当にそういう地域の人とか、もしくは経験した人とかが、広めていったりとか、皆でやっていく。今おっしゃっていただいた、バイクとか新しいものでね、山梨県の農村にアクセスができるようになると、そこがさらに上がってくるのかなと思いますし、エアビーみたいな宿泊のシステムというのも非常にマッチするのかなと思います。それぞれちょっと違う立場で、プルーカ先生が少しコミュニティー型で、エリスさんのがそういう良さをマーケットにという視点でお話しいただいたのかなと思います。非常に可能性があるのかなと感じました。次が、最後のクエスチョンになります。今日、山梨にはこういう良さがあったり、課題というよりは本当にいいところがたくさんあるというお話をしていただきました。または先程の観光のもうちょっと違う売り方とか、お話をいただいたんですけど、最後にお二方から、こういう環境、山梨の環境をトピックにして、今日、聞いていただいている方にメッセージをいただきたいなと思います。

▼プルーカ：はい、将来のため、いろいろあるのですけど、大きな問題は、日本の田舎は人口が減少し、それがリバースできないことです。ずっと下がると思いますので、人材とか自然資産にフォーカスし、あとはエリスさんの言ったプロモーションももちろん大事で、それが全部コンビネーションしたら政府のサポートが必要だと思う。今までに私はほとんど自分で、全部できました。銀行のローンを考えた時には、やっぱり1年半かかりまして、投資とか外国の人とかもう60回ぐらい会った。あとビールのエキスパートではなかったし、大学の先生がこういうビジネスをするのは、銀行にはリスクがあったので、けっこう時間がかかりました。でも、私は諦めなかったので、銀行もサポートしてくれました。あとはメディア。やっぱり必要で、メディアの人たちがこのストーリーを見て、インスピレーションになるのが一番いいと思います。そのストーリーは、メディアでどこでも皆見ることができる。私のビジネスのサスティナブルグリーンビジネスのインフラで全部できたんで。ホップ、農協を使った、近所の人たちを助ける、学生たちは教育的につなげてのビジネスアイディアです。それで造ったオビナビールが人気になれば、やっぱりモデルになる。メッセージは、諦めないでずっと頑張ってる、簡単ではない。全然簡単ではないことを私が一生懸命頑張ってる。だから、皆も続けてください。チャレンジであっても、頑張って諦めない。Do your best！

▼エリス：本当に私はとても心配です。日本の人口。でも若い人は皆、東京と大阪に行きたい。良い仕事が欲しい。でも、良い仕事の意味が分かってない。何？いいお給料？どういう意味？もし、仕事があまり楽しくないなら、いいお給料はほとんど意味ありません。毎日、同じことをする、楽しくない。うまくできない。本当に仕事が楽しくないと、絶対うまくできない。だから私の考え、ほんと田舎に仕事がありません。どうして仕事ないんだろう。皆外へ出るから。自分で決めた。「私、東京行きたい」。ああ、このまち何もない。仕事もありません。それで皆出た。すごい面白い問題。若い人が、何かもっとエキサイティングな生活が欲しいなら、東京と大阪どうぞ。10年・20年、歳を取った時、皆リバースしたいですね。Uターン、また「私のまちに戻りたい」。もし、自分のビジネスができるなら、どこでも生活できます。だから本当に夢がない人は、どこでも生活できない。このまちきれい、この景色きれい、何かできそうだと思う。そう思えるなら、頑張ってください。1年ではできない。だいたい3年・4年から

何かできる。自分の仕事ができる。すぐできない、でもだんだんできる。でももし、例えば20年・30年・40年、いいお給料だけど嫌いな仕事やってたら、ほんと心がもう重くなる。60歳まで、40年間楽しくない。もう自分の夢も無くなった。だから若い時、頑張ってください。若い人たちは、自分のまちをもう一回見てください。もっと深い意味があります。このまち、小さいまち。本当に深い文化があります。見てください。もう1回見てください。

▼安藤：ありがとうございます。お2人のメッセージには何か共通する部分もあったのかなと思います。デイビッド・プルーカ先生であれば、諦めないという、自分がまさにやっていらっしゃって、諦めなければきっとそれが叶うという、そういう努力が必要ということ。デイビッド・エリスさんからは、夢を持って、こういう田舎でも、自分が好ましいと思える仕事を作っていったりチャレンジする必要性があると教えていただきました。

今日のセッションでは、最初は環境というテーマから入っていきまして、山梨県の農村地域の環境というのが、観光資源、建物であったり、ワインとかブドウ畑とかですね、とても魅力があるということ。しかし、空き家であるとか人口減少という課題があって、地方部からどんどん特に若い人材が減っていってしまうということが課題としてありました。ただ、今日お話しいただいたように、例えば、デイビッド・プルーカさんであれば、地域の人の技術や農業の技術、また支えを得ることによって、外国人の住民の方もいろんな新しいことをやっていて、またコミュニティーの環境をつくっているということが分かりました。また、デビッド・エリスさんがおっしゃったような、もっともっと新しい可能性もあると。例えば、伝え方とか、表現の方法、丁寧に対応することによって、もっと関係者を増やすことができることが分かったのかなと思います。

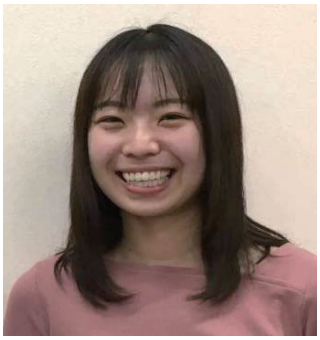
最後に、メッセージに戻りまして、やっぱりチャレンジをする、諦めないということ。あとは若い人が夢を見て、こういう農村地域の資源とか人と協力しながら、何か新しい農村というか、地方の未来をつくっていってほしいというメッセージをいただけたのかなと思います。今回はこの環境というテーマでお話をしてきましたが、このようなかたちで、お2人の、もともと外国で生まれたわけではありますけど、山梨に長く住んでいらっしゃって、実際に住みながらいろんなお仕事をしたり、コミュニティーと関係を育んだりされているお2人からお話を伺いました。こういった視点を持って、地域で頑張ってらっしゃるお2人がいること。また、こういうメッセージがあることをぜひ日本の皆さんも考えながら、これからより良い地域社会づくり、特に環境を活かしながら、取り組んでいければと思います。

これで、第8分科会の第1部を終了とさせていただきたいと思います。デイビッド・エリスさん、デイビッド・プルーカさん、どうもありがとうございました。日本語でお話をいただきまして、非常に難しいところもあったかと思いますが、きっと日本人の皆さんにも伝わっているのかなと思います。ありがとうございました。

【第2部】

▼田邉：私たち第8分科会第2部は、山梨大学と山梨県立大学の学生で構成されています。私は第8分科会のリーダーの田邉です。大学では環境科学について学んでおります。そして同じく、山梨大学で環境科学を学んでいる、西川さんと中野さん、そして山梨県立大学で観光・まちづくり・地域振興を専攻している、戸谷さん、加賀美さん、風間さんです。大学も専攻も違う私たちをつなげてくださっているのが、山梨県立大学の安藤先生です。本日はこのメンバーで山梨の環境・観光から見た未来についてお話をしていこうと思います。今回はこのような流れでお話ししていきます。加賀美さんと風間さんから、ユネスコエコパークと昇仙峡の自然と人間社会の共生について。続いて、西川さんから、甲府市の水道水から見た私たちの暮らしと水の関わりについて。そして戸谷さんから、芦川村で見つけた暮らしの中の水について。続いて私、田邉から、太陽光発電のメリット、デメリットについて。最後に中野さんから、世界的な温暖化防止対策である4パーミルイニシアチブで地域を活かす脱炭素について紹介していきます。では、加賀美さんお願いします。





▼加賀美：環境×観光、人との関わり合いという観点から、自然と人間の共生について考えていきたいと思います。私のパートでは、ユネスコエコパークの概要と、「甲武信ユネスコエコパーク」についてお話ししていきます。ユネスコエコパークとは、1976年にユネスコが開始した事業です。目的は、生態系の保全と持続可能な利活用の調和になります。簡単に言い換えますと、自然と人間社会の共生を掲げて開始された事業です。また、ユネスコエコパークというのは、国内で親しみを持ってもらうために付けられた通称であって、海外ではBR（生物圏保存地域）と呼ばれています。続いて認定地域数につきまして、2020年の10月時点で、世界では129カ国、714地域が認定されています。そのうち、日本国内では10の地域が認定されています。2017年に登録されて、群馬県と新潟県で構成さ

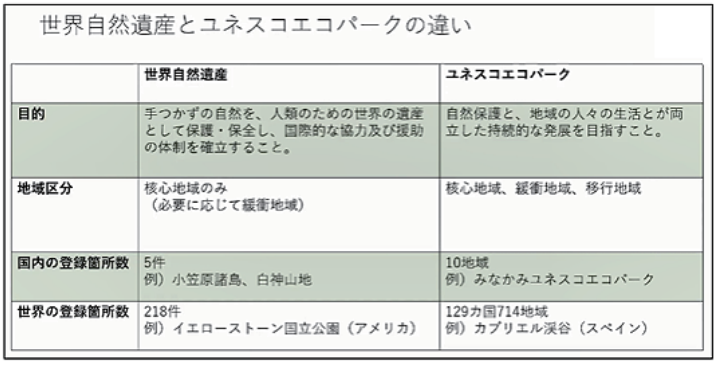
れている右側の図2の「みなかみユネスコエコパーク」や、2019年に登録され、山梨県・長野県・埼玉県・東京都で構成される「甲武信ユネスコエコパーク」などがあります。海外で登録数1位を誇るスペインでは、なんと52件もの地域が認定されています。認定地域は、域内の自然の成り立ちや、そこに育まれた歴史文化に対する理解を深める他にも、地域づくりの担い手を育成することが期待されています。



続きまして、3つの機能が、ユネスコエコパークの基本理念にも当たります。1つ目が保存機能で、これは人間の干渉を含む生物地理学的区域を代表する生態系を含み、生物多様性の保全上、重要な地域のことに当たります。2つ目が学術的研究支援、これは持続可能な発展のための調査や研究、教育や研修の場を提供していることになります。3つ目が経済と社会の発展ということで、自然環境の保全と、調和した持続可能な発展の国内外のモデルとなりうる取り組みが行われていること。この3つそれぞれが独立せずに、ユネスコエコパークの機能を相互に強化する関係になります。

これら3つの機能を達成するために、これから紹介する3つの地域を定めています。この3つの地域、1つ目が真ん中の核心地域です。ここでは、多くの動植物の生育が可能であり、法的にも厳しく保護されて、長期的に保護されている地域です。2つ目の緩衝地域では、核心地域の周囲、または隣接する地域に展開しています。ここではユネスコエコパークのための実験的研究だけではなく、教育や研修、エコツーリズムなど、自然の保全とか持続可能な利活用への理解の増進、あとは将来の担い手の育成などが行われています。最後に3つ目は一番外側の移行地域ですが、ここでは人々が居住をして生活を営んでいます。自然環境の保全と調和した持続可能な発展を実現する取り組みが行われている地域になります。

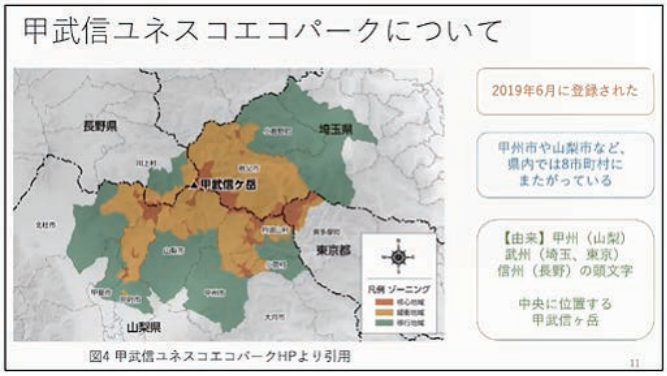



世界自然遺産とユネスコエコパークの違い

	世界自然遺産	ユネスコエコパーク
目的	手つかずの自然を、人類のための世界の遺産として保護・保全し、国際的な協力及び援助の体制を確立すること。	自然保護と、地域の人々の生活とが両立した持続的な発展を目指すこと。
地域区分	核心地域のみ（必要に応じて緩衝地域）	核心地域、緩衝地域、移行地域
国内の登録箇所数	5件 例）小笠原諸島、白神山地	10地域 例）みなかみユネスコエコパーク
世界の登録箇所数	218件 例）イエローストーン国立公園（アメリカ）	129カ国714地域 例）カブリエル渓谷（スペイン）

続きまして、世界自然遺産とユネスコエコパークの違いですが、世界自然遺産の目的は手つかずの自然を人類のための世界の遺産として保護、保全し、国際的な協力および援助の体制を確立することとしています。この時点で、けっこうユネスコエコパークの目的とは大きく異なっています。地域区分もユネスコエコパークとは異なっていて、核心地域のみになります。ただ必要に応じて緩衝地域も設けられることはあります。続いて国内の世界自然遺産が5件あって、豊かで独特な自然の利活用が認められた小笠原諸島や、人為の影響をほとんど受けていない世界最大級のブナ林が分布する白神山地など、世界自然遺産のほうに登録されています。世界の自然遺産は218件あり、アメリカにある世界最古の国立公園として知られているイエローストーン国立公園などがあります。

ここからは私たちに馴染みの深い甲武信ユネスコエコパークについて見ていきたいと思います。甲武信ユネスコエコパークは、2019年6月19日に正式にユネスコエコパークとして登録されました。山梨県内では甲府市・山梨市・大月市・北杜市・甲斐市・甲州市・小菅村・丹波山村の合計8市町村にまたがるエリアに広がっています。甲武信ユネスコエコパークの由来なのですけど、山梨を意味する甲州と、埼玉・東京を意味する武州と、長野を意味する信州のこの頭文字と、あとはエリアのほぼ中央に位置する甲武信ケ岳から命名されています。その他、荒川・多摩川・笛吹川・信濃川など国有数の大河川の源流域であること、チョウ類の希少な宝庫、金峰山や秩父神社

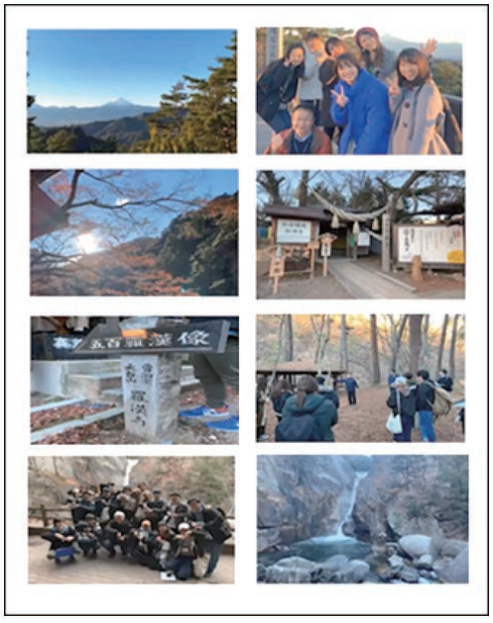


などの山岳・神社信仰にまつわる多様な民族芸能が今でも保全・継承されていること、山梨県内での果樹栽培と長野県の高原野菜栽培が有名、といった特徴があります。続いて、動植物についても特徴があります。まず動物に関しては、特色のある地層・地質、さまざまな気象条件が加わって形成された森林環境であるため、国の天然記念物であるニホンカモシカやツキノワグマ、ニホンジカなどの大型哺乳類をはじめとした食物連鎖の上位に位置するような、国内でもまれな種が多く存在します。しかし、森林の伐採や、里山の手入れによって、24種が環境省の定めるレッドリストの絶滅危惧種に選定されてしまっています。比較的温暖で、夏季を中心に適度な降水量がある気候と肥沃な土壌に恵まれているため、植物に関しては、高山帯ではハイマツ、山腹斜面ではブナ、石灰岩地質上ではチチブミネバリなど豊富な種が存在しています。さらに、核心地域および緩衝地域では、約半分の50%に近い地域が、人の手がほとんど入っていない原生林で占められています。

甲武信ユネスコエコパークのエリアに、山梨県を代表する景勝地、昇仙峡が含まれており、甲武信ユネスコエコパークと密接に関係しています。昇仙峡のエリアの多くが、ユネスコエコパークの中でも最も中心的な核心地域に含まれています。ここで核心地域が持つ意味を再確認してみると、核心地域とは多くの動植物の生育が可能であり、厳格に、長期的に保護されている地域となっています。ユネスコエコパークの目的は「自然と人間社会の共生」にあります。ここからは昇仙峡について、ユネスコエコパークの核心地域としての役割が本当に果たされているかどうか、より具体的にお話をしていく中で、自然と人間社会の共生について、さらにイメージを膨らませていただければと思います。



▼風間：甲府市の観光地である昇仙峡を題材にしてお話をさせていただきます。昇仙峡とは、甲府市の北部に位置する渓谷です。日本一の渓谷美と呼ばれ、特に10月中旬ごろに見られる紅葉の季節ではとてもきれいな景色を見ることができます。そして昇仙峡は昨年、日本遺産に登録されました。他にも、山梨県と茨城県が共同で「日本ワイン140年史〜国産ブドウで醸造する和文化の結晶」ということで、このストーリーが認定されたりもしています。昇仙峡はユネスコエコパークの一部分であり、日本遺産でもあります。ですが、ユネスコエコパークと日本遺産は異なる目的、異なる部分が存在しています。ユネスコエコパークの目的は、自然保護と地域の人々の生活とが両立した持続的な発展を目指すことが目的とされていますが、日本遺産に関しては、ストーリーを語るうえで不可欠な魅力のある有形・無形のさまざまな文化群を総合的に活用し、地域活性化を図ることを目的としています。また、ユネスコエコパークのほうは、ユネスコ国際連合の教育科学文化機関に登録されていますが、日本遺産は文化庁で登録されています。国内登録数も、ユネスコエコパークでは10地域、日本遺産では104件と数も異なっています。このとおり、昇仙峡という一つの場所は、目的の異なる2つの制度のもとに存在しています。



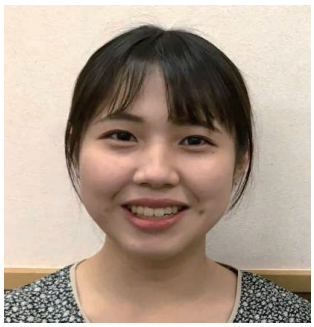
そんな昇仙峡を、環境という観点から考えていきたいと思います。まずは、日本遺産の認定に関して、私が関わった昇仙峡リバイバルプロジェクトについて簡単にお話させていただきます。昇仙峡リバイバルプロジェクトは2019年（令和元年）の12月4日に行われました。私たち、山梨県立大学吉田ゼミと立教大学の東ゼミの皆さんとで結成したグループで、昇仙峡の日本遺産登録に向けて、活動をさせていただきました。当日は、下の長瀞橋から仙娥滝までのコースと、上のロープウェイから上のコースの2つのグループに分かれて散策しました。日本遺産に認定されるということは、先ほどの目的の部分にもあったとおり、より観光地として確立され、地域活性化を求められるため、安全を考えたうえでガードレールの修繕や、外国の方が来た時に分かるようなユニバーサルデザインを使った看板作りなどを提案しましたが、これもある意味、今回の環境に関わる環境保全だと言えると思います。ですが、プロジェクトで歩いた場所や、皆さんが観光地で行く場所の昇仙峡は、その昇仙峡全体の一部分に過ぎません。昇仙峡の美しい渓谷美の裏には、先人たちが歩いた道が今なお残されています。さらなる昇仙峡の魅力発信、歴史を感じ、知ることができるような観光地にできないだろうか。でも、人工的な開発はしたくない。そこで、私たち吉田ゼミは、山梨県、特に甲府市に今もなお残っている古道の調査というものを行っています。古道の調査はただ道の調査だけではなく、古道に沿って残されている寺社や石仏など、歴史的な文化財とその景観の調査を行っています。調査を行ったうえで、山岳信仰について学んだり、植物の看板を作ったりしています。次のスライドでは古道の調査の動画を載せさせていただきました。

【動画】（※講演の時は、動画を流しました。）



映像のように、草花に詳しい先生に案内していただき、調査も行っています。最後に、この昇仙峡という場所は、ユネスコエコパークと日本遺産の両方に登録された珍しい地域であると分かっていただけたと思いますが、昇仙峡では、その両方の制度が共存しきれておらず、特にユネスコエコパークに登録されている地域だと知って昇仙峡に足を運ぶことはなかなかありません。また、先ほど話した古道のような、いまだに人工的に開発されていないような場所も存在しています。そんな2つの制度には、それぞれの自然保護の形が存在すると考えています。ユネスコエコパーク的な観点での自然保護と、古道のような歴史的・文化的な自然保護が存在することを皆さんにも知っていただきたいと思います。昇仙峡はこの2つの制度をうまく共存するような場所になっていき、より活性化した観光地になっていくように願っていますし、私たちもいろいろな活動をしていきたいなと思っています。昇仙峡には仙娥滝から流れる川があるのはご存じでしょうか。たくさんその川が流れているのも昇仙峡の魅力の一つだと言えます。しかし、甲府は昔、水に悩まされていました。そんな切っても切れない関係のある水について、次にお話をさせていただければと思います。

▼西川：先ほど、水と人々は切っても切り離せない関係と紹介があったように、私たちの暮らしと水には密接な関係があります。そこで、このパートでは、私たち人間と水の関わり、また、今後の課題について、観光と環境科学を専攻する大学生の視点から考えていきたいと思います。まず、生活と水の関わりについてお話しする前に、甲府市の水の起源について水道水から遡って紹介させていただきます。



まず、この「甲府の水」と書かれたペットボトルの水は、どこで採れたものだと思いますか。裏のラベルを拡大したものが右の写真ですが、このペットボトルは水道水を熱処理して、そのままボトリングしたものになります。このペットボトルの水は2018年～2020年にかけて、モンドセレクション最高金賞を3年連続で受賞しています。甲府市の水道水の起源について、まず甲府市上水道の歴史についてです。1889年に市制が敷かれてできた甲府市は、政府による条令の公布や市民の要請により1909年、水道工事が着工されました。そして1913年に全国で26番目に給水が開始されました。そこから約70年後には、今の甲府市水道の大きな供給源である荒川ダムが完成しました。



環境省により制定される平成の名水100選について、2008年に甲府市は御嶽昇仙峡が名水100選の一つとして選ばれています。平成の名水100選にも選ばれた御嶽昇仙峡に関連して、甲府市の水道水の水源地についてご紹介したいと思います。甲府市の水道水の主な起源の一つとして、昇仙峡付近から流れる表流水があります。右地図の赤い線で囲まれた部分が甲府市の範囲を示しています。ちょうど金峰山あたりから荒川へと水が流れ込み、その水が荒川ダムへと流れ込んで、私たち甲府市民の飲む水道水の大きな源となっています。また、昇仙峡は日本遺産にも認定されており、非常に渓谷が美しい観光スポットとしても知られています。



次は、昇仙峡地域の美しい水源を守るために、甲府市が行っている取り組みとして、甲府市水道水源涵養林保護基金を使って、市民の協力のもと、水資源利用の観点から重要とされる森林「水源涵養林」の植樹や、ゴミ拾いなどのクリーン活動などを行っております。また、この保護基金の制定以外にも、河川水の水質を調べたり、雨水の調査をしたりして、水源涵養林に与える影響はどのようなものなのか、そもそも水源涵養林に河川水の水質や雨水の影響はあるのかということも調べています。水源付近の環境を守ることは、水質をきれいに保つだけでなく、私たちの生活にもさまざまな恩恵をもたらすということが分かるかと思います。

そこで、次は水質がきれいに保たれることで、私たちの生活に対する恩恵というものを、大学生の視点からいくつか考えていきたいと思います。はじめに、水が私たちにもたらしてくれる恩恵ですが、私たちが考えたいくつかの例を紹介したいと思います。①市民の健康を保つ役割、②生態系の保全の役割、③観光業の発展、④農業の発展、の4つです。

今回はこの4つだけに絞って、課題について一緒に考えていきたいと思います。私たち成人の体の約6割以上は水分でできています。それだけ、水の与える私たちの健康に対する機能は大きいということです。きれいで安全な水の利用は世界規模で問題視されています。そこで、持続可能な開発目標SDGsでは、6つ目の目標として、安全な水とトイレを世界中に、とい

った目標も掲げられています。水道水が汚染されると、感染症や下痢など、さまざまな病気のもととなり、これは発展途上国などで多く問題視されている問題になります。しかしながら、2015年～2016年にかけ、アメリカで問題視された水道水汚染や、汚染された水道水を飲んだ市民に健康被害が出た中国の事件など、先進国でも度々問題視されているように、水道水が汚染されるということは、健康にも大きな被害を及ぼします。水道水が汚染されるというのは、人間だけではなく、その他の生物にも影響することになります。

次は、生態系と水の関係について考えていこうと思います。水は大気や土壌、河川、また海を地球規模で循環しています。そのため、一度河川が汚染されると、生態系にさまざまな影響を与えます。こちらで課題として考えられるのは、人間活動による汚染によって生態系が変化しうるということです。ここで、私たちができることとしての提案は、「水域を侵さない、侵してはいけないよ」という情報発信や、清掃活動などの保全活動への参加、また参加の呼びかけなどがあります。

次に少し観点を変えて、観光業における水の役割を考えてみます。ここでお伝えしたいのは、観光業における水の情緒的な価値についてです。そもそも情緒的価値とは、例えば武田信玄がつくったとされる三分一湧水、ただの湧水ではなく、武田信玄が作ったという情緒的価値が追加されているといった、人々の精神的な部分に訴えかけるような価値のことであり、形は無くても、付加価値として働くような価値のことを指します。水という価値を情緒的資源と結びつけて発信することで、より観光業において水の与える影響は大きくなると思います。

このパートの最後として、水と農業の関わりについてお話ししたいと思います。降雨や台風、天災など気象的なもののほか、ここでは特に水田や水路の利用について考えていきます。水田や水路の利用について、現在、問題になってくるものの一つとして、過疎地域での管理者の不足や、農業従事者が減少傾向にあるということになると思います。この課題を解決に導く前に、まず過疎地域の水利用の現状の理解が必要です。そこで、農業用水路などが日常的に使用されている地域の一つである笛吹市芦川町における水利用の現状について詳しく紹介していきたいと思います。



▼戸谷：先ほどお話しのあった農業用水を日常的に利用している山梨県笛吹市芦川町を題材に、暮らしと水の関わりについて話をしたいと思います。皆さんは、暮らしの中の水と聞いて、何を想像しますか。蛇口から流れる水、ペットボトルの水。今の時代、私たちは蛇口をひねったり、お店で購入したりすることで簡単に水を利用することができます。このように私たちの暮らしと水は非常に身近ではありますが、どこか人工的に感じませんか。皆さんは、私たちが普段利用している水がどこから来ているか知っていますか。今の私たちよりも、もっと身近で、ゆるやかな付き合い方をしている場所があります。芦川町は甲府市から車で1時間ほどの自然豊かな場所です。町は周りを山に囲まれ、大きな川と多くの畑が特徴です。自然が美しく、時が穏やかに流れる芦川ですが、問題もあります。芦川は非常に高齢者が多く、日本が抱える問題である少子高齢化社会の縮図のような町です。芦川は古民家がとても多い町です。江戸時代中期以降に盛んになった養蚕をしやすくするために、屋根を切り上げた兜造りの屋根形式の古民家が多く残っています。しかし、年々住民が減少しており、右の写真（上）のように、放置され、荒れ果ててしまった古民家がいくつも存在しています。山梨県立大学安藤ゼミでは、芦川の自然の美しさと、地域の人々の温かさに惹かれ、この芦川を盛り上げるために活動しています。現在は、使われなくなった「古民家えんさ」のリノベーションに着手しています。「えんさ」とは芦川の方言で「縁側」という意味です。右の写真（下）はリノベーション途中のものです。



芦川の問題と行なわれている活動

それでは、メインテーマである水と芦川の暮らしについて紹介したいと思います。右の写真（上）は、芦川町内の道路のすぐ隣を流れる川です。山から流れてくる川は非常にきれいで、ヤマメなどの魚が生息しています。シーズンになると町内外の釣り人が釣りを楽しむ姿をよく見かけます。夏になると野菜やスイカを冷やしたり、野菜の汚れを洗い落とすおばあちゃんたちがいます。芦川に住むおじいちゃん・おばあちゃんたちが子どもだったころは、学校から帰ると桶やバケツを使ってこの川から水を汲み、お風呂にためるのが日課だったそうです。右の写真（下）は、町の中を流れる用水路です。小さなお風呂のようなものは野菜を洗うために設置されたものです。このように芦川町での暮らしと水は切っても切り離せない関係であること、蛇口からの水ではなく、川の水を日常的に利用していることが分かります。



芦川の様々な水の使い方

これらの写真は２枚とも芦川の中でもより標高の高い地域、上芦川で撮影したものです。水路は下流に行くにつれ分かれていき、上芦川の各家や畑に流れます。上芦川ではこの水路を住民皆で管理しており、台風の時は水の流れを調節したり、落ち葉や草刈りを定期的に行ったりしているそうです。芦川の水は住民同士のコミュニケーションを生み出しています。水源は芦川の近くの黒岳の水です。

右の写真は芦川にある古民家、藤原邸と藤原邸の横にある水車です。この古民家は、笛吹市によって運営され、上芦川に住むおばあちゃんたちが日替わりで管理しています。現在は使われていませんが、昔はこの水車と上芦川の水路を利用して粉を挽いていたそうです。芦川の暮らしと水の関係性ですが、川という自然そのままの水との関わり、人工的でない自然の水との密着した関わり、水路の管理や川での活動で生まれるコミュニケーションであり、水は蛇口をひねって出るだけのものでも、人工的なものでもない、身近で温かなものであること、水と密接した関わり方があることが分かりました。芦川の水路ですが、近い将来使えなくなる可能性があります。芦川は少子高齢化が進んだ町です。あと10年もすると、台風の際の水量の調整や清掃など、管理できる人がいなくなってしまいます。少子高齢化対策や新たな水の供給方法を考えなければなりません。





上芦川の水の利用状況

▼田邉：ここからは、太陽光発電についてですが、太陽光発電とは太陽電池を用いて直接、電力に変換する発電方法のことです。屋根の上にあるもの、電気を発電するものなど、さまざまな印象を持っているかと思います。近年、地球温暖化を抑制するために温室効果ガスであるCO_2などを排出しない脱炭素エネルギーが注目されており、特に再生可能エネルギーに注目が集まっています。地熱発電・水力発電・風力発電と多くの再生可能エネルギーがありますが、その中でも最も身近で目にするものといえば太陽光エネルギーですが、日本各地で問題となっているのをご存じでしょうか。

【動画】（※講演の時は、動画を流しました。）以下、動画での会話です。

▼田邉：芦川で「アシガワ・デ・クラッソ」を運営されている山本さんです。芦川町での太陽光パネルの問題を教えてください。



▼山本：芦川町では、太陽光発電でのその事業計画と言われているものは全部で４つ、経産省の固定価格買取制度の認証を受けていて、うち１つは50キロワット未満と言われる施設で、これはすでに施設ができあがって発電をしています。残り３つですけれども、１つはメガソーラーと言われる、わりと規模の大きな発電施設を造る計画があって、これに関して芦川地域の人たちが土砂災害の可能性や景観が悪くなるとか、水源地の汚染など、生活に関わる心配や不安を抱えています。地域の人たちで協議会を作って、事業中止を求めたり、地域の住民の安全を考えた工事方法にしてほしいなど、要望を出しながら協議をしているところです。

▼田邉：今は工事が止まっている状況ですか。

▼山本：そうですね。やはり地域の人たちの反対がある中で、その工事を進めたくないと事業者の人にも思っていただけるので、今回は良かったと思います。しかし、すでに発電をしている50キロワット未満の所に関しては、事業所の人たちがこの地域の人たちにどういう施設ができるとか、安全対策の説明も行わずに、設置と運用をしているので、地域の人たちは不安を感じています。

▼田邉：太陽光施設に代わる再生可能なエネルギーの発電として何が考えられますか。

▼山本：多分、それは地域によって差があると思いますが、芦川町の場合はこの施設の隣に水車があるように、昔からその水資源を活用した生活のしくみというのが息づいていて。この地域内も水路が生活用水としてずっと流れていたりするので、これを活用した形の小水力発電とかであれば、地域に適したエネルギーをつくって、エネルギーの地産地消という部分でも有効なのではないかなと思います。

▼田邉：ありがとうございました。　　～以上～

太陽光パネルの設置による問題の一つとして、土砂崩れがあります。太陽光パネルを設置するためには山肌を削る必要があります。そのため大雨によって地盤が崩れやすくなり、土砂崩れの危険が高まります。芦川だけでなく、日本各地で問

題となっており、岡山県の赤磐市の山では、面積82haのパネルが32万枚設置され、山の斜面で土砂崩れが起き、地元の水田が土砂で埋まってしまう被害が起きました。また、奈良県の平群町では、今年の3月に住民の約1,000人が土砂災害の危険があるとして、太陽光発電の事業者に対して、事業の差し止めを求める集団起訴を奈良地裁に起こしました。森林の伐採で山が丸裸になり、土砂崩れが心配だと言われています。土砂崩れと太陽光発電といえば、ちょうど7月上旬に起きた静岡県熱海市の土砂崩れ災害を連想するかもしれません。このような災害が起きないよう、山梨県でも芦川をはじめ多くの場所で反対運動を行っております。土砂災害以外の課題として、景観を損ねるという問題もあります。自然豊かな芦川には観光地として有名だった場所が、太陽光パネルの設置で被害を受けているなどもあり、使用済みの太陽光パネルの廃棄方法がいまだに明確に決められていません。また、斜面に設置してある太陽光パネルの多くが、そこに住んでいない都会の人や海外の人によって設置・管理されていることなどが問題として挙げられました。

しかし、太陽光発電の全てが危険なわけではありません。山梨県は日本有数の日照時間が多い県です。四方を山に囲まれている甲府盆地では山が雲の侵入を防いでいるため、晴天の日が多く、太陽光エネルギーに適した土地であると言えます。甲府市の米倉山には、大規模なソーラーパネルの発電施設があります。東京電力と山梨県が共同で設立・建設した太陽光発電施設です。米倉山太陽光発電所は、一般家庭の3,400軒分の年間使用電力量に相当する電力を1年間に生み出すメガソーラー発電所です。ここの電力はオリンピックでも使用されました。PR施設「ゆめソーラー館やまなし」では、太陽光発電をはじめとする再生可能エネルギーや次世代エネルギーに関する展示を行っており、環境学習の場としても利用されています。脱炭素社会の有力な燃料である水素を作り出すしくみ「パワーツーガス（P2G）」も行っています。山梨県の長崎知事が強調する「水素といえば山梨」という定着の加速を図っています。今年の6月から取り組んでいるP2G事業は、石炭などの化石燃料を使わないグリーン水素を活用したものです。その水素を液化して専用タンクに貯蔵したり、トレーラーで重要地に運んだり、すでに県内のスーパーマーケットに供給をして、燃料電池の燃料として電力供給に活用されています。このように再生可能エネルギーだから、脱炭素だからといっても、正しく使わなければ、私たちにとって悪影響を及ぼすものになります。次世代につなげていくために、自然と共生し続ける必要があると思いました。



▼中野：先ほどの太陽光パネルの発表を受けて、現在、注目されている脱炭素の取り組みを紹介しながら、将来世代に残したい環境とは何かを考えてもらいたいと思います。脱炭素社会のために再生可能エネルギーへの注目が集まっていますが、芦川では太陽光パネルの設置反対運動が起きたように、一つの方法に頼ったり、他の地域での成功例をそのまま真似るだけでは、環境を守るどころか環境を劣化させたり、その地域の文化や特色を奪うことになってしまいます。近年、環境問題に取り組むのは将来世代に対する義務であると言われていますが、昇仙峡やその周辺に残る祈りの道や芦川のことを調べていく中で、私たちの子どもや孫に残したいのは、地球温暖化や汚染の問題のない環境だけでなく、地域ならではの景観や昔からの伝統的な暮らしに触れて感動を味わい、今住んでいる地域を愛していきたいと思える環境なのではないかと思いました。そのためには、環境問題への取り組み方が、地域の特色を活かせる方法であるべきです。



やまなし4パーミルイニシアチブ認証制度

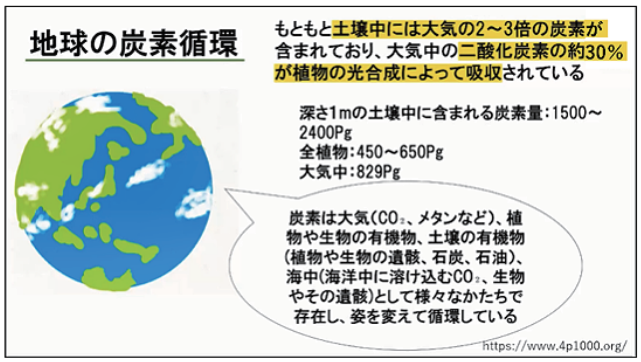


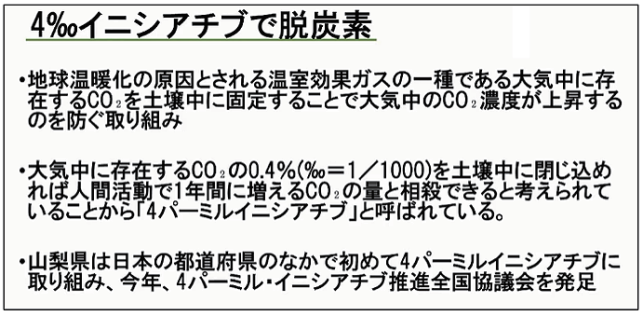


ここでは、山梨県での脱炭素の取り組みを一例に挙げて紹介したいと思います。それは、やまなし4パーミルイニシアチブ認証制度というものです。この制度は、今年の5月より導入されました。もともと4パーミルイニシアチブというものは、フランス政府が2015年のパリ協定で提唱して始まり、現在では世界の623の国と地域で取り組まれている国際的な取り組みです。日本の都道府県では山梨県が初めて取り入れ、山梨県では試験研究と実地実証を進めながら、作物のブランド化をすることで、農業分野での地球温暖化抑制に貢献することを目標としています。「フルーツ王国」と呼ばれる山梨県の強みを活かしながら、脱炭素に貢献できるため、地域の特色を活かしながら環境問題と向き合える取り組みです。またこの取り組みを日本全国に広めるために、4パーミルイニシアチブ推進全国協議会を発足しています。

はじめに、4パーミルイニシアチブがどのように脱炭素に貢献できるのかをお話しします。脱炭素を考える上で重要なのが、地球の炭素循環です。地球の炭素はさまざまな形で存在しており、これらの炭素は常にその場に留まるのではなく、大気中の二酸化炭素は植物の光合成に使われ、植物の有機物となり、植物が枯れると土壌に堆積し、堆積した土壌の一部

は分解され、再び大気中に放出されていきます。石油などの化石燃料の利用で二酸化炭素濃度が上昇したと言われるのは、植物が吸収して植物や生物、土壌中に堆積していく炭素の量より、化石燃料の使用といった人間活動により、大気に放出されている二酸化炭素の量が増え、大気中の二酸化炭素濃度が徐々に増加しているからです。再生可能エネルギーが注目されているのは、化石燃料を増やさなければ二酸化炭素の排出を減らすことができるからです。また、大気中の二酸化炭素の上昇を抑制する方法として、大気中に放出される二酸化炭素排出量を減らす方法だけでなく、大気中の二酸化炭素を植物や土壌などに有機物としてためることでも、大気中の二酸化炭素濃度を下げることが可能であると考えられます。土壌中には大気中の2～3倍の炭素が含まれ、植物の光合成による二酸化炭素の吸収量は大気中の二酸化炭素の約30%あるとも言われています。



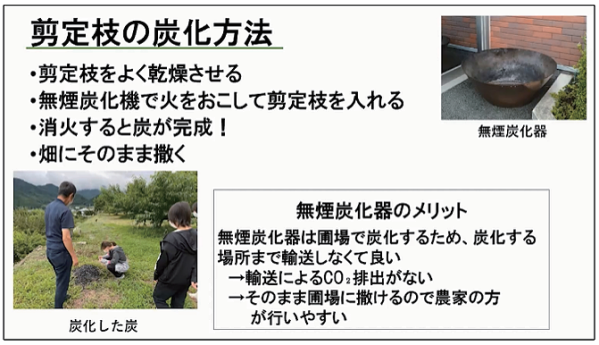


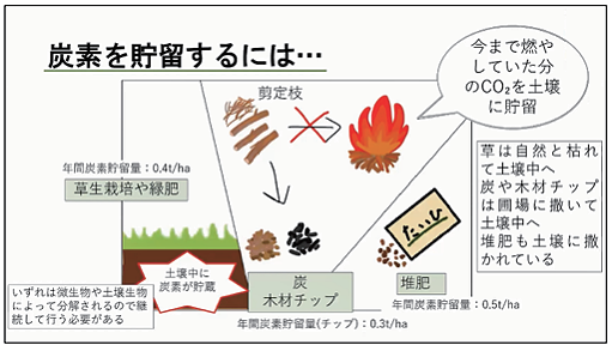
そこで4パーミルイニシアチブでは炭素の貯留量の多い土壌に着目し、植物が吸収した大気の二酸化炭素をより効率的かつ長期的に土壌中に貯留することで、大気中の二酸化炭素濃度の増加を防ぐことを考えています。ちなみに、4パーミルイニシアチブという名前は、大気中の二酸化炭素の4‰（パーミル）、つまり0.4%を毎年、土壌に貯留させることで大気中の二酸化炭素の増加量を相殺できると考えられていることから付けられています。

では、どのように炭素を土壌に貯留させるのでしょうか。土壌中に二酸化炭素は直接、貯留されるのではなく、植物が光合成によって二酸化炭素を吸収し、酸素を放出する際に炭素が有機物として植物の体となり、それらが枯れるなどした際に土壌に貯留されていきます。つまり植物は光合成によって、二酸化炭素を吸収することで、炭素を取り込み、効率よく土壌中に貯めています。この光合成のプロセスを利用すれば、多くの二酸化炭素を土壌に貯留することができます。そこで山梨県では、果樹園における4パーミルイニシアチブを取り入れるために、「やまなし4パーミルイニシアチブ認証制度」を制定し、脱炭素に貢献する農業に取り組んでいます。山梨県の農業は全国と比べて、作付面積割合や出荷額の両方において、果実の割合が5割近くあるという特色があります。モモ・ブドウ・スモモなどのフルーツのイメージのとおり、果樹の出荷割合は全国1位であり、果樹栽培が盛んです。また、この取り組みは、環境問題だけでなく作物栽培にとってもメリットが多く、地域の特色を活かすことができます。

それでは、山梨県の果樹栽培では、どのように4パーミルイニシアチブを行っているのかについてお話しします。果樹栽培における土壌に炭素を貯留する方法は主に3つあります。それは、草生栽培、堆肥、剪定枝の利用です。草生栽培では、草があることで光合成が行われ、草が枯れた時に土壌中に炭素が取り込まれます。堆肥は有機質を含む堆肥の利用によって、土壌中に炭素が取り込まれます。最も注目されているのが、剪定枝の利用です。今までの果樹栽培では剪定枝は全て焼却処分されていました。そのため、果樹が吸収した二酸化炭素は再び大気中に二酸化炭素として戻っていました。そこで、剪定枝を燃やすのではなく、炭や木材チップとして果樹園に撒き、果樹の固定した炭素を土壌中に貯留することで、脱酸素に貢献できます。

特に山梨県が新たな取り組みとしている剪定枝の炭化の方法は、剪定枝をよく乾燥させた後に、下の写真にあるような無煙炭化機に剪定枝を入れて火を起こし、炭になったら消火することで完成します。炭はそのまま圃場に撒くことで、剪定枝の炭素が土壌に貯留されます。さまざまな炭化の方法があると思いますが、無煙炭化機は果樹園内で剪定から炭を撒くまで





行うことができ、作業がしやすいだけでなく、輸送などで二酸化炭素を排出することなく炭化を行えます。草生栽培や堆肥に比べ、剪定枝を木材チップや炭化にする方法はまだ普及しておらず、剪定枝の炭化は時間がかかり、農家の方々の手間が増えることになります。しかし、剪定枝の炭化利用をすれば、炭には分解されにくい炭素が含まれること、今までそのまま大気に返していた炭素を土壌に入れることができるため、炭素の貯留量を増やすことに貢献できます。現在は剪定枝中の炭素の約3割を土壌に貯留させることができますが、剪定枝の水分量などによって炭素の残量が変動するため、今後、より多くの炭素が残る方法を確立しながら、固定される炭素量を推定することが必要です。実際に4パーミルイニシアチブ認証制度に参加しているJAフルーツやまなしの見学では、「4パーミルイニシアチブを知って、初めは、わざわざ焼くのは農家さんにとってもハードルが高いと思ったが、草生栽培や堆肥を継続しながら、地球温暖化の抑制にも貢献できるなら良いと思って認証制度に参加した」という現場の声を聞くことができました。



草生栽培や堆肥の利用は脱炭素が注目される以前から、品質向上のために利用されています。また、炭は土壌改良剤として古くから知られており、作物の生産性の向上に役立つことが分かっていました。具体的には保水性・浸水性の向上、微生物の住処になること、養分を含む土壌の流出を防ぐことなどの作物栽培のメリットがあります。果樹については、フルーツの糖度が上がるなどのメリットもあるそうです。このように、4パーミルイニシアチブが注目されるのは、脱炭素のためだけではなく、農業生産におけるメリットもあるためです。これは4パーミルイニシアチブが注目されるもう一つの理由でもあり、背景として環境問題が農業に及ぼす影響と食糧生産の問題が考えられます。まず、世界の人口の増加が食糧生産に追いつかなくなるという食料問題の懸念があります。4パーミルイニシアチブに取り組むことで、生産の場である土壌の地力を保ち、食糧生産の維持に役立てられます。また環境問題は、農業にとっても影響が大きいです。例えば、地球温暖化による気温上昇や異常気象が発生すると、今までどおりの生産では品質が低下したり、不作になると言われています。このように持続可能な農業を行うことが必要となっており、4パーミルイニシアチブは、持続可能な農業を行うための手段の一つでもあり、地域の農業を支えるためにもメリットがあります。山梨県にとっては、農業や観光業の活性化にもなると考えられます。

食料生産と4‰イニシアチブ

- 4パーミルイニシアチブは地球温暖化抑制のためだけでなく、世界の食料不足問題の解決のためにも注目されている
- 品質そのものの改善の見込み
  →4パーミルイニシアチブの取り組みによって地力が上がる
- 地球温暖化による作物の品質低下や不作
  →緩和策として地球温暖化の抑止効果を見込める
  持続可能な農業を目指すための一つの方法
- 山梨県にとっては農産業や観光産業の活性化にもなるのでは

改善点や課題

- 剪定枝を乾燥させる場所の確保
- 炭化にかかる時間が長いので、農家さんにとって手間がかかる
  →乾燥させた方が炭素の残留割合が良く、かかる時間も短くなる
- 無煙炭化器は炭化器が必要だが、高額
  （現在は山梨県が貸し出しを行っている）
- 4‰イニシアチブ認証マークをみて、消費者の購買意欲は上がる？
  →消費者＝私たちの選択

地球温暖化の抑制だけでなく、地域の農業の活性化にもつながると期待される4パーミルイニシアチブの取り組みですが、剪定枝を炭化させるには改善しなければいけない点もあります。例えば剪定枝を乾燥させるスペースや時間の確保や、また、無煙炭化機は高額であるなどの農家の負担があります。それから今年度は小売店でのイベント、ECサイト、ふるさと納税などで認証のロゴマークが使われたそうですが、4パーミルイニシアチブ認証制度が消費者の購買意欲につながれば、4パーミルイニシアチブ認証制度が広まり、脱炭素に貢献することができます。

本日は今、山梨県が力を入れている4パーミルイニシアチブを一例として挙げましたが、この分科会をとおして暮らしている地域や地元を見つめ直し、将来、次世代にどのように地域を引き継ぎたいのか考えていただけたら幸いです。



▼安藤：皆さん、大変お疲れ様でした。すごく多様なテーマ、環境という切り口をエコパークであるとか、水、太陽光、4パーミルとかいう形で、いろんな観点で切り取っていただいたのかなと思っています。一方で、共通する大事なことがあると感じながら聞いていました。最初のほうで、加賀美さんと風間さんからエコパークの山梨県の例を話していただきましたが、最後、エコパークと日本遺産という2つの制度が共存しているっていうことを言っていました。私のほうから理解するのは、エコパークってどちらかというと自然を保全するっていう考えが強くて、一方で日本遺産はもうちょっと観光を促進するっていう意味合いが、ちょっと強いのかなっていうふうに思いながら、共存というものを聞いていました。実際は、プレゼンテーションの中でも出てきた古道とか自然というものに、人がどう入って関わっていくのかっていうところが、共存というところの制度だけではなくて、人と自然環境とか昔から古いものがどう共存していくのか、それをどうつくっていくのかなっていうのが、これから必要なのかなっていうふうに捉えたんですけども、そんな理解で風間さんと加賀美さん、良かったでしょうか。

▼加賀美：大丈夫だと思います。

▼**安藤**：うん、きっとそうですよね。観光客が入っていくことで起こりうる生態系の変化とか、あとは今まで見つからなかった、埋もれていた道とか、そういうものを活かすことによって、もっともっとこういう地域にハイライトを当てるようなことができるのかなあって思いました。



▼**風間**：はい、加賀美さんのパートで言ったユネスコエコパークは、生態系的な環境保全とか環境をこう守っていこうっていう形ですが、私が説明したのは、その中にある文化といったものも、環境保護ということです。日本遺産としてその場所の観光が活性化すればいいんですけど、その活性化がユネスコエコパーク的な意味で環境保全も守っていけたらいいなと思うので、その両方が共存して、より観光地として良い形に昇仙峡がなっていけばなと思います。

▼**安藤**：うん。そうですね、環境っていうものにも、いわゆる自然環境だけでなく、文化とかつくられたものがあったりして。逆に観光とかで入っていくことによってそこを新しく、さっきのリバイバルプロジェクトみたいに新しい文化をつくっていくよね。きっとそんなことがこれから起こっていくのかなと思って、そこにまぁ私たちが貢献というか、やっていけることがあるのかなと思って聞いていました。次に、水なんですけれども、甲府の水、意外とおいしいですよね。



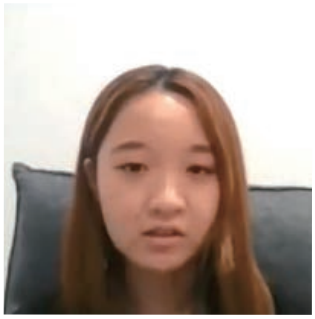
▼**西川**：実際に浄水場に伺った時、あの流入してくる源水を見ましたが、ほとんど透き通っているというか、すごくきれいだなという印象があって。そういった甲府のきれいな水資源を見守っていきたいなという気持ちが強くなりました。今回、いろんな恩恵を紹介しましたが、ただ水道をひねって水が出れば良いというのではなくて、もとをたどって、クリーン活動だったり、そういう活動にも目を向けていただきたいなと思い、水について紹介しました。

▼**安藤**：本当ですよね。いくら技術が進んで、水が浄水・浄化できるようになっても、もともとの水がきれいじゃないとやっぱり限界がある。きっと山梨県にはさっきの昇仙峡という水源に、それをつくってくれる森と泉があって、そこがやっぱりちゃんと残されているからこそ、蛇口ひねって出てくる水がブランド化されておいしくなるのかなと思います。でも、そこの上限に行くと、人が入るような、そこの関係性を保っていかないと、その水っていうものにも影響が出てくるのかなって思って聞いていました。ほんとにね、意外とおいしいんですよね、甲府というか、山梨の水ね。

▼**西川**：そうですね。これもちょっと後で飲んでみようかなと思って。

▼**安藤**：ぜひ甲府に来られる機会があったら、水を飲んでいただければなと。

戸谷さんの発表は、芦川町の過疎地域というか農村地域のことでした。やっぱり暮らしと水のシステムというのがあって、培われてきたものがあるんだけど、戸谷さんが最後に言ってくれたような、人口が減ったりとか、農業に従事する人たちが減ったりすると、そういう水・水路とか維持されるのが難しくなってしまうことがあります。こういう地域の中で本来だとそういうところを維持していく、でもなかなかそれが難しい。



▼**戸谷**：そうですね、芦川の人たちが水路を管理しているという話を聞いて、水路の管理をお手伝いすることができたら、こういう芦川以外の人たちの協力を得ることで、芦川の水路っていうものがこれからも続いていくのかもしれないな、と考えました。

▼**安藤**：うん、そうですね。もちろん地域の人たちが管理しているものなので、外の人がっていうのがうまくいくか分からないですが、例えば水路だけじゃなくて、農業とか。実際、芦川の水路は農業にすごく関係していて、農業があるから、ああいう水路が維持管理されているので、そういう観点からも水路につながるいろいろな生業というか、そういうところに、外から関わる人たちが何か貢献していくことで、地域の支えになっていくのかなと感じました。

太陽光でね、芦川のつながりで行ってくれたんですけど、田邉さん、実際にその直面している人たちの話を聞いて、他人事じゃない感じだった？



▼**田邉**：私は、景観が損なわれるとか、正直そこまで深刻な問題だと思っていなかったんですけど、毎日毎日見ている山に太陽光パネルがあって、それは土砂災害の危険があって、そういう所の下に住んでいるということは、やっぱり不安なんだなっていうことが伝わってきました。

▼**安藤**：エネルギー技術としては新しい太陽光っていうものが、逆にいろんな負の影響というか、起こり得てしまうっていう中で、あのインタビューした山本さんからは、芦川ってもともと水が非常に近くて、そこを逆にエネルギーに変えられたらっていうような視点が面白いなぁっていうか。その地にあった自然体系とかそういうとこからエネルギーをつくっていくことに突破

口があるのかなと感じていました。

中野さんのところで、グローバルだけじゃなくて、ローカルなところからやっぱりやっていかないと、大きなことって結局言えないなと。身近なところで、山梨だったら果樹というものがあって、そこから身近な農家の人とかでもできることというところで、発信っていうか取り組んでいければいいのかなと思いました。実際、道具とか教える人とか、そういうサポートする人がいないと難しいですかね。それともJAさんとかが、農家の人に広げられるようになってきているんでしょうか。



▼中野：山梨県の場合は、県の農政課の方々が力を入れて取り組んでいて、今年の5月から認証制度自体が始まっていて、比較的新しい取り組みなんですけど、去年はその講習会を開いて実演をしてみたりとかしていて、これからもっと広がっていくんじゃないかなと思っています。

▼安藤：ポイントは、そういう新しい技術がある時に、農家の人とかが身近にできるようにすることが大事ですね。農家の人のやる気に、消費者にも価値があるからっていうメカニズムも必要だったり。共通するのが、すごく人と関係していて、生態系的な環境もあれば、文化的な環境もあって。でもやっぱりその地域の人との関係するものがあったり、逆に新しい技術とかを急に導入することよって起こるような歪みもあったりして。本当に人が開発していくもの、人が環境というものにどう認識を持っていくのかなっていうことが、うまくつながるか分からないですけれども、それぞれの要素からちょっと感じながら聞いていました。振り返りも含めて、この分科会どんな学びがあったのかとか、どんな気づきがあったのかを聞いてみたいと思います。

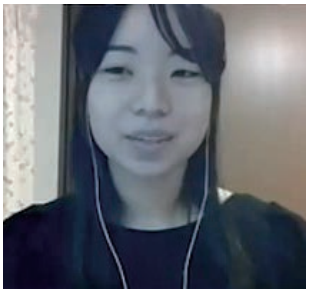
▼中野：与えられたテーマが、環境と山梨県とか甲府市という感じだったのですが、大学で環境問題、環境化学科に学んではいるものの、地域の実際の現場を考えながら環境を考えるっていうことがなく、環境と向き合っていくというイメージがついてなかったので、すごい勉強になりました。

▼風間：最初は環境って完全に理系の皆さんが考えるものだと思っていて。私たちみたいな文系で、しかも観光とあんまり直結した内容じゃないんじゃないかなって思っていました。実際、環境保護とか環境保全という言葉が理系の人たちだけじゃなくて、文系の人たちの学んでいることにもすごく関わっていて、自分たちが考え出したものに環境が大きく関わっていることがたくさんあるんだなって感じることができました。

▼安藤：そうですよね、融合というか自然環境とか理系的なものだけじゃなくて暮らしとかね、社会とかそういうところに非常に関わっていくのかなと、私も今回の発表を聞いて思いました。太陽光のところ、米倉山太陽光発電に訪問させていただいたりとか、あと芦川町を調査していって、こういった2つの大学で異なる分野で喧々諤々しながら取り組んできたんですが、やっている最中から学びはありましたか。振り返っていただいて。

▼西川：何か違う分野から多面的に気づけるというか、一つの分野からだけじゃなくて、いろんな方向から考えるってことも大事だっていうのを知りました。あと、現地に実際に足を運ぶっていうのが一番大事なんじゃないかなぁって思います。観光も環境も、百聞は一見にしかずっていう言葉にあるとおり、現地に足を運ぶことでいろんなことが見えてきたり、自分たちが思うこととかがあると思うんですよね。いろいろな所を見学させていただいたのは、すごい貴重な経験だったなと感じました。

▼安藤：やっぱりそのフィールドというか、風を感じて、触れて、水の冷たさを知って、そこで初めて様子や空気感とかが分かります。あと地域の人の声を聞くこと。地域とか施設の人からはすごくリアルな話が聞けて、きっと皆さんがプレゼンテーションで伝えてくれたことは、そこがバックボーンとしてあるので、しっかりと自分の言葉として解釈されて出てきたんじゃないかと思います。



▼加賀美：そうですね、これまで意識的に環境のことを考えて地域を見つめる、ということがあまりなかったので、視野が広がる一つのきっかけになりましたし、私たちの分野って、環境と観光って、離れてるようで実はすごく密接に関わっているという発見にもなりました。特に笛吹市の芦川にフィールドワークに行った時、すごく感じたのが、会う人会う人が本当に温かくて、戸谷さんからも高齢化社会の縮図のような町というお話があったと思うんですけれども、なくなってほしくない場所とか、その地域ならではの文化とかがあるということを、改めて感じた経験でした。

▼安藤：行かないと分からないですよね。人口減少で空き家が多いとかっていう先入観で行っても、実際、人の暮らしはそこにある。そこの人と話すことによって、暮らしの本当の本質が見えてきますね。今回、環境と観光という切り口で、それぞれの立場からプレゼンテーションしていただいたり、いろんな場所から見つけたものを皆さんにお話ししていただきました。これから皆さんが取り組んでいきたいこととか、これを見ていただいている人と一緒にやっていきたいことなどどうですか。

▼**戸谷**：今回の活動をとおして、発見だけじゃなくて、次世代への問題も多く見つかったので、実際に私たちが何かできることはないか考えて、さまざまな活動に挑戦したいなと思っています。芦川の中で、その水だったり、環境だったりを、水や環境に関する問題を、解決できないかどうか考えていきたいです。

▼**安藤**：次世代という言葉が出てきましたけれど、次世代に残すために自分たちの世代がね、アクションを起こしていけたり、環境について深く考えたりっていうのが、もっともっと形とか行動とかに移っていくと、いいのかなと。次世代と言わずに私たち世代がっていう感じでね。それが次世代につながっていくのかなと思います。

▼**田邉**：はい、今回コロナ禍の中、できないこともたくさんあって。ごみ処理施設も見学したので、本当は富士山のゴミを拾って参拝、日の出を見ようというツアーに参加できなかったので、来月の11月末に行ってこようと思います。また、4パーミルイニシアチブについては、大学で環境を学んでいながら、全然知らなかったので、そういうことも知ることができました。観光も全然知らなかったのに、武田信玄の生まれた要害山について調べてみたり、あと芦川に行ってみて、本当にのどかだなぁと思ったり。いろんな思い出がたくさん詰まった分科会です。

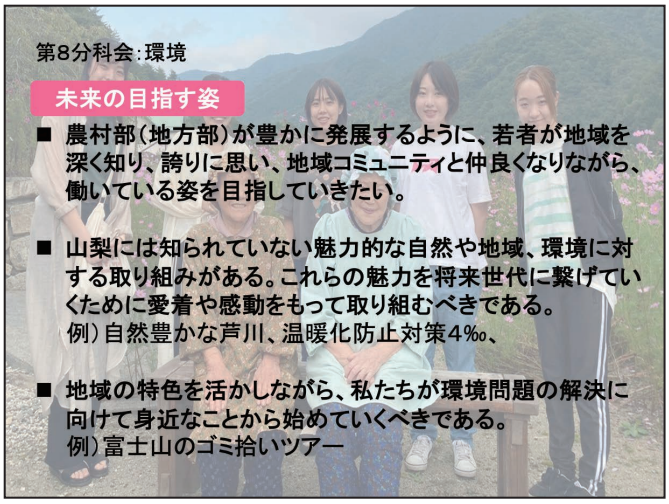


▼**安藤**：ここでできたつながりを次に活かして、一人ひとりであったり、また、皆が協力してね、環境とか観光、地域というものにどんどんアプローチしていければ、素敵なのかなと思いました。

▼**田邉**：はい。皆さん、それぞれこの分科会が終わっても何か頑張っていこうと思うことがあると思います。それぞれ、頑張っていきましょう。イェイ！

▼**全員**：イェイ！皆さま、ありがとうございました！





パネルディスカッション

生まれてから死ぬまで地域で暮らすために
～介護・福祉・医療・教育の連携でつくる未来～

コーディネーター
大塚 ゆかり
山梨県立大学
人間福祉学部教授

パネリスト
青柳 暁子
山梨県立大学
人間福祉学部准教授

パネリスト
佐竹 真紀
デイサービスセンターつづく
代表取締役

パネリスト
露木 里恵
暮らしの保健室
晴ればれ代表

パネリスト
前川 有希子
山梨県立大学
人間福祉学部講師

パネリスト
望月 こずえ
助産院peekaboo院長



【第1部】



▼大塚：皆さま、おはようございます。この第9分科会は、人が生まれてから死ぬまで、自分が暮らしたいところで暮らすためにはどうすればいいか、ということをテーマに検討を重ねてきました。山梨県内で活動している女性を中心とした現場の方たちの話を伺う中で、人が暮らしていきたいところで暮らすということを考えていきたいと思います。コーディネーターの山梨県立大学の大塚と申します。よろしくお願いいたします。「日本女性会議2021 in甲府」では、個の多様性や多様な価値観の尊重を大切にしています。そうした中で、多様な価値観とは何か、それを具体的に地域でどのような活動をしていけば、お互いに理解が進むのかを考えていきます。では、パネリストの方々、自己紹介をお願いいたします。

▼青柳：山梨県立大学の青柳と申します。よろしくお願いいたします。

▼前川：山梨県立大学の前川と申します。今日はどうぞお願い申し上げます。

▼佐竹：山梨県甲斐市で、「デイサービスセンターつづく」を運営しています、佐竹と申します。よろしくお願いいたします。

▼望月：山梨県笛吹市で、助産院と訪問看護ステーションを営んでおります、望月こずえと申します。よろしくお願いいたします。

▼露木：山梨県甲府市で訪問看護と介護に関わる仕事をしております、露木です。よろしくお願いいたします。

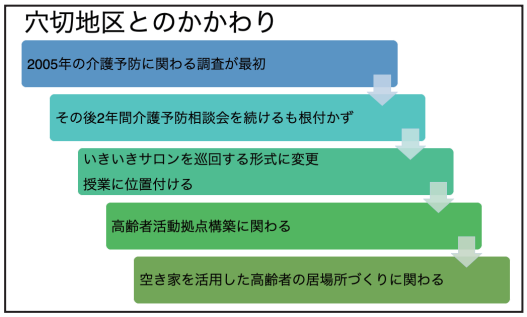
▼学生：山梨県立大学の学生です。よろしくお願いします。

▼大塚：ありがとうございます。このようなメンバーで本日は進めていきたいと思います。パネリストの方たちは、山梨県内で事業を立ち上げ、訪問看護や介護予防、助産院といった人が、生きていく中で必要なことを実践されています。その中から見

えてきた課題や、これからの未来を考えていくにはどのようなことをしていけばいいのかを話し合っていきたいと思います。時代は変わってきていて、女性の働き方や暮らし方もかなり変わってきています。そのような中で、今、私たちに何ができるのか、これからにつなげていけるのか、ということを考えていきたいと思います。では、パネリストの皆さん、まず現在の活動を紹介してください。



▼青柳：大学の周辺地域・穴切地区で活動を行っています。私自身は、山梨県立大学で地域研究交流センターという、地域との連携を図る部門で部門長をしています。現在、3つの活動を行っています。1つ目は穴切地区のいきいきサロンでの介護予防相談会、2つ目は穴切地区をモデルとした高齢者拠点構築、3つ目に穴切地区の空き家を活用した高齢者の居場所づくりです。穴切地区は、山梨県立大学飯田キャンパスの周辺地区ですが、大学との関係はあまり深くありませんでした。ぜひ、仲良くしようということで、穴切地区にお願いすることになりました。そもそも3つの活動はどのようになったのかと言いますと、2005年、介護予防に関わる調査を穴切地区にお願いしたのが最初です。



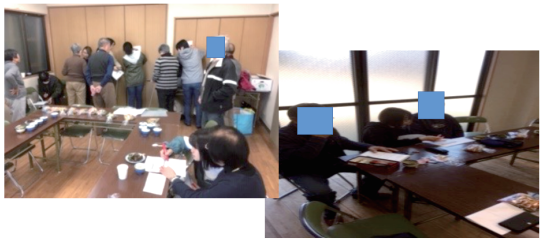
それから２年間、介護予防相談会をしましたが、あまり根づきませんでした。最初の1年は100人くらいおいでになったのですが、その後なかなか人が集まらないということで、地域に7カ所あるいきいきサロンを巡回する形式にしました。授業にも位置づけ、学生がそこに行って介護予防をするようになりました。すると、住民の方から高齢者の活動拠点をつくらないかというお話があり、高齢者活動拠点構築に関わりました。その後、甲府市から最近問題となっている空き家を活用しませんかというお話があり、たまたまマッチングしたお家が穴切地区にありました。そこを中心に色んな活動をしようと、今

大学での介護予防相談会の2年間ですが、いろんな方に来ていただき、学生と一緒に取り組みました。介護予防相談会の方法は、東京都健康長寿医療センターで介護予防運動指導員の免許を取り、そのシステムをそのまま使わせていただきました。ただ介護予防をするだけではなく、介護予防の相談もできるように地域包括支援センターにもお声かけをして、最後に相談に乗っていただくようにしました。何人かが相談をして、地域包括支援センターにつながりました。介護予防に関しては、片足で10秒立てるかどうかというようなことをしています。また、東京都の健康長寿医療センターから出された「おたっしゃ21」という質問項目をもとに握力などを測りました。また、大学の太鼓クラブにも入っていただき、太鼓を触って楽しんでいただいたり、ゲームや指編みをしたり、楽しみながらできる介護予防も企画しました。しかし、人が集まらないということもあり、これを巡回式にしました。公民館に出向き、体組成計で体調を見てもらったり、結果を説明したりします。巡回型の介護予防相談会では、測定結果を学生さんが説明するということをしています。それから高齢者拠点構築の件ですが、これは今、山梨県立大学の重点テーマ研究に採択されています。拠点づくりを模索されていた自治会長さんからお話があり、大学としてバックアップすることになりました。

大学での介護予防相談会の2年間

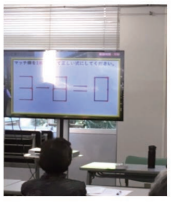


巡回式に変更



当初、最初の案としては、穴切小学校という廃校になった小学校の教室でボランティア・将棋・囲碁・編み物・陶芸・園芸・ダンスを考えていました。教室ごとにそれぞれの活動を行い、拠点とし、行き来できるようにしましょうというものです。しかし、コロナ禍になったため、教室ではなく、体育館で距離を置いてワークショップをしましょうとなり、ところがさらにコロナ禍がひどくなり、禍がひどくなり、今は、YouTubeを活用したやり方をとっています。このような活動の課題としては、マンパワーの問題もありますが、連携の問題として、地域のさまざまな組織とのすみ分けや連携のあり方を考えていきたいです。私がやっている3つのことだけでも連携がうまくいかないので、連携のあり方というのも考えていき

コロナ禍での案



YOUTUBEの活用



たいし、同じような形態の組織との連携、どのような連携のあり方がよいのか、持続可能なフレキシブルな連携のあり方を考えていきたいと思います。



▼前川：私は「いつまでも地域で暮らし続けていくために~足の健康、気にしていますか?~」という内容でお話をさせていただきます。子どもが生まれると日々成長していきます。親としては子どもに「這えば立て、立てば歩け」という期待を寄せ、2本の足で歩くと喜び、満足します。歩くことは自立という意味合いを含めているからだと考えています。地域でいつまでも自分らしく暮らしていくためには、自分の意志で立ち、自分で目的に向かい歩いていくことが求められます。皆さまは自分の足をじっくりと見たことがありますか。歩くために、足を気にされていらっしゃいますか。私は山梨県立大学で、介護福祉士を養成する教員です。心身状態が悪くなり、誰かに生活の中で支援を受ける状態になっていくことは、年齢を重ねていくと当たり前のことです。

しかし、好んで要介護状態になるのではありません。いつまでも自分の足で歩くためには、その心構えとそれに向けた行動が必要です。そのために、皆さまには足の健康に意識を向けてほしいと考えています。馴染みのある地域で暮らすためには、歩く能力が必要です。私は甲府市内の山間地に出向いて、お住まいの方に足を見せてもらう活動をしています。歩くためには適切な靴を履きます。靴を履くためには、足の爪を整えることが必要です。皆さま、足の爪は自分で切れますか。足にタコや魚の目、痛いところはないですか。私は、住民の方たちに「足を大事にしてね」とお話をしています。皆さま、ご自分の足の状態をご存じですか。足のどの部分に体重がかかっているのか、足の裏の形はどのようになっていますか。私はフットプリントという足の形を取る様式を使って、皆さまにご説明をして、目で見ていただいています。外反母趾や偏平足、タコや魚の目の具合を見て、適切に対応してほしいです。これは、ある方のフットプリントですが、足の指が4本しか写らず、後ろに体重がかかりながら歩いている様子が確認できます。



そもそも私が足の健康に興味を持ったきっかけをお話しします。山梨県は健康長寿日本一で、大学の隣のグラウンドでも、グラウンドゴルフが盛んに行われ、元気な高齢者がとても多い印象を受けます。しかし、施設で実習巡回をしているうちに、高齢者には足の爪が変形している事例が多いことに気づきました。歩けないのは、筋力が弱まったと決めつけるのではなく、歩くためには、きちんと靴を履く。そのために、爪の様子や指の形、足の健康について、足全体からアセスメントすることが必要だと考えます。高齢者になってから気を付けるのではなく、日々の習慣になれば良いと思います。究極の介護予防は乳幼児期からと言われます。この分科会で作成したパンフレットの中に、「足の骨の数はいくつか？」というクイズを入れました。(答えは、片足28本です。)子どもが概ね1歳になると靴を履き、足は靴と大きな関係性を持ちます。概ね18歳で足の成長は止まると言われていますが、この18歳までの間に、健康的な足をつくっていかないと、歩きにくい足とともに生きていくことになります。成長期である子どもたちが写真のような靴を履き続けていても、健康な足を維持できるのか、ということは非常に大きな課題です。足の健康は、子どもから高齢者まで皆に共通する課題だと思います。



私が、今後目指すものは、人が生まれてから亡くなるまで、その人生を自分らしく生き抜くために、生涯、歩行が可能である足の健康への意識づくりです。いつまでも歩くための足づくり、足が健康でいるという考え方や行動に対して、この山梨から発信していきたいと考えています。



▼望月：山梨県笛吹市で助産院と訪問看護ステーションを営み、骨盤ケアや母親学級なども行っています。県内の総合病院、個人病院を経て、最初は出張専門でスタートし、県外での研修の後、2012年に甲府市で助産院をスタートしました。助産院と言っても、骨盤ケア、赤ちゃんのケア、周産期の体のケアを中心に行っていました。出産については、オープンシステムと言って、病院での分娩室を借りて、検診を病院と助産院を交互にして、出産は必ず私が行くというスタイルです。5年前、石和に移動し助産院をしています。10年以上やっていると、社会情勢により産む人も赤ちゃんも体が変わってきているのを実感しています。例えば、骨盤ケアのベルトは10年ちょっと前まではSとMがたくさん売れていましたが、今はSが全く売れず、Mもまれで、LかLLサイズが主流で、骨盤の広がりが大きくなっていることが分かります。ニーズも変わってきています。体、心、夫婦問題などがすごく多く、お財布の紐も固くなっています。

今のままだと私たちの活動が必要な人に届かないと考えていた一昨年、今日のパネリストでもある露木さんとの出会いで、訪問看護ステーションを始めさせていただくことになりました。露木さんから、「助産師さんも訪問看護できるわよ」と言われ、全く頭の中になかったことなのでびっくりしましたが、もっと活動が広げられるのではないか、たくさんの人のニーズに答えられる場所になるのではないか、と思い、スタートしました。最初は周産期に特化したところや医療的ケア児が中心でしたが、今年の4月からは職員も増え、介護保険の分野や在宅療養の方のところに行っています。出産は現在もオープンシステムと自宅出産をしていますが、出産数は減っています。助産院で出産しようと思っていた方も異常に傾いてしまうことがすごく多く、なかなか助産院や自宅での出産数は上がっていきません。産む施設は足りていますが、異常出産が多いこと、妊娠中や産後のトラブル、悩みがとても多く、一人に関わるサポート量や時間を要し、マンパワーが足りていないと感じています。社会情勢の変化もあり、助産院は経済的に余裕がある方でも、1人目は来れたけど、2人目、3人目は経済的に利用できないという声もたくさん聞くようになって、なんとか料金を下げようかと考えたのですが、料金を下げると助産院の活動や私たち自体も生活できなくなってしまうということもあり、露木さんとの出会いにより、私たちも利用者も助けられたのではないかと思います。


アロマタッチ


各種指導


まなびの場：マザークラス(MC)


オリジナル整体(赤ちゃんから大人まで対応)

訪問看護を始めて感じたのは、助産院に来ている方は、ほとんどの方が母乳育児はうまくいっていたのですが、病院の依頼で伺った方たちは、母乳が出ない人や母乳が出ても赤ちゃんが飲めないケースが多いということ。おっぱいで困っている人がこんなにもたくさんいることを目の当たりにしました。母乳育児は妊娠・出産が大きく影響して、大変なお産だと、その後のメンタルも不安定になり、赤ちゃんの状態も変わってきてしまいます。訪問看護により、自分たちが助産院としてやりたい主軸に気づかせてもらいました。

課題としては、時代の変化や核家族化、県外の方の移住者も増えて、子ども一人に関わる大人の数が減少しています。コロナ禍でさらに深刻になっていて、母親へのサポーターが少なく、地域で関われる場所、環境が縮小し、孤独に子育てをしている人が増え、夫婦関係にひずみが出てしまったり、親子関係にもひびが入ったりもしています。その環境が虐待・DVが増加する背景と大きく関わっているのではないでしょうか。だからこそ、私たちの関わりや地域への関わりがすごく重要だと感じます。しかし、そこにまだ手が差し伸べられていません。

助産院ではほとんど外部と連携をとることがなかったのですが、訪問看護を始めたことで、病院からの依頼で必ず医師とのつながりがあるということ、病院スタッフとのつながりはできました。しかし、私たちから発信するつながりは助産院をやってきた時から少ないと感じているので、地域で活動する者同士の連携には難しさを感じています。



▼佐竹：山梨県甲斐市で「つづく」という小さなデイサービスセンターを運営しています、看護師の佐竹です。「つづく」をつくるきっかけは、私の子どもが学校に行けなくなったことから始まっています。当時、私は過疎地域の集落支援員をしていましたが、精神的に落ち込み、学校に行けない子どもを置いて仕事にいくことが難しいと感じ、泣く泣く仕事を辞めました。その期間に子どもといろんな体験をして、なかでも一番が耕作放棄地を100坪ほど借り、何も農業の知識が無い状態から、クワ一本で開墾を始めたことです。この畑自体が「つづく」の第一歩になりました。そのころは、上手くいくか分からないけれどチャレンジから始めて、趣味で始めた知識で食べられる草を探したり野菜を採ったり、集落支援員をやっていた時に狩猟免許を持っていたので、たんぱく質は山からもらい食生活を営んでいました。



しかし、だんだん家計が苦しくなり、お金が無いと生活できないな、でも子どもを置いて仕事には出られないとすごく悩みました。子どもと一緒に働ける場を探しましたが、なかなか無かったので、それであれば自分が過ごしやすい場所を作ったらどうかということで、自分でデイサービスを立ち上げることにしました。その際に「こうだったらいいな」という自分なりの幸せの形を考えてみました。自分を必要としてくれる人がいること、家と同じくらい快適に過ごせる場所、一番は、

子どもと一緒に過ごせて安心でき、私自身が働くことができる場所。そういう場所を目指しました。デイサービスセンターの名前は「つづく」。連続ドラマのエンディングに出てくる「来週につづく」という意味の「つづく」です。皆で普通の生活を思いきり楽しむための場所で、次に来ることを楽しみになるような、ワクワクした気持ちで待っていてほしいという思いを込めています。「つづく」では、現役や元農家さんに指導してもらって皆で畑を作ったり、各家庭で味の違う郷土料理のほうとうを、利用者さん主体になってもらって、「今日は○○さん家のほうとう」という形でほうとう作りをしたり、元パン屋さんにパン作りなどできることを教えてもらって、スタッフが利用者さんを支えるだけでなく、スタッフも利用者さんに支えてもらいながら生活をしています。天気が良ければ外へ出て、気持ちの良い空気を吸いに行きます。お昼には一緒にご飯を食べながら、一緒にその時を共有していきたいと思いながら時間を過ごしています。

私自身は看護師ですが、病院で働いていた時に、病気の治療のためにさまざまな制限をすることにとても違和感がありました。自分の中で記憶に残っていることは、亡くなる直前の方の病室に行った時、その方が「歩きたい」と言うので、家族が起こしてどうにか足踏みをしている場面を見ました。看護師として私もご家族と一緒に支えたいと思い手伝っていたら、先輩の看護師からものすごく叱られた経験があります。また、三交代勤務の勤務後に看てあげたいなという看取り期の患者さんがいて、横に付いていたら、先輩の看護師に次の勤務の人が働きにくいから帰るように言われ、帰ったのですが、次に自分が勤務で来た時には、その方のベッドが空っぽになっていました。そういうことの一つひとつが自分としては不消化で、病院の医療は自分には合わないと悩んだ時期もあります。

私が介護業界に入った入口は、障害者施設でした。まるで一つのまちを表しているようなところで、病院勤務の時は絶対に言えなかった「またね」「会いたかったよ」という言葉が普通に出てきて、ホッとしました。会いたい人に会いに行けるという当たり前のことに病院勤務ではできないと気づきました。


小さな村　計画　イメージ

右のイメージは、私が妄想している「小さな村計画」です。ベースは山になっています。子どもが辛かった時期に山の恩恵をすごく受けたので、山にはいろんな資源がたくさんあることを知っています。そこに小さな小屋をいっぱい建て、若者がパソコンで外部に情報を発信したり、力仕事をしてくれたり、山を知っている年配の方や農家の方の知識をもらい、皆で食べられるものを生産して暮らせたらいいかなと思います。自分では何もできなくても、その人がいるだけで周りがほっこりする、それがその人の役割になっていくような場所ができればいいと妄想しています。どんな状態になっても、いくつになっても皆、何かしらの役割があって、認め合える場所になっていくといいなと思います。



今は、「つづく」の人たちが地域に認められ、溶け込んでいける場になっていければいいなと思い、活動しています。今、近所にある公園を借りて高齢となった自治会の人たちの代わりに、利用者さんが草むしりや花を植えたりなどの管理をさせてもらっています。そこに地域の人たちも水やりをしてくださったりしていて、少しずつ地域が動いている姿を見ると、とても嬉しいです。これから寒くなるので、庭で味噌汁を作り、誰でもやって来て腰掛けられるようなベンチを設置できたら、地域との交流が生まれるのではと計画しています。「つづく」に来ている利用者さん同士はとても仲良く触れ合っています。また、学校ではない場所に居場所を求め、「つづく」とつながった子どもたちも来てくれています。利用者さんのマスクを手縫いで作って届けてくれたり、利用者さんの100歳の誕生日にギターを演奏してくれたりと関わってくれていました。「つづく」の利用者さんは、60代から101歳までとさまざまです。雰囲気は利用者さんに任せています。毎日、何が起きても楽しめるような場所なので、わくわくしながら過ごしています。利用者さんの背景もさまざまなので、行政と連携することも多いです。また、地域の中には、相談先も分からず、困っていることも口に出せない人がたくさんいると思います。実際、「つづく」とつながった利用者さんの中にも、日々のお買い物・ゴミ出し・受診など小さな困りごとが埋もれていると実感しています。そういうところをみると、介護保険上の制度だけでなく、地域の人たちに合ったものが構築できればいいと感じています。ただそれをどう形にするか、どういうふうにしたら困っている方に出会っていけるのかが課題です。また、私たちがどのように柔軟に対応できるかを今一度考えていかなければならないと思っています。

▼露木：株式会社洗心代表で訪問看護師の露木里恵と申します。本日は「病気になっても、障がいがあっても、住み慣れ

た地域・家で暮らし続ける、そして死ぬために」と題してお話を聞いていただきたいと思います。次ページの写真は、私が35歳の時、第1子を妊娠中、白血病を発症し、出産後に抗がん剤治療を受けている様子です。子どもを背負い、24時間点滴を受けています。当時、白血病は死亡率が高く、長い期間入院が必要な病気でした。私は、子育てをすることなく死んでしまうことがどうしても受け入れられず、死ぬのなら家で子育てをしながら死にたいと本気で考えました。当時は長い入院が必要だと言われてのですが、病院の先生や看護師・往診の先生・訪問看護師に無理を言って、家で治療することを選びました。結果、こうして白血病を治すことができました。





白血病な訪問看護師

私は私と同じように病気になっても家で暮らしたい人のために、訪問看護を一人で始めました。何の宣伝もなく、一人ひとりの患者さんと向き合う訪問看護師をしていたころ、一緒に働きたいと考えてくれる看護師が集まり始めました。「病気になっても住み慣れた家で生活したい、その暮らしの中、家で看取ってあげたい」という思いに賛同する仲間が増えていきました。看護師一人では、叶えられない患者さんの希望も、仲間と一緒なら叶えられると実感した時期です。2012年、株式会社洗心、訪問看護ステーションつゆきを設立しました。当時は看護師7人、事務員3人の会社でした。看護師だけでは患者さんの生活を支えきれないので、ケアマネージャー、ホームヘルパーともつながり、さらに仲間が増えていきました。それは、社員を雇用するという考え方ではありませんでした。同じ理念を持っているか、持てるか、その理念に向けて一緒に活動できるかが大事でした。住み慣れた地域、家で暮らし続ける。それを支えることが私たちの使命だと考えて働くということが大事でした。そういう仲間が徐々に集まって増えていきました。

私たちの活動の核となる部分に、第2の我が家づくりがあります。一人暮らしや核家族、家で最後まで暮らし続けたくてもできない方のために、第2の我が家を作りたいという思いで、お家をつくりました。ここは施設と同じようなケアを受けることができますが、少し施設とは違います。何をしたいか、どう暮らしたいかは自分で考えて決める。そして一緒の家族である他の利用者さんや職員と譲り合って暮らします。できることがある人は、自分のためにも仲間のためにもできることをするという考え方です。タバコやお酒も話し合って決めます。動物を持ち込むことも、初めから拒否することはありません。利用者さんのジュンちゃんは生まれながらに障がいを持っています。ジュンちゃんの周りは彼のお母さんのような女性たちで、ジュンちゃんがリビングに来ると皆が集まって来ます。お世話をする若者の職員はジュンちゃんにとっては弟のような存在で、ジュンちゃんは世話をしてもらっているにも関わらず、小言を言ったりします。また、がんを患い、一人暮らしで治療を続けていた男性もいました。彼は病院での治療より、第2の我が家での生活を選びました。彼が余命1週間になった時、最後の希望を聞くと一緒に暮らす皆との花見を希望しました。食道がんでしたので食事はできませんでしたが、大好きな焼酎を飲みながら、隣の仲間に天ぷらを取り分けてあげている様子が忘れられません。利用者さんが他の利用者さんの食事の様子を気にかけたり、90歳を超えたおじいちゃんが子どもに離乳食をあげて、あやしている姿も見られます。第2の我が家なので、私の息子も、医者の主人も、一緒に食事をすることがあります。食事の準備は75〜80歳の利用者さんだった高齢者が一緒に働いてくれています。

一緒に働き続ける高齢の仲間







高齢者の中には、一人暮らしや生活保護を受けていたり、誰ともつながっていないばかりに病気になったり、元気を失っていた人も多くいます。でも、私たちの家に来て、元気と活力を取り戻し、まだまだできると考えています。人のために、自分のために働いてお給料をもらい、尊厳を持って暮らしています。私が病気だった時、子育てに協力してくれた職員が、今75歳を迎えました。でも定年はありません。明日から利用者さんになる日まで働き続けますと笑っていいます。職員のお父さん、お母さんも我が家の利用者さんになっています。自分一人で親の介護をしようと思ったら、仕事を辞めなければならないという女性も多いと思いますが、職員100人が束になってかかれば、時間の都合をつけて乗り切ることができます。私も主人の母親・自分の父親を、看護師・ヘルパー・ケアスタッフに託し、朝から晩まで仕事に没頭しています。夜、家に帰って、2人がすやすや寝ている顔を見るのが楽しみです。当社の職員は100人を超えました。その90%が女性です。シングル、がん経験者、親の介護をしている人、医療ケア児の母親など。皆でつながっていることで、一人ひとりが孤立せず、社会の一員として胸を張って生きています。

また、私が運営する「暮らしの保健室晴ればれ」では、看護師が作る健康料理をとおして、一般市民の皆さまの中に飛び込んでみました。私が思っていた以上に皆さんにとって、看護師は病院の中にいるものとして認識されていました。

看護師がまちの中に出て地域住民とつながることで、皆さんが必要としていることが分かるし、お役に立てることが見つかると感じました。コロナ禍で集まることはできないですが、がん・子育て・介護・医療などの相談を気軽にしていただき、つながりを広げています。私たち女性が新しい試みを行おうとする時、儲けたいと考える人は比較的少ないと思っています。私も儲けたいという考えはなく、私自身が自分で考え、運営できるものが欲しいと思って会社をつくりました。ホスピスホームや有料老人ホームで、人が暮らし安心して死ぬことができる場所が今の甲府には無かったため、私たちが作ってしまえばいいと思って開設しました。利用者さん・患者さん・職員・その家族が大きな家族の一員となる家のようなものでつながりながら、生きていける場所を作りたいと考えています。10年間、つながりは徐々に広がっています。起業し、会社をつくることが目的ではなく、暮らしていく家をつくり、同じ方向を向く家族をつくり、その中で病気、障がいがあっても、住み慣れた地域や家、暮らしの中で死んでいくことができるしくみを作ることが私たちの望みです。

▼大塚：これからディスカッションに入りたいと思いますが、今の活動紹介の中で追加はございますか。

▼青柳：高齢者の拠点として廃校となった小学校を使うという話で、今はYouTubeを活用していることについてです。YouTubeをモニターに写し、運動やクイズをするやり方をしています。コロナ禍ではこれが精一杯で致し方ない思いです。また、空き家活用については、学生さんに任せていましたが、学生さんがやっていく中で難しい部分がありまして、今は滞っています。

▼佐竹：地域に根差すのに、訪問看護ではなくて、なんでデイサービスなのかと聞かれることがあります。私の中ではデイサービスは、施設に入っていない入院もしていない方たちなので、自分の意志でいろんなことを決定できるギリギリの段階だと思います。利用者さんのやりたいこと、生きたい場所、会いたい人などの希望を何かしらの形で一つひとつ叶えていけないかなと思いデイサービスを始めました。実際、がんの末期の方も利用されていて、県外から来た方は、富士山を一回見てみたいというので、職員と一緒に富士山にお連れし、「一番いい風景を見たよ」と喜んでいただきました。デイサービスの機能として、良いのか悪いのかは自分にもよく分かりません。ただ、制度上に乗った形で違反にならない範囲で、できる限りの精一杯ができたらいいなと思っています。

▼大塚：今回、社会福祉を学んでいる学生さんたちも参加しています。5人のパネリストのお話を聞いて感じたことはありますか。

▼学生：地域に出ることの大切さをすごく感じました。どなたも、施設の中に留まるのではなく、地域の人とつながることを大切にされていることが分かりました。その中で、支え合うことを自分一人ではなく、周りの人とやっていくことが大切なんだなと感じました。

▼大塚：パネリストの方たちで、お互いに質問などはございますか。2部にもつなげていくことになりますので、発言をしていただけたらと思います。

▼露木：皆さん、病院や助産院など、もともとあるしくみに留まらず、おもてに飛び出していき、自分たちの可能性を広げていく。でもそれが意図ではなく、人から必要とされることになんとか応えていくために、作り出したり、自分の価値観を変えたりして頑張っていらっしゃるんだなと感じました。同じ実践者の中でも、生まれてくるお子さん、産むお母さんに着目している望月さんと、デイサービスという中で制度を超えた可能性に着目したり、私は死んでいくところまでと、持っている資格が同じでも、着眼点は違うと思いました。また、大学の先生は結果を出すまで統計を取ったり、その後、どういった結果を導くかを考えていらっしゃるので、ぜひつながっていきたいと思っています。質問としては、前川先生の足のお話が今後どういう展開をなさるのか興味があります。一つの部分に注目しながらそれを一生涯に広げていこうと考える前川先生の活動について教えていただきたいです。

▼前川：私は山梨県立大学で介護福祉士の養成教育に携わっており、私のフィールドは、高齢者あるいは障がいのある方たちが中心になっています。ただ、健康な足をつくるためには、乳幼児期からの取り組みが必要不可欠です。乳幼児期のファーストシューズからきちんと履かせてほしいと思うと、望月さんが関わっていらっしゃる妊婦さんのママさん教育にもライフステージ全てにおいて足の健康は関わってくるかと思います。

▼望月：私も元々、骨盤ケアは妊婦さんや産後の方にしてきたのですが、赤ちゃんの発達と合わせて、足がすごく大切だと思っています。立って歩いている赤ちゃんでも、足の反射が消えていない赤ちゃんがたくさんいて、反射で歩いているので、すごく疲れてしまったりとか、そこから寝不足・夜泣きにも関連しています。赤ちゃんが生まれてから歩くまでの人としての学んでいく過程が大事です。足の5本の指がきちんと使えているかのチェックも、来てくれている赤ちゃんにはできるのですが、来てもらっていない赤ちゃんはすごく心配です。大体、ほとんどの赤ちゃんが足の反射が消えないまま立っている現状なので、ぜひ前川さんとは今後もつながらせていただいて、訪問看護とは別になってくるんですが、助産院の活動として今後何か一緒に活動ができればと思います。

▼青柳：皆さんのお話とは変わってくるんですが、私のところは、学生さんが間に入ってくるので世代間交流ができます。しかし、学生と子ども、子どもとお年寄りという世代間交流がなかなか難しいので、望月さんやデイサービスなどと連携でき

れば交流できるのではないか、そうした連携も必要ではないかと感じています。

▼大塚：佐竹さんは子どもから高齢者に向けた活動だと思いますが、皆さんのお話を伺っていかがでしょうか。

▼佐竹：私の場合は必要だったから今のようになったという感じなのですが、世代間交流が必要だなと思うのは、今、核家族世帯が多くなっているので、親から怒られた時におじいちゃん・おばあちゃんといった、ワンクッションになってくれる人たちがいない家がとても多いことが背景にあります。おじいちゃん・おばあちゃんはどんな時でも「あんたかわいいね」「賢いね」と言ってくれるので、子どもの心が支えられることが多いかと思います。いろんな世代で交じり合っているというのは、一直線のつながりではなく、いろんな方向にベクトルが向いて、落ち込んだ時にも支えてくれるクッションがあるというのは重要な役割になると思います。それでも多世代間で支え合っていく動きは必要だと思って活動しています。

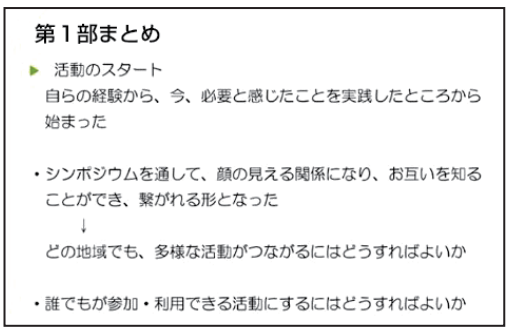
▼大塚：皆さんのお話を受けて、第1部を考えてみたいと思います。今回、パネリストとして出ていただいたのは、知り合いから知り合いを伝い、素敵な活動をしている女性たちがいるよねってことで始まりました。皆さん、「人は生を受けてから死ぬまで、自分の思うように暮らせたら一番いいよね」ということは共通していることだと思います。その中でそれぞれ今までやってきたことを生かしていくこと、地域をつくっていくことになるんじゃないかという発想でこの分科会があります。今回のお話から、儲けるということではなくて、自分自身も含め、一緒に活動していくことがすごく大切だということが共通しています。私も地域活動に一市民として参加して、一緒に活動してお互いに支え合うということは、どのような活動にも共通していると感じています。ただ、皆さんそれぞれの活動をそれぞれの地域でやっているので、対象になる方は限られてきます。山梨県全域を対象としたりすることは難しく、仕方のないことですが、少しずつつながりながら、露木さん、前川さん、望月さん、佐竹さんという中では重なりもありますし、青柳さんも高齢者を対象とした部分では重なりがある活動がそれぞれあって、それをどういうふうにつなげていくかが、今後の課題になると思います。

実際のまちづくりや地域・山梨県・甲府のことを考えると、システム化するとか、定期的にミニ女性会議というか、この分科会のようなテーマで継続して関わっていくことが必要だと思います。皆さんのような方が近くにいる住民は幸せだと思いますが、山梨、甲府の方が自分の人生を考えた時に安心して暮らせるためには、貧困とかコロナで大変な状況もありますが、そのような中で課題を解決していかなければなりません。第2部では、個々の活動をどう連携していけばいいのか、若い人たち含め誰でも参加しやすい形を作るためには、どうしていけばいいのか。そして何よりも、今回活動を知ることができましたが、どうすれば情報を得ることができるのか、発信できるのかを今の時代に合わせて考えていくことも必要です。一人ひとり、活動している組織がつながって、そこに誰でも関わることができ、いつでも情報が得られるようなしくみを考え、第2部では、具体的に皆さんからご提案をいただきながら、検討をしていきたいと思います。皆さんそれぞれの活動を発展させるためにも、ディスカッションをしていきたいと思います。

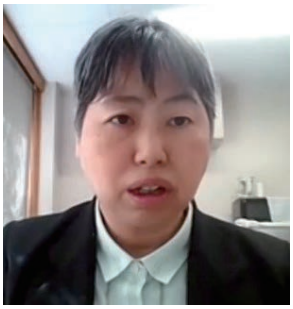
【第2部】



▼大塚：皆さま、こんにちは。第9分科会は、生まれてから死ぬまで地域で暮らすということをテーマに検討しています。その中で、私たちが望むような暮らしをどうしていけば実現することができるのかということに視点をおいて第1部・第2部進めさせていただきます。第1部では、各パネリストの方たちの活動についてお話をいただきました。皆さん、とても素敵な活動をされています。そのエネルギーってすごいなと思いますが、それぞれ活動のスタートは自らの経験からでした。今、必要と感じたことをとにかく実践してみるところから始まり、一人でスタートしたけれど、必要な人たちが周りに集まりながら、一緒に活動をする人が増えていくという広がりを見せています。これをして儲ける、ではなくて「今、ここで必要なこと」を行動に移しているというところが素晴らしいと感じました。分科会をとおし、パネリストたちはお互いに知ることができ、顔の見える関係になりましたので、つながれるきっかけになりました。このような関係がどの地域にも広がっていくといいのではないかと考えています。こうした多様な活動をつなげるには、どうすればいいのかということについて、第2部で皆さんと考えていきたいと思います。私は社会福祉の精神保健福祉を専門としています。地域づくり、まちづくりについて実際に活動する中で、福祉を見てみると、すごくサービスがある所に住んでいる住民と、そうでない所に住んでいる住民とでは、受けられるサービスが異なり、格差が出てきています。それぞれ地域特性を生かしながらその地域で何が必要なのか、多様な活動がつながるにはどうすればよいか。実際の活動の中では女性が多いですが、男性や学生など新しく移住してきた方、どなたでも活動できるようにするにはどうすればいいのかについても、第2部で検討して

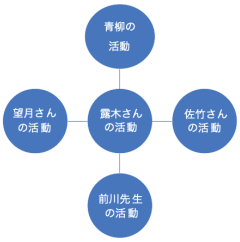


いきたいと思います。それでは、各パネリストから、前半で見えてきた課題に対する提案について発表していただきたいと思います。



▼青柳：地域の中でどうやってつなげていくかということですが、まずは知ることが必要になるかと思います。今回、分科会をとおして皆さんの活動を知りました。そのうえで、どういうふうに活動をつないでいくか、自分なりに考えてみました。まずは個々の活動を連絡などで単につなぐ。次に、学生さんにそれぞれのところに行って活動を体験してもらい、お互いの活動の潤滑油になってもらうのも一つの考え方かと思います。もう一つは、山梨県には「にじいろコミュニティ・サポート」という7つの子ども食堂が集まった共同体があります。この共同体では、高齢者の介護保険外のサポートをするようなグループも入っています。グループでは、シングルマザーの方に仕事を手伝ってもらい、収入にしてもらい、一つの共同体となっています。このような形も一つの考え方かと思います。さらに、私の活動の中で、巡回型の活動があるのですが、これを活用し、露木さん、佐竹さんのところに行ったり、来てもらったりする方法もあるかもしれません。

1．個々の活動をつなぐ



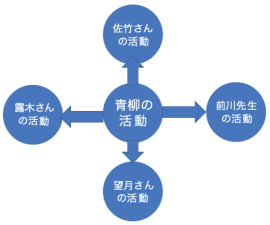
2．学生を通してつなぐ



3.一つの共同体をつくる



4.巡回型の活動



▼大塚：ありがとうございました。学生が学びも兼ね、潤滑油になっていくというところでは大学と皆さんの組織とのつながりになるかと思います。次に前川さん、お願いします。



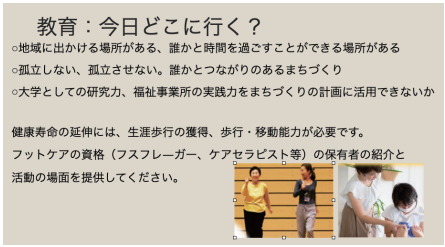
▼前川：「足の健康をキーワードにした産学官連携のあり方」についてご提案させていただきます。足が健康であるためには、靴との関係性が重要です。皆さまは、靴を選ぶ時の選択基準はご存じでしょうか。これを学校で教えていただいたことはありますか。また、足に合わない靴や間違った靴の履き方は足を痛めます。そして、爪がどんどん変形していきます。特に、足爪は身体の土台です。歩くために必要であり、重要な身体の一部です。体重がかかったとしても痛まないようにケアをすることが必要です。変形した爪では十分に歩くこと、自分で爪を整えることは非常に困難です。日本人は、下駄や草履の文化で長く暮らしていました。足を包み込む靴が一般的に生活に取り入れられるようになったのは、明治時代、約140年前からと言われます。しかし、日本の生活様式は、屋外に出る時は靴を履き、室内に入る時には靴を脱ぐという文化が継続されています。一方、一日中、靴を履いて生活をする欧米では、美容院の感覚で、足のお手入れというものが生活習慣にあります。歩きにくくなることを老化現象と簡単に考えないでください。ケアマネなど専門職も筋力低下と簡単に評価しないでほしいと考えます。足の爪は整っているか、タコや魚の目、痛いところはないか、サイズが合った靴を着用しているか。これは高齢者だけでなく、子ども・成人・大人、全てのライフステージで必要です。魚の目、痛いですよね。痛みがあれば普通には歩きません。皆さんは、痛みを軽減するためにはどこに行きますか。特に成長期の子どもには、足がどう成長するかを知ってほしいと思います。足の成長を妨げないために、どうやって靴を履けばいいのか。この下駄箱を見てください。かかとを踏んだ靴ばかりが並んでいます。かかとを踏むことが、なぜだめなのか。足の健康のため、これからの人生のため、ぜひ知ってほしいと思います。



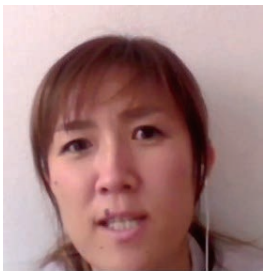


私は老若男女問わず、足を大切にする意識を広めたいと考えています。高齢者になってから介護予防に取り組むのではなく、幼児期から足を診る文化が定着することを望みます。学生・子育て期の方、介護・看護従事者など、多くの人に分かってほしいです。その情報発信基地として、地域の居場所やいきいきサロン・子育てサロン・子ども食堂などさまざまな場所でフットケアの心地よさを発信したいと考えています。教育は大切です。私が望む教育とは「今日、どこに行く？」という教育です。地域に出

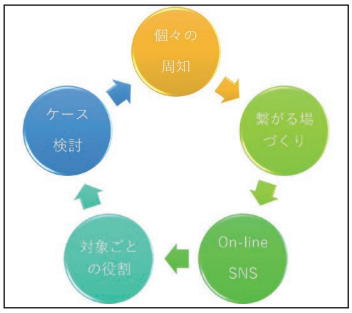
かける場所がある、誰かと時間を過ごすことができる場所がある。孤立しない、させない。誰かとつながりのあるまちづくりをしていくことを求めます。大学としての研究力、福祉や介護事業所の実践力を市町村が策定するまちづくりの計画に活用していただくことはできないものでしょうか。生涯のライフステージをとおした健康づくりが可能になるようにと願います。ごく普通に「今日は○○でフットケアがあるから足を診てもらおう」というふうにフットケアが身近にあることを望みます。フスフレーガー、ケアセラピストなどフットケアの資格保有者がいますので、ぜひ知っていただきたいです。



▼大塚：前川さん、ありがとうございました。実際の活動をとおし、今後どのように地域に活かしていくかというお話でした。次は望月さんのご提案をお願いいたします。



▼望月：自身の活動をとおして連携のための提案ということで、お話しします。私はずっと助産院をしていますが、助産院のつながりの中で、連携の難しさを感じています。助産院が単独の医療機関であるということと、出産を扱っているかどうかなど、それぞれの地域で助産師の活動内容が違うので、横のつながりを作るのが難しかったです。ですが、同じく登壇している露木さんと出会い、助産院だけではなく、訪問看護という手段を始めさせていただいたことで、大きく連携の形が変わってきました。まず医師との連携が強くなりました。また、一人の患者さんに携わる多職種との連携が可能になってきました。助産院同士の横のつながりでは、どうしてもライバルになりやすく、一人の方に対してどう協力するかというとこまでいかなかったのですが、訪問看護ステーションという形をとることで、助け合いや協力をする関係が生まれました。私たちの訪問看護ステーションは、山梨では珍しい周産期特化型です。訪問看護というと、おじいちゃん・おばあちゃん、在宅での関わりというイメージが強いので、赤ちゃんや妊娠・出産を経験した方にということでは、一からイメージを変えることから始めました。



病院からの依頼もあり、医師や多職種との連携は強くなってきましたが、それでも自分たちからつながる多職種との連携は今でも弱くて、一人のケースに対して、同じ地域でどんな職種とつながれるかは、今でも見えてきていません。多職種・専門職同士がつながれる場というものを定期的に作っていけたらいいと思います。つながれる場ができたら、オンラインやSNSで広げていきたいです。ただ、連携していく人たち自身が対象ごとの役割を明確にしていないと、どうしてもライバルになってしまい、仲間にはなりにくいので、自分たちの役割を問いかけながら、明確にしながらやっていくことを大前提にしたいと思います。さらに、ケース検討を密にやっていける場所や状態があると、すごくいいと考えています。

▼大塚：ありがとうございました。どなたも連携というところでは、それぞれの活動の中でご苦労されていることがお分かりいただけたかと思います。佐竹さん、ご提案をお願いいたします。

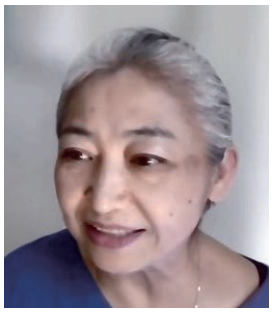


▼佐竹：「デイサービスセンターつづく」の佐竹です。「どういうふうに連携できるといいんだろうか？」と考えた時に、私はこの写真を持ってきました。皆さんは、どう感じますか。この2人は夫婦ではなく、たまたま「つづく」で出会ったおじいちゃんとおばあちゃんですが、夫婦のようにずっと寄り添って過ごしています。本当に自宅の一部を切り取ったような写真ですよね。私はこの2人が本当に幸せそうで微笑ましく、自分も幸せをもらっています。私は単純に、目の前の幸せそうな風景を守りたいなと思っています。幸せそうな風景は、人それぞれ違うと思いますが、私は、多くの人たちの協力や理解があって得られるものではないかと考えています。私たち専門職は福祉・介護・医療など学生のうちからすでに分野ごとに縦割りで分かれています。そして学校を出て最初の就職先は、だいたい行政・病院・大きい福祉法人など、大きな組織で「箱もの」と呼ばれるところで、対象になる方と出会っていくのが一般的だと思います。就職後、初めて出会う人が、すでに箱の中で困っている状態だと考えた時に、その人自身が元気で過ごしていたころに思いを寄せる時間はあるのかなとか、地域で過ごしている時の生活が見えているのかなということを疑問に思います。私たちの仕事はその延長線上にあるので、出会った方々の生活、その根本を知っておく必要があると思っています。



私が過疎地域で集落支援をやっていた時代、コミュニティーナースの養成講座を受けました。そこでは看護師が、病気になってから出会うのではなく、病気になる前に地域で出会っていくことが必要だと学びました。私たち専門職はできるだけ建物の中から地域に出て、人々の生活を知っていく必要があると考えています。実際私も、目の前の出会った人たちに向き合って日々取り組んではいるのですが、その中でうまくいったりいかなかったりを繰り返しながら、何となくこういう傾向があるかなという中で働いています。多職種間で連携すれば、私たちの視点では見えなかったものが、他の視点では見えることもあるので、ぜひ連携を図っていきたいです。今回、出会えた大学の先生方には、一緒に根拠となるようなものを見つけていくような研究に取り組んでもらえば、私たちの自信にもつながり、活動がどんどん広がっていくと思います。施設や事業所でも「出入り大歓迎！」というネットワークを作り、場所を一覧にし、皆で「今日はここにいってみようかな」と出入りができるようになると面白そうだと思っています。

▼大塚：ネットワークづくりやさまざまな方が出入りできる場所として活動する佐竹さんだからこそのつながりの重要性についてお話いただきました。最後に露木さん、ご提案をお願いします。



▼露木：今後の連携への課題を私なりに考えてみました。今回、女性会議が開かれることになって初めて、同じ分野で同じ方向を向いている女性がいることに気づきました。でも長い間活動をしているのに、気が付かなかったのはなぜだろうと考えると、私自身、自分の仕事に没頭していて、自分のしていることを発信している時間も暇もない、それに発信する場所もありませんでした。ロータリーやライオンズ、商工会議所などの社会経済活動をしている分野において、女性参画が少ない、特に福祉や医療関係者の参画が少ないことも課題ではないでしょうか。実際、私たちは何をすべきかというと、できたつながりを絶たないで、継続的につなげていく必要があると思います。これを定期的な会合にして、定期的な情報発信を一般市民や学生さん、より多くの女性に行う機会を得ることが大事です。そのためにも私が開いた「晴ればれ」で勉強会を開こうと決心しました。「晴ればれ」きる範囲で小さくまとまっていたのですが、今日のパネリストの皆さんとのつながりからつながりを見つけて、いろんな方に参画を促していきたいなと思います。私のところでは子ども食堂も開いています。そこでは看護学生さんや県立大学の学生さんのボランティアをお願いしていますが、一部の人に留まって、広がらないのが課題です。より多くの方の参加を呼びかける方法を大学の先生方に教えていただけたらいいなと思います。

さらに裾野を広げて文化を変えたいと私は考えています。包括ケアシステムの中で、私たち看護も、ヘルパーたちの介護も、「して差し上げる」という思いがあり、私たちの価値観を押しつけているような気がしています。真の共生社会に変えるためには、誰もが参加できて、誰もが考えていく、どんな人も、病気になることも、年を取ることも、老いていくことも、死んでいくことも、誰かが何かをしてくれるのではなく、全て自分のことだと考えるような文化をつくっていかなければならないと思っています。そのために、子どもたちにプラネタリウムやナース体験などをとおし、看護として、私個人として、また会社として、何を考えているかをきちんと伝えていける場をつくっていきたいです。今年も会社でピンクリボンの募金活動を行いましたが、こうした社会活動に会社ぐるみでチャレンジしていくことも大事かと思っています。広げる、つなげる意識を個人としても持ち続け、会社や看護協会などのような組織の中でもその必要性を広げていきたいと考えています。

▼大塚：皆さんのお話をお聞きして、連携がなぜ必要なのかについて考えてみました。活動は連携しなくてもできます。ただ、限られた活動になってしまいます。露木さんのおっしゃっていたように社会の中で活動が位置づけられていくことは重要なことだと思います。活動をとおして、人が社会の一員として位置づけられていきます。何で連携が必要なんだろうと考えると、人が孤立しないほうがいいのと同じように、活動も孤立しないことがとても大切です。孤立してしまうと内側を見がちなので、外に目が向けられる余裕が無いとなかなかつながっていきません。連携と言うのは簡単ですが、実際には、皆さんこれだけの活動を数年かけてやられているのに、全く知りませんでした。今回の会議をきっかけに知ることができたのですが、連携するためには互いの活動の情報を知る必要があります。

では、情報を発信し、つなげていくにはどうすればいいのでしょうか。この後、検討したいと思いますが、その前に皆さん、まず活動を広げていくというところで、誰もが参加できるようにしたいという点は共通しています。しかし、なかなか若い人・学生さんが参加してくれないという難しさがあります。その辺について考えていきたいと思います。まず、学生さんたち、活動に関してなかなか実践に移せていない点についてお話を伺えますか。

▼学生：福祉を学んでいる身ではありますが、現場で学ぶ機会はなかなかありません。敷居の高さを感じてしまいます。将来、福祉関係で働きたいと思っています。働きはじめは不安や孤独になってしまうこともあると思うが、その前に色んな活動を経験していれば、就職後も自分の専門性に活かせるし、つながりも生まれると感じました。そういう面でも学生のうちから、いろんな活動への参加や、さまざまな活動をしている方がいることを知ることは大切だと分かったので、お互いに関わ

りが持てる工夫を考える必要があると感じました。



▼大塚：現場でやっている側としては、「全然、敷居高くないよ」って思っていると思いますが、何が高く感じるのでしょうか。

▼学生：資格を持っているわけでもないし、知識・スキルも足りていないので自信がなく、怖気づいてしまいます。

▼大塚：「まだまだ学んでいる身だから自分が参加していいのかな」とか、「何かあったらどうしよう」という不安が多くあるってことですね。でも、現場の方たちは、「その人が楽しそうに積極的に関わってくれていれば、それでいいよね」って思っていますよ。なかなかその壁って難しいですかね。パネリストの皆さんのご意見はいかがでしょうか。

▼佐竹：学生さんにすごく共感できました。私、産婦人科が苦手で、実習もトラウマになるくらい嫌でした。そのうえ、就職した先で配属されたのが産婦人科で、すぐに辞めようと思っていました。妊娠・出産をしたことがなかったので、お母さんたちの気持ちも分かりません。でも、助産師さんと話しているうちに、経験値や知識不足のせいで怖気づいていることに気づかされました。それからは、いろんなケースの患者さんに会っても、自分が全部受け止めなきゃ、理解しなきゃということよりも、自分は自分として、分かる範囲でできることをやっていき、少しずつ経験になっていけばいいのかなと思うようになり気持ちが楽になりました。

▼青柳：学生さんを教育する立場としても、機会を作ってこなかったということに反省があります。活動に入っていきやすいように、授業の中に位置づけたり、ボランティアとして取り組むなどですね。まずは、見学でいいと思いますので、そのうえで、少しずつ仲良くなっていって活動に入っていくことも考えられるのではないでしょうか。

▼前川：私が関わっている足の健康やフットケアは、なかなか看護・介護の教育の中でも光が当たらない部分です。皆さんも、学んだことはありますか。

▼露木：実はないです。でも、施設やお年寄りの家に行くと、足にトラブルを抱えたお年寄りが非常に多いことに気がつきます。病院勤務の看護師をしている時には気づきませんでした。

▼佐竹：お風呂の介助の時などに、爪の白癬から始まって、指が変形した方などにお会いしますが、独学に近いです。授業の中で習ってきていないので自分で調べながらやっています。爪が伸びすぎている方もいて、切り方も自分の感覚や経験値で行っています。以前、看護師が爪を切りすぎて訴訟になった事件もあり、知識が無いとトラブルになってしまうのではと日々の中で自分が行っている行為にちょっと怖さを感じる時もあります。

▼前川：足の健康は、介護福祉士養成教育の中でも、そんなに長い時間学ぶことがない分野で、最近水面に上がってきた新しい分野です。ドイツ式のフットケア「フスフレーゲ」の資格もようやく20年ほどになってきました。その時代ごとに、新しい課題がたくさん上がってきています。青柳先生が関わられている空き家の問題など近年クローズアップされてきた課題だと思います。新しい課題は時代とともに出てくると思うので、気づいた課題はどんどん声を上げていく必要性を感じます。露木さんのご発言の、経済界にも声を上げていくというお話は、目から鱗でした。

▼大塚：活動をどう知ってもらい、参加してもらうか、若い人たちには教育の分野でどう知ってもらうかというお話をいただきました。教育現場の役割としては、個々に行われている活動の意味を一般化していき、意義・効果を見える化することだと思います。同時に、社会の中での課題の抽出ですね。福祉は社会の変化によって出て来た課題に対応するために研究する学問ですので、社会の課題を抽出していく役割もあると思います。もう一つは、学生さんへの教育です。そういう中で、情報提供をどうしていくのか。情報を自分たちで発信していくことはもちろんですが、関心を持った人がどう知っていくかが課題です。では、自分たちの活動についての情報を届ける方法について、伺いたいと思います。

▼青柳：それは私も課題だと思っています。地域の方に向けてポスターを張りチラシを配っても、人が集まらないので困っていました。一つは自治会とか既存のグループにお願いをして知っていただくことがあると思います。若い人だとSNSやフェイスブックでお話しできると思いますが、高齢者を集めたいとなると、なかなか難しいです。電話か手紙くらいしか思いつきません。皆さんからお知恵をいただければと思います。

▼露木：私の「暮らしの保健室晴ればれ」は甲府市中央で開いていますが、そこを賑わうようにしたいと思った時、目的を絞ってしまうと難しかったです。実際は、看護師が作る健康ランチを売るお店として、いろんな人に入ってもらい、意見を聞く場にしました。その中から、既存で歌声教室をしている方や手芸をしている方々に教室を開催してもらい、参加してもらいたい人を集めて、グループづくりをしています。その中で時々、介護や医療についてのお話をちょっとだけ聞いてもらえる場も開いています。子ども食堂を手伝ってくれる学生ボランティアさんは、来る方が固定していて、先ほどの話で敷居が高かったのかなと気づきました。また、学生さんや大人のボランティアにも賃金を払ったりしていますが、なかなか増えない状況です。

その点は今後、先生方とご相談できればいいと思います。

▼前川：私の場合は、身体の一部の足を見せてということで、恥ずかしさもあり、すでにトラブルを抱えている方は第三者に見せることを躊躇される方が多いと感じているので、他の方のお力も借りるようにしています。私が出向いているのは山間過疎地です。一つの集落に８軒しかなかったり、高齢化率が52％というエリアです。そこに関わっている地域包括の職員さん、民生委員の方たち、いきいきサロンの運営をしてくださる方たちから「面白おかしく、足の体操をするんだって」などと伝えてもらって利用者を集めています。私が動くというよりも、自治会長や民生委員が動いていただけているので、人数が集まっているのかと思います。山間過疎地でイベントが少ない地域なので、楽しんでいただいている面もあるかもしれません。自分が頑張るというよりも、動いてくれる協力者を見つけ、頼んでしまうかたちで、細々と活動を継続しています。

▼佐竹：「つづく」のフェイスブックやSNSは作っていますが、見つけてもらえなければつながりません。こちらから発信したい情報と、皆さんが得たい情報とのニーズをマッチさせることの難しさも感じています。つながってほしいと思っている人たちは、目の前の生活でいっぱいいっぱいで、情報を得る気持ちの余裕が無いのかもしれないところが難しいです。実際、最近はヤングケアラーの問題もあり、利用者さんを送迎しながら、家庭状況を見守るという意味でなるべく家の様子を確認するようにし、お困りになる前に支えたいと思っています。しかし、それでつながれるのは数件で、行政であれば相談の窓口もあるので、行政との連携も取りたいと思っています。行政の名前が出ると、信頼度が上がりますから、協力や連携ができたらいいと思います。

▼大塚：学生さんは、どうやったら情報を得やすいと思いますか。



▼学生：学生はSNSを使いますが、調べたいことを調べなければ情報を得られませんので、多くの人に広めたいとなると、SNSでも難しいのかなと思います。福祉を学んでいる私たちが潤滑油になれば、他の学生や地域の人に情報を伝えていけるのではないかと思います。

▼大塚：学生さんにスピーカーになってもらうということですね。私たちは、産学官で連携や情報提供ができていくのではと思っています。公的なところでは、身近には、民生委員さん・行政・自治会・社会福祉協議会がありますが、どのように日ごろから情報交換をして地域づくりのシステムを作っていくことが課題ではないでしょうか。また、人を呼ぶ活動は、プログラムとして何がいいかを考えてみましたが、健康については皆さん関心を持っています。具体的に集まっていただくには、食べることが絡むと参加しやすいと思います。そういうことをたまにやりつつ、色んな人に集まってもらってそこから情報発信をして、さらに広めることを取り入れていくといいかもしれません。

ここからは、民間の活動だけではなくて、教育機関・公的機関でそれぞれの役割は何かを考えていきたいと思います。教育に関しては、活動を客観化して見える化していく研究、若い人を育てていく教育、社会の課題を抽出していくという役割があります。民間の方たちは、社会の地域づくりにつながっていく、誰でも参加・利用できる場づくりを実践されています。では、公的機関・行政と私たちはどうやって協力できるのかを考えていきたいと思います。行政と協力していきたいと考えているのは、どんなことですか。

▼青柳：公的機関には、私たち個人がやっている事業をリストアップして、どこに、どういったものがあるのかを見える化してほしいです。

▼佐竹：リストアップの時に、それぞれの事業所の特色についても把握してもらえると、連携が必要になった場合、特色に合わせた声かけで私たちもチームになりやすいかなと思います。

▼露木：特に甲府市は大きいので、担当者が変わったり、課と課のつながりがなかったりして困ることもあります。リストアップしようにも、たくさんあって大変だと思うので、行政・大学・民間で一つのチームを作ってやっていかないと継続していかない気はします。

▼前川：産学官の連携は、非常に有意義なことだと思います。その中で、官に何を望むかということですが、私はいろんなところの声を吸い上げてほしいと思います。行政をちらつかせることで動いてくれる人がたくさんいるならば、市民の声を聞く会議の場や催しを実施してほしいです。

▼大塚：第２部では、皆さんのご提案から考えてきました。まず連携が一つ、どうしていけばいいか、そして情報をどのように分かち合っていけばいいかについてでは、課題を出すだけではなく、私たちは解決していく方向に動いていかなければなりません。まずは、行政とも協力しながら、どういう所にどんな活動があるか、活動マップを行政・民間・学生で一緒になって作っていくことが求められると思います。その前段階として、やはりつながっていないと、情報が集まりません。私たちが分科会後につなげていく活動として、活動マップづくりを挙げたいと思います。同時に、顔の見える個人個人のつながりの交流会を土台としてやりながら、そこに公の部分が重なっていくと、情報共有しやすくなると思います。活動マップができれば、行政のホームページに掲載してもらうとか、社会福祉協議会や自治会で配っていただくこともできます。第９分科会としては、今がスタートということで、皆さんのように素晴らしい活動をしている人たちがお互いに知り合うことが第一段階。そのために、私

たちが中心となって交流の場を定期的に開催し、口コミで広めていければと思います。そこに行政の人にも参加してもらいながら、活動がどんな所で行われているかを知ってもらい、活動マップにして、見える化していくという具体的な活動を提案したいと思います。学生さんたちにも協力してもらい、何が情報として必要か、敷居が高いと感じる部分をどうするかなどについて考えていきたいです。福祉では支援する側・される側という言い方をしてしまいますが、そういう意識を変え、互いに必要とされる存在であること。この日本女性会議の理念である多様性が尊重される社会をつくるためにも、病気があろうが、高齢になろうが、障がいをお持ちだろうが、一緒に市民の一人として参加できる場を作ることを目指して、仲間として活動していくことが重要なのだと思いました。個々の活動をしながら、活動同士が結びつき、出会いがあって、そこから情報を共有し、互いに支え合いながら、行政の協力で活動マップの形になり、見える化していく。こんな活動を第９分科会としての今後のプランにしていきたいと考えています。

▼青柳：いろんな方のご意見を聞かせていただき、今後連携していければいいと思いました。ありがとうございました。

▼前川：今回、思い切って参加をしたことで、素敵な出会いになりました。今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

▼佐竹：この場でなければ、大学の先生方とお知り合いになることはなかったので、今後もつながりができていけばいいなと思います。これからもよろしくお願いします。

▼露木：腹を割って話すってこういうことかなと思いました。ここから、本当の意味でのまちづくり、地域づくりに取り組むことができ、自分の生き方を考えていけると思います。楽しい時間でしたし、仲間づくりができました。ありがとうございました。

▼学生１：学生としてつなぐ役割もあると感じましたし、皆さんがやっている活動にボランティアとして参加するのも楽しそうだと思いました。いろんな活動に自分たちから足を運んでいくことも地域づくりには必要だと分かったので、これからも目を向けていきたいです。本日はありがとうございました。



▼学生２：皆さんそれぞれがビジョンを持っていて刺激になりました。自分もこれから資格を取り、専門職として働く中で、皆さんのようにしっかりとビジョンを持ってやっていきたいと思いました。

▼学生３：皆さんの活動のそれぞれが面白いし、素晴らしいと思いました。この機会に、活動がつながっていくことで、いろんなところへの支援につながっていくのかなと思います。私たち学生も今日の話を参考にしながら、いろんな活動をしていきたいと感じました。

▼学生４：皆さんの活動の中で見えてきた課題がすごく分かりやすく、私も「そうなのか」と確認できたのが嬉しかったです。また、皆さんが学生を必要としてくれていることが分かったので、気が楽になりましたし、参加してみたいと思いました。

▼大塚：第９分科会は去年から検討を続けてきましたが、最初から学生さんとも一緒に検討できたのはとても大きなことですし、私たちの活動はきっとこういう活動を目指しているのではないかと感じております。今後は、まずお互いを知り交流をして、その後、情報という客観的なものにつなげ、それがまちづくりにつながって発展していくと嬉しいです。山梨だけでなく、もうすでに上手に活動をされている地域もあると思いますが、自分の住んでいるところが、生まれてから死ぬまで安心して暮らせるという環境づくりは、誰にとっても重要なことだと思いますので、全国の皆さまも、考えるきっかけにしていただけたらありがたく思います。また、第9分科会をとおして仲間づくりができ、私の財産になりました。今回、身近な関係性が築けたと思いますので、今後もこの関係性を大切にしていきたいと思います。

全国から参加してくださった皆さま、ありがとうございました。

第９分科会：生涯活躍・健康

取組み方針

〇交流できる場つくり

個々の交流する場を作る、行政との連携

↓

地域づくり、だれでも参加できる場づくり

〇情報の発信

行政・民間・教育が一緒になって活動マップを作成する

既存のグループ、SNS等の活用

〇人づくり

研究・学生の育成、社会課題の共有

継続的に行えるチームづくり

第９分科会：生涯活躍・健康

未来の目指す姿

医療・介護・福祉・教育のそれぞれの

分野が協力・連携し、

行政と協働する地域住民が支え合う地域

分科会 10

生涯活躍・健康

10月23日（土） 第1部 10:00～11:30 第2部 12:30～14:00

パネルディスカッション

“私らしく生きる”ためにあなたは？地域は？

～私らしく生きる人生設計の可能性～

コーディネーター	パネリスト	パネリスト	パネリスト
飯野 奈津子	奥山 千鶴子	相良 洋子	三浦 まり
ジャーナリスト	NPO法人子育てひろば全国協議会理事長	さがらレディスクリニック院長	上智大学法学部教授

パネリスト	パネリスト	パネリスト	パネリスト	パネリスト
植田 年美	末木 咲子	大嶋 香菜子	本田 灯	山内 さくら
甲府市議会議員	甲府市議会議員	山梨県立大学生	山梨県立大学生	山梨学院大学生





【第１部】



▼飯野：私は分科会のコーディネーターを務めます飯野と申します。これまで40年近くNHKで報道の仕事をして、昨年退職し、フリーの立場で取材を続けています。

はじめに、この分科会の趣旨をお話しします。テーマは「“私らしく生きる”ためにあなたは？地域は？～私らしく生きる人生設計の可能性～」としています。この分科会には、県内の大学生も関わっていて、彼女たちと話をする中で、このタイトルになりました。自分の将来について、漠然と不安を感じている人が多いと感じたからです。特に、仕事と子育ての両立ができるかどうか、ということです。どこでどんな仕事をするのか。結婚をいつするのか、しないのか。出産するなら、何人子どもを産んで、どこでどんな子育てをするのか。どんな選択をするにせよ、選択を迫られる前に、いろいろな情報を集めて、自分らしく生きていくために、人生設計を描いてみることも大事ではないでしょうか。第1部では、女性にとって大きなライフイベントでもある結婚や出産、子育てに焦点を当てた、県内の女性を対象にしたアンケートを紹介し、その現状を専門家たちに紹介してもらいながら、私らしく自信と誇りをもって生きていくためには、女性たちが何を考えて、どのように備えれば良いのか、ということを議論していきます。

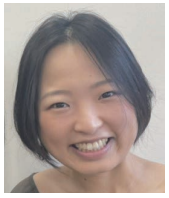
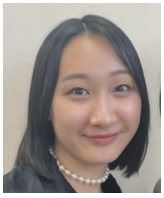


▼相良：こんにちは。さがらレディスクリニックの相良と申します。私は東京の品川区で婦人科のクリニックを開業しています。私のところには月経の問題や更年期障害など、さまざまな患者さんが来ますが、患者さんとお話しすると、その方の人生が垣間見えて、患者さんからいろいろな勉強をさせていただいていると日々思っています。私は産婦人科医の立場から、妊娠・出産に焦点を当てて本日の討論に加わっていきたいと思います。

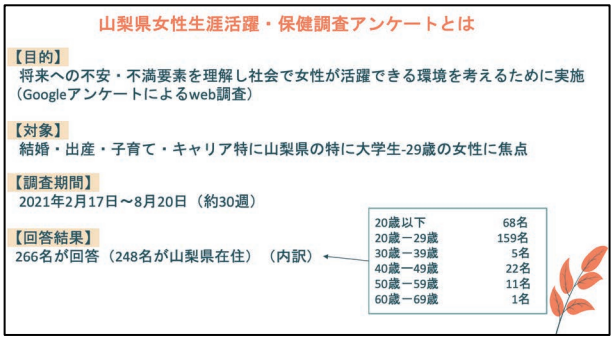


▼奥山：横浜で子育て支援の活動をしています、奥山と申します。NPO法人子育てひろば全国連絡協議会理事長、それから「びーのびーの」というNPO法人の理事長も務めています。私自身、子育てに自信が持てなかったのですが、自分だけで子育てをするのは本当に大変だという思いから、親たちで横浜市の商店街の空き店舗を活用し、親子の交流の場をオープンさせて21年目になります。全国にはこのような子育て支援の場がたくさんあり、私たちの仲間も全国にいます。私自身も学生の時には、子育てをするイメージが持てませんでしたが、本日の学生さんたちの報告も楽しみにしています。

▼飯野：そして、学生代表の3人です。山梨県立大学国際政策学部3年の大嶋香菜子さん、同じく本田灯さん、山梨学院大学経営学部3年の山内さくらさんです。今回参加してくれている学生さんたちが、アンケート調査をしています。その結果について報告をお願いします。


▼大嶋：アンケートの目的は、将来の不安・不満要素を理解し、社会で女性が活躍できる環境を考えるために実施いたしました。学生から29歳までの主に山梨在住の女性を対象に行いました。調査期間は約30週、266名に回答をいただき、そのうち248名が山梨在住となっています。



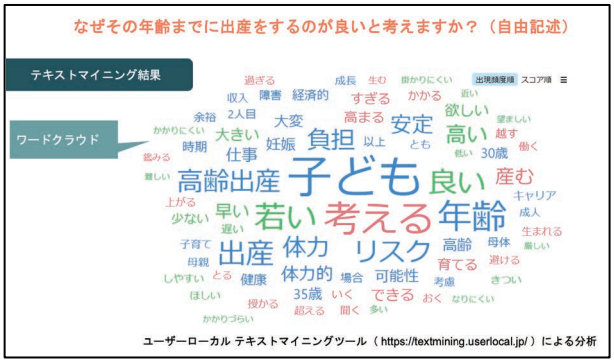
最初の質問ですが、「将来結婚したいと思いますか？」という質問に、64.1%の人が結婚したいと答えています。しかし、約3割の人が、「したくない」「わからない」と答えています。この3割という数は、私たちは非常に多いと思いましたが、ここで、「したくない」「わからない」と答えた人が、どんなことを不安に思っているのか、またはどんなサポートが加われば、「したい」と思うのかという疑問が出てきました。

▼本田：子どもがいない人を対象とした「子どもを持つこと」についての考え方に関する質問では、「子どもがいると生活が楽しく豊かになる」など多くの人は前向きな考えを持っていました。他に「好きな人の子どもを持ちたいから」など、私たちは思ったことのない考えもあり驚きました。そして私たちが気になったのは、「子どもを持つことは自然である」という考えが11.4%もありました。これは子どもを持つことが当たり前という固定概念からの結果だと思いました。

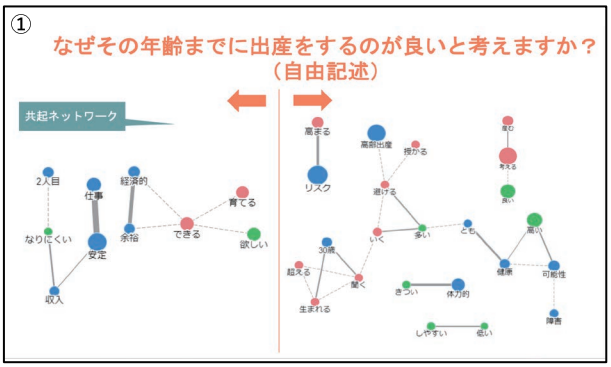
「子どもはどのような存在だと思いますか？」という質問では、「生きがい、喜び、希望、無償の愛を捧げる対象」と答えた人が最も多く、次に「独立した一人の人間」という結果になりました。しかし、「経済的負担や精神的負担を与えるもの」と答えている人もいて、子どもを授かったら幸せよりも大変さが勝ってしまうのではないかという不安を感じました。「妊娠・出産に適した年齢があることを知っていますか？」という質問では、「知っている」と答えた人が70.9%もいることに驚きました。知っていると答えていても、それは正しい知識なのか、知っている気になっているだけなのか、また適年齢を理解したうえで、子どもを持つまでの人生プランを描いている人はどのくらいいるのか、などが疑問となりました。

続いて「将来、何人子どもが欲しい？」という質問です。子どもが欲しいと答えた人は、「2人以上欲しい」と答えた人が圧倒的に多かったです。しかし20代の中で約17%は、将来子どもは「いらない」と答えていました。予想以上の多さで驚きましたが、私自身も子育てがしっかりできるか不安という理由から、はっきり子どもが欲しいとは言えないので、この17%の人には共感できます。「妊娠と年齢についての知識はどこから得ましたか？」という質問では、「テレビ、インターネット、雑誌などから」と答えた人が最も多く、「医師や看護師等の医療従事者から」という答えは、わずか20%ほどでした。このことから、婦人科に行くきっかけが無い人が多いため、正しい知識を専門家から得られる機会が少ないのではないかと考えました。

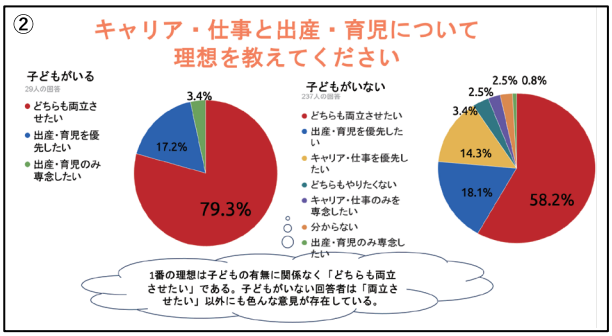
▼山内：「子どもを授かるとしたら、遅くとも女性が何歳になるまでに最初の出産を迎えるのが良いと思いますか？」という質問では、子どもの有無に関わらず、25歳から30歳未満と、30歳から35歳未満が多いという結果がうかがえます。これはキャリアを積むことを含めて考えたために、このような結果が出たと思いました。
右の図は自由記述の回答をテキストマイニングという手法で見たものです。そのうちの、こちらがワードクラウドという単語出現頻度で見たものです。見ていただくと、高齢出産やリスク、体力、負担といった自分の体を気に掛ける回答が多く見受けられます。



①の図は、共起ネットワークという、文章中に出現する単語の出現パターンが似たものを、線で結んだ図です。出現数が多い言葉ほど大きく、また共起の程度が強いほど太い線で書かれています。真ん中の線より右側が30歳を超えると高齢出産に突入し始め、リスクが高まる・体力的にきついといった意見、つまり健康面で気になっているという部分が見られる状態です。真ん中の線より左側が、欲しいけれども経済的に余裕が無い、または仕事が安定してきて、収入を得てきているというところで、2人目に対して不安を感じているというところ、つまり経済的に不安を感じている部分というものが見てとれます。

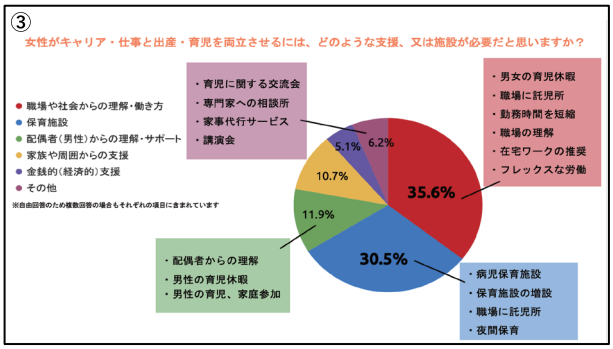


②の図は、「キャリア・仕事と出産・育児の理想」についてのアンケート結果です。子どもの有無に関わらず、キャリアと子育てを両立させたいという意見が最も多く、子どもがいない人の回答では、両立させたいという意見以外にもさまざまな意見がありました。

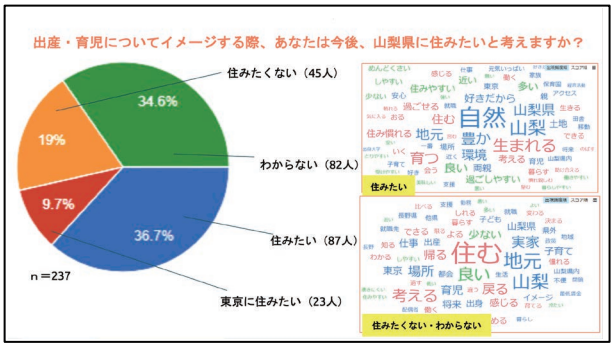


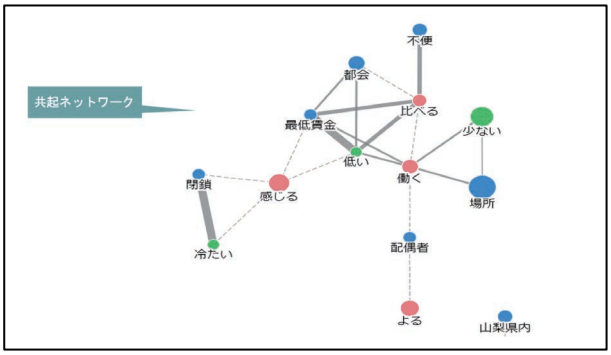
「女性がキャリア・仕事と出産・育児を両立させるために、障害になるものはあると思いますか？」という質問では、子どもがいない人では78.5%、子どもがいる人も72.4%が「あると思う」に回答し、子どもを育てることはキャリアに少なからずとも影響があると思っている人が大半であることが分かります。「あると思う」と答えた人に、何故そのように思うかと聞くと、子どもの有無に関係なく「時間の制約ができてしまう」「周りの理解・協力が十分に得られず、自分のキャリアを断念せざるを得ない」という声が多かったです。

③の図は、「女性がキャリア・仕事と出産・育児を両立させるためには、どのような支援や施設が必要か？」を、自由回答の形式で答えていただいたものを、まとめてグラフ化したアンケート結果です。こちらのアンケートは自由回答のため、私がおおまかな分類を設定して、便宜的に円グラフで示しました。回答の中で多かった内容は「職場からの理解や働き方」「保育施設について」でした。これらの中でも特に目立った内容は、男性の育児休暇の推進や職場内に託児所を設けること、病児保育施設についてでした。



▼大嶋：「出産・育児をする際に、あなたたちは今後、山梨県に住みたいと考えますか？」という質問では、「住みたくない」が45人。「わからない」が82人。「住みたい」が87人。「東京に住みたい」は23人でした。こちらもワードクラウドという単語出現頻度で、「山梨に住みたい」「山梨に住みたくない」「わからない」と答えた人の回答結果をかけてみました。「住みたい」と答えた人たちは、「自然が豊か」「環境」などで住むのが良いと考えています。一方で「住みたくない」「わからない」と答えた人たちは、「住む」という真ん中のワードの上に「少ない」とあります。子どもを預ける施設や教育施設、または働く場所が「少ない」と考える人が多いと思いました。関連性のある言葉を出してくれる共起ネットワークでは、「少ない」という言葉の関連性のところに、やはり「場所」という言葉が出てきていると思います。また、間接的に左上には「低賃金」という言葉があります。出産・子育てをするのに、経済的に見て、山梨県は最適とは言えない面もあるのではないかと考えました。以上でアンケート結果の報告を終わります。





▼飯野：現在、山梨に住んでいる方たちの中で、将来も山梨に住みたいと思っている人は4割弱しかいないというのも、低賃金の問題とか解決しなければいけないことがいろいろあるのではないかと感じました。

▼相良：私は全般的に理解可能で、今の若い人たちの感覚が私

の想像どおりで、すごく理解できた感じがします。驚いたのは、子どもについて「子どもがいると生活が豊かになる」とか「子どもは生きがい」とか、ポジティブに子どものことを考えている方が多いことが分かり、安心しました。

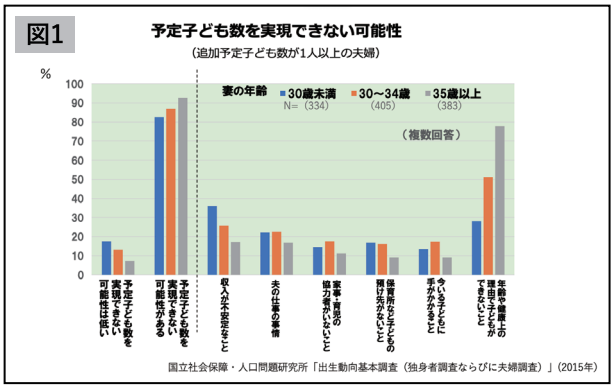
▼奥山：このアンケートから、心配な箇所もあるのですが、これだけまだ前向きの部分があることは、しっかり見ていかなければいけないと思いました。私の周りでも皆さんよく言われるのは、「子どもがいることで自分の時間を制約されてしまう」ということです。これは男女ともにですが、お子さんがいても、自分自身の時間が確保できることが重要ではないかと思います。

▼飯野：今の学生さんからの報告の中で、高齢出産に対する健康状態のリスクという話もありました。また、出産の適齢期について、「知っている」という人が7割ということですが、実際どこまで正しい情報を知っているのかという話もあります。最近では、妊娠を希望してもできず、不妊治療に頼らなければならない人も増えていますので、そうした生殖医療の現状を相良さんから報告をしていただきたいと思います。

▼相良：私からは、「私らしく生きるために～ライフプランと妊娠・出産～産婦人科医の立場から」ということでお話しさせていただきます。産婦人科医としては、アンケートの結果を見て、安心した部分もあるのですが、実際には適齢期を知っていても、この時期に妊娠・出産できない人が多く、このような女性たちが日々、不妊治療を続けているという現実があります。どうしてこのようになってしまったのか考えてみますと、一つには社会の価値観として、「妊娠・出産」よりも「仕事(経済成長)」に重きが置かれてしまっているということがあるのではないかと思います。でも、人間も生物の一種なので「種の保存」ということは非常に大切なことだと思います。

それでは、現代日本の妊娠・出産事情についてお話ししていきます。最初に統計的なことを少しお話ししますが、男女雇用機会均等法が施行されたのが1986年、これを機に働く女性が増えてきました。特に20代後半と30代前半の女性の就業率が急速に伸びました。この年代はまさに適齢期ですが、その女性たちが働く世代になったわけです。最近は結婚しても、子どもができても、仕事を続けたいと考える女性が増えてきて、平成の時代になってから、共働き世帯と専業主婦世帯の数は完全に逆転しています。そしてその結果として進んできたのが、非婚化・晩婚化・晩産化、そして少子化です。20代後半から30代にかけて、結婚しない人の割合が年々増加しています。20代後半で見てみると、男性の約7割、女性の約6割が未婚という状況で、20代で結婚するのは珍しい状況になっています。その結果、晩婚化・晩産化が進んできました。男女ともに平均初婚年齢は年々上昇し、それに伴い、女性が出産する年齢も高くなっています。2018年では、女性の平均初婚年齢は29.4歳、第1子の平均出産年齢は30.7歳まで上昇しています。子どもについての考え方も変わってきています。結婚している夫婦が理想としている子どもの数は、年々少しずつ減ってきています。そのうえ、子どもが欲しいと思っている夫婦も、予定の子どもの数を実現できないだろうと考えている方たちが多いのです。

図1は、もう一人以上子どもが欲しいと考えている夫婦に、その実現可能性を聞いたものですが、なんと9割近くの夫婦が、予定の子どもの数を実現できない可能性があると答えています。その理由は、妻の年齢が35歳以上の場合は、年齢や健康上の理由です。この調査では晩婚化・晩産化のために、不妊問題が重要な要素になっていると分析しています。これに対して、若いカップルでネックになっているのは経済的な問題です。子どもが欲しくても経済的理由で難しいという状況になっています。結果、少子化がどんどん進んできています。2020年の出生数は84万人あまりでした。出生数が100万人を切った時、私たちはとても不安になりましたが、2020年はすでに90万人を切ってしまいました。今年は新型コロナウイルスの影響もあって、さらに少なくなるだろうと言われています。



国立社会保障・人口問題研究所「出生動向基本調査（独身者調査ならびに夫婦調査）」(2015年)

このような状況を背景にして、今、妊娠・出産をめぐる状況がどうなっているのかを次にお話します。繰り返しになりますが、働く女性が増えて、晩婚化・晩産化が進むにつれ、出産する女性の年齢は高くなってきています。女性の年齢が高くなると、妊娠しにくくなるということはご存じだと思いますが、その理由は卵巣の中にある卵細胞の質が落ちてくるからです。女性が妊娠・出産できる年齢を生殖可能年齢と言いますが、10代前半から40代前半くらいです。この期間には規則的な月経があって、月に1回くらい排卵が起こりますが、ここで排卵される卵細胞は、実は排卵のたびに作られているのではなく、産まれた時に、すでに卵巣の中に持っているものを、1つずつ出しているのです。卵巣の中にある卵細胞の数は胎児のころが一番多く700万ほどですが、その後どんどん減ってきて、産まれるころには200万ほどになり、初経を迎えるころには30万くらいまで減ってしまいます。月々に排卵される卵細胞は1個ですが、排卵されないまま萎縮してしまう卵細胞もたくさんあります。このように年齢が高くなると、卵巣の中にある卵細胞が古くなってその質が落ちてしまうために妊娠が難しくなることが分かっています。女性が妊娠する力を妊孕力と言いますが、これは20代前半を100とすると、30代後半では70%くらい、40歳を過

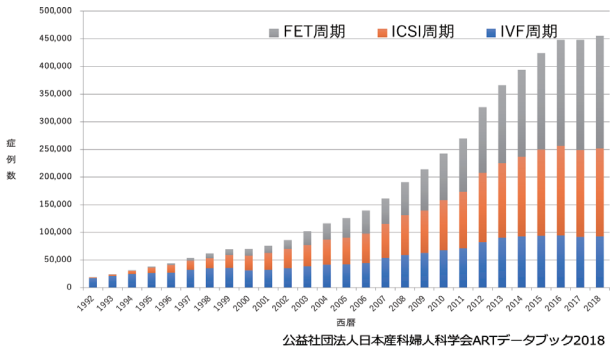
ぎると半分以下になってしまいます。女性が働くようになり、妊娠・出産が遅くなっていますが、遅くなると妊娠・出産が難しくなるというジレンマがあるわけです。

そこで、産婦人科の領域では、不妊治療が盛んに行われるようになっています。なかでも、今の最先端が生殖補助医療(Assisted Reproductive Technology：ART)と呼ばれるものですが、これは卵子と精子を体の外に取り出して、体外で受精卵を作って、それを子宮に戻すという治療方法です。現在よく行われているのが、①体外受精・胚移植(IVF-ET)、②卵細胞質内精子注入・胚移植(ICSI-ET)、③凍結・融解胚移植(FET)、の3つの方法です。

まず、①ですが、これがARTの基本になります。排卵のころを狙って、卵巣から卵細胞を取り出して、精子と一緒に培養すると受精卵ができます。これが体外受精です。この受精卵はやがて分裂を始めますが、適当な時期に子宮の中に戻してあげる、これが胚移植です。そうすると、この受精卵は子宮の中に落ち着いて、妊娠が成立するというわけです。②は、この受精の段階で、1つの精子を卵細胞の中に直接注入するという方法です。その後のステップは、体外受精・胚移植と同様です。③は、受精卵が分裂を始めた途中で1回凍結して、適当な時期に融解して子宮の中に戻すという方法です。これらの方法は、最初は卵管が使えない人のための治療方法だったのですが、現在では一般的な不妊治療として広く行われるようになっています。

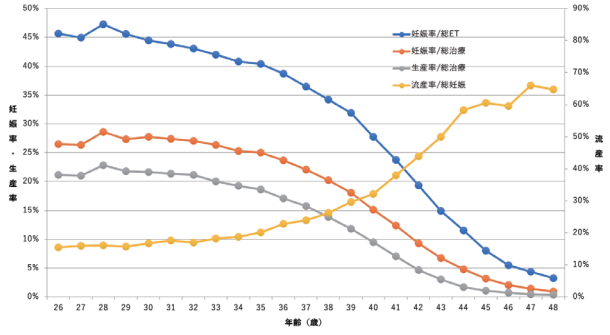
産婦人科の学会では、このARTを行っている施設を登録制にしていて、毎年、統計を出しています。図2はARTの治療周期の数ですが、2000年を過ぎたころから急速に増えているのが分かります。最近では、このARTで産まれてきた子どもも増えてきていて、昨年は14人に1人くらいの子どもが、このARTで産まれていたと報告されています。図3はARTを行った場合の妊娠率や、実際に子どもが産まれた生産率、それに流産率を年齢との関係で見たものです。20代では妊娠率・生産率ともに比較的高く、流産率が低くなっていますが、40歳を過ぎるところから妊娠率・生産率が下がってしまい、逆に流産率のほうが高くなっていくというのが分かると思います。不妊治療を行っても、やはり高齢妊娠は難しいということが言えます。

図2　ART　年別　治療周期数



公益社団法人日本産科婦人科学会ARTデータブック2018

図3　ART妊娠率・生産率・流産率　2018



公益社団法人日本産科婦人科学会ARTデータブック2018

また、不妊治療にはいろいろと問題点があります。治療しても必ず妊娠できるわけではなく、特に40歳を過ぎるとかなり難しくなります。また不妊治療には時間とお金がかかります。ホルモン治療や採卵のタイミングを計るために、何度も医療機関を受診しなければいけないので、治療のために会社を辞めたという方もいます。またARTは1周期に30～50万円くらいはかかります。なかには不妊治療に1,000万円くらいつぎ込んだという人もいます。これに対して行政はさまざまな助成制度を準備していますし、来年は治療費の一部が保険適用になるという話もありますが、やはり仕事を中断して医療機関を受診しなければいけませんし、治療費の全額が助成されるということは無いと思います。また不妊治療には身体的・精神的ストレスが伴います。ホルモン治療による違和感や、採卵の時の痛みだけではなく、不妊症という診断がついた時に、自分が人間として不完全なのではないかという感じを抱いたりする人もいます。またARTの治療が始まると、毎周期、期待しては失望するという、ジェットコースターのようだと言われる心理状態に陥ることもあります。さらに夫婦の中で不妊治療に対する考え方が微妙に違っていたりすると、そのギャップがだんだん大きくなって、夫婦関係が悪くなることがあります。また高齢妊娠に伴う問題もあります。流産や染色体異常といった子どもの問題、妊娠中の高血圧や糖尿病といった合併症、それに早産や低出生体重児など、さまざまな産科合併症が、特に40歳を過ぎると増えてきます。

高齢妊娠の問題　－産科合併症の増加－

合併症	リスク比	
	35～39歳	40歳以上
流産	2.0	2.4
染色体異常	4.0	9.9
妊娠高血圧症候群	0.9	1.7～2.0
妊娠糖尿病	1.8	2.4
前置胎盤	1.8	2.8
常位胎盤早期剝離	1.3	2.3
早産	1.0	1.4
低出生体重児	1.1	1.6
帝王切開分娩	1.6	2.0
周産期死亡	1.1	2.2

赤字は35歳未満の妊婦と比較して優位に発症頻度が高いと考えられるもの

（参考）関沢明彦他、「高齢妊娠と胎児異常」日本医師会雑誌 139(10) 2079-2083, 2011

若い方にはこのようなことを、ぜひ知っておいていただきたいと思います。最近はリプロダクティブヘルス・ライツ（性と生殖に関する健康・権利）ということが言われるようになりました。全てのカップルと個人が、出産する子どもの人数や間隔、時期を自由に責任を持って決断する権利があるということです。皆さんは自分の人生を自由に設計することができますが、人間ができることには限界もあります。自分らしく生きるために、正しい知識を持って、自身のライフプランを作っていただきたいと思います。

▼飯野：非常にためになるお話だったと思いますが、相良さんのところに来られる40歳以上の方は、子どもを産もうと思うまで、仕事にのめり込んでしまって、仕事が優先だったという人が多いのですか。

▼相良：そのとおりです。仕事を一生懸命やってきてステップアップされているような方だと、一段落してやっと子どもを作ろうと思ったら、すでに40歳になっていたという方が多いです。

▼飯野：私の周りでも、バリバリ仕事をしていて、気がついたら40歳を過ぎていたという人がけっこういたので、共感しました。学生さんたちは今の話を聞いて、何か質問などはありますか。

▼大嶋：私は今29歳で大学3年生ですが、35歳くらいに妊娠できたらいいなと思っています。ですので、今のうちに産婦人科に行っておくとか、何か今のうちにできることがあったら教えていただきたいです。

▼相良：最近、「ブライダルチェック」という言葉があります。妊娠される前に、ご自身の一般的な健康、特に卵巣の働き、子宮筋腫や子宮内膜症がないかなどを定期的にチェックしていただくことはすごく大事なことです。大きな筋腫があったら取っておくとか、あるいは子宮内膜症があったら治しておくとかしておけば、妊娠・出産したいと思った時にスムーズにできます。若い方でも意外といろいろな合併症を持っていたりするので、妊娠前にそれを知って、コントロールしておくと、妊娠・出産が安全にできるようになります。30歳、できれば20代のうちに産婦人科とコミュニケーションを取っていただいて、自分の健康管理をしていただきたいと思います。

▼飯野：20歳を過ぎた女性たちは、子宮頸がん検診もできますよね。しっかり診てもらうのも手段かもしれませんね。

▼相良：そうですね。子宮頸がんの検診は20歳以上で2年に1回、行政の補助が出ると思いますので、そういったものも活用していただきたいと思います。

▼本田：20代の結婚が珍しいことに驚きました。私は個人的に25～26歳で結婚したいと思っていたので、29歳が平均ということは、実現は難しいという結果だと思うと不安になりました。

▼飯野：いざ仕事を始めると、そちらが大変になってしまうのかもしれませんね。

▼山内：私自身も将来はキャリアを積んで、落ち着いたころに子どもが欲しいと考えていました。このお話を聞いて、やはりキャリアを積み終わった年齢と子どもを産むのに適した年齢のズレが、どうしても出てきてしまうことを考えると、今後の人生プランをどのように考えていくのかすごく難しいと感じます。

▼飯野：相良さん、凍結融解胚移植は受精卵を凍結しておいて、ある時期になったら妊娠するという人たちもいるというお話でしたが、それは素晴らしい技術だと思いますが、そのようなケースは増えているのでしょうか。

▼相良：今はこれが主流になってきていて、先ほど紹介した中では、この方法が一番妊娠率が高くなっています。この治療自体は、採卵をするためにホルモン治療をしている周期に受精卵を戻すと、逆に卵巣が腫れてしまったりして合併症が起こりやすいので、採卵する周期と胚移植する周期をずらすことによって、女性の体に負担がかからないようにしたことが始まりです。このようなことができるようになると、若いころに受精卵を作っておいて、あとで一段落したら胚移植するという選択肢も出てくるわけですが、そうすると高齢妊娠になりますし、育児が高齢になるということもあるので、全体のバランスを考えて選択をしていかないといけないと思います。

▼飯野：いろいろ進んでいることも、若い人たちは勉強をして知っておいたほうがいいですね。選択肢は広がっているが本当はどうかということもありますので、大変参考になりました。次に、子どもを出産した後の、子育てと仕事の両立ということが不安ということなので、子育て支援の現場の現状を含めて報告をお願いしたいと思います。

▼奥山：私は横浜で子育て支援の活動を行っている「NPO法人びーのびーの」の奥山と申します。親も子どもも、のびのび育ちたいという思いを込めて「びーのびーの」と命名しました。幼稚園や保育園などに行く前の、親と子どもの交流の場です。私の出身は、青森県八戸市です。1985年から1996年は会社勤めをしていました。その間、第1子出産のため育休取得（社内第1号でした）もしています。そして会社を辞めてから、第2子・第3子を出産しました。第3子を出産後すぐに、仲間の親たちと一緒にNPO法人を立ち上げました。その後、交流の場の運営に加えて、今は認可保育所なども運営していて、地域で子育て家庭を応援するというような事業を行っています。また、ファミリー・サポート・センター事業という地域の方が子どもの送迎をしてくれるサービスや、産前・産後の家庭に家事支援で料理を作ったり、赤ちゃんのお世話に行くヘルパー派遣なども始めています。

NPO法人子育てひろば全国連絡協議会（以下、ひろば全協）が発行したエッセイ募集の中で、お母さんたちがいろいろ書いてくださったのですが、「子育てがつらいのではない。子どもはかわいい。でも、不安や孤独で押しつぶされそうで、どうしようもない時がある。子どもにつきっきりの長く心細い一日。ろくに家事もこなせず、うつろに考え込む。自分の存在は一体何の価値があるのだろう。」このようなことを語ってくれました。それ以外にも、「育休前は教師としてバリバリ働いていたのですが、社会からの疎外感。息子はアトピー。それでも周囲に弱さを見せられずにいた。息子はトラブルメーカー。私の育て方のせいなのか、ひどく落ち込んだ。」このような切迫した思いが寄せられたという状況です。

横浜市が平成30年に、子どもがいる家庭にアンケートを取る中で「初めてのお子さんが生まれる前に、赤ちゃんの世話をしたことがありましたか？」ということを28,000人に聞きました。そうしたところ、「なかった」と答えた方が4人中3人でした。お世話というのは、おむつを替えたり、ミルクをあげたりということで抱っこをしたくらいではお世話にはなりません。以前では、親戚の赤ちゃんの面倒を見るとか関わりがあったのですが、今では少子化のためこのような状況になっています。

支援センターや子育てひろばという地域子育て支援拠点は、全国に7,700カ所ございます。公的施設だったり、保育所や児童館等に併設、民間施設活用だったりします。7,700という数は、小学校が2万カ所、中学校が1万カ所ですから、中学校区に1カ所という目標で、整備している施設です。親子の交流の場を中学校区に1つくらいはということで進めています。

そして、私のライフヒストリーですが、30代で3人の子育てをしました。私は雇用機会均等法施行の前年（1985年）に就職しました。女性でも仕事をさせていただけるような、あまり大きくない会社に就職して、育休は社内で最初に取得しました。育休を取った年のすぐ後（1995年）に、阪神淡路大震災や地下鉄サリン事件などがあり、とても不安な時代でしたので仕事と育児を両立させたいという思いもあったのですが、地域で子育てに専念することにして、育休1年取得し仕事に復帰して、その1年後に退社いたしました。その後2000年にNPO法人を設立しました。私にとって、仕事をした10年間は、NPO法人を設立するにあたり大きな力となりました。

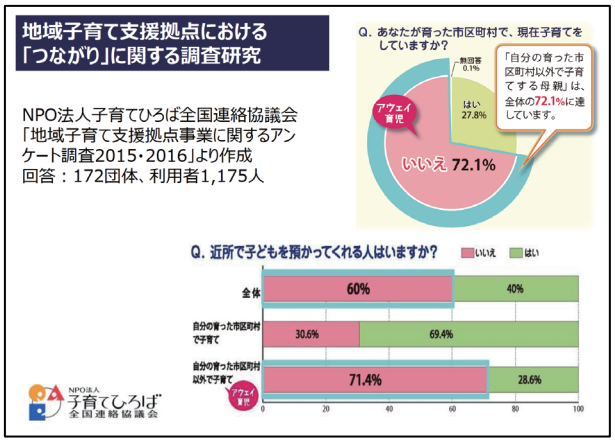
NPO法人びーのびーのは、地域の力を貸していただく、そのことは地域にも力をもたらすということで行ってきました。右の写真ですが、お母さんたちが今は支援者になっています。もう21年になりますが、こういった地域に循環を見出すことが大事だと思っています。今、事業は発展していますが、まだまだやりたいことや足りないこと、行政では難しいだろうものもあります。そこの隙間を埋めるのが、私たち市民活動だと思っています。就労でなくてもお子さんを預かる、自主グループ預かりなどもやらせていただきながら、親御さんがどういう状況でも子どもと家族を応援していく、そんな想いで活動しています。



右の写真は、地元の方が建ててくださった施設です。公的な地域子育て支援拠点事業として家賃は横浜市が出しています。日々の親子の交流の場の提供だけではなく、学校との関わりとして赤ちゃんとの触れ合い体験なども行っています。これは家庭科の授業として、位置付けられています。生徒が乳幼児と触れ合う体験、小さい子どもをケアできるという自分の発見につながります。将来のイメージを持つことに、非常に大きな影響を与えると思っています。とことん遊んでみる、子どもたちはお兄ちゃんお姉ちゃんのことが大好きです。シニア世代もそうです。親だけでなくシニアの世代の方々が関わってくれるということは、赤ちゃんにとって社会への信頼感を生むと思っています。シニアの人たちも「子どもたちにいっぱい元気をもらっています」と語っています。私は今日、皆さんに「人とのつながりの中で、自分らしく生きていく」ということをお伝えできればと思っています。

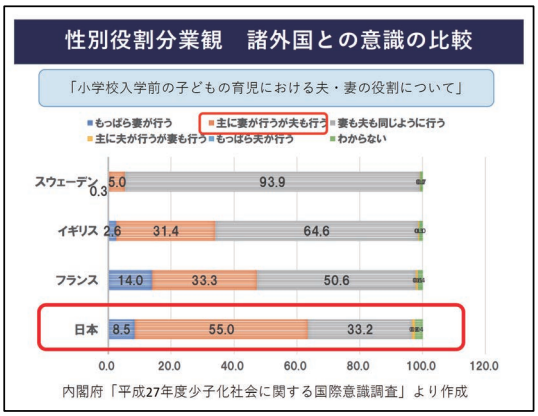


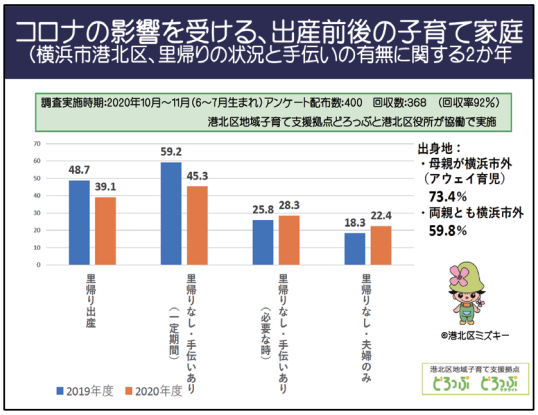
これはひろば全協が調査したものですが、子育て支援拠点「子育てひろば」を使っている保護者（お母さん）にアンケートを取りました。これは全国調査ですが、「あなたが育った市区町村で、現在子育てをしていますか？」という設問に、72%の人が「いいえ」と答えました。アウェイ育児です。何が困るかというと、「近所で子どもを預かってくれる人がいますか？」という設問に、アウェイ育児は7割以上が「ノー」なのです。アウェイ育児ではなく、地元で子育てをしている方は逆に7割が「イエス」です。つまり実家の家族や友



人が預かってくれたりするということです。自分が育った市区町村以外で子育てをしている母親たちは非常に孤立していて、知り合いのいない土地での孤立感、子育ての負担感などがあります。地域子育て支援拠点の支援者は、日々こういった数多くの母親から切実な声を受け止めています。自分の生まれ育ったまちから離れた場所での子育ては、物理的な手助けの不足に留まらず、心理的に孤立しているという状況をもたらし、「アウェイ感」を母親に与えているものと考えられます。私たちはこれを逆にうまく活用していきたいと思っています。拠点で生まれる「つながり」とは、親子が自己肯定感を育み家庭を超えた広がりを持ち、地域社会の一員として生涯にわたり、安心と信頼に基づく温かい関係性の連鎖を自ら紡ぎだす一歩だと思っています。もちろん、パートナーとの関係は重要ですが、パートナーも家族も超えた、地域のつながりということも非常に重要になってきます。

日本の子育ての環境はまだまだ十分ではありません。右のデータを見てもそうです。「小学校入学前の子どもの育児における夫・妻の役割について」というところですが、「主に妻が行うが夫も行う」というのが日本では主流です。海外を見てみると「妻も夫も同じように行う」が当たり前だと言っています。これを見た時に私自身も固定概念に縛られていると思いました。夫婦の役割分担について、結婚する前からパートナーになる方に、その価値観などしっかり確認しておく必要があると思います。私たちは現在、「プレママ・プレパパ応援プロジェクト」という、妊娠期から地域とつながる活動を行っています。また、仕事をされている方たちにも伝えるという活動もしています。そして、このような私たちの活動の全国7,700カ所の地域子育て支援拠点を日本地図でも紹介しています。どこに住んでいても、このような場所がありますので、都道府県別のリストが掲載されているひろば全協のHPもご覧ください。





最近のコロナ禍での状況をお話ししますと、子育て支援もオンライン活用を行っているところが増えてきました。両親教室はコロナの影響で、クリニックや産院、行政などでもできなくなっています。このような中で、オンラインの活用も重要だと思っています。産前・産後を里帰りもできず、手伝いも少なくなってきていて、夫婦2人だけでなんとかやりきるというのが現状です。アウェイ育児については先ほどのデータとほぼ同様です。閉館となった自粛中には、情報ボードを出したり、気持ちを書いていただいたり、スタッフは公園を巡ったりしていました。「人生のスタートを孤立させない」ということが重要だと思っています。

最後に、アロペアレンティング（共同養育）という言葉を人類学者の先生が言っています。ヒトは共同養育を前提に進化してきました。子どもの生存率、社会性の発達に寄与してきたということを言っています。家族を超えた共同養育、今日的な共同養育とは、私たちがやっている「ひろば」もそうですし、幼稚園や保育園もそうだと思います。けれど、これだけでは十分ではありません。現代に即した共同養育の環境をもっと作っていくことが必要だと思っています。ということで私自身、次世代に自信を持って伝えていく環境整備をさらに推進したいと思っています。ボランティアに来た学生がこんなことを言ってくれました。「子どもたちと時間をともにする中で、大人になって忘れていた好奇心や、押し殺していた喜怒哀楽が自分自身に必要な物であると実感しました」と。子どもたちと触れ合うこと、子どもがいることを、もっともっと社会にその良さを体験し発信していきたいと思っています。

▼飯野：奥山さんが2000年に「びーのびーの」を始めたころに、取材したことがあります。女性は同じ会社に勤め続けるのではなく、いろいろな選択肢があって仕事を辞めて、子育てを経験して、その経験を生かして社会に貢献するという生き方もあると思いました。学生さんたち何か質問がありますか。

▼大嶋：アロペアレンティングという言葉に、私はとても感銘しました。甲府市も、いろんなサポートがあると思いますが、奥山さんが行っているサポートがあれば、より良いと思いました。SOSを声にあげられないお母さんたちもいると思うのですが、そのようなお母さんたちをどうやって巻き込んでいくのか、サポートしていくのかということです。これは横浜市と提携してやっているのですか。

▼奥山：私たちのような場所に、来られる、来られないがあると思いますが、来ている人たちも信頼関係が無いと、なかなか本音で悩みを話してくれないと思います。保護者の方たちにも、悩みがもやもやしていて整理できないこともあるので、グループワークや座談会、お喋り会をたくさんやっています。その中で、自分の思いを吐き出せることが大事で、そのような環境を両

親ともに妊娠期から作っておいたほうが良いと思っています。

▼山内：地域子育て支援事業が全国に7,700カ所あるとお話しいただきましたが、その事業に関して人口の多い少ないで差があると思うのですが、地域によって格差はありますか。

▼奥山：そのとおりです。このような地域の子育て支援のサービスは市町村の事業なので、市町村の子ども子育てに関する会議によって決められます。ニーズ調査なども行われていますが、保育所などに比べると市町村によって差があるという状況です。私たちひろば全協では、研修を行って力量を上げていくということを進めています。先週、山梨県で全国セミナーがありました。全国の情報を伝えながら、実践力をつけていくところです。同時に、行政側にも働きかけるということが大事になってきていて、人口5万人以下の市区町村での調査も行いました。その結果、都会のほうが十分ではなく、人口の少ない市町村のほうがけっこう手厚く行っていたり、リピーター率が高かったりしていました。行政が直接運営するだけではなく、NPOに委託するとか、多様な支援センターがあることが利用者にとって選べるという点でも良かったりするので、市区町村でもそういったことを考えていただき、このような事業を増やしていってほしいと思っています。

▼飯野：私たちは自分の住んでいる地域で、どんなサービスがあって、それがどうなのかとか、子育てもやりたいために、地域がどうなっていて、何が足りないのかということを、自分たちで調べて、足りないものは声を上げていくということがすごく大事だと思います。アロペアレンティングは私も重要だと思います。

▼相良：奥山さん、とても素晴らしいNPOですね。行政では子育て世代支援包括センターというものを作って、そこをワンストップ拠点にしようという話もありますが、行政の仕事は地域限定だったり使いにくいところがあると思います。奥山さんのところは、その地域の人であれば、誰でも使えるようになっているのですか。

▼奥山：子育て世代包括支援センターは、全ての市区町村で実施ということになっていますので、私たち横浜市港北区も福祉保健センターの中にあります。そこの保健師さんたちと私たちは連携していまして、お互いが連携し合うような関係にあります。保護者の方も行政につながって、そこから地域の情報を知り、私たちのところへ来るということもあります。しかし、最終的には生活支援が大事だと思っていて、相談だけでは解決できない方もたくさんいますので、具体的に家に伺って家事支援をしたり、子どもたちの面倒を見たりしています。生活を支えていくというところではNPOが力になれると思っていますので、今後さらに重要だと思っています。

▼相良：おそらく、最も力持ちな支援ができているのだと思います。今後ともよろしくお願いいたします。

▼飯野：学生さんたちは、これから将来に不安なこと、もう少し広い意味で何か聞きたいことはありますか。

▼本田：妊娠と出産についてですが、私自身はこのように専門家の人たちとお話しする機会があったので、適年齢とかの正しい知識を教えていただけましたが、私のお友達にも、40歳で結婚して40代で出産できたらいいと言っている人がいて、適年齢は知っているがそれほど重大ではないと思っています。正しい知識を持ってもらいたいのですが、若者が気軽かつ正しい情報を手に入れられるツールとかはありますか。

▼相良：そこが一番大事なところですよね。知らなければ何もできないので。今、行政には女性相談センターなどがあるのですが、多くの人が知らないと思います。私たちは性教育と呼んでいますが、そのような形で学校に入り込んで行って、妊娠・出産についての知識を広めていきたいと思っています。しかし、「性教育＝避妊の教育」と受け取られ、なかなか学校の中に入り込んでいけていないという現状もあります。数年前に広い視点から妊娠・出産も含め、女性の健康を考えていきましょうという成育基本法ができました。人生全体のことを見据えたプログラムができていくと思いますので、もう少し学校教育の中に入っていかなければということを考えています。

▼飯野：産婦人科学会のホームページとかに、今日お話しいただいた情報は載っているのですか。

▼相良：学会のHPには、一般の皆さん向けのページがありますので、いろいろなことが書いてあります。

▼飯野：自分で知ろうと思ったら、信頼できる情報を探さなければいけないと思うのですが、公的な信頼できるクレジットがあるところを見てみるのも、一つの手段かもしれませんね。

▼相良：今はSNSでいろいろな情報が氾濫していますが、なかには間違った情報もありますので、学会などのページを見ていただくのは間違いないと思います。

▼山内：私はアスリートとして、月経について悩んでいたことがありました。無月経が長い期間あり、出産にどのくらい大きく関わっているのかが気になっています。アスリート以外にも、若い女性はダイエットとかで生理が止まってしまう人も多いと聞きますが、生理と出産がどのくらい重要な関わりを持っているかを教えてください。

▼相良：最近、アスリートの方とか、摂食障害やダイエットとかで無月経になる方が多く、実は私たちの中でも一つの大きなテーマになっています。妊娠・出産のためには月経があるということは必要不可欠なことです。そして月経があることよりも、むしろ排卵しているということが大事なのです。アスリートの問題で、無月経というのは一つの結果です。体を絞ることによっ

て、すごく体脂肪率を下げてしまうことがありますが、それが無月経につながることもありますし、オリンピックに出るような人などは、骨粗しょう症になっていることもあります。最近は、産婦人科の中にもアスリートのためのジャンルができていて、専門の先生も何人か出てきているので、そういった方と相談しながら、スポーツのパフォーマンスを下げずに、自分の体調をコントロールするということを、ぜひ若いうちから始めていただきたいと思います。

▼山内：私も疲労骨折を起こしてしまって、怪我も治らずに手術に至ったことがあります。正しい知識が無かったためこのようなことになってしまったので、正しい情報を知る機会はなかなか難しいことだと思いますが、どのような機会に情報を得られるのか教えていただけますか。

▼相良：正しい情報番組をメディアが作って流していただくと、けっこう視聴率が取れるのではないかと思いますが、私たちに限らず専門家は、いろいろな情報を持っているのですが、皆さんにしっかり提供してこなかったと感じています。研究が進むことは良いことですが、その成果を皆さんにフィードバックして使ってもらうことが大事なので、マスコミの力を借りることは良いことだと思います。

▼飯野：情報提供の仕方というのは重要で、報道機関も役に立つ情報をテレビだけでなくSNSなどさまざまな手段があるので、いろいろなところに出していくことも重要です。教育機関の中で性教育だけでなく、女性たちが若い時期に自分の人生を考えていけるようなチャンスを与えていって、必要な情報は調べようという動機にもなると思いますので、選択を迫られる前に、前もって正しく情報を得るということを行ってほしいです。アンケートにありましたが、出産・子育ては人生にとってマイナスで負担も大きいとか、時間も費やされるとか、そういうイメージを持っている人が多いと感じました。しかし、良い面もあると思いますが、どのように感じていますか。

▼奥山：アンケートの中に「ちゃんと育てたいから、子育て以外は手がつけられない」とあって、ここに縛られてしまうと大変厳しいと思いました。子育てについては精神科医の方も言っていますが、ほどほどの子育てでいいと思います。仕事と子育て、どちらも自分らしさを発揮しながら無理なくやっていく、無理だと思うところは、いろいろ社会資源を使う。ヘルパーでもファミリー・サポート・センター事業でもいいので、使えるものは使って、身内の人が使えるならそれも使って。100%の母親になろうとしたら疲れてしまうので、そこの加減をうまく見つけて、いろんな人やサービスをうまく活用しながら自分らしい子育てを実現してほしいと思います。

▼相良：私は子どもがいないため、残念ながら子育てをする機会がありませんでしたが、医学部の同級生に子どもができた時、医学部の授業は面白くなかったけど、子育てはすごく面白いと教えてくれました。先ほどの奥山さんの話で、学生さんが子育てに関わって、忘れていた感覚を取り戻したという話もありましたが、私も医会の仕事で赤ちゃんの動画を作って学生さんたちに見てもらったら、親に感謝する気持ちが湧いてきたと言ってくれたので、子どもによって啓発される感覚はすごく大事だと思います。子どもを持つことは、仕事よりもずっと人間を豊かにしてくれるのかもしれないと思います。

▼飯野：私自身の経験で話しますと、子どもが小さい時に病気で呼び出されたりして、仕事をセーブしなければいけない時期がありました。振り返ると大変な時期はありましたが、その経験はその後にすごく活きています。瞬発力とか交渉力とか、いろいろなものが磨かれました。あとは子どもを育てていることが、自分の自信につながった部分がありました。子どもは私がいないと生きていけないという気持ちが大きな力になって、母親は強くなると言われています。子育てには苦労がありますが、最初から諦めるのではなく、やればなんとかなるということを若い人たちにも知ってもらいたいと思います。

▼奥山：本当にそうですね。1人目が生まれた時にパートナーの支えや、うまく地域の人の力を借りるとかができると、2人目の想像ができるみたいです。2人目はパートナーがしっかり家事・育児に参画しないと、難しいというデータもあります。3人目になると、経済的な状況もあるかもしれませんが、最初の出産経験と社会的なサポートをどれだけ受けられたかということが、とても大きくなると感じています。私自身も、NPOのシニアの方に3人くらいのチームになってもらって、子育てを支えてもらいました。私たちのNPOで働いている人たちは、地元のお母さんたちが多いのですが、子どもの成長に合わせて、勤務の時間を調整しています。自分の子育てもあるので、呼び出しがあってもすぐに学校へ行ける距離感など、柔軟に働けるのもNPOの良さだと思っています。多様な働き方、多様な暮らし方、それをどのように地域の中で環境を整えていくか、NPOとして応援していきたいと思います。そして、無いものは作っていけばいいと思います。行政の方も休みの日に個人的にボランティアに来てくれる方もいます。働き方は多様です。皆さんのこれからの将来を楽しみにしています。



▼飯野：パートナー選びも大事ですし、地域とのつながりを作るというのも、女性たちが自分らしく生きていくためにはすごく

重要なことです。また、ネットワークを作ることも、その後の仕事にも活きたりするので、恐れずにチャレンジしてほしいと思います。企業の働き方も変化しています。足りないものは、声を上げて、世の中を変えていくチェンジメーカーになってほしいと思っています。女性たちが世の中を変えていけると思いますので、ぜひよろしくお願いします。自分らしく、自信と誇りを持って生きていくために、何かメッセージやアドバイスがあればお願いします。

▼奥山：学生さんが、社会に出ていくことを考えますと、自分のやりたいことや得意とするものを一生懸命やることが大事だと思っています。私自身もさまざまなところに行って、多くの人と話すことがやりたくて、旅行会社でミーティングビジネスを10年間行ってきました。その中で、パートナーとも出会って、お互いの得意を認め合う形で結婚しました。若い時に夢中になってやっていくということは、人生の突破口になると思っています。その後は、予想もつかないのが人生の面白さでもあるので、今は関心があることについて主体的に努力をしていくと良いと思います。もう一つ、日本人は子育てに不安感が高いらしいです。ある国では、子どもを産むことは喜びでしかありません、と。このような日本の雰囲気を変えていきたいと思っています。先ほどのアンケートで不安があるということは、社会に問題があると思っていますので、私自身も社会を変えるために努力していきたいと思います。

▼相良：若い方たちには主体的に生きてほしいと思います。皆さんは何でもできます。若いお母さんたちを見ていると、まだまだご主人や社会に遠慮していると思います。コミュニケーションを取って、自分のやりたいことをきちんと話し合いながらやっていけば、もっと自由に生きられるのではないでしょうか。結婚前の皆さんは、何にでも挑戦してみてください。もちろん成功体験も必要ですが、失敗するという体験もすごく大事で、人間が成長するのは失敗からしかあり得ないと、最近自分にも言い聞かせています。成功と失敗をいろんな場面で積み重ねながら、自分自身の人生を設計していく、そのような力を身につけてほしいと思います。

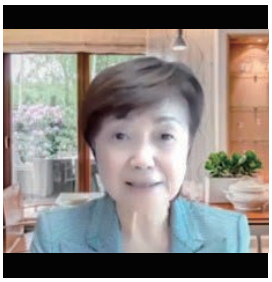
▼大嶋：私の人生、これから楽しみに思えるようになりました。人生を自由に生きるということは、多様性、選択肢をいっぱい用意することだと感じましたし、それを提供するには、いろいろな人の連携というのが大事だと思いました。私も主体的に社会を変えていきたいと思います。

▼本田：私は子育てが不安という理由から、まだはっきり子どもが欲しいとは言えないと言っていました。今までは子どもを育てなければいけないというハードルがすごく高くて、何でもできなければ、子育ての能力は無いと思っていました。しかし、皆さんのお話を聞いて、もう少し楽な気持ちで、やりたいようにやっていいのだと思えるようになりました。単純ですが、子どもが欲しいと思えるようにもなりました。

▼山内：私も皆さんと同じように、どちらかというと子育てに不安を持っていました。しかし、今日の話を聞いて、子育ては楽しいものだと思えるようになりました。また、周りの人に頼りながら、自分の人生プランを立てていきたいと思います。

▼飯野：若い人たちも非常に前向きで良かったと思いました。今日の話を聞いて、自分のことを考えるきっかけにしてもらって、これから選択しなければならないことがたくさんあると思いますが、前もって情報を集めながら、いろいろな人の話も聞きながら、自分らしさを極めてもらいたいと思います。ありがとうございました。

【第２部】



▼飯野：第2部では、私らしく生きることを支えるために必要な社会支援を、地域や社会の中でどのように実現していくのか、を考えていきます。個人で解決できないことを社会全体で支えるしくみを作るのが政治の役割です。女性の政治参加の意義も含めて、専門家、甲府市の市議会議員の皆さん、そして学生たちも一緒に議論をしていきます。まず、三浦まりさん。上智大学法学部教授で、女性の政治参画分野の第一人者、日本で女性議員を増やすための活動をさまざましておられます。日本は女性の政治参画が遅れていると言われていますが、現状などをお話しいただければと思います。

▼三浦：女性が私らしく生きるための社会支援を実現するために、女性の政治参画は押し進めないといけない、どうしてなのか、ということをお話ししていきます。まず、日本の状況を見ていきますが、皆さんは121位ショックという数字を聞いてピンとくるでしょうか。これはジェンダーギャップ指数と言って、世界の男女格差を表した指標です。日本の数値は、今までででも一番低く、前年からは10位ほど落ちてしまい、社会に激震が走りました。それまで日本では、女性活躍とか、女性が進出しているだろうと思われていました。



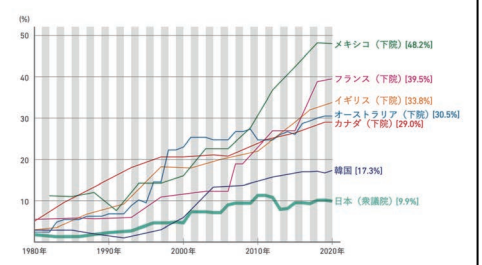
この実態を直視して、このままのやり方では、世界から取り残されていっているらしい、そんな社会的認識が広がったのが、2020年の状況ではないかと思います。そして、1年後に発表されたラン

キングは120位でした。今、衆議院選挙中ですが、衆議院の女性の割合は10%を切っています。しかし世界の割合は25%です。つまり他の国ではさまざまな努力をしてきましたが、日本の取り組みは他の国ほどではなかったということです。今回の衆議院選挙で、どのくらい増えるかということが注目されていますが、候補者では17.7%とほとんど変わりありません。ただし、勝てそうな選挙区に女性を擁立していますので、若干前回よりは増えるだろうと期待しています。(※この大会直後の10月31日に行われた衆議院選挙では、実際には2人減らして9.7%に留まりました。)やはり3割、5割を目指すには何が必要かを考えていきたいと思います。

右上の表は、80年代からの女性議員の割合を、下院で比べています。見てみると、一番太い緑の線が日本です。80年代は、どの国もだいたい一緒で5%以下だということが分かります。90年代から国によって差が生まれてきます。2000年を過ぎてから今日までに差が拡大しています。日本だけ見ていると、確かに女性を増やそうという機運はありますし、努力も行っているのですが、どうやら世界の状況は、ものすごいスピードで女性議員を増やしていることが分かります。

地方議会も見てみましょう。平均は12%ほどで、東京都が30%を超えている唯一の都道府県議会となります。

日本は世界から引き離されている



出典：IPU 及び各国の議会・選挙管理委員会作成資料
[ ] 内は 2020 年1月時点の値

地方議会でも少ない

都道府県	議員現員数（人）	うち女性（人）	女性割合（%）	
東京都	124	36	29.0	20%以上 2団体
京都府	60	13	21.7	
神奈川県	105	19	18.1	15%～20%未満 4団体
滋賀県	44	7	15.9	
兵庫県	86	13	15.1	
埼玉県	93	14	15.1	
岩手県	47	7	14.9	10%～15%未満 19団体
岡山県	55	8	14.5	
鳥取県	35	5	14.3	
千葉県	94	13	13.8	
宮城県	59	8	13.6	
徳島県	38	5	13.2	
長崎県	46	6	13.0	
長野県	57	7	12.3	
栃木県	50	6	12.0	
静岡県	68	8	11.8	
三重県	51	6	11.8	
秋田県	43	5	11.6	
新潟県	53	6	11.3	
北海道	100	11	11.0	
沖縄県	46	5	10.9	
愛媛県	47	5	10.6	
福岡県	87	9	10.3	
宮崎県	39	4	10.3	
富山県	40	4	10.0	
鹿児島県	51	5	9.8	5%～10%未満 16団体
奈良県	42	4	9.5	
山形県	43	4	9.3	
岐阜県	45	4	8.9	
福島県	58	5	8.6	
山口県	47	4	8.5	
島根県	37	3	8.1	
群馬県	50	4	8.0	
和歌山県	42	3	7.1	
石川県	43	3	7.0	
大阪府	88	6	6.8	
茨城県	61	4	6.6	
青森県	47	3	6.4	
福井県	37	2	5.4	
高知県	37	2	5.4	
佐賀県	37	2	5.4	
愛知県	102	5	4.9	5%未満 6団体
香川県	41	2	4.9	
広島県	64	3	4.7	
大分県	43	2	4.7	
熊本県	49	2	4.1	
山梨県	37	1	2.7	
合計	2,668	303	11.4	

都道府県議会　平均11.4%

東京都（29%）から山梨県（2.7%）と地域格差も大きい

上位に東京、京都、神奈川、滋賀、兵庫、埼玉
下位に山梨、熊本、大分、広島、香川、愛知

市区議会の女性割合

都道府県	議員現員数（人）	うち女性（人）	女性割合（%）	
東京都	1,543	467	30.3	25%以上 1団体
埼玉県	949	219	23.1	20%～25%未満 4団体
神奈川県	583	134	23.0	
大阪府	792	173	21.8	
京都府	367	78	21.3	
千葉県	920	180	19.6	15%～20%未満 11団体
北海道	717	139	19.4	
兵庫県	698	131	18.8	
長野県	401	74	18.5	
三重県	318	56	17.6	
愛知県	928	162	17.5	
高知県	196	34	17.3	
滋賀県	291	49	16.8	
福岡県	640	103	16.1	
栃木県	336	53	15.8	
静岡県	501	76	15.2	
和歌山県	178	26	14.6	10%～15%未満 25団体
茨城県	660	93	14.1	
宮城県	327	46	14.1	
青森県	229	32	14.0	
宮崎県	201	28	13.9	
鳥取県	87	12	13.8	
群馬県	284	37	13.0	
岡山県	339	44	13.0	
福井県	193	25	13.0	
山口県	308	38	12.3	
岐阜県	398	49	12.3	
香川県	180	22	12.2	
山形県	264	32	12.1	
奈良県	224	27	12.1	
徳島県	176	21	11.9	
岩手県	316	37	11.7	
広島県	363	42	11.6	
沖縄県	287	33	11.5	
愛媛県	268	30	11.2	
鹿児島県	402	44	10.9	
新潟県	458	50	10.9	
富山県	201	21	10.4	
山梨県	249	26	10.4	
島根県	185	19	10.3	
石川県	201	20	10.0	
熊本県	309	30	9.7	10%未満 6団体
福島県	330	32	9.7	
佐賀県	213	20	9.4	
秋田県	283	25	8.8	
大分県	295	23	7.8	
長崎県	285	21	7.4	
合計	18,873	3,133	16.6	

市区議会は平均16.6%
0%から50%まで差が大きい

上位に東京、埼玉、神奈川、大阪、京都
下位に長崎、大分、秋田、佐賀、福島、熊本

https://www.gender.go.jp/policy/mieruka/pdf/map_chihougikai.pdf

いまだに残る女性が「ゼロ議会」

都道府県	市区町村議会数	うち女性ゼロ議会数	女性議員ゼロ議会割合(%)	
奈良県	39	15	38.5	30%以上 7団体
青森県	40	14	35.0	
山梨県	27	9	33.3	
鹿児島県	43	14	32.6	
福島県	59	19	32.2	
沖縄県	41	13	31.7	
北海道	179	54	30.2	
長崎県	21	6	28.6	20%～30%未満 14団体
熊本県	45	12	26.7	
鳥取県	19	5	26.3	
島根県	19	5	26.3	
岡山県	27	7	25.9	
群馬県	35	9	25.7	
高知県	34	8	23.5	
宮崎県	26	6	23.1	
静岡県	35	8	22.9	
石川県	19	4	21.1	
徳島県	24	5	20.8	
山形県	35	7	20.0	
和歌山県	30	6	20.0	
佐賀県	20	4	20.0	
岩手県	33	6	18.2	10%～20%未満 14団体
福井県	17	3	17.6	
宮城県	35	6	17.1	
大分県	18	3	16.7	
秋田県	25	4	16.0	
山口県	19	3	15.8	
長野県	77	12	15.6	
三重県	29	4	13.8	
富山県	15	2	13.3	
京都府	26	3	11.5	
茨城県	44	5	11.4	
滋賀県	19	2	10.5	
愛媛県	20	2	10.0	
福岡県	60	6	10.0	
愛知県	54	4	7.4	5%～10%未満 5団体
兵庫県	41	3	7.3	
岐阜県	42	3	7.1	
新潟県	30	2	6.7	
東京都	62	4	6.5	
広島県	23	1	4.3	5%未満 7団体
栃木県	25	1	4.0	
神奈川県	33	1	3.0	
千葉県	54	1	1.9	
埼玉県	63	0	0.0	
大阪府	43	0	0.0	
香川県	17	0	0.0	
合計	1,741	311	17.9	

県内の市区町村議会の3割以上がゼロ議会の県は7県ある
（奈良、青森、山梨、鹿児島、福島、沖縄、北海道）

ゼロ議会がない県は3県（埼玉、大阪、香川）

鹿児島県垂水市は2019年まで一度も女性議員が誕生したことがなかった

山梨県の県議会については、一人しかいないということで、非常に残念です。市区議会については平均16%くらいですが、0～50%と、すごく大きな差があります。残念ながら自治体の17%は女性0議会です。首都圏では、女性議員が3割～4割なのは普通になっています。人口規模が大きく、たくさんの人が流入するような状況だと、女性議員が多いです。しかし全国でみると0の議会もまだ多いのが実情です。世界はどうかというと、世界平均は25%です。40%を超える国もすでに23カ国あります。20年前だと1カ国だけでした。今は40%を超える国が23カ国ですが、2年前は15カ国でした。多くの国は3割を目指そうと目標を立て、3割を超えたら4割に、というように加速化しています。世界の女性議員比率を見ますと、30%を超える国はすでに51カ国あります。日本はよく先進国の中では一番低いと言っていますが、それは間違いで、世界の中で最下位グループになっています。

もう一つ見てもらいたいのが法律です。女性たちが自由に、また経済的にも自立して暮らせるための法律が整備されることが必要です。世界銀行の調査では女性が経済的に自立するための法律がどのようになっているか、ということを比べています。ここで100点を取れば女性が経済的に自立しやすいということになります。現在では100点を取っている国は10カ国あります。日本は81点です。1980年代は、日本はフランスよりも良かったのですが、90年代になって抜かれてしまいます。2010年には韓国にも抜かれていますので、法整備という意味でもあまり進展が無いことが分かります。これは意思決定の場に女性が少ないため、経済的な自立を支える法律を作ろうという推進力が無かったことと関係しているでしょう。特に問題なのは、性差別を禁止する法律が日本には無いという点です。国連からは、何度も日本政府に対して勧告が発出されているのですが、日本政府は動いていません。またデジタル性暴力も、現在ひどい状況になっています。こういったことが蓄積して、世界銀行のランキングも低いということになっています。今日ご紹介したのはごく一部です。他の国では整備されているものが日本には無い、ということがたくさんあるのです。そのことからも、「なぜ女性が政治に関わる必要があるのか？」ということが見えてくると思います。まずは女性が抱えている問題が軽視されてしまうことがあります。

また、日本には性別役割分業が強く残り、女性や男性、LGBTQにとっても生きにくい社会が出来上がっています。そして、リーダーがほぼ男性で占められ、女性で首相や政治家、校長先生になりたいとか、男女関係なく夢や地位を持てる社会にはなっていません。何が良い社会かは人によっていろいろです。だからこそ話し合って物事を決めて、予算を振り分けたり、法律を変えたりする必要があります。それをする役目が政治です。政治は未来そのもので、よりよい社会をつくるためには、政治に働きかける、それが一番早いです。政治が皆の声を聞き届けてくれないと、いつまでたっても私たちが望んでいる未来が得られないことになります。自分を大切にする、周りも大切にする、そうやって皆と未来をつくるということが、政治の大きな役割です。したがって、女性や若者、LGBTなど多様な属性の方が意思決定に入ることが重要です。

日本では、政治分野における男女共同参画推進法という法律が3年前に成立しました。これは女性たちが勝ち取った法律です。女性たちが日本にも女性議員を増やす法律が必要だということで運動を行い、その声を聞き届けた国会議員たちが、議員連盟というグループを作って、そこで法律を策定し、国家で全党一致して成立したものです。私はこの議連にアドバイザーとして、法律の策定に関わってきました。この法律の理念はパリテ（男女同数・男女対等で政治に参画するという意味）です。義務ではありませんが、努力義務という形で、男女同数が理念になっています。これが今年改正され、ハラスメントの防止が入りました。責務として各議会がハラスメント防止を講じることになりました。3年という短い期間で改正されたのも、大変良かったと思います。

このあと市議の2人にお話しいただくと思いますが、私たちが政治家を増やしたいと思っても、なかなか増やせないという状況にあります。政治家になるためにはいろいろなステップがあり、たくさんの壁があります。それが男女同じであればジェンダーギャップはありませんが、やはり女性のほうに高い壁があり、政治家になりにくい構図ができています。「やっぱり女性には難しいのかな」ではなく、だからこそ社会的支援が必要だということです。制度・法律も変える必要がありますし、また女性たちを支えるような、いろいろなしくみを作っていくことで、女性が女性を押し出すということが必要になってくると思います。

第1部でも、女性たちが、自信が無いという話がありました。そこにも性差があるため、女性の方がなかなか政治家になろうと志しませんし、政党から「立候補をどうですか？」と言われても、「自分はまだ経験が無いから無理」だと思う割合が、女性のほうが多いということも調査などで分かっています。それを私たちが分かったうえで、どのような支援をしたらいいのだろうということを、考えることが大切だと思っています。

最後に、どうやって女性リーダーを増やすかということですが、おじさんしかいない政治状況で、女性たちがその中で発言していくことは非常に大変です。女性の話をしようとしても、話しづらかったり、逆に女性の役割しか期待されず、女性議員といえば子育てとか、固定的な役割を与えられてしまったり、女性だからといって聞いてもらえないこともあります。このような構造を私たちが理解しながら、次世代の女性たちがどうやって自信を持っていくか、ありのままの自分を、自分自身が受け入れることが重要だと思います。今の日本は、自信を持てない環境にあるので、ありのままの自分を受け入れるということと、あとは周りが支えていくということです。エンパワーメントという言葉が良く使われますが、一人でなんとか頑張ろうということではなく、コミュニティーの皆で力を付けることが重要です。一人のスーパーウーマンが出るということでは意味がなく、皆で一緒に支え合いながら、今の日本の男性中心の政治を変えなければなりません。こういった女性たちの支え合うコミュニティーを作っていく、これは誰でもできるし、誰でもやらなくてはいけないことだと思っています。後ほど大学生の皆さんのコメントを聞きながら、具体的にどうやっていくかを考えていきたいと思います。

▼飯野：山梨はかなり遅れていることにけっこうショックを受けました。学生さん、話を聞いて質問がありますか。

▼大嶋：私はニュージーランドに住んでいたことがありまして、ニュージーランドでは、男女やLBGTQは全く関係ないことを生活の中で感じていました。そのニュージーランドでは、クオータ制を入れているということを聞いたことがありますが、ク

オータ制を入れることは、良い事なのでしょうか?という質問です。

▼三浦:クオータ制は、いろいろなやり方があるので、法律・義務で行うこともできますし、政党によって自主的に行うこともできます。現在、いろいろなクオータを全部集めますと、世界で129カ国実施しています。これによって女性議員が増えています。逆にクオータを入れなくて女性議員を増やすことは、非常に難しいと思います。フィンランドでは、クオータ無しで女性議員を増やすことができていますが、女性参政権や被選挙権が早くから実現したことがあると思います。ニュージーランドもそうです。男女平等の文化や、比較的女性が出やすい選挙制度があると、クオータが無くても増えるかもしれませんが、残念ながら日本ではその状況はありません。日本でクオータ無しで女性議員を増やすのは、国政では無理だと思います。地方では女性割合が50%のところがあるように、市区議会なら可能ですが、国政や都道府県では難しいと思います。クオータを入れると、優秀な女性たちが手を挙げて政治家を目指すようになります。現在の女性は、地域社会とかビジネスとかさまざまなところで活躍していますが、今の状況だと、そのような人たちが政治家になろうとは思いません。しかしクオータがあることによって、自分も政治家になろうという人たちが増える、結果的に良い人材が政界に集まるという効果があります。それでは誰が反対するのかというと、男性議員です。選挙に弱い男性議員は、クオータが入ると自分たちの席がなくなってしまうので反対をします。しかし私たち有権者から見ると、男性の中で競争が起きるので、より良い議員が議席を得ることになります。それは民主主義にとって良いことではないかと思います。クオータは日本でも必要ですし、それがなくては変わっていかないと私は考えています。

▼飯野:1980年代は各国ともに女性議員が少なかったのに、これだけ日本との差が出てきたというのは、クオータを入れているということが一番大きな要因ですか。

▼三浦:大きいですね。クオータは1回で変化を起こすというよりも、徐々に強化されて効果を上げてきたのが実態です。特に法的・義務的クオータというのが90年代以降は広がっていて、最初は現職議員が抵抗するのですが、女性たちが頑張って押し切って、この制度を導入してきました。しかし導入しても抵抗され、女性は、絶対に当選しない場所にしか擁立しないとか、さまざまな攻防がありました。そして20年くらいかけて法律を段階的に引き上げて、現在の状況になっています。日本では、政治分野における男女共同参画推進法が義務ではありませんが、理念として入りました。日本もやっとスタートラインに立っています。今後は、数値目標を全ての政党が設けるとか、段階的に法律を変えていく必要があります。一番重要なのは社会のプレッシャーです。社会で女性議員がもっと必要という声が大きくなれば、政党は変わらざるを得ないので、その声を上げていくことが、私たちの役割だと思っています。

▼飯野:今回の衆院選も、女性の候補者は20%にも達していません。いくら待っても変わらないようなら法的に強制力を持ったものをやっていかないと増えていかないということですね。

▼本田:政治指導者は男性が適しているという意識が若者には少ないというお話があったと思いますが、私の周りでも男性のほうが良いと言っている人は少ないですし、ニュースなどでも女性の政治進出について再三言っているはずなので、皆の意識の中にもあると思います。しかし、実際はジェンダーギャップ指数が121位であったり、性差別禁止法などジェンダー平等の法的基盤が弱かったり、なぜうまくいかないのか不思議です。それは皆の意識がまだ変わっていないのか、それとも政治家の中に、まだ女性の政治進出を重要視していない人がいるからなのか、他にネックになっている理由が何かあるのか、その辺りはいかがですか。

▼三浦:市区町村議会だと無所属で立候補ができるのですが、国政は基本的には国政政党から公認を得た人しか勝ち上がる可能性が無いです。ですから、誰が権力を持っているかということを見る必要があり、高齢の男性が持っています。その男性たちは誰を擁立するのかというと、そこは本当に権力闘争そのものです。もちろん女性を増やしたいとか、増やしたほうが有権者からうけるとか思ってはいるのですが、それぞれの選挙区の事情などがあって、なかなか増えにくいということがあります。だから、もし数値目標やクオータを入れると、これまでのやり方を変えなければいけなくなります。そうでもしない限りは、今までのやり方で「勝てる候補」を選ぼうとします。そういう候補者のモデルというのは、飲み会を断らない女とか、1日20カ所くらい運動会を回るとか、地域の人たちと対面で交流を深めていく、そのようなことをやらないと、なかなか公認が得られませんし、選挙でも勝てないという選挙文化ができています。これは女性にとって辛いことです。だから選挙文化を一緒に変えていくことが重要です。飲み会をいっぱいこなした人が勝つのではなく、政策論争で判断するとか、あるいは議会でどんな発言をしていたのかということも、有権者が気にして判断するとか、このような選挙文化を変えていくことを、一緒に考えることが重要になってきます。

▼飯野:女性が議員になるための壁がすごくたくさんあるだろうと私も思います。そして山梨でも壁があるのだろうと思っていますが。続いて、実際に政治の場で活躍されている、甲府市の市議会議員の方々からお話を聞きたいと思います。甲府市議会は32人の議員の中に、女性議員が4人います。いろいろな壁がある中で、どうして政治家になられたのか、今どんな活動を

しているのかということも含めて、ご報告をいただきたいと思います。



▼植田：甲府市議会議員の植田です。私は甲府のごく普通の家庭に生まれ、経済的に大変な中でも懸命に働く両親の背中を見ながら過ごしました。大学では女性が輝きながら活躍する時代になるとの創立者の講演に希望を抱き学んだ日々でした。それでも当時は、これほど地域や社会に女性が進出し活躍する時代が来るとは考えられなかったのが現実です。その後、就職、結婚、出産、育児、介護を経験いたしました。暮らしの中でも、ごくごく普通に社会貢献をしたいという思いもありましたし、家族も友人も幸せであればいいと願う毎日でした。2010年に地域の方たちの推薦で市議会議員のお話をいただきました。私に何ができるのだろうと、悩みながらも立候補を決意。そんな中で、東日本大震災。被災地での避難所をはじめとする女性の苦しい体験。防災復興に女性の声を入れること、そしてまた女性がエンパワーメントして女性の声を生かすこと、女性議員の必要性を実感したところでした。

政治参画、一票の意味ってなんでしょうか。ご一緒に考えてみてください。

私が最初に取り組んだことは、女性市民の皆さんに声をかけ、災害と女性、女性の声を発信する会の立ち上げでした。意見交換の場を設け、女性のエンパワーメントのために避難所の運営をはじめ、防災の知識を学ぶ女性防災リーダー研修会を要望し、実現いたしました。甲府で活躍されていた多くの先輩、女性リーダーの皆さんに本当に感謝したものです。これまでに多くの女性防災リーダーが誕生し、自主防災組織で、また避難所運営に携わって活躍しています。次に「なでしこ検診」についてお話しします。大切な友人を40代の時にがんで亡くし、その経験から、乳がんの早期発見・早期治療のためにも、がん検診の重要性を強く感じました。早期発見が大切でも、検診率が低かった甲府市ですが、受診をためらう女性の皆さんに伺うと、男性の技師だと恥ずかしいから行かないとの声が多く聞かれました。このことから、女性のスタッフだけの乳がん検診を提案し、実現。今では託児付きの「なでしこ検診」は好評です。また、ある時、甲府駅北口駐車場の障害者用の駐車場が狭くて車いすが降ろせないという市民相談に、すぐに現場の確認をし、現在の安全に利用できる障害者駐車場になりました。この方たちの笑顔が、私が議員をしていて最高の喜びです。

身近な願い、小さな声でも社会のしくみを変えていく、一票には力があるということ。あなたの声を、願いを、希望を行政に届けることができる、これが一票だと実感しました。困窮する女性、生理の貧困、最近は耳にされることが多いと思います。コロナ禍で困窮し、生理用品の購入にも困難を感じている女性のために、本年3月17日に、甲府市長に要望書を提出いたしました。その後まもなく、生理用品の無償配布が始まった甲府市です。配付先にある相談支援、そして貧困から自立へと男性議員・女性議員関係なく推進し実現した一例です。

今後は国が進める女性活躍、ひとり親支援につなげることが課題だと考えられます。一票、誰でも行使できる権利です。身近な願いや希望を実現できる力がある一票です。活動の一つとしてボイスアクションと申しまして、街角で希望する政策や要望に、「いいね」と指をさしてもらう運動を展開しました。その中から、来年度から実現する不妊治療の保険適用などに結び付いたことも嬉しい事実です。

これから目指すことは、コロナの克服で力強い経済再生、そして感染症に強い社会、また、子育てや教育を中心にした支援策、これが大切です。誰一人置き去りにしない、SDGsの理念のもと、くじけずに立ち向かっていくレジデンスを目指していきたいと考えています。「労苦と使命の中に人生の宝は生まれる。」これが私のぶれない指針です。休む時は休む、やる時はやる、突破力もしなやかさも、女性の特権ではないかと考えています。

最後に、平凡な家庭の妻として母として、忙しい日々を送っていた私です。しかし、「なんか変だよね」「もっとこうなればいいのにね」と、普通の日常で感じていることを実現したいと、前へ一歩出てみました。私の所属する公明党では、山梨県内に議員が30名います。その半数近い14名が女性議員です。どこの地域にも女性議員がいて、女性の声を反映できるといいですよね。

▼飯野：私も災害現場を長く取材していますけど、防災に女性の視点は大変重要だと思いますし、「なでしこ検診」なども、とてもきめ細かくて、とても素敵だと思いました。続いて末木さん、お話しいただけますか。



▼末木：先ほどの三浦先生のお話を聞いて、とても嬉しくなりました。どうして政治家になったのかというと、私の祖父が町長選で失敗をしています。叔母によく、あなたは政治家に性格が合っているからやってみては、と言われたのです。でも、結婚をして、そんなことを考える余裕は全くなく、その時は子育ても仕事もありました。しかし、子どもが大学に進学し、どうにかして子どもから自立しなければいけないと思いました。そこで、荒川の掃除やまちの読書会、三文会など、いろいろな活動をしてみました。その中で、世の中にはいろいろな矛盾があることに気づきました。女性だったら女性の視点で、どうにか議会に反映しなければいけないと思いました。それなら政治家になるために立候補しようかと、このような感じで始めた初選挙は、とても大変で、初めて試練を感じました。私には政治家になる

ための地盤も看板も鞄もありませんでしたので、同級生を頼り、友人があちこちで活動をしてくれましたが、そんなことでは当選できるわけがありません。そこで、自治会にお願いに行き、そこで一軒一軒歩きました。2,000件～3,000件ほど訪問したように思います。その結果、私の活動を聞いてくださる方から、いろいろな悩みを聞くこともできました。これが私の政治の始まりのようにも思います。

女性議員の数は本当に少ないと思っています。国全体を見ても女性議員比率は、世界の166位と情けない状況です。しかし、女性の方たちにお話を聞きますと、政治には興味が無い、難しくて分からないという人が多いのです。そこで私の使命は、政治を分かりやすく、女性たちに伝えることだと考えました。現在の民生費は40%です。今後はさらに高齢化社会になっていきます。そうなれば、女性の政治活動なしでは行政は動いていかないと思います。

ここで、私がどのような事をしてきたか紹介いたします。まず去年の市議会で質問をしたことですが、性的虐待です。山梨県では性的虐待は18件と言われていますが、これは氷山の一角です。被害を受けている子どもたちは、自分が悪いからだと勘違いしているケースもあります。幼い時からの習慣だと思っている子もいます。また、最近の傾向で見るとデジタル被害がすごく多くあります。これは一度拡散されてしまうと終わりのない苦しみが続きます。この性的虐待は7割から8割が顔見知りの犯行です。最近では、国でもやっとこのことについて動き出しました。今では生命の安全教育ができていて、自分の体を大切にすること、また相手を大切にすることを勉強させていきます。そしてこの性暴力に関しても被害者や加害者、傍観者になってはいけないという教育もしています。

次に、子育てについてです。甲府市では妊娠期から子育て期間の間、一人ひとりに寄り添って相談支援を行う、マイ保健師制度があります。また、病児・病後児保育も甲府市ではできるようになりました。

次に女性活躍です。女性が働きやすく、長期的にキャリアを形成できるように改革を求めた質問を議会で何度も行ってきました。女性の活躍推進に関する状況を話しますと、今では優良企業を認定する制度が導入されています。男女平等の採用と継続就業、労働時間や管理職の比率の平等など、女性が一生涯働ける環境を整えることが、企業にとっても大切な時代になってきたのではないかと思います。

最後に、女性の健康についてです。平成27年8月に「女性の職業生活における活躍の推進に関する法律」が成立いたしました。女性の職業生活と家庭生活の両立を図ること、このような環境整備が充実されてきました。でも女性の身体は結婚・妊娠・出産などのライフステージによって大きく変わります。これに対する国の対策も、まだまだ改善されていません。私は女性の健康サポートや女性活躍を推進するための支援、働く女性の環境整備など、あらゆる角度で議会に質問をしてきました。そこで甲府市では、先ほどの植田先生の「なでしこ検診」とか、乳がんや骨粗しょう症に加えて、健康相談とか体験型食事診断も行われるようになりました。女性に健康支援を行っていくことが、キャリアを付けていくことにつながっていくのではないかと私は思います。しかし、国の女性の健康支援対策が全くなっていませんので、甲府議会から国に「女性の健康についての包括的支援に関する法律」の制定を求める請願書を提出できたことはとても有意義なものでした。労働基準法第68条では、使用者は生理日の就業が困難な女性が休暇を請求した場合、就業させてはならないというように定められています。しかし、生理休暇を取ることに躊躇している女性は本当に多いです。今後は女性の健康の包括的な支援により、つらい時にはつらいと言える環境づくりが当たり前の時代になっていくと思います。そして私はそれがもう少しで実現できると思っています。

政治は生き物です。政策は誰にとっても暮らしやすい社会になるように、時代の流れによって変わっていくと思います。私たち政治家は、公務として働くことがとても多いです。公の仕事は大切ですが、私は政治家にとっての耕夢をしたい。お一人おひとりの夢を耕していきたいと思っています。そして伴走していくようなことを、これからも力を入れていきたいと思っています。

▼飯野：お2人の議員のお話を聞いていると、政治の場に女性がいるということが、とても大事だと感じました。一つ質問です。女性の議員の数が少ないと、なかなか必要なことが通りにくいと言われています。甲府市議会も女性の数が少ないですが、女性が少ないからやりにくいことがあるのかどうか、山梨県は女性議員が少ないのですが、どうしてこれほど女性が少ないのか、やりにくい問題があるのかどうか、簡単にお答えください。

▼植田：女性の数が少ないから女性の声が反映できないということはないかもしれません。先ほどの生理の貧困の要望書を提出させていただいた時も、男性女性とかではなく、困っているからこれをやろうということなので、男性議員も女性の言うことは聞かないような態度は全くありません。ですので、女性の数が少ないから意見が反映できないと言われると、全くできないわけではなく、だだし、女性の目線というのは絶対必要だと思っています。例えば、甲府市役所のトイレにこのコロナの真っ只な中、便座除菌シートが設置されておりませんでした。これをなんとか設置してもらいたいという話がありましたが、これは私の委員会では言えませんでした。そこで、男性の議員に訴えていただきました。その結果、今では市役所の全ての女性トイレに、便器の除菌クリーナーが付いています。このような小さなことですが、女性の目線というのは絶対必要です。女性の数がたくさんあれば、もっとどうにかなるということは期待いたしますが、女性議員が少ない中でも、必ず前に動かすこと

ができると確信しています。それでも、女性議員が多くなってほしいと考えます。

▼末木：私が一軒一軒お伺いした時に、「女性には政治家は無理だよ」と、よく言われました。女性は、学歴、社会的地位、経済力などを備えることがなかなか難しいと思います。これが、女性議員が認められない原因だと感じています。私も過去に女性の健康について発言した時に、そんなにはっきり言っていいのかと周りの男性に言われたこともあります。しかし最近では、女性の健康についてエールを送ってくれるようになり、理解を得られるようになりました。また、不妊治療や人工授精にも理解を示してくれる男性議員も多くいます。時代とともに女性支援に賛成をいただいてきています。

▼飯野：学生さんたちから、今までの話の中で、女性の政治参加を含め、何か質問がありますか。



▼山内：植田さんの取り組みについての話で、なでしこ検診があったり、生理用品の無償配布の話を聞いて、すごく嬉しいことだと思いました。私と同じように嬉しく感じている人は全国でも大勢いると思います。全国各地で行うべきだと思いますが、これを全国で展開するには、なにか難しい壁とかがあるのでしょうか。

▼植田：生理の貧困に関しては、国が「つながり支援」というNPO法人などに委託して、生理用品を女性トイレに無償で設置するという予算を付けました。ところが甲府市には、女性を支援する具体的なNPO法人などが無く、予算を使うことができませんでした。しかし、山梨県内でも甲府市が最初に、この活動を始めた時、小さな市町まで私が所属する政党の女性議員がいましたので、このネットワークを活かして、皆で一斉にこの活動を展開しました。国で動き始めたことは即座に、一つひとつ前に、現場に、私の町に、私の市に、女性のために動くことができるようになります。全国でこのようなことができるようになるというのは、とても大事なことだと思います。

▼大嶋：皆さんにお聞きしたいと思います。取り組みを実現するまでのプロセスは難しいと思います。特に生物学的に女性の不利な部分を、男性に理解してもらうことは大変難しいことだと思います。理解をしてくれる男性もいますが、理解してくれない男性もいます。そのような男性にどうやって声をかけていくのか教えてください。

▼植田：男性でも、人間としての資質がある方が集まっていれば、全く問題のない話で、それぞれの家庭にも女性がいるわけで、24時間女性というものに接しているわけです。ですから、人間的に偏っていなければ、必ず理解してくれると私は思っています。先ほどの生理の貧困ではありませんが、男とか女とかは関係なく、人間として困っている方がいれば、そこに手を差し伸べるのが政治だと思っています。

▼飯野：この話を聞いて、少しでも政治が身近になってくれると良いと思っていますが、若い人たちと話をしていると、政治がすごく遠く、何から始めればいいか、という話も聞きます。日本は若者の投票率も低いですが、三浦さん、政治に関心を持つとか、政治に参加していくためには、若物たちは何から始めればよろしいのでしょうか。

▼三浦：直接政治家に会ってみるのも良いですし、自分が関心のある政策から入っていくことも手段の一つだと思います。今、主権者教育が高校・大学で行われていますので、投票へ行かなければいけないプレッシャーは感じていると思います。しかし、実際選挙に行っても、誰を選んでいいのか分からないとか、政策を言われても分からないとかがあるかもしれません。そのような時には、何の争点でも構いませんので、ネットで調べるとか、自分自身が関心のある争点を見つけて、政党や候補者を選んでみるのも良いと思います。また、実際に政治家に会ってみることは必要で、今日は残念ながらオンラインでの場になりましたが、植田さんや末木さんのような女性議員に会ってみて、そのパワーや考え方など、直接会って感じてみることも重要だと思います。

▼大嶋：メールとか電話を直接してもいいのですか。

▼三浦：もちろんです。遠慮することは全くありません。選挙期間であれば、事務所に行ってみても良いと思います。大事な一票がかかっていますから。そこは大切な機会なので、使うということをお勧めします。

▼大嶋：ぜひコミュニケーションしてみたいと、今すごく思いました。

▼三浦：お2人からも、市民相談という言葉が出ていたように、市民の方からいろいろな相談を受けるわけですよね。それを自分なりにまとめ上げて、政策に反映させるということが政治家としての役割なので、どうですか、相談に来られたら困りますか。

▼末木：私もSNSをしていますので、メッセンジャーで相談が来たり、メールやFAXで来る場合もあります。最近では家庭内の相談をいただくことがあります。皆さん相談はさまざまです。相談をいただければ、ともに考えられますので、ぜひ来てください。

▼飯野：何かあったらぜひ相談に行きたいと思います。第1部でも話がありましたが、教育のあり方、先ほど三浦さんから主権者教育の話がありましたが、学校教育の場で、自分の人生をどう考えていくかというキャリア教育も十分されていない気がしますし、政治に関心を向けようということさえもほど遠く、諦めている人がすごくたくさんいる気がします。教育のあり方を含めて、投票権を得る前の段階から、自分のことは自分で考えるとか、自分が困っていることは自分で変えようと行動に移すと

か、そういうことを海外に比べるとやっていく必要があるのではないかと思いますが、三浦さん、海外の主権者教育と比べて、日本はどうなんでしょうか。

▼三浦：高校生くらいになれば、自分はこの政党を支持するとか、自分はこういう政治的意見を持っているということに自覚的になりますが、先進国ではそうでも、日本の場合には、大学生でも「無い」ことが普通だと思います。それは政治的な壁が高くて、教育現場で政治的中立にやろうとすると、踏み込んだことが言えません。ですので、主権者教育というと、模擬投票をやってみようになります。そんなことをやっても仕方がなくて、もっと意味のあることをやっていく。その中で、どのようにやっていくかというと、国政の大きなイデオロギー対立というところには、いきなり踏み込まず、地域の課題を政党対立とは切り離して考えることが考えられます。

SDGsの教育などは、皆さんのところでもかなり行われていると思います。将来的に世界をどうしていこうというのは、世界が一致している価値観なので、その中にジェンダー平等も入っていますが、SDGsに向けて、甲府市ではどんな課題が必要なのだろうかなど、それを実際の議員の方に出張授業で具体的に説明してもらうのも良いと思います。SDGsの枠の中で、甲府市に落とし込んで、甲府市の施策がどうなっているのかを、学生に説明しなければいけませんので、それは民主主義全体のレベルアップにもとても良いことだと思います。ぜひとも中立性という壁を破って、議員の方が実際に教育現場に行ってもらいたいと思います。

議会傍聴も良いと思います。学生が来たら、いい意味で緊張感が出て、議会のレベルアップにもつながるので、議会傍聴を主権者教育に組み込んでもらいたいと思います。

▼飯野：自治体によっては、地域の若者会議とか、子ども会議とかを実際に行って、若い人たちが市議会の中で発言をするとか、予算を割り当てられて政策を作っていくようなことを行っていますよね。小さい時にこのような経験があることは重要だと思っています。

▼三浦：若者会議とか女性模擬会議とか、ぜひやってほしいですね。そこに参加した女性たちが、実際に政治家になるケースも多いです。ぜひとも、山梨県甲府市で女性模擬会議を行ってもらいたいです。

▼飯野：私は3年間山梨に住んでいたことがありますが、閉鎖的で、男性優位社会みたいに感じるところもあったので、それが女性議員の数が少ないことにつながっているような気もします。ぜひ甲府市議会で女性模擬会議をやってください。もっと若い人たちが声を発して、地域を良くしていくことがすごく大事で、とりわけ山梨県の人口減少が進んでいるのは、若い人たちが東京圏に出て行ってしまうからですよね。なぜ出ていくかというと、この山梨では、自分が自分らしくできる仕事も無いし、閉鎖的で閉じ込められてしまうという声も聞きますので、若い人たちの声を聴いて変えていくというしくみをやってもらいたいと思います。

▼植田：そのとおりだと思います。甲府市は議会基本条例を、この7月に施行しました。1年間かけて作り上げた議会の条例です。この中から広聴広報活動ということで、外に出て、ヴァンフォーレ甲府の皆さんと11月に意見交換会など広聴活動をさせていただきます。これまでも甲府商業高校や甲府昭和高校、東海大甲府高校の学生さんと意見交換をさせていただきました。さらにこれからも、さまざまな若い方たちの声をいただこうと思っています。

▼末木：今は女性が起業できるように、さまざまなイベントを行っています。そのイベントをとおして起業した女性も多くなって参りました。女性たちがどのように起業したらいいのか、それには金銭的な問題もありますので丁寧に説明をしています。世の中も大きく変わってきたと感じます。私も市民とのトークをすごく楽しみにしております。

▼飯野：三浦さん、女性たちを対象に、政治のリーダーシップ・トレーニングを行っているということですが、取り組みを紹介していただけますか。

▼三浦：パリテ・アカデミーという一般社団法人を2018年に立ち上げ、若手女性の政治リーダー養成ということをやっています。40代前半くらいまでのイメージでやっていますが、高校生も来ています。来てくださっている人たちに聞くと、同世代の若い人たちと政治について話す場がなく、ここに来たら同世代の友達ができるのではないかという期待があって来ている高校生・大学生が多いということに気が付きました。どのような人が来ているかというと、女性としての生きづらさを何らかの形で抱えている人が多く、それは政治の問題だと思って来る人が多いです。10代の人たちにとって、痴漢というものが性暴力の問題として考えられていることを、来てくださる受講生を通じて感じています。痴漢の問題を親や先生に相談しても、短いスカートが悪いとか、あなたが車両をかえればいいとか、自分の問題にされてしまいます。それは社会の問題とか政治の問題ではないのかと疑問を持ち、仲間と一緒に確かめるという人が多いと思っています。

このことは多くの女性に共通していて、政治が変わることによって、それらが解消されることが分かると、あらゆる意味で政治に関心を持てるようになります。政治は一人でやるものではないので、コミュニティーを作って仲間を見つけていく。若いうちからネットワークがあると、今後、自分が人生の中で政治に出てみようという局面が訪れた時に、一歩を踏み出してくれた

らいいと思い行っています。

▼飯野：今日は、私らしく生きるためにということで議論していますが、若い人たちは不安があったと思います。この話を聞いて、自分で変えていこうと思いましたか。具体的にどんなことをやっていきたいと思いますか。

▼大嶋：とてもなりました。そして、大学生で女性若者会議ができるのではないかと思いました。ここで話し合ったことを一緒に提案書にして手交していくのも良いかなと思いました。

▼本田：政治家の方が私たちと同じSNSをやっていることを知って、ちょっと覗いてみようかと思いました。まずはそこから始めて、政治に参加していきたいと思います。

▼山内：私は今日、一票の大切さを教えていただいたので、主体的に選挙に参加したいと思います。

▼飯野：何かを変えてほしいと思うためには、自分には何が大切かを見つめ直して、それをやるためにはどうするかを考えるプロセスも大事だと思います。いろいろなことを提案して政治を動かしてください。

三浦さん、植田さん、末木さんから、若い方たちにメッセージやアドバイスをいただきたいと思います。

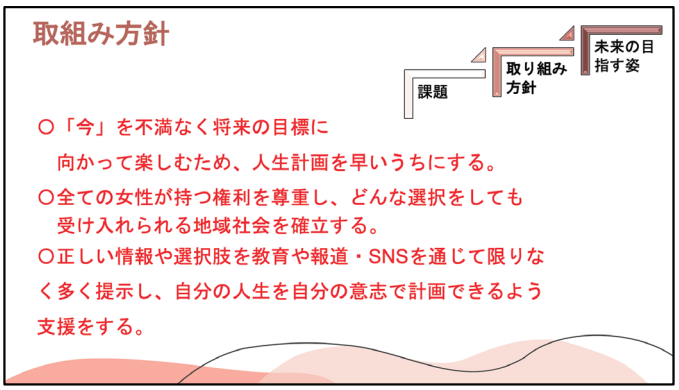
▼三浦：自分らしく生きていくためには、自分を好きになることが大切だと思います。自分が大切だと、困った時に「助けて」と言えると思います。先ほど日本には主権者教育は無いという話がありましたが、いろいろな人がSOSを発信しにくい社会になってしまっていると感じていますので、困った時に助けてと言えるような社会にしていく。そのために自分のことを好きになる。そのことは友人とか家族とか周りの人とかを、大切にすることにつながると思います。日本の社会は厳し過ぎて、中高年がだめ出ししがちなので、若い人が声を出しやすいようにする責任が大人にはあると考えています。お互い褒め合う社会をつくることで、政治でそれぞれ違う意見を皆で解決していく。お互いを尊重できるコミュニケーションを社会として成熟させていかないと政治は良くならないと思います。そのためには、周りのことに気遣える女性の特性を活かしながら、自分のこと、周りのことを好きになり、褒め合う新しい文化こそ、実は政治なんだと思ってもらえたら嬉しいです。

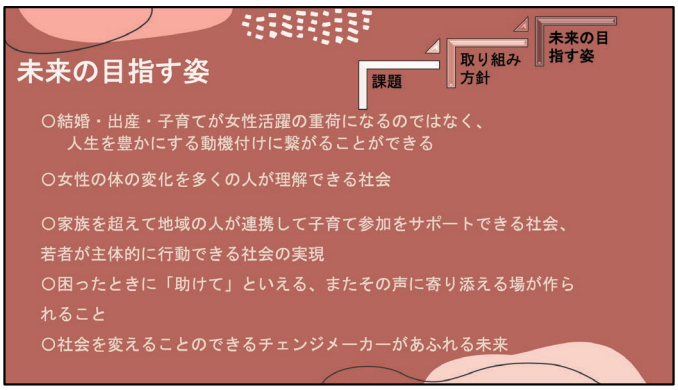
▼植田：毎日毎日、時間に追われて時が過ぎてしまう。追われていても、私が一人の女性として大事だと感じているのは、自分の心の大地に深く根っこを張って、人の目なんて気にすることないということです。人生の基準は自分自身。超楽観主義で、私の、あなたの、明るい笑顔と一言のあいさつが、周りの人を必ず幸せにしているという自信を持って、前に進んでいただきたいと思います。

▼末木：私は今、仏教に凝っております。お釈迦様は般若心経の中で「そわか」という言葉を教えてくださいました。「そ」は一番大切なことで掃除のことです。掃除をしっかりするとお金に不自由しない。「わ」は笑いのことで、健康がしっかりできる方はいつも笑っているということ。「か」は、人と人との付き合いをスムーズにする感謝です。この「そ」「わ」「か」をいつも心がけていれば、必ず大勢の方が周りにいてくれると思っています。

▼飯野：三浦さんが「政治は未来そのものなんだ」とおっしゃいました。若い人たちはいろんなことに不安を抱いていますが、ぜひ自分のことを見つめて、自分にとって大切なことは何かということを考えてほしい。自分が実現できると思うことを口に出して変えていこうとすることは、皆さんの次の世代のためにもなります。ぜひ遠慮せずにいろんなことに挑戦し、おかしいと思ったことには声を上げて、皆が良くなることが素敵なことだと思います。

まず、何ができるかというと、各政党が何をしているのか、候補者がどんな訴えをしているのか、本当にそれでいいのか、そんなことを考え、必要なら声を上げて良くなるための取り組みをしてほしいです。そして、まず、選挙に行ってください。女性は社会を変えるチェンジメーカーだと思います。まだまだ閉塞的な日本社会を変えていくパワーは、若い人たちの力であり、そして女性の力もすごく大きいと思います。今日の分科会が自分のことを考え、前へ進もうという一歩になっていただけたなら嬉しいです。皆さま、ありがとうございました。





甲府大会開催までのあゆみ

1　開催決定まで

・2018年 3 月　甲府市男女共同参画推進委員長が甲府市長に大会開催の要望書を提出
・2018年 6 月　2020年度開催地である刈谷市へ次期開催希望を申請
・2018年 9 月　2021年度開催地として甲府市が決定

2　実行委員会

・2019年 6 月　第1回実行委員会(全7回開催)
・2019年11月　第1回各部会
　・総務部会(全9回開催)
　・企画部会(全9回開催)
　・広報部会(全10回開催)
　・おもてなし部会(全7回開催)


実行委員会


部会


オンラインによる会議


シンボルマーク作者
神山さん

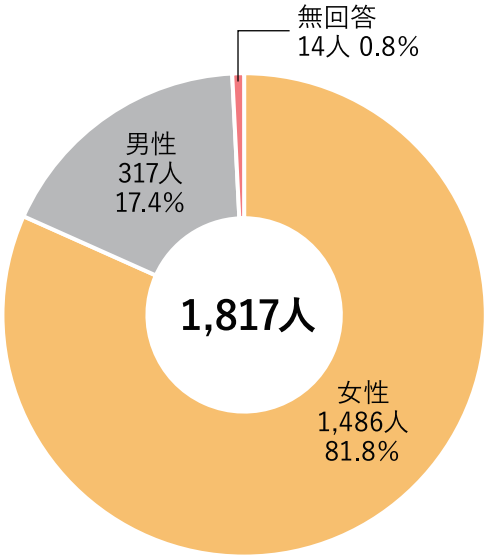
・2020年 1 月　大会テーマ決定、シンボルマーク公募
・2020年 3 月　シンボルマーク決定
・2020年10月　第1回分科会運営会議開催
・2020年11月　「日本女性会議2020あいち刈谷」大会に参加
・2020年12月　「日本女性会議2021 in甲府」プレ大会開催
　・オンライン講演会
　「ポストコロナにおける地域社会でのデジタル創造性への期待」
　　～ダイバーシティ社会に向けて～　講師　落合 陽一氏
　・市民・学生のオンライン意見交換会
　「10年後のまちを語ろう　暮らしやすさってなんだろう」
・2021年 7 月　大会参加者募集開始
　(大会パンフレット、ポスター発送)
・2021年 9 月　新型コロナウイルス感染症拡大により
　オンライン開催に変更
・2021年10月　「日本女性会議2021 in甲府」大会開催
・2021年11月　大会振り返り会実施
・2022年 3 月　実行委員会解散



プレ大会

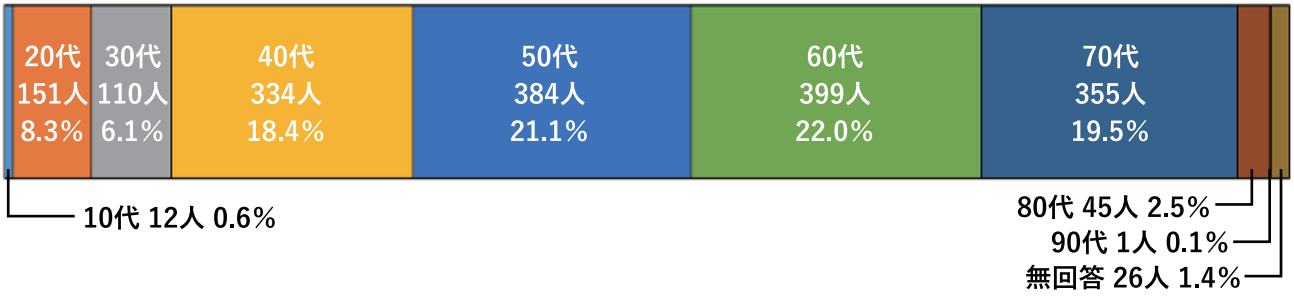
大会参加者集計

◆参加者比率



◆年代別比率

参加者総数　1,817人



1　大会参加者数一覧

【参加者数】

	参加者数	割合
一般枠	1,423	78.3%
甲府市民枠	28	1.5%
県内学生枠	87	4.8%
スタッフ等	279	15.4%
計	1,817	

【居住地別】

	参加者数	割合
県内	685	37.7%
（内甲府市）	503	27.7%
県外	1,132	62.3%
計	1,817	

【山梨県内市区町村別】

甲府市	503
富士吉田市	13
都留市	19
山梨市	7
大月市	3
韮崎市	5
南アルプス市	8
北杜市	6
甲斐市	35
笛吹市	21
上野原市	3
甲州市	12
中央市	6
市川三郷町	9
早川町	0
身延町	11
南部町	0
富士川町	4
昭和町	3
道志村	0
西桂町	0
忍野村	11
山中湖村	1
鳴沢村	0
富士河口湖町	5
小菅村	0
丹波山村	0
計	685

【性別・年代別】

年代	男性	女性	無回答	計	割合
10代	2	10	0	12	0.7%
20代	32	118	1	151	8.3%
30代	29	76	5	110	6.1%
40代	51	283	0	334	18.4%
50代	106	278	0	384	21.1%
60代	60	337	2	399	22.0%
70代	34	321	0	355	19.5%
80代	1	44	0	45	2.5%
90代	0	1	0	1	0.1%
無回答	2	18	6	26	1.4%
計	317	1,486	14	1,817	100.0%

【都道府県別】

都道府県	人数	都道府県	人数	都道府県	人数	都道府県	人数
北海道	21	東京都	55	滋賀県	30	香川県	18
青森県	8	神奈川県	1	京都府	33	愛媛県	18
岩手県	3	新潟県	13	大阪府	31	高知県	0
宮城県	5	富山県	0	兵庫県	23	福岡県	101
秋田県	5	石川県	14	奈良県	43	佐賀県	21
山形県	0	福井県	36	和歌山県	22	長崎県	0
福島県	0	山梨県	685	鳥取県	108	熊本県	22
茨城県	50	長野県	99	島根県	1	大分県	6
栃木県	75	岐阜県	2	岡山県	10	宮崎県	25
群馬県	0	静岡県	4	広島県	15	鹿児島県	5
埼玉県	39	愛知県	69	山口県	15	沖縄県	29
千葉県	4	三重県	28	徳島県	25	無回答	0
						計	1,817

2　プログラム別再生回数

	当日配信			アーカイブ配信			総数		
	第1部	第2部	計	第1部	第2部	計	第1部	第2部	計
全体会1日目			1,214			1,249			2,463
全体会2日目			958			417			1,375
第1分科会	87	56	143	811	351	1,162	898	407	1,305
第2分科会	108	93	201	342	234	576	450	327	777
第3分科会	58	35	93	255	157	412	313	192	505
第4分科会	44	41	85	303	225	528	347	266	613
第5分科会	10	17	27	227	113	340	237	130	367
第6分科会	53	46	99	272	112	384	325	158	483
第7分科会	37	47	84	118	71	189	155	118	273
第8分科会	32	29	61	114	68	182	146	97	243
第9分科会	34	40	74	414	172	586	448	212	660
第10分科会	19	49	68	418	457	875	437	506	943
計	482	453	3,107	3,274	1,960	6,900	3,756	2,413	10,007

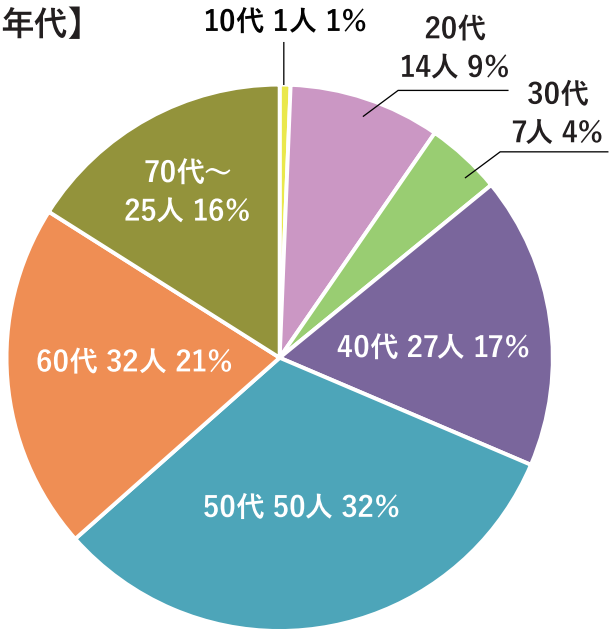
※当日配信の第3、5、6分科会は参加型分科会のため、ZOOMに参加した人数を集計
※大会２日目のアトラクション及び特別講演は当日配信のみ

参加者アンケート集計

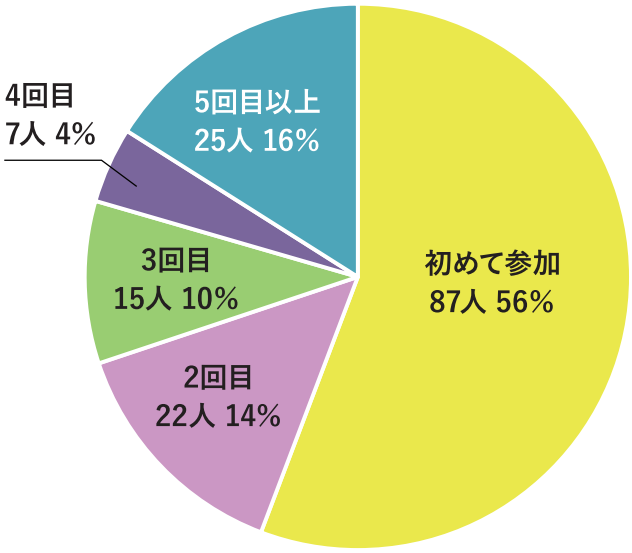
（シンポジウム・分科会など）【回答数：156件】

回答者属性

【年代】



【日本女性会議への参加回数】



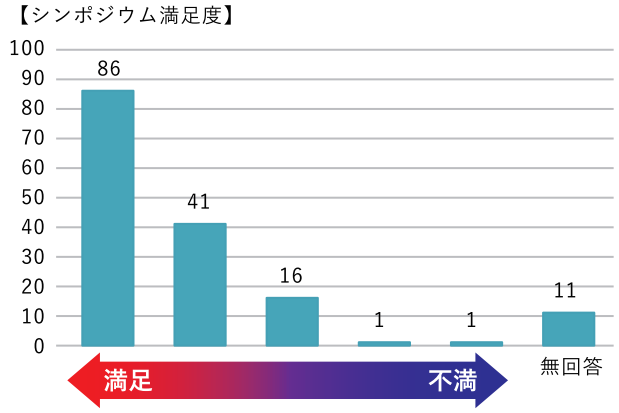
【お住まいの地域】

（人）

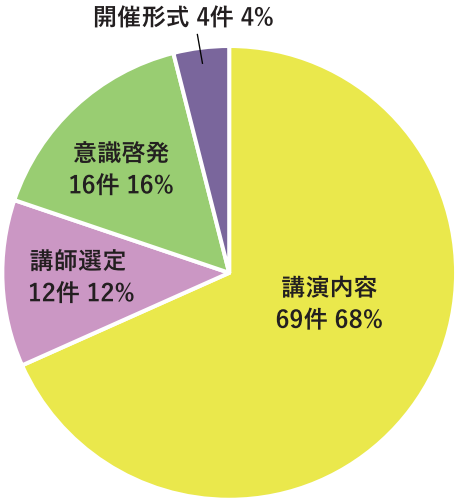
北海道	3	三重県	2
青森県	1	京都府	1
岩手県	2	大阪府	6
宮城県	1	奈良県	1
茨城県	3	鳥取県	2
栃木県	9	広島県	1
埼玉県	2	山口県	2
東京都	6	徳島県	3
神奈川県	1	香川県	3
福井県	1	愛媛県	1
山梨県	72	福岡県	9
長野県	2	佐賀県	1
岐阜県	2	鹿児島県	2
静岡県	1	沖縄県	2
愛知県	14	合計	156

シンポジウムについて

Q. 内容はいかがでしたか。



Q. ご意見・ご感想など（一部抜粋）



◆「講演内容」について

・女性会議を開催する、しないよりどんな形、内容で開催するかを検討していくことが大事。男女平等については若年層、特に教育の中に取り込むことが一番早い方法だと思う。
・今回の一番の収穫はこれまでの大会の資料や声を集積し、分析できたこと。世代間のギャップや継承の問題が地域、団体を問わず、大きな課題になっていることを改めて認識した。
・日本女性会議の歴史から紐解く、会議の意味についての解説が興味深かった。
・上野先生の「時代の流れをつかみつつ持続可能な手法の模索」というのは、男女共同参画センターをもつ団体であれば事務局とやってみようと感じさせたのではないか。
・パネリストが歴代の実行委員長ということで話の内容が濃かった。もう少し時間があるとよかった。
・女性会議の歴史を知り、これからを考えることができた。アンケートの実施、集計は女性会議の財産だと思う。
・これまでの女性会議の経歴を分析しつつ、現状や今後の展開について知る機会となり、若い世代への参画促進など課題も検討できた。
・過去から学び未来へ生かすため、過去の実行委員長を招いて、各地域の現状を踏まえた報告は大変貴重で示唆に富んでいた。
・若い世代とつなぐ課題は市民レベルの団体でも同じで、議論はされても、実際に来てもらうことは難しいので、具体的な実践例なども聞きたいと思った。
・若い世代に興味を持ってもらうことは課題。今までの女性会議は懇親旅行的なところもあり、高齢世代にとって、それも女性会議の一部だったのではと思う。
・上野先生はじめ皆さんのディスカッションをもう少し聞きたかった。
・シンポジウムを受け、男性の参加を増やすためには名称の変更が効果的だと感じた。男社会を変えていくためには男性の考え方の改革が必要であり、男性参加を増やす工夫に期待する。
・これまでの女性会議の取組みと歴史が分かり、初めての参加でもとてもよかった。
・皆さんの話を聞いて、歴史を感じたと同時に、過去の栄光で終わらせることなく、未来へ生かし、繋がるように世代、地域を越えて、より多くの方に参加してもらうことが大切だと思う。
・日本女性会議が38年続いていることの意味、またこれからの課題が明確になったと思う。
・パネリストが真摯に考えている姿が印象的だった。
・アンケート分析や上野さんの総括、これまでの実行委員長の声を聴き、連携、協働の必要を感じた。
・女性会議に初めて参加したが、今まで関わられた方々の熱い思いとこれからの課題など興味深く聞けた。この活動が今後も続くようにと思う。

◆「意識啓発」について

・男性で初めて参加した。改めて男女共同参画の認識を高めて女性とも接していかなければならない事を感じた。
・男女共同参画について自分なりの考えを持つことができ、有意義な時間だった。
・女性会議のアンケートで分析されたことは、参考になるとともに会議のあり方を考えるきっかけになった。
・過去の実行委員長より、女性会議の開催を機に、女性が感じている問題、人権問題の新たな認識が広まり、ネットワークの構築のきっかけとなったという話があり、今後、甲府市での連携もさらに進んでいくことに期待。
・これからも日本女性会議の継続に向けて、高齢化した

団体を、どう次に繋いでいくか、もう一度自分ができることから頑張ろうと思う。

◆「講師選定」について
・上野さんのお話はいつも興味深い。分かりやすくよかった。
・形に拘らない、地方からの発信に焦点を」という提言を得たことは素晴らしかった。歴代委員長の説得力あるコメント、上野さんがきちんと学者として関わり、女性会議ならではの場面があった。
・それぞれの立場での振り返りが本音であり個性的で興味深かった。上野さんはいつも歯切れがよく、今回も胸がスカッとした。
・歴代実行委員長を務められた方の話は重みがあり、特に苫小牧市の委員長の日本女性会議への熱い思いは素晴らしい。

◆「開催形式」について
・型にとらわれない開催形式で全国各地から繋がる可能性を感じた。大きなネットワークを形成できたらいいと思う。
・当日以外にアーカイブ配信で視聴できるのは、ありがたい。

分科会について

第1分科会 性の多様性

Q. ご意見・ご感想など（一部抜粋）

◆第1部
・「コウノドリ」32巻の完成に2年半を要したこと、同性カップルの出産についての話は興味深かった。パートナーシップは行政で条例策定を作るだけでなく、土台をきちんとしなくては意味がないというお話に同感。
・家族のあり方について、性別に関係なく堂々と家族として宣言できる社会になればいいと思った。
・結婚や妊娠をめぐる問題はまだまだ多いが、LGBT等の枠を超えた多様性あふれる社会が実現してほしいと思った。
・子どもたちにLGBTを伝える方法について、少しヒントを得られたと思う。
・鈴ノ木ユウ氏とコーディネーターのやり取りが丁寧で、性の多様性という今話題の内容だが、家庭内の役割分担から男女共同参画の考え方まで幅広くとらえていてよかった。
・温かく親しみやすい雰囲気で、性の多様性について身近に感じた。

◆第2部
・パートナーシップ制度の意義について色々な考え方を聞けた。制度を作って終わりではなく、住民の理解などの土台もしっかりしなければいけないと分かった。
・性の多様性や私たちが今後どんな社会を構築すべきか、気づきの多い分科会だった。登壇者の仲のよい雰囲気が伝わり、楽しい時間だった。いじめの影響から制度のあり方までに議論があり、性を通して生きづらさのない世界と人権の大切さを理解できた。
・多様な性と家族、パートナーシップに関して日本の教育はまだまだ遅れていると感じた。

第2分科会 ジェンダー・DV

Q. ご意見・ご感想など（一部抜粋）

◆第1部
・アンコンシャス・バイアスをはじめ、ジェンダー平等について理解が深まった。
・女性の活躍のために女性自身の努力、勉強が必要というだけでなく、男性においてもアンコンシャス・バイアスの解消などの努力や理解が必要ではないか。
・普段の社会の中で差別なのかやさしさなのかという問いかけの観点はよかった。
・暴力を生み出す構造だけでなく、社会背景やジェンダー平等がいかに関わっているかがよく分かった。今の日本はジェンダー平等の実現には、本当に時間がかかり、義務教育や生涯学習で継続的な啓発と学習を積み重ねることが大事だと思った。
・何が暴力かDVに繋がるかを認識できるような情報提供の機会が小学生のうちから必要だと感じた。

◆第2部
・日本は現在性教育が十分でないのが残念。DVの撤廃のためには幼いころから性について正しい知識を身につけることが重要で、ぜひこれからの子ども達は性教育を受けてほしいと思った。
・パネリストの半数くらい他県の方でもよかったと思う。県内外での情報交換や、具体的な取組み紹介などをもう少し聞きたかった。
・DV問題の深刻さに驚いた。性教育の必要性やアンコンシャス・バイアスの排除等課題だらけの日本の現状を知り、進展のためには女性議員の増加も望ましい。
・これが正解という問題ではないからこそ、さまざまな事例報告や各パネリストの話を聞くことで自分の身に引き寄せて考えることができた。
・DVに関する話は全ての山梨県内の高校生に聞いてもらい、自分を守るための知識の一つとしてほしいと強く願う。

第3分科会 子どもの教育・子どもの貧困

Q. ご意見・ご感想など（一部抜粋）

◆第1部

・子どもの人生の主人公は子ども自身であること、子どもに優しいまちは皆に優しいまち、との話から色々な気づきがあった。「頼り上手」と「頼られ上手」、困りごとを解決できる人を探していくことが大切と感じた。
・ペストフの三角形や萃点(すいてん)という言葉は耳慣れないが、子ども支援の為には今後も関わっていきたいと思った。
・子どもは1人の人間で、権利として「命の権利」と「成長、発達の権利」が守られなければならないという話はとても分かりやすかった。
・子どもの人生は自分のものという事に改めて気づき、地域皆で育てていくことが大事だと思った。
・子どもに関わる問題やネットワークづくりなど、興味深い内容だった。

◆第2部

・学生さん達の活動を始めた理由や意気込み、何を大切にしていて、何に困り、どんな不安があるのかを具体的に聞けたうえに、今後へ向けた課題と改善策なども聞くことができ、大変勉強になった。
・発表者との間で世代交代が図れ、その人のあり方そのものが深いところで繋がり合うのがよい。
・若い世代の方たちが社会問題をシンプルに考え、行動できているのに感動した。自分ごととして考え、行動することの難しさや、失敗を認められる清さに尊敬しかない。
・学生さん達が頑張っている様子が分かり、日本の未来も明るいと思った。
・子どものために活動するにあたり、上手くいかないときもあるが、周りとの協力とか意見交換が必要であると感じた。

第4分科会 ワークライフバランス

Q. ご意見・ご感想など（一部抜粋）

◆第1部

・伊藤先生の講演が面白かった。以前は、日本の女性の勤労率が高かったとのこと。障がい者も含めて、農家や自営をやっていたころは、みんなで支え合う必要があり、それぞれが役割を果たせたが、大企業型になると果たせる役割が限定され、孤立すると改めて思った。
・講演の中では親として上手くいった体験談だったが、上手くいけていない父親の苦悩を母として知りたかった。
・専業主婦（主夫）の問題、世界と日本との比較を知ることができ、大変勉強になった。男性からの視点でワークライフバランスについての講演があり、新たな視野が広がった。
・2講師の講義に加え、学生さん達の研究発表はなかなか聞き応えがあった。特に、地元山梨の状況を把握しようとする試み、またアニメ作品の分析等、等身大でジェンダー問題を捉えようとする姿勢に好感がもてた。学生さん達との対話を盛り込んだ設定も、世代を超えて社会を考え合う場面の創出に成功していたと思う。
・以前から聞きたかった伊藤さんの話が聞けてよかった。ワークライフバランスの歴史や問題点が俯瞰できた。「ケア力」についてはコロナ禍で特に気になっていることだったので、参考になった。

◆第2部

・分析と状況からも家庭生活における父親の役割が大きなものだと実感しているので、子育ては自己成長につながることをたくさんの方に実感してもらいたいと思った。
・私の所属では、「地域の若い父親たちは本当によくやっている」と評価している。帰宅ラッシュが夕方6時ころなのをみても、都会に比べると家庭時間が長いのが分かる。だからこそ、都会とは違った地域に合った現状と課題を掘り下げてほしいと思った。
・「イクメン」を特に意識しない社会が早く実現するよう願っている。
・データに基づいた話で説得力があった。男性の育児休暇取得を推進するには、経済的な裏付けがないと難しい。
・ワークライフバランスの重要性について学ぶことができた。固定観念にとらわれないで出来ることから始めたいと思う。

第5分科会 女性活躍

Q. ご意見・ご感想など（一部抜粋）

◆第1部

・実際にキャンパス卒業生へのインタビューがよかった。全体的に分かりやすく納得でき、グループワークも短時間ながら有意義だった。
・グループワークで話せたことがとてもよかった。
・参加型の分科会だったので、初めてのZOOMで楽しく参加できた。女性でもチャンスがある起業について、もう少し具体的な話も聞きたかった。小笠原さんのレゴを使った自己分析は興味深かった。
・短い時間だが実りの多い時間だった。

◆第2部
・起業はハードルが高いように感じていたが、まず自分を知ることから、やりたいこと、軸をしっかり持つこと、人と考え方が違っていいということを知った。レゴを使った取組みもあり、面白かった。
・少しの時間だったが、それぞれの考え方が聞けて刺激になった。
・深層心理について、レゴブロックを活用して感じるところが面白かった。
・レゴブロックを使用した新しい切り口で対話ができ、面白い体験ができた。
・やりたい活動があってもどう始めたらよいか分からない、いつ始めるか、お金はどうしたらいいか分からず、始める勇気がないまま時がたっていたが、今日参加して一歩前に進む勇気がでた。

第6分科会 女性活躍

Q. ご意見・ご感想など（一部抜粋）

◆第1部
・ワールドカフェ形式の対話で様々な意見がでてよかった、WEB付箋というアイデアもよかった。木下さんの話とパワポがとても充実していた。
・その場で出会った一期一会の方とのセッションがとても新鮮で、良い刺激になった。
・紫乃ママの話がウィットに富んでいて楽しかった。
・色々な年代の方のお話や違った価値観に触れることができてよかった。
・内容としては、想定内のことが多かったので普通としたが、事前のFacebookへの投稿など開催準備に尽力されていたのがよく伝わった。
・運営スタッフとして参加した。様々なことを学び、多くの仲間たちのチャレンジ精神や向上心にたくさん触発された。

◆第2部
・学生の方たちも頑張っていた。
・若い方がいきいきとテキパキ会をまわしている姿が印象的だった。また、初対面の方とグループで話す機会があり、改めて色々考える良い時間だった。
・これからのキャリアについて考えを広めることができた。
・これこそ対面での参加だったら…と思った。いきなりワールドカフェへの参加は経験者でないと参加しにくいように思う。
・分科会内容はとてもよかったが、リモートで参加者の顔が見渡せない環境の中だったので、手探り状態でやりにくかった。実際に対面でグループワークができればよかった。
・私の中で、これでいいのだ！は、エールとしてたくさんの方に発信したい愉快なことばになった。
・色々な方々とコミュニケーションがとれてよかった。
・第1部を踏まえてさらに踏み込んだ話ができてよかった。
・人が変わるきっかけを直に聞くことができた。

第7分科会 食育・農業

Q. ご意見・ご感想など（一部抜粋）

◆第1部
・山梨の農業の今後、食や地域の魅力について、改めて考える機会になった。
・新しい農業の取組みや、はね出しからフードロスへの転換など勉強になった。
・とても興味深い講演だった。農業は本来、国全体で取り組むべきものだと思う。講演にあったように、日本は「食の価値が低い」と思うが、遺伝子組み換えやゲノム編集食品の対応からみても、そうした国の現状に危機感を感じている。講師の話で元気がでた。自分にできることを考えていきたいと思う。
・山梨県で活躍している農業者や農水産物を加工する人、販売する人などの活動と思いを知ることができ、有意義だった。
・一番聞きやすかった。ぜひ山梨の農業が盛り上がっていってくれればと願う。

◆第2部
・食育について様々なアプローチの仕方があることが分かり、参考にしようと思った。
・実家がぶどう農家なので興味があり視聴した。パネリストの取組みが農家からは思いつかない発想だった。
・農業といっても野菜や穀物を作る農家だけでなく、果樹苗や花卉園芸も農業に含まれる。食育が農業のイメージを変えるという発想がなかったので、勉強になった。
・子どもが小さい時から食べ物に関してはそれなりに伝えてきたつもりだったが、もっと何かできたのではと考えながら話を聞いていた。今からでも遅くないこと、周りに対しても自分ができること、地域にできることを考えていきたい。

第8分科会 環境

Q. ご意見・ご感想など（一部抜粋）

第1部

・孫世代も今のような住みよい街であり続けてほしいと思った。
・それぞれのゲストスピーカーが英語や日本語を交えてリアルに語り、とても参考になった。地元から発信という気持ちが伝わった。

◆第2部

・学生さん達がよく頑張っていた。
・環境に対し、様々な視点から掘り下げられていた。今回で終わらせず続けて欲しい題材だと思う。
・第1部は英語を思い出しながら聞き、第2部はゼミの一員になった感覚で懐かしい思いと共に、発表者自身が日本の未来にとって大きな財産で、更に輝いてほしいと思った。

第9分科会 生涯活躍・健康

Q. ご意見・ご感想など（一部抜粋）

◆第1部

・医療、福祉、介護などで活動する女性の皆さんの現場の声を聴くことができた。共通の課題も見受けられたので、連携、協働を検討していくきっかけになったと思う。
・それぞれの活動が魅力的だった。自分も何らかの形で関わりたいと思った。
・活動分野が異なる方々が今後連携を図り、地域を暮らしやすくしていくことに期待。
・それぞれの方がそれぞれの道で自分を生き、人を活かして活動されている姿に感動した。この分科会を機に、横のつながりができそうで、ますます甲府市が活気づくことと思う。
・県立大の先生や介護の現場の専門職の方々の発表も素晴らしかった。いきいきサロン事例や大学と地域の連携、古民家利用事例、高齢者が安心して自分の家だと思えるような場所で暮らし続けられるような看護介護の専門職からの支援など、地域創生のモデルとなる活動がたくさんあると思う。せっかく今回まとまったこの事業例発表をより多くの人が知ることができるよう、もっと様々な場で今回の内容の発表が増えることを願う。

◆第2部

・露木さんの「晴ればれ」の勉強会、ボランティアに参加してみたいと思った。
・第1部での報告を基により詳しい解説や分析を理解できた。次回以降も、この分野の現状を取り上げてほしい。
・連携の必要性が分かり、今後の活動に繋がっていくと思われるので、今後が楽しみ。学生さんも得るものがあったと思う。
・産学官の連携を推進し、地域活動が展開できる可能性を示唆できた。ゴールを見出すことができたと思う。
・学生さんたちが参加したことでよい経験ができてよかったと思う。

第10分科会 生涯活躍・健康

Q. ご意見・ご感想など（一部抜粋）

◆第1部

・多くの分野の専門家から女性の生き方について学ぶことができ、自身の将来設計についてアドバイスをもらえた気持ちになった。今回をきっかけに、私自身の生き方について、より良い生き方を選択するため、情報収集を始めようと決意した。
・女性の生き方の奥深さを聞けてよかった。
・学生さん達の調査を起点に、深めていくという流れはよかった。人生100年といわれる中でキャリア形成、ライフプランづくりを学ぶ機会の重要性を感じた。また、多世代で語ることによるメリットも私自身感じ、次世代のためにもその人らしく生きているための環境づくりをそれぞれの立場でしっかりしていかなければならないと感じた。
・学生さんが事前にアンケートを取り、当日も分科会に参加されたことがとてもよかったと思う。また、講演を聞き、子育ての経験など若い方に伝えることは大切だと思った。
・若い人たちへのメッセージは伝えられたのではないか。

◆第2部

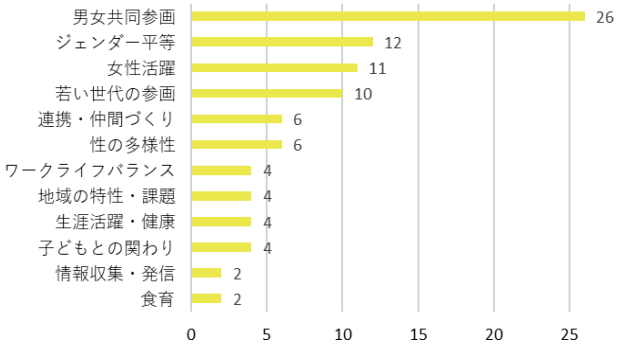
・社会を変えるためには行動すること、皆で支え合うことが大事だと思った。
・若い世代が積極的に政治について学ぶ姿勢が頼もしかった。三浦さんの講義内容はわかりやすかった。
・三浦先生の前向きで愛情のある言葉は、未来を政治で創っていこうという気になれた。主権者教育と言いつつ学問の中立性の問題から一歩進めない現状なので、ぜひ若い世代（社会に出るか出ないかぐらいの層）へ今回の講座を聞いてほしい。
・政治を身近に感じられる良い機会になったのではないかと思う。
・議員さんのお話も、上智大の先生のお話もとても興味

深く聞かせていただいた。私も何かしなくてはと思った。
・多くの人に女性の政治参加の重要性を理解してもらえたのではないか。

本大会で得られた学びや成果について

Q.本大会で得た学びや成果について、今後ご自身の活動で活かせることはございますか？

◆本大会で得られた学びや成果(分野別)



◆自由記載(一部抜粋)

・現在大学生であるが、今後社会に出ていくうえで、女性の一人として男女共同な社会の実現に向けて活躍できればと思う。
・考えを伝えることの大切さ、それ以上に行動することの重要性に気づかされた。
・ガールスカウト連盟の女子高校生へのアンケートは興味深かった。若い世代の方々にとってもまだまだおかしい、嫌だと感じることがたくさんあるのだと思った。世代は違っても根っこは同じだと思うので、何とか繋がっていけるような仕掛けづくりをしたい。
・女性だから男性だから、自分の中のアンコンシャス・バイアスなど。まずは、気づくことから初め、気づいた自分を認めてあげたいと思った。
・これだけ同じ悩みや課題を共有できる仲間がいると思うと心強い。まずは行動してみようと思った。
・地方の現状についての情報をたくさん得ることができた。担当している研修企画の業務に生かしていきたい。
・ともに活動している仲間がどんな考えや思いを持っているのかを今一度、聞いてみようと思った。さらに学びを深めたい。
・「就業と子育て」に関して、特に育児休業に焦点を当て研究しているが、男性の育児参加は女性労働の問題の一助となりうる部分もある。その点で、父親の状況を整理分析することはとても意味があり、今度の研究に生かしていきたいと思った。
・自分の生き方や、食育、人権の問題等、終わりという概念はなく、これからも自身が健康で社会との関わりを持ち続けていきたいと思う。
・自分が関わっている団体も高齢化で悩んでいたが、若者の参加も増えてきているので、当事者の課題に向き合い続けて、多世代、多文化のネットワークでジェンダー平等に向けて頑張っていこうと改めて思った。
・生協活動をしているが、産直について学びを深めること、地元の現状をより知ることなど考えていきたい。
・多様性が普通な社会、地域になるように、日常的にアンコンシャス・バイアスになっていることに気づくなど、意識改革の活動を続けていきたい。
・性別のことで生活に不自由を感じている方々、そこから発展してもっと自由に生活していきたい方々の意見をたくさん聞けたので、今までよりも寄り添える思いが持てるようになったと思う。
・これからの男女共同参画推進活動には、男性の声が必要だと感じたため、男性の推進委員にも名もなき家事・育児などを経験いただき、男性から男性へ発信してもらおうと思った。
・ダイバーシティ、SDGsなど様々な考え方が生まれており、これからの事業活動や生き方を考えるうえで重視すべきであることが理解できた。
・既に市内にファミリーサポート制度があるが、更に必要な方向からのサポートへと提案していきたい。
・技術の変化に伴って、今だからできる方法や活用できるルールはどんどん増えているので、日本女性会議のあり方も、時代に合わせて進化していかなければと感じた。
・男女共同参画では、おかれた立場でしっかり自分の意見が言える自分になること、LGBTQでは、「みんな違ってみんないい」の実践と理解をしていくこと、SDGsでは、ゴミの削減や車に乗らず近場は自転車で行く、太陽光発電を上手く利用するなど取り組んでいきたい。
・現在は仕事と子どものことでいっぱいだが、何か社会に役立つことがしたいと思った。そのために、仲間とゆるやかに繋がっていこう、色々なことを勉強と思い続けていこうと思った。
・パネリストとして参加した。今回の繋がりを大切にし、この会議をきっかけに動き出せるよう、今後に繋げていきたい。

その他ご意見

◆自由記載(一部抜粋)

・やはり現地に行って大会関係者の熱意を感じ、全国の方と出会えるチャンスがなかったのは残念。

・工夫を凝らして開催されている様子が伺えた。オンラインで気軽に開催できるメリットも大いにあったと思う。
・家庭があるので外泊は難しく、オンラインで助かった。
・若い方、大学生やアトラクションに参加された小学生、中学生、高校生の皆さん、お疲れ様でした。
・若い方の参加率を上げるためにも開催日を土日で検討されても良いかと思った。また、実際に開催地を訪れるのも良いが、費用の問題もあるので、オンラインも併用できる参加も今度検討いただきたい。
・今年は山梨なら遠くないから参加できるし、旅行もかねて行こうと思っていただけに、当初オンラインのみとなり、残念に思った。しかし、アーカイブで他の分科会の様子も見られ、これもありだと思った。今までは参加できるものが限られていたので、各分科会の報告は一部だけで面白くなかった。アーカイブで全部みられるのはいい。
・オンライン配信はとても助かる。これまで参加したくても、仕事や諸活動の関係で諦めていた。ライブ後にさらにアーカイブ配信があると、都合に合わせて視聴できると同時にじっくり学ぶことができた。
・山梨県民なので、やはりウェブではなく会場で参加したかったし、県外からのお客様にも来てほしかった。
・配布資料が大変多く紙がもったいないため、何か方法を考えた方がいいのかなと思った。
・シンポジウムで、オンライン開催は小さな自治体にも大会開催の可能性を持たせたという話があったが、大会開催の意義は趣旨の理解や共有だけでなく、その地域の良さを認識してもらうことも非常に重要と考えるので、やはり現地での対面開催を支持する。小さな自治体は複数自治体での開催でもよいと思う。
・日本女性会議を知っている人が少ないのではないかと思う。もっと広く広報していくことが必要。
・分科会のZOOM参加は楽しかった。初対面の方とも気兼ねなく話ができ、いい経験だった。女性会議の総括と未来は意義ある企画だったと感じた。実際に開催した、やむなく中止した、初めてオンラインで開催したなどそれぞれの立場での貴重な意見が聞けた。
・各都市で行う日本女性会議は普段、男女共同参画に触れていない人に知ってもらう機会という意味では、意義があると思った。しかし、普段から男女共同参画について活動している人にとっては物足りないものではないかと感じた。
・男性の参加が増えるといい。名称がソフトになるといいかもしれない。
・２年続けてのオンライン参加だった。良い面もあるが、やはり開催地へ行って臨場感を味わいたいかな！
・平日は仕事をしているため、アーカイブもなかなか視聴できず、残念。アーカイブの時間をもっと欲しかった。
・オンライン開催は気軽に参加しやすく、日中仕事をしている人でもアーカイブが視聴できてよかった。オンラインでは熱量が伝わりにくく、寂しい感覚もあるが、大会参加のハードルを下げるきっかけになると思う。
・全国から参加者の皆さんに山梨県を訪れてもらうことが叶わなかったのは残念だが、内容は非常に意義の大きいものになったと思う。

後援・実行委員会等

（順不同・敬称略）

【後　援】

内閣府 ／ 文部科学省 ／ 厚生労働省 ／ 山梨県 ／ 山梨県教育委員会 ／ 甲府市教育委員会
山梨県市長会 ／ 山梨県町村会 ／ 国立大学法人 山梨大学 ／ 公立大学法人 山梨県立大学
山梨学院大学 ／ 山梨英和大学 ／ 朝日新聞甲府総局 ／ 毎日新聞甲府支局 ／ 読売新聞甲府支局
産経新聞甲府支局 ／ 山梨日日新聞社 ／ 時事通信社甲府支局 ／ 共同通信社甲府支局
ＮＨＫ甲府放送局 ／ 山梨放送 ／ テレビ山梨 ／ テレビ朝日甲府支局

【実行委員会等】

◆相談役	山梨県知事	長崎幸太郎
	甲府市議会議長	廣瀬　集一
◆大会長	甲府市長	樋口　雄一
◆副大会長	甲府商工会議所会頭	進藤　　中
	甲府市女性団体連絡協議会会長	牛奥　久代

◆実行委員会

・委員長	風間ふたば			
・副委員長	天野　光江	小林　　明		
・監事	前嶋　健佐	横山みどり		
・委員	雨宮　正英	荒牧　重人	大塚ゆかり	小澤　房子
	小田切晴美	數野　保秋	黒田　浩司	佐藤　一男
	成瀬　善康	萩原　爲仁	深澤由美子	豊前　貴子
	山田　文夫	山本　丹一	山本　千春	越石　　寛
	加藤　　香	山本亜希子	早川亜希子	矢﨑真由美

◆部会　（◎は部会長、○は副部会長）

・総務部会	◎越石　　寛	雨宮登美子	飯島　朱美	井上　泰子
	○小澤　房子	小田切　進	剣持　孝弘	田中　　亮
・企画部会	◎天野　光江	荒牧　重人	大塚ゆかり	風間ふたば
	○加藤　　香	黒田　浩司	露木　里恵	渡辺　　努
・広報部会	◎豊前　貴子	上小澤　始	野口　雅美	藤澤　恵子
	○山本亜希子	古屋　浩昭	山本　千春	金子　武仁
・おもてなし部会	◎早川亜希子	伊藤　洽子	中澤　義明	七澤　福富
	○矢﨑真由美	萩原　爲仁	渡井　賢一	依田　幸二

◆分科会運営メンバー　（◎はリーダー、○は副リーダー）

・第１分科会	◎飛嶋　一歩	野々宮悠生	樋口　由美	宮川　安美
	○河野　朱李	小林　麻衣		
・第２分科会	◎井尻真理子	小林　清巳	五味　明美	清水　　正
	○酒井　大介	関　　和美	山田千恵美	
・第３分科会	◎内藤　香織	芦澤　郁哉	加藤　魁人	田中ともか
	○福田奈里子	渡邉　里香		
・第４分科会	◎黒田　浩司	山梨英和大学学生		
	○劉　　楠	青柳　昌志		
・第５分科会	◎植杉　真理	網倉　明美	後藤由里子	田中　涼子
	○鮫島美智子	中村　京子		
・第６分科会	◎前田　晋吾	ジェ・シャンシン	高崎　真理	堀松　夕夏
	○野田みゆき	宮井　健男	村上沙恵子	村松　美希
	渡辺　亜紀			
・第７分科会	◎佐野いずみ	安藤　雅章	落合　洋子	内藤　裕子
	○志田　昌子	米山夫佐子	関野　旺彦	
・第８分科会	◎田邉　晴香	安藤　勝洋	加賀美里奈	風間　千弘
	○戸谷　梨乃	中野　佐耶	西川　文野	
・第９分科会	◎深沢　公子	居也　未来	栗田　涼子	小林奈々絵
	○吉崎　　葵	榊　　遥奈	鈴木　花奈	中川百合子
	有泉　真里			
・第10分科会	◎大嶋香菜子	本田　　灯	山内さくら	山本　直子
	○渡辺たま緒			

協賛・寄付

【協　賛】

株式会社 山梨中央銀行
株式会社 オギノ
山日YBSグループ
ジット株式会社
株式会社 いちやまマート
株式会社 電算山梨支社
アクサ生命保険株式会社
アルプス事務機有限会社
株式会社 かんぽ生命保険甲府支店
甲府市女性団体連絡協議会
協同組合 甲府市造園協会
甲府市電設協力会
甲府信用金庫
株式会社 三機堂
株式会社 正直堂
株式会社 テレビ山梨
東京ガス山梨株式会社
株式会社 日医工山梨
ネッツトヨタ甲斐株式会社
株式会社 はくばく
株式会社 早野組
東日本電信電話株式会社 山梨支店
株式会社 フォネット
株式会社 フジコー
豊前医化株式会社
株式会社 マルモ
株式会社 やさしい手甲府
一般社団法人 山梨県建設業協会
山梨県商工会連合会
山梨県遊技業協同組合
山梨交通株式会社
株式会社 ワイ・シー・シー
株式会社 カジハラ
吉字屋グループ
甲府ビルサービス株式会社
公益社団法人 甲府法人会女性部会
国際ソロプチミスト甲府
株式会社 近藤宝飾
医療法人 笹本会
武田グループ株式会社
原整形外科医院
山梨県建設業協同組合
公益財団法人 やまなし文化学習協会
朝日生命保険相互会社 甲府支社
医療法人立史会 今井整形外科医院
ヴェオリア・西原共同企業体
株式会社 光・彩
宏和建設株式会社
国際建設株式会社
株式会社 センティス21
メタウォーター株式会社
山梨グローブシップ株式会社
山梨県中小企業団体中央会
株式会社 山梨興農
太田工業株式会社
株式会社 五幸商会
五光電工株式会社
NPO法人 子育て支援センターちびっこはうす
サントリー酒類株式会社 山梨支店
有限会社 清水ステンレス
株式会社 ジュエリーイイヌマ
中央労働金庫 山梨県本部
株式会社 ツルタ機械製作所
介護老人福祉施設 トリアス
株式会社 ハウス・ネット
富国生命保険相互会社 甲府支社
富士山税理士法人
株式会社 ブルーアースジャパン
hair shop CLAIRE
MAs zumba
医療法人 薬袋内科循環器科医院
医療法人康友会 矢﨑耳鼻咽喉科医院
一般財団法人 山梨県地場産業センター
山梨県民信用組合
山梨みらい農業協同組合
ラウンジシルク

甲府市自治会連合会
琢美地区自治会連合会
東地区自治会連合会
里垣地区自治会連合会
玉諸地区自治会連合会
甲運地区自治会連合会
穴切地区自治会連合会
貢川地区自治会連合会
石田地区自治会連合会
池田地区自治会連合会
新田地区自治会連合会
湯田地区自治会連合会
伊勢地区自治会連合会
国母地区自治会連合会
山城地区自治会連合会
大里地区自治会連合会
大国地区自治会連合会
住吉地区自治会連合会
中道地区自治会連合会
上九一色地区自治会連合会
北新地区自治会連合会
相川地区自治会連合会
千塚地区自治会連合会
羽黒地区自治会連合会
千代田地区自治会連合会
能泉地区自治会連合会
宮本地区自治会連合会
富士川地区自治会連合会
相生地区自治会連合会
春日地区自治会連合会
新紺屋地区自治会連合会
朝日地区自治会連合会　（敬称略）

【寄　付】

相澤　澄江	小澤　房子	白沢　一男	樋川　俊夫	峰岸　一郎
饗場　奈美	小澤　　誠	白須　宗子	廣野　映子	向山　文人
芦沢　武子	小田切　進	杉山　俊幸	深澤　富雄	村松　俊夫
天野　光江	小野亜希子	高柳けさよ	福田　勝子	望月　敏子
雨宮登美子	笠井　誠子	竹内　才乃	古屋　敏子	山縣　伸由
石川　裕子	風間ふたば	内藤　宥一	保坂とき江	山田　　修
伊藤　洽子	勝村ケサエ	中澤　義明	堀江　清敬	山田　文夫
今井　　進	久保寺孝男	西海　信介	丸山　芳江	横山みどり
牛奥　久代	坂本　勝彦	萩原　爲仁	三科恵美子	渡辺　　勝
江口　嘉郎	桜井　正富	早川　正幸	水上　好子	
遠藤　栄子	佐藤　一男	原　かず江	甲府市社会福祉協議会管理職・課長補佐一同	
荻野シゲ子	島田　眞路	原野　五郎	日本女性会議2021 in甲府実行委員会事務局一同	

（敬称略）

※ご本人の希望により氏名を掲載していない方もいらっしゃいます。

大会の趣旨にご賛同いただき、たくさんのご協賛・ご寄付をいただきましたことに
心より感謝申し上げます。

日本女性会議
2021 in 甲府







日本女性会議 2021in 甲府　実行委員会

【事務局】山梨県甲府市役所 市民部 人権男女参画課内　〒400-8585 甲府市丸の内一丁目18番1号

電話番号：055-225-3940　E-mail：danjyoks@city.kofu.lg.jp　https://www.city.kofu.yamanashi.jp/nadeshiko-plus/jyoseikaigi/index.html